芭蕉発句全講

III

阿部正美著

明治書院

目次

凡　例

一、句の排列は成立年代順とし、年代の明らかでないものは、推定時期の下限を以て排列の基準とした。概ね拙著『芭蕉伝記考説』作品篇の年代考定に準拠したが、その後の私見によって修正したものもある。

一、注釈は最初に発句の本文を掲げ、以下、季語、語釈、大意、考の各項にわたって細説する。句形は諸種あるうち、最初に掲げるものを本位句とし、年代の古い最も信頼し得る俳書或いは資料の本文を掲出して、他の同句形のものは書名・資料名を挙げるにとどめた。本文の下の括弧内が本文の拠った書名・資料名である。本位句には句頭に番号を付した。

一、本位句の次に、順次異形を挙げた。掲出の要領は本位句と同じである。これら凡て濁点を加え、底本にある濁点は右傍に（ママ）と注記した。脱字は［　］に入れて補った。

一、異形のうち、年代の降る書に見える小異などは、本文として掲げなかったものもある。

一、句の前書に関する語釈は、本位句の前書についてのみ記し、他は省略した。異形句の前書も含め、本文として挙げなかったものは、「考」の条の初めにまとめて掲げた。

一、「考」の条では、成立年代、推敲過程、解釈鑑賞上の要点等、多岐にわたる問題を扱った。

元禄二年

448　元日は田毎の日こそ戀しけれ　（真蹟懐紙）

　　元日に田毎の日こそひしけれ　（泊船集）

　　元日も田毎の日こそ戀しけれ　（蕉翁句集）

橋守・蕉翁句集草稿・木曾の谿・寛政板更科紀行

さかて猿

春季（元日）。

語釈　**○元日**　一年の元の日。既出（Ⅰ175）。**○田毎の日**　「田毎の日」。信州更科の名所で眺められる「田毎の月」を踏まえた表現。姨捨山の斜面に作られた田毎に映る月を賞した語であるが、ここでは歳旦の句としてこれを初日に転じて俳諧にしたのである。（Ⅱ397）参照。**○恋しけれ**　「恋しけれ」。月の名所の新年の景にあこがれる気持をあらわす。既出（Ⅱ373）。

大意　年の始めの日には、先頃行った更科の地の田毎に映る初日の景色こそが思われる。また行って見たい。

考　この句は芭蕉生前の集には見えないが、伊賀上野の俳友猿雖宛と推定される元禄二年春の書簡に、

　去秋は越人といふしれもの木曾路を伴ひ、桟のあやうきいのち、姨捨のなぐさみがたき折、きぬた・引板の音、しゝを追すたか（ママ）、あはれも見つくして、御事のみ心におもひ出候。とし明ても猶旅の心ちやまず、

として「元日は」の句を披露してあるのによって、元禄二年の歳旦吟と推定される。『木曾の谿』や寛政板『更科紀

記』にも「其年越し歳旦」として出しており、「其年」が更科の旅から江戸に帰った元禄元年を指すことは明らかだから、これまた右の推定を裏付けるものである。真蹟懐紙は、この句を筆頭に杉風・嵐蘭・曾良・路通ら当時身辺にあった人々の歳旦吟を録し、最後に「是等は板木に不入分にて候」とある。

上方から木曽路への長い旅を終えて、江戸の草庵に帰って来た芭蕉は、なお旅の気分の中に正月を迎えた。もうこの頃奥羽への旅の計画は出来ていて、北へと又しきりに遊意動く頃であって、前掲の手紙に「とし明ても猶旅の心ちやまず」とある背景には、そうした事も考えなければならないが、当面の句では更科の月の思い出が主たる動機になっている。初日の出を拝む元日の習いに事寄せて、「田毎の月」を「田毎の日」に転じたのがこの句の俳諧の眼目で、さればこそ初五も「元日は」と特に限った言い方になるのである。全体の調子は寧ろ和歌風で、それが「田毎の日」の茶目っ気を穏やかに包んでいるようだ。「元日に」「元日も」等の異形は、前者は余りに平板、後者は句意の上から妥当な措辞とは思えない。

元禄二仲春嗒山旅店にて

119 かげろふの我肩にたつかみこかな

（門脇氏蔵真蹟歌仙巻）

三康図書館蔵真蹟歌仙巻・真蹟句切・真蹟色紙、二月十五日付桐葉宛書簡、伊達衣・其木枯・雪まるげ・桃の鳥、しのぶずり・乞食嚢、果報冠者・雪の薄・花膾

春季（かげろふ）。

語釈 ○**仲春** 「チユウシユン」。三春のうちの中の月で、陰暦二月をいう。「正慶二年仲春二日、父ガ死骸ヲ枕ニシテ同戦場ニ命ヲ止メ畢ヌ」（『太平記』巻六）「Chùxun. I, Chùjun. Niguatno tçuqino coto.」（『日葡辞書』）。○**嗒山** 「タフザン」。美濃大垣の蕉門俳人。出自姓名生歿年等未詳であるが、天和期からの古参である。杏廬の撰した『続寒菊』（安永九年刊）に載る芭蕉の文に「塔山（ママ）産業の為に江府に居る事三月」とあり、商用で江戸に出て来ることがあったようである。○**旅店** 「リヨテン」。旅の宿。江戸で嗒山

の辺留していた宿をいう。「南都旅店」（『猿蓑』巻二、千那発句「誰のぞく」前書）。○**かげろふ**　陽炎。春の陽光が暖気によって屈折揺曳する自然現象。既出（Ⅱ341等）。○**我肩にたつ**　「我が肩に立つ」。「宿老の紙子の肩や朱陳村」（『蕪村遺稿』）「Cata.」（『日葡辞書』）。○**かみこ**　「紙衣」。渋紙で作る防寒衣。既出（Ⅰ215）。

大意　まだ冬のままの紙子を着た我が肩に、陽炎がゆらゆらと立っている。ようやく春の気配も濃い。

考　「冬の紙子いまだ着かへず」（真蹟句切）「元禄二仲春嗒山旅店にて」（『雪まるげ』）「元禄二仲春」（『雪の薄』）等の前書がある。三康図書館蔵真蹟歌仙巻の奥書には「於嗒山旅店興行／元禄二年／仲春七日」とあり、この日会した連衆は、芭蕉・曾良・嗒山・此筋・嵐蘭・北鯤・嵐竹らであった。この年閏正月廿六日付の嵐蘭宛芭蕉書簡では会の日にちの打合わせをしており、その結果二月七日の会が決ったことが分る。なお門脇氏蔵真蹟歌仙巻は鳳朗の別紙奥書によれば曾良に与えられたもので、幕末期の出雲母里藩主松平志摩守真興の所蔵に帰したのであった。それに先立ってこれを入手した信州諏訪藩士久保島若人は、その記念集『花膾』（天保五年刊）に真蹟を摸刻している。
　真蹟句切の前書にあるように、芭蕉は冬の間着ていた紙子をそのままで嗒山の旅宿に出掛けて行ったらしい。如何にも隠者に相応しい侘びた姿であるが、もう二月とあって四辺には陽春の気配が漂い、ふと気づくと自分の古紙子の肩にまで陽炎がゆらめいていた。ささやかな驚きと深まり行く春の悦びが、穏やかな調子の中に生かされた佳句である。『芭蕉句選』の「我肩に有」という異形は杜撰であろう。

450　紅梅や見ぬ戀作る玉すだれ　（二月十五日付桐葉宛書簡）

其木枯・賦物或問・蟋蟀の巻

春季（紅梅）。

語釈　○**紅梅**　「コウバイ」。紅い花をつけた梅の樹。「和に有者、種類多し。尋常の者白梅におくれて開く也。早き物は寒紅梅、八

重也、臘月に開。浅香山は単葉、十月霜月も開く。皆冬至梅の類也。譜にいへる杏梅は越中の類にや。又鵝梅も実大なる由、興化志といふ書に侍れば、此類にや。鴛鴦梅又寒紅梅の八重の種類ならし。其花の形色皆似たり。王荊公よく詩に紅色をいへり」「梅……此者、種類花品あまた侍る。大凡白紅のひとへ、八重也。……白梅はすべて香あり。紅梅は香なきと侍る。寒紅梅は八重なり、香なし。末秋よりも咲あり。浅香山と云者これにつげり。ひとへの紅梅也。これらは皆冬梅也」（『滑稽雑談』）「紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風」（『炭俵』上）「**Côbai. Acai vme.**」（『日葡辞書』）。○**見ぬ恋作る玉すだれ**　「見ぬ恋作る玉簾」。「見ぬ恋」は、相手の顔を知らないまま恋いあこがれること。「玉すだれ」は、貴族の屋敷の居室などの外側に垂らしておく簾で、「玉」は美称。玉簾の内ゆかしくて「見ぬ恋」が生まれるのを、玉簾が見ぬ恋を作ると言いなしたのである。「**Tamasudare.**」（『日葡辞書』）。

大意　紅梅が咲き匂う邸宅の軒端。あの玉簾の奥にはどんな美女が居て、見ぬ人にあこがれる恋を作ることか。

考　『賦物或問』（敲石著、安永四年刊）には、「比はむつきのすへ御所のうちを通りて、折ふし春雨のそぼふりて、御殿〳〵の紅梅今をさかりと見え、音楽聞え、誠に極楽は爰ならん哉と、いとゞ心もほれ〴〵と有がたき泪をこぼし通りけるとて」と前書があり、京の書肆井筒屋旧蔵の芭蕉真蹟を白字摺にして紹介してあるという。また『蟋蟀の巻』（駝岳撰、寛政五年刊）には、右の前書と同じような内容の松風宛芭蕉書簡の文言を前に掲げて句を出しているが、この書簡は真簡と認め難いものである。前者の文にしても、果して芭蕉の真作かどうか疑わしく、信憑性を裏付ける資料は何もない。元禄二年と推定される二月十五日付桐葉宛書簡に前書なしで出ており、これが信頼し得る殆んど唯一の資料である。恐らくこの句は実境によって発想されたものではなく、自由な想化に成る句だったのであろう。

紅梅は白梅の気品に比べて何となく人懐こく、艶冶な感じを誘うものである。その紅梅の咲く軒端に近く「玉すだれ」のかかる邸宅のさまからは、誰しも寝殿造りの王朝貴族の屋敷を思い浮べるであろう。玉簾の奥に住む女を床しと思い遣る情より「見ぬ恋」が生まれる。「此句の恋を作ると云は、男女の義にあらず。是は唯其風光に感じて、慕ふ心の専ら発ると云也」（信天翁『笈の底』）という説もあるが、ここはやはり美女を慕う恋情でなければなるまい。諸注を見ると、作者自身が恋心を誘われるという解が多いけれども、「見ぬ恋作る」は、聊か距離を置いた表現であろう。

あの玉簾のたたずまいからは、どんな「見ぬ恋」が生まれることか、と思い遣る趣に取るのが良いと思う。謡曲「鸚鵡小町」に見える「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの内ぞゆかしき」の歌は当然響いていようし、『伊勢物語』六十四段に、

昔をとこ、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづくなりけんあやしさによめる、

吹風にわが身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべきものを

返し、

とりとめぬ風にはありとも玉すだれたがゆるさばかひまもとむべき

とある歌なども、作者の頭にあったのではあるまいか。また、『源氏物語』若菜上、柏木が女三宮を垣間見る一条では、唐猫が走り出た騒ぎに、御簾の端が引き上げられた所から宮の姿が見えたことになっている。それやこれや、御簾と恋との縁は深いのである。所謂「物語の体」の句で、芭蕉の発句には珍しく、艶麗な気分を持つ作であった。

ふたみ

451　うたがふなうしほの花も浦のはる　（真蹟曾良系二見文台）

いつを昔・真蹟史邦系二見文台・真蹟自画賛・泊船集

二見の圖を拝み奉りて

うたがふな潮の花も浦のまつ　（蕉翁句集）

春季。

語釈　**○ふたみ**　「二見（ふたみ）」。皇大神宮のある伊勢市の北に接する三重県度会（わたらい）郡二見町の海岸二見が浦。白砂青松の浜辺の南端に二見興玉（おきたま）神社があり、その海中にしめ縄を張った夫婦岩（めおと）がある。ここの初日の出は画題としても著名。**○うたがふな**　「疑（うたが）ふな」。疑う

重也、臘月に開。浅香山は単葉、十月霜月も開く。皆冬至梅の類也。譜にいへる杏梅は越中の類にや。又鵝梅も実大なる由、輿化志といふ書に侍れば、此類にや。鴛鴦梅又寒紅梅の八重の種類ならし。其花の形色皆似たり。王荊公よく詩に紅色をいへり」「梅……此者、種類花品あまた侍る。大凡白紅のひとへ、八重也。……白梅はすべて香あり。紅梅は香なきと侍る。寒紅梅は八重なり、香なし。末秋よりも咲あり。浅香山と云者これにつげり。ひとへの紅梅也。これらは皆冬梅也」(『滑稽雑談』)「紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風」(『炭俵』上)「Côbai. Acai vme.」(『日葡辞書』)。○**見ぬ恋作る玉すだれ**　「見ぬ恋作る玉簾」。「見ぬ恋」は、相手の顔を知らないまま恋いあこがれること。「玉すだれ」は、貴族の屋敷の居室などの外側に垂らしておく簾で、「玉」は美称。玉簾の内ゆかしくて「見ぬ恋」が生まれるのを、玉簾が見ぬ恋を作ると言いなしたのである。「**Tamasudare.**」(『日葡辞書』)。

大意　紅梅が咲き匂う邸宅の軒端。あの玉簾の奥にはどんな美女が居て、見ぬ人にあこがれる恋を作ることか。

考　『賦物或問』(敲石著、安永四年刊)には、「比はむつきのすへ御所のうちを通りて、折ふし春雨のそぼふりて、御殿〳〵の紅梅今をさかりと見え、音楽聞え、誠に極楽は爰ならん哉と、いとゞ心もほれ〴〵と有がたき泪をこぼし通りけるとて」と前書があり、京の書肆井筒屋旧蔵の芭蕉真蹟を白字摺にして紹介してあるという。また『蟋蟀の巻』(駝岳撰、寛政五年刊)には、右の前書と同じような内容の松風宛芭蕉書簡の文言を前に掲げて句を出しているが、この書簡は真簡と認め難いものである。前者の文にしても、果して芭蕉の真作かどうか疑わしく、信憑性を裏付ける資料は何もない。元禄二年と推定される二月十五日付桐葉宛書簡に前書なしで出ており、これが信頼し得る殆んど唯一の資料である。恐らくこの句は実境によって発想されたものではなく、自由な想化に成る句だったのであろう。

紅梅は白梅の気品に比べて何となく人懐こく、艶冶な感じを誘うものである。その紅梅の咲く軒端に近く「玉すだれ」のかかる邸宅のさまからは、誰しも寝殿造りの王朝貴族の屋敷を思い浮べるであろう。玉簾の奥に住む女を床しと思い遣る情より「見ぬ恋」が生まれる。「此句の恋を作ると云は、男女の義にあらず。是は唯其風光に感じて、慕ふ心の専ら発ると云也」(信天翁『笈の底』)という説もあるが、ここはやはり美女を慕う恋情でなければなるまい。諸注を見ると、作者自身が恋心を誘われるという解が多いけれども、「見ぬ恋作る」は、聊か距離を置いた表現であろう。

あの玉簾のたたずまいからは、どんな「見ぬ恋」が生まれることか、と思い遣る趣に取るのが良いと思う。謡曲「鸚鵡小町」に見える「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの内ぞゆかしき」の歌は当然響いていようし、『伊勢物語』六十四段に、

昔をとこ、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづくなりけんあやしさによめる、

吹風にわが身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべきものを

返し、

とりとめぬ風にはありとも玉すだれたがゆるさばかひまもとむべき

とある歌なども、作者の頭にあったのではあるまいか。また、『源氏物語』若菜上、柏木が女三宮を垣間見る一条では、唐猫が走り出た騒ぎに、御簾の端が引き上げられた所から宮の姿が見えたことになっている。それやこれや、御簾と恋との縁は深いのである。所謂「物語の体」の句で、芭蕉の発句には珍しく、艶麗な気分を持つ作であった。

ふたみ

451　うたがふなうしほの花も浦のはる　（真蹟曾良系二見文台）

二見の圖を拝み奉りて

うたがふな潮の花も浦のまつ　（蕉翁句集）

春季。

いつを昔・真蹟史邦系二見文台・真蹟自画賛・泊船集

語釈　○**ふたみ**　「二見」。皇大神宮のある伊勢市の北に接する三重県度会郡二見町の海岸二見が浦。白砂青松の浜辺の南端に二見興玉神社があり、その海中にしめ縄を張った夫婦岩がある。ここの初日の出は画題としても著名。○**うたがふな**　「疑ふな」。疑う

なかれといって、二見が浦の初春を謳歌する意をあらわした。「爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す」（『おくのほそ道』）「Vtagai, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○**うしほの花**　「潮の花」。海上に立つ白い波頭を花に譬えていう。「波の花」（Ⅰ34）に同じ。「難波の鐘も響き、浦は潮の波の声々」（謡曲「難波」）「Vxiuo.」（『日葡辞書』）。○**浦のはる**　「浦の春」。「浦」は二見が浦を指す。「VRa.」（『日葡辞書』）。

大意　二見が浦に立つ波の花も、めでたい初春をことほいでいる。神々しいこの浜辺の春を疑ってはならぬぞ。

考　『いつを昔』（其角撰、元禄三年刊）には「二見の図を拝み侍りて」と前書があり、『泊船集』も同様である。岡田利兵衛氏の『芭蕉の筆蹟』に写真版の載る二見文台には「元禄二仲春　芭蕉」と署してあり、もと曾良が芭蕉自筆自画の『野ざらし紀行画巻』と共に請い受け、信州に伝わっていたのを、宝暦の末芭蕉の縁者の後裔松村桃鐘が手に入れて、その編にかかる『芭蕉翁真跡集』（明和元年刊）に文台裏書を摸刻したもので、この句の成立年次もこれによって証せられる。今一つの文台は史邦の編した『芭蕉庵小文庫』春の部に、

ふたみの机・硯箱は翁ふかくいとをしみて、みづから絵かき讃したまひぬ。また一とせ洛のぼりに、いざさらば雪見にころぶ所までと興じ申されける木曾の檜笠・越の菅蓑に桑の杖つきたる自画の像、此しな〴〵は、さぬる年花洛の我五雨亭に幽居し玉ふ時、一所不住のかたみとて予に下し玉りぬ。

と述べてあるものに当り、水戸徳川家等を経て今は出光美術館に所蔵されるもの。「元禄四」と年記がある。『去来抄』故実に、

卯七曰、先師に二見形といふ文台侍るよし、いかゞ。去来曰、しかり。史邦是を乞て写し侍る。先師指図、寸法を直に聞侍れど、忘却せり。本より文台も所持せず。其後門人写し侍る人多し。

『宇陀法師』（李由・許六撰、元禄十五年刊）にも、

一　二見形の文台寸法口伝。おもてに墨絵有。是先師の製也。当流専用也。二見の硯箱と云、文台に付事に非ズ。

取合物也。

等の記事もあって、この文台の事は同門の間に知られていた。

句の出来たのは二月でも、題材は歳旦年頭のもので、文台の表には扇面と二見が浦の夫婦岩の図が描かれており、句はその絵によった発想である。扇面は西行が伊勢で扇を開いて仮の文台としたという風流な伝えに基づく。「二見が浦の春を疑ふな」というのは、その情景が疑いもない目のあたりのものであることを述べているのだが、それは取りも直さず伊勢の大廟に近い神境の景に、あらたかな神威の発現を感じているので、皇祖神に対する虔しい気持のあらわれといえよう。露伴が、

此の句、アリテレーションである。それゆゑに調子がよい。神境ぢやわい、よいところぢやわい、春ぢやわいと云ふのです。(『続々芭蕉俳句研究』)

と指摘している点にも留意したい。「ウ」の頭韻で表現の飾りとし、快い調子で俳諧味を出しているのである。『蕉翁句集』の下五「浦のまつ」は誤伝であろう。

452 草の戸も住替る代ぞひなの家 (おくのほそ道)

草の戸も住かはる世や雛の家 (三月廿三日付落梧宛書簡)

――真蹟短冊・笈日記・泊船集・世中百韻

春季(ひな)。

語釈 **○草の戸** 「草の庵」に同じ。既出(Ⅱ 262 前書)。深川の芭蕉庵を指す。**○住替る代ぞ** 「住み替る代ぞ」。「住替る」は、庵の主が他の人と替ること。「住かはる」(書簡)「すみかはる」(真蹟短冊)等の仮名書きもあり、「住み替ふる」でないことは明らかである。「代」は「世」と同じ。「これが世の中なのだ」という感慨をあらわすので、「世」の字を用いた方が寧ろ相応しい。「秋をへ

ていくよもしらぬふる郷の月はあるじにすみかはりつゝ」（『玉葉集』巻十四、西園寺公経）。**〇ひなの家**　「雛の家」。古注には、空いた草庵に商人が売物の人形を入れておいたのだとか、雛人形を入れる箱とするような説もあるが、後掲の種々の前書にもあるように、芭蕉の代りに主となった人が、娘を持つ普通の家庭人だったのだから、「三月の節供になれば雛を飾る家」と解するのが至当である。「内裏雛」（Ⅰ*93*）参照。「桃花の節　三日……ひいな遊び。……ひいなあそびこそ慥なる故もあらねば、うちまかせては雑なるべし。源氏物語には、元日にも野分の朝にもひいな事の由侍れば、けふにかぎらぬ事しられたり。但、聊あひしらひあらば、此比の俗に任せてけふの事にも成ぬべしやとて、新続犬筑波集にも少〻まじへて入侍し」（『増山井』）「振舞や下座になをる去年の雛　去来」（『猿蓑』巻四）「**Fina.**」（『日葡辞書』）。

大意　世に隠れ住む我が草庵も、主が住み替る時が来た。娘など持つ人が主となれば、やがて来る桃の節供には、雛を飾る賑やかな家になることだろう。これが世の中なのだ。

考　「むすめ持たる人に草庵をゆづりて」（真蹟短冊）「むかし此叟の深川を出るとて、此草庵を俗なる人にゆづりて」（『笈日記』）「深川の草菴を出たまふとて」（『泊船集』）「はるけきたびの空おもひやるにも、いさゝかもこゝろにさはらんものむつかしければ、日比住ける庵を相しれる人にゆづりていでぬ。このひとなむ、つまをぐし、むすめまごなどもてるひとなりければ」（『世中百韻』）等の前書がある。三月廿三日付岐阜の落梧に宛てた書簡には、

野生とし明候へば、又〳〵たびごゝちそゞろになりて、松嶋一見のおもひやまず、此廿六日江上を立出候。みちのく・三越路の風流、佳人もあれかしとのみに候。
はるけきたび寝の空をおもふにも、心に障んものいかゞと、先衣更着末草庵を人にゆづる。此人なん、妻をぐし、むすめをもたりければ、草庵のかはれるやうおかしくて

として「草の戸も」の句を披露しており、前掲の種々の前書と共に、句の動機や内容を窺うことが出来る。『おくのほそ道』には、周知のように、「もゝ引の破をつゞり笠の緒付かえて三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」として句を出しているが、出発に先立って草庵を譲った相手の人について

は、翌元禄三年九月廿六日付の芭蕉宛曾良書簡に、その後の草庵の主の入替った経緯を述べた次のような記事が参考になろう。

貴翁御庵、平右ゟ夕菊母義へゆづり、平九跡へ表ノ方苔翠、裏ノ方平右、苔翠跡へ夕菊母義、貴庵へは中〳〵愚痴成浄土之和尚隠居移り、九本仏可夕がにせ被致十念出し、偖〳〵やかましく候。大屋ゟ被止候故、此間に外へ移り申筈に普請二つ目ノ辺に仕候内、跡売に成申候。わづか成内に数変、おかしく存候。又いか成ものか入かはり候半と存候。

これによると、嘗ての芭蕉庵は、元禄二年三月以降、「平右」から「夕菊母義」（夕菊は蕉門俳人）、更に「浄土之和尚隠居」と住人が変ったようである。曾良が独り合点な書き方をしているので、ここに見える各人相互の関係は今一つはっきりしないが、少くとも芭蕉が譲った当の相手が平右衛門という人物だったことは確言出来よう。この人が妻や娘を持つ世間並の人だったのである。二月末に草庵を出た芭蕉は、近辺にあった杉風の別墅採茶庵に移ったが、

翁陸奥の哥枕見む事をおもひ立侍りて、日比住ける芭蕉庵の庵を先破り捨、しばらく我茶庵に移り侍る程、猶其筋余寒ありて、白川のたよりに告こす人もありければ、多病心もとなしと、弥生末つかたまで引とゞめて

花の陰我草の戸や旅はじめ　印（杉風）（杉風詠草）

という杉風の句文によれば、出立は三月上旬頃に予定されていたのを、奥州方面がなお余寒がきびしいという情報があった為に、杉風が芭蕉の健康を気づかって三月末まで引き留めたのであった。「草の戸も」の句は、草庵の新しい主が隠者ではない俗人になったので、「草庵のかはれるやうおかしくて」（落梧宛書簡）、やがて来る桃の節供の折の有様を思い遣ったもので、二月末頃の作と推定される。『おくのほそ道』には、句の後に「面八句を庵の柱に懸置」とあって、これを発句に八句の付合があったように書かれているが、この「面八句」は伝わらず、存在自体が疑わしい。若しこういう物が何処かにあれば、それに言及した資料がありそうなものなのに、『ほそ道』以外にそうした資料を

聞かないからである。

この句は「草の戸」と「ひなの家」が対照をなしており、前者が隠者の侘住居をあらわし、後者が妻や娘のある賑やかな家庭をあらわしている。そして「草の戸も」の「も」の持つ役割は、

……世のあらゆる家居に対して、物の数にも入らぬようなこの草庵すらもという心のあらわれであろう。『奥の細道』の冒頭で……時間の流れを旅としてとらえた芭蕉は、つづけて……人の生きざまにも旅を見いだす。その旅、その流転相の眼前のあらわれを、この句では「草の戸」に見ているのである。背後に無常・流転の大きな観念を負うものとして「草の戸も」を、読みとりたいと思う。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の説に悉されていると言えよう。このような句を、

頃は二月末にて上巳のせちに近き故に、雛を商ふもの翁の明キ庵をかりて、売物を入置所となせしによりて、此吟ありと云。勿論雛の家箱は、あるは二つの人形を一箱になし、或は大小の箱を取かへなど、年〻其収蔵の定なきものなれば、年年歳歳花相似（ヒタリ）、歳歳年年人不レ同　の心ばえにて、人生の常なきを観想の吟なるべし。（梨一『奥細道菅菰抄』）

翁の旅立るにより人の入替るを、雛の箱にたとへたる時節の感情なるべし。（錦江『奥の細道通解』）

などと解してはぶちこわしである。比擬による寓意は所詮浅いものでしかなく、この句のあらわす感慨は、もっと深いのである。

その感慨の深さ重さは、「代ぞ」に端的にあらわれる。落梧宛書簡や真蹟短冊等、当初の「世や」ではあり来りの詠嘆に過ぎず、それは「草庵のかはれるやうおかしくて」（落梧宛）の軽さに照応するともいえよう。「ぞ」の念を押すような強い響きは、無常の認識を反芻して自ら納得する感じが濃く出ている。一歩誤れば道歌めいた観念句に堕するところだが、ここではそうならずに、旅立ち前の芭蕉の心情を託した見事な句に成り得ているのはさすがであって、

それは抒情の力強さゆえと言ってよい。「代ぞ」は後年『ほそ道』執筆に際しての改案で、楸邨氏も指摘されたように、冒頭の「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日と旅にして旅を栖とす」と呼応する関係にある。我々が「草の戸も住替る代ぞ」という句の表現に深く共感するのは、『ほそ道』序章のとぢ目としてこの句が置かれている為でもあるが、だからといって、富山奏博士の『俳句に見る芭蕉の藝境』の所説の如く、「世や」から「代ぞ」への推敲を否定してしまうのは行き過ぎであろう。この句は「代ぞ」と改めることによって、数等高い表現を獲得したのである。なお、落梧宛書簡の文言と『世中百韻』（麦阿撰、元文二年刊）の前書に相似た表現が見えるのは注意を要するが、後者はやはり書簡とは別の真蹟に基づくものと見ておく。但し、原物はまだ出現していない。

「ひなの家」が前以ての想像か、現に雛を飾る家となったのを見たものかで説が分れている。楸邨氏は『芭蕉講座』発句篇では、雛飾るさまを見たのを契機とした句としていたが、後の『芭蕉全句』では「折からの弥生の節句には、……はなやいだ家と変るであろう」と成っている。人によって見方は色々であろうが、私は現に雛を見たのでなければ力が弱いとは感じない。書簡の「衣更着末」という文言や前書からの続き具合は、草庵を人に譲って出た時の作とする方が自然と思われるので、前以ての想像として解した。土芳の『蕉翁文集』等に、中七を「住かゆる代ぞ」と伝えているのは信じ難い。

酒のみ居たる人の絵に

453　月花もなくて酒のむひとり哉　（あら野）

泊船集・蕉翁句集

雑。

語釈 ○酒のみ居たる人 「酒呑み居たる人」。○月花 風雅な自然の美を代表する物。既出(Ⅱ416)。

大意 この画中の人は、月や花を賞する様子もなくて、唯ひとり酒を呑んでいることよ。

考 元禄二年三月に成った『あら野』初出の句で、細道の旅に出るまでには成っていたものとして此処に配する。『蕉翁句集』には元禄二年の部に挙げてあるが、必ずこの年という確証はない。『あら野』には巻頭の「花三十句」の中に見え、『泊船集』も春の部に入れているが、春の句とするのが芭蕉の意向だったかどうか疑わしい。季語の約束として秋季の月と春季の花を連用した場合には、雑(無季)とするのが本来である。林筐の稿本『砂川』には、「月花もしらで」とした異形を伝えるという。

前書によって分るように画賛句である。画には恐らく酒を呑んでいる人物だけが描かれていたのだろう。それを「月花もなくて」といったのが即興の趣向であって、これで風雅の道具立てが揃い、「なくて」で俳諧にもなっている。機智による頓作に過ぎないが、「物をもいはず、ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる」(「閑居ノ箴」。Ⅱ三七一頁参照)という自画像にも通う孤独隠逸の志向が顕著である。

嵐雪がゐがきしに、さんのぞみければ

454 蕣は下手のかくさへ哀也 (いつを昔)

泊船集・金毘羅会・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季(蕣)。

語釈 ○嵐雪 「ランセツ」。江戸の蕉門俳人。服部氏、名は治助。越後高田藩の井上家等に仕えたが、やがて武士を廃して俳諧師として世に立つに至った。芭蕉に入門したのは延宝三、四年頃か。延宝末年の『桃青門弟独吟廿歌仙』に入集し、『田舎の句合』の序も書いている。『其袋』(元禄三年)『若菜集』(同八年)等の撰著があり、江戸に雪門の俳系を遺した。宝永四(一七〇七)年十月十

三日歿、享年五十四。○ゑがきしに　「描きしに」。「描きし絵に」の意。「骸骨どもの笛鼓をかまへて能する処を画て、舞台の壁にかけたり」(『続猿蓑』下、芭蕉発句「稲づまや」前書)。○さんのぞみければ　「賛望みければ」。賛を書いてくれるように望んだので、の意。「さん」とは、絵などに因んで、それに書き添える褒める意味の詩歌や句、文章をいう。「肅山子のもとめ、画は探雪なり。琴ト笙ト大鼓ト賛のぞまれしに」(『末若葉』、芭蕉発句「ちるはなや」前書)「San.」(『日葡辞書』)。○蕣　「アサガホ」。「朝顔」に同じ。朝に花を開く秋季の植物。既出(Ⅰ160等)。「蕣」の字は、中国では「むくげ」「きはちす」を指すが、我が国では「あさがほ」の意に用いられる。「はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水　霜にまだ見る蕣の食　杜国」(『冬の日』)。○下手のかくさへ　「下手の描くさへ」。下手な人が描いた絵さえも。「食時やかならず下手の鉢扣　路草」(『続猿蓑』下)「Feta.」(『日葡辞書』)。○哀也　「哀れ也」。ここの「哀」は、趣がある意で、気の毒なことではなく、「哀」は宛字に過ぎない。「名はへちまゆふがほに似て哀也　長虹」(『あら野』巻三)。

大意　朝顔の花は、下手な人が描いた絵さえも、しみじみとした趣があるよ。

考　嵐雪が賛を望んだという前書からして、この句は江戸での作と思われる。元禄三年に刊行された其角の『いつを昔』初出であるが、芭蕉はこの年上方滞留中で、江戸には居なかった。『蕉翁句集』は貞享四年の部に入れてあり、秋季に成ったとすれば貞享五年秋以前であるが、画賛の場合必ずしも当季とばかりは限らない。ここでは姑く奥羽の旅に出る前までの成立と見ておく。

嵐雪が朝顔の絵をかいて芭蕉に賛を請うたのに与えた句である。はかない物のたとえにも引かれる花の趣を「あはれ」の一語であらわしているが、それよりもこの句の興の中心は「下手のかくさへ」にあろう。「下手」と無遠慮に言いながら、其処には門人への隔意のない親しみがほのぼのと籠っている。嵐雪もぎゃふんと参りながら、この温かい味を感じて嬉しかったのではあるまいか。加藤楸邨氏は、

「下手」ということばにある親愛感、そしてその中にいくばくの笑いとあわれさとがたゆたう味わいは、現在の俳句にはあまり見られなくなったもので、新しく生かす工夫をしたいと念じているものの一つである。(『芭蕉全

句』）

と述べておられる。

455　あさよさを誰まつしまぞ（ママ）片こゝろ　（桃舐）

泊船集・三冊子・蕉翁句集・俳諧古今抄

雑。

語釈　○あさよさを　「あさよさ」は「朝夜さ」。朝と夕べとの意から、ここは、朝に夕にの意になる。「を」は、或る時間的経過を示し、且つ詠嘆的気分を添えた表現。朝に夕に、ずっと、というのである。「よさこひと、いふ字を金紗で縫はせ」（『重井筒』上）。○誰まつしまぞ　「まつしま」は、宮城県中部、仙台北方の湾岸一帯に多数の島々のある景勝の地。既出（I 145）。ここは「まつ」に「待つ」を言い掛けた。「誰」は、「誰が」の略表記と見る説もあるが、「タレ」でよかろう。○片こゝろ　「片心」。自分一個の関心。相手に通ずるかどうかは問題外なのである。「片思ひ」とは別語で、内容も異なる。明治期の『改正増補和英語林集成』には「Katakokoro」となっており、ここでも最初の「こ」は清んでよんでおく。「かた心にかゝる」（『毛吹草』巻二）。

大意　朝に夕にずっと松島のことが我が心にかかる。一体誰が私を待っているのだろう。

考　初出の『桃舐』（長水撰、元禄九年刊）には、「翁執心のあまり常に申されしは、名所のみ雑の句有たき事也。十七字のうちに季を入、歌枕を用て、いさゝか心ざしをのべがたしと、鼻紙のはしにかゝれし句をむなしくすてがたく、こゝにとゞむなるべし」という付記が見える。この書は路通の後援した集といわれるもので、付記の内容も路通の話に基づくらしい。『蕉翁句集』にこの句を貞享五年の部に出して、「此句いつのとしともしらず。旅行前にやと此所に記ㇲ」とあるように、句意からは細道の旅より前の成立と見るのが至当であろう。そうすると、芭蕉が鼻紙の端にこの句を書いたのは、路通が深川辺に居て芭蕉庵に出入りしていた元禄元年秋から翌二年春までの間のことと思われる。

本書では旅立ち前の句として此処に配した。『三冊子』に、「此句は季なし。師の詞にも、名所のみ雑の句にも有たし。季をとり合せ歌枕を用ゆ、十七文字にはいさゝかこゝろざし述がたしと、いへる事も侍る也。さの心にて此句も有けるか」（赤雙紙）とあるのは、『桃舐』の記事に拠ったものであろう。なお『三冊子』石馬本には、中七の句形が「誰松島の」とあるけれども、芭蕉翁記念館本の「誰忝嶋ぞ」、梅主本の「誰まつしまぞ」の方が信じ得る本文と思われる。時代のずっと降る『舟中一覧』（茂林斎撰、文政三年刊）には、松島での芭蕉真蹟に拠るとして、「あさよさをたが忝しまぞかたこゝろ」という句形を伝えるが、その真蹟なるものは信じ難く、華雀の『芭蕉句選』の所伝「朝寒も誰松しまの片こゝろ」も同然である。

十七字の短詩形の中で季語や名所の名を入れたのでは十分に懐いを述べ得ないので、「名所のみ雑の句有たき事也」（『桃舐』）として試みられた句である。

朝な夕な心にかゝれるは、そこの佳境に誰かありて我をまつにやと、いひ懸給へるなり。慕ふ心の深さをあらはす。（杜哉『蒙引』）

という説で解は尽きている。松島にあこがれる気持を美女への思いに取做して興とした趣向で、旅立ち直前の落梧宛書簡に、

野生とし明候へば又〳〵たびごゝちそゞろになりて、松嶋一見のおもひやまず、……みちのく三越路之風流、佳人もあれかしとのみに候。（三月廿三日付）

とあるのが思い合わされよう。この手紙の文言に徴しても、この句は旅立ち前に成ったものでなければならない。

456　鮎の子のしら魚送る別哉　（続猿蓑）

泊船集・伊達衣・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

若鮎に白魚つるゝ別かな（知足書留）

春季（鮎の子・しら魚）。

語釈 ○**鮎の子**「鮎の子」。秋に生まれた稚鮎が冬の間海で成長し、春になって川をのぼるものをいう。「若鮎」に同じ。「鮎 夏也。若鮎は春也。さび鮎・おち鮎は秌也。鮎の子は春也」（『御傘』）「芳野西河の滝／鮎の子の心すさまじ滝の音 土芳」（『続猿蓑』下）「Ai. I, ayu.」（『日葡辞書』）。○**しら魚送る**「しら魚」は既出（I 135）。鮎の子が白魚よりやや後に川をのぼるのを、擬人化して白魚を送るように言い做した。○**別哉**「別れ哉」。「藤の花たゞうつぶいて別哉 越人」（『はるの日』）。

大意 若鮎が白魚の後を追って川をさかのぼる。丁度白魚を送っているようだが、川辺の我々もそのように送り送られて、やがて別れることだ。

考 「留別」（『泊船集』）「常陸下向に江戸を出る時、送りの人に」（『伊達衣』）等の前書がある。『続猿蓑』も旅の部の留別句の中に収めており、留別句とする点では何れも異同はない。『伊達衣』（等躬撰、元禄十二年刊）の前書によると、貞享四年の『鹿嶋詣』の旅立ちの時の作と思われるが、この時は八月十四日の出発だから、句が春季であることが不審になる。然るに、土芳の『蕉翁句集草稿』には、「此句、松嶋旅立の比、送りける人に云出侍れども、位あしく、仕かへ侍ると直に聞えし句也」とあり、『蕉翁句集』も元禄二年の部に出していて、この方が信頼出来る所伝であろう。即ち三月二十七日奥羽の旅に出発した際、千住あたりで見送りの人々に示した句と推定される。

『連歌俳諧研究』三十七号に森川昭氏の紹介された宇佐美魚目氏蔵の知足書留には、「奥州餞」と題して、先ず『ほそ道』所収の有名な「行春や」の句を書き、次に標掲の「若鮎に」の句を書いて、「とすべきものをと口おしがり候」とある。「行春や」の句を「若鮎に」と改めるべきだったと芭蕉が言ったような書き方であるが、句格からしてこの関係は逆であるべきこと明白である。鳴海の知足は元禄初頭以来芭蕉とは疎遠になったことを考えれば、これらの句形を何によって知ったかも明らかでなく、この書留には疑問の点が多い。「若鮎に」の句形は、異伝として参考まで

に掲出するに止める。

留別吟として、「鮎の子」を見送りの人々に、「しら魚」を自らに比擬した趣向である。白魚は陰暦二月頃産卵の為に川を遡上し、若鮎はそれに次いで三月頃に遡上する。「藻にすだく」（I135）の句でも明らかなように、芭蕉は近くの隅田川で白魚を見ることは多かったろうし、鮎の子は出発の当日千住の川辺で見たのかも知れない。或いは『芭蕉句選年考』に「東武永代橋辺の川にて、アイゴと云ふ小魚、白魚に交りて網にかゝる。漁人鮎の子也といふ」とあるようなことを体験したことがあって、その時想起したかとも思われる。何れにせよ、白魚と鮎の子が相次いで河面に姿を見せることを比擬の材料として人々との別れを惜しむ趣向としたのであろう。句として一応まとまってはいるが、やはり寓意の露わな点が芭蕉には「位あしく」感ぜられて、『ほそ道』執筆の際に全く想を新たにして「行春や」の句を成したのであった。なお、鮎の子に若々しい門人達を、すがれ行く白魚に自らの老体を擬したとする解釈が古来あるけれども、其処までいうのは穿ち過ぎではあるまいか。先立ってのぼる白魚と、後を逐うように次いでのぼる鮎の子に、それぞれ送られる者送る者を擬したと見れば足りると思う。

457　行春や鳥啼魚の目は泪　（おくのほそ道）

鳥の道・泊船集

奥州餞

行春や鳥は啼魚は目になみだ　（知足書留）

行春や鳥鳴魚の目に涙　（安達太郎根）

春季（行春）。

語釈　○**行春**　「行く春（ゆくはる）」。三月の末、春も終ろうとする頃をいう季語。既出（II 373）。○**鳥啼**　「鳥啼き（とりなき）」。「御簾の香に吹そこなひし

笛の役　探志　寐ごとに起て聞ば鳥啼　昌房」（『ひさご』）「Tori.」（『日葡辞書』）。○**魚の目は泪**　「魚の目は泪」。魚類の見ひらかれた潤んだ目を、涙をたたえているように言い做した。「魚鳥の心はしらず年わすれ　翁」（『流川集』）「Vuo. I, iuo.」（『日葡辞書』）。

大意 今や春も暮れようとしている。それを惜しむのか、鳥は悲しげに啼き、魚の目は涙が一杯だ。旅立つに当って、私も人々との別れがつらい。

考 『鳥の道』（玄梅撰、元禄十年刊）には「千じゆといふところにて舟をあがれば、前途三千里のおもひむねにふさがりて、幻のちまたに離別のなみだをそゝぐ」と、『おくのほそ道』と同文の前書が見える。奥羽の旅に出掛ける時、千住での留別吟として『ほそ道』に収められているが、その際詠まれたのは前の「鮎の子」の句であった。それを飽き足らず思って、『ほそ道』執筆の際に全く別様の句に案じ替えたのがこの句である。知足書留の句形は孤立した所伝で、その内容について問題のあることは前述した。『安達太郎根』（渭北撰、宝永元年頃成）の句形は杜撰と思われる。

『ほそ道』執筆中の句案ということについて、井本農一博士は更に精しく、「執筆の最初からではなく、『おくのほそ道』を書き進んで、結びの句「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」を作ってから、紀行文の結構として「行秋ぞ」に呼応させるために「行春や」の句を作って門出の留別吟としたのである」（「『おくのほそ道』中の発句の制作時期」――『芭蕉の文学の研究』所収）と見ておられる。尤もな説であるが、「行春」「行秋」の照応というだけでは機械的に過ぎて、根拠として薄弱ではあるまいか。この場合を除いても、『ほそ道』には頻りに「行く」という言葉が用いられていることは既に指摘されている。大垣での「行秋」の句を俟たずとも、弥生の末の旅立ちの情景を想起すれば、「行春」の思いは当然芭蕉の脳裏に蘇ったであろう。「前途三千里のおもひ」を胸に旅立つ芭蕉が、「行春」の語に託したのは「漂泊の思ひ」だった筈である。「行秋」の句の方は元禄二年九月六日に既に成っていたことでもあり、「行春」の句が『ほそ道』執筆の最終段階で成ったとは必ずしも限るまい。旅立ちの条を執筆する際でもその可能性はあるわけで、要は『ほそ道』執筆中の句案なのである。なお、井本博士は、「鮎の子」の句も含めて、『ほそ道』の旅立ちに当って留別

吟は作られなかったのではないかとも見ておられるが、それには土芳の『句集草稿』の記事を誤りとしなければならず、確説とするには距離があると言わざるを得ない。

この句、表面は暮春の自然――鳥や魚のたたずまいに託して惜春の情をうたったものである。しかも、『ほそ道』では旅立ちの条に置かれている為に、見送りの人々に対する留別吟であることも明らかなところから、「行春」が芭蕉で鳥や魚が見送る門人達、或いは飛び立つ鳥が芭蕉で、水中の魚が残される人々といったように、句中の物に一々比擬の対象を取ろうとする見方が古くからある。しかし、この句の発想は、そのような単純な譬喩ではなく、離別の情を暮春の鳥魚の情に託したと見るべきもので、「全体が惜春の句であるということが、この場合惜別の句であることに叶う」（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）のであった。それから、鳥と魚の組合わせについて、陶淵明の「羈鳥恋㆓旧林㆒、池魚思㆓故淵㆒」（羈鳥(きてう)旧林を恋ひ、池魚故淵を思ふ。「帰㆓園田居㆒」其一）や杜甫の「感㆑時花濺㆑涙、恨㆑別鳥驚㆑心」（時を感じては花にも涙を濺(そそ)ぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす。「春望」）等の古詩を心に置いたかとも言われるが、これらは句の表現に余り密接な関係ありとも思えない。暮春の哀感の具象として啼鳥の声と魚目の涙を案じたまでであろう。中にも「魚の泪」は珍しく、俳諧でもあって、千住の魚市場の属目が動機になっていると見る説まであるが、これは何よりも前の留別句で「鮎の子」「しら魚」を採り上げたことが影響していると思う。そして、異伝の句形「目に涙」では、訴えるものが弱くて駄目なのである。「目は泪」であってこそ、溢れんばかりの涙を思わせて、別離の表情を切実にあらわすものになるのだ。

この句の趣については、左に引く山本健吉氏の鑑賞が周密である。

些末なリアリズムは、それが雲雀とか鯛とか具体的な生類であることを要求するであろうが、芭蕉の詩的世界においては、それはただ「鳥」であり「魚」である。そしてそのことによって、それは事実を脱し、一種の象徴的表現を獲得している。高浜虚子は、釈尊涅槃図にいろんな動物が啼泣しているところを連想しているが、それは

日本人に親しい図であるだけに、……如何なる詩句よりも、芭蕉の脳裏に潜在していたと見てよいだろう。だから、魚鳥啼泣の図は、現実の体験の上に、象徴化された世界の絵図が重なって、描き出されたものである。そして「鳥」と「魚」とが、属目の天地を代表し、ひいては草木国土悉皆の自然界の象徴と化している。……

この句のモチーフは惜別の情であるが、句の表面の意味は惜春の情である。惜別が惜春の言葉に移されることによって、表現が完成しているのである。季節の詩である俳句においては、主観がそのまま述べられることはなく、必ず季物に託して表現を得るのであるから、ここに高度の寓意詩的な性格が要請されるのだ。と言っても、鳥が啼き、魚が涙するという個々のイメージが、留別・送別の人たちの悲しみを寓しているのではない。……全体が惜春の句であるということが、この場合惜別の句であることに叶うのである。だから「鳥啼き魚の目は泪」という激しい感情の籠った詩句を、真に生かしているというものは、「行く春や」の詩句の持つ含蓄なのだ。あるいは逆に、「行く春や」という伝統的な詩句の持つ余韻を、真に具象化しているのは、「鳥啼き魚の目は泪」の詩句の持つ生き生きしたイメージなのだ。この両者の微妙な二重映しのもたらすハーモニーが、この句の眼目である。

「鳥啼き魚の目は泪」は四・八の破調である。リズムとしては、「鴨の声ほのかに白し」の五・七の破調よりも激越であり、同時にまた自然でもあり、四・三・二・三と分解できるようになっている。……晢子は音調の上から、「や」と「は」がここでは「激しく競合する」と言っているが、私はそうは感じない。……私はいったん「や」と高まり、次いで「鳥啼き」と鎮まり、最後に「目は泪」と最高調に達した調子の波動の起伏を、讃歎するのである。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

リズムの問題一つとっても、この句に実現されたその起伏の力強さは、発句という短詩形文学の中では稀な達成というべく、旅立ちの場での芭蕉の痛切な惜別の情を余す所なくあらわしている。

室　八　嶋

458

糸遊に結つきたる煙哉　（曾良書留）

雪まるげ・奥細道拾遺

春季（糸遊）。

語釈　○**室八嶋**「ムロノヤシマ」。現栃木市惣社町の大神神社境内にある歌枕。「室」はこのあたりの古地名、「やしま」は古語で「釜」或いは「竈」を意味するといわれ、其処の池の水面から水蒸気が立つところから「煙」を詠む習わしであったという。曾良の『随行日記』元禄二年三月二十九日の条には、「飯塚ヨリ壬生ヘ一リ半。飯塚ノ宿ハヅレヨリ左ヘキレ、川原ヲ通リ川ヲ越（小クラ川）、ソウシヤガシト云船ツキノ上ヘカヽリ、室ノ八嶋ヘ行（乾ノ方五町バカリ）。スグニ壬生ヘ出ル（毛武ト云村アリ）」、同じくその『名勝備忘録』室の八嶋の条の鰭紙には「飯塚ト壬生トノ間、左ノ方也。飯塚ヨリ二リ、壬生ヨリ一リ有。所ニテハ惣社ト云。明神ノ後ニケブノ里有」と見える。「室の八嶋に二種あり。一は名所、一は人家のかまどをいふ。いづれも山類・水辺にあらず」（『御傘』）。○**糸遊**「イトイウ」。かげろうのこと。「いとゆふ……遊糸と書也。詩に野馬と作もいとゆふの事也」（『御傘』）「いとゆふの語、いつの頃より言ひ出でしか詳ならず、おもふに古きことならざるべし。……糸遊にはあらで遊糸とありしが誤りて糸遊となり、それより「いとゆふ」と訓み来り、遂に一語をなすに至りたるにあらずやともおもはる。遊糸とあらば「かげろふ」と訓むべきこと勿論なり。遊糸は漢語にして、陽炎の状の遊糸の如くなるより云へるなり」（露伴『評釈冬の日』）「いとゆふのいとあそぶ也虚木立伊賀氷固」（『猿蓑』巻四）。○**結つきたる**「結び付きたる」。ここは、からみ合い一つになることをいう。「結ぶ」は「糸」の縁語。加藤楸邨氏は、几帳の腰立の緒の結びをいう「糸遊結」が心にあっての表現とされ（『芭蕉全句』）、また井本博士は、「芭蕉は奥羽の旅の前半は、歌枕に沈潜していたから、室の八島という地名を聞くだけで、古歌の世界が蘇ってきて、「結つきたる」という表現になった。……「結つきたる」はやや理屈めくが、陽炎といわずに「糸遊」と表現したのは、ゆらめく感の中に、古歌につながる意味を表そうとしたものであろう」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）と考えておられる。

大意　この室の八島では、かげろうとからみあって煙が立ちのぼっているよ。

考　『奥細道拾遺』（莎青撰、延享元年刊）には「室八嶋にて」と前書があり、『雪まるげ』（周徳・闌更編、天明三年刊）には、曾良の『書留』と同様の前書が見える。元禄二年三月二十九日室の八島で詠まれた句である。四月下旬に須賀川から江戸の杉風に宛てて出した曾良の書簡には、「三月晦日室八嶋」としてこの句が挙げてあるが、「晦日」は「尽日」または「末日」と同じ意味であろう。元禄二年三月は小の月で、芭蕉と曾良が此処を訪れた二十九日で終りであった。

曾良の『書留』に於ける書き方について井本博士は、

『曾良書留』には、この句を第一として発句が五句……列記されているが、この句は他の四句に対して文字の書き方が異なっている。一句の文字の長さが他の四句の上下が一応揃えてあるのに対して、書き始めの文字はほぼ揃っているが句末の文字が二字程度上で終っている。五句が同時に書かれたものではなく、まず、上下揃った四句を書いた後に、その中の一句「入かゝる日も糸遊の名残哉」の「糸遊の名残哉」を消して、「程〻に春のくれ」と推敲してから、初めに書いておいた四句の前に、この「糸遊に」の句を書き加えたのであろう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と見ておられ、妥当な見方と思われる。

『おくのほそ道』室の八島の条では、曾良の言葉として、

此神は木の花さくや姫の神と申て冨士一躰也。無戸室に入て焼玉ふちかひのみ中に火〻出見のみこと生れ玉ひしより、室の八嶋と申。又煙を読習し侍もこの謂也。将このしろといふ魚を禁ず。縁記（ママ）の旨世に伝ふ事も侍し。

と由来が説明されている。境内には今は曲りくねった溝のような小流れがあるだけで、煙のような水蒸気は芭蕉の時代にも既に見るべくもなかったようであるが、歌枕の習いに従って煙を詠んだわけである。従って「煙」は現実の物では恐らくなく、空想の所産であって、それを現実のかげろうと共に表現して「結つきたる」と俳諧にした趣向であろう。ただ句の体をなしているというだけで、『ほそ道』には採られていない。

459

入かゝる日も程ゝに春のくれ　（曾良書留）

入かゝる日も糸ゆふの名残かな　（初茄子）

―雪まるげ・奥細道拾遺

春季（春のくれ）。

語釈　**○入かゝる日も程ゝに**　「入りかゝる日」は、夕暮になって西に傾く太陽をいう。「程ゝに」は、直訳すれば「適当な程度に」ということだが、要するに暮春に相応しく暮れなずむ趣をあらわすのであろう。「柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや　重五　入かゝる日に蝶いそぐなり　荷兮」（『はるの日』）「Fodofodoni.」（『日葡辞書』）。**○春のくれ**　ここは春の末、暮春の意。「行く春」と同義である。日暮時の意に用いられるようになったのは天明以降という。「蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ　重五」（『はるの日』）。

大意　春も末の今日、西に傾く太陽も、それに相応しく遅々として暮れなずむ。

考　曾良の『書留』の室の八島での句を列記した中に見え、最初「入かゝる日も糸遊の名残哉」と書いて「糸遊」以下を抹消し、右傍に「程ゝに春のくれ」と推敲されている。『初茄子』（呉天撰、享保十三年成）には真蹟によるとあるけれども、『書留』の情況で見る限り、初めの句案の後間もなく推敲された筈であって、本位句としては後案を採るのが当然であろう。

文献面からの考察ではそうなるが、「入かゝる日も糸遊の」という句案は、なかなか趣がある。かげろうも日暮れと共に漸く薄れ行く趣を、愛惜の情をこめて描いているので、捨て難い佳句といえよう。楸邨氏が、この句で私の最も惹かれるのは、このかすかにゆらぐ心のありかたを載せた陰微な調べで、消え去りゆく幽かなるものに惹かれる思いを、引きこまれるような細い、低い、呟きにも似た口調で、「入りかかる日も糸遊の」と、詠じ出でているところである。……改作を試みていることからみても迷いが残っていたものであろう。私には惜

しまれてならない一句である。（『芭蕉全句』）

と的確に鑑賞しておられる通りなのだ。また、「いづくにかこよひはやどをかり衣ひもゆふぐれのみねのあらしに」（『新古今集』巻十、定家）の歌や、謡曲「遊行柳」の一節「いづくにかこよひは宿をかり衣日もゆふぐれになりにけり」等が心にあったとするのも従うべきで、「日も」に「紐」を掛けて「糸」と縁語仕立てにしているのである。この初案に比べると、「程ゝに春のくれ」の方は、ゆらめく繊細さが目立たず、却って「たゞごと」に類するような傾きさえ感ぜられる。畢竟まだ句案は未確定のまま放置されたものと見られよう。

……初案の「糸ゆふの名残かな」とすると、糸遊に焦点が合って「入かゝる日」のイメージが薄れる。「程ゝに春のくれ」とすることで、晩春の夕暮の「入かゝる日」のたゆとうさまが表される。（井本博士『松尾芭蕉集1』）

という見方もある。

460 鐘つかぬ里は何をか春の暮 （曾良書留）

雪まるげ・奥細道拾遺

春季（春の暮）。

語釈 **○鐘つかぬ里** 寺で夕方の勤行の相図の鐘をつかない、つまりその音の聞えない村里。「永き日や鐘突跡もくれぬ也　卜枝」（『あら野』巻二）「Caneuo tçuqu.」（『日葡辞書』）。**○何をか** 「何をか頼りとする」「何をか力とする」等の略。ここで切れる。「しら浜や何を木陰にほとゝぎす　曾良」（『続猿蓑』下）。**○春の暮** 前述の如く、基本的には春の末を意味するが、ここでは上の「鐘」との関わりで「春の夕暮」をも思わせ、両意を兼ねた表現になっている。

大意 入相の鐘の音も聞えないあたりの里は、何を頼りに生きているのだろう、春も終りのこの寂しい夕暮に。

考 曾良の『書留』に「室八嶋」と題して芭蕉の句を列記した中に見え、三月二十九日の夕方、鹿沼あたりでの作

と思われる。
春も末の夕暮、入相の鐘の音もないひっそりとしずまった里の景色に、そこはかとない春愁が漂う。せめて鐘の音でも聞えれば、この心細さが救われるのに、という思いから、「里は何をか」という呟きが出て来るのであって、寂しさに耐える支えを里人は何に求めるのかと問う形を取っている。言うまでもなく能因の歌「やまざとの春のゆふぐれきてみればいりあひのかねに花ぞちりける」（『新古今集』巻二）を背景にしており、季節はちがうが、風国の句「夕ぐれは鐘をちからや寺の秋」（『去来抄』同門評）を思わせるところもあるようだ。

曾良書留・雪まるげ・もゝよ草・奥細道拾遺・奥の枝折

田家にはるのくれをわぶ

461　入あひのかねもきこへずはるのくれ　（真蹟色紙）

春季（はるのくれ）。

語釈　○**田家**　「デンカ」。元来は「農家」のことであるが、ここは「農村」「田舎（いなか）」といったひろい意味である。既出（Ⅱ *302* 前書）。○**わぶ**　「侘（わ）ぶ」。わびしく心細く思うこと。（Ⅰ *146*・*215*）参照。○**入あひのかね**　「入相（いりあひ）の鐘（かね）」。「入あひ」は「陽（ひ）の入りあひ」で、日没頃の時間帯を指す。寺で夕方の勤行の相図に鳴らす鐘をいい、日暮時の知らせにもなるのである。「北は金龍寺（こんりうじ）の入相（いりあひ）のかね、八才の宮（みや）の御歌（うた）もおもひ出され」（『好色一代男』巻一）「Banxô. Yriaino cane.」（『日葡辞書』）。○**きこへず**　「聞（きこ）えず」。「へ」は「え」の仮名ちがいである。「今の間に鎚を見かくす橋の上　臥高　大きな鐘のどんに聞ゆる　惟然」（『続猿蓑』上）「Qicoye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**はるのくれ**　これも春の末の意味を基本にして、「入あひのかね」との関わりで「春の夕暮」の意を兼ねる。

大意　この村里は夕暮に入相の鐘の音も聞えず、寂しく春は暮れ行こうとしている。

考　『奥の枝折』（柳条撰、文化十一年刊）には「田家に春の暮をおもふ」と前書があり、「糸遊に」（Ⅲ *458*）以下の句と共

に曾良の『書留』に室の八島あたりでの句として録せられている。
前の条にも引いた能因の「やまざとの春のゆふぐれ」の歌を背景にして、その入相の鐘さえも聞えない侘しい田家のさまをいった句であって、「鐘つかぬ里は」の句の別案と思われる。『もゝよ草』（其流ら撰、寛政九年刊）に那須の高久家所蔵の色紙が摸刻されているが、これは現在出光美術館に所蔵される真蹟色紙と筆蹟・用字・字配り等全く同一であって、摸刻の原物が伝存の色紙と考えてよかろう。能因の歌の背景を別にすれば、余り「たゞごと」に類した表現であるが、これが芭蕉には気に入っていたらしく、これから間もなく訪れる高久の角左衛門方で、色紙を書いて与えたのであった。
『書留』の冒頭に記された「糸遊に」の句以下の数句は、次の「あなたふと」の句も含めて『おくのほそ道』には収められていない。暮春の田園の趣をさまざまの角度から採り上げており、その点『ほそ道』象潟の条で自他の句を五句並べて、多面的にその趣をあらわそうとしたのと似ているが、結局何れも意に満たなかった為に捨てたのであろう。「行く春」の情は「行春や」（Ⅲ457）の句に悉されているとしたのかも知れない。

462 あらたうと青葉若葉の日の光　（おくのほそ道）

雪まるげ

あなたふと木の下暗も日の光　（曾良書留）
日光山に詣

あらたふと木の下闇も日の光　（真蹟懐紙）
日光山にて

たふとさや青葉若葉の日のひかり　（初蝉）

曾良書簡・もゝよ草

日光山登臨之時

あらたふと若葉青葉の日の光　（鏽鏡）

夏季（若葉）。

語釈　**○あらたうと**　「あら尊（たふと）」。ああ尊いことだ。「あら」は感動詞。「たうと」は「たふと」と書くのが正しい。「たふとし」の語幹で、感動を強調する場合、形容詞の語幹だけを提示する語法である。日光という霊地に対する賛仰の意を主とする。「あら尊（たつと）や今日も又紫雲の立つて候ぞや」（謡曲「実盛」）「おがむ気もなくてたふとやけふの月　山蜂」（『続猿蓑』下）「ARA.」「Tŏtoi.」（『日葡辞書』）。**○青葉**　「アヲバ」。夏になって緑濃く生い茂る樹々の葉をいう。『滑稽雑談』に「青葉は雑也」とあり、連歌書の『産衣』も同様なので、元禄頃はなお季を持たなかったと思われる。「目には青葉山ほとゝぎす初がつほ　素堂」（『あら野』巻一）「Auoba.」（『日葡辞書』）。**○若葉**　初夏の新樹の瑞々しい葉をいう季語。既出（Ⅱ 376）。**○日の光**　「日の光（ひかり）」。陽光の輝きをいい、「日光」の地名を掛けた。「むめちるや糸の光の日の匂ひ　伊賀土芳」（『炭俵』上）「Ficariuo fanatçu.」（『日葡辞書』）。

大意　ああ尊いことよ。日光全山の樹々の青葉若葉に、初夏の陽光が輝いている。

考　『雪まるげ』には「日光山」と前書があり、旅中四月下旬に須賀川から出した杉風宛曾良書簡には、「卯月朔日日光」として句を挙げてある。曾良の『書留』では、室の八島での句「糸遊に」の次、「入かゝる」「鐘つかぬ」「入逢の」等の句の前に録せられ、この書きぶりでは室の八島での作と考えざるを得ない。他の句が凡て春季なのに、この句だけが「木の下暗」で夏季なのは、もとより留意しなければならないが、時は春も終りの三月末日であり、室の八島あたりで「木の下暗」の実景もあったろうから、夏の句を詠んでも不思議はあるまい。ところがその後約半月にして、芭蕉はこれを日光参詣の折の句として人に示した。即ち伝存の真蹟懐紙の前書がこの事を明示する。これを紹介した『もゝよ草』に「高久青楓所持正筆写之」とあるから、寛政期に那須の高久に伝わっていた真蹟に拠ったことが分り、元禄二年四月の半ば過ぎに芭蕉が高久の庄屋角左衛門に与えたものと推定されるのである。次いで須賀川から恐らく四月二十六日に杉風に宛てて書かれた曾良書簡も同じ扱いで、句形も真蹟と同様であった（尾形仂氏

「「ほそ道」からの便り」――『芭蕉・蕪村』――参照）。更に『おくのほそ道』執筆の際に、中七が「青葉若葉の」と推敲されて治定したのである。

因みに、初五の異同についても聊か触れたい。『書留』の初五は「あなたふと」で、これを信ずる限り、芭蕉は半月後に高久で「あらたふと」と改めたことになる（尾形氏によれば曾良書簡も同形）。然るに曾良本『ほそ道』に於いては、最初「あなたふと」と書いて、後に朱で「な」を訂正して「ら」に改めており、文献を年代順にそのまま辿れば、あな→あら→あな→あらと推敲されたことになってしまう。今栄蔵氏はこれを不自然として、曾良に「あな」と書きたがる癖があったのではないかと見ておられる（「蕉句句形誤伝考抄」――『中央大学文学部紀要』五十一号）。断定出来る性質のことではないが、「あら」と「あな」はどちらに変えても余り意味のある異同ではなく、今氏のように考えれば、芭蕉は最初から「あらたふと」で一貫していたと見られ、右の複雑な過程が一つに整理されてすっきりする感が深い。「あらたふと」は謡曲の口調を摸した表現であろうが、『謡曲二百五十番集索引』で検索すると、「あら」が四頁にも及ぶ多数の用例を見るのに対して、「あな」は僅々二例に過ぎず、この点からも、この句の冒頭は「あら」であるべきことが傍証されよう。『初蝉』（風国撰、元禄九年刊）の初五「たふとさや」は、真蹟から『ほそ道』への句形の展開に照らして誤伝に違いなく、『鏽鏡』（舎羅撰、正徳二年刊）の中七「若葉青葉の」も孤立した所伝で、信じ難いものである。

日光の条に位置させれば、この句は「日の光」に日光の地名を掛けた挨拶句と受け取れる。しかし、最初室の八島で詠まれたとすれば、日光の地とは関係がなくなり、室の八島の祭神木花咲耶姫神の威徳が、初夏の小暗いまでの樹樹の茂りの中までも光被するといった、かなり観念的な神徳賛美を動機とする句と見られるのである。それが高久で日光参詣の句に転用された段階で、「日の光」の語は日光の地名と密接な関係を持つに到る。この日光に祀られた神霊の威徳が鄙の隅々に到るまで行きわたる趣をいったことになって、観念句である点に変りはない。その内容ゆえに

「木の下闇も」という表現の屈折も必要であった。
　この句の力は、何といっても「木の下闇も」に代えて「青葉若葉の」という中七を得るに到って、はじめて生まれて来たといえよう。曾良の『随行日記』によれば、日光東照宮に詣でた四月一日（陽暦五月十九日）は「止テハ折々小雨ス。終日雲。午ノ尅日光へ着。雨止」という天候だったが、翌二日は「天気快晴」となり、「ウラ見ノ滝・ガンマンガ淵」を見物して廻っている。「青葉若葉の」の句案を得たのは、旅行より数年後の『ほそ道』を執筆した時のことであるが、この陽光燦爛とした日光山の自然のイメージは、二日の見物の際の印象が基になったと思われる。それにしても「日の光」に地名を掛け、「あらたうと」と賛美する基本的な発想は変っていない。「あらたうと」は、日光に祀られる神徳の賛美が第一義なのである。『ほそ道』の文にも、
　卯月朔日御山に詣拝す。往昔此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改玉ふ。千歳未来をさとり玉ふにや。今此御光一天にかゝやきて恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穏なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。
として句を出しているが、ここに見える徳川氏の支配に対する随順の姿勢は、維新以後の国家体制の変革や民主化近代化の立場から、いろいろな批判を招来した。しかし、時代的背景を無視した批判は、さして意義のあるものとも思えない。芭蕉の生きた時代は、民衆の意志が政治権力の基盤になる現代とは異なり、武力を背景にした上からの支配が当然とされた封建時代であって、お上の「御政道」を批判する思想は育ち得ない時代であった。芭蕉自身も権力に対決するような型の人ではなく、俳諧という無用の事を生き甲斐とする世外の隠者である。徳川氏が政権を握ってほぼ百年、長い戦乱の時代が終って、干戈の音を聞くこともなく数十年を経たのだから、権力的支配への不満はそれとして、民衆の間にこの太平の世を有難く思う気持は、おしなべてあったであろう。して見れば、『ほそ道』に記された徳川氏の天下に関する感想は、多くの庶民が抱いていたものと言ってもよい、極く平均的な民衆の所懐だった筈である。その上に立って、芭蕉はこの句で日光という土地へ挨拶を送っているのである。山本健吉氏が『芭蕉その鑑賞

と批評』で、彼がその土地土地の地霊に挨拶して過ぎて行く発想の習いを指摘しておられるのは至当なことと言うべきだろう。

ここでは「あらたうと」という神徳賛美の言葉が、そのまま周囲の大自然を賛美する言葉になっている。続く「青葉若葉」は、濃淡とりどりの山中の新樹のたたずまいを思わせ、極めて効果的な畳語であった。そして、もう「も」のような屈折する措辞ではなくて、「の」で一気に下へ続けて力強い調べを貫徹させる。斯くして森厳な霊地の趣と、深山の旺盛な初夏の大自然が、さんさんと降りそそぐ陽光のもとに展開されるこの句の世界は、壮大の一語に尽きよう。こうした句では、歴史社会的な視点は、所詮片端の問題を照射するに過ぎない。

やどりの松・雪まるげ

463

ほとゝぎすうらみの瀧のうらおもて（誹諧曾我）

日光うら見の瀧

ほとゝぎすへだつか瀧の裏表（杉風宛曾良書簡）

夏季（ほとゝぎす）。

語釈 **○うらみの滝** 「裏見(うらみ)の滝(たき)」。日光三名瀑の一。大谷(だいや)川の支流荒沢川にかかる高さ約四十五メートルの滝である。崖の上下の岩の間の厚さ約二メートルの集塊岩が浸食されてくぼんだ所に、幅一メートル余、高さ二メートル程の人工の道をつけて滝を真裏から見ることが出来たが、明治三十五年上部の岩が崩壊して以来、昔のように裏から見ることは不可能になった。『おくのほそ道』には黒髪山の記事の後に、「廿余丁山を登つて滝有。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て滝の裏よりみれば、うらみの滝と申伝え侍る也」と見える。**○うらおもて** 「裏表(うらおもて)」。「うら」は滝の内側、「おもて」は外側をいう。「元日や夜ぶかき衣のうら表　千川」（『続猿蓑』下）「Vra.」「Vomote.」（『日葡辞書』）。

大意　ほととぎすが滝の表側で鳴いているが、あべこべの滝の内側に居てはよく聞えないのが恨めしい。

考　『やどりの松』（雲鼓撰、宝永二年頃刊）には「日光山に上り、うらみの滝にて」、『雲まるげ』には「廿余町山を登りて滝有。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落たり。名を恨の滝とかや申伝へ侍るよし」とそれぞれ前書がある。前述したように、芭蕉と曾良がこの滝を見物したのは、東照宮参詣の翌四月二日のことであった。曾良の杉風宛書簡は四月下旬須賀川で認められたものなので、「ほとゝぎすへだつか」の句形が旅行当時の初案であることは動かない。板本類は凡て芭蕉歿後のもので、推敲の時期は確定し難いが、「うらみの滝のうらおもて」が後案であろう。

この句、以前の解釈は、「時鳥の声が裏見の滝の裏にも表にも聞えるといふのである。事実滝の裏を時鳥が啼き過ぎたわけではあるまいが、岩洞に身をひそめて居ると、反響が聞えて来たのであらう。とにかく裏表といふので、滝のほとりにあっちでもこっちでも盛んに啼くさまが想はれる」（穎原博士『新講』）というような見方が多かった。これに対して、加藤楸邨氏は「裏見の滝で時鳥の声を耳にしたが、その声が滝の音にまぎれ、あるいは裏から、あるいは表からとも感ぜられ、確かめられぬのが残念だ」と解し、「一羽の瞬間の声なのである。声だけで姿がたしかめられぬ恨み」を、滝の名の「裏見」によせた発想であろう」（『芭蕉全句』）と新解を出しておられる。今栄蔵氏の『芭蕉句集』になると、「裏見の滝の表側で時鳥が鳴いているのに、滝の裏に籠っている自分には思うように聞えぬ。表と裏に食いちがって、なんとも恨めしい次第だ」として「裏表」に「あべこべ」の意を掛けたものという解釈に展開した。初案の「ほとゝぎすへだつか」の形からしても、旧解は否定すべく、滝の音に紛れて時鳥の声がよく聞えないのを恨む意とするのが至当であろう。私が今氏の説に従った所以である。「裏見」に「恨み」を連想するのは自然であるし、この滝が名瀑とされながら日光八景のうちに入っていないのは、「恨み」に通ずるのが忌まれたかと言われる程なのだ。山中に時鳥の啼く情景をリアルに描くのではなく、時鳥の声や姿にあこがれる伝統的な発想に基づく興が中心になっており、「うらみの滝のうらおもて」と同音を畳ねて興じた調子を出している。

464

暫時は瀧に籠るや夏の初

（おくのほそ道）

夏季（夏の初）。

語釈 ○**暫時は** 五音にすべきところだから、「暫時」は「シバラク」と訓むのがよい。「四面新に囲て、甍を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり」（『おくのほそ道』）「Xibaracu.」（『日葡辞書』）。○**滝に籠るや** 「滝に籠るや」。滝の傍に庵や堂を造って一定の期間籠居し、滝に打たれなどして修行するのが「滝に籠る」であるが、ここは裏見の滝の内側に入って見物することをそれに見立てて興じたのである。「や」は、詠嘆。「人去ていまだ御坐の匂ひける　越人　初瀬に籠る堂の片隅　芭蕉」（『あら野』員外）。○**夏の初** 「夏の初め」。「夏」は、仏寺で夏の間僧侶が講経や坐禅に専念する所謂「夏安居」の期間をいう。インドで夏の雨期の間は交通の不便や猛獣毒蛇の危害によって旅に適しないところから起った習慣で、陰暦四月十六日に始まり、七月十五日に終る。この期間に入るのが「結夏」、終るのが「解夏」である。ここはなお十六日以前ではあるが、四月に入って夏季になったので、おおよそに「夏の初」といったのであろう。「寛印鈔云、宣師云、初四月十六日、是前安居、十七日乃至五月十五日名二中安居一、六月十六日名二後安居一。△これらの説のごとく、安居三時に結ぶ。和国にも冬安居とて十月十五日より結ぶもあめれど、安居は偏に夏を以て第一とす。故に、夏の人、一夏籠など、一切夏のうわさ皆夏也。諸書には八日の結夏見え侍らず。只和国におゐて台家八日を用ゆ」（『滑稽雑談』）「てゝつぽう声が高いぞ夏の始」（一茶『七番日記』）。

大意 滝の内側に入って洞窟の中で滝見物をしている。折柄夏安居に入る頃とあって、自分も暫らくの間滝にお籠りをした気分だ。

考 『鳥の道』には「うらみの滝にて」と前書がある。『おくのほそ道』にも前掲のような文の後に出ているが、旅行当時に出来たのは「ほとゝぎす」（Ⅲ463）の句であって、これは『ほそ道』には採録されず、執筆の際に改めて案ぜられたのが「暫時は」の句だったものと思われる。『鳥の道』『雪まるげ』等、所収の書は何れも『ほそ道』乃至曾良

に関係した資料に基づくのであった。井本農一博士は、
　或いは芭蕉は、『おくのほそ道』本文を執筆するに当たり、裏見の滝の条に最初はこの「時鳥」の句を据えていたのではあるまいか。しかし、あとの那須野の条に「野を横に馬牽むけよほとゝぎす」の句を置いたので、ほととぎすの句を近いところに二句掲出するのは拙いと考え、「野を横に」の方は変更できないから、裏見の滝の句を「暫時は」と別案して入れ替えたのではないか。（『芭蕉の文学の研究』）
と見ておられる。断定出来る性質の事ではないが、改めて句案をした背景に、時鳥の句の重出を避けたい気持があった可能性は、かなり高いであろう。
「岩窟に身をひそめ入て滝の裏より」（『ほそ道』）見た芭蕉は、ちょっと類のない体験に心洗われる思いがしたに違いない。その清々しさが「夏の初」という僧侶の静修の時期をあらわす言葉と結びついて句の趣向が出来上ったのだが、だからといって句の内容を余り大真面目にばかり取るのは考え物である。そういう見方は、「此叟は行脚の仏徒にして、夏のはじめ暫時滝に籠る旅体なるべし」（蚕臥『芭蕉新巻』）という説を始めとして、今に至るまで多いけれども、それでは句の俳諧は何処にあるのかよく分らない。一方、「夏籠りの季節をかりて滝みることをかくはいへり。凄涼察すべし」（杜哉『蒙引』）というのは、この句の持つ「興」を感じ取っているらしく、
　彼の裏見の滝は裏へ廻つて覧ることが出来て且つ折節初夏である処より滝の中へ夏籠りするといふ感興を得たのである。芭蕉翁も中々おどけ者ぢや。（鳴雪『評釈』）
という説も、興に重点が置かれている。潁原博士は更に精しく、左のように説かれた。
「しばらくは」といふのに軽い気持が見える。これから一夏九旬の安居を行ひすまさうといふやうな堅い道心ではない。一寸見物にはいり込んだ窟の中で、しばらく夏行を始めた形だなと興じたのである。
　この句を別に深い意に解する説がある。芭蕉は「おくのほそ道」の行脚をみづから一つの夏行と観じ、今裏見

の滝に籠ったのを、行のはじめとよんだのだといふのである。……この裏見の滝の句をそんな風に見るのは従ひ難い。「しばらくは」と上五に置いたところは、どうしても軽く興じた心持が先に立ってゐると思ふ。『芭蕉新巻』に、……「旅体なるべし」といふ着眼は面白い。とにかく旅中思ひがけずも夏に籠つた、さうした出来事が芭蕉にはひどく興深く感ぜられたのだ。しかも曾良の更衣の句（引用者注、「剃捨て黒髪山に衣更」の句を指す）が先にあつた折柄、こゝで夏行を始めるのはますます面白いな、芭蕉がこの句案を得た時には、きつとそんな心持が動いてゐたにちがひない。

珪山の『鬢鬣夜話』には、巻頭にこの句を題して滝の図が掲げてある。それには滝の裏道の傍に、行者の籠堂のやうなものが建つてゐる。勿論それは安永頃の図であるから、芭蕉時代にさうした建物があつたかどうかは明らかでないが、場所柄から考へて見ても小さな堂ぐらゐはあつたかも知れぬ。そして事実そこに籠る行者などもあつたとすれば、芭蕉がそこで「夏のはじめ」とよんだ実感が一層深く味はゝれる。（「奥の細道俳句研究」）

この句については、右にも縷々述べられているように、俳諧的な興を中心に見るのが本当であろう。滝の傍の籠り堂については、『日光山志』（植田孟縉著、文政八年序）巻三にも、「岩下を越えて滝の傍に至る。茲に荒沢不動の石像有て、脇に籠堂あり」とあるというから、若し芭蕉の訪れた時にもあったとすれば、その印象が句案のヒントになったろうことは想像に難くない。芭蕉は実際に滝に打たれたわけではないし、滝を裏から見物したことを面白くいったまでなのである。

465

奈須餘瀬翠桃を尋て

秣おふ人を枝折の夏野哉　（曾良書留）

陸奥鵆・泊船集・蕉翁文集・蕉門録・雪まるげ・奥細道付録・乞食嚢

馬草刈人をしおりの夏野哉　（蕉翁句集草稿）——蕉翁句集

夏季（夏野）。

語釈　**○奈須余瀬**　「奈須」は普通「那須」と書き、今の栃木県那須郡一帯の地をいう。「余瀬」は現黒羽町余瀬。曾良の『日記』に「太田原ヨリ黒羽根へ三リト云ドモ二リ余也。／翠桃宅ヨゼト云所也トテ弐十丁程アトヘモドル也」とあるように、黒羽からは約半里離れた郊外である。**○翠桃を尋て**　「翠桃を尋ねて」。「翠桃」は、鹿子畑氏、名は豊明、通称善太夫。黒羽藩士として四百石を食んだ。鹿子畑家の次男であるが、兄の高勝が出でて家老の家たる浄法寺家を嗣いだ為、豊明が家督を相続した。寛文七年父が事に座して追放され、子の代に赦免されて帰藩後は、本姓を名乗ることを遠慮して岡忠治豊明と称したという。俳諧を嗜んで翠桃（『ほそ道』では「桃翠」）と号し、芭蕉の指導を受けた。既に貞享四年十月芭蕉が西上の旅に出る際に編まれた『句餞別』に餞別の句が見えており、細道の旅で芭蕉が先ずこの人を訪ねたのも、そういう縁故によったものと思われる。元禄二年当時は二十八歳、享保十三（一七二八）年十月二十八日に六十七歳を以て歿した。**○秣おふ人**　「秣負ふ人」。「秣」は、牛馬の飼料にする草。野で草を刈り、それを背負って家へ運ぶのである。牛馬にやる草を指す字は「秣」が正しく、草冠を加えるのは俗字である。「まくさ」は古く「く」を濁らず、『日葡辞書』には「Macusauo cô.」の例があり、近世の『増補下学集』に至るまで清音であって、末期の『和英語林集成』に漸く「Magusa」があらわれる。ここも「まくさ」と清音によむべきであろう。「賀茂・八幡の御領ともいはず、青田を刈てま草にす」（『平家物語』巻八）。**○枝折**　「シヲリ」。道しるべとして木の枝などを折って目じるしにすること。ここでは単に目じるしの意。「彼桃原も舟をうしなひ、慈童が菊の枝折もしらず」（芭蕉真蹟発句「やまなかや」前書）「Xiuori.」（『日葡辞書』）。**○夏野**　夏草の生い茂った原野をいう季語。既出（Ⅰ *167*）。

大意　夏草の茂る那須野は道も定かでなく、漸く秣を背負って行く人を目じるしに、お宅までたどり着きました。

考　「陸奥にくだらむとして下野国まで旅立けるに、那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを尋て深き野を分入る程、道もまがふばかり草ふかければ」（『陸奥衛』『蕉翁文集』）「那須にて」（『蕉翁句集』）「奈須余瀬翠桃亭を尋て」（『雪まるげ』）等の前書がある。曾良の『書留』には、これを発句として翠桃・秋鴉ら黒羽の俳人達と一座した歌仙一巻が記録されており、『陸奥衛』『雪まるげ』も同様である。句は翠桃に対する挨拶句と見えるから、翠桃亭についた四月三日

の作であろう。

初五を「馬草刈」とした異形を伝える土芳の『蕉翁句集草稿』には、

此句、奥の細道になし。猿雖方へ松嶋旅よりの文通に、なすにて人をとぶらふと書て此句有。かの細道に云る羽黒(ママ)の館代浄坊寺何某の事か。白船(ママ)には秣負ふと有、詞書畧之と有。

と述べられており、これによると「馬草刈」の句形は、旅中伊賀の猿雖に宛てて書いた手紙に基づくものと思われる。土芳は『泊船集』を参照しており、「負ふ」の句案を知っていたことは明らかで、『蕉翁句集』も「馬草苅」であるから、杜撰な誤りではあるまい。するとこれは曾良の記録が猿雖宛の手紙より後れる場合には初案となるし、逆の場合には『書留』より後の案である可能性も出て来る。しかし、内容の面からは、刈っている最中では意味を成さず、農夫が刈り終って背負って行くのを旅人がしるべにすることでなければならない。「刈る」よりも「負ふ」の方が表現として遥かに相応しいのである。「刈る」は土芳系の資料のみに見える孤立した所伝であるし、よしんばこれを信ずるにしても、所詮は一時的な気持の動きによる別案と見るべく、本位句としてはやはり『書留』の句形を採るのが穏当と思う。

この句の解は、「夏草の中は何のしるべもなけれど、草かりて背に秣負たる者を枝折にして行と也」（正月堂『師走嚢』）というに尽きる。茫々たる夏草茂る那須野に行き暮れた趣は、『おくのほそ道』の日光から黒羽に至る途中の記述にも見られ、またこの句の『陸奥鵆』の前書にも「深き野を分入る程、道もまがふばかり草ふかければ」とあるのが端的に語っている。それを苦しがったり不安を抱いたりするというより、この句の「人を枝折の夏野」という表現には、そういう道不案内の旅に興じている趣が見え、其処がこの句の俳諧の眼目になっているのである。眼の限りの夏野の遠くに動く「秣おふ人」の影。足許は見えないが、其処には当然道がある筈なのだ。木の枝ではない人間自体を「枝折」にして歩む旅人の姿も含めて、一切は一幅の画中の景であろう。ただ、そういう画趣をこの句から酌み取るだけ

では足りない。これは当然翠桃亭到着の際の挨拶吟として詠まれたものに違いなく、だからこそ当地での歌仙の発句にも成ったのだ。挨拶の意に触れているのは、発句の注釈に関するものでは今氏の『芭蕉句集』だけのようであるが、これは見逃してはならぬ点であろう。本書の［大意］は、挨拶句としての意味を含んだものにしてある。

たてよこの五尺にたらぬ草の戸をむすぶもくやし雨なかりせば
とよみ侍るよし兼て物がたりきこへ侍るぞ、見しはきゝしに増りてあはれに
心すむばかりなれば

466 木啄も庵は破らず夏木立　（二川氏蔵真蹟懐紙）

尾形氏紹介真蹟懐紙・曾良書留・おくのほそ道・芭蕉庵小文庫・鳥の道・泊船集・伊達衣

夏季（夏木立）。

語釈　**○たてよこの……雨なかりせば**　芭蕉の禅の師仏頂和尚の詠歌。『おくのほそ道』では、第三句が「草の庵」となっている。「縦横の広さが五尺にも足らない小さな草庵を結ぶことさえも不本意なことだ。雨が降りさえしなければ、こんな庵も結ばないで済まそうものを」の意。「五尺（ごしゃく）」は、約一メートル五十センチの長さ。「草の戸」は既出（Ⅲ *452*）。「くやし」は、自己の境涯が本意に反して不満な心情をいう。「なかりせば」は、実際には存在しない状態を仮想する場合の前提条件法。下に「結ばざらましを」といった言葉が略されている。「十三夜／影ふた夜たらぬ程見る月夜哉　杉風」（『あら野』巻一）「主簿峰に菴を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず」（「幻住庵記」）「古歌にいはく、けふ見ずはくやしからまし花ざかり咲きものこらず散りもはじめず」（謡曲「鞍馬天狗」）「二人の子供なかりせば、老木の松は雪折れて此身の果は如何ならん」（謡曲「唐船」）「Tateyoco.」「Ixxacu, nixacu.」「Tari, ru, atta.……Gojŭni taranu.」「Iuoriuo musubu.」「Cuyaxij.」（『日葡辞書』）。**○よみ侍るよし**　「詠（よ）み侍（はべ）る由（よし）」。（仏頂が）詠みましたということを。「松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ」（『猿蓑』巻二、曾良発句「松島や」前書）「墓の前に桜植置侍るよし、かねぐ〳〵母の物

がたりつたへて」(『猿蓑』巻四、園風発句「まがはしや」前書)「Vtauo yomu.」「Yoxi.」(『日葡辞書』)。○**兼て物がたりきこへ侍るぞ** 「兼ねて物語り聞え侍るぞ」。「兼て」は「予て」の宛字。以前に、以前から、の意。「物がたりきこへ侍る」は、仏頂がその詠歌のことを芭蕉に話したことをいう。「きこへ」は「きこえ」の仮名ちがい。「聞ゆ」は本来「言ふ」の謙譲語で、「申し上げる」ことであるが、この場合仏頂は芭蕉の目上だから、それでは合わない。芭蕉は「聞ゆ」を尊敬語と誤解していたらしく、『ほそ道』で仏頂の詠歌に触れた一段にも「岩に書付侍りといつぞや聞え玉ふ」と、「おっしゃる」意に使っている。ここも「言ふ」の尊敬語としての用例と見られよう。「侍る」も「給ふ」を用いる方が良い。「ぞ」は係助詞。後続の文に終止がないので、結びは消えている。「兼て耳驚したる二堂開帳す」(『おくのほそ道』)「Aracajime.i, Canete.」「Monogatariuo suru.」(『日葡辞書』)。○**見しはきゝしに増りて** 「見しは聞きしに増りて」。百聞は一見に如かずなのである。「げにや名にしおふ都に近き宇治の里、聞きしにまさる名所かな」(謡曲「頼政」)「Masari, u, atta.」(『日葡辞書』)。○**あはれに心すむばかり** 「あはれに」は、深く感動するさま。「心澄む」は、気持がしずまって、煩悩を超越した状態になることをいう。「佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ」(『おくのほそ道』)「Sumi, u, unda.」(『日葡辞書』)。○**木啄** 「キツ、キ」。キツツキ科の鳥の総称。森林に棲み、堅くとがった嘴で木の幹をつついて中に居る虫を食べる。繁殖期は五、六月頃で、巣穴も自ら樹幹に掘る。秋の季語であるが、この句は「夏木立」が中心なので、季語にはならない。「宿かし鳥の便さへ有を、木つゝきのつゝくともいとはじなどそゞろに興じて」(『幻住庵記』)。○**庵は破らず** 「庵は破らず」。草庵を壊しはしない。[考]の条で述べるように、物部守屋の亡霊が木つつきと化して四天王寺を破壊したという伝説を背景にした表現である。「坊舎ノ甍ヲ破テ、カヒ楯ニカケル計也」(『太平記』巻七)「Yaburi, ru, utta.」(『日葡辞書』)。○**夏木立** 夏に樹々が枝を伸ばし、葉を繁らせて群立つさまをいう季語。既出(I 44)。

大意 寺をつつき破ったという木つつきも、この庵ばかりは壊さなかったと見える。夏木立の中に静かなたたずまいだ。

考 尾形仂氏が攝津池田文庫蔵昭和十五年三月の三楽荘他売立目録の所掲として写真版を紹介された、本位句の底本とは別の真蹟懐紙には、「雲岸寺(ママ)のしりへなる山の木隠たる石のうへに、膝入るゝばかりなる草室□□/たてよこの五尺にたらぬ草のとを/むすぶもくやしあめなかりせば/とよみて、仏頂禅師のこもらせ給ふ御跡とかや。いまだ

遠き事にもあらざりければ、さすがに庵もあれはてざりければ」と前書があり、これら二つの真蹟は黒羽での染筆と見られている（栗山理一博士編『芭蕉・蕪村・一茶』所収）。従うべきであろう。本位句の底本は、下野烏山出身の早野巴人（蕪村の俳諧の師）伝来の物という。その他の前書としては、「四月五日奈須雲岩寺に詣て、仏頂和尚旧庵を尋」（『曾良書留』）「雲岸寺のおくに仏頂和尚の山居／竪横の五尺にたらぬくさのいほ／むすぶもくやし雨なかりせば／松の炭して岩にかきつけ侍しといつぞや聞え給。そのあと見むとて雲岸寺に杖を引ば、人〳〵すゝんでともにいざなひ、わかき人おほく、道の程うちさはぎて、おぼえずかの梺にいたる。山はおくある気色にて、谷道はるかに松杉くろく、蘚したゞりて、卯月の空今猶寒し。十景つくる所、橋渡りて山門に入る。扨かのあとはいづくの程にやと、うしろの山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禅師の死関、法雲法師の石室を見るがごとし」（『鳥の道』）「仏頂禅師の庵をたゝく」（『芭蕉庵小文庫』『泊船集』）「雲光寺仏国禅師旧跡」（『伊達衣』）等があり、このうち『鳥の道』は『ほそ道』の本文と略々同じである。この書は『ほそ道』の公刊以前にその内容の一部を世に紹介したものとして知られるが、素龍清書本を所持していた去来を通じてその内容を知ったのであろう。須賀川の等躬の編んだ『伊達衣』の前書は、杜撰な誤りに過ぎない。

芭蕉は四月三日に余瀬の翠桃亭に着いてから同十六日に立つまで、黒羽との間を往来して、家老浄法寺図書を始めとする黒羽藩士達の歓待を受ける。この間雲岩寺を訪問したのは、曾良の『日記』によれば四月五日であって、『書留』所載の前書の日付とも一致するから、句はこの日に成ったものと推定してよい。この寺は黒羽町字雲岩寺東山にある臨済宗の古刹で、芭蕉参禅の師仏頂ゆかりの寺でもあるので訪れたのである。なお、『ほそ道』曾良本では、句の中七を最初「庵はくらはす」と書き、「くらはす」を見せ消ちして右傍に「やふらす」と改めている。旅行当時の『書留』が「破らす」だから、芭蕉は『ほそ道』の草稿段階で一時「くらはず」という句形を案じたことになろう。しかし結局又もとに戻して「やぶらず」で治定したのである。

句は鬱蒼たる夏木立の中に木つつきの鋭い啼き声を思わせ、そうした自然環境の中にひっそりと立つ今は主の無い草庵を描き出している。潁原博士は「奥の細道俳句研究」に於いて、この句の「夏木立」に余り働きがなく、当季の詞を必須とする形式的条件を満たす道具立てに過ぎないと見ておられるが、果してそうであろうか。「山はおくあるけしきにて、谷道遥に、松杉黒く苔したゞりて、卯月の天今猶寒し」（『ほそ道』）と描かれた幽邃な雲岩寺の情景や気分は、この語あってこそ読む者に生き生きと感得されるのだと思う。それに季節ちがいの木つつきを取り合わせたのもこの句の発見の一つで、実際に啼く音を聴いたか、案内の人などにこの鳥の多いことを聞いたか、その辺は如何様にも考えられるが、兎に角この配合が趣向の中心になっている。そしてこの鳥には、聖徳太子に滅された物部守屋（もののべのもりや）の怨霊が化して四天王寺の塔をつつき破ったので「寺つつき」と称するという伝説が付き物になっているのである。これは『滑稽雑談』啄木鳥の条に『和名抄』の「てらつゝき」の名を挙げ、

天王寺年中法事記云、守屋大臣が霊魂悪鳥と成て、天王寺の仏閣を破損す。太子大鷹を現じて悉く追散らす。いまの啄木と云鳥は是也。○藻塩草云、たくみ鳥、是てらつゝきの事と云々。△和俗てらつゝき、又けらつゝきなどいへり。寺つゝきは守屋が魂の説に似たる名也。此者四時来れども、殊に蠹を食の事、夏秋の間に多し。

と季語の解説として述べている程で、これから見ると「庵は破らず」という趣向は芭蕉の独創ではなく、この伝説は「啄木」に常に付帯していたものと思われる。按うに、木の中の虫をつつくところから出た「けらつつき」の名が訛って「てらつつき」となり、このような伝説に付会されるに至ったのではあるまいか。実際に鳥の音を聞いたかどうかはさて置き、実境ではなくとも「啄木」は案じ得た筈で、それを思い得れば「庵は破らず」の趣向は直ちに出て来るであろう。ここにこの句の俳諧があり、四天王寺のような大廈を破壊した悪鳥さえ、この小さな庵を破らなかったということを以て、仏頂の徳化の偉大さを賛仰することにもなる。別案の「くらはず」は『撰集抄』巻二ノ二「青蓮院真誉法眼之事」の条の「心からくらはし山の世をわたり問はんともせず法の道をば」という歌を踏まえるという説

があって、その可能性もないではなく、俳諧味も強調されるけれども、何か古怪でグロテスクな気分が濃く、結局捨てられたのであった。なお、曾良は雲岩寺で「物いはで石にゐる間や夏の勤」(『書留』)の句を得ている。

秋鴉主人の佳景に對す

467　山も庭にうごきいるゝや夏ざしき

浄法寺圖書何がしは、那須の郡黒羽のみたちをものし預り侍りて、其私の住ける方もつきぐ〵しういやしからず。地は山の頂にさゝへて、亭は東南のむかひて立り。奇峯亂山かたちをあらそひ、一髪寸碧繪にかきたるやうになん。水の音、鳥の聲、松杉のみどりもこまやかに、美景たくみを盡す。造化の功のおほひなる事、またたのしからずや。(曾良書留)

秋鴉主人の佳景に對す

山も庭もうごきいるゝや夏座敷　(雪まるげ)

――奥細道拾遺

夏季(夏ざしき)。

語釈　**○秋鴉主人**　「シウアシュジン」。「秋鴉」は黒羽藩の家老浄法寺図書高勝の俳号。五百石を食み、桃雪とも号した。翠桃の兄に当り、「蓏おふ」(Ⅲ465)の条に記したように、鹿子畑氏から出て浄法寺家を継いだ人である。享保十五(一七三〇)年六月十四日歿、享年七十。「主人」は家の主人の意で、風流人の呼称の一種。坪内逍遥を「春廼舎(はるのや)主人」という類である。「尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのといふ」(芭蕉『あら野』序)「Xujin.」(『日葡辞書』)。**○佳景に対す**　「佳景(かけい)」は、浄法寺図書の屋敷の庭や、其処から見渡せる山野の佳(よ)い景色をいう。それに向き合って眺める意。「岸をめぐり岩を這て仏閣を拝し、佳景寂寞として心

すみ行のみおぼゆ」（『おくのほそ道』）「地は富士に対して、柴門景を追てなゝめなり」（「芭蕉を移詞」）「Caqei. Yoqi qei. …… Caqei nagamuruni acazu.」「Taixi, suru, ita. i, Mucô.」（『日葡辞書』）。○**庭にうごきいるゝや**　「庭に動き入るゝや」。直訳すれば、あたりの山が動いて、秋鴉亭の庭に自らを入れるようだ、というのである。「いるゝ」は、自動詞であるべきところに他動詞を用いた自他同用の例であろう。［考］参照。「朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋」（『炭俵』上）「月影にうごく夏木や葉の光り女可南」（『炭俵』上）「蝨の笘屋に膝をいれて雨の晴を待」（『おくのほそ道』）「Niua.」「Vgoqi, qu, ita.」「Ire, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**夏ざしき**　「夏座敷」。庭に面して風通しの良い夏向きの座敷。日本家屋は古く板敷が主で、畳を敷き詰めた「ざしき」が現われるのは、比較的新しい時代である。『日葡辞書』には「Zaxeqi. i, Zaxiqi.」とあって、「座席」と同じ意としている。「行雲をねてゐてみるや夏座敷　野坡」（『炭俵』上）。○**浄法寺図書何がし**　「浄法寺図書何某」。「図書」は官名から出た武士の通称。『ほそ道』に「黒羽の舘代浄坊寺何がし」とあるのは正しくないが、意識的な変改かも知れない。「何がし」は、態とおぼめかした表現である。既出（Ⅱ*267*前書）。○**那須の郡黒羽**　「那須の郡黒羽」。現栃木県那須郡黒羽町。「鐙摺・白石の城を過、笠嶋の郡に入れば」（『おくのほそ道』）「Couori.」（『日葡辞書』）。○**みたち**　「御館」。藩主の居館。当時の藩主は大関信濃守増恒（石高一万八千石）であったが、僅か四歳の幼年だった為、江戸下谷湯島天神下の屋敷に起居して、国許には居なかったという。「我らのまいる御たちはこれで御ざるが」（狂言「餅酒」）「Tachi.」（『日葡辞書』）。○**ものし預り侍りて**　「ものし」は「物す」の連用形。さまざまの事をすることを婉曲にいうので、意味は場合によって異なる。ここは「みたち」を管理し、いろいろ差図することをいった。「預る」も、主のない「みたち」を責任者として管理することである。「まづいそぎておほかたの事どもをものせよといふ」（『源氏物語』松風）「弥ゝ奉公仕り、重て御領をあづかりけり」（『沙石集』巻九）「Azzucari, u, atta.」（『日葡辞書』）。○**其私の住ける方**　「其の私の住みける方」。浄法寺図書の私生活用の屋敷。公的な「みたち」に対していう。「私に」となっていないのは、「住ける方」を一語と意識している為と思われる。この私宅へ芭蕉と曾良は迎えられたのである。「此言がきに、私の家にてと書かれたれば」（謡曲「定家」）「住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」（『おくのほそ道』）。○**つきぐしういやしからず**　その地位や人柄にふさわしく卑しいところが無い。ここを書いている時、芭蕉の頭には『徒然草』の「家居のつきぐしくあらまほしきこそ、かりのやどりとはおもへど、興あるものなれ」（第十段）の一節があったであろう。「みかへれば白壁いやし夕がすみ　越人」（『はるの日』）「Iyaxij.」（『日葡辞書』）。○**地は山の頂にさゝへて**　「地は山の頂に支へて」。敷地が山の頂にあったことをいう。「さゝふ」は、通れないように塞

ぐ意から展開して、その場所に頑張っている、存在しているという程の意に用いたようである。この「山」は小さな丘であろう。「するがの国にあなる山のいたゞきに、もてつくべきよし仰給」（『竹取物語』）「Yamano itadaqi.」「Sasaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○亭　即ち図書の住む家。「亭（てい）」の語は既出（I *217* 前書等）。○**東南のむかひて立り**　「東南（とうなん）の向（むか）ひて立（た）てり」。家が東南に向って立っている、の意。「東南の」については、「東南を」が前のn音と連声で「の」になったとする説が有力である。「東南を向ふ」という言い方は聊か異例であるが、「……を向く」と同一視したのかも知れず、結局「東南に向ひて」と同じことになる。「東南より海を入て江の中三里、浙江の潮をたゝふ」（『おくのほそ道』）「こゝは所も西の海に向ふ難波の春の夜の」（謡曲「難波」）「Tônan. Figaxi, minami.」「Mucai, ǒ, ǒta.」（『日葡辞書』）。○**奇峯乱山かたちをあらそひ**　「奇（き）峯（ほう）乱（らん）山（ざん）形（かたち）を争（あらそ）ひ」。「奇峯」は、珍しい形をした山。「乱山」は、高低入り乱れて重なり合う山々。それら黒羽から見渡せる山々が、宛かもその姿を競っているかのように表現した。「高山奇峰頭の上におほひ重りて」（『更科紀行』）「いなば山後にたかく、乱山（西）両に重りて、ちかゝらず遠からず」（「十八楼ノ記」）「いろ〳〵のかたちおかしや月の雲　端水」（『あら野』巻六）「柳桜の錦を争ひ」（芭蕉『あら野』序）「Ranzan, Midareta yama.」「Catachi.」「Arasoi, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○**一髪寸碧**　「イッパッスンペキ」。髪の毛一筋のような僅かな碧（みどり）。蘇東坡の詩句「青山一髪是中原」（「澄邁駅通潮閣」）、韓退之と孟郊の「城南聯句」の「遥岑出㆓寸碧㆒」等から出た表現である。○**絵にかきたるやうになん**　下に「侍る」が略されている。○**松杉のみどりもこまやかに**　「松杉（まつすぎ）の緑（みどり）も濃（こま）やかに」。「松杉黒く、苔したゞりて、卯月の天今猶寒し」「松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて」（『おくのほそ道』）「Sugui.」「Yamamo nobemo midorini naru.」「Comayacani.」（『日葡辞書』）。○**美景たくみを尽す**　「美景工（びけいたくみ）を尽（つく）す」。造化の技を尽した美しい景色だ、の意。自然を創造した者を考え、その技を「たくみ」といったのである。「美景」は既出（I *187* 前書）。「あるは山を穿、石を刻て、巨霊が力、女媧がたくみを尽して」（芭蕉真蹟発句「其玉や」前書）「Tacumi.」「Teuo tçucusu.」（『日葡辞書』）。○**造化の功**　「造化（ぞうくわ）の功（こう）」。「造化」は、天地間の万物を創造した者、造物主。中国の道家系の思想に基づく。その業績が「功」である。「山野海浜の美景に造化の功を見」（『笈の小文』）「Renmano cô.」（『日葡辞書』）。○**おほひなる事**　「大（おほ）いなる事（こと）」。「ひ」は「い」の仮名ちがいである。既出（I *113*）。○**またたのしからずや**　「亦（またたの）楽しからずや」。それもまた楽しいではないか。「ずや」は、相手に同調を呼び掛ける語法。『論語』冒頭の孔子の語の一節「有㆑朋自㆓遠方㆒来、不㆓亦楽㆒乎」（朋（とも）有り遠方より来る、亦楽しからずや）が頭にあったであろう。「Tanoxij.」（『日葡辞書』）。

大意 風通しのよいこの夏座敷に居てあたりを眺めていると、山の緑が目のあたりに迫って、まるで山自体が動いて庭に入って来るようです。まことにさわやかですな。

考 『奥細道拾遺』（莎青撰、延享元年刊）には「秋鴉亭にて」と前書がある。その他の前書も凡て同じ趣であり、浄法寺図書の屋敷に招かれた時の吟であることは疑いない。挨拶吟とすれば初めて訪ねた四月四日の作となろうが、『芭蕉全句集』（乾裕幸・桜井武次郎・永野仁三氏共編）は、『書留』の記載順を考慮して、五日の雲岩寺引杖後、七日の「田や麦や」の句が成るまでの間の成立と見ており、ここでもその見解に従う。

語法的に問題なのは中七の「うごきいるゝや」で、自動で一貫すれば「動きて入るや」、他動で一貫すれば「動かし入るゝ」とでもあるべきところを、自他が混用されているのである。句の言いたいことは、青葉の山が目の前に迫って、夏座敷から眺める庭に入り込んで来そうな趣をあらわすことであって、緑したたるばかりの旺盛な広い大自然の眺めを把握するにあったと思う。それを、

そこばくのさゝげものを木のえだにつけて、だうのまへにたてたれば、山もさらにだうのまへにうごき出でたるやうになん見えける。

という『伊勢物語』七十七段の表現を踏まえた趣向にしたのである。何で「入る」が「入るゝ」となったのかは、「入るや」ではかなり弱いので、やはり語勢の力を重視した為おのずからそうなったのであろう。「暑き日を海にいれたり寂上川」（Ⅲ 505）の初案「涼しさや海に入れたる最上川」と同様で、文法的には「山が（自らを）入れる」と説明し得る場合なのである（志田義秀博士『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』参照）。これによって山の緑が眼前の庭に迫って来て一つになろうとする趣が生かされることになる。なお、「うごき」の主体は「山」で、「いるゝ」の主体は「夏ざしき」と見る説は、余り分析的に過ぎて却って力が失われるし、「うごき」の主体として「風」を考える説も賛成し難い。もし風を主語とすれば「風が山をも動かし入れる」という形になって、「山」は目的語に過ぎなくなり、これまた句の力は

失われよう。「山も」が主語であって始めてこの句の力は生まれるのである。
この句は曾良の『書留』が世に知られる以前は、『雪まるげ』の「山も庭も」の形が信ぜられ、これによって解釈鑑賞がなされて来た。『書留』が知られてから後も、たとえば加藤楸邨氏は、
……「山も庭に」の形だと、山がいわゆる借景となって、眼前の庭園に一脈の生動感を与えているという意になり、意味は通じやすくなるが、「山も」の「も」が十分生きず、また「庭」と「夏座敷」が二元的に分裂して、言いとめた気息が乏しくなる。おそらく『書留』の形が初案で、後「山も庭も」に改めたものと見てよいであろう。（『芭蕉全句』）
と述べておられ、他にも同様の立場をとる注釈が見られる。しかし、『雪まるげ』はこの句に関する限り、『書留』以外に原拠があったとは思われず、そうとすれば「庭も」は何処から出て来たのか不審とせざるを得ない。これは恐らく『雪まるげ』の誤りとおぼしく、芭蕉は「山も庭に」以外にどんな句形も案じたことはなかったのであろう。『芭蕉翁句解参考』に初五を「山も海も」とし、「松島辺秋鴉亭（ママ）なれば海勿論也」などとする僻説は論ずるに足らぬ。図書の屋敷の庭に借景として山が見渡せる趣を言ったことは確かで、その翠色を賞して挨拶句としたのであった。夏座敷から眺められる庭のさまであることは一見して明らかで、「庭」と「夏座敷」が分裂するということはなく、何れも必須の言葉である。満目の緑に初夏の自然の力が生き生きと描かれ、「夏座敷」の涼味に挨拶の気持をこめた、スケールの大きい佳句といえよう。

しら川の關やいづことおもふにも、先秋風の心にうごきて、苗みどりに、むぎあからみて、粒〲にからきめをする賤がしわざもめにちかく、すべて春秋のあはれ月雪のながめより、この時はやゝ卯月のはじめになん侍れば、百景一つをだに見ことあたはず。たゞ聲をのみて筆を捨るのみなりけらし　――安達太郎根

468　田や麦や中にも夏時鳥(ママ)　（曾良書留）

田や麦や中にも夏のほとゝぎす　（雪まるげ）

田や麦や中にも市の時鳥　（奥細道拾遺）

麦や田や中にも夏はほとゝぎす　（もゝよ草）

夏季（時鳥）。

語釈　**○しら川の関やいづことおもふにも**　「白川(しらかは)の関(せき)や何処(いづこ)と思(おも)ふにも」。「しら川の関」は、古く東山道の奥州と下野の境に置かれた関所で、勿来(なこそ)の関・念珠(ねず)ヶ関と共に奥州三関の一として著名な歌枕。今の福島県白河市にあり、後の句の条で触れるように、古関と新関の二つがあった。「白河」と書くのが普通であるが、昔は「川」を宛てる例も珍しくない。『おくのほそ道』冒頭の一節に、「春立る霞の空に白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ」とあり、ここの文章の書き出しを見ても、北へ向う芭蕉の関心の第一がこの歌枕だったことは明らかである。「関やいづこ」と未知のあこがれを述べるのも、『ほそ道』白河の関の条の始めに「心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ」とあるのに照応している。「春霞たてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ」（『古今集』巻一、よみ人しらず）「Xeqiuo suyuru.」「Izzuco. P.」（『日葡辞書』）。**○先秋風の心にうごきて**　「先(ま)づ秋風の心に動(うご)きて」。能因の有名な歌「みやこをばかすみとともにたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき」（『後拾遺集』巻九）を心に置いた表現。白河の関に思いを馳せるにつけて、先ずこの歌が念頭に浮ぶというのである。「おばすて山の月見

ん事しきりにすゝむる秋風の心に吹さはぎて」（『更科紀行』）。**○苗みどりに**　「苗緑に」。稲の苗が緑の芽を出している苗代のさまをいう。「杉村の花は若葉に雨気づき　怒誰　田の片隅に苗のとりさし　泥土」（『ひさご』）「Naye.」（『日葡辞書』）。**○むぎあからみて**　「麦赤らみて」。夏に入って麦が熟し、とりいれる頃になったさま。所謂「麦秋」である。「行駒の」（I *246*）参照。「汁の実にこまる茄子の出盛て　沾圃　あからむ麦をまづ刈てとる　里圃」（『続猿蓑』上）「Qinomiga acaramu.」（『日葡辞書』）。**○粒〳〵にからきめをする賤がしわざ**　「粒〳〵に辛き目をする賤が仕業」。米の一粒一粒を作るのに辛い思いをする農民の作業。唐の李紳の「憫農」の詩句「誰知盤中飧、粒粒皆辛苦」（誰か知らん盤中の飧、粒粒皆辛苦なるを）を踏まえた表現である。「賤」は既出（I *5*）。「鋸にからきめみせて花つばき　嵐雪」（『炭俵』上）「あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出つればおもしろく」（『徒然草』十四段）「Carai meni vô.」「Xiuaza.」（『日葡辞書』）。**○めにちかく**　「目に近く」。絶えず目につく、見慣れる、の意。「世のつねの山のたゝずまひ、水のながれ、めにちかき人の家ゐありさま」（『源氏物語』帚木）。**○すべて**　「総べて」。全体に、凡そ。「すべて山居といひ、旅寝と云、さる器たくはふべくもなし」（「幻住庵記」）「Subete.」（『日葡辞書』）。**○春秋のあはれ**　「春秋」は、春と秋。「あはれ」は、人を感じさせること一切を含む。要するに「四季の趣」である。「秋のあはれいづれかく〳〵の中に、月を翫て時候の序をえらばず」（『炭俵』下、龝之部注記）「Auare.」（『日葡辞書』）。**○月雪のながめより**　「月雪の眺めより」。「月雪」は、風雅な秋と冬の自然の代表。既出（II *269*）。「より」は、……を始めとして。「百景一つをだに……」へ続く。「菜の花の畦うち残すながめ哉　清洞」（『あら野』巻二）「Nagame cotonaru yûbe.」（『日葡辞書』）。**○この時**　芭蕉がこの文章を書いている現在の時節。以下、「はじめになん侍れば」まで挿入句。**○やゝ卯月のはじめになん侍れば**　「漸卯月の初めになん侍れば」。漸く四月の初めという頃なので。「やゝ」は、時が移ってやっとその時になったという気持をあらわす。「卯月のはじめ」は夏に入る陰暦四月の初旬。「なん」は係助詞だが、下が「侍れば」で結びが消えている。「かつみ刈比もやゝ近うなれば」（『おくのほそ道』）「卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ」（「幻住庵記」）「Vzzuqi.」（『日葡辞書』）。**○百景一つをだに見ことあたはず**　「百景一つをだに見ること能はず」。夏以外の多くの美しい景色の一つをさえ見ることが出来ない、の意。「百景」は既出（I *187*）。「余は皆俤似かよひて、其糟粕を改る事あたはず」（『笈の小文』）「Atauazu.」（『日葡辞書』）。**○声をのみて**　「声を呑みて」。押し黙ったさま。悲しみの情を背景にした表現である。「偸ニ葬礼ヲ致テ、隠レ悲呑レ声　イヘ共」（『太平記』巻二十二）「Coyeuo nomu.」（『日葡辞書』）。**○筆を捨るのみなりけらし**　「筆を捨つる」は、書くのをやめること。既出（I *187*前書）。「らし」は、語調をやわらげる為に添えた。

これまた既出（Ⅱ*269*）。**○田や麦や**　苗代田や麦畑。周囲の田園風景をいう。**○中にも**　「中にも」。多くの物の中から一つを取立てていう。「中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武蔵野ゝ古き栖もおもひいでられ」（「幻住庵記」）「Nacanimo.」（『日葡辞書』）。○**夏時鳥**　「夏」と「時鳥」の間に「の」か「は」を脱したのであろう。

大意　白河の関近いこのあたりでは、秋風の趣を味わいたいのだが、季節がちがってはそれも出来ぬ。しかし、青々と早苗の育つ田や黄色に熟した麦畑、如何にも初夏らしい田園風景の中でも、時節に相応しい時鳥の一声は特に印象が深い。

考　『もゝよ草』に「右は浄法寺桃雪亭にての吟也」と付記があり、『安達太郎根』にも、浄法寺家にその真蹟を蔵する由が見えるが、今原物は伝わらない。曾良の『書留』には、句の後に「元禄二孟夏七日　芭蕉桃青」とあり、四月七日に浄法寺図書の屋敷で句文が成ったことが知られる。四日以来十日まで図書の屋敷に滞在していたのである。

芭蕉の真蹟を写したと思われる曾良の『書留』に脱字がある為に、句形を確定し難い。常識的には「の」を補った『雪まるげ』の句形が穏やかであるが、これは恐らく真蹟を見ての事ではなく、『書留』の脱字を推定によって補ったまでであろう。一方、『もゝよ草』には句の後に、「右は浄法寺桃雪亭にての吟也」とあり、『安達太郎根』にも「館代浄法寺何某は翁にしたしき友迚、麦や田や中にも夏はほとゝぎすと書残したる有りて」と伝えていて、これらは真蹟を見ている可能性が高い。初五を転倒した点が信憑性を傷つけているけれども、「中にも夏は」と時鳥を取立てて強調することは妥当な措辞であるから、真蹟には「夏は」とあったと考える方がよいかも知れぬ。「中にも市の」という異形は根拠が明らかでなく、これに従った『一葉集』に「仙台にて」と前書があるのも信じ難い。

『書留』に録する前書は文脈の一貫しない所があって分りにくいが、白河の関が近づくにつけて、春秋等の趣深い景色が見たいのに、今は初夏で見ることを得ないのを遺憾とする趣旨と思われる。「田や麦や」という発句の初五は、前書の「苗みどりに、むぎあからみて」を承けており、眼前の田園風景をいったものである。その環境の中で時鳥の

声をきいたわけで、夏の季物の第一としてその音を賞する気持を中七以下で述べたのであろう。
白河の関で能因法師が「秋風ぞ吹く」と詠んだのに、今は四月で苗代には稲が緑に、畑には麦が赤らんで秋風の吹く白河の景色とは全く違っている。秋のあわれを今は見ることもないが、夏の景物としてほととぎすが啼き過ぎるのがせめてもの心に沁みる景色である。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）
という解が要を得ている。表現がなお熟さず、そのまま手を入れることもなかった不出来の句である。

469　夏山に足駄を拝む首途哉　（おくのほそ道）

夏山や首途を拝む高あしだ　（曾良書留）

黒羽光明寺行者堂

夏季（夏山）。

語釈　○**夏山に**　「夏山（なつやま）」は、樹々の葉の鬱蒼と繁った緑濃い山の趣をいう季語。「に」については、「夏山に於いて」と取る説と、「夏山に対して」と取る説があるが、私は前者を採る。［考］参照。「夏山（なつやま）〔郭熙書譜〕夏‐山蒼翠如レ滴（ハサウスヰニシテシンタヽルガ）」（『俳諧歳事記栞草』）「夏山や木陰〳〵の江湖部屋　蕪葉」（『あら野』巻八）。○**足駄を拝む**　「足駄（あしだ）を拝（をが）む」。「足駄」は、下駄の類の履物。近世では、樫または欅の、特に高い二枚の歯を入れた高足駄を雨降り等の悪路に用いた。ここは役行者（えんのぎょうじゃ）の像の履いている高足駄を指す。「此里に古き玄番の名をつたへ　芭蕉　足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人」（『あら野』員外）「Axida.」（『日葡辞書』）。○**首途**　「カドデ」。門出（かどで）の義。我が家を出発して旅に出ること。出立する前、吉日を選んで仮に家を出ることも行われ、これも「かどで」といった。『日葡辞書』は「カドイデ」が本来の言い方であるとしている。「ひと日芭蕉旅行の首途に、やつがれが手を携へて再会の期を契り」（素龍『炭俵』序）「Cadode, l, cadoide yoi, l, axij.」（『日葡辞書』）。

大意　緑したたる夏山で行者の履いた足駄を拝み、健脚を祈って心も新たに首途をすることだ。

考 曾良の『日記』に「九日光明寺へ被招、昼ヨリ夜五つ過迄ニシテ帰ル」とあり、『書留』にある「夏山や」の句の成ったのは、黒羽滞在中四月九日のことと知られる。即成山光明寺は武家修験の寺で、余瀬の翠桃の家の東南二、三丁の小高い丘の上にあり、室町期の永正頃から修験道の寺となったが、創建は鎌倉期にさかのぼると伝えられる。住持は代々津田氏が勤め、芭蕉が訪れた当時の住持津田源光の妻は、秋鴉・翠桃兄弟の同胞だったという（井本農一博士『奥の細道をたどる』）。寺は明治初年に廃絶した。その境内にあった行者堂には、修験道の開祖役行者の木像が祀られていたのである。『ほそ道』には、

修験光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拝す。

として「夏山に」の句があり、それより前に、

黒羽の舘代浄坊寺（ママ）何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜語つゞけて、其弟桃翠など云が朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて親属の方にもまねかれ、日をふるまゝに、……

とあるのも、光明寺に招かれたことを頭に置いた表現であろう。

句の「夏山」は、一見して光明寺境内の蒼翠滴るばかりの樹々の茂りを思わせる。井本博士は、

……寺址の背後にちょっと登って北方を眺めてみる。層々と連なる奥羽の山々が遥かに見渡される。それが「夏山」であるに相違ない。……たしかに芭蕉は、ここから北方の山々を眺め、あゝあの山々を越えて行くのだなと覚悟を新にし、この修験道の寺の高足駄をはいた役の行者の像を拝んだに相違ない。（『奥の細道をたどる』）

と見ておられ、「夏山」が境内の趣ではなくて、其処から遠望される八溝山脈の山々などであるとすれば、「に」は「……に於いて」ではなくて「……に対して」の意をあらわす用法となろう。そういう「に」は、「昼顔に米つき涼むあはれ也」（I 157）等、芭蕉にも例がないわけではなく、その方が句のスケールも大きくなるので、こうした見方をとる説が多く、私も嘗てはそれに傾いていた。しかし改めて考えて見ると、この句の「に」をそのように見るのはかかな

り不自然であって、素直に誦すれば「……に於いて」の意で何等差支えないのではあるまいか。小高い丘の上の寺の「夏山」の趣を先ず冒頭に出して、その行者堂で「足駄を拝む」と続くのは極く自然であろう。旅行当時の『書留』の句形が「夏山や」と打ち出したのも、夏山がその場の景だからこそだったのだと思う。私は右のように見て、「夏山」をはるかな行く手の峯々をさすと考えるのは、「夏山に」の「に」を現代風にとった考え方に過ぎよう。また、山伏の「春山」・「秋山」に対して「夏山」といったとするのも穿ち過ぎであろう。霊場たる夏山で、その新緑の木立にかこまれての意ととるべきである。（『芭蕉全句』）

という加藤楸邨氏の説に賛同したい。

この句の俳諧の眼目は、中七の「足駄を拝む」にある。役の行者を祀った行者堂の知識なしに卒然として句に対すれば、何の事とも分らないけれども、前書なり『ほそ道』のような説明文によって、その事は納得が行く。もはや白河の関も近く、奥羽の山野を踏破するのに、行者にあやかって健脚を願う気持を籠めたおかしみなのである。しかも、それに続く「首途哉」の語は明るい緊張感を漲らした表現であった。既に「首途」は江戸で済ました筈だが、奥州の地を眼の前にして、芭蕉は改めて「前途三千里のおもひ」（『ほそ道』）を胸にかみしめたに違いない。その心勢いが「首途哉」の力強い下五に現われており、それは上にも反響して、「足駄を拝む」を単なるおかしみに終らせていないのである。楸邨氏が「真面目な祈りの心」をこの句に見ておられるのも、その辺りに味到されたからであろう。決してつまらない句ではなく、佳句といってよいと思う。行者堂では曾良も「汗の香に衣ふるはん行者堂」の句を残している。

『書留』の句形も一句の体をなしてはいるが、「首途を拝む」が分りにくく、妙な言い方である。『ほそ道』執筆の際に推敲されて、句の姿が一段と引き立った。

ばせをに靏繪がけるに

470 靏鳴や其聲に芭蕉やれぬべし（曾良書留）

鶴の賛

鶴啼や其聲芭蕉やれぬべし（雪まるげ）——奥細道拾遺

秋季（芭蕉）。

語釈 **○ばせをに靏絵がけるに** 「芭蕉に靏絵がけるに」。芭蕉の樹と鶴を画いた絵に次の句を賛したことをいう前書である。「絵がけるに」は「絵がける絵に」の意。「ゑがきしに」（Ⅲ*454*前書）参照。「芭蕉」の字音は「ばせう」が正しいが、慣用として「ばせを」と書くことが多い。「靏」は「鶴」の俗字。既出（Ⅱ*254*）。**○靏鳴や** 「靏鳴くや」。**○其声** 「其の声」。**○芭蕉やれぬべし** 「芭蕉破れぬべし」。芭蕉の樹の大きな葉が破れてしまうだろう。「破る」は「破る」と同じ意味の下二段自動詞である。「ぬべし」は、「きっと……するだろう」の意。植物の「芭蕉」（Ⅰ*134*）は秋の季語。「芭蕉 妹也。……いかにしても尤物なれば耳に立べし。……心ばせをばなど立入てすべし。それも妹の季をば持べし。……季をもたぬ句とは、植物の芭蕉の噂ならぬ恋の句などの事也」（『御傘』）「豆腐つくりて母の喪に入　野水　元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉」（『冬の日』）「Yare, l, yabure, ruru, eta.」（『日葡辞書』）。

大意 絵の中の鶴が一声鳴いたら、その声で芭蕉の葉は破れてしまうだろう。

考 『奥細道拾遺』には「靏の絵賛」と前書がある。『書留』では黒羽滞在中の作を録した中に「サン」と頭書きして出ており、黒羽で画賛として案ぜられた句であった。井本農一博士は、『曾良書留』欄の書き方からいって、多分光明験寺で鶴の絵を描き、賛句にこれを書いたのであろう。……『曾良書留』には黒羽の光明験寺の二句「汗の香に」「夏山に」を記した後、四月十六日に着いた高久の宿の句の前

に「鶴鳴くや」の句を記しているし、四月九日は光明験寺に招かれていて、黒羽滞在中であった。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と見ておられる。『雪まるげ』に曾良の作とするのは誤りで、『書留』に「翁」とあるのを見逃したのであろう。その句形も杜撰に過ぎない。

鶴と芭蕉の樹を描いた絵に賛した句である。所謂「鶴の一声」で、その声は鋭く品格が高い。一方、芭蕉は「破れ芭蕉」などと言い習わされ、芭蕉自身も後年庵の樹について、

其葉七尺あまり、或は半吹折て鳳鳥尾をいたましめ、青扇破て風を悲しむ。……唯このかげに遊て、風雨に破れ安きを愛するのみ。（「芭蕉を移詞」）

と述べているような特色がある。絵に興じた即妙の作意を賞すべき句であろう。季節は当季でなく、画中の芭蕉によって秋になっている。山本健吉氏は、

秋鴉の風雅を鶴に見立て、その清澄さに芭蕉自身の及びがたいという謙遜の気持を述べたのであろう。この「芭蕉」には芭蕉自身を寓していると見るべきだろう。だがこれも表現不足で真意をはかりがたい句である。（『芭蕉全発句』）

と見ておられるが、前書に絵の内容を紹介しているのだから表現不足ということはなく、そういう絵に興を発したと見ればよいことである。また、浄法寺図書（秋鴉）の描いた絵かどうかは徴すべき資料がないし、こういう形で彼に与えたという証拠もない。図書は当時二十九歳、一藩の館代という身分はあるにせよ、俳諧は趣味に過ぎない全くの素人である。それに芭蕉が及ばぬとは、謙遜にしても当を失している。山本氏の見方は所詮考え過ぎであろう。

471 野をよこにむま引むけよほとゝぎす（真蹟句切）

真蹟短冊・俳諧勧進牒・猿蓑・我が庵・おくのほそ道・許六宛去来書簡・陸奥鵆・篇突・泊船集・俳諧問答・旅寝論・蕉翁文集・芭蕉盥・もゝよ草

夏季（ほとゝぎす）。

語釈 **○野をよこに** 「野を横(よこ)に」。那須野を北へ馬に乗って進んで行く芭蕉から見て横の方角、即ち、ほととぎすの声の聞える方に、というのである。「ほとゝぎすどれからきかむ野の広き　柳風」（『あら野』巻一）「霧にふね引人はちんばか　野水　たそがれを横にながむる月ほそし　杜国」（『冬の日』）「**No.**」「**Yoco.**」（『日葡辞書』）。**○むま引むけよ** 「馬引(むまひ)き向(む)けよ」。「むま」は、マ行音の前に唇を結んで発する音をあらわす発音に忠実な仮名遣である。「梅」を「むめ」と書くのと同じ。馬の首をほととぎすの声のする方に引き向けよと馬子に呼び掛けたのである。「**Fiqimuqe, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。

大意 ほととぎすの声がする。馬子よ、この進み行く野を横に、声のする方に馬の首を引き向けよ。

考 「奈須(ママ)のゝはらにて」（『俳諧勧進牒』）「行旅」（『陸奥鵆』）「那須の原はる〳〵と行ほど、其さかひにしる人ありければ、馬にて送られけるに、口付のおのこいかゞおもひけん、一句仕てゐさせよなむどいへば、おかしく興ありてことにおもひて、矢立さしぬらして馬上において書遣す」（『蕉翁文集』）等の前書があり、『おくのほそ道』にも黒羽と雲岩寺の条の後に、

是より殺生石に行。舘代より馬にて送らる。此口付のおのこ、短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと、

として、この発句を録している。曾良の『日記』によれば、芭蕉が黒羽を立ったのは四月十六日のことで、その日の記事に、

一　十六日　天気能。翁舘ヨリ余瀬へ被立越、則同道ニテ余瀬を立。及昼図書弾蔵ゟ馬人ニ而被送ル。馬ハ野間

と云所ヨリ戻ス。

とあり、「弾蔵」が誰を指すか不明ながら、浄法寺図書が馬と人（「口付のおのこ」）をつけて送らせたことは事実である。出光美術館現蔵の馬上の芭蕉と馬子を描いた許六の絵の上にこの句の懐紙切を貼付した幅があるが、それに付属する金沢の五菱（希因の弟）の闌更に宛てた譲り状に、

此野をよこにの一軸は、則奥のほそ道にきこへし馬の口とりしおの子にあたへ給ひし真跡なり。万子これをたづねもとめて、許六に其時の旅すがたをうつさしめて家珍とはなし申されしを、元禄のすへ秋湖に伝り侍る。

云々と見える。これによると、細道の旅中芭蕉に会ったことのある加賀藩士の蕉門生駒万子が、恐らく『ほそ道』を読んで那須野での一件を知ったのであろう、態々その人を尋ね出して譲り受け、許六に絵を描かせて珍蔵したのであった。その後の伝来も明らかであって、本書で底本とした真蹟が即ち那須野で馬子に書き与えた原物なのである。今一つの真蹟短冊は、元禄四、五年頃の書風と見られ、以下この特異なエピソードも手伝って諸書に引用されて有名になった。曾良の『日記』によれば、余瀬から野間（現那須郡黒磯町）までの間に作られたわけである。

俳諧などに関心のありそうもない馬子から句をせがまれて、芭蕉は心を動かした。句は馬上で案じた即興で、馬子のやさしい風雅心への挨拶の気持が籠められている。「ほとゝぎす」は折柄の季物であって、実際に声を聞かなくてもよいが、その一声を慕う気持は、詩歌の世界の伝統的な発想だった。「野をよこに」は自分の進んでいる向きからは横に当る方角で、その方に馬首を向けよと命令した形である。これが興じた気持の弾みを如実にあらわすと共に、「野をよこに」で広漠とひろがる那須野と仰ぎ見る天空の大きなイメージが把握される味わいは何とも言えない。許六がこの上の十二文字について、同じ芭蕉の「木がくれて茶つみもきくや時鳥」の句を引合に出しつつ、「右両句、十二字の間てにはよく廻れば、連続して幽玄也」（『篇突』）と表現に即して鑑賞しているのもその通りであるが、「むま引むけよ」の命令調には、大将気取りの趣向があることも見逃してはなるまい。既に古注に於いて、

是那須野の原にての句也。仕立は、野を横に馬引むけよと軍出立のごとくことぐしく云立たるは、彼昔三浦・上総の両介が那須野の狐狩の故事を含て、我も其如くして、郭公に馬引むけよと、一句の仕立、所がら相応の作也。（正月堂『師走嚢』）

という鋭い指摘があった。『ほそ道』黒羽の条には、

……ひとひ郊外に逍遥して犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。与市扇の的を射し時、別しては我国氏神正八まんとちかひしも此神社にて侍と聞ば、感応殊しきりに覚えらる。

と書かれており、芭蕉は「那須野で、昔の鎌倉武士たちのイメージで頭を一杯にした」（山本氏『全発句』）のだし、これから目指す殺生石も、退治された玉藻の前が化したといわれるものである。昔の矢叫びの声が響くような那須野で、芭蕉の気分が昂揚する方向は知るべきであり、「ほとゝぎす」自体も啼いて血を吐くといわれる鳥であった。「むま引むけよ」が「軍出立」の趣向であることは確かだと思う。更には、謡曲「殺生石」との関係を重視して、『殺生石』の本文には、……犬追物の由来を説く前文に、玉体に近づいた玉藻前が調伏されて、「飛ぶ空の雲居を翔り海山を越えてこの野に隠れ住む」と記されている。また、そもそも、この舞台の始まりは、ワキが那須野に着いたところ、殺生石の上に鳥が落ちるところで女との対話が始まる。芭蕉が玉藻前のイメージを、より正確にはヴィジョンを鳥として脳裡に描いていたことは、芭蕉の言葉、謡曲の言葉に即する限りごく自然であるし、哀音と悲劇的な伝説を持つ「ほとゝぎす」はまた、悪と悲劇のないまぜになった玉藻前の霊にふさわしい。「ほとゝぎす」がこのように理解されれば、「野を横に馬引き向けよ」という芭蕉は、さしずめ犬追の三浦の介上総の介などに扮したことになろう。（『猿蓑発句鑑賞』）

という森田蘭氏の見方も面白い。即興吟として思いつきの趣向でありながら、読者の想像を多面的にかき立てるこの

句は、やはりすぐれた作と称してよかろう。なお古注には、「思ふべき雲井ならねばほとゝぎす駒引きむけてしたふ声かな」という歌を踏まえたとする説が多く見えるが、この歌の出典は明らかでなく、歌形・作者もいろいろに伝えられるので信じ難い。誰かが捏造した胡乱な素姓のものではあるまいか。

みちのく一見の桑門同行二人、那すの篠原をたづねて、猶殺生石みむと急ぎ侍る程に、あめ降出ければ、先此ところにとゞまり候

472　落くるやたかくの宿の郭公　（長谷川氏蔵真蹟懐紙）

下野國高久角右衛門（ママ）が宅にて

落て來る高久の里のほとゝぎす　（かんこ鳥塚）

続蕉影余韻所収真蹟懐紙・曾良書留・雪まるげ・奥細道拾遺・乞食嚢・雪の薄・奥細道付録・もゝよ草

夏季（郭公）。

語釈　**○みちのく一見の桑門**　「陸奥一見の桑門」。奥羽地方を一通り見ようとする僧。「みちのく」は「道の奥」の約で、陸奥、磐城・岩代の諸国を指すが、出羽も含めて今の東北地方を漠然ということが多い。「桑門」は僧侶のこと。「此度思ひ立ち、みちのくの果までも修行せばやと思ひ候」（謡曲「錦木」）「諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御かし候へ」（謡曲「八島」）「いかなる仏の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順礼ごときの人をたすけ玉ふにや」（『おくのほそ道』）。**○同行二人**　芭蕉と曾良の旅を共にする二人連れをいう。二人は共に剃髪して「桑門」の姿であった。もとは巡礼が笠の裏に書き付ける言葉で、仏様と二人連れの意。既出（Ⅱ*360*前書）。**○那すの篠原**　「那須の篠原」。背の低い笹の生えた那須野一帯を広く指す語であったが、後にはその中の一部を指すことになった。今の黒羽町蜂巣の北西部に篠原の地名があり、建久四（一一九三）年源頼朝が那須野で狩をした中心地域と見られる。曾良の『日記』四月十二日の条に「図書被見廻、篠原被誘引」とある「篠原」も恐らく同じ地で、これが『ほそ道』では「ひとひ郊外に逍遥して犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ」という記述になったのである。犬追物の跡も右

の蜂巣の地にあり、篠原の玉藻稲荷の近くには、金毛九尾の狐の伝説がある狐塚が今も存する。黒羽でのこれらの見聞がこの辺りの文の背景にあることは明らかであろう。○**猶**「ナホ」。更にその上に。「猶眺望くまなからむと後の峰に這のぼり」(「幻住庵記」)。○**殺生石みむと急ぎ侍る程に**「殺生石見むと急ぎ侍る程に」。「殺生石」は、那須町湯本の温泉街の北、湯川沿いの丘陵斜面にある二メートル四方程の安山岩の巨石。あたりは南北約百五十メートル、東西約五十メートルの地熱地帯で、火山性の噴気ガスと酸性の温泉水が湧出している。これに近づく人畜蝶虫に害を及ぼすので、例の金毛九尾の狐が此処で三浦の介らに退治されて石に化したという伝説を生じた。「急ぎ候程に赤坂の宿に着きて候」(謡曲「烏帽子折」)「**Xexxŏ. Iqimonouo corosu.**」「**Isogui, u, oida.**」(『日葡辞書』)。○**あめ降出ければ**「雨降り出でければ」。「雨ふりいでゝ所せくもあるに」(『源氏物語』末摘花)。○**先此ところにとゞまり候**「先づ此の処に留まり候」。一先ず此処(句中の「たかくの宿」)に逗留することにしました、の意。「往来の僧を供養し給ふぞや。さらば留まり申すべし」(謡曲「水無瀬」)「**Soro, i, sôrô.**」(『日葡辞書』)。○**落くるや**「落ち来るや」。ほととぎすの声についていう。○**たかくの宿**「高久の宿」。那須岳の南東麓、那珂川と余笹川に挟まれた、今那須町の高久甲・高久乙・高久丙と呼ばれる地。正保以来原街道の問屋が置かれ、元禄期には芭蕉の泊った高久角左衛門が問屋を勤めていた。「宿」は宿場・馬次。「馬のとをれば馬のいなゝく　冬文　さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉」(『あら野』員外)「**Xucu.**」(『日葡辞書』)。

大意　さすが高久の宿だけあって、ほととぎすの一声が高い空から落ちて来ることよ。

考　本位句の底本とした真蹟懐紙は、岡田利兵衛氏の『芭蕉の筆蹟』に長谷川吉三郎氏蔵として見えるもので、『もゝよ草』に摸刻されたものの原物である。曾良の脇「木の間をのぞく短夜の雨」を記した後に「元禄二年孟夏」と年記があり、曾良も『書留』に写している。これと用字が異なるのみで同じ内容の真蹟懐紙が『続蕉影余韻』に収められているが、この方の年記は「元禄二年初夏」とあり、その外、『雪まるげ』『奥細道拾遺』『雪の薄』(眠郎撰、安永六年刊)等は前書に小異がある。曾良の『日記』四月十六日の条に、「高久ニ至ル。雨降リ出ニ依滞ル。……宿角左衛門。図書ゟ状被添」とあり、十八日午の刻に角左衛門方を立っているから、真蹟はその間の染筆と推定されよう。『かんこ鳥塚』(寸長撰、明和九年刊)の異形は、真蹟によるといふけれども信じ難く、杜撰な誤伝と思われる。

句は「高久」という地名にかけて、ほととぎすの声を「落くる」と言い倣した即興吟である。「郭公深き嶺より出

にけりとやまのすそに声のおちくる」(『新古今集』巻三、西行。「御裳濯川歌合」にも所収)の歌は当然思い合わされていようし、加藤楸邨氏は『芭蕉全句』で、謡曲「殺生石」の間狂言に「(狂言)御急ぎ候程に、那須野の原に御着きにて候。あら落ちるわく。(ワキ)何事を申すぞ。(狂言)さん候。あの石の上に飛鳥が落ち申し候間、不審に存じ候」とある一節を指摘しておられる。真蹟の前書自体が謡曲仕立てであり、この一節が句の発想に強く影響したとしても不思議はない。『おくのほそ道』全体の構想が、謡曲によく出る諸国一見の僧に芭蕉自身を擬する趣向を基本にしていることは常識になっているが、そういう発想が旅中の早い段階で既に見えることは注目すべきであろう。

温泉大明神ノ相殿ニ八幡宮ヲ移シ奉テ、雨神(ママ)一方ニ拝レサセ玉フヲ

473 湯をむすぶ誓も同じ石清水 (曾良随行日記)

陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集・雪まるげ・奥細道付録

夏季(石清水むすぶ)。

語釈 ○**温泉大明神** 「ユゼンダイミヤウジン」。今の栃木県那須郡那須町湯本の温泉(おんせん)神社のこと。那須岳の中腹、標高約九百メートルの処にある。祭神は大己貴命(おおなむちのみこと)と少彦名命(すくなひこな)。古くは「温泉神社(ゆのじんじゃ)」といったが、中世以来「ゆぜん大明神」の名で呼ばれ、今も温泉(ゆぜん)神社と通称される。この地方に勢力のあった那須氏の氏神として、各地に分祀された社の総社の地位を占めており、言うまでもなくあたりに湧く温泉に因む神社である。『平家物語』巻十一、那須与一の条によれば、屋島の合戦で扇の的を射た与一は、矢を放つ前に「南無八幡大菩薩、我国の神明日光権現、宇都宮・那須のゆぜん大明神、願くはあの扇のまゝなかゐさせてたばせ給へ」と、この社に祈誓を籠めている。『おくのほそ道』では、黒羽の金丸八幡に詣でて「与市扇の的を射し時、別しては我国氏神正八まんとちかひしも此神社にて侍と聞ば、感応殊しきりに覚えらる」と書いているが、実は与一が祈ったのは金丸八幡ではなく、那須湯本の温泉神社の方であった。「**Daimeôjin.**」(『日葡辞書』)。○**相殿** 「アヒドノ」。同じ社殿に二柱以上の神を合祀すること、またその社殿そのもの。「アヒデン」ともいう。「されば、そさのをの尊は、つしまのごづてんわうなり。いなだひめはあひどのにて、

うつくしのごぜんと申す」(『東海道名所記』四)。**○八幡宮ヲ移シ奉テ**　「八幡宮」は、誉田別命を指す。『正一位那須温泉神社略記』に「相殿ニ八幡大神ヲ祭ル。是誉田別命也」とあり、地元では那須与一が勧請したと伝える。「移シ奉テ」は、他処から神霊をお移しして祀ること。「翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ」(「幻住庵記」)「とりぐ〵なりし神霊をうつすや神代の跡すぐに」(謡曲「弓八幡」)「Vtçuxi, su, ita.」「Tatematçuri, ru, utta.」(『日葡辞書』)。**○雨神一方に**　「両神一方に」。「雨」は「両」の誤り。前記の祭神三柱を指す。正確には「三神」とあるべきであるが、大己貴・少彦名の古い二神を一つと見ているのである。「一方」は「一所」と同じ。二つの神が同じ所で。**○拝レサセ玉フヲ**　「拝マレサセ玉フヲ」。人々から拝まれていらっしゃるのを、の意。「拝む」のは芭蕉や曾良を含む人々であり、「サセ玉フ」は祭神に対する敬語だから、「レ」は尊敬ではなく、受身の助動詞と考えざるを得ない。日本語としては妙な語法であるが、芭蕉は『笈の小文』の伊賀新大仏寺の条でも、「丈六の尊像は苔の緑に埋て、御ぐしのみ現前とおがまれさせ給ふに」と同じ言い方をしている。**○湯をむすぶ**　「むすぶ」は、手で掬う意。参詣の前に御手洗で手や口を清めるが、この温泉神社では、所柄それが温泉の湯なのである。「むすぶ」は下の「誓」と縁語になる。「ころびたる木の根に花の鮎とらん　野水　諷尽せる春の湯の山　旦藁」(『はるの日』)「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふの風やとくらむ」(『古今集』巻一、貫之)「YV.」「Mizzuuo musubu.」(『日葡辞書』)。**○誓**　「誓ひ」。神仏にかけて約束すること。ここは「祈り」と同じ意味である。「誓あまたの神祭、出雲の国を尋ねん」(謡曲「大社」)「Chicaiuo suru.」(『日葡辞書』)。**○同じ石清水**　「岩清水」は、京都府綴喜郡八幡町にある石清水八幡宮を指す。祭神がやはり誉田別命なので「同じ」といい、岩間から湧き出る清水の意をかけて上の「湯」に対し、夏の季語とした。「清水　雑也。結ぶといへば夏なり。せくも夏なり。只水を汲は雑也。只水を結ぶも、汲と同事にて雑也」(『御傘』)「泉は結ぶともせくともいはずして夏也。清水は詞に意釈なければ雑になるはいかゞ。或師云、歌の題にも泉とは侍る、清水とはなし。清水は泉のうはさなるべし。泉と云題歌に、皆清水結ぶと続るにてしるべし。さらし井も、季持、もたぬの両説侍る。是も泉の類なれば、詞の会釈なくても夏といふ説よろしといへり」(『滑稽雑談』)「こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮　その望の日を我もおなじく　ばせを」(『冬の日』)「仁和寺にある法師、年よるまで石清水ををがまざりければ、心うく覚えて」(『徒然草』五十二段)「嫭に猫手さすがごとし岩清水　重頼」(『名取川』)「Vonaji, l, Vonaji coto.」「Iuaximizzu.」(『日葡辞書』)

大意　温泉大明神に詣でるとて、温泉の湯を掬んで手や口を清め、神に祈りをささげるが、石清水八幡と同じ八幡宮

なので、清水を掬ぶも同じこと。神はひとしく納受なさろう。

考　「那須温泉」（『陸奥鵆』）「那須の温泉」（『泊船集』『蕉翁句集』）「温泉大明神の拝殿に八幡宮を移し奉りて、両神一方に拝れ給ふ」（『雪まるげ』）等の前書があり、『雪まるげ』のそれは曾良の『日記』によったものであろう。四月十八日に角左衛門と共に高久を立った芭蕉と曾良は、午後三時頃那須湯本の五左衛門方に着いた。『日記』の翌十九日の条には、

朝飯後、図書家来角左衛門ヲ黒羽へ戻ス。午ノ上尅湯泉へ参詣。神主越中出合、宝物ヲ拝。与一扇ノ的躬（射）残ノカブラ壱本、征矢十本、蟇目ノカブラ壱本、檜扇子壱本、金ノ絵也。正一位ノ宣旨・縁記（ママ）等拝ム。夫ゟ殺生石ヲ見ル。宿五左衛門案内。以上湯数六ヶ所。上ハ出ル事不定、次ハ冷、ソノ次ハ温冷兼、御橋ノ下也。ソノ次ハ不出、ソノ次温湯アツシ。ソノ次湯也ノ由、所ノ云也。

とあって、その次に冒頭に掲げた句文を出しており、この句は十九日に成ったことと明らかである。

由緒ある神社、それも扇の的の那須与一所縁の社だから、源氏の信仰篤かった八幡宮が合祀されているとあって「石清水」を案じ、夏の季を持たせた。更に温泉の湧く所柄、「湯をむすぶ」と俳諧にして「清水」と対照し、「むすぶ誓」と言い掛けた技巧的な句である。参詣の時御手洗に「湯をむすぶ」ことが実際になくても、この場合は俳諧の興として許されるであろう。此処の神橋の下手の谷間には、曾良の記録した六箇所の湯、即ち行人湯・鹿の湯・御所湯・滝の湯・中の湯・川原湯が並んでいたという。神に対する法楽の句という意識が強く、現代人の歯には合わない類の句である。

陸奥衛・泊船集・伊達衣・蕉翁句集・奥細道付録・もゝよ草

474　石の香や夏草赤く露あつし（曾良随行日記）

夏季（夏草）。

語釈 ○**殺生石**　既出（Ⅲ472前書）。○**石の香**　「石の香」。殺生石周辺の火山性噴気ガスの臭いをいう。○**夏草赤く**　「夏草赤く」。あたりに茂った夏草が熱気の為に赤黄色になったさま。「夏草の袂や野辺に土用干　宗尭」（『毛吹草』巻五）「肌寒き始にあかし蕎麦のくき　惟然」（『続猿蓑』下）「Acai.」（『日葡辞書』）。○**露あつし**　「露熱し」。草に置く露が地熱に熱せられるのである。

大意 殺生石のあたりには鼻をつく臭いが漂い、夏草は赤枯れて、露も熱い。まことに荒涼とした景色だ。

考 梨一の『奥細道付録』（安永頃）には「殺生石にて」と前書があり、『陸奥衛』『泊船集』『伊達衣』『蕉翁句集』の前書は曾良の『日記』と同様である。前の「湯をむすぶ」の句の条に『日記』の文を引いた通り、十九日に温泉神社に参詣した後、その裏山にある殺生石を見に行っており、その時の吟なのである。『もゝよ草』に中七を「夏草赤し」と伝えているのは杜撰に過ぎない。

高久での「落くるや」の句の前書にも見えるように、那須の湯本まで来た芭蕉の目的は殺生石を見ることであった。金毛九尾の狐の伝説が絡み、謡曲にも採り上げられていたからであろう。『おくのほそ道』には、

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒気いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほどかさなり死す。

と見え、芭蕉の足跡を辿った桃隣の『陸奥衛』にも、

殺生石　此山間割レ残りたるを見るに、凡七尺四方、高サ四尺余、色赤黒し。鳥獣虫行懸り度〳〵死ス。知死期ニ至リては、行逢人も損ず。然る上、十間四方ニ囲て、諸人不入。辺の草木不育、毒気いまだつよし。

とあって、その状を窺うことが出来る。

本来臭いなど無い筈の石が臭いを発し、緑なるべき夏草も赤く、冷かるべき露も熱い。異常で物すさまじい石のあたりの景色を、物に即して感情を混えずに描いているところ、芭蕉の作句一般とはちがった味わいである。半田良平氏は、

初五の『石の香や』は、視覚を伴つた嗅覚印象を叙べた句である。中七の『夏草赤く』は純然たる視覚印象に即いた句である。座五の『露暑し』は、視覚印象から導かれた触覚印象を現はした句である。この嗅覚から視覚にうつり、視覚から触覚に移つて行く叙述過程は、極めて巧みである。（『芭蕉俳句新釈』）

と見ておられる。それはそれとして、異常な事物を写した句にしては、調べが落着き過ぎて力に乏しい。作者もその点を感じていて、『ほそ道』には採らなかったのではあるまいか。

475　**田一枚植て立去る柳かな**（おくのほそ道）

鳥の道・泊船集

夏季（田植）。

語釈　**○田一枚植て**　「田一枚植ゑて」。「一枚」は、田の一区画をいう。田植は夏の季語。「凡自此月尾至六月首苗種生長。民間称苗代。為植之先抜之。謂早苗取。農民男女混雑再挿苗。是称田植。女子種苗者謂小乙女。各〻揚音歌。是曰田歌。或児童撃大鼓而勧之。凡種苗在半夏生日之前。其内蚤種曰早。中曰中手。遅種曰奥手」（『日次紀事』五月条）「按に、昔は種を蒔て稲米を出す。中古の民二月に下種、苗代として、五月に苗を挿む。是を田植といへり。和漢相同じ」（『滑稽雑談』）「一枚は月夜になりて田植哉　恒丸」（『発句題叢』）「Tauo tçucuru.」（『日葡辞書』）。**○立去る柳**　「柳」は、芦野（現栃木県那須郡那須町芦野）にある遊行柳を指す。その柳の木の下を「立ち去る」のは芭蕉。柳は春の季語であるが、ここでは季語としては働かない。「人〻の契も昔にかはらず、猶このあたり得立さらで」（『芭蕉を移詞』）「Tachisari, u,

atta.」(『日葡辞書』)。

大意 遊行柳の陰で昔をしのんでいると、何時の間にか早乙女は田一枚を植え終っていた。思わず時を過したと、心を残しながら其処を立ち去ったことだ。

考 『鳥の道』は「清水ながるゝのやなぎは、あし野ゝさとに有て田の畔に残る。此所の郡司戸部某の、此柳見せばやなと折〳〵にの給ひ聞へたまふを、いづくの程にやと思しを、けふ此柳の陰にこそ立寄侍りつれ」と、『ほそ道』と殆んど同じ文を前書にしている。『泊船集』には「奥州しら河の関こえて」と前書があるが、遊行柳は白河の関より手前だから、見当ちがいと言わざるを得ない。曾良の『日記』には四月二十日の条に、

芦野ゟ白坂ヘ三リ八丁。芦野町ハヅレ、木戸ノ外、茶ヤ松本市兵衛前ゟ左ノ方ヘ切レ、八幡ノ大門通リみゆ。左ノ方ニ遊行柳有。

とあり、この日の朝湯本を立った二人は、小屋村・漆塚を経て芦野に赴いてこの柳を見たのであった。但し、句は曾良の『日記』や『書留』に見えず、『ほそ道』以前の資料がないので、旅行当時ではなく、『ほそ道』執筆の時に作られた可能性が高い。

芭蕉が『ほそ道』でこの柳のことを「清水ながるゝの柳」と書いているのは、西行の歌「みちのべにしみづながるゝやなぎかげしばしとてこそたちとまりつれ」(『新古今集』巻三)にゆかりのある柳と信じたからである。この歌は「題しらず」とあって『山家集』にも収められず、何処で作ったものか分らない。芦野の里の「朽木の柳」をこの詠歌と結び付けたのは謡曲「遊行柳」の趣向で、芭蕉はこの曲が頭にあったから、この柳と西行の歌が分ち難く結び付いていたのである。芭蕉と江戸で親交のあった芦野民部資俊(『ほそ道』の「此所の郡守戸部(こほう)某」俳号桃酔)は三千十六石の旗本で、この芦野が釆地であったが、この柳を見せたいと折々語っていたという。西行に因む柳とあって、芭蕉も何時かはとあこがれていたのを、漸くこの旅で見ることが出来たのである。「いづくのほどにやと思ひしを、今日

此柳のかげにこそ立より侍つれ」（『ほそ道』）という一節には、その感慨が籠っている。
　句の表現のうち、「田一枚植て」と「立去る」のつながり方が一見分りにくく、その為に諸解を生じた。「植て」と「立去る」の主体を同一人と見れば、田植の早乙女が一枚の田を植え終って立ち去って行くというまでで、柳のあたりの初夏の一情景を描いたに過ぎず、西行のゆかりも薄くて納得し難い。殊に「柳」を「柳腰の女共」（『師走嚢』）などと取るのは論外であろう。これに対して、西行の歌との縁を重視し、
　……此哥の心をとりて、しばしとこそやすらひつれ、はや田一枚植けるよと、おどろきたち去たる旅情也。（蓼太『句解』）
と解する説が夙くからあり、近来はこれが、定説となって、［大意］にまとめたところも、この立場に立っている。田一枚を植えるのは早乙女、立ち去るのは芭蕉で、相接した二つの動詞がそれぞれ別の主語を取ることになるが、発句という短小な詩形にあっては、さして異とするに当らない句法である。
　西行の歌の「しばしとてこそ」の、しばしという時間の具象化が「田一枚植ゑて」であり、芭蕉が佇んだしばしの時間が、早乙女たちをして、田一枚を植えしめるのである。だから裏をかえせば、芭蕉が主体となって、田一枚を植えしめるのであり、芭蕉が植えたと言っても、不自然ではない。句を読み馴れた者は、心の中でそのような操作を行なって、一句の詩的統一を作り上げることができるのだ。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）
と見ればよい。これを心理的に精しくいえば、
　……「しばしとて」「立ちどま」った西行を心に描きつつ低回(ていかい)去る能わざる自己の姿が、眼前の早乙女の営みによって、具象化された時間として把握されたところに俳諧の味が生きてきているのである。田を植えているのは早乙女であるが、それを自分が見ており、その景の中に我を忘れて時を過ごしていた気持から言えば、自も他もない境地であり、いわば自分自身が田を植えて立ち去るという気持になることも、決して不自然ではない。早乙

女もなく、自己もなく、田を植えるという働きそのものがじかに感じられているわけで、そうした感合滲透に達した境地にあって、……自他合一の発想がなされているのである。こうした芭蕉の発想は、恐らく謡曲とか連句とかの中で培(つちか)われてきたものではないかと思う。(加藤楸邨氏『芭蕉全句』)

ともなろう。一見無理な句法が或る心理的操作によって、独自の句の世界に馴染んで来るようである。もともとこの句は、『ほそ道』の中に置かれて始めて十全に理解出来、表現効果も発揮される性質のもので、一句だけ取出して見ても何の事とも分らない。この点からも、『ほそ道』執筆中の作であることが裏付けられよう。尾形仂氏は、『ほそ道』のこの辺の叙述が能のイメージと深く関わり、謡曲「遊行柳」との関係から、更に新しい見方が出ている。前記高久での謡曲調の前書もあるところから、次のように述べられた。

この前文に「この所の郡守戸部某」の名をあげたことが、大身のパトロンを持っていたことのひけらかしに終わるものでないとするなら、そこにはこの句文執筆の時点における、桃酔(引用者注、芦野資俊を指す)への追悼の志が汲みとられなければならぬだろう。これは、能の『遊行柳』に擬し、みずからなかば能の世界の旅人になったつもりでの、鎮魂の句文である。「田一枚植ゑて」とは、夢幻劇の中の芭蕉の鎮魂のための奉仕の手わざにほかならない。鎮魂の対象は、直接には柳の精、そしてその柳にとどめられた西行の詩魂であり、また匿名の「戸部某」のゆかしい風雅の志でもあった。

「田一枚植ゑて」とは、早乙女たちが植えるのであり、その間「しばし」の懐旧の時を過ごした芭蕉は、もはや田一枚が植え終えられたことに気づいてそこを立ち去って行く、といった合理的思考は、ここでは通用しない。「田一枚」といったとき、現実の柳の周囲の田は、すでに芭蕉の幻想の世界のものと化されているのだ。『殺生石』から『遊行柳』へと展開する能の幻想の中で、みちのく巡礼のワキ僧となった芭蕉は、遠くは西行、近くは桃酔の詩魂を記念する柳の精の前に、捧げるべき何物も持たず、また先を急がねばならぬ旅の身の、せめては奉

仕の手わざをと、みずから神の田に下り立ち、早乙女たちとともに田一枚を植えて、無量の思いを残しつつ、静かにその前を立ち去って行く。いわばこの一句は、「跡弔（とぶら）ひてたびたまへ」という後ジテの所願に応えての、手向けの営みにほかならなかったということができるだろう。

「立ち去る」が、前文の「立ち寄りはべりつれ」を承け、西行の「立ちどまりつれ」に和した〝俳諧〟であることはいうまでもない。「立ち去る柳」とは、実は立ち去りがたい柳の反語なのだ。（『松尾芭蕉』）

右の考え方が、「芭蕉が主体となって、田一枚を植えしめるのであり、芭蕉が植えたと言っても、不自然ではない」（山本氏）「自他合一の発想」（楸邨氏）といった説の展開として出て来たことは明らかであろう。更に安東次男氏には左のような説がある。

……「遊行柳」の結び、朽木の精が旅僧に報謝の舞をのこして消えるくだりの、ある趣向が、「田一枚」の興のたねになったようだ。

「別れの曲には、柳条を綰（わが）ぬ。手折るは青柳の、姿もたをやかに、結ぶは老い木の、枝も少く、（中略）残る朽木となりにけり」。柳糸を輪につくって、わかれのしるしに相手に贈る、というのは中国古来の風習で、『三体詩』が収める張喬（ちょうきょう）……の絶句にも「離別、河辺ニ柳条ヲ綰ヌ」とある。「遊行柳」のなかの詞は『三体詩』からの借用だと思うが、芭蕉はこのどちらもよく読んでいたに違ない。

一枚の山田を植える、早緑（さみどり）に染めてゆく手ぶりを以て、柳糸を綰ねる手ぶりに替えるとは、全く以て心にくいことを思付くものだ。その一点に気が付けば、田を植えるのが誰か、立去るのが誰か、ひいては、芭蕉は見ていたのかなどと、問うことなど阿呆らしくなる。畢竟、「田一枚」を植えて（朽木へのはなむけにして）立去る真人（しんじん）は、俳諧師自身だと覚らされるだろう。「遊行柳」という夢幻能を下に敷けば、そう読むしかない仕掛になっていて、一枚の小さな青田が夢幻と現実との見切り屏風の役割をしてくれる。甚だしゃれた句だ。

一見、素直な矚目のように見せながら、機心の際立ったはたらきがあり、別離の心を具体化するイメージの結晶がなければとてもこうは作れぬ、と思わせるところ、旅後になって、熟思の末の吟なのかもしれぬ。（『芭蕉発句新注』）

見方はもとよりとりどりであってよいが、『ほそ道』に於けるこの句の解釈の基本は、謡曲「遊行柳」を背景にした西行追慕の心情であって、前文の「立より」から句中の「立去る」への流れの中に「田一枚植て」という早乙女の手業が浮んでいる形である。風雅の心情の間に挿入された田家の生活風景は、早苗の緑の印象と共に、如何にも瑞々しい俳諧の新味であった。句の解釈としては、［大意］に記したような趣旨が、やはり穏当と思う。それを踏まえて、人それぞれの鑑賞が展開されるのである。前にも述べたように、句だけ取り出すよりは、『ほそ道』のこの条りに置いてはじめて効果を発揮する底の作で、その限りでは佳句と称してよい出来である。

なお、支考は『俳諧古今抄』（享保十五年刊）で、この句の中七の初案が「植て立よる」であったかのような言を成しているが、細道の旅の当時彼は芭蕉に入門しておらず、これを裏付ける何等の資料もない。志田義秀博士の『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』、井本農一博士の『芭蕉の文学の研究』等に細説されている如く、この句に別案はなかったものと考えられる。

476　早苗にも我色黒き日數哉　（曾良書留）

泊船集・蕉翁句集・雪まるげ・奥細道付録

みちのくの名所〳〵こゝろにおもひこめて、先せき屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、いまの白河もこえぬ

夏季（早苗）。

語釈　**○みちのくの名所〳〵**　「陸奥の名所〳〵」。東北地方の各地にある歌枕。「〳〵」は、昔の表記法では漢字の繰返しについても用いられた。「哥人はるながらめいしよをしる」(『毛吹草』巻二)「Meixo. Nadocoro.」(『日葡辞書』)。**○こゝろにおもひこめて**　「心に思ひ籠めて」。名所に対するあこがれの気持を深く心に蔵していることをいう。「こひしきも思こめつゝある物を人にしらるゝ涙なに也」(『後撰集』巻十一、平中興)「Vomoicome, uru, eta.」(『日葡辞書』)。**○先**　「先づ」。**○せき屋の跡なつかしきまゝに**　「関屋の跡懐しきまゝに」。「せき屋」は、白河の関(既出。Ⅲ *468* 前書)の建物をいう。その跡がなつかしいので。「まゝに」は、理由をあらわす語法。「しらかはのせきやを月のもるかげは人の心をとむる成けり」(『山家集』下)「我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに」(『千鳥掛』所収芭蕉発句「ふるさとや」前書)「Xeqiya.」「Natçucaxĭ vomô.」「Mamani.」(『日葡辞書』)。**○ふる道にかゝり**　「古道に掛り」。「ふる道」は、現在の街道筋とはちがう昔の道。曾良の『随行日記』四月二十日の条に、「古関を尋て、白坂ノ町ノ入口ゟ右ヘ切レテ、旗宿ヘ行、廿日之晩泊ル」とあり、翌日所謂「古関」を訪れている。この白坂(現福島県白河市白坂。奥州街道の宿場があった)から旗宿(現白河市旗宿。白河城の南三里に当り、ここの関の森地区に古関跡がある)に至る間が「ふる道」である。「かゝり」は、或る道筋や場所を通り、または、行き着くこと。「先年遊行の御下向の時も、古道とて昔の街道を御通り候ひしなり」(謡曲「遊行柳」)「心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ」(『おくのほそ道』)「Furumichi.」(『日葡辞書』)。**○いまの白河もこえぬ**　「今の白河も越えぬ」。「いまの白河」は、旗宿の関跡から三十町ほど西にある「新関」の方をいい、曾良の『日記』に、

一　芦野ゟ一里半余過テ、ヨリ居村有。是ゟハタ村ヘ行ハ、町ハヅレゟ右ヘ切ル也。

一　関明神、関東ノ方ニ一社、奥州ノ方ニ一社、間廿間計有。両方ノ門前ニ茶ヤ有。小坂也。これゟ白坂ヘ十町程有。

と見える「関明神」二社のある所である。今も関東側が住吉明神、奥州側が玉津島明神を祀るが、天保頃の建立という。なお、この前書では、「いまの白河もこえぬ」が後に書かれているが、曾良の『日記』では新関の方を先に通っており、右の「白坂へ十町程有」の次に前掲の「古関を尋て」云々の記事が続くのである。「しら川の関こえて」(『猿蓑』巻二、芭蕉発句「風流の」前書)。**○早苗**　「サナヘ」。苗代に育った稲の苗。これを田に移植するのである。「サ」は田の神事に関係する語。「早苗　夏也。植物なり。水辺にあらず」(『御傘』)「歌に早苗とるなど云、田を植ること也」(『滑稽雑談』)「Sanaye. P. Ineno naye.」(『日葡辞書』)。**○我色黒き日数**　「我が色黒き日数」。日数重なる旅によって、自分の顔が日に焼けて黒くなったこと。能因が閉居して日に焼けた話を背景に

している。委しくは［考］参照。「あまりに色（イロ）のくろかりければ、みる人黒師（コクソツ）とぞ申ける」（『平家物語』巻一）「心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ」（『おくのほそ道』）「Curoi.」「Ficazuga casanaru.」（『日葡辞書』）。

大意 此処までもう随分旅の日数を重ねて来た。早苗の瑞々しい色を見るにつけ、我が顔が日に焼けて黒くなったことが思われる。あの能因は、態々肌を日に焼いて、旅に出たと偽ったというが。

考 『泊船集』と『蕉翁句集』には「奥州今のしら河に出る」と前書がある。［語釈］に引用した曾良の『日記』に明らかなように、芭蕉達は白坂付近の新関から旗宿の古関跡に廻っているので、この前書はかなり不正確と言わざるを得ない。曾良の記録した前書が何等かの伝手で『泊船集』の編者風国に知られ、これを簡略化した為に、こんな形になったかと思われる。須賀川から出した杉風宛曾良書簡にも「白川」と前書して出す。曾良の『日記』四月二十一日の条には、

一　廿一日　霧雨降。辰上尅止。宿ヲ出ル。町ヨリ西ノ方ニ住吉・玉嶋ヲ一所ニ祝奉宮有。古ノ関ノ明神故ニ二所ノ関ノ名有ノ由、宿ノ主申ニ依テ参詣。ソレヨリ戻リテ関山ヘ参詣。行基菩薩（ママ）ノ開基（ママ）、聖武天皇ノ御願寺、正観音ノ由。成就山満願寺ト云。籏ノ宿ヨリ峯迄一里半、麓ヨリ峯迄十八丁。山門有、本堂有。奥ニ弘法大師行碁（ママ）井堂有。山門ト本堂ノ間、別当ノ寺有。真言宗也。本堂参詣ノ比少雨降ル。暫時止。

とあって、旗宿の方の関の明神や関山の満願寺に参詣している。「早苗にも」の句は二十日か二十一日の作であったろう。この句は間もなく「西か東か先早苗にも風の音」と改案されたのであるが、内容がかなり異なるので、それぞれ一句として扱うことにした。

白河の関を越えて陸奥の地に足を踏み入れた芭蕉は、先ず能因の名歌「みやこをばかすみとともにたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき」（『後拾遺集』巻九）を思った。この歌にいう秋風の頃にはまだならないが、都ならぬ江戸を立ってから既に一月近い日が経っている。『類船集』には「白河の関」の付合語として「日数ふる旅」が挙げてあり、「日

数」も古歌から当然連想される語だったのである。更に「我色黒き」は、初夏の旅路に日焼けした自身の現実のさまであるが、これまた能因の故事を踏まえている。即ち、

能因は、いたれるすきものにてありければ、

都をば霞とともに立しかど秋風ぞふく白川の関

とよめるを、都にありながら此歌をいださむ事念なしと思て、人にもしられず久く籠居て、色をくろく日にあたりなして後、みちのくにのかたへ修行の次によみたりとぞ披露し侍ける。（『古今著聞集』巻五、能因法師詠歌して祈雨の事并びに白河関の歌の事）

という話で、能因は白河の関に行かずに都で顔を日に焼いてからこの歌を披露したが、芭蕉は実際に旅をして日焼けしたといって、旅愁と滑稽を綯い交ぜにした趣向にしたわけだ。この能因の話は恐らく事実ではなく、実際に初度の奥州下向の時の詠歌だったのを、歌道執心を強調したい説話心理からこのような話が生まれたものらしい。後世にはこれが広く流布し、夙く延宝四年の桃青・信章両吟『奉納弐百韻』に、

能因法師若衆のとき　　　　桃青

照つけて色の黒きや侘つらん　　　信章

という付合も見える。細道の旅では丁度田植の頃とて、作者は前記関山下の番沢盆地の田植を見たのではないかという推測もある通り、「早苗にも」は、能因の「秋風」に対照して実境を採り上げたものと思われる。ただ、句の内容は実境や旅愁一筋ではなくて、故事を背景にした趣向に「興」を求めた作なのである。「白河」に対して「色黒き」を対照したおかしみもあろう。

白河の關越るとて

477 風流の初やおくの田植うた （真蹟短冊）

真蹟懐紙・曾良書留・葱摺・猿蓑・おくのほそ道・陸奥鵆・泊船集・田植諷・雪まるげ・奥細道拾遺・袋表紙・蕉門録・乞食嚢・奥細道付録

夏季（田植うた）。

語釈 ○**越るとて** 「越ゆるとて」。「たよりあらばいかで宮こへつげやらむけふ白河の関はこえぬと」（『拾遺集』巻六、平兼盛）。○**風流の初や** 「風流の初や」。「風流」について古注には、「風流といふ諷ひもの」（素丸『説叢大全』）と見る説もあったが、概ねは「旅で出逢う風流な事」と解されている。後者の立場に立てば、「初」も「始源」といったことではなく、「初めての出逢い」の意と見られ、結局それが正しいと思う。「おもひ立たる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり」（『笈の小文』吉野の花見の条）「みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。このたびの風流爰に至れり」（『おくのほそ道』大石田の条）等、芭蕉は「風流」の語を「旅」に限定して用いることがあり、この句の「風流」も同じ用法に属する。白河の関を越えて「奥州の風流の旅の初め」でもあるわけである。「や」は、詠嘆の切字。「**Fūriū.**」（『日葡辞書』）。○**おくの田植うた** 「奥の田植歌」。「おく」は「みちのおく」の略で、白河以北の東北地方をいう。「田植うた」は、田植の作業中に歌う歌。「田一枚」（Ⅲ *475*）の句参照。田植は労働であると共に神事の一面もあり、中国地方の田歌には、作業歌の半面に神歌の性質を持っていて、田の神を賛美する間に恋情やおかしみを交えて歌われる。「旗の手の雲かと見えて飜り　曾良　奥の風雅をものに書つく　翅輪」（『曾良書留』）「しるべして見せばやみのゝ田植歌　己百」（『笈日記』）「**Vocu.**」（『日葡辞書』）。

大意 みちのくの鄙びた趣の田植歌。それが今度の旅で出逢った風流の最初ですよ。

考 「奥州岩瀬郡之内須か川相楽伊左衛門ニテ」（『曾良書留』）「みちのくの名所〳〵心におもひこめて、先関屋の跡なつかしきまゝに、ふるみちにかゝりていまのしら河も越えぬ。頓ていはせの郡にいたりて、乍単斎等躬子の芳扉を扣。彼陽関を出て故人に逢なるべし」（『葱摺』）「しら川の関こえて」（『猿蓑』）「須ケ川等躬興行」（『陸奥鵆』）「奥州しら河の関

こえて」(『泊船集』)「白河の関にて」(『田植諷』)「奥州岩瀬郡相楽伊左衛門亭にて」(『雪まるげ』『奥細道拾遺』)「須賀川等躬亭にて」(『奥細道付録』)等の前書があり、『書留』には別に「岩瀬の郡すか川の駅に至れば、乍単斎等躬子を尋て、かの陽関を出て故人に逢なるべし」という発句の前書も記録されている。『おくのほそ道』には白河から北へ進む記事の次に、

　すか川の駅に等窮といふものを尋て四五日とゞめらる。先白河の関いかにこえつるやと問。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懐旧に腸を断て、はかぐ\しう思ひめぐらさず。

　　風流の初やおくの田植うた

　無下にこえんもさすがにと語れば、脇・第三とつゞけて三巻となしぬ。

と見え、曾良の『日記』には四月二十二日の条に、「須か川乍単斎宿。俳有」とある。「風流の」の発句は、須賀川の旧知乍単斎等躬(相楽伊左衛門)の家に着いた日に出来たものであろう。『書留』に録された歌仙の末尾には「元禄二年卯月廿三日」とあるから、翌日には満尾したのである。等躬は須賀川の素封家で俳諧を嗜み、江戸の貞門石田未得の門に入って岸本調和に兄事したといわれる。細道の旅でこの等躬亭に滞在中、芭蕉が杉風に宛てて出した卯月廿六日付書簡に、

　白川ゟ六里、須賀川と申処に乍憚(サタン)と申作者、拙者万句之節発句など致候仁に而、伊勢町山口佐兵衛方之客に而御坐候。是ヲ尋候而今日廿六日まで居申候。

とあるように、延宝中期芭蕉が江戸で宗匠になった披露の万句興行の時からの知己であった。等躬の祝賀の句「三吉野や世上の花を目八分」は、調和の撰した『富士石』(延宝七年刊)に収められている。前掲の前書類に「陽関を出て故人に逢」という表現が見えるのは、こういう二人の古い交誼に因むのである。

『ほそ道』の文にある如く、等躬から「白河の関いかにこえつるや」と問われて示したのがこの句であった。如何

に越えたかとは、この有名な歌枕でどんな句を作ったかということである。だから、この句は等躬への挨拶の気持を籠めて白河の関越えの句として作られたもので、そのことは底本とした真蹟短冊の前書からも明らかであろう。すると、奥州の田植歌が風流という謡物の起源だとか、田植歌が風流の最も原初的なものだというような、知的解説に堕して詩情を失った解釈は論外になる。あこがれの歌枕、それも此処から奥州へはじめて足を踏み入れるという所で、何の句もなしに素通りすることは許されない俳人として、歌枕への挨拶、ひろくは奥州全体への挨拶として詠まれた句なのであって、それが遠くもない処に住む等躬への挨拶に叶うことにもなるのだ。実際には「早苗にも」の句があり、それを等躬に話してもいるのであるが、歌仙の発句が「風流の」の句であったところを見ると、やはりこの方を関越えの句とする建前だったのであろう。

「おくの田植うた」を採り上げて賞めるのがこの句の趣向である。鄙びた土くさい趣の歌だったのであろうが、そういうたまたま接したものを賞めて、それを陸奥の旅で出逢った風流の最初、また風流の旅の第一歩といったわけで、そこに如何にも俳人らしい眼が光っている。森田蘭氏の指摘されたように、「人も知る白河の関をめぐる古歌は、……申し合せたように同工異曲で、しかもその心は何れも都を向いている。芭蕉がここで「田植歌」を取上げたのは、ささやかな詩的反逆ですらある」(『猿蓑発句鑑賞』)のだ。田植時の田園を見はるかしつつ歩む旅人の気息が伝わって来るような調べで、この明るさは愈々奥州に入った芭蕉の心の張りを思わせる。

478

世の人の見付ぬ花や軒の栗　(おくのほそ道)

栗といふ文字は西の木と書て、西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用玉ふとかや

鳥の道・泊船集・小太郎

元禄二年卯月廿四日

かくれがやめだゝぬ花を軒の栗　（真蹟歌仙懐紙）

真蹟写・曾良書留・伊達衣、雪まるげ・軒の栗・蕉門録・乞食嚢・奥細道付録

夏季（栗の花）。

語釈　**〇栗といふ文字は西の木と書て**　「栗といふ文字は西の木と書きて」。「栗」という漢字を上下に分解すると、「西」と「木」の字になることをいう。「秋の田をからせぬ公事の長びきて　越人　さい〱ながら文字問にくる　芭蕉」（『あら野』員外）「Moji.」（『日葡辞書』）。**〇西方浄土に便あり**　「西方浄土に便有り」。「西方浄土」は、仏教でいう阿弥陀如来のおわす極楽。この娑婆世界から西方十万億の仏土を隔てた彼方にあるという。「栗」が「西の木」と書くところから、阿弥陀の浄土に縁があるというのである。「日の入給ふ所は西方浄土にてあんなり。いつかわれらもかしこに生れて、物をおもはですぐさむずらん」（『平家物語』巻二）「今のこのむ所の一筋に便あらん」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「名月の」支考評）「Saifŏ jŏdo.」（『日葡辞書』）。**〇行基菩薩**　「ギャウキボサツ」。奈良時代の僧。諸国を行脚して説法する傍ら、道路・橋・堤防等の普請を指導し、民衆の福利増進に努めた。晩年東大寺の大仏建立にも貢献し、聖武天皇から大菩薩の号を賜わっている。天平二十一（七四九）年歿、享年八十二。「Bosat.」（『日葡辞書』）。**〇一生杖にも柱にも此木を用玉ふとかや**　「一生杖にも柱にも此の木を用ゐ玉ふとかや」。一生の間、歩く時の杖としても、草庵の柱としても、この木（栗の木）をお使いになったとか、の意。下に「語り伝ふ」等の語が略されている。この行基の話は何に出ていることか明らかでない。前田金五郎氏は、『法然上人行状絵図』所謂勅修御伝に似た話が見え、芭蕉は法然を行基と憶えちがいしていたのではないかという（『俳句』昭和四十七年三月号参照）。しかし勅修御伝の話は最明寺時頼が西方に縁ある木として栗の杖を愛用していたというので、法然が愛用したというのではないから、そういう錯誤がおこるのは不自然な感じもなくはない。「今日の衆生一生ざうあくふだんぼんなふのちりにまじはり」（『せみ丸』第五）「吾また後の恵子にして用ることをしらず」（『ひさご』越人序）「神体は弥陀の尊像とかや」（「幻住庵記」）「Ixxŏ fubon.」「Mochij, iru, ita.」（『日葡辞書』）。**〇世の人の見付ぬ花や**　「世の人の見付けぬ花や」。「世の人」は、出世間の僧に対して俗世に住む人をいう。俗人。「花」は下に「栗」とあるのによって栗の花と分る。目立たない花なので、俗人はその存在を見出せないのである。「栗の花」は、夏の季語。「や」は詠嘆の切字。「栗の花蘇頌図経曰、栗、木高二三丈、葉極類レ櫟、四月開レ花、青黄色、長条、似二胡桃花一。……和産所説のごとし。四五月に開く。和俗此花のをつるを以テ梅雨の候とす。故に梅雨を呼て墜栗の雨ともいへり」（『滑稽雑談』）「なみだにぞぬれつゝしぼる世の人のつらき

心はそでのしづくか」（『伊勢物語』七十五段）「高びくのみぞ雪の山〳〵　越人　見つけたり廿九日の月さむき　荷兮」（『はるの日』）「逗留のまどに落るや栗の花　去来」（『続有磯海』）「Yoni aru fito.」「Miçuqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。〇**軒の栗**　「軒の栗」。「軒」は、この句を贈った可伸の住む草庵の軒である。栗の木は前掲『滑稽雑談』の記事にもあるように、高さ十五メートル以上にもなる喬木で、雄花は長い総状に並んで白色。雌花は二、三個ずつとげの多い総苞に包まれ、薄緑色で、長い雄花穂軸の根元についており、花は独得の香りがある。「Curi.」（『日葡辞書』）。

大意　この隠者の草庵の軒端には栗の木が聳えているが、俗世の人が見つけない目立たぬ花を付けている。まことに住む人に相応しい。

考　「桑門可伸のぬしは栗の木の下に庵をむすべり。伝聞、行基井（ママ）の古、西に縁ある木成と、杖にも柱にも用させ玉ふとかや。隠栖も心有さまに覚て、陁（ママ）陀の誓もいとたのもし」（『曾良書留』）「桑門可伸は栗の木のもとに庵をむすべり。伝へ聞、行基井の古は、西に縁有木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、弥陀の誓ひもいとたのもし」（『伊達衣』）「詞がきはもらしぬ。細道」（『泊船集』）「行基菩薩は栗の木を杖にも柱にもし給ふとかや。西方に縁ありとの謂なるべし。栗の木陰を便て草庵むすびたる僧に」（『小太郎』）「桑門可伸の主は栗木の下に庵をむすべり」（『雪まるげ』）等の前書がある。『ほそ道』須賀川の条には、

　此宿の傍に大きなる栗の木陰をたのみて世をいとふ僧有。橡ひろふ太山もかくやと閒に覚られて、ものに書付侍る其詞

として前掲の句文が見えるが、曾良の『日記』によると、四月二十三日の条に「晩方へ可伸ニ遊」とあり、翌二十四日の条には「昼過ゟ可伸庵ニテ会有。会席そば切。祐碩賞之。雷雨、暮方止」とある。現存の真蹟歌仙懐紙冒頭の年記は二十四日なので、歌仙の成立は恐らくこの日であって、発句だけは二十三日に出来ていた可能性もあろう。この隠遁の僧可伸は、曾良の『書留』の須賀川の連衆の名を録した中にも「釈可伸、栗斎」と見え、歌仙懐紙に徴しても、

栗斎を俳号としたことが知られる。また『金蘭集』の前書によれば、俗名を簗井弥三郎といったらしい。
さて、歌仙懐紙によって明らかなように、この発句の旅行当時の初案は「かくれがやめだゝぬ花を軒の栗」の形であって、その前書も『書留』や『伊達衣』（等躬撰、元禄十二年刊）に伝えられるものが本来の形とおぼしい。但し、『書留』に発句の中七が「めにたゝぬ花を」となっているのは、曾良の誤筆であろう。この句形は他に所伝がないし、字余りにする必然性に乏しい。それが『おくのほそ道』執筆に当って「世の人の見付ぬ花や軒の栗」と推敲され、原態をかなり簡略化した前書が付されたのである。
初案は可伸の閑静な隠宅と、その軒端に目立たぬ花を咲かせている栗の大樹とが丁寧に描かれ、家と樹のひそやかなたたずまいの裏に、浮世を厭う可伸の心境や、それをゆかしく思う芭蕉の気持が籠められた句であった。これはこれでよくまとまった佳句といえる。それが『ほそ道』所収の後案では「かくれが」が影をひそめ、わずかに「軒」の語に名残を留めるに過ぎず、全く「栗の花」の句になっている。しかも、「世の人の見付ぬ花」と、俗人にはその花の風情を理解し得ないことをいって、その花に世外の人可伸の心境を寓し、極めて象徴性の高い表現にした。「世の人の見付ぬ」には観念性も強くあらわれており、初案とは大きく性質の変った句になった観がある。初案の段階からかなり長い前書を伴なった句であるが、『ほそ道』でも可伸の草庵の有様は描かれているので、句では栗の花に焦点をしぼるのを良しとしたのであろう。『笈の小文』に収められた「日は花に暮てさびしやあすならふ」（Ⅱ368）の句をもとに、「さびしさや花のあたりのあすならふ」の句が生まれたのと似た関係が此処にも見られる。初案・後案それぞれの評価は人によって異なるであろうが、ここでは初案も佳句と見られることと、『ほそ道』の句形で象徴性乃至は観念性が強くあらわれていることを指摘しておきたい。なお、『伊達衣』には、
予が軒の栗は更に行基のよすがにもあらず。唯実をとりて喰ふのみなりしを、いにし夏芭蕉翁のみちのく行脚の折から一句を残せしより、人ゝ愛る事となり侍りぬ

梅が香を今朝は借すらん軒の栗　須賀川栗斎可伸

という句文もあり、芭蕉の訪問以来この栗の木が評判になったことが知られる。可伸の閑居も、以後はかなり騒がしくなったのであろう。

479 西か東か先早苗にも風の音　（無日付何云宛書簡）

曾良書留・葱摺・雪まるげ・奥細道拾遺・蕉門録・奥細道付録

夏季（早苗）。

語釈　○**先**　「先づ」。○**早苗**　既出（Ⅲ*476*）。

大意　西か東か風の向きもよく分らないが、能因が「秋風ぞ吹く」と詠んだ此処白河の関のあたりの早苗に吹き渡る風の音が、何よりも先ず耳にとまる。

考　「白河関」（『曾良書留』『雪まるげ』）「しら河の関をこゆるとて、ふるみちをたどるまゝに」（『葱摺』）「しら川の関を越すとて古道にかゝりて」（『蕉門録』）等の前書がある。須賀川滞在中に書かれた白河住何云宛の書簡には、

……白河愚句色黒きといふ句、乍単より申参候よし、かく申直し候。

としてこの句を報じており、前掲「早苗にも我色黒き日数哉」（Ⅲ*476*）の句を等躬（乍単）が何云に知らせたのを何云からの手紙で知って、その改案として成った句であることが分る。何云については姓氏等未詳であるが、白河藩士で俳諧を嗜み、幽山の『誹枕』（延宝八年刊）以後、諸書に句が入集している。芭蕉は白河でこの人を訪ねる筈であったが、会えないまま須賀川まで来て、先方からの文通に接したのであった。書簡に日付を欠く為、句が何日に成ったのか明らかではないが、須賀川滞留中であることは確かである。曾良の『書留』にも、句を記した後に「我色黒きと（ママ）句をかく被直候」と注記している。

白河の関での句の改案とあって、「風の音」で能因の「秋風」を思い寄せ、「早苗」を詠み込んでいるところも、「我色黒き」の句と同想である。杜哉の『蒙引』に、

風に東西のみへわかざるは早苗なるべし。名におふ白川に至りみれば、植田の風に涼しげなるが、穂波のうねる比おひは、さこそ寂しく吹しくべきと也。先の字に眼を付べし。是又能因の秋風を含みていへり。

とある解は、よく句の内容を悉している。能因の秋風とはちがう「早苗に渡る風の音」を見出したのは俳諧の新味であり、「西か東か」には秋風なら西からであるべきことを含んで（四季を方角に配すれば秋は西になる）、且つ白河の関址をいずこと探る気持もあろう。同じく能因の歌を背景にしながらも、「我色黒き」の句は、能因が肌を焼いたという伝説に基づくところが趣向として煩わしく、その点改案は属目の早苗を中心にしているのが取柄といえる。

曽良書留・伊達衣・奥細道拾遺・蕉門録・奥細道付録

480　**關守の宿を水鶏にとはふもの**　（無日付何云宛書簡）

關守の宿をくゐなに問ふものを　（雪まるげ）

夏季（水鶏）。

語釈　**○関守の宿**　「関守（せきもり）の宿（やど）」。「関守」は、白河の関の番人。「宿」は、家の意。ここでは白河の俳人何云の家をたとえた。「此路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて、漸として関をこす」（『おくのほそ道』）「万歳のやどを隣に明にけり　荷兮」（『あら野』巻二）「**Xeqimori.**」（『日葡辞書』）。**○水鶏**　「クヒナ」。鶴目クイナ科の渡り鳥。各種あるが、夏の田園でカタカタと戸をたたくように鳴くといわれるのは緋水鶏である。身体全体が赤っぽく、脚も赤くて長い。水辺の草むらや稲田に枯草を集めて巣を作って雛を育てる。「水鶏（くゐな）　水辺なり、夏なり、夜分也」（『御傘』）「水鶏たゝく　ことく〳〵と戸をたゝくやうになく鳥なれば。哥にもおほくたゝくくいなとよみ侍る。俳諧躰にはたゞむねたゝき。はちたゝきなどやうにもいひなし。をのが名にたゝきづえもつくいなとも」（『山之井』）「麓の小田に早苗とる哥、蛍飛かふ夕闇の空に水鶏の扣音、美景物としてたらずと云事なし」（「幻住庵記」）

「Cuina.」（『日葡辞書』）。○とはふもの　「問はうもの」。たずねでもしたらよかったろうに。「もの」は「ものを」と同様に、不本意な気持をあらわす。「ふ」は未来の助動詞「う」の変則表記で、この時代は口語的なこの語の表記法がまだ確立していなかった。
「朝顔をその子にやるなくらふもの　荷兮」（『あら野』巻四）。

大意　白河の関守のような貴方の家を、水鶏に聞いてでもお尋ねしたらよかったろうに。お会い出来ないで残念です。

考　「白川に住何云へ文をつかはすはしに」（『伊達衣』）「白川何某へ文遣すはしに」（『蕉門録』）等の前書があり、曾良の『書留』にも「白河何云へ」と注する。これらにいう「文」は、現存の無日付何云宛の書簡であって、「白河の風雅聞もらしたり。いと残多かりければ、須か川の旅店ゟ申つかはし侍る」としてこの句を書いている。四月二十二日から二十八日まで須賀川の等躬亭に滞在していた間の作である。右の書簡に付属する何云自筆の添状に曰く、

予壮年の比陸のおく白河に住侍るに、誹諧を翫び、誹名聊そのほとりに鳴りぬ。武府に風雅をかよはして、其道の匠人に消息を取かはしなどし侍る。その比芭蕉翁桃青のぬしは、塵世をのがれ行脚の身となりて、奥羽にくだりたまへる序、予を訪ひたまはんのこゝろざし侍れど、俗名いぶかしく打過、須ヶ川の羈より此消息をなんおくられける。誠につたなきやつがれといへども、その道の芳志浅からざるや、是を文ばこの底にして年を経ぬ。その後宮古路にして翁みまかりたまへるとかや。まことに翁の徳世挙りて仰がざるもなく、誹道に長ぜる事、其風をしたはざるはなし。われも此消息を取出て巻返し、しづのおだまき幾度か袖をしぼりぬ。一年都に此水茎をのぼせて、表具やうのいとなみを加へ、ながき形見と包み置侍りぬ。

　文台や香炉を居て朧月　対月堂何云

何云は白河藩士と伝えられるが、姓氏俗名等詳らかでない。延宝八年の『誹枕』（幽山撰）から句が見え、元禄二年の『忩摺』までは白河住であるが、同十年の『陸奥衛』では山形住に変った。元禄五年藩主松平家の転封で山形へ移ったのだという。右の添状によると、恐らく何云は細道の旅の前から芭蕉と交渉があって、芭蕉も旅の途中往訪するつ

もりであったが、「俗名いぶかしく」白河では尋ね当てられなかったようである（「俗名いぶかしく」は「俗事いやしく」ともよまれているが、原本を検するに後者は非）。等躬は予て何云と知合だったらしく、白河での芭蕉の句「早苗にも我色黒き日数哉」（Ⅲ476）を報じて遣って、それを機に何云も須賀川の芭蕉に文通した。その返事がこの句を記した芭蕉書簡なのである。後半に「早苗にも」の句を「西か東か先早苗にも風の音」と改案した旨を述べていることは前述した。

何云が白河に住んでいるところから「関守」に見立て、あたりの田園で見掛けた水鶏を詠み込んで趣向としている。水鶏の啼き声は「たゝく」といわれるように、戸をたたく感じなので、訪れたい願いをあらわすのに恰好でもある。「とはふもの」という砕けた口語調にも、挨拶の気持が籠められており、俳味十分の作といえよう。『雪まるげ』の下五「問ふものを」は誤伝に過ぎない。

須か川の驛ゟ東二里ばかりに石河の瀧といふあるよし。行て見ん事をおもひ催し侍れば、此比の雨にみかさ増りて、川を越す事かなはずといゝて止ければ

481　さみだれは瀧降りうづむみかさ哉　（曾良書留）

五月雨に瀧ふり埋むみかさ哉　（安達太郎根）

さみだれの瀧ふり埋む水かさかな　（青かげ）

艸摺・雪まるげ・奥細道拾遺・蕉門録

夏季（さみだれ）。

語釈　**○須か川の駅ゟ**　「須か川」は、今の福島県須賀川市。「駅」は、宿場のこと。古風に訓めば「ウマヤ」であるが、「エキ」でよいであろう。「ゟ」は「より」の合字。「すか川の駅に等窮といふものを尋て四五日とゞめらる」（『おくのほそ道』）「Yeqiba.

Vmayagini aru vma.」(『日葡辞書』)。**○石河の滝といふあるよし** 「石河の滝といふ有る由。」「石河の滝」は、須賀川の南東、今の須賀川市前田川と石川郡玉川村大字龍崎にまたがる滝で、市の東部を北流する阿武隈川本流にかかり、幅六十メートルに及ぶ。滝を作る岩層が一部後退し、急崖が乙字形の平面形をなす為、「乙字ヶ滝」とも呼ばれ、水量が増す時期には壮観を呈する。「いふある」は「いふ滝ある」の略。「よし」は、伝聞の事実をいう語法。**○行て見ん事** 「行きて見ん事」。**○おもひ催し** 「思ひ催し」。「催す」は、準備する意味であろう。「絹素あまた買積て、京にゆく日をもよほしける」(『雨月物語』浅茅が宿)「Moyouoxi, su, ôta.」(『日葡辞書』)。**○此比の雨** 「此の比の雨」。折柄梅雨期である。須賀川滞留中の曾良の『日記』には、二十四日に「雷雨、暮方止」、二十六日に「小雨ス」とある程度であるが、それより前の高久では十七日から十八日にかけて雨、二十日は「朝霧降ル」、二十一日も「霧雨降。辰上剋止」という状態であった。**○みかさ増りて** 「水嵩増りて」。「みかさ」は、水量の意。「ゆき見えしみねにあらしのふくなへにけさやまがはのみかさまされり」(『好忠集』)「Micasa. i, Mizzucasa.」「Masari, u, atta.」(『日葡辞書』)。**○川を越す事かなはず** 川を越すことが出来ない、の意。滝の下流を対岸に渡って見物するので、こういったのである。「ソレヨリ左ヘキレ、川原ヲ通リ川ヲ越」(『曾良随行日記』)「今生ノ対面遂ニ叶ズシテ、替レル白骨ヲ見ル事ヨ」(『太平記』巻二)「Cauauo cosu, l, vatasu.」(『日葡辞書』)。**○いゝて** 「言ひて」。「いひて」と書くべきところ。**○止ければ** 「止みければ」。取り止めになったので。「斎院をかへられむとしけるを、そのことやみにければ」(『古今集』巻十七、尼敬信歌「おほぞらを」詞書)「Yami, u, yôda.」(『日葡辞書』)。**○さみだれ** 「五月雨」。**○滝降りうづむみかさ哉** 「滝降り埋む水嵩哉」。滝を雨が降り埋めて無くしてしまう程の水量だろうか。水量の多さをいった。「うづむ」は四段活用の他動詞。「哉」に軽い疑問の意を含む。「山ハクヅレテ河ヲウヅミ、海ハカタブキテ陸地ヲヒタセリ」(『方丈記』)「Vzzumi, mu, unda,…… Dôni foneuo vzzumedomo, nauoba vzzumanu.」(『日葡辞書』)。

大意 この頃の五月雨は、滝を降り埋める程に大変な水量に達しているのでしょうか。見に行けないのは残念です。

考 『荵摺』と『蕉門録』には曾良の『書留』と類似の前書が見え、『書留』にはまた句の後に、「案内せんといはれし等雲と云人のかたへかきてやられし。薬師也」とあって、同じく『書留』に「吉田祐碩等雲」と記されている医師に書き与えたものと知られる。須賀川滞在中の句文なのである。『安達太郎根』と『青かげ』(雨考撰、文化十一年頃刊)

の異形は誤伝に過ぎない。

須賀川滞在中に見に行く機会はなかったが、出立した四月二十九日に二人は滝を見ることが出来た。『随行日記』の記事が委しいので引用しよう。

一　廿九日　快晴。巳中尅発足。石河滝見ニ行。須か川ゟ辰巳ノ方壱里半計有。（此間さゝ川ト云宿ヨリあさか郡）滝ゟ十余丁下ヲ渡リ、上へ登ル。歩ニテ行バ滝ノ上渡レバ余程近由。阿武隈川也。川ハゞ百二三十間も有之。滝ハ筋かへニ百五六十間も可有。高サ二丈、壱丈五六尺、所ニゟ壱丈斗ノ所も有之。

要するに、この滝は幅に比べて高さは然程でなく、瀑布というより激湍といってよいものであった。芭蕉は実見しないでこの句を作ったのであるが、「滝降りうづむ」という表現は、いみじくも実況に適っている。水量が増えれば忽ち滝の姿を没してしまうこともあり得たであろう。従来の注では、五月雨が眼前に激しく降っているとする解が多いが、前述したように須賀川ではそれ程の雨に逢っていない。だから、この句の表現は総て想像によったものということになる。「さみだれは」と打ち出して、一気に言い下した七五の力はまことに柄が大きく、小味な描写の及ばない線の太さで表現を完成しているのを評価すべきであろう。見に行けない遺憾の意を籠めて、見物をすすめて呉れた等雲に贈ったのである。

482　早苗とる手もとや昔しのぶ摺　（おくのほそ道）

芭蕉庵小文庫・涼み石・蕉翁文集

しのぶの郡しのぶ摺の石は茅の下に埋れ果て、いまは其わざもなかりければ、風流のむかしにおとろふる事ほいなくて

五月乙女にしかた望んしのぶ摺　（曾良書留）

―雪まるげ・奥細道拾遺

もち摺の石は、ふくしまの驛より東一里ばかり、山口といふ處に有。さと人の云ける、ゆきゝのひとの麥草をとりて此石を試侍るをにくみて、この谷に落し侍れば、いしの面は下ざまになりて、ちかやの中に埋れ侍りて、いまはさるわざする事なかりけりとなん申を

さなへつかむ手もとやむかししのぶ摺　（山上氏蔵真蹟懐紙）

安洞院蔵真蹟懐紙・芭蕉翁遺芳所収真蹟懐紙・松平文華館蔵真蹟懐紙・芭蕉蕪村所収真蹟懐紙・おくのほそ道図譜所収真蹟懐紙・卯辰集・網代笠・花の雲・翁反古・もち摺石・奥細道付録

夏季（早苗とる）。

語釈　**○早苗とる手もとや**　「早苗とる」は、稲の苗を苗代から取って田に移し植えることで、「田植」と同じ。「手もと」は、手の動き、手つきをいう。「や」は、疑問に詠嘆を含み、下へ続く気味もあるが、一応ここで切れると見てよかろう。「五月、あやめふく比、早苗とるころ、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは」（『徒然草』十九段）「鶯に手もと休めむながしもと　智月」（『続猿蓑』下）「Temoto.」（『日葡辞書』）。**○昔しのぶ摺**　「昔しのぶ摺」。「しのぶ摺」は、布帛を模様のある石の上に当てて、忍ぶ草等の草の葉や茎で摺り染めにしたものをいったらしい。その捩り乱れた模様から「しのぶもぢ摺」ともいわれ、古代には岩代（福島県）信夫郡の名産とされていた。ここはその名に「昔をしのぶ」を言い掛けている。「しのぶ摺　奥州信夫郡にてすりたる絹なれば植物にあらず。但、古哥をみれば、紋にも忍草をするにより、みだるゝ恋のたとへによめり。……無言抄に、しのぶずりの類炑なりといへり。然べからず。新式にも、忍草炑也とこそ侍れ、しのぶずりとはなし」（『御傘』）「東路の名所旧跡を改め、夷が千嶋の干鮭の目も、見ぬ事は人にかたるべき種なし。忍ぶ摺の石を燧筥には入がたし」（『一目玉鉾』序）「Xinobuzuri.」（『日葡辞書』）。

大意　あたりの田で早苗をとる早乙女の手つきが、せめてしのぶ摺の昔をしのぶよすがなのかなあ。しのぶ摺の技も今は絶え果てて、知る人もない。

考　「もち摺の石は福嶋の駅東一里ばかり、山口といふ処に有。いまはちかやの下埋て、其形わづかにみえ侍れば」

（安洞院蔵真蹟懐紙）「しのぶもぢ摺の石は、ふくしまの駅ちかきに有。さと人のいへるは、往来の人のむぎ草をとりて此石をこゝろみけるをにくみて、この谷に落し入て、石の面は下ざまにふしたれば、いまはさるわざする事もなかりけるとなむ。風雅のむかしに替れるをかなしびて」（『芭蕉翁遺芳』所収真蹟懐紙）「みちのくしのぶ摺の石は、福嶋の駅より東一里計にあり。さと人のいへるは、往来の人のむぎ草をとりて此石をこゝろみ侍るをにくみて、この谷に落し入侍るとなん。石のおもては下ざまになりて、いまはさるわざする事もたえたり。風雅のむかしにをとろふるなん、いと本意なしや」（松平文華館蔵真蹟懐紙）「もぢ摺石は、ふくしまの駅東一里ばかりに、山口と云処に有。さと人のいひ伝え侍るは、往来の人の此石試むと、麦草をあらし侍るをにくみて、此谷に落し入侍るよし。いまはちかやの中に埋れて、石の面は下ざまになり侍るとかや。誠風流のむかしにおとり侍るぞ、いとほひなく覚侍る」（『芭蕉蕪村』所収真蹟懐紙、『網代笠』『花の雲』）「もぢ摺の石は福しまの駅より東一里計、山口と云ところに有。往来の人の麦草をとりて、このいしを試侍るをにくみて、此谷に落し入けるとなむ。いまはちかやの下にかくれて、石のおもても下ざまにみえ侍る。風雅のむかしにをとろふるこそ本意なきわざなれ」（『おくのほそ道図譜』所収真蹟懐紙）「しのぶもぢずりの石は、みちのくふくしまの駅にありて、往来の人の麦くさを取て、このいしをこゝろみけるを、里びとゞも心うくおもひて、此谷にまろばし落しぬ。石の面はしたざまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて」（『卯辰集』）「福嶋にやどりて忍の里に石を尋ぬ。里の童おしへていへるは、むかし此山の上に有しを、往来の人麦艸をあらして、この石を試るゆへ醜しとて、此谷に落すとなり」（『涼み石』）等の前書があり、『芭蕉庵小文庫』には「文字摺石」と題した文章を収めている（『蕉翁文集』所収の文も『小文庫』と同じ）。

曾良の『随行日記』によれば、しのぶ摺の石を見たのは五月二日であった。『日記』に、

一　二日　快晴。福嶋ヲ出ル。町ハヅレ十町程過テイガラベ村ハヅレニ川有。川ヲ不越、右ノ方へ七八丁行テ、アブクマ川ヲ舩ニテ越ス。岡阝ノ渡リト云。ソレヨリ十七八丁山ノ方へ行テ、谷アヒニモジズリ石アリ。柵

フリテ有。草ノ観音堂有。杉・檜六七本有。虎が清水ト云小ク浅キ水有。福嶋ゟ東ノ方也。其辺ヲ山口村ト云。ソレヨリ瀬ノウヱヘ出ルニハ、月ノ輪ノ渡リト云テ、岡ﾉ渡ヨリ下也。ソレヲ渡レバ十四五丁ニテ瀬ノウヱ也。山口村ゟ瀬ノ上ヘ弐里程也。

と地理や周辺の情況が委しく書かれている。

『書留』に見える前書と「五月乙女に」の句は、「加衛門(ママ)加之ニ遣ス」と注してあるから、『ほそ道』にも出る仙台の画工加右衛門に書き与えたものと知られる。その趣向句作りからして、これが最初の案であろう。これを推敲したのが「さなへつかむ」の形であって、芭蕉生前の集としては『卯辰集』(北枝撰、元禄四年刊)にこの句形で収められた。現在知られている真蹟類は皆この句形を採っており、凡て旅中乃至はそれから遠からぬ時期の染筆と見られる。「さなへつかむ」という、やや雅味に欠ける表現を訂して、最終的に治定したのは、『おくのほそ道』執筆の際であったろう。

多くの真蹟の前書の外、『ほそ道』にも、

あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶのさとに行。遥山陰の小里に、石半土に埋てあり。里の童ﾉの来りて教ける。昔は此山の上に侍しを、往来の人の麦草をあらして此石を試侍をにくみて、此谷につき落せば、石の面下ざまにふしたりと云。さもあるべき事にや。

と述べて、句に籠められた気持を示唆している。「しのぶ摺」の技は今は知る人もなくなって、昔を偲ぶよすがもない。前書類にあるように、「風雅のむかしにをとろふるなん、いと本意なしや」といった失われた古習へのあこがれ、懐古趣味が句の根本の動機である。初案の「五月乙女にしかた望ん」では、興じた調子ばかりが露わで、肝腎の懐古の情が強く出ない。次の「さなへつかむ」の形で「むかししのぶ摺」という掛詞を案じて本筋をつかみ、最後に「つかむ」を「とる」と改めて治定したのであった。斯くて早苗とる早乙女達の現実の姿と、「しのぶ摺」のロマンが重

層的に句の世界を構成することになる。近代的な発想とは全く異なるもので、芭蕉の歌枕への思い入れの深さを理解しないと、こういう句はなかなか分りにくい。

483 **笈も太刀も五月にかざれ帋幟**（おくのほそ道）

夏季（五月・帋幟）。

語釈 ○**笈**「オヒ」。山伏や行脚僧が、旅中に仏具や食器・衣服・書籍等を入れて背負う箱形の容器。『ほそ道』では弁慶の遺品となっている。「一ちやうのおひには、おらぬゑぼし十かしら、ひたゝれ、大くちなどをぞ入たりける」（『義経記』巻七）「**Voi.**」（『日葡辞書』）。○**太刀**「タチ」。腰に吊り下げて佩用する長い刀。『ほそ道』では義経の遺品となっている。「旅人の虱かき行春暮て　曲水　はきも習はぬ太刀の鞘（ヒチハダ）　翁」（『ひさご』）「**Tachiuo faqu.**」（『日葡辞書』）。○**五月にかざれ**「五月（さつき）に飾（かざ）れ」。陰暦五月五日の端午の節供に、笈や太刀を出して飾れと呼び掛ける体である。「穴いちに塵うちはらひ草枕　越人　ひいなかざりて伊勢の八朔　其角」（『あら野』員外）「**Cazari, u, atta.**」（『日葡辞書』）。○**帋幟**「カミノボリ」。紙製の大きな旗の類。ここは端午の節供に立てる五月幟をいい、模様や家紋、武者絵等が描かれた。鯉幟は江戸時代中期以降の考案という。「帋」は「紙」に同じ。「紙旗にいろ〳〵の絵を書て長竿につけ戸外に立、是を幟と云。是又絹布を用て奇羅をなせり。……年斎拾唾云、端午に旗に絵かきて門に立て邪鬼をさるは、帝・蚩尤が形をはたに書て邪鬼をふせがれたり。蚩尤旗といふと古今註にしるせり」（『滑稽雑談』）「なよ竹の末葉残して紙のぼり　キ角」（『韻塞』五月）「**Nobori.**」（『日葡辞書』）。

大意 端午の節供とあって、あたりには紙幟が立っている。弁慶の笈や義経の太刀なども、蔵っておかずに飾るがよい。

考 『おくのほそ道』には、しのぶもじずりの石の記事の次に、

月の輪のわたしを越て瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半斗に有。飯塚の里鯖野と聞て尋

〳〵行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が旧舘也。梺に大手の跡など人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。……寺に入て茶を乞へば、爰に義経の太刀弁慶が笈をとゞめて什物とす。

と述べてこの句を出し、「五月朔日の事也」と記している。曾良の『随行日記』には、前掲五月二日のもじずり石の記事に続けて、

一　瀬ノ上ヨリ佐場野へ行。佐藤庄司ノ寺有。寺ノ門へ不入、西ノ方へ行。堂有。堂ノ後ノ方ニ庄司夫婦ノ石塔有。堂ノ北ノワキニ兄弟ノ石塔有。ソノワキニ兄弟ノハタザホヲサシタレバはた出シト云竹有。毎年弐本づゝ同ジ様ニ生ズ。寺ニハ判官殿笈、弁慶書シ経ナド有由。系図モ有由。福嶋ゟ弐里、こほりゟモ弐里、瀬ノウエヨリ壱リ半也。

と、佐藤庄司の旧跡に関係した記事が見える。実際は五月一日ではなく、二日の事なのであった。この句は曾良の『書留』等に載せず、『ほそ道』に先立つ資料がないところから、旅行当時の作ではなくて、『ほそ道』執筆中の作たる可能性が高い。曾良本の『ほそ道』は、はじめ「弁慶が笈をもかざれ帋幟」と書いて「弁慶が」と「笈をも」の「を」を消して、「も」の下、「かざれ」の右傍に「太刀も五月に」と書き添えてあり、句の推敲過程を窺うことが出来る。

奥羽に於ける芭蕉の関心は、能因・西行らの歌枕もさることながら、義経に関わる遺跡に対しても強くあらわれている。平泉の条でそれは最高潮に達するが、それに先立って訪れた佐藤庄司の旧跡もその一つであった。非運の義経に孤忠を尽した佐藤継信・忠信の兄弟、その父が佐藤庄司元治（もとはる）なのである。義経伝説の中の人物として一族の旧跡を弔ったのであったが、『随行日記』によると、佐藤家の菩提寺瑠璃光山医王寺に旅人達は立寄っておらず、寺宝についても「判官殿笈、弁慶書シ経」等があることを伝聞しているに過ぎない。義経の笈を弁慶のものに変えて「弁慶が笈をもかざれ」と案じたが、更にそれに「太刀」を加えて定案としたのは、そこに奥州へ落ちる先達としての山伏姿

の弁慶と、綺羅びやかな甲冑に太刀を佩びた義経の颯爽たる武者姿をイメージしようとしたのであろう。勿論、端午の節供に飾る武者人形の連想がある。下五の「帋幟」は一見取って付けたようで、「紙幟と共に」と訳されることが多いけれども、山本健吉氏が「そこらには紙のぼりや鯉のぼりなどが五月の空にひるがえる景色が目についたのである」（『芭蕉全発句』）とされたように、初五中七の興を支える実景と考えた方が良い。その日付を実際の五月二日ではなく「五月朔日」としたのも、端午の節供も間近い月の初めに設定して、且つきっぱりと簡潔に断定することによって、句の気分を引立てるのに役立っている。即興句に過ぎないが、『ほそ道』という作品の運びの中では、それなりの役割を果しているのである。

武隈の松みせ申せ遅櫻と擧白と云ものゝ餞別したりければ

484　櫻より松は二木を三月越シ　（おくのほそ道）

烏の道・泊船集

むさし野は櫻のうちにうかれ出て、武隈はあやめふく比になりぬ。かの松みせ申せ遅櫻と云けむ擧白何がしの名残も思ひ出てなつかしきまゝに

散うせぬ松や二木を三月ごし　（四季千句）

むさし野は櫻のうちにうかれいでゝ、白かはの關はさなへにこえ、たけくまの松はあやめふく比になむなりぬ

ちりうせぬ松は二木を三月ごし　（真蹟懐紙）

夏季（桜より三月越シ）。

語釈　**○武隈の松みせ申せ遅桜**　「武隈(たけくま)の松見(まつみ)せ申(まう)せ遅桜(おそざくら)」。以下に見えるように挙白の餞別句である。「武隈の松」は、今の宮城県

岩沼市稲荷町にある竹駒神社境内の歌枕。「遅桜」は、普通の花時より遅れて咲く桜。『御傘』には「春にをくれてさくとしても春也」とあるが、和歌では「夏山のあを葉まじりのおそ桜はつはなよりもめづらしきかな」（『金葉集』巻二）など、夏の歌の題材とされることがある。この餞別句は江戸で春のうちに詠まれたものだから、「遅桜」が春であることは明らかである。全体の句意については諸説あるけれども、開花が遅れる北国の桜を想定して、それに呼び掛けたものと見たい。即ち、「北地の遅桜よ。師翁がそちらへ行かれる頃は花も終っていようが、せめては武隈の松を見せて差上げてくれ」の意と解される。「すご〳〵と山やくれけむ遅ざくら　一髪」（『あら野』巻二）「Vosozacura.」（『日葡辞書』）。**○挙白と云もの**　「挙白と云ふ者」。草壁氏。江戸の商家。蕉門の俳人として『東日記』『虚栗』以降作品が散見し、元禄二年には自撰の『四季千句』を刊行した。奥州の産と思われ、或いは武隈の松あたりが故郷だったのかも知れない。**○餞別したりければ**　「餞別」は、ここでは旅立ちに際してはなむけの句を贈ること。「ある人の餞別に」（『あら野』巻七、除風発句「ほとゝぎす」前書）。**○桜より**　この「より」は、時間的な出発点を示し、句を隔てて「三月越シ」にかかる。「桜の頃から」の意。**○松は二木**　「フタキ」。この松は根元から幹が二つに分れて伸びているので「二木の松」とも呼ばれた。「松」に「待つ」を言い掛けてある。「たけくまのまつはふたきをみやこ人いかゞととはばみきとこたへむ」（『後拾遺集』巻十八、橘季通）。**○三月越シ**　「三月越シ」。此処武隈の地に着くまでに、桜の咲く頃から三、四、五と数えて三月を経たことをいう。「三月」に「見つ」を言い掛けた。

大意　江戸を立った桜の頃から、どんなだろうと期待していた二木の松を、漸く三月越しで見ることが出来ました。

考　『鳥の道』と『泊船集』の前書は『ほそ道』と同じであるが、句の方の「二木」を「二本」と誤っており、『芭蕉句選』の「松の二木を」も誤伝と見られる。芭蕉と曾良が福島・飯坂あたりから更に北上して武隈の松を見たのは五月四日であった。『随行日記』に、

一　四日　雨少止。辰ノ尅白石ヲ立。折々日ノ光見ル。岩沼入口ノ左ノ方ニ竹駒明神ト云有リ。ソノ別当ノ寺ノ後ニ武隈ノ松有。竹がきヲシテ有。ソノ辺侍やしき也。古市源七殿住所也。

とあり、当時の様子を窺うことが出来る。別当寺は竹駒寺といった寺で、「古市源七」は、当時の岩沼の領主古内源吉の誤記である。『ほそ道』には、

岩沼に宿る。
武隈の松にこそめ覚る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思ひ出。徃昔むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あるは伐、あるひは植継などせしと聞に、今将千歳のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍し。

と述べた後に、標掲の句文を記している。

「散うせぬ」の形で初めてこの句を収めた挙白撰の『四季千句』は「元禄二己巳歳八月日」の奥付を有し、まだ芭蕉がこの旅で越前あたりを歩いていた頃刊行された書であった。その句文は巻末に別掲されており、既に全体の編輯が終った後撰者の手許に届いたことを示しているようである。「散うせぬ松や」という句形は恐らく最初の案であったろう。『芭蕉全図譜』に紹介された「ちりうせぬ松は」の句形の真蹟懐紙は、「松や」を「松は」とした点が『ほそ道』所載の句形に至る中間案であることを思わせる。『全図譜』解説では、旦々坊なる人の遺稿『奥細道註』（化政期の転写本）に出羽鶴岡で見た真蹟として初五を「散果ぬ」の形で引用した句文は、該真蹟懐紙と同一の物と推定されているが、前書が一致するところから見ても恐らく正しいであろう。江戸時代後期に鶴岡に伝わっていたことになり、解説に指摘する通り、芭蕉が旅中鶴岡あたりで揮毫した可能性がある。これら初案中間案段階の句文を、曾良が何故『書留』等に記録しなかったのかについて、井本博士は「餞別をくれた挙白に対し、道中から送った書簡中に記された句なので、曾良は知らなかったのであろう」（『芭蕉の文学の研究』）と見ておられる。白河の何云に宛てた書簡中に記した「関守の」（Ⅲ480）の句を曾良が『書留』に録している例もあり、この間の事情は明らかでないけれども、伝存の真蹟類が細道の道中書きと見られるところからして、旅中既に「ちりうせぬ松は」の形まで推敲されたことは確かと見てよい。「ちりうせぬ」は、いうまでもなく桜花を背景にした表現であって、桜の花は無情の風に散り失せてしま

うが、「それとは違って散り失せることのない松は」というのである。しかも、この句形では句の季節がはっきりしない憾みがあった。それを『ほそ道』執筆の際に「桜より」と改めて、桜咲く弥生の頃から三月越しの五月ということを明確にして治定したのであろう。

陸奥の歌枕に寄せる芭蕉の関心の背景には、能因と西行の両先人が何時も強く意識されている。この句の中間案の前書に、「むさし野は桜のうちにうかれいでゝ、白かはの関はさなへにこえ、たけくまの松はあやめふく比になむなりぬ」とあるが、白河の関も武隈の松も能因ゆかりの著名な歌枕であって、『ほそ道』武隈の条にも「先能因法師思ひ出」とある程であった。『後拾遺集』巻十八の巻頭には、

則光朝臣のともにみちのくにゝくだりて、たけくまの松をよみはべりける　　　橘　季通

たけくまのまつはふたきをみやこ人いかゞとゝはゞみきとこたへむ

みちのくにゝふたゝびくだりて、のちのたび、たけくまのまつもはべらざりければ、よみはべりける　　　能因法師

たけくまのまつはこのたびあともなしちとせをへてやわれはきつらん

と、この句に深い関わりを持つ歌が二首並んでおり、西行の『山家集』に、

たけくまのまつもむかしになりたりけれども、あとをだにとて、みにまかりてよみける

かれにける松なきあとのたけくまはみきといひてもかひなかるべし

とあるのも、右の季通の歌を踏まえて詠まれている。これらの古歌のあるこの歌枕が、今度の旅で芭蕉のあこがれの対象の一つだったことは想像に難くなく、『おくのほそ道』でも、ここで筆を改めて、「武隈の松にこそめ覚る心地は

すれ」と大変明るい調子で書き出されている気持もよく分るのである。この句を成すに当って、芭蕉が『後拾遺集』巻十八の冒頭を意識したことは、初案「散うせぬ松」が千年の寿を保つといわれるこの木の縁で能因の「ちとせをへてや」につながり、「二木を三月ごし」という秀句仕立てが季通の歌の表現を踏まえていることからも明らかであろう。「松や二木を」を次に「松は二本を」と改めて、季通の歌句の裁ち入れであることを、より鮮明にしてさえいるのであった。現代人の感覚からは遠くなった秀句仕立ても、このように見て来ると、歌枕に思い入れの深い芭蕉にとっては、謂わば必然だったことが肯けると思う。こういう形で作者は歌枕への挨拶とし、兼ねて「武隈の松みせ申せ」と餞別して呉れた挙白へも、「三月越しで見ることが出来ました」と挨拶しているのである。それに、「三月越シ」の語には長途の旅への思いも籠っていて、単なる機智的な言語技巧だけにとどまらない、内容の多面性を持っている。かなり高く評価し得る句といえよう。なお、季語については、初案の「散うせぬ松」を夏季の「松落葉」を利かせたものとし、定案を名所の雑の句とする山本健吉氏の『全発句』の説があるが、芭蕉は「名所のみ雑の句ありたし」と希望を述べただけで、積極的にこれを許容するといったわけではないし、そういう見方は無理が目立つ。昔から「桜の頃から三月越し」で夏五月の句とされており、内容本位で特定の季語を持たないところに芭蕉の表現の自由さを見るべきである。

485　笠嶋はいづこさ月のぬかり道　（おくのほそ道）

中將實方のつかは、みちのく笠しまといふ處にて、道より一里計に有といへど、さみだれ降つゞきて、日もくれに及侍れば、わりなくて過ぬ

かさしまやいづこ五月のぬかり道 （杉浦氏蔵真蹟懐紙）

続蕉影余韻所収真蹟懐紙・西田氏蔵真蹟懐紙・芭蕉翁遺墨集所収真蹟懐紙・曾良書留・卯辰集・猿蓑・泊船集・蕉翁文集・蕉翁全伝附録・芭蕉翁真跡集・奥細道付録・むつのゆかり

夏季（さ月）。

語釈 **○笠嶋はいづこ** 「笠嶋(かさしま)は何処(いづこ)」。「笠嶋」は、今の宮城県名取市愛島(めでしま)の地で、昔の名取郡笠島村を指す。陸奥守として下向した藤原実方(さねかた)が、ここの道祖神の社の前を下馬せずに乗打した為落馬して死んだことが『源平盛衰記』巻七、笠島道祖神事の条に伝えられ、西行の『山家集』にも、

　みちのくにまかりたりけるに、野の中につねよりもとおぼしきつかのみえけるを、人にとひければ、中将のみはかと申はこれがことなりと申ければ、中将とは誰がことぞと又とひければ、さねかたの御事なりと申ける、いとかなしかりけり。さらぬだにものあはれにおぼえけるに、しもかれがれのすゝきほのぐ見えわたりて、のちにかたらんも、ことばなきやうにおぼえて

　くちもせぬそのなばかりをとゞめ置てかれののすゝき形見にぞみる

と見える、所謂「形見のすゝき」の歌枕である。道祖神の社が今もあり、笠島の北約一キロの字塩手には実方の墓がある。それを「いづこ」どの辺かと思い遣る気持である。ここで句切れ。「いづかたにもとめゆかむと、かどにいでて、と見かう見みけれど、いづこをはかりともおぼえざりければ」（『伊勢物語』二十一段）「**Izzuco.**」（『日葡辞書』）。**○さ月のぬかり道** 「五月(さつき)のぬかり道(みち)」。「ぬかり道」は、雨などでぬかるみになった道をいい、「ぬかり」は動詞「ぬかる」の連用形である。「さ月の」とあるので、梅雨の長雨で泥濘になった様子が思われる。「霖雨の後の道いと泥濘(ヌカリ)て」（『近世紀聞』巻八ノ二）。

大意 実方や西行ゆかりの笠島はどの辺だろうか。思いを残して私は梅雨(つゆ)時のぬかった泥道をたどって行く。

考 「中将実方のつかは、みちのく名とり郡笠しまといふ所にて、みちより一里ばかりにあり。ゆきてみむことをねがへども、さ月のあめ降つゞきて、みちもいとあしければ、わりなくてすぎぬ」（『続蕉影余韻』所収真蹟懐紙）「みちのく笠嶋の郡に入て、藤中将実方の塚の跡はと尋侍しに、岩沼の宿より左りの方一里計にありといへり。彼その名ばか

りをとゞめをきてかれ野ゝ薄とよみけむ、今はおりふし青み茂りて、またあはれさも増るべしと、しきりになつかしく侍れども、此ごろのさみだれ降つゞきて道いとあしく、足などもいたくはれて、いとくるしければ、たゞその筋をはるかにみやりて過るに」（西田氏蔵真蹟懐紙）「中将真(ママ)方のふるつかは、みちのく名とり郡笠しまと云処に有。道より一里ばかりにて程ちかしといへ共、さみだれ降つゞきて、其日もやゝ暮に及侍れば、わりなくて見過し侍る」（『芭蕉翁遺墨集』所収真蹟懐紙）「中将実方の塚の薄も道より一里ばかり左りの方にといへど、雨ふり日も暮に及侍れば、わりなく見過しけるに、笠嶋といふ所にといづるも五月雨の折にふれければ」（『曾良書留』）「中将実方の塚は、みちのく名取郡笠島と云所にて、道より一里ばかり侍るといへど、雨しきりにふりて日もくれかゝりければ」（『卯辰集』）「奥刕名取の郡に入て、中将実方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左りの方、笠嶋といふ処に有とをしゆ。ふりつゞきたる五月雨、いとわりなく打過るに」（『猿蓑』）「奥刕かさしま」（『泊船集』）「藤中将真(ママ)方のつかは、みちのく名取郡かさしまといふ処にありとかや。枯野ゝ薄とよみ侍る西上人のうたさへぞかなしびのかずにくはゝりて、あはれに覚え侍れば、ゆきてみむ事しきりなれども、この比降つゞきたる五月雨に道いとあしければ、わりなくてすぎぬ」（『蕉翁全伝附録』）「藤中将さねかたのつかは、みちより一里ばかり、笠嶋といふ処にありといへど、さみだれ降つゞきて、みちもいとあしければ、わりなくみ過してとをりぬ」（『芭蕉翁真跡集』）等の前書がある。『おくのほそ道』を除いて句形は何れも「かさしまや」であるが、菊本直次郎氏の所蔵品を録した『続蕉影余韻』所収の真蹟（今は所蔵者が変っている）は「かさしま」の下が欠字になっている。この部分は蝕損とも見られるが、或いは「や」に不審を感じた何者かが、さかしらに削ったのかも知れない。何れにせよ、もとは「や」の文字があったと見られる。曾良の『書留』には「泉や甚兵ヘニ遣スの発句前書」と題してあり、『随行日記』を参照すると、五月七日に仙台の甚兵衛に書き与えたものの写しと思われる。『随行日記』には五月四日の条、武隈の松の記事の続きに、

〇笠嶋（名取郡之内）　岩沼・増田之間、左ノ方一里斗有。三ノ輪・笠嶋と村並而有由。行過テ不見。

とあり、恐らく芭蕉達が笠島への道を尋ねた処が、既にその方への道を通り過ぎてしまっていた為に、今更後戻りも出来なかったというのが真相であろう。句は四日から七日までの間に「かさしまや」の形の初案が成り、道中処々でもいろんな前書で書いていたが、『ほそ道』執筆に当って「笠嶋は」と推敲したのである。「や」はこの場合疑問の助詞で、「いづこ」の所で句は切れるのであるが、「や」とすると切字と紛らわしい。「は」ならば此の難がなくて、疑問の意味も明らかなのである。

『ほそ道』では、飯塚から桑折を経て伊達の大木戸を越す一条で旅の覚悟を強調した次、武隈の松の条の前に、

鐙摺、白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中将実方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、是より遥右に見ゆる山際の里を、みのわ・笠嶋と云、道祖神の社・かた見の薄今にありと教ゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よ所ながら眺やりて過るに、簑輪・笠嶋も五月雨の折にふれたりと

という文の後に「笠嶋は」の句を出している。笠島は武隈の松よりも北方で、『日記』に於いても松の記事の方が前に書かれているのに、『ほそ道』で逆置されている点については、様々な考え方があるが、思うに単なる錯誤ではあるまい。飯塚の温泉から伊達の大木戸まで苦労の多い旅を叙した続きに、「さ月のぬかり道」に難渋する自らの姿を置き、次に「武隈の松にこそめ覚る心地はすれ」と二木の松の歌枕を見得た喜びを筆を改めて叙して、仙台の名所見物の記事へとつないで行く、紀行の布置按配への考慮を優先させた結果だったのであろう。なお、『ほそ道』に笠島が街道の右の方と書かれているのは誤りで、諸種の前書類に見える通り左でなければならない。

実方は昔奥州の地に流離した貴種の一人で、そのはかなくなった跡を訪うた西行の歌も残る笠島の地に対する芭蕉の思いを見るべき句である。「いづこ」で切れる上下二つの表現は、それぞれ別の事であるけれども、前書を参照することによって、その間の消息を理解するのに支障はない。笠島は何処と思いを残しつつ「さ月のぬかり道」を行く旅人の実情は苦しいものであったろうが、『ほそ道』では「簑輪・笠嶋も五月雨の折にふれたり」と洒落のめしてい

る。だから、句の表現としては「笠嶋」は、「さ月のぬかり道」の背景にある「五月雨」の縁語なのであった。こうして、泥道に行き悩む旅の実際は微苦笑に包まれ、俳諧的ユーモアが発揮されることになる。歌枕をめぐる古人への思いと、そういう即興的洒落との綯い交ぜになった味わいを見逃してはならない。

486

あやめ艸足に結ん草鞋の緒　（おくのほそ道）

あやめ草紐にむすばん草鞋の緒　（泊船集）

鳥の道

夏季（あやめ艸）。

語釈　**○あやめ艸**　「艸」は「草」の古字。漢名白菖。端午の節供に軒に葺いて邪気を払う。「あやめ」（Ⅰ*94*）に同じ。「ふきそゆるやねのくれはやあやめ草」（『毛吹草』巻二）。**○足に結ん**　「足に結ばん」。あやめ草を足に結ぼうというのである。**○草鞋の緒**　「草鞋の緒」。「草鞋」は、旅などに用いる草履のような藁製の履物。「草鞋」（Ⅰ*211*）に同じ。その爪先に出した長い紐が「緒」で、それを周囲の乳に通して、しっかりと足に纏わせる。「てんじやうまもりいつか色づく　去来　こそ〳〵と草鞋を作る月夜さし　凡兆」（『猿蓑』巻五）「**Varagi.**」（『日葡辞書』）。

大意　風流な紺の染緒の草鞋をいただいた。邪気を払うあやめ草を足に結んだ気になって、また旅を続けよう。

考　『おくのほそ道』には、

名取川を渡て仙台に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て知る人になる。この者年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて一日案内す。……猶松嶋塩がまの所〻画に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其実を顕す。

としてこの句を出し、『鳥の道』も「仙台に入てあやめふく日也。旅宿に趣き、画工嘉右衛門と云もの、紺の染緒付

たる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰にいたりて其実をあらはす」と前書している。草鞋を贈られたことは、『随行日記』五月七日の条に、「夜ニ入加衛門（ママ）・甚兵へ入来。……ほし飯一袋、わらぢ二足加衛門持参。翌朝の り壱包持参」と見えるので、七日夜のことと知られる。但し、句は『書留』をはじめ『ほそ道』以前の資料に見えず、元禄五、六年頃『ほそ道』執筆中の作たる可能性が大きい。『泊船集』の中七「紐にむすばん」は例の杜撰である。加右衛門は奥羽俳壇の大立物大淀三千風の門人で和風軒加之と号した人。板木彫刻を業とし、屋号を北野屋といった。芭蕉は仙台に着いて三千風の消息を尋ね、当人は旅に出て留守であったが、その弟子の加之と知合になったのである。彼の家は『随行日記』五月五日の条に「国分町ゟ立町へ入、左ノ角ノ家の内」とあり、芭蕉の旅宿のあった国分町から程近かった。

一句の趣向は、加右衛門から贈られた「紺の染緒つけたる草鞋」を賞美するにあったろう。端午の節供に軒に葺くあやめは、「今日婦人女子たはむれに菖蒲を頭上に挿み、又腰にまとふ。如此すれば病を除くと俗にいひならはせり」と『日本歳時記』（貝原恥軒・益軒編、貞享五年刊）にあるように、身につけることもあったけれども、文字通り草鞋の緒にあやめ草をつけて足に結ぼうと解しては、「さればこそ風流のしれもの」と激賞した折角の紺の染緒が一向に生かされない。それなら紺色をあやめの色に譬えたか、或いは紺色からあやめの色を連想したものかというと、黄緑色の花を密生させるあやめ草と紺色とは色感がかなり異なる。この点については、染緒にあやめを象徴させたとか、「紺色との連想で言われているので、あるいはハナアヤメをさすとも考えられる」（『芭蕉全句』）「紺の染緒のことは言外にこめて、匂うような紺色と菖蒲の香りとの映りを賞している」（『芭蕉全発句』）等いろいろの考え方があり、

ヒントは、帷子（かたびら）のようだ。今の歳時記では帷子は盛夏の季だが古くは五月（陰暦）とし、これは、端午から用いはじめるというしきたりがあったからだ。色もまず浅葱で、七夕・八朔に白を着るから、青は、云うなれば皐月のくらしの色である。帷子とまではゆかないが、せめて草鞋の緒になりと、道中の無事を祈るささやかなまじ

ないをさせてもらおう、と読めば加右衛門の送別の情はよくわかる。
いかにも画工らしい気くばりだが、芭蕉は虚を衝かれたに違いない。……句に「あやめ草」とまず冠したのは、きみのもてなし（五月の色を贈る情）はたしかに見届けたから、しっかりと私の心にゆわえてゆこう、と告げているのだ。紺の染緒にアヤメなんかを連想したからではない。（『芭蕉発句新注』）
という安東次男氏の説も見える。兎に角実際の花の色に執しては、紺色との差は如何ともし難いので、右にいう紺を五月の色として、其処に「あやめ艸」とのつながりを見出すのは、面白い見方だと思う。「足に結ん」は興じたままで、実行するわけではないが、あやめ草を足に結んだ気になって、これからも旅を続けようというところに、加右衛門の風流に感激した芭蕉の心のはずみが出ているのである。旅の当座でなく後年の作としても、『ほそ道』の中に置けば、挨拶句の気息は十分に読み取れる。

487

嶋〳〵や千々にくだきて夏の海　（蕉翁全伝附録）

奥細道付録

松嶋は好風扶桑第一の景とかや。古今の人の風情、この嶋にのみおもひよせて、心を盡したくみをめぐらす。をよそ海のよも三里計にて、さま〴〵の嶋〳〵奇曲天工の妙を刻なせるがごとく、をの〳〵松生茂りて、うるはしさ花やかさいはむかたなし

（前書略）

嶋〳〵や千々にくだけて夏の海　（蕉翁文集）

夏季。

語釈　○**松嶋**　既出（Ⅲ455等）。○**好風扶桑第一の景とかや**　「好風扶桑第一の景とかや」。日本第一の好い風景の処とかいわれている、の意。「好風」は「好風景」に同じ。「扶桑」は、中国の古伝で東海中にあるといわれた神木の名で、延いてはその地の名とされ、終には日本の異称となった。『おくのほそ道』にも「抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして」と、似た叙述が見える。「興を催し景をさぐるいとまあらじ」（『去来抄』先師評）「Fusŏ, l, fusŏcocu.」「Dai ichi.」「Tocorono qeiga yoi.」（『日葡辞書』）○**古今の人の風情**　「古今の人の風情」。この「風情」は、「風雅の情」という程の意。「古今人ノ死生ハ定タコトゾ」（『史記抄』十六）「ヲカノヤニユキカフ船ヲナガメテ、満沙弥ガ風情ヲヌスミ」（『方丈記』）「Cocon, Inixiye ima.」「Fujei.」（『日葡辞書』）。○**おもひよせて**　「思ひ寄せて」。風雅の情を松島だけに結び付けて、という意であろう。もとより強調した表現である。「朧月の青物に四時不変の国をおもひよせたるも奇特」（『常盤屋の句合』二十五番）。○**心を尽したくみをめぐらす**　「心を尽し巧みを廻らす」。精魂を尽し、技巧を駆使する、の意。「花すこし遅ければ、此木やわぶると心をつくし育てしに」（謡曲「鉢木」）「鷹匠色々工夫をめぐらし」（狂言「禁野」）「Cocorouo tçucusu.」「Facaricotouo megurasu.」（『日葡辞書』）。○**をよそ海のよも三里計**　「凡そ海の四方三里計」。松島湾の面積が三里四方ほどであることをいう。「をよそ」は「およそ」の仮名ちがい。『おくのほそ道』には「東南より海を入て江の中三里、浙江の潮をたゝふ」と見える。「庭上の松をみるに、凡千とせもへたるならむ」（『野ざらし紀行』）「四方に春きたぞみな見よ西東」（『毛吹草』巻一）「Voyoso.」「Yomo.　Xifô.」（『日葡辞書』）。○**奇曲天工の妙を刻なせるがごとく**　「奇曲天工の妙を刻み成せるが如く」。「奇曲」は、珍しい趣。「天工」は、自然の工み。『おくのほそ道』にも「造化の天工」の語がある。島々の珍しい趣は、自然の工みの美しさを極めて刻み上げたようで、の意。「ごとく」の所、『蕉翁文集』には「ごとし」となっている。「物の妙を究る時には、自然に感を催す理なれば」（『平家物語』巻三）「松風の饗に酒を飲つくし　閑水　ほとけを割む西谷の僧　東藤」（『熱田三歌仙』）「Meô, l, meôna.　Tayena.」（『日葡辞書』）。○**をの〱松生茂りて**　「各々松生ひ茂りて」。それぞれの島に松が生い茂っていて。「松島」の名はここから出た。「をの〱」は「おの〱」の仮名ちがい。「をの〱心ざし尽すといへども」（『更科紀行』）「御前のせむざい、心にまかせてたかくおひしげりたり」（『古本説話集』上）「Vonovono.」「Voixigueri, ru, etta.」（『日葡辞書』）。○**うるはしさ花やかさ**　「麗はしさ花やかさ」。その景色の美しさ華やかさをいう。『蕉翁文集』には「うるわしき花やかさ」。「畳なづく　青垣　山籠れる　大和しうるはし」（『古事記』中）「月はまつほどもなくさし出、湖上花やかにてら

す」（芭蕉「堅田十六夜之弁」—『芭蕉庵小文庫』）「Vruuaxisa.」「Fanayacana.」（『日葡辞書』）。○**いはむかたなし**　「言はむ方無し」。言いようがない、形容のしようがない、という絶賛の表現。「此浦の実は秋をむねとするなるべし。かなしささびしさいはむかたなく」（『笈の小文』）。○**嶋〱**　「シマジマ」。「Ximajima.」（『日葡辞書』）。○**千ゝにくだきて**　「千ゝに砕きて」。内海中に散らばる小島の形容である。「くだきて」の主語は「夏の海」とも考えられるが、それよりは前書の内容からして、造化（造物主）が島々を細かく砕いたという見方をしたものと思われる。「月見ればちゞにものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」（『古今集』巻四、大江千里）「嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ」（『徒然草』三十段）「Chigino nasaqe.」「Cudaqi, u, aita.」（『日葡辞書』）。

大意　湾内の島々は、造化の神が細かく砕いて夏の海にばらまいたようだなあ。

考　『奥細道付録』には「奥州松島にて」と前書がある。『蕉翁全伝附録』に摸写を収める真蹟の原物は今伝わらないが、『蕉翁文集』に土芳が「此前書・句、細道になし。別にしるされ侍るか。いかゞ、不故（ママ）。書捨の中より見出て此に出し侍る」と付記しているのによって、彼が「書捨」の中から見出したものがそれに当り、『文集』も同じものに拠ったと認められる。ここでは『文集』の前書は略し、『全伝附録』との異同を［語釈］の項に摘記するに止めた。この前書は『陸奥鵆』に収める「松島弁」、『本朝文選』に収める「松嶋ノ賦」等、同じ題材の文章に比して最も短く、且つ素朴な形態になっているので、最も早い時期の成立と推定される。但し、曾良の『書留』や『日記』に見えないところから、旅中の成立とは限らず、時を経て後に松島を材にした独立の文を書こうとした折か、或いは『ほそ道』の松島の条を執筆した頃まで、年代は降るかも知れない。土芳が「師、まつ嶋に句なし。大切の事也」（『三冊子』わすれみづ）といっているのも留意すべきで、元禄二年夏の条に配したのは、飽くまで一つの可能性としてである。曾良の『随行日記』によれば、松島見物は五月九日のことであった。

「千ゝにくだきて」という中七は、前書の「さまぐ〱の嶋〱奇曲天工の妙を刻なせるがごとく」を承けて造物主を主体とし、それが島々を砕いて夏の海に散らばらせたと他動態の表現にしたものであろう。『ほそ道』松島の条に、

「ちはや振神のむかし大山ずみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ」とある自然観に通ずるものがあらわれているが、句としては観念が先行していて物足りない。『文集』の「千々にくだけて」であると「嶋〱」が主体となって自然描写の叙景句になるけれども、ただ無数の島々が夏の海に散らばっているというだけでは、物足りなさは同じである。それに、『文集』は芭蕉の「書捨」に拠ったのだから『全伝附録』と同源であって、「くだけて」が伝写の誤りであることは疑いを容れない。この異同の取るに足りないことは明らかであろう。兎に角芭蕉はこの句を不満として『ほそ道』には採録せず、松島の条には「松島や鶴に身をかれほとゝぎす」という曾良の句だけが収められた。時代の降る『俳諧一串抄』(亦夢著、天保元年刊)に「松島や千々に砕て夏の海」とあるのも誤伝である。

奥刕高館にて

488　夏草や兵共がゆめの跡（猿蓑）　——おくのほそ道・白馬・奥細道付録

平泉古戦城(ママ)。路通が語りしを聞て

夏艸や兵どもの夢の跡（生駒堂）　——渡し船・泊船集

夏季（夏草）。

語釈 **○奥刕高館**　「アウシウタカダチ」。「奥刕」は、白河の関・勿来の関以北の地、陸奥国をいう。「刕」は「州」の異体字。「高館」は、今の岩手県西磐井郡平泉町平泉にある丘。東側を北上川が南流し、平泉中が一望出来る独立丘陵で、頼朝の追求を逃れて来た義経の居館があったと伝えられる。「笠ぞ露奥州之住人十苻の菅　蝶々子」（『誹枕』下）。**○夏草**　夏に生い茂る諸種の草の総称。既出（Ⅲ474）。**○兵共がゆめの跡**　「兵共が夢の跡」。「跡」は、義経の遺跡としての高館の地を指す。其処で戦った義経の臣や

藤原氏の武者達が思い描いた功名の夢、栄華の夢、それらが夢の如くはかなく消えたものとして「ゆめの跡」といった。「が」は所有格で「ゆめ」にかかる。「東八箇国の兵ども皆御供に参るなれば」（謡曲「小袖曾我」）「Tçuamono.」（『日葡辞書』）。

大意 高舘には夏草が深く生い茂っているばかり。ここが嘗ては武者達が功名の夢を描き、それもはかなく消えた遺跡なのだ。

考 『白馬』（洒堂・正秀撰、元禄十五年刊）には、「さてもそのゝち御ざうしは、十五と申はるの比、鞍馬の寺を忍び出、あづまくだりの旅衣、はるけき四国西国も、此高舘の土となりて、申ばかりはなみだなりけり」と『十二段草紙』の一節を採った前書があり、『奥細道付録』も同様である。『白馬』には「此一章得古翁真蹟。如墨未乾也」と注しているから、真蹟に拠ったものと認められ、謡曲の一節を前書にするのと同じ趣向だったのであろう。『奥細道付録』には、この真蹟が当時越中井波に伝存する由が見える。曾良の『随行日記』によれば、芭蕉は五月十二日の夕刻に一関（現岩手県一関市）に着き、翌日平泉に赴いて見物している。

一　十三日　天気明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。一リ山ノ目一リ半平泉へ（伊沢八幡壱リ余リ奥也。）以上弐里半ト云ドモ弐リニ近シ。高舘・衣川・衣ノ関・中尊寺・光堂（別当案内／金色寺）・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等ヲ見ル。……

云々とあるのがその記事であるが、「夏草や」の句を曾良は『書留』にも記録しておらず、蕉門の撰集としては元禄四年五月に成った『猿蓑』が初出であった。更に注意すべきは河内の燈外の撰した『生駒堂』であって、この書は来山の跋が元禄三年十一月に書かれている。阿誰軒の目録に八月刊とあるのは、その理由を詳らかにしないが、何れにせよ三年中の成立には違いあるまい。本書は「夏艸や」の句を収めた板本として最も古いもので、その前書によれば路通からの伝聞によってこの句を録したのであった。ところで、路通は元禄二年の冬伊賀滞在中の芭蕉を訪うて以来年末に京・湖南に出て来るまで随侍していたが、翌三年正月三日また伊賀へ帰る芭蕉と別れてからは、年内に会った形跡が無い。この発句は曾良の記録に見えないので旅中の作ではない可能性が高いけれども、こうした路通の動静を

参考にすれば、元禄二年中には成っていたものと見られよう。『生駒堂』所載の句の中七「兵どもの」は、『渡し船』（順水撰、元禄四年刊）にもこの形で伝えるが、何れも他門の集で、『泊船集』は蕉門風国の編ながら、杜撰の聞えの高いものである。且つ、「の」から「が」へ推敲するのは、その意味が那辺にあったか、極めて分りにくい。両句形は推敲関係ではなく、「の」は「が」の誤伝と見てはじめて釈然とするであろう。『猿蓑』や『おくのほそ道』に見える「兵共が」が唯一の信頼すべき句形なのである。

句は『白馬』所収の真蹟のように『十二段草紙』の一節を前書にすれば、義経の非業の最期を悼んだだけの句とも見られようが、有名な『ほそ道』の文章の中に置けば、句の世界は更に大きなひろがりを持つ。

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高舘にのぼれば北上川、南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高舘の下にて大河に落入。康衡等が旧跡は衣が関を隔て南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり。城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

直接的には句の「夏草」が文の「叢」に、「兵ども」が「義臣」に、「夢」が「功名一時」にそれぞれ照応するけれども、句の持つ無常の世に対する深い詠嘆は、「三代の栄耀一睡の中」「秀衡が跡は田野に成て」等にも反響して、「国破れて山河あり」の杜詩の余情を反芻せしめるであろう。潁原博士のいわれたように、

「兵どもが夢の跡」は、表の意としては義経主従の戦死にかゝつてゐるやうだが、芭蕉の胸中にはその間おのづから、藤氏三代の栄華が夢のごとく亡びてしまつた儚さを思ふ情が去来してゐたにちがひない。……義経が戦死して間もなく泰衡もまた頼朝に亡ぼされたのであるから、義経主従と藤原氏一族との運命は、いはば歩みを一にしたわけである。芭蕉が……この両者の没落を一つにして考へてゐたと見るのは、むしろ自然であらう。（「奥の細道俳句研究」）

ということになる。「夢」は功名の夢であり、栄華の夢であり、はかなく消え去る無常の夢なのだ。昔を偲ばせる何物もない高舘の丘上に立って、芭蕉の見た物は生い茂る夏草のみであった。加藤楸邨氏が『芭蕉講座』発句篇で指摘された如く、句をまとめるに当って、芭蕉は描写を全くしようとしていない。ただ「夏草や」と投げ出して、あとは一気に「兵どもが夢の跡」と感慨を抒べるだけである。「功名の儚さも栄華の空しさも、たゞこの生ひ茂る夏草の中に観ぜられてゐるのである」（穎原博士「俳句研究」）。しかも、乱離たる「夏草」は、嘗て其処を往来した人馬の雄叫びや剣戟の響き、或いは叢に累々と折り畳なる死屍を彷彿とさせる働きを持つ。こうした表現態度について楸邨氏が、

……こうした心象の構成は、芭蕉の代表的な発想法である。芭蕉は一事一物をそのまま描く人ではなく、その一事一物を通して、あらわれているものの背後にうがち入り、その奥のものを探り求めてゆく傾きが強かった。これは「造化」の思想を基底としたその芸術観に立って、かくれたところに確かな存在を見、あらわれたものはその生生化々する相であると観ずるところからくる。（『芭蕉全句』）

と考察されているのも良い。こういう心的態度を失って、描くことのみに汲々とする現代人からは、平凡な懐古の感傷として看過されてしまいそうな句であるが、実は芭蕉ならでは成し得ない柄の大きい句なのである。芭蕉はこうした形で、事志と違った往古の幽魂を弔ったともいえよう。

489　五月雨の降のこしてや光堂　（おくのほそ道）

鳥の道・泊船集

夏季（五月雨）。

語釈　○**降のこしてや**　「降り残してや」。「降り残す」は、其処だけ雨が降らないこと。前の「降り残す」（Ⅱ*392*）が、其処だけ降る意味であったのとは逆である。「降る」に「経る」「古る」を言い掛けた。「や」は疑問に詠嘆を含み、下へかかって行くが、一応

の切字である。○**光堂**「ヒカリダウ」。奥州藤原氏の初代清衡が、天治元（一一二四）年に平泉の中尊寺境内に建てた方三間宝形造（ほうぎょう）りの阿弥陀堂。「金色堂（こんじき）」ともいう。清衡・基衡・秀衡三代の棺を須弥壇の下に納め、総金箔仕上げで、内陣にも螺鈿や蒔絵など漆芸・金工芸を駆使して豪華に荘厳されている。鎌倉期の正応元（一二八八）年鞘堂をかけて保存がはかられた。今は平安の昔の状態に復原され、近代的設備が施されて、鞘堂は別の所に移築されている。上の「のこしてや」を承けて「光る（ひか）」が掛けられているであろう。［考］参照。「**Ficari, u, atta.**」（『日葡辞書』）。

大意 何百年にもわたって降った五月雨が、この御堂のところだけは降らずに残したのかなあ。光堂は今も昔のままに燦然と光り輝いている。

考 「兼て耳驚したる二堂開帳す」（『鳥の道』）「兼て耳驚したる二堂開帳す。ほそみち」（『泊船集』）等、『ほそ道』の文の一節を採った前書が見える。さきに引いた曾良の『日記』の記事に見えるように、芭蕉が中尊寺の光堂を見たのは五月十三日であったが、この句は曾良の記録をはじめ『ほそ道』以前の資料がなく、真蹟類も伝存しない。従って旅中よりは元禄五年以降の『ほそ道』執筆時の作たる可能性の高いものである。曾良本『おくのほそ道』では最初、

五月雨や年〳〵降て五百たび

と書き、「降て」の「て」を見せ消ちして右傍に「も」と記し、「や年〳〵降も五百たび」を見せ消ちして右傍に「の降残してや光堂」と書いて、更に「や」以下の訂正箇所全体を抹消している。これによって、初案を先ず「降も」と直し、次いで定案に達した推敲過程が窺われる。曾良本にはまた、この句の次に「蛍火の昼は消つゝ柱かな」の句を書いて抹消してあり、これは棄てられた句案であった。

初案の「五月雨や年〳〵降て五百たび」或いは「年〳〵降も五百たび」は、光堂が成ってから芭蕉が訪れるまでの歳月を約五百年と見たか、それとも奥州藤原氏が滅びた文治五（一一八九）年から五百年と見たか、恐らくは後者の可能性が高いであろうが、「五月雨」を一年一回として「五百たび」といったのである。数の辻褄を合わせた趣向の稚拙

は兎も角、この句案では肝腎の「光堂」が全くあらわれず、ただ五月雨が年々降って五百度に至ったというまでである。定案の「五月雨」が眼前の自然現象であるよりも、歴史的回顧の意味が大きいことの参考にはなるが、これは当然改められなければならない。「降残してや光堂」の句案で「光堂」が句面に登場することによって、この句ははじめて安定したわけである。

『ほそ道』の文に、

七宝散うせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て甍を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

とあるように、既に滅びて久しい奥州藤原氏の栄華の記念たる光堂が、五百年の星霜を経てなお昔のままに残っているということは、芭蕉にとって尋常ならぬ驚異であった。その感懐を述べるに当って、作者は季物たる「五月雨」を採り上げ、光堂と対照させる。五月雨は当季であり、この前日一関に入る時には合羽も徹るばかりの土砂降りに遭ったばかりだったが、句中ではそういう現実の雨であるよりも、五百年来この平泉の地に降った年々の五月雨、凡ての物を降り腐し「頽廃」せしめて懐古の情をそそるものとしてである。その暗鬱な雨と光彩燦爛たる光堂が対照されているけれども、その光堂は鞘堂に覆われていて、華麗なその荘厳を実際に見ることは出来ず、飽くまで芭蕉の想裡にある幻影の光堂であった。句中の凡ては現実の存在から離れた想裡の物であることが納得出来よう。見物当日の天候も、さきに引いた通り「天気明」であって、五月雨は降っていなかった。

五百年来降った五月雨も此処だけは降り残したのかという表現は極めて巧みであって、歌俳の実作者からは、……固より芭蕉の主観には相違ないが、どこか言葉の文に興味をもち過ぎたといふ観がある。この句が人口に膾炙されるやうになつたのも、実はそこから来てゐるのである。しかし一片の洒落に堕さなかつた所以は、芭蕉の詩的情操がそれを済つて居るからである。（半田良平氏『芭蕉俳句新釈』）

といった見方が出ている。確かに近代以降こうした表現は流行らなくなったけれども、この句で「光堂」を中心に据え、初案以来の歴史の転変を象徴する「五月雨」をも生かそうとした時、「降り残す」という表現は半ば必然的に導かれたものではなかったか。更に「てや」という纏綿とした余情を持つ言い廻しも芭蕉独得の肌触りを持っている。趣向・表現・用語等凡てにわたって、この句は如何にも芭蕉的特色を発揮したものと言えよう。なお、「てや」について潁原博士は、「文法的にいへば、下に「光堂の存する」と結辞を補つて解すべき語法」（「奥の細道俳句研究」）とされたが、私は寧ろ「光堂」の名にかけて「降り残してや光る」とした方が良いのではないかと考えている。

490 蚤虱馬の尿する枕もと　（おくのほそ道）

韻塞・陸奥鵆

蚤虱馬のばりこくまくらもと　（泊船集）

今日の昔

夏季（蚤）。

語釈 ○**蚤**　夏の季語。既出（Ⅰ*60*）。○**虱**　蚤と共に昔の旅には縁の深いものであった。既出（Ⅰ*248*）。○**馬の尿する枕もと**　「馬の」は、主格。「尿」は普通「シト」と訓まれているが、曾良本『ほそ道』には「ハリ」（ばり）と振仮名があり、この訓みは尊重しなければならない。小便を意味する卑語で、『日葡辞書』は「バリ」を「馬の小便」の意とし、また下賤の者についても用いられるとしており、これに対して「シトスル」は「一般に子供についていう言葉」と解説している。「ばり」の場合、それに続くのは「こく」「つく」であって、「ばりする」とはいわないという説もあるが、他ならぬ曾良本がその反証になると思う。敢えてこの語を用いたところに俳諧性が認められ、僻地の山中という地方色も出ることになる。「尿前」の地名との縁は用字だけからも窺えよう。奥羽地方に多い農家の造りとして、人の起居する母屋の棟続きに馬小屋があり、さてこそ旅人の枕元に馬が小便をする音が響いて来るのである。「仕掛（シカケル）……犬は道のはたの石にばりをしかけ」（『類船集』）「初鴈に行燈とるなまくらもと亡人落梧」（『猿蓑』巻三）「**Bariuo tçuqu.**」「**Macuramoto.**」（『日葡辞書』）。

大意　深い山中の宿で一晩中蚤や虱に責められ、枕元には馬が小便をする音まで響いて来る。いやはや散々の体たらくだ。

考　「宿山中」（『韻塞』）「貧家舎」（『陸奥衛』）等の前書がある。『ほそ道』では平泉の記事の次に、南阝道遥にみやりて岩手の里に泊る。小黒崎・みづの小嶋を過て、なるこの湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて、漸として関をこす。大山をのぼつて日既暮ければ、封人の家を見かけて舎を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

とあり、この背景にある事実は、

一　十四日　天気吉。一ノ関ヲ立。……岩手山（伊達将監）やしきモ町モ平地。上ノ山は正宗（ママ）ノ初ノ居城也。杉茂リ、東ノ方大川也。玉造川ト云。岩山也。入口半道程前ゟ右へ切レ、一つ栗ト云村ニ至ル。小黒崎可レ見トノ義也。遠（二リ余）キ所也故、川ニ添廻テ及暮。岩手山ニ宿ス。……

一　十五日　小雨ス。

宮（壱リ半此辺ハ真坂ゟ小蔵ト云かゝりテ）◯かぢは沢（此宿へ出タル、各別近シ。）

◯此間小黒崎・水ノ小嶋有。名生貞（ミヤウサダ）ト云村ヲ黒崎ト所ノ者云也。其ノ南ノ山ヲ黒崎山ト云。名生貞ノ前、川中ニ岩嶋ニ松三本、其外小木生テ有。水ノ小嶋也。今ハ川原向付タル也。古へハ川中也。……

（壱リ半）尿前（シトマヘ）（シトマヘ、取付左ノ方、川向ニ鳴子ノ湯有。沢子ノ御湯成ト云。仙台ノ説也。）関所有。断六ケ敷也。出手形ノ用意可有之也。

中山（壱リ半村山郡小田嶋庄小国内）◯堺田（出羽新庄領也。中山ゟ入口五六丁先ニ堺杭有。）

◯十六日堺田ニ滞留。大雨。宿。（和泉庄や新右衛門兄也。）

◯十七日快晴。堺田ヲ立。

と曾良の『随行日記』に記されている。芭蕉達は一関から南下して岩出山（宮城県玉造郡岩出山町。『ほそ道』にいう「岩手の里」。『日記』には「岩手山」とある）に泊り、奥羽の脊梁山脈の中へと分け入った。今の玉造郡鳴子町名生貞の東端、岩出山町との境にある小黒ヶ崎山の東南に延びる尾根が江合川（えあい）に接し、川の狭窄部を形成する処が歌枕の小黒崎・水の小嶋であって、後者は嘗て中洲であったものが、江合川右岸の河原に続いたのだという。『日記』のこの一連の記述はもとより土地の者からの聞書であろうが、これらの歌枕に関して実地に即して述べた最も古い資料だそうである。さて、句にも縁のある尿前宿は今の鳴子町尿前に当り、西端に伊達藩の関所が置かれて、出羽への出入りをきびしく取締っていた。出羽の方へ行く者は「出手形ノ用意」が必要だったので、その「断」（ことわり）（理由を中告することと。手続）が難しく、『ほそ道』の「関守にあやしめられて、漸として関をこす」という記述にもなったのである。兎に角そこを過ぎて、いわゆる中山越の道をとり、新庄藩領の堺田（現山形県最上郡最上町）に宿った。『随行日記』十六日の条に「和泉庄や」とあるのは、芭蕉達の泊った家が堺田の庄屋和泉（いずみ）家だったことを意味するらしい。『ほそ道』には「三日風雨あれて」とあるが、実際は五月十五、十六の二晩大雨に降りこめられて止むなく逗留したので、十七日には快晴となって出立している。「蚤虱」の句は、この堺田滞留中の体験がもとになっているのである。

この句を収める諸種の板本が凡て『おくのほそ道』を元にしていることは、井本博士の「『おくのほそ道』中の発句の制作時期」（『芭蕉の文学の研究』）に考察された通りであろう。旅中の曾良の記録等、作品としての『ほそ道』以前にさかのぼる資料が無いとすれば、旅の当座ではなく、『ほそ道』執筆中の句案たる可能性が大きくなる。『泊船集』の異形「ばりこく」は、井本博士も推測されるように曾良本の「ハリ」という振仮名と無関係ではなく、「ばり」という言葉の印象が強かった為に、つい「ばりこく」と誤ったものと思われる。なお、この系統の句形には支考の『俳諧古今抄』に「尿つく」（バリ）と伝えるものもあるが、これも同様の杜撰に過ぎない。

この句に関しては『ほそ道』の句形が唯一信頼するに足るものであるとして、その「尿」を「バリ」と訓むか、

「シト」と訓むか。従来の大勢は「シト」と訓む説が多く、「バリ」説は少数派である。「シト」の方が穏やかな感じであるし、「尿前」の地名との縁を考えれば、「シト」に傾きたくなる理由も分るけれども、曾良本の振仮名はやはり重要であろう。特に近来は、この曾良本の校訂本文が『ほそ道』の決定稿として第一に重視されるようになって来ている。曾良本の初稿に加えられた補訂が凡て芭蕉の手によるかどうかは兎に角、曾良本校訂本文の評価の上昇は、この句の振仮名の見方にも影響して当然であろう。芭蕉が敢えてこの卑語を用いたとすれば、その意図は前述の如く、俳意と地方色の強調にあったと考えられる。

句は、蚤・虱・馬の尿と、むさい物ばかりを三つ重ねて投げ出しただけである。『ほそ道』のこの前後は、山中の艱難を強調しようとする姿勢が著しく、この句が如何に俳諧であるにもせよ、とりわけ汚い物ばかりを並べた意図も、その辺に求められるべきであろう。辺土の行脚の労苦もここまで極まってしまうと、おかしみが生まれて来る。もともと短詩形の発句では、物を提示するだけで、敢えて説明を加えないのが表現上の特色であるが、その手法が対象との間に一種の距離感を生み、余裕を感じさせる。当面の句でも、そういう提示的手法が、むさい物に直面しても、それを苦しがるのでなく、微苦笑を以て眺める作者の余裕を思わせるようになっているのである。切実な情況の中にあって生まれる笑いは、カタルシス的効果を発揮するともいえよう。旅の実況から直ちに生まれた句ではないけれども、『ほそ道』という作品の中でこの場所に置かれたのは、そのような表現効果を意識したものになっていると思う。

491　涼しさを我宿にしてねまる也　（おくのほそ道）

初蟬・菊の香・泊船集・類柑子・十六景・繋橋

夏季（涼しさ）。

語釈　○**我宿**　「我が宿」。○**ねまる**　「くつろいですわる」意の東北方言。梨一の『奥細道菅菰抄』には、「ねまるといふ詞に二義

あり。北国のねまるは、他国にて居（スワ）ると云詞に当るべし。又関東にて卑俗のことばに、寐はらばふ事を、打ねまると云。此句意を考るに、翁の北国の詞を聞給ふは、此行脚の時初なる故に、羽州のねまるを関東のねまると同様に思ひあやまり給ふにや」と考えているが、この「ねまる」を「寐はらばふ」意とするのは、挨拶吟としても相応しくあるまい。山田孝雄博士の『俳諧語談』所収の「ねまるなり」は、この語について最も精しいものであって、それによると、近世の辞書類に「ねまる」を「寝る・寝そべる」の意としたものは一つもなく、「ねまる」は「すわる」が本義であった。穎原博士の「奥の細道俳句研究」では、『東海道名所記』や奴俳諧等同時代の用例を挙げて、『菅菰抄』と同じ両義説をとり、この句の場合は「寝そべる」「安臥する」の意とすべしとあるのも、東北方言に精しくない誤解とすべきである。東条操博士の『全国方言辞典』を見ても、『物類称呼』『御国通辞』『以呂波寄』『浜荻』『片言』『加賀なまり』等の近世の方言集から現代方言に至るまで、奥羽・北陸・山陰地方の「ねまる」は「すわる」ことで、「寝る」意に用いるのは長崎県や鹿児島県にわずかにあるに過ぎないという（高藤武馬氏『奥の細道歌仙評釈』）。「這出て落葉にねまる蛙かな 鶴来 跡衾」（『卯辰集』上）。

大意 この家の涼しさを我が物として、我が家に居るような気分で、くつろいで座っています。

考 「尾花沢清嵐（ママ）亭にて」（『初蝉』）「尾花沢清風亭にて」（『菊の香』）「尾花沢　清風にて」（『泊船集』）等の前書があり、『おくのほそ道』には、山越えをして出羽に出た記事の次に、

　尾花沢にて清風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども、志いやしからず。都にも折〻かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日比とゞめて、長途のいたはり、さま〴〵にもてなし侍る。

と述べてこの句を出している。曾良の『随行日記』によれば、芭蕉は五月十七日の昼過に尾花沢の清風亭に到着し、二十六日まで滞在した。清風は鈴木氏、名は道祐、通称八右衛門。出羽の尾花沢（現山形県尾花沢市）の富裕な紅花問屋で、上方や江戸にも往来して手広く商売をしていた。談林系の俳人としても聞え、既に『後れ双六』（延宝九年刊）『稲莚』（貞享二年刊）『ひとつ橋』（貞享三年）等の撰著があった。貞享期に江戸で芭蕉や曾良とも俳諧に一座しており、お互い相識の間柄である。この句は恐らく尾花沢到着の際の挨拶吟であって、『繋橋』（幽嘯撰、文政二年頃刊）には、こ

の句を立句とした清風・曾良・素英・風流らの連衆による歌仙が収められている。
この句の「涼しさ」に主の「清風」の号との縁があるという見方もあるが、そうすると何かわざとらしい句になってしまう。この語に挨拶の意が籠るというのはよいけれども、号のことは余り強調したくない。ここにあらわされた夏の季節感がこの句では大切なのである。
私も青森県の弘前に住む叔母が、「お平らに」といったような意味で「ねまる」という方言を使ったのを聞いたことがある。清風も芭蕉を迎えての挨拶にこの語を用いたのであろう。それに興を催して早速取込んだ俳諧である。この語には其角も注目していて、『類柑子』（沾洲ら編、宝永四年刊）上所収「ちからぐさ」の文に『ほそ道』の尾花沢の一条を引き、

挙白集ニ、はじめて吾妻にいきける道の記
五日小田原といふ所の宿に泊る。明れば玉だれの小瓶に酒すこし入て、粽めくもの御前にとてさしいづ。あるじの男にやあらん、けふはめでたきせちに候。一盃けしめされ候へかしと、あいだちなくいふも、顔まぼられぬべし。しどけなき事うち語りて、今しばしねまり申べいを、それがしが旦那のえらまからんとて、立ぬるかれがふるまひにつけて　下略
道の記の一体、民語漸くかはるなどいへるにつけて、とみに東国のだみたる詞を一句にして、風流を発されたるこそ、よき力艸成べけれ。

と述べている。これによれば、芭蕉は清風宅を訪ねて聞いた方言に興を催したばかりでなく、かねて愛読していた近世初期の歌人木下長嘯子の『挙白集』の文をもそれに因んで想起して、この先人の心にも和したことになろう。尾形仂氏は右の其角の文を「芭蕉と連衆心をひとしくする者にして初めて可能な指摘」とされ、
芭蕉がこの句を清風の俳筵で披露したとき、芭蕉は清風たちがそこまで読みとってくれることを期待したかど

うかわからない。だが、これを紀行文『おくのほそ道』の中にしるしとどめるとき、芭蕉の心の中には、其角のように、これを長嘯子の「初めてあづまに行きける道の記」と思い比べながら鑑賞する、そういう読みとりかたへの期待がまったくなかったとはいいきれないだろう。(『松尾芭蕉』)

と考察された後、この句に長嘯子の文にある望郷の情まで響かせていたかどうかには問題があるとして、『ほそ道』尾花沢の条に並べた句どもに、出羽の風土に発見した「古代」への賛歌という共通の発想を認め、

……「ねまる」の語を通して長嘯子の旅情と交響しながらも、長嘯子の望郷の思いを「古代」発見の喜びへと屈折させたところに、『おくのほそ道』におけるもう一つの〝俳諧〟があった、というふうに読みとることもまたできなくはあるまい。(同右)

と結んでおられる。傾聴すべき所説といってよかろう。

「涼しさを我宿にして」は、涼しさを我が家の物としての意で、「宿」は一時の旅の「宿り」とはちがう。つまり、清風の家を端的に「我宿」と言いなして、それ程気楽にくつろいでいる気持をあらわしているのである。実際にも有数の豪商だった清風の屋敷の客間は、風通しがよくて涼しかったろうし、山中の嶮路を冒して漸く最上の平野に出た芭蕉が、「志いやしからぬ」旧知に会って、ほっと一息ついた気持も、季節感と共によく味わえる。楸邨氏がいわれたように、挨拶吟でありながら、独詠風で静かな句柄なのも好もしい。安東次男氏は、旅人達が到着当日は清風亭に泊ったが、翌日から養泉寺という寺に移り、滞在中は主に此処に居たことから、

ちょうど紅花と養蚕の時節がかさなり、何かと屋敷内が騒々しかったということもあろうが、清風は、沢潟沢(おもだかざわ)から月山を西方真向に捉える、養泉寺からの見晴を馳走としたかったのではあるまいか。……それにこのあたりは、どういうわけか、今訪れてみてもとりわけ夏の風の道に当っている。

この手の挨拶句は普通、亭主の住まいを賞めるものだが、句はどうもそうではないようだ。養泉寺に宿をとっ

てくれた心遣がたいへん気に入った、と読めば、「涼しさを我宿にして」とまで云った興の誇張も（まだ梅雨明け前である）「ねまる也」もわかる。（『芭蕉発句新注』）と見ておられる。句の趣は清風亭での挨拶とするのに何も妨げはなく、『ほそ道』の次の句では、やはり清風の屋敷内にあったらしい「飼屋（かいや）」（養蚕室）が詠まれているけれども、見晴らしも風通しもよい養泉寺というものをイメージして「涼しさを」の句を鑑賞するのも面白い。

492　這出よかひ屋が下の蟾の聲　（猿蓑）

おくのほそ道・泊船集

這出よ飼屋が下の蟇　（四季千句）

夏季（かひ屋）。

語釈　**○這出よ**　「這（は）ひ出（い）でよ」。「湖水の磯を這出たる田螺一疋、芦間の蟹のはさみをおそれよ」（『市の庵』所収芭蕉発句「難波津や」前書）。**○かひ屋が下**　「飼屋（かひや）が下（した）」。「かひ屋」は、養蚕をする小屋。その床下が「かひ屋が下」である。「朝霞かひ屋が下に鳴くかはづ声だに聞かば吾恋ひめやも」（『万葉集』巻十、秋相聞）「朝霞かひ屋が下の鳴くかはづしのひつゝありと告げむ児もがも」（同巻十六）等の古歌の表現を踏まえている。但し、『万葉』の「かひ屋」については、魚をとる為の仕掛、養蚕の小屋、田植の後稲の成長するまで獣害等を防ぐ為に、番人に物をいぶして異臭を立てさせる小屋等、諸説があって決し難い。しかしこの句の場合は、養蚕の盛んな尾花沢の土地柄や時季からして、養蚕の小屋の意に用いていることは明らかで、古く『袖中抄』巻一に「顕昭云、かひやがしたとは、ゐ中にこかひするに、別屋のうちつくりもなきを造て、その屋にたなをあまたかきて、其にてこをかふ。それをかひやといへり。そのたなのしたにみぞをほりたれば、水たまりなどして、かはづなくこと一定なり」とあるのが、よく実情を悉している。なお、養蚕に関わることとして「かひ屋」は春季であるが、「夏蚕」として夏に用いることも可能である。次条参照。「山吹のにほふ井でをばよそにしてかひ屋がしたもかはづなくなり」（『六百番歌合』二十二番、顕昭）「飼屋（かひや）は、すなはち蚕（こ）をかふ家

なり。蚕家（こや）ともいへり」（『俳諧歳事記栞草』）。○**蟾の声**　「蟾（ひき）の声（こゑ）」。「蟾」は「蝦蟇（がま）」「疣蛙（いぼ）」ともいう日本原産の蛙としては最大のもの。体長十二センチ程になる。暗褐色の背に多数の疣があり、黄白色の腹部には黒斑がある。あまり水に入らず、昼は床下や叢などに隠れ、夕方になると這い出して来て餌をあさる。「蟾」は古く春季であって、『山之井』『増山井』等に「蛙」と同じく春二月とされ、『滑稽雑談』にも二月の条に出して、「蘇頌曰、蟾蜍、多在二人家下湿処一、形大、背上多二痱磊一、行（コト）極遅緩、不レ能二跳躍一、亦不レ解レ鳴。……一説に、此者春に成がたしといへり。さも有べし。然ども冬月見えず、春に至て土穴を出。その初を正として春に許用せり」と見える。時代の降る『俳諧歳事記栞草』になると兼三夏とされ、一茶なども夏の句として蟾を詠んでいる。『嵐亭俳話』（奚疑著、文化十年刊）には『ほそ道』のこの句のことに触れて、「蟇　春也、又雑。／這出よ蚕家が下のひきの声　翁／此句、おくのほそ道五月の条に出たれば夏季也といふ説あれど非也。蚕飼この頃専らなるもの也。只見る所を先にして、当季の論にはかゝはらず。されば曾良も、蚕飼する人は古代のすがた哉と吟たり」と考えている。按うに『猿蓑』巻二では、この句の後に「かたつぶり」の芭蕉の句、「なめくじり」の凡兆の句があって、「蟾」を夏の季語としたものと考えられないではない。志田義秀博士の「蛙・雨蛙・蟇の季題分化」（『俳句と俳人と』所収）では、天和頃から蕉門に於いて雨蛙と蟇が夏の物とされるようになったと説かれているが、例句として引かれた中で確かな夏の句は、『華摘』六月五日の条の曲水の発句「おもふ事だまつて居るか蟇」だけである。やはり芭蕉の時代に於いて「蟾」が春季の物だったことは動かし難いであろう。従ってこの語を句の季語とすることは適当ではない。『ほそ道』尾花沢の条の最後にある曾良の「蚕飼する」の句が「夏蚕」で夏季となるのと同様に、「かひ屋」を夏蚕に準用したものと考えるべきだと思う。「うき時は蟇（ヒキ）の遠音も雨夜哉　そら」（『蛙合』）「Fiqi.」（『日葡辞書』）。

大意　養蚕小屋の床下にひき蛙の声がする。そんな所に隠れていないで這い出して来いよ。

考　『おくのほそ道』では、前の「涼しさを」の句の次に並んで出ており、同じく尾花沢滞在中の吟と見られる。初案は元禄二年に出た『四季千句』の句形であって、ここでは「蟇」の一字を「ヒキガヘル」と訓むのである。

蚕飼いやら紅花摘みやらで忙しい清風亭に旅の身を寄せた芭蕉は、客間でひとりぽつねんとしている。黄昏頃ふと屋敷内の養蚕小屋の床下あたりにうごめく「蟾」を見つけて、それに呼掛けた趣向である。暮色漂う中で、長途を経て来た旅人にはそこはかとない愁情もあり、その孤独感が不格好な蟾にも親しみを覚えさせるのであろう。幽暗で寂

しいうちにもユーモラスな気分がほのめくこの句の世界は、如何にもなつかしい。恐らく「かひ屋」は養蚕小屋をいうこの地の方言でもあって、それを聞き留めた芭蕉は『万葉』の古語を想起し、古歌を踏まえた表現にしたものと思われる。旅行当時の初案では、「蟇」だけであったのを、後に「声」を加えたのであるが、この動物は産卵の後また冬眠して、初夏に再び現われてからは、もう鳴かないという。安東次男氏が、この改案について「これは、既に鳴かなくなった小動物に、もいちど鳴いてみよ、と語りかけたとでも読むしかないのではないか」(『芭蕉発句新注』)といっておられるのは面白いけれども、表現効果だけに限っても、「声」の有る無しでは数等の差があり、「声」がなくては、この句は興味索然たるものでしかない。動物の生態としてはどうあれ、この句は「声」を加えて一段と引き立ったのである。それにしても、曾良が「涼しさを」の句と共にこの句も録していないのは何故であろうか。

もがみにて紅粉の花のさたる（ママ）をみて

493　眉はきをおもかげにして紅粉の花　（真蹟句切）

真蹟短冊・曾良書留・卯辰集・猿蓑・おくのほそ道・泊船集

夏季（紅粉の花）。

語釈　○**もがみ**　「最上（もがみ）」。最上川の中流域、新庄盆地・山形盆地一帯の地を指し、山形県最上郡・村山郡に相当する。「水をわたり岩に蹶て、肌につめたき汗を流して最上の庄に出づ」(『おくのほそ道』)。○**紅粉の花**　「紅粉の花（べにのはな）」。末摘花（すえつむはな）ともいうキク科の越年生草本植物。高さ八十センチ乃至百二十センチ程で、夏に赤黄色の薊の花に似た頭状花をつける。花から化粧品の紅をとるのでこの名があり、我が国には推古天皇の時代に高麗からもたらされたという。紅の採取は今はすたれたが、昔は最上地方が産地として名高く、山形県の県花にもなっている。夏の季語。「末つむ花　夏也。べにの花也」(『御傘』)「此花色丹をのべたるごとし。……此者所説に同じく花は初て末より開き、次第に本に咲也。咲に随て摘取者也。故に呼て、すへつむ花といふ也。……和産往ゝに種ゆ。殊には奥州出羽の国ゝより是を出す。商売すくなからず。染色の用とし、または容飾のものとなつて、貴賤の賞する者也。尤其花

の時を持て夏に押す」（『滑稽雑談』）「御袴のはづれなつかし紅粉の花　千那」（『猿蓑』巻二）「Benino fana.」（『日葡辞書』）。**○さたるをみて**　「さ」の下に「き」を脱したのであろう。「咲きたるを見て」。**○眉はきをおもかげにして**　「眉はき」は、白粉で化粧したあと眉を払うのに用いる刷毛。十五センチ程の竹筒の両端に白い兎の毛がついている。紅粉の花が刷毛の形に似ていることを「おもかげにして」といった。「盃を神主より遊女に給ふ。……扇子一本・鼻紙一折・眉はき一本・ふし一包、花笠の花・土皿等を神人よりをくる」（『色道大鏡』巻十三）「三上山は士峰の俤にかよひて、武蔵野ゝ古き栖もおもひいでられ」（「幻住庵記」）。

大意　化粧道具の眉掃きを思わせる形で紅粉の花が咲いているよ。

考　「立石の道ニテ」（『曾良書留』）「出羽の冣上を過て」（『猿蓑』）等の前書がある。『ほそ道』では前の「涼しさを」「這出よ」の句の次に並べて尾花沢の条に出ているが、『書留』の前書によれば、五月二十七日に尾花沢を発して立石寺に赴く途上の吟であって、尾花沢近郊の風景が動機となったものと思われる。底本とした真蹟句切は元禄初頭の典型的な筆蹟として著名なもので、外に、桃鏡の『芭蕉翁真跡集』に増山氏山只所蔵として摸刻されたものと類似の真蹟短冊も紹介されており、何れもこの旅の道中書きであろう。

紅絹の染料や女性の唇を彩る紅の原料になるこの花は、形の上からも化粧道具の眉掃きを連想させる。句は其処に興じた趣向で、「おもかげにして」あたりの表現にも、艶な女性的気分を持たせているのである。その地の特産物を取り上げて土地への挨拶になるし、『ほそ道』のように清風亭での吟のように扱えば、紅花商清風への挨拶にもなる。末摘花の異名の連想からは、『源氏』など王朝物語をも思わせ、鼻の先のあかい姫君の呼び名とあれば、恰好の俳諧でもあった。その上、手法は古風な見立であっても、対象の本質が生かされている点はさすがである。加藤楸邨氏が、

今、私どもも紅粉の花を見ていると、この花が紅の原料であり、やがて女の衣を染め、唇を塗る臙脂の原料であることが思い浮かべられ、その花の形から、おのずと女の眉を掃う眉掃が思いおこされるようである。以前ならば露わな見立てに終ったであろうが、この句では比喩もすっかり本質的なものに脱化して、その発想の流れを感

じさせるものがある。……紅粉花と眉掃とのかかわり方は、古く談林時代の発想の見立てに似たところがありながら、それとはすっかり異ったものになっていて、形の相似というところを超えて、物と物との間の匂いあうような相通関係を生かした発想になっている。（『芭蕉全句』）

と述べておられる通りだ。『菅菰抄』には、

まゆはきは草花の名、卑俗馬屋ごやしと云あざみの種類なり。按ずるに、眉はきはもと婦人の化粧を抹する具にて、大女郎・小女郎など云。此花のかたち是に似たる故の名にて、此句に紅粉の花の取合せも亦此儀なり。

とあるが、眉掃を草花の名と取ったのでは、さっぱり面白くなく、草花の名から化粧道具に思い及んだとしても、廻りくど過ぎる。こうした説は問題外であろう。

494　閑さや岩にしみ入蟬の聲　（おくのほそ道）　――陸奥鵆

立石寺

山寺や石にしみつく蟬の聲　（曾良書留）　――浪化日記

淋しさの岩にしみ込せみの聲　（木枯）　――俳諧問答・泊船集

さびしさや岩にしみ込蟬のこゑ　（初蟬）

夏季（蟬）。

語釈　○閑さ　「閑かさ」。立石寺の閑静な環境をいう。「閑」の字を「シヅカ」と訓むこと、例えば『あら野』巻二所収の冬松の句「けさの春寂しからざる閑かな」など、証としてよいであろう。「秋蟬の虚に声きくしづかさは　野水　藤の実つたふ雫ぽつちり　重五」（『冬の日』）「Xizzucana.」（『日葡辞書』）。○岩にしみ入蟬の声　『おくのほそ道』に「岩に巌を」「岩に沁み入る蟬の声」。

重て山とし」とあるように、立石寺は凝灰岩の畳なる岩山の上に建っている。そういう奇勝の岩にしみ入るような蟬の声が耳に入るのである。「おくやまは霰に減るか岩の角　端水」（『あら野』巻六）「ふみしだくおどろがしたにしみ入りてうづもれかはる春の雪かな」（『拾遺愚草』）「Iua ganjeqi.」「Ximi iri, ru, itta.」（『日葡辞書』）。

大意　何と閑静なことよ。岩山の岩にしみ入るような蟬の声が聞えて来る。

考　『おくのほそ道』には、

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし人々のすゝむるに依て、尾花沢よりとつて返し、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。梺の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巌を重て山とし、松栢年旧、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり岩を這て仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。

という文の後にこの句を出しており、曾良の『随行日記』によれば、これは五月二十七日のことであった。即ち、

○廿七日　天気能。辰ノ中尅尾花沢ヲ立テ、立石寺へ趣。清風ゟ馬ニテ舘岡迠被送ル。尾花沢二リ元阪田(マヽ)一リ舘岡一リ六田二リよ／内蔵ニ逢。天童一リ半ニ近シ山寺未ノ下尅ニ着。是ゟ山形へ三リ半山形へ三リ。馬次間ニ。宿預リ坊。其日山上山下巡礼終ル。

と記されている。

曾良の『書留』に見える句形は旅行当時の初案である。「山寺や」の初五は地名（現山形市山寺）に山上の寺という実況を兼ねていて悪くはないが、「石にしみつく」は蟬の声の表現としてそぐわず、拙い感じを免れない。次に、風国の『初蟬』の「さびしさや岩にしみ込」という句形については、今栄蔵氏の「蕉句句形誤伝考抄」（『中央大学文学部紀要』五十一号）に精しい論があり、「しみ込」は『ほそ道』去来系写本に端を発した誤り、初五の「さびしさや」は撰者風国の軽率な杜撰と見られている。これに先立つ元禄八年六月刊の『木枯』（壺中・芦角撰）の初五「淋しさの」も信じ難いことは同断で、この集も風国との密接な連携によって成ったものだから、同系の誤伝と見られるという。

『木枯』の句形については、夙く志田義秀博士の『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』でも疑問視されており、私はこれらの所説に全面的に同感である。「さびしさや岩にしみ込」の句形は、嘗て中間案と考えられたこともあったが、こうして見ると、この句の推敲は『書留』の初案を『ほそ道』執筆の際に改案治定したと見るのが妥当であろう。

宝珠山立石寺のことを、芭蕉は尾花沢に来るまで知らなかったに違いない。清風ら尾花沢の人々の話で「清閑の地」であると聞かされ、一見をすすめられて遊意が動いたのである。これから羽黒を目指して最上川を下る方向からは全く逸れているので、「尾花沢よりとつて返し」と『ほそ道』にある所以もそれで分る。重畳する凝灰岩の山の頂にある「岩上の院々」の奇勝は、傍道をして歌枕でもないこの地を訪れた芭蕉を満足させたのであろう。「佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ」という『ほそ道』の表現は、当日の所感の真率な表白でもあったと思う。

この句の境地を、「寒山道　無人到、……有蝉鳴　無鴉噪、……石磊磊　山隩隩」（『寒山詩』）「蝉噪林逾静、鳥鳴山更幽」（王籍「入若耶渓」）「伐木丁丁山更幽」（杜甫「題張氏隠居」）「一鳥不啼山更幽」（王安石「鍾山」）等の古詩の表現との照応に求めようとするのは、芭蕉の詩嚢中にこれらがあったことは疑えぬから、当然の手続きであろう。しかし、芭蕉の体験した寂寞たる佳景の趣は、やはりこの時限りの独得のものだったのではあるまいか。

元禄二年五月二十七日は、陽暦に直すと七月十三日に当る。北地の夏は始まったばかり、蝉の声もそう多くはなかったであろう。この句の蝉については、斎藤茂吉・小宮豊隆両氏の油蝉・ニイニイ蝉論争が有名で、ニイニイ蝉説が多くの支持を得ているのであるが、清閑幽邃な立石寺の趣の表現を目ざす本義からいえば、二義的な問題に過ぎない。山本健吉氏が、この句の「岩」と「蝉」について述べられたことは、鑑賞者が今も念頭に置かなければならぬことであろう。即ち、

小宮豊隆は立石寺の岩が大谷石のような柔かい岩……であり、それでないとどうしても「しみ入る」と感じることはできないと言っている。だが私は、作品は自己充足した世界だと思っているから、作品の世界から、作品の

動機となった場所にまで還元して味わう必要はないと思っている。芭蕉が柔かい岩によって、「しみ入る」という表現を得たのだとしても、表現されたものはただ「岩」であって、特殊な「岩」ではない。……むしろそれが特殊な岩であることは、享受の邪魔になるのであって、われわれが普通概念として持っている岩、「土石老いて、苔滑かに」といった岩を想像する方が、この句の句柄を大きくする。……もちろん立石寺の特性を、芭蕉が直覚的に把握したことが、この句の真実性の原因とはなっていようが、この句の価値は、そのような特性を超えた普遍的な表現に達しているところにある。立石寺を訪ねたことなく、立石寺の特性を知らぬ読者にも、この句の特性あるいは真実性は分かるのだ。……言ってみれば、それは充足した小宇宙として、自然・世界・宇宙そのものに照応するのである。……

蟬の種類と数とに関するこのような穿鑿も、……句の享受としては二義的な、好事家的なものである。……もし蟬の数が問題であるなら、岩の数だって問題になるはずだし、岩の種類が問題でないなら、蟬の種類だって問題でないのだ。芭蕉はここでは、岩と蟬との一般概念を持っているものなら、受け取ることができるはずの詩的境地を表現しているにすぎない。そういうことを限定しえないことと、表現が不的確であることとは別である。

(『芭蕉その鑑賞と批評』)

要するに、陽暦でいえば七月半ばの北国の山中、蟬の数もそう多くはない。声を揃えてもやかましい感じにはならず、周囲の岩にしみ入るようなその声が寂寞としずかな寺の境内の気分を一層引き立て、天地の寂寥相に人の心を引き込む。この句の世界は、そのように把握されるのである。

495

五月雨をあつめて早し最上川　（おくのほそ道）

鳥の道・泊船集

さみだれをあつめてすゞしもがみ川（真蹟歌仙巻）

真蹟懐紙写・曾良書留・雪まるげ・奥細道拾遺・もがみ川・奥細道付録・奥の枝折

夏季（五月雨）。

語釈　**○五月雨をあつめて**　「五月雨（さみだれ）を集め（あつ）て」。流域に降った梅雨期の雨を川筋に集めて、の意。川を主体としていう。「味（あぢ）のよきたねやあつめてまくは瓜」（『毛吹草』巻一）「Atçume, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○早し**　流れの速度のはやい意で、「早」は宛字。**○寂上川**　「モガミガハ」。源を福島県境の吾妻山に発し、山形県を北流して酒田で日本海に注ぐ川。途中、米沢・山形・新庄等の盆地を経、全長二百三十二キロ、急流を以て名高い。「もがみ河のぼればくだるいなふねのいなにはあらずこの月ばかり」（『古今集』巻二十、東歌）等、古くからの歌枕である。「寂」は「最」の異体字。「寂上川（もがみがは）に、のぼれば下るといふ詞付べからず。寂上にのぼるといふ事、二句嫌也」（『御傘』）。

大意　流域に降ったさみだれを川筋に集めて、最上川は早瀬をなして流れ下る。

考　「五月の末は大石田といふ処にとゞまる。其家寂上川にのぞみて、いと涼しかりければ」（真蹟懐紙写）「大石田高野平右衛門亭ニテ」（『曾良書留』）「大石田高野平左（ママ）衛門亭にて」（『雪まるげ』）「山形町にて」（『奥細道拾遺』）「羽州最上大石田にて高野平右衛門亭」（『奥細道付録』）「出羽大石田にて興行」（『奥の枝折』）等の前書がある。『おくのほそ道』では、

寂上川はみちのくより出て、山形を水上とす。ごてん・はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをやいな船といふならし。白糸の滝は青葉の隙〳〵に落て、仙人堂岸に臨て立。水みなぎつて舟あやうし。

という文の後に「あつめて早し」の形の句があるが、旅行の際には諸資料の前書に見えるように、出羽大石田（現山形県北村山郡大石田町）の高野平右衛門（俳号一栄）の家で「すゞし」と詠まれたのが初案であった。有名な最上川歌仙の真蹟末尾には、「寂上川のほとり一栄子宅におゐて興行／芭蕉庵桃青書／元禄二年仲夏末」とあり、曾良の『随行日記』によると、芭蕉が一栄亭に到着したのは五月二十八日午後であって、二十九日に発句が出来て歌仙が始まり、

翌三十日に満尾している。即ちこの句の初案が成ったのは五月二十九日で、『ほそ道』では最上川下りの記事の前に、

寂上川のらんと、大石田と云所に日和を待。爰に古き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやはらげ、此道にさぐりあしして新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。このたびの風流爰に至れり。

とある所に相当する。「すゞし」系の諸本のうち、『奥の枝折』（柳条撰、文化十一年刊）に初五を「五月雨や」としているのは、年代の古い資料に全く見えないので、杜撰に過ぎないであろう。

初案の「すゞし」は、亭主一栄に対する挨拶が動機になっている。大石田の船問屋とも川役人とも伝えられるこの人の家の客座敷で、最上川の眺めを賞し、その涼しさを褒めて挨拶としたことは、真蹟写しの前書を見ても分り、それに応じて一栄も「岸にほたるを繫ぐ舟杭」と脇を付けて、この家に貴方をお泊め致しますという意を寓した。これはこれで川の涼味を中心とした一句であり、『ほそ道』に入れるとすれば、大石田での歌仙興行の事を記した前段の終りにあるのが相応しい。しかし、『ほそ道』では川下りの条に置かれ、「水みなぎつて舟あやうし」という緊張が最高潮に達した文を承けている。この場所では「すゞし」では駄目なのであって、『ほそ道』執筆に当って芭蕉が「早し」と改めた胸裏の消息も推察に難くないのである。これによって句は気分的な涼味の表現ではなく、大変な水量を以て上流から一気に押して来る急流その物の表現となった。もとよりその背景には、歌仙興行の後川を下って羽黒山の麓に到った作者の急流体験がある。それに基づいて「早し」と改案されたのである。

『芭蕉雑談』でこの句を絶賛した子規は、『仰臥漫録』では一転して、「フト此句ヲ思ヒ出シテ、ツクヾヽト考ヘテ見ルト、「アツメテ」トイフ語ハタクミガアッテ、甚ダ面白クナイ」と批判するに至った。つまり、川を主体とした「あつめて」は、最上川を擬人化した表現だから、其処に「タクミ」を見たわけで、「写生」の立場からは許しがたいものに思えたのであろう。しかし、「あつめて」は流域に降った五月雨の厖大な水量をあらわし、急流の速度を端的

に描いた「早し」と相俟って、「豪壮な水流がそのまま憑り移ったようなこの句の勢いとリズムとは、そういう批評を吹き飛ばしてしまう力がある」（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）。かくて、この句は「早川」（急流）の趣を本情とする伝統にも適い、豪宕な味わいを新たに拓いた秀逸となったのである。

風流亭

496　**水の奥氷室尋る柳哉**　（曾良書留）

雪まるげ・奥細道拾遺・乞食嚢・奥細道付録

夏季（氷室）。

語釈　**○風流亭**　「風流」は、新庄（現山形県新庄市）の俳人。本名を渋谷甚兵衛といい、南本町の商家と伝えられる。**○水の奥**　「水の奥」。水源地をいう。**○氷室尋る**　「氷室尋ぬる」。「氷室」は、冬季に氷雪を貯蔵して、暑い夏の飲食に供する設備。内裏では、主水司が四月一日に氷を献上する行事があり、都近くに宮廷用の氷室が数十箇処あった外、地方の豪族や庶民の間にも同様な貯蔵庫があった。その氷室の在処をさがすというのである。「氷室　夏也、水辺也。……惣別、氷室は四月朔日より九月尽まで献ずる物なれ共、六月一日を肝要と用故に、夏の季に相定る義也。……ひむろの雪も夏也」（『御傘』）「むかし額田のおほいきみ。闘雞といふ所に狩し給けるに。野中に氷室のあなるを見つけて。やがて帝へ其氷を奉れ玉ひしより。国〻所〻に氷室をかれて。熱月に用ひおはしましける。是ひむろの御調の権与とかやいへり。いま在家のならはしに。みなづき朔日へぎもちゐを氷になぞへていはひに物し侍る」（『山之井』）「氷室一日……季吟案に、四月より献ずる事は延喜式主水式にみえたり。熱月なれば御膳にも氷を用るを、ひのおものといふ也。源氏常夏巻にも、氷水めす事侍り。千載集に、氷室山より桜をたてまつる事もあり。又、氷室の雪も夏也。この比の世俗は、氷餅を氷になぞらへて朔日に用ひ侍り」（『増山井』）「凡氷室の数、仁徳の始には卅四所也。後に廿七字也。山城に十七字、大和に四字、丹波に六字也。いづれも山陰の日影さゝぬ所に穴を掘、蕨のほどろを敷て氷を納置也。然れ共山影にあらず、水辺のみなり」（『滑稽雑談』）「井を掘る者は六月寒く、米つくおとこは冬裸かなり／汗出して谷に突こむ氷室哉　冬松」（『あら野』巻五）「Fimuro.」（『日葡辞書』）。

大意 緑の柳陰を流れる水が如何にも涼しそうだ。この流れの源を尋ねて行けば、きっと氷室があるだろう。

考 『書留』以下、風流・曾良との三物を録するが、『奥細道拾遺』は「新庄風流亭にて」と前書して発句だけを収めている。曾良の『随行日記』には、

○六月朔　大石田を立。辰刻。一栄・川水弥陀堂迄送ル。馬弐疋、舟形迄送ル。二リ　一リ半舟形。大石田ゟ出手形ヲ取、ナキ沢ニ納通ル。新庄ゟ出ル時ハ新庄ニテ取リテ、舟形ニテ納通。両所共ニ入ニハ不構。二リ八丁新庄。風流ニ宿ス。

とあり、翌日は歌仙を巻いているが、「水の奥」の発句は恐らく到着当日の一日の吟であろう。

この句で芭蕉が「氷室」を案じたのも、折柄六月一日の氷餅を氷になぞらえて祝う日に当っていた故と思われる。風流亭の傍らに小流れがあって、岸の柳も涼し気であったのを賞した挨拶の句である。この涼しい柳蔭の流れを遡って源を尋ねて行けば、きっと氷室があるだろうというので、氷室は実際に無くてもよい。ただ暑熱の気を払うに足る清冽な水と緑蔭の涼しさを賞めた趣向なのである。氷室の目じるしとして柳が立っているという見方もあるが、水と柳が眼前の物で、氷室が想像であった方が良いと思う。『続芭蕉俳句研究』の太田水穂氏の所説によると、新庄には一本の枝垂柳の蔭に湧く清水があって、或る時歌詠みが来てこの清水を歌に詠んだが、拙かったので水が濁ってしまった。その後芭蕉がやって来てこの句を詠むと清水はもとのように澄んで、また旅人の休む処になったので、今も付近の村を休場村というのだという。しかし、この伝説は後世の付会の臭いがするし、休場（やすんば）村というのは、今は市内ながら新庄の中心部からは南に離れた鳥越に近いあたりで、新庄城下の町人町だった南本町の風流亭とは関わりが考えられない。この伝説はこの句を解するに当って考慮しなくてもよいであろう。

盛信亭

497 風の香を南に近し㝡上川　（曾良書留）

夏季（風の香）。

語釈 **○盛信亭**　「盛信（せいしん）」は、前の発句で挨拶した風流の本家に当り、本名渋谷九郎兵衛といった人で、新庄城下の中心地南本町（現新庄市本町）東側、北から二軒目の家に住んでいたという。**○風の香を**　「風の香（かぜのか）」は、夏の季語「風薫る」「薫風」と同義。青葉若葉に吹きわたる夏の南風の快さを賞でていう。「を」を「も」とする翻刻本が多いが、『書留』の字体は明らかに「を」である。『雪まるげ』以下の書には「も」となっているが、これらの原拠は『書留』であろうから、句形は「を」が正しいとすべきである。「風薫（カヲル）　南薫（ナンクン）。六月にふく涼風也。薫風自南来と古文前集にいへり」（『増山井』）「寂として椿の花の落る音　杜国　茶に糸遊をそむる風の香　重五」（『冬の日』）。**○㝡上川**　既出（Ⅲ *495*）。

大意　涼しい薫風を南から受けて、このお宅から最上川も南に近く思われます。

考　『雪まるげ』には「盛信亭にて」と前書がある。『随行日記』には、

　二日　昼過ゟ九郎兵衛（盛親）へ被招、彼是哥仙一巻有。

と見え、この「哥仙」は『書留』に録する「御尋に我宿せばし破れ蚊や」という風流の発句に始まる一巻と思われるが、「風の香を」の発句も同じ六月二日に盛信への挨拶として詠まれたものであったろう。『書留』には「小家の軒を洗ふ夕立」（息柳風）「物もなく麋は霧に埋て」（木端）という脇と第三を記している。歌仙にも三物にも盛信は顔を出しておらず、専ら子息の柳風が相手をしているのは、留守ででもあったものか。盛信は新庄随一の富商であったという。

「風の香も」に比べて「を」は不安定な感じの措辞であるが、「風の香を南に受けて、最上川南に近し」と「南に」を上下に働かせた表現と思われる。「も」とした場合に、其処で聊か休止を置く感じになるのに対して、下への続き方がより密接になろう。「近し」ではっきり切れる句作りなので、初五の処で休止があるより、寧ろ句の形は整うと思う。南からの薫風の快さを賞めて盛信亭への挨拶とし、且つは南方に出羽の大河最上川を思い描いたのであった。新庄は最上川から北へ大分離れているが、大石田で既に芭蕉はこの大河に親しく接しており、新庄の沃野にある富商の家で、この川を近くに想定することは、大国に相応しいことでもある。即席の挨拶句以上のものではないが、気持の良い句と評してよかろう。

498 有難や雪をかほらす南谷 （おくのほそ道）　――小弓

羽黒山本坊ニおゐて興行　元禄二六月四日

有難や雪をかほらす風の音 （曾良書留）　――雪まるげ・奥の枝折・乞食嚢・奥細道付録

有難や雪をめぐらす風の音 （花摘）　――南谿集

夏季（かほらす南）。

語釈 ○**有難や** 「有難（ありがた）や」。霊地の有難さを賛歎した表現。「有難や実に仏法の力とて、……念仏三昧の道場に出で入る人の有難さよ」（謡曲「誓願寺」）「**Ara arigataya, tôtoya!**」（『日葡辞書』）。○**雪をかほらす** 「雪（ゆき）を薫（かを）らす」。「ほ」は「を」を用いるのが正しい。「かほらす」は、下の「南」に掛けて、夏の季語「風薫る」の意を含む。『書留』等の句形参照。「薫るとやとかく奇麗な風の色　才麿」（『難波の枝折』）「**Cauori, u, otta. P. i, Niuô.**」（『日葡辞書』）。○**南谷** 「ミナミダニ」。羽黒山（山形県東田川郡羽黒町）の麓の手向（とうげ）集落から二千五百段に近い表参道が続くが、その三の坂から南へ下った所。『おくのほそ道』にあるように、芭蕉と曾良

は此処の別院（曾良の『日記』によれば、本坊の隠居所）に滞在した。ここではその地名に「南風（みなみ）」を掛け、上の「かほらす」と共に「薫風」の意を利かせている。一二七頁参照。

大意 有難いお山だなあ。あたりの山々の雪を薫らせる南風が、この南谷に吹き渡っている。

考 「南谷にて」（『小弓』）「元禄二六月四日羽黒山本坊におゐて興行」（『雪まるげ』）「元禄二年六月四日於羽黒山本坊」（『南谿集』）等の前書がある。曾良の『随行日記』によると、芭蕉は六月三日新庄を立ち、元合海（もとあいかい）（現新庄市本合海）から舟に乗って最上川を下った。同日下船して羽黒山へ向うあたりからの『日記』の記事を左に抄出する。

羽黒手向　申（荒町）ノ刻近藤左吉ノ宅ニ着。本坊ヨリ帰リテ会ス。本坊若王寺別当執行代和交院（ママ）へ大石田平右衛門ゟ状添。露丸子へ渡。本坊へ持参、再帰テ南谷へ同道。祓川ノ辺ゟクラク成。本坊ノ院居所（ママ）也。

○四日　昼時本坊へ菱切（ママ）ニテ被招、会覚ニ謁ス。……俳表斗ニテ帰ル。

山麓の手向に住んでいた近藤左吉（露丸。呂丸とも）の許に着いた芭蕉は、大石田の平右衛門（高野一栄）から貰っていた当山別当執行代和合院会覚への紹介状を左吉に託し、彼の案内で南谷の別院に落着いた。翌日本坊に招かれて俳諧を興行したことは『書留』に見える前書と一致し、それに録された発句「有難や雪をかほらす風の音」が初案である。当日は表六句だけが成り、歌仙が満尾したのは三山巡礼を終えた後の九日のことであった。『ほそ道』には、

六月三日羽黒山に登る。図司左吉と云者を尋て、別当代会覚阿闍利（ママ）に謁す。南谷の別院に舎して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日本坊にをゐて誹諧興行。

として、「雪をかほらす南谷」の句を収めており、これが定案である。「風の音」として、単なる薫風の趣だった初案を、「南谷」という地名を詠み込んで、それに「南風（みなみ）」を掛ける技巧的な表現に改めたと見られよう。

今一つ、其角の元禄三年の句日記『花摘』所載の句形「雪をめぐらす風の音」はどうか。其角は同書四月二十八日

の条に、「此日閑に飽て、翁行脚の折ふし羽黒山於本坊興行の哥仙をひらく。／元禄二年六月にや」としてこの一巻を掲げており、芭蕉から草稿を送られていたわけである。木下長嘯子の『挙白集』に「小塩山神代のさくらおもしろく雪をめぐらす袖の春風」という歌があり、巧みな舞姿をいう「廻雪の袖」の語もあって、「雪をめぐらす風の音」の句形は無根の杜撰とは考えられない。元禄三年のこの頃、『書留』の初案に手を入れた中間案であろう。それを更に『ほそ道』執筆の際に推敲して定案を得たのである。

『ほそ道』の文に続けて読むと、この句の「有難や」は会覚のもてなしに対する挨拶が主であるように受取れるけれども、それは余りに現代的な解釈であって、「有難や」は何よりも出羽三山、或いはその中心の羽黒山という霊地に対する賛仰の挨拶でなければならない。下五に地名を入れたのも、それをはっきりさせる意図と思われる。この句を作った六月四日は陽暦の七月二十日、既に盛夏に入った時期であることを考えれば、標高の低い南谷付近に雪はなかったであろうが、四時雪を戴くといわれる月山が遠望され、その山頂に残る雪の印象が「雪をかほらす」という表現になったようである。薫風を含意し、地名にかけて「南谷」と続けたのは如何にも巧みで、霊地への挨拶として日光での「あらたうと青葉若葉の日の光」（Ⅲ462）と似ているが、「青葉若葉の日の光」が旺盛な山中初夏の自然を描いた柄の大きさは、当面の南谷の句には求め難い。

499　涼しさやほの三か月の羽黒山　（おくのほそ道）　――三日月日記

涼風やほのみか月の羽黒山　（真蹟短冊）　――曾良書留

夏季（涼しさ）。

語釈　**○ほの三か月**　「ほの三日月」。「ほの見ゆ」を言い掛けた。「三か月」は既出（Ⅰ162）。「ほの見えて、色づく木々の初瀬山」

（謡曲「玉葛」）「Fono miye, uru.」（『日葡辞書』）。○羽黒山　「ハグロヤマ」。出羽三山の一で、標高四百十九メートル。山形県鶴岡市の東方に聳える。鎌倉時代以来、修験道羽黒派の本山として知られ、江戸時代には、『おくのほそ道』に「当寺武江東叡に属して天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かゝげそひて」とあるように、天台宗の江戸の寛永寺系列に属していた。なお、散文的な語としては「ハグロサン」であるが、この句でそうよむのは調べを損なう。

大意　黒々とそびえる羽黒山に三日月がほのかに見える景色の、何と涼しげなことよ。

考　『ほそ道』には三山巡礼の記事の後に、

坊に帰れば阿闍闕(ママ)の需に依て、三山順礼の句々短冊に書。

として、この句以下の三句と曾良の発句「湯殿山銭ふむ道の泪かな」を記している。『随行日記』によれば、芭蕉と曾良は六月七日に巡礼を終えて「及暮南谷ニ帰。甚労ル」という状態であって、翌八日には、

昼時和交院御入。申ノ刻ニ至ル。

とあり、会覚が旅人達を訪れている。三山巡礼の句を短冊に書いたのは或いはこの時か。九日には「有難や」の歌仙が成り、十日午後には羽黒を辞しているから、この間に成ったことは確かである。現在山形美術館所蔵の三山の句を書いた発句短冊は、この時芭蕉が羽黒山に遺した真蹟であって、「涼風や」が当時の初案ということになる（『書留』に「掠風」とあるのは誤り）。「涼しさや」と初五を改案したのは、『ほそ道』執筆の際であろう。

ほのかに見える三日月が山の端にかかる羽黒山の山容――、山は既に夕闇に包まれ、その名の通り黒々と横たわる。これを実境から詠まれた句とすれば、六月三日午後山麓手向村の露丸方に着き、南谷へ案内される頃はもう暗くなったことが曾良の『日記』に見えるから、その登山途中の印象が動機になったのかも知れない。「涼風」も参道の杉並木を渡る風であったろう。荻原井泉水氏の『奥の細道評論』には、南谷からは羽黒の山容がはっきりと見えず、見えたとしても三日月の出る方角とはちがう東北に当るという。ただ、この句をそのような写生として受取るのが良いか

どうかは問題で、この句は全体として、「涼風」「三日月」「羽黒山」といった道具立てが、かなり図式的に配置されている傾向は否めない。霊場の清涼さを褒める挨拶の気持が、こうした図式化をもたらしたのではあるまいか。霊場にかかる三日月は悟境の高みを示す「真如の月」の連想を誘うものでもある。そのような鑑賞に傾かせる更なるものは、後の改案形「涼しさや」であろう。「涼風」はなお自然現象の域にとどまるけれども、「涼しさ」となると、もはや観念である。霊場の神秘に触れて清められた「心の涼しさ」である。芭蕉が「涼しさ」の形でこの句を治定したのは、霊場への挨拶句として、また三山巡礼の厳しくも貴重な体験を経た後の句として、「涼風」よりもその方が相応しいと考えたからであろう。

500 雲の峯いくつ崩れて月の山 （山形美術館蔵真蹟短冊）

芳賀家蔵真蹟短冊・曾良書留・花摘・おくのほそ道・菊の香・泊船集

夏季（雲の峯）。

語釈 ○**雲の峯** 「雲の峯」。夏空に立つ積乱雲をいう季語。「雲の峯　夏也。六月照日の時分に、白雲の空にたかき峯のやうにかさなるをいふ也。山類にはあらざるべし」（『御傘』）「雲峰　夏雲多二奇峰一と陶淵明が詩也」（『増山井』）「和におゐて直に雲の峯と称す。これ暑熱の気おほきが故に、火雲を聚て山上にのぼる。おほく夕日の時たつ者也。俗に丹波太郎・信濃次郎など都にていへり。皆是雲の峯也」（『滑稽雑談』）「雲のみね今のは比叡に似た物か大坂之道」（『猿蓑』巻二）。○**いくつ崩れて** 「幾つ崩れて」。「いくつ」は疑問詞ではなく、不定詞としての用法である。「幾つも幾つも崩れて」の意。「あのやうなは身共が台所にいくつもある」（狂言「末広がり」）「春雨や枕くづるゝうたひ本　支考」（『続猿蓑』下）「**Cuzzure, ruru, eta.**」（『日葡辞書』）。○**月の山** 「月の山」。羽黒山の南方、山形県東田川郡と西村山郡の境に聳える「月山」の異称である。後掲『菊の香』（風国撰、元禄十年刊）の前書参照。標高千九百八十メートル、出羽三山中の最高峰で、頂上近くの東田川郡立川町立谷沢には月読命を祀った月山神社がある。修験道の霊場で、今も参詣の道心者は「月のみ山」と唱えるという。ここは、「月光に照らされる山」の意を掛けた。

大意　昼の炎天下に立った入道雲が幾つも崩れては積み重なって、月光照らす月のお山になったのだ。

考　「月山」（『花摘』）「月の山にて」（『菊の香』）「月山にて」（『泊船集』）等の前書がある。曾良の『随行日記』によると、芭蕉との三山巡礼は六月六日に始まり、その日の午後月山山頂に到着している。即ち

○六日　天気吉。登山。三リ強清水ニリ平清水（ヒラシツ）ニリ高清、是迄馬足叶。道人家小ヤガケ也。弥陀原（こや有。）御田有。中食ス。是ヨリフダラ・ニゴリ沢・御浜ナド、云ヘカケル也。難所成。行者戻リこや有。中ノ上尅月山ニ至。先御室ヲ拝シテ角兵衛小ヤニ至ル。雲晴テ来光ナシ。夕ニハ東ニ、旦ニハ西ニ有由也。……

とあり、翌日は湯殿山へ向ったのであった。『ほそ道』にも、

八日月山にのぼる。木綿しめ身に引かけ、宝冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山気の中に氷雪を踏てのぼる事八里、更に日月行道の雲関に入かとあやしまれ、息絶身こゞえて頂上に臻れば、日没て月顕る。笹を鋪篠を枕として、臥て明るを待。

とあって、日付と、頂上に到着したのが日没頃だったような書き方になっているところが事実と異なるが、大筋に違いはない。この体験に基づいて南谷に帰ってから認められたのが山形美術館所蔵の真蹟短冊である。今一点、芳賀家蔵の真蹟短冊は、曾良の『日記』六月十二日の条に見える羽黒で逢った人の名の覚えの中の「芳賀兵左衛門」（羽黒山道場の寺侍）に書き与えたものとおぼしく、その子孫の家に襲蔵されているので、これまた羽黒滞在中の染筆である。

この句、「雲の峯」を中心に置けば日中の景が主となり、眼前の入道雲が幾つ崩れたら、月光照らす山になるのだろうと、夜の景色を推量する意になる。しかし、三山それぞれを主題とした三句のうちの一つとしては「月の山」が中心でありたく、『ほそ道』本文にも「頂上に臻れば日没て月顕る」とあることも見逃してはなるまい。そうすると、一句の中心は月光照らす月山の夜の山容であって、雲の峰が幾つも立っては崩れした登高途中の景色は、回想の中のものとなる。この句はやはり後者の立場から鑑賞したいのである。なお、月に照らされる山容を望見するのだから、

作者の位置は山から離れているように見る向きもあるが、山頂にあってこのように表現することは可能であって、その方が表現としても力有るものであろう。

これは単に日中の入道雲が消えて月が出たという自然描写の句ではない。初五と下五に「雲の峯」と「月の山」を対置した句作りからしても、両者には密接な関係がある筈である。尾形仂氏が合理的な解釈を否定して、

雲の峯が崩れ落ちて月の山が現前するというふうに、現実の世界における論理的思考から飛躍したところに、〝俳諧〟がある。雲の峯が「湧く」とか、「立ち昇る」と見るのは、日常的把握である。それを「崩れる」と逆転するところから、〝俳諧〟の世界が生まれる。(『松尾芭蕉』)

といわれ、同じく羽黒滞在中の天宥法印追悼の句文に、巨霊や女媧ら中国古代神話の世界を展開した「其玉や」(Ⅲ502)の句と同根の発想であることを指摘されたのに同感を禁じ得ない。素材を日中の崩れては立つ入道雲と夜の月光照らす山容に採りながら、句中の世界は、謂わば月山創成神話なのである。そういう形で霊場への挨拶としたもので、芭蕉の生涯でも珍しい高山の巡礼体験の記念としたのであろう。「月」に「尽き」(雲が尽きる)を掛けたという見方があるが、掛詞があるとすれば、古注に既にいわれている「築き」の方が相応しいと思う。壮大な神話的世界を軽快な調べに乗せて展開した傑作である。

501 かたられぬゆどのにぬらす袂かな (真蹟短冊) ――曾良書留・おくのほそ道

湯殿

語られぬゆど(ママ)のにぬるゝ袂哉 (花摘) ――放鳥集

夏季(ゆどの詣)。

語釈 ○**かたられぬゆどの**　「語（かた）られぬ湯殿（ゆどの）」。「ゆどの」は出羽三山の一湯殿山をいう。月山の南西に位置する支峰の一で、標高千五百四メートル。三山に組込まれたのは最も新しく、戦国末期頃といわれるが、近世には三山の総奥の院とされて多くの信仰を集めた。『おくのほそ道』に「惣而此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず」とあるように、山中のくわしい様子は他言を禁ぜられていたので「かたられぬ」というのである。『伊勢踊』（加友撰、寛文八年刊）『時勢粧（いまようすがた）』（維舟撰、寛文十二年成）『桜川』（風虎撰、延宝二年成）等の夏の部立に「湯殿行（ぎやう）」があり、『やきおほ根』（梅尺・鱗那著、宝暦十三年成）には「湯殿登山、四時することゝ思へりや。かの山富峰同断にして、六月初旬山の口開くるより、廿日ばかりの間のみ登る。……これのみに限らず、すべて湯殿詣夏季なるぞ」と述べられている。この句も湯殿詣の句として夏季になるのである。「山彦や湯殿を拝む人の声（桃隣）」（『陸奥衛』五）。○**ぬらす袂**　「濡（ぬ）らす袂（たもと）」。涙で衣の袖を濡らす意。有難さ尊さに泣くのである。「女なれども、かひぐ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと、袂をぬらしぬ」（『おくのほそ道』）「**Tamotouo nurasu.**」（『日葡辞書』）。

大意　禁制があって、その様子を人に語ることが出来ない湯殿のお山の尊さに、袂を濡らして泣くことだ。

考　『放鳥集』（晩柳撰、元禄十四年刊）には「湯殿山」と前書があり、真蹟短冊は、さきの羽黒山・月山の句と共に三山巡礼の記念として羽黒山に遺されたものである（山形美術館現蔵）。当時の短冊と曾良の『書留』、更には『ほそ道』との間に異同はないので、別案があったとは思えない。『花摘』等の「ぬるゝ」は誤りであろう。月山山頂に着いた翌日の『随行日記』の記事は左の如くである。

○七日　湯殿へ趣。鍛冶ヤシキ有（コヤ）。○牛首有（コヤ）。不浄汚（ママ）離（コ、ニテ水アビル）。少シ行テ、ハラジ（ママ）ヌギカエ、手繦ガケナドシテ御前ニ下ル。是ゟ奥へ持タル金銀銭持テ不レ帰。惣而取落モノ取上ル事不成。浄衣・法冠・シメ斗ニテ行。昼時分月山ニ帰ル。昼食シテ下向ス。……

行者は奥の院手前の不浄垢離で水を浴び身を清めて御神体の前へ進むわけであるが、この水垢離は句の「ぬらす袂」と聊かの関係があろう。「是ゟ奥へ持タル金銀銭持テ不レ帰。惣而取落モノ取上ル事不成」という変ったしきたりもあって、ここから『ほそ道』所収の曾良の発句「湯殿山銭ふむ道の泪かな」（初案「銭踏て世を忘れけりゆどの道」（『書

留』）も生まれたのであった。

「かたられぬ」の句は、表面は霊場の有難さ尊さに感涙をこぼして袂を濡らすという伝統的発想である。しかし、「ぬらす」と「ゆどの」が縁語になり、其処から「かたられぬ」にも艶な連想が生じて来るように仕立てられている。湯殿（浴室）での情事、それを人に語ることもならず、ひそかに独り涙をこぼす可憐な乙女のさまが裏の含みとしてあることは否定し難い。こうした仕立ての句は、霊場賛歎の句として虔しみを欠くようにも見えるけれども、湯殿山はもともと「恋の山」と呼ばれる歌枕であった。『陸奥鵆』でこの山を訪ねた桃隣は、奥の院に詣でて、「両権現の外、霊地の奇瑞、人〳〵踊躍の歓喜をなし、一度詣ては年〳〵思をかくるが故に、恋の山とは申也。堅秘密の御掟、尊き千品語ル事不叶。いよ〳〵敬てつゝしむべきは此御山成けらし」と述べている。抑々この御神体は、山頂の熱湯の湧出する褐色の巨岩であって、その形状は陽物、そのほとりの小洞が女陰を象徴しているという。これは生産を司どる農業神としてのこの山に対する信仰と関係があろうが、この御神体を目のあたりにした芭蕉は、「恋の山」といわれる所以をひそかに納得したと思われるし、このような趣向の句が出来た動機も分るのである。霊場への挨拶として問題はあるけれども、これがこの句に於ける「俳諧」に違いない。なお、「こひの山しげきをざゝのつゆわけていりそむるよりぬるゝそでかな」（『新勅撰集』巻十一、神祇伯顕仲）の歌を引く説もある。

羽黒山別當執行不分叟天宥法印は、行法いみじききこえ有て、止観圓覺の佛智才用人にほどこして、あるは山を穿、石を刻て、巨靈が力、女蝸がたくみを盡して坊舎を築、階を作れる。靑雲の滴をうけて筧の水とをくめぐらせ、石の器木の工、此山の奇物となれるもの多シ。一山擧て其名をしたひ、其德をあふぐ。まことにふたゝび羽山開基にひとし。されどもいかなる天災のなせるにやあらん、いづの國八重の汐風に身をたゞよひて、波の露はかなきたよりをなむ告侍るとかや。此度下官三山順禮の序、追悼一句奉るべきよし、門徒等しきりにすゝめらるゝによりて、をろ〳〵戯言一句をつらねて、香の後ニ手向侍る。いと憚多事になん侍る

502

其玉や羽黑にかへす法の月　（眞蹟懐紙）

三山雅集・蕉門録・南谿集・道しるべ

悼遠流の天宥法印

その玉を羽黑にかへせ法の月　（泊船集）

蕉翁句集

秋季（月）。

語釈　**○羽黒山別当執行**　「ハグロサンベッタウシユギヤウ」。「別当」は、大寺院の寺務を総轄する僧官。羽黒山は以前何処にも属さない独立した寺であったが、この頃には江戸の寛永寺の系列に入り、天台宗若王寺を本坊として、且つ修験道の道場でもあった。「執行」は、寺務や法会を管掌する役。ここは別当と執行を兼務したのである。「何ナル僧ニカ有ケム、別当ニ成テ此ノ寺ヲ政ツ程ニ」（『今昔物語集』巻十一ノ二十九）「横川の執行にてありけり」（『宇治拾遺物語』巻五ノ十三）「Bettô.」「Xuguiô. Tori voconô.」

(『日葡辞書』)。**○不分叟天宥法印**　「フブンソウテンイウホフイン」。「天宥」は羽黒山の第五十代別当。初め法名を宥誉と称し、江戸の寛永寺を開いた天海僧正の門弟となって天宥と改め、以来羽黒山は真言宗から天台宗に変ったという。羽黒山の設備を充実し、勢力拡張に努めたが、周辺勢力との争いがたたって寛文八年伊豆大島に流され、六年後の延宝二年十月二十四日流謫の地で歿した。享年八十一。「不分叟」は、別当と執行を兼務したところからの号。「法印」は、仏教の僧侶の最高位で、「法印大和尚位」の略。「僧正」に相当する。「又このはるも済ぬ牢人　野坡　法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉」(『炭俵』上)「Fôin.」(『日葡辞書』)。**○行法いみじききこえ有て**　「行法いみじき聞え有りて」。「行法」は、ひろくは仏教の修行一般をいうが、天台・真言両宗では特に密教的な行を修すること。天宥はそういう修行の結果、大変な法力を持っているという評判があって、の意。「僧坊棟をならべ、修験行法を励し」(『おくのほそ道』)「説法いみじくして、みな人涙をながしけり」(『徒然草』百二十五段)「天下の物の上手といへども、始は不堪のきこえもあり」(『徒然草』百五十段)「Guiôbô. Vcconô nori. i, Voconai.」「Quafô imjij fito.」「Qicoyega yoi, l, varui.」(『日葡辞書』)。**○止観円覚の仏智才用**　「止観円覚の仏智才用」。「止観」は、人間の諸煩悩妄念を止めて起らないようにし、万法をよく観じて認識すること。天台の代表的な修行法である。「円覚」は、完全円満な覚り。仏の悟りの本性をいう。そのように悟った仏の智恵が「仏智」である。「才用」は、才智の働き。「仏智」も「才用」も、天宥法印の持つものとしていう。「当寺武江東叡に属して、天台止観の月明らかに」(『おくのほそ道』)「これとても又常住の皆令仏道円覚の由をあかすなり」(謡曲「高野物狂」)「仏智の不思議を疑ひて」(『三帖和讃』)「徳行オナジケレバ、才用アルヲモチキル」(『神皇正統記』後醍醐天皇条)「Xiquan.」「Butchiye. Fotoqeno chiye.」(『日葡辞書』)。**○人にほどこして**　「人に施して」。修行によって得た智恵や才の働きを人に施すのである。「里人に薦を施す秋の雨　越人　月なき浪に重石をく橋　羽笠」(『はるの日』)「Iifiuo fodocosu.」(『日葡辞書』)。**○山を穿**　「山を穿ち」。工事の為に山をくり抜き、穴をあける。「ねがはくは、わが両がんをうがちて、此とうもんにかけて」(『曾我物語』巻五)「Vgachi, tçu, atta.」(『日葡辞書』)。**○石を刻て**　「石を刻みて」。石を削って。前の「山を穿」と対句。「楠ハタ、リガト云者也。……是ヲ山ノ畝ノ如ク刻テ、中ダカニスル也」(応永本『論語抄』公冶長)「Ixini monjiuo qizamu.」(『日葡辞書』)。**○巨霊が力**　「巨霊が力」。「巨霊」は、中国の古代神話に現われる神。陝西省にある華山を裂いて黄河の流れを通じたという。「巨霊のような力」の意。「が」は、所有格。「田を持て花みる里に生けり　羽笠　力の筋をつぎし中の子　野水」(『はるの日』)「Chicarauo curaburu. l, Melius, Chicara curabeuo suru.」(『日葡辞書』)。**○女媧がたくみを尽して**　「女媧が工みを尽して」。中国の古代神

話にあらわれる人頭蛇体の女神。天柱が折れた時、五色の石を煉って天空の割れ目を補修したといわれ、「たくみ」は、そのような技巧的な手業を指す。「女媧のような巧みな手業を尽して」の意。「女媧が」は、所有格で、「を尽して」は、上の「巨霊が力」をも承ける。「たくみを尽す」という表現は前にも見えた（Ⅲ467後書）。「夫女媧煉二五色之石一、而補二三百余度等茎一」（風来山人『痿陰隠逸伝』自叙）。**○坊舎を築**　「坊舎を築き」。「坊舎」は、大寺院で修行僧の起居する建物をいう。『日葡辞書』に「Bŏja. Bŏzono iye.」とあるので、ここでは「舎」を濁音によんでおく。「伽藍は破れて礎を残し、坊舎は絶て田畑と名の替り」（『笈の小文』）「あくたうをかたらひ、たんしう大江山のふもとにつち城をきづき」（『用明天王職人鑑』第五）。**○階**　「キザハシ」。山坂を登るための石段をいう。「石の階九仭に重り、朝日あけの玉がきをかゝやかす」（『おくのほそ道』）「Qizafaxi.」（『日葡辞書』）。**○青雲の滴をうけて**　「青雲の滴りを受けて」。「青雲」は、空の雲。ここは山中にたつ雲霧をいったのであろう。次に出る「筧の水」を、天上から滴ったものと形容したのである。「滴」は「シヅク」とも訓めるが、その場合は「雫」の字を用いるのが普通だから、ここでは「シタダリ」と訓む。『日葡辞書』には「Xitadari. i, Xizzucu.」とあって「Xitatari.」の語はないので、二番目の「タ」は濁ってよみたい。「骨ハ化シテ黄壌一堆ノ下ニ朽ヌレド、名ハ留テ青雲九天ノ上ニ高シ」（『太平記』巻六）「軒端はもろ〳〵のかづらはいかゝりて、をのづからの滴、爰のわたくし雨とや申べき」（『好色五人女』巻五ノ三）。**○筧の水とをくめぐらせ**　「筧の水遠く巡らせ」。「筧」は「掛樋」で、竹や木の樋で水を導き、手水などの料にする設備をいう。遠くから水を引いて来るので、樋が庭をぐるりと廻っているさま。「とをく」は「とほく」の仮名ちがいである。「一里の炭売はいつ冬籠り　一井　かけひの先の瓶氷る朝　鼠弾」（『あら野』員外）「Caqefi.」（『日葡辞書』）。**○石の器**　「器」は「ウツハモノ」と訓む。石で造ったいろいろの器物。「山居といひ旅寝といひ、させるうつはものたくはふべくもあらず」（『幻住庵記』米沢家本）「Vtçuamono.」（『日葡辞書』）。**○木の工**　「木の工」。木で作った細工物をいう。**○此山の奇物**　「此の山の奇物」。「此山」は羽黒山を指す。「奇物」は、めずらしい物として寺で大切にされている物。「火浣布・ゑれきてるの奇物を工めば、竹田近江や藤助と十把一トからげの思ひをなして」（風来山人『放屁論』追加）。**○なれるもの多シ**　「成れる物多シ」。「細工、万に要おほし」（『徒然草』百二十一段）「Vouoi.」（『日葡辞書』）。**○一山挙て**　「一山挙りて」。羽黒山中の僧すべてが、の意。「挙て」は、「挙げて」とよむより「挙りて」の方がよかろう。「一山ノ僧皆、大師ノ返リ在マシタル也ケリト思テ」（『今昔物語集』巻十一ノ十二）「七十余の老医みまかりけるに、弟子共こぞりてなくまゝ」（『猿蓑』巻二、其角発句「六尺も」前書）「Issan bararito derareta.」「Cozori, u, otta.」（『日葡辞書』）。**○其名をしたひ**　「其の名を慕ひ」。天

有法印の名を慕い。「佳命今に至りてしたはずといふ事なし」(『おくのほそ道』)「Xitai, ǒ, ǒta.」(『日葡辞書』)。○**其徳をあふぐ**「其の徳を仰ぐ」。天宥法印の徳を仰ぎ、敬愛した。「徳は四海にあまり、悦びは日々に増し」(謡曲「翁」)「Tocu co narazu, canarazu tonari ari.」(『日葡辞書』)。○**ふたゝび羽山開基にひとし** 「再び羽山開基に等し」。もう一度羽黒山の御寺を開いたと同じだ、の意。天宥は五十代別当で、この寺を創建したわけではないが、寺の模様が面目を一新したので、こういった。「羽山」は、羽黒山の略称。寺を創建する意の「開基」の語が続いているから、この「山」は、其処にある寺の意味である。「空海大師開基の時、日光と改玉ふ」(『おくのほそ道』)「像花にあらざる時は夷狄にひとし」(『笈の小文』)「Caiqi.」「Fitoxij.」(『日葡辞書』)。○**されどもいかなる天災のなせるにやあらん** 「然れども如何なる天災の為せるにやあらん」。「天災」は、天が人間に下す災。以下にいう天宥遠流の事件を指す。そんなに徳の高い人だったにも拘らず、流罪という不幸に遇ったのはどうしてなのか、という気持をあらわす。「されども所〱の風景心に残り、……わすれぬ所〱跡や先やと書集侍るぞ」(『笈の小文』)「彗星東西ノ天ニミヘケルヨリ、八月ニ改元、永祚ノ風、サラニヲヨバヌ天災ナリ」(『愚管抄』巻四、後一条天皇条)「Saredomo.」(『日葡辞書』)。○**いづの国** 「伊豆の国」。静岡県東部、伊豆半島と東南方洋上の諸島嶼にわたる旧国名。「伊豆の国、蛭が小嶋の桑門、これも去年の秋より行脚しけるに」(『野ざらし紀行』)。○**八重の汐風に身をたゞよはせて** 「八重の汐風」は、遥かな海上を吹いて来る潮風。「たゞよひて」は、「を」を承けるから「たゞよはせて」と他動表現になるべきであるが、「たゞよふ」という自動詞を他動詞と同様に用いている。晩年の天宥が伊豆大島に流されたことを、こういった。「さつまがたおきのこじまに我はありとおやにはつげよやへのしほ風」(『千載集』巻八、平康頼)「高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂」(「幻住庵記」)「Yayeno xiuocaje.」「Fanuqedori namini tadayô.」(『日葡辞書』)。○**波の露** 上の「汐風」の縁で「波」といい、更に「露」と続けて、露ははかないものであるところから「はかなきたより」に冠した。「波の露の如く」の意である。○**はかなきたよりをなむ告侍るとかや** 「はかなき便りをなむ告げ侍るとかや」。はかなく亡くなられたという消息を羽黒山に知らせたとかいうことである、の意。「めを縫て無理に鳴する鵙の声　孤屋　又だのみして美濃たよりきく　野坡」(『炭俵』上)「Tayori.」(『日葡辞書』)。○**此度** 「此の度」。○**下官** 「ヤツカレ」。自らを卑下する一人称代名詞。「ヤツコ(奴)アレ(吾)」の約音といわれ、江戸中期まで「カ」は清音の由。中国で官吏の自称の謙辞である「下官」をこれに宛てた。「やつかれがちいさき腹して、つたなき口をあけて」(『西鶴織留』序)。○**三山順礼の序** 「三山順礼の序」。出羽三山巡礼の機会に、の意。巡礼は、各地の著名な神社仏閣を巡拝する信仰の為

の旅。三山巡礼は、『おくのほそ道』にも見えるように法式厳重な行であった。「巡礼」と書くのが正しいが、「順礼」と書くことも慣用として例が多い。「坊に帰れば、阿闍闍（ママ）の需に依て三山順礼の句々短冊に書」（『おくのほそ道』）「八瀬おはらに遊吟して、柴うりの文書ける序手に」（『猿蓑』巻三、凡兆発句「まねき〳〵」前書）「Iunrei. Meguri vogamu.」「Tçuideuo motte mairô.」（『日葡辞書』）。○**追悼一句奉るべきよし**　「追悼一句奉るべき由」。天宥法印の逝去を後から悼む発句一句を霊前に献じて下さいということを、の意。「かゝる秀逸は、一句も大切なれば」（『去来抄』先師評）「後京極殿勅定に寄て、古今の心有哥奉り玉ふといへば」（『宇陀法師』誹諧撰集法）「Renga iccu.」（『日葡辞書』）。○**門徒等しきりにすゝめらるゝによりて**　「門徒等頻りに勧めらるゝに依りて」。「門徒等」は、羽黒山で修行する天宥門下の弟子たちを指す。その人々が如上の事をしきりにお勧めなさるので。底本では最初「門生等」と書き、「生」を見せ消ちして右傍に「徒」と訂している。「始テ外道ノ門徒ヲ背テ、釈迦ノ御弟子ト成テ初果ヲ得タリ」（『今昔物語集』巻一ノ九）「往来の順礼をとゞめて奉加すゝめければ」（『猿蓑』巻二、去来発句「つゞくりも」前書）「Monto.」「Ienuo susumuru.」（『日葡辞書』）。○**をろ〳〵戯言一句をつらねて**　「おろ〳〵戯言一句を連ねて」。「おろ〳〵」は、「疎か」「疎そか」等の語根「おろ」を重ねた副詞で、不十分なさま。ここは「おぼつかなくも」といった意である。「を」は「お」を用いるのが正しい。「戯言」は、たわむれごと。「戯言」ともいう。自作の発句を謙退した表現。俳諧はもともと滑稽を旨としたものであることも含んでいるのであろう。詩歌文章は言葉を連ねて作るところから「つらねて」といった。「さきの翁よりは、天骨もなく、おろ〳〵かなでたりければ」（『宇治拾遺物語』巻一ノ三）「ねんじや心しづかに十念して、一首かくつらねし」（『きのふはけふの物語』下）「Sore cunxiua qegon xezu.」「Vtauo tçuranuru.」（『日葡辞書』）。○**香の後ニ手向侍る**　「香の後ニ手向け侍る」。香を焚いた後に句を手向けます、の意。○**いと憚多事になん侍る**　「いと憚り多き事になん侍る」。大変恐れ多いことでございます。天宥のような高僧に、自分のような者が追悼句を献ずるのは恐れ多い、という気持である。「黒髪をたばぬるほどに切残し　荷兮　いともかしこき五位の針立　昌圭」（『はるの日』）「猶憚多くて筆をさし置ぬ」（『おくのほそ道』）「Ito yasui cotonari.」「Fabacari.」（『日葡辞書』）。○**其玉**　「其の玉」。「玉」は「魂」の宛字。天宥の霊魂をいう。「たづね行まぼろしもがなつてにてもたまのありかをそことしるべく」（『源氏物語』桐壺）。○**羽黒にかへす**　流された伊豆の大島から、もとの羽黒山に返す意。「Cayexi, u, yeita.」（『日葡辞書』）。○**法の月**　「法の月」。真如の月。衆生の迷妄を救う仏法の悟境を月にたとえていう。ここの「月」は季感はないが、普通の月に準じて秋季に扱うべきであろう。「のりの月ひさしくもがなとおもへどもさ夜ふけにけりひかりかくしつ」（『新勅撰集』巻十、行

基）。

大意 この霊場を照らす真如の月は、不可思議な力を以て、必ずや亡き天宥法印の魂を、もとの羽黒山に呼び戻すことだろう。

考 「悼遠流の天宥法印」（『泊船集』）「悼遠流天宥法印」（『蕉翁句集』）等の前書がある。出羽三山歴史博物館蔵の真蹟懐紙の末尾には「元禄二年季夏」と年記があり、六月三日から十日まで羽黒に滞在していた間の揮毫と推定される。前書の文にあるように、天宥に就いて学んだ羽黒の僧達に勧められて作った追悼句で、夏のうちに作られたのに、句の季節が秋なのは、珍しい例といえよう。

真蹟懐紙では、句の上五を初め「無玉や」と書き、「無」を見せ消ちして右傍に「其」と改めてあり、初案は「無玉や」（亡き魂や）だったことが知られる。『泊船集』の句形はその根拠が明らかでなく、誤伝の疑いが濃い。『蕉翁句集』は、その前書からしても『泊船集』に拠ったことが明らかである。更に後代の『芭蕉句選』は、「その玉を羽黒へかへせ法の月」となっているが、「へ」は杜撰に過ぎないであろう。

天宥は羽黒山を江戸東叡山寛永寺の系列に属せしめて、その勢力の伸張に努め、大土木工事を起して一山の設備を充実するなど、「ふたゝび羽山開基にひとし」い業績を挙げた傑僧だった。しかし、こうした「遣り手」の人は、兎角周囲と摩擦をおこしやすい。天宥も近くの鶴岡藩などと確執を演じ、訴訟沙汰にまで及んだのが祟って、恐らくは冤罪だったのであろうが、伊豆の大島に流されて、その地で果てるという非運に見舞われた。天宥が遠流された寛文八年は、元禄二年から二十一年前であるが、羽黒山にはまだ天宥を知る人も多く、その業績を慕う空気も強かったものと思われる。芭蕉もこの山に来て傑僧の閲歴を聞き、追悼の句文を手向けたのである。

句は、「その玉を羽黒にかへせ」と「法の月」に呼び掛ける形の方が表現として力強く、追悼の趣意もよく通るのであるが、『泊船集』という書が杜撰の聞えの高いものだけに、その根拠に不安があって、これによって鑑賞するわ

けには行かない。真蹟の句形では「其玉や」と先ず提示詠嘆して、その魂を法の月がもとの羽黒へ呼び戻すことだろう、と言ったことになる。霊場全体を照らす月の光を「法の月」と観じたのであって、この月は季節ちがいの秋とはいっても殆んど季感はなく、観念性の強いものになっている。「無玉」を「其玉」に変えたのは、加藤楸邨氏のいわれるように、前の追悼文の勢を生かそうとしたものであろう（『芭蕉全句』参照）。

503

月か花かとへど四睡の鼾哉　（真蹟画賛）

奥羽の日記

雑。

語釈　○とへど　「問へど」。○四睡の鼾　「四睡の鼾」。「四睡」は和漢の画題の一で、中国天台山国清寺の豊干禅師と弟子の寒山・拾得、それに豊干が常に騎っている虎の四者が一緒に睡っている図をいう。ここは、それらが皆鼾をかいているというのである。「さて又虎は……四睡の一つにも顕はれけると聞くものを」（謡曲「龍虎」）「漸と雨降やみてあきの風　利牛　鶏-頭みては又鼾かく　野坡」（『炭俵』上）「Ibiqi.」（『日葡辞書』）。

大意　風雅を代表するものは何れか、月か花かと問い掛けても、四者は一向答える気配もなく、ただ鼾をかくばかりだ。

考　『毎日新聞』昭和三十六年十月十七日号に紹介された真蹟画賛は、天有法印の描いた四睡の図に賛したもので、羽黒滞在中の染筆と思われる。宝暦五（一七五五）年の梅至の奥羽旅行の記念集『奥羽の日記』には、「祖翁の唫詠所々書写」とした中に「自画賛」と前書して収めているが、芭蕉の自画ではなく、画は天有筆である。『芭蕉翁句解参考』に中七以下を「問へば四睡の眠り哉」とするのは誤伝に過ぎない。

月と花は風雅の道の象徴である。四睡の図は禅の悟入の境地を示すものとされるので、「月か花か」は禅問答の体

にならったもの。月と花と何れかまさると取ってもよい。風雅を事とする芭蕉がそう問い掛けても、四睡の連中は鼾をかくばかりとしたのは、芸術と宗教と、目ざす所を異にするのを暗示するようで興味が惹かれる。句は軽く戯れた逸興に過ぎない。「月」と「花」を重ね用いて雑の句としたのは、前の「月華の是やまことのあるじ達」（Ⅱ*416*）の句と同工で、画賛にはよく見られる。

元禄二年六月十日

七日羽黒に参籠して

504 めづらしや山をいで羽の初茄子（曾良書留）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・初茄子・雪まるげ・奥の枝折・乞食嚢・奥細道付録

夏季（初茄子）。

語釈 **○七日羽黒に参籠して** 六月三日から九日まで七日間、羽黒山南谷の別院に滞在して、三山巡礼などをしたことをいう。「参籠」は、寺社に籠って祈念すること。「我此度三熊野に参り一七日参籠申、証誠殿に通夜申て候へば、あらたに霊夢を蒙りて候」（謡曲「誓願寺」）「Sanrô. Mairi comoru.」（『日葡辞書』）。**○めづらしや** 「珍しや」。ここは初物を賞美する気持をあらわす。「すもゝもつ子のみな裸むし　越人　めづらしやまゆ烹也と立どまり　荷兮」（『ひさご』）「Mezzuraxij.」（『日葡辞書』）。**○山をいで羽** 「山を出で端」と国名「出羽」（今の秋田・山形両県の地）の掛詞。「出で端」は、出るべき時、きっかけの意から、ここでは「出た途端」の意に用いた。出羽国を「いではの国」ともいったことは、「たぐひなきおもひいではのさくらかなうすくれなゐの花のにほひは」（『山家集』下）「いでわの国へゆかんずるふねにびんせんしてよるべしとて」（『義経東下り物語』上）等の例によって知られる。「帷幕の内に躱ひたる筑登之等は、暗号齟齬て出走を失ひ」（『椿説弓張月』五十四回）「出端」（広本節用集）。**○初茄子** 「ハツナスビ」。ここは茄子の漬物で、季節の初物だったのである。「茄子」は夏の季語。（Ⅰ*40*）参照。「赤味噌はあかれにけりな初茄子　北枝」（『桃盗人』）「Fatçu. 1, Fatçumono.」（『日葡辞書』）。

大意　山を下りて里へ出た途端の、出羽のお国の初茄子は、まことに珍しく、賞するに足るものです。

考　「七日羽黒山にこもりて鶴が岡に出る／重行亭」（『泊船集』『蕉翁句集草稿』『蕉翁句集』）「羽黒山を出て鶴が岡重行亭」（『初茄子』）「羽黒に参籠して後鶴岡にいたり、重行亭にて興行」（『雪まるげ』）等の前書があり、『蕉翁句集草稿』には「此句、細道になし。前書之体は自筆などにあるか。白船に出す」（ママ）と注している。曾良の『随行日記』六月十日の条の記事は左の如くである。

○十日（曇）　飯道寺正行坊入来、会ス。昼前本坊ニ至テ、菱切・茶・酒ナド出、未ノ上刻ニ及ブ。道迄、円入被迎。又大杉根迄被レ送。秡川ニシテ手水シテ下ル。左吉ノ宅ヨリ翁計馬ニテ、光堂迄釣雪送ル、左吉同道。ゝ小雨ス。ヌル、ニ不及。申ノ刻、鶴ヶ岡長山五良右衛門宅ニ至ル。粥ヲ望、終テ眠休シテ、夜ニ入テ発句出テ一巡終ル。

芭蕉と曾良はこの日午後二時頃羽黒山の本坊を辞して麓の露丸（左吉）宅に至り、其処からは露丸と同道して鶴ヶ岡（現山形県鶴岡市）の長山重行（五郎右衛門）宅に入った。この日「めづらしや」の句を発句として始まった芭蕉・重行・曾良・露丸一座の歌仙は、十一日に「俳有。翁持病不快故、昼程中絶ス」（『随行日記』）という経過の後、十二日に「俳、哥仙終ル」（同上）とあって、この日に満尾したことが知られる。『書留』以下、『初茄子』（呉天撰、享保十三年刊）『雪まるげ』『奥の枝折』に全巻、『乞食囊』（李郭撰、宝暦十年刊）に第三まで、『奥細道付録』には四句目までが収められている。『おくのほそ道』に句は見えないが、

　羽黒を立て、鶴が岡の城下長山氏重行と云物のふの家にむかへられて、誹諧一巻有。左吉も共に送りぬ。

と、この歌仙のことに触れた記事がある。

　長山重行は庄内藩士で、今の鶴岡市山王町に当る荒町裏町から東へ入る小路に長山小路の名が残っている。これは重行の祖長山伝兵衛、最上氏の旧臣で、主家が滅びてから鶴岡の酒井氏に仕えた人の苗字を取った地名で、此処に住

んでいたのであった。重行は伝兵衛の孫に当るが、延宝六年の城下絵図では、この小路の西端にその屋敷があり、芭蕉の滞在したのも此処であったろう。元禄十三年にこの屋敷は召上げられ、家中新町に移転したという。なお、『随行日記』によって、露丸の弟が重行の縁者であったようにいう説もあるが、それに見える「図司藤四良」なる人が露丸の弟だというまでで、重行との関わりは考えられない。芭蕉はそれまでに重行と既に知合だったかどうかは分らぬが、俳諧好きの藩士ということで、その家に滞在したのであろう。

羽黒山滞在は普通の見物とは事変り、三山巡礼を志した特異のものだっただけに、精神的にはかなりの緊張を強いられ、肉体的にも重荷だったことは、二人が重行亭に到着してから仮眠をとって休息しているところを見ても察せられる。きびしい雰囲気の霊場を辞して里へ下りた旅人を迎えた重行亭では、晩のもてなしに茄子の漬物を出した。鶴岡辺は小粒な「民田(みんで)茄子」の産地という。この初物を賞して「めづらしや」と挨拶の意を籠めたのである。「山をいで羽」と掛詞にしたところにも、くつろいだ心のはずみがあらわれている。この掛詞には、[語釈]に引いた西行歌「たぐひなきおもひいではのさくらかなうすくれなゐの花のにほひは」が濃い影を落しているようだ。安東次男氏が指摘されたように、「西行は「薄くれなゐの花の匂ひ」を出羽の思出にしたが、私は「初茄子」の味を思出にしよう」（『芭蕉発句新注』）という俳諧なのである。

505 暑き日を海にいれたり最上川 （おくのほそ道）

鳥の道・泊船集

六月十五日寺嶋彦助亭ニ而

涼しさや海に入たる最上川 （曾良書留）

安種亭より袖の浦を見渡して

雪まるげ・奥細道拾遺・乞食嚢

涼しさや海にいれたる寂上川（継尾集）　一泊船集

六月十五日、酒田寺嶋彦助亭にて

涼しさを海に入たりもがみ川（奥細道付録）

夏季（暑き）。

語釈 ○**暑き日**「暑き日（あつひ）」。暑い太陽の意。［考］参照。○**寂上川**　既出（Ⅲ 495）。

大意 滔々と流れる最上川が、暑い夏の太陽を海に流し込んでしまった。今まさに真赤な夕日が海の彼方に沈もうとしている。

考 「最上川」（『泊船集』）「六月十五日寺島彦介にて」（『雪まるげ』）等の前書があり、『おくのほそ道』には、鶴岡の重行亭の記事の次に、

川舟に乗て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云医師の許を宿とす。

として「あつみ山や」（Ⅲ 509）の句と並べて出している。曾良の『書留』の日付は前掲のように「六月十五日」となっているが、『随行日記』の方には、

○十四日　寺嶋彦助亭へ被招、俳有。夜ニ入帰ル。暑甚シ。

とあって、翌十五日は象潟へ立っているから、『書留』の「十五日」は「十四日」の誤記であろう。『書留』には、以下詮道・不玉・定連・曾良・任暁・扇風らの付句六句を録し、「末略ス」とあり、これが当日の付合であった。寺島彦助は酒田の豪商で、浦役人を兼ね、俳号を安種亭令道といったという。付合の詮道の脇の作者名肩書に「寺嶋」とあるからこの人にちがいないが、「詮道」は誤りかも知れない。この前日の『随行日記』の記事に、

一　十三日　川船ニテ坂田（ママ）ニ趣。船ノ上七里也、陸五里成ト。出船ノ砌、羽黒ゟ飛脚。旅行ノ帳面被調被遣。又ゆかた二つ被贈。亦発句共も被為見。船中少シ雨降テ止。申ノ刻ゟ曇。暮ニ及テ坂田ニ着。玄順亭へ音信。留主ニ

テ明朝逢。

とあって、鶴岡から川舟で酒田に至った時の模様が知られる。右の「玄順」が『ほそ道』にいう「淵庵不玉と云医師」で、伊東氏、玄順が医名、俳号が淵庵不玉である。酒田俳壇の中心人物たるこの人の家は本町三丁目と大工町を結ぶ伊勢津小路にあったといわれ、此処に泊って翌日彦助亭の俳席に招かれたのであった。

この句の初案が、『書留』の「涼しさや海に入たる」の形だったことは論がない。不玉の撰した『継尾集』の「いれたる」という仮名書きを参照すれば、「入たる」も「入れたる」とよむべきことは、おのずから明らかになる。芭蕉は自動詞を用いるべきところに他動詞を同用することが時々あって、文法的には「最上川が自らを海に入れる」と説明される語法である。それは大河が上流から長い道のりを流れ下って、漸く此処で海にたどり着いたという気持のあらわれなのであった。「安種亭」は本町三丁目にあったという。そこから袖の浦の最上川河口あたりを見渡して、涼しさを賞する挨拶としたのが初案であって、大石田での作「さみだれをあつめてすゞしもがみ川」と動機も表現も極めて似ている。それが『ほそ道』執筆の際には、先ず曾良本に「暑き日を海に入レたる冣上川」の句形があらわれ、「たる」の「る」を「り」に改めて定案形に到達した。「暑き日を」が「いれたり」のはっきりした目的語として登場し、自他同用の初案よりも安定した表現を獲得するに至ったのである。「涼しさを海に入たり」（『奥細道付録』）の句形は一見中間案の如くであるが、涼しさを海に入れるのでは挨拶としておかしい。前書は『書留』に類しているし、年代の降るものだけに、誤伝の可能性も否定し難いと思う。『奥の枝折』に「涼しさを海へ入たる」とあるのも杜撰であろう。

初案の成った六月十四日は、『随行日記』によると大変暑い日であったようだ。その暑い一日も夕暮になると、さすがに涼しさが兆して来る。急流を以て鳴る最上川も河口付近ではその俤はなく、漫々と水を湛えて西の海に流れ入るのを、「海にいれたる」と川自体を擬人化したような表現にしたのであった。大石田辺から最上川の流れに沿って

河口まで辿って来た芭蕉の、大河に対する思い入れが、このような表現を誘ったのでもあろうか。しかし、「海にいれたる」は何としても不安定な感じを免れない。「いれたる」の目的語として「暑き日」を得るに及んで、この句は初めて安定したのである。

『ほそ道』の定案形は、海の彼方に沈んで行く赤い夕陽の印象が極めて強烈である。潁原博士のように、「暑き日」を「暑き一日」と取り、太陽とするのはこの時代の表現として相応しくないとする見方もあるが、「奥羽象潟の暑き日に面をこがし」(「幻住庵記」)という芭蕉自身の例や、「あつき日や扇をかざす手のほそり」という『続猿蓑』所収の句など、元禄期でも太陽を意味する例は稀ではない。『芭蕉俳句研究』に見える幸田露伴の鑑賞は、

此の句の「暑き日」は爛爛たる大日が海に入り終らうとして僅かに十の一を水の上に見せてゐるところだ。それが最上川の押し出る向うの方にあつて、それを最上川が海へ押し入れたものとして表はしたところがよい。「入れたり」と云つて川の力にしてゐるところがこの句の急所である。技巧であるが技巧に堕せず句に趣もあり力もある。

と述べていて、太陽説の代表的なものであろう。勿論暑熱の一日の後に晩涼を得た趣は、言外に感得し得る。太陽は「十の一」でなくともよく、もっと大きな落日であった方が効果的であるが、それは何れにもせよ、「太陽と大河と、あたかも自然のエネルギーとエネルギーとが相搏つような壮観であり、大景によって得た感動の句」(山本健吉氏『芭蕉全発句』)なのである。挨拶句から独詠の景観句に飛躍したところも、「あつめてすゞし」から「あつめて早し」に変った句の場合と似ている。

506　象潟や雨に西施がねぶの花　(おくのほそ道)

雪まるげ

柿衛文庫蔵真蹟懐紙・継尾集・陸奥鵆・泊船集・三山雅集・鳥糸欄・ねぶの雪・道しるべ

きさかたの雨や西施がねぶの花（佐藤氏蔵真蹟懐紙）

象潟六月十七日朝雨降十六日着十八日ニ立

象潟の雨や西施がねむの花（曾良書留）

夏季（ねぶの花）。

語釈 ○**象潟**「キサカタ」。今の秋田県の最南端、由利郡象潟町の海岸。入江に島が点在する、所謂八十八潟九十九島の景観によって、松島と並ぶ奥羽の勝地であったが、細道の旅より百余年の後、文化元（一八〇四）年六月四日の地震の際、溶岩流で入江が埋り、嘗ての景勝は失われた。鳥海山の登山口に当り、天然ガスや温泉が湧出する。「潟」は「瀉」の異体字。○**西施**「セイシ」。中国の春秋時代、江南の越の美人。呉王夫差に敗れた越王勾践がこの美女を夫差に献じ、夫差は彼女の容色に溺れて国政を疎かにしたので、勾践はその虚をついて夫差を滅した。「傾国の美」といわれる代表的美人。「西施／宮中拾得娥眉斧　不献吾君是愛君／花ながら植かへらるゝ牡丹かな（越人）」（『あら野』巻六）。○**ねぶの花**「合歓の花」。「ねむ」といっても同じ。マメ科の落葉喬木。斜めに生えた幹からしなやかな枝を出し、夏にほんのりと紅をさした花を開く。花は夕方近くになって咲き、日中にはしぼむ性質があり、一方葉は夜になるとぴたりと合わさる習性がある。夏の季語。ここは「西施が睡る」を言い掛けた。「雨の日やまだきにくれてねむの花　蕪村」（『とら雄遺稿』）「Nemunoqi.」（『日葡辞書』）。

大意 象潟の眺めはまことに美しい。折柄の雨に濡れたねむの花の風情は、あの西施がうつつなく眼をとじたさまを髣髴とさせる。

考 「元禄二年夏象瀉一見」（柿衛文庫蔵真蹟懐紙）「きさかた」（『陸奥鵆』『泊船集』）「六月十七日朝、象潟雨降ル。夕止、舟にて潟を廻る」（『雪まるげ』）等の前書がある。芭蕉と曾良は六月十五日に酒田を立って象潟へ向い、その日は雨の為に吹浦に泊った。十六、十七両日の『随行日記』の記事を左に抄する。

○十六日　吹浦ヲ立。番所ヲ過ルト雨降出ル。一リ女鹿　是ゟ難所、馬足不通。番所手形納。大師崎共、三崎共云。一リ半有。

小砂川、御領也。庄内預リ番所也。入ニハ不入手形。塩越迄三リ。半途ニ関ト云村有。ウヤムヤノ関成ト云。
此間雨強ク、甚濡。○昼ニ及テ（船小ヤニ入テ休。）塩越ニ着。佐々木孫左衛門尋テ休。衣類借リテ濡衣干ス。ウドン喰。所ノ祭ニ
付而女客有ニ因テ、向屋ヲ借リテ宿ス。先、象潟橋迄行而、雨暮気色ヲミル。今野加兵へ折々来テ被レ訪。
十七日（朝小雨。昼ヨリ止テ日照。）朝飯後、皇宮山蚶弥寺（ママ）へ行。道々眺望ス。帰テ所ノ祭渡ル。過テ熊野権現ノ社へ行、躍等ヲ見ル。夕
飯過テ潟へ船ニテ出ル。加兵衛茶・酒・菓子等持参ス。帰テ夜ニ入、今野又左衛門入来、象潟縁起等ノ絶タル
ヲ歎ク。翁諾ス。弥三良低耳、十六日ニ跡ヨリ追来テ、所々へ随身ス。

『書留』の前書によって、初案「象潟の雨や」の句は、六月十七日朝の雨中に詠まれたことが分るが、勿論前日夕方の雨景の印象も含まれていたであろう。初案形を書いた真蹟懐紙二点のうち、佐藤氏蔵のものは地元の蚶満寺に伝来し、柿衛文庫蔵のものは宮部弥三郎低耳（岐阜の商人。前年夏の鵜飼見物の時からの知合で、行商の途次たま〳〵芭蕉とめぐりあい、見物につきあっていたことが、右の曾良の『日記』に見える）に書き与えられたと推定され、美濃地方に伝わっていた。何れも旅行当時象潟での染筆と思われる。『おくのほそ道』の象潟見物の記事は、左の如くである。

江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責。酒田の湊より東北の方、山を越礒を伝ひ、いさごをふみて其際十里、日影やゝかたぶく比、汐風真砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇也とせば、雨後の晴色又頼母敷と、蜑の笘屋に膝をいれて、雨の晴を待。其朝天能霽て、朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先、能因嶋に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり。神功后宮の御墓と云。寺を干満珠寺と云。此処に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲ば、風景一眼の中に尽て、南に鳥海天をさゝえ、其陰うつりて江にあり。西はむや〳〵の関路をかぎり、東に堤を築て、秋田にかよふ道遥に、海北に

かまえて浪打入る所を汐こしと云。江の縦横一里ばかり、俤松嶋にかよひて又異なり。松嶋は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

右の文の後に、曾良や低耳の句を含めて五句が並記されてあり、「象潟や」の句はその最初にあって、その景致を総括的に主題としたものである。

発想の契機が象潟の雨景と、其処に咲く合歓の花だったことは、初案形に既に明らかだ。此処には合歓の木が多いという。また、はやく初案に「西施が」と美女の名を「ねむの花」の形容に使っているのは、西湖の景を詠んだ蘇東坡の詩を連想したからで、即ち、『聯珠詩格』に見えるその詩「湖上飲、初晴後雨」に「水光瀲灎晴偏好、山色朦朧雨亦奇、若把㆓西湖㆒比㆓西子㆒、淡粧濃抹両相宜」（水光瀲灎として晴れて偏へに好し。山色朦朧として雨も亦奇なり。若し西湖を把りて西子に比せば、淡粧濃抹両つながら相宜し）とある詩が、西湖の景を西子（西施）に擬しているのに倣ったのであった。『継尾集』が句の前にこの蘇東坡の詩を出しているのを以てしてもこの事は知られ、詩の影響は前掲『ほそ道』の文にも明らかに見える。ただ、初案の句形では、「象潟の雨」と「西施がねむの花」（西施が睡れる如き合歓の花）とが単純な一対の照応する景色を作り出すだけで、複雑な表現の味わいに乏しい。山本健吉氏の言を借りれば、

……それは図式にすれば、ab+cd の関係にすぎない。ところで「合歓の花」のあわれは、やはり雨中に葉を合せるところにあり、「雨に」と言って上句から切離して、下の句に関係せしめることによって、そこには「雨に合歓の花」「西施が合歓の花」の二つの意味が重なってくる。しかも「雨に」は、上の「象潟や」との間に、切れながらもつながる隠微な関係を保ち、象潟の雨景をも具象しているので、そこに三重の照応が生ずる。それをさらに初五が大きく総括して、それは A（ab+bc+cd）という複雑な図式となる。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

僅か二つの助詞を改めることによって、句の味わいを一層こまやかにすることに成功したわけである。遙かに鳥海山

を望み、水と島との入り交る象潟の雨景、雨に萎れる合歓の花の背後には、胸を病んで眉を顰めていたというか弱い西施が、心ならずも呉王に仕える憂愁に満ちた俤が浮ぶ。それは『ほそ道』の文の末に、「象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり」とも交響して、その表現効果を完成するのである。確かに道具立ては多く、技巧的な作であるが、単純勁烈な表現とは別の、柔媚幽玄な味わいを持つ秀作といってよかろう。それは象潟の景全体の味であり、雨に濡れる合歓の花や西施という美女の持つ気分でもある。

夕方雨やみて、處の何がし舟にて江の中を案内せらるゝ

507　ゆふ晴や櫻に涼む波の華　（佐藤氏蔵真蹟懐紙）

柿衛文庫蔵真蹟懐紙・曾良書留・継尾集・陸奥衛・泊船集・三冊子・蕉翁句集・雪まるげ・ねぶの雪・道しるべ

夏季（涼む）。

語釈　**○夕方雨やみて**　底本には、前の「ねぶの花」の句の次に、この前書と句が書かれている。前掲曾良の『随行日記』六月十七日の条に、「夕飯過テ潟へ舩ニテ出ル」とある記事に照応するもので、「夕方」は十七日夕のこととなる。この日は「朝小雨。昼ヨリ止テ日照」であった。発音は『日葡辞書』に「Yǔcata.」「Yǔtçucata. i, Yǔcata.」等とあるのに従って、「カ」を清音によむ。「たゞさへ涙がかわきにくいわしが袖へ、ゆふかたになれば、此時節の露までがおきそふてさ」（『古今集遠鏡』四）「かゝる府中を飴ねぶり行　野水　雨やみて雲のちぎるゝ面白や　落梧」（『あら野』員外）「Yami, u, yǒda, …… Furiyamu.」（『日葡辞書』）。**○処の何がし**　「処の何がし」。地元象潟に住む何がしという者。曾良の『日記』によれば、今野加兵衛という人物である。「処の者に預け番を守らせ候所に」（謡曲「籠祇王」）。**○江の中を案内せらるゝ**　「江の中」は、象潟の入江の中をいう。加兵衛が景色のよい所、古人ゆかりの遺蹟等を案内したのである。「らるゝ」は尊敬。「東南より海を入て江の中三里、浙江の潮をたゝふ」（『おくのほそ道』）「この者年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて、一日案内す」（同上）「Ye.」「Annai.」（『日葡辞書』）。**○ゆふ晴**　「夕晴」。雨天や曇天が夕方になって晴れあがること。**○桜**　『継尾集』（不玉撰、元禄五年刊）に載せる「西行桜」と題した芭蕉の文に

ある老樹。それに「象潟の桜はなみに埋れてはなの上こぐ蜑のつり船　西行法師／花の上漕とよみ給ひけむ古き桜も、いまだ蚶満寺のしりへに残りて、陰-波を浸せる夕晴、いと涼しかりければ」とあるのによれば、蚶満寺の裏の方にあったのである。**○涼む**　夏の季語。既出（Ⅰ*157*）。**○波の華**　「波の華」白く立つ波頭を花にたとえていう。既出（Ⅰ*34*）。

大意　雨もすっかりあがって、夕晴れの空が快い。西行ゆかりの桜の木蔭に涼んでいると、入江に立つ波頭が花のような美しさだ。

考　「夕晴」（柿衛文庫蔵真蹟懐紙）「夕ニ雨止て舩ニて潟を廻ル」（『曾良書留』）「西行ざくら」（『陸奥鵆』）等の前書の外、『継尾集』『泊船集』には「西行桜」と題した文（前掲参照）が前にあり、『三冊子』も題はないが、内容は同じである。『ねぶの雪』『道しるべ』には佐藤氏蔵真蹟懐紙と同じ前書がある。六月十七日夕の作であるが、『おくのほそ道』に収められなかったのは、一つには舟で象潟をめぐったのを「其朝天能霽て朝日花やかにさし出る程に象潟に舟をうかぶ」とした為に、「ゆふ晴」の句を出しにくくなった故もあろう。

『三冊子』には「此句は古歌を前書にして、その心を見せる作意成べし」とある。「象潟の桜はなみに埋れて」の歌は『山家集』などに見えず、西行作とする確証はないけれども、『ほそ道』にも「花の上こぐとよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす」と書いているように、この桜の下に来て芭蕉の脳裏に直ちに浮んだ歌であった。西行は桜の盛りに訪れて、入江の波に映る花影を「花の上こぐ」と詠んだが、今は花時ではない。せめて波立つ白い波の穂を花に見立てて、西行の歌の風情を偲ぼうというのである。中七までに描かれた現実の涼味を、「波の華」と一転することによって、古人の詩心との交響をはかっている。技巧的な趣向であるが調子は軽快で、西行への思いも窺われる句柄である。

508

汐越や鶴はぎぬれて海涼し　（おくのほそ道）

類柑子

腰長の汐といふ処はいと浅くて、鶴おり立てあさるを

腰長や鶴脛ぬれて海涼し　（真蹟懐紙）

真蹟短冊・曾良書留・継尾集・泊船集・春草日記・宇陀法師・ねぶの雪・奥細道付録・道しるべ

夏季（涼し）。

語釈　○**汐越**　「シホコシ」。曾良の『随行日記』六月十六日の条に「昼ニ及テ塩越ニ着」とあるように、当時象潟の中心部に塩越村があったが、ここのは村名ではなく、『おくのほそ道』に「海北にかまえて浪打入る所を汐こしと云」とある所に当る。大川と新川とが合流して象潟川となり、村の北側で海に注ぐあたり、大塩越という小集落があって、佐藤氏蔵真蹟懐紙の前書に見える「腰長の汐」とも別称される所である。人の腰までしか水の及ばない浅瀬であった。「腰長や」の句案を参照すれば、「汐越」には「腰」を言い掛けているのであろう。○**鶴はぎぬれて**　「鶴脛濡れて」。鶴の脚が海水に濡れたさまをいう。浅瀬に下りた鶴の姿を描いたのである。但し、この鶴は、鵠のとりを芭蕉が見誤ったものであろうという（井本博士『芭蕉とその方法』）。「夕風や水青鷺の脛をうつ」（『蕪村句集』）「Fagui.」（『日葡辞書』）。

大意　汐越と呼ばれる浅瀬のあたり、下り立った鶴の脚が水に濡れて、海は如何にも涼しそうだ。

考　象潟町郷土資料館現蔵の真蹟短冊には、「象潟の内こしたけのしほと云処にて」と前書があり、曾良の『書留』にも「腰長汐」と題している。『ねぶの雪』『奥細道付録』『道しるべ』の前書は真蹟懐紙と同じ。この懐紙は、前の「きさかたの雨や」「夕ばれや」の二句と共に記した旅行当時の染筆で、「腰長や」の句形は六月十七日に成った初案と見られる。真蹟短冊も象潟に伝来したことや筆蹟からして、当地で揮毫したものであろう。『ほそ道』執筆の際に初五を「汐越や」と改めて治定したのである。

両案いずれも象潟の入江の外海に接するあたりの景を叙した句で、初案の前書にあるように、鶴が浅瀬に下り立っ

縁語仕立が殊に目立ち、それは改案の「汐越」にも及んでいるようだ。もともと「鶴脛」の語は、人間が衣の裾をかかげて脛を露わにした体をいう語で、『金葉集』所収の古連歌に、

宇治へまかりけるみちにて、ひごろ雨ふりければ水のいでゝ、かもがはを、をとこのはかまぬぎて、てにさゝげてわたるをみて

頼綱朝臣

かりばかまをばをしとおもひて

信綱

かもがはをつるはぎにてもわたるかな

とある一聯がよく知られ、『ほそ道』の古注にも注意されている。これについては、山田孝雄博士の『俳諧語談』にも精しい考証があり、語としては人間の脛とするのが正しいのであるが、この句の場合は前書に照らして鶴の脚として用いたことは動かし得ない。すると、前田金五郎氏が山田博士の著の書評（『国語学』52号）で述べられたように、鶴の下り立った姿を、「あれこそ本当の鶴脛だ」と興じた趣向と見るのが穏当に思われる。安東次男氏は「汐合の河口に裾からげして涼を取る芭蕉と曾良の墨染姿」（『芭蕉発句新注』）とされるが、前書がある以上は採れない。ただ、同氏のいわれるように、象潟での鶴と松島での曾良の句「松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす」が照応していることは認められる。『ほそ道』に於ける改案は、初案では「腰」と「脛」の縁語仕立が表に出過ぎて、句品を落している嫌いがあるのを正したのであろう。「腰」は「越」の裏にひそめられ、潮があたりに満ちて来るイメージも鮮やかで、はたらいた表現になるのである。こういう逸興も、俳諧味の一面として見逃し難い。

出羽酒田伊東玄順亭ニ而

509
温海山や吹浦かけて夕涼　（曾良書留）

あつみ山吹浦かけて夕すゞみ　（韻塞）

継尾集・おくのほそ道・鳥の道・泊船集・梟日記・今日の昔・宇陀法師・雪まるげ・あつみ山・袖の浦・奥の枝折・乞食嚢・奥細道付録

類柑子

夏季（夕涼）。

語釈　○**酒田**　「サカタ」。今の山形県酒田市。日本海に面した出羽最大の港で、上方などとの交易によって殷賑を極めた。○**伊東玄順亭**　「伊東玄順(いとうげんじゅん)」は、酒田で芭蕉を泊めた「淵庵不玉と云医師」（『おくのほそ道』）で、玄順が医名、不玉が俳号である（一四七頁参照）。庄内藩主酒井侯の侍医。俳諧は初め大淀三千風門、後蕉門に帰し、京の向井去来とも交流があった。元禄十年歿、享年未詳。○**温海山**　「アツミヤマ」。酒田の南西約十五里に聳える温海岳(だけ)。標高七百三十メートルで、南西麓に温海温泉がある。○**吹浦**　「フクウラ」。酒田の北約六里、吹浦川河口右岸にある村（現山形県飽海(あくみ)郡遊佐(ゆざ)町吹浦(ふくら)）。象潟に向う途中、六月十五日に芭蕉は雨の為にここで一泊している。○**夕涼**　「夕涼(ゆふすゞ)み」。夏の季語。既出（Ⅱ293）。

大意　南に見える温海山、北は吹浦の方までずっと見渡して、心ゆくばかり夕涼みをすることだ。

考　「江上之晩望」（『継尾集』）「淵菴不玉亭にて」（『鳥の道』）「淵菴不玉亭」（『泊船集』）「海島曲浦長汀の吟」（『類柑子』）「出羽酒田の湊伊東不玉亭にて」（『雪まるげ』）「江上眺望」（『あつみ山』）「袖之浦晩望」（『袖の浦』）「酒田伊東玄順亭にて」（『奥細道付録』）等の前書がある。この句は曾良の『書留』に記録されている通り、酒田で出来た不玉・曾良との三吟歌仙の発句であるが、『随行日記』には、象潟から酒田へもどった後の記事に、

○十九日　快晴。三吟始。……

○廿日　三吟。○廿一日　快晴。夕方曇。夜ニ入村雨シテ止。三吟終。

と見える。これによれば、発句の出来たのは六月十九日、歌仙は二十一日に至って満尾したのであった。『袖の浦』（淇水撰、明和三年刊）には、この歌仙の懐紙について、端書には「袖の浦江上之涼」と題し、はじめの半折ばかりは船中での吟で書体も略筆であり、残りは亀崎城下の雲龍寺で巻かれ、同寺にその懐紙が伝わっていたが、寛延四（一七五一）年の春に焼失したという。不玉自身の撰した『継尾集』にも「江上之晩望」とあって、如何にも海上に舟を出して夕涼みをした時の吟のような印象を受けるけれども、そう見るには聊か疑わしい点がある。芭蕉と曽良は十八日の暮方に酒田の不玉亭に帰ったが、象潟から十里以上の道を一日で歩いて、かなり疲れていた筈だから、舟を出して納涼するような余裕はなかったであろう。だから、十八日には発句だけにしても成っていたとは考えられない。翌十九日にしても、『日記』には三吟が夕方から始まった様子は見えず、雲龍寺云々の件も、若し事実ならば『日記』に何か触れてありそうなものである。従って『袖の浦』の所伝は疑わしく、句は十九日に伊勢津小路の不玉亭で、海辺の地酒田の全体的印象をもとに成ったものと見られよう。芭蕉は十四日に寺島彦助亭に招かれているし、象潟への往復に当っても、酒田港の曲浦長汀の趣は、強く印象に留めていた筈である。初五が字余りにならない『韻塞』等の句形は杜撰とおぼしく、この「や」が句中で重要な役割を果していることは後述する。

酒田の海辺に近い小丘に登ると、南方遥かに温海山の頂をわずかに望むことが出来るという。北方の吹浦は見えないけれども、芭蕉は象潟へ赴く際にこの地に泊ったので、その印象は鮮明であったろう。句は先ず「温海山や」と打ち出して南方遥かの山に目をとめ、北に目を転じて「吹浦」の方を眺める。蓼太の『棚さがし』（安永五年刊）には、

此句の上のや文字、省きて出せる集あり。いかにもや文字無用のやうに覚侍りしに、先年象潟行脚の比、福浦に一宿して此句を思ひ出せしに、あつみ山は遠く見えて、福浦は足下也。やの字は、あつみやまや福浦と首をめぐらしたる句也。しかれば、句の骨柄ばかりに余したるものにはあらず。面白み又〻格別なり。

と述べてあり、これは吹浦での眺めをもとにしての立言ではあるが、「や」に「首をめぐらしたる」感じを見ている

のは的確といえよう。これによって南から北へ広い眺望をほしいままにする気持が出て、句の世界の大きさが読者に感得出来るし、悠揚とした調べも快い。この点は「や」を抜いた形と比較すればよく分るので、「や」がなくては、この句の大きさは全く失われてしまう。また、支考の『梟日記』元禄十一年五月二十六日の条に、

此句は吹浦の二字うれしければかく申され侍しを、此ごろなにがしが集には、福浦かけてと出し侍り。是俳諧をしらぬのみにあらず、先師をあやまるにちかし。

と論じているのは、「あつみ山や吹浦」と続けた二つの地名に「熱き（暑き）を吹く」という言葉遊びがあることをいうのである。「なにがしが集」とは、奈良の玄梅が撰した『鳥の道』（元禄十年刊）を指す。これには「福浦」と書かれていて、「福」では「吹く」の連想が生きないわけである。「先師をあやまるにちかし」は大袈裟ながら、この縁語仕立てによって、大景を見渡してくつろぐ夕涼みの気分が更によく出ることを見逃してはならない。不玉への挨拶として、行き届いたもてなしに快くくつろいでいる気持があらわされており、句の表には出ていないが、「酒田の磯、最上川の落口に、袖形りの洲崎あり。此処を袖の浦と云。名所にて古歌多し」（『奥細道菅菰抄』）という此処の歌枕への思いもあったであろう。句中の温海山や吹浦が却って歌枕でないのは、俳諧とも見られる。

……暑さ限もなければ、安積山よりふく浦までも涼まぬ所なきをいへり。（正月堂『師走嚢』）

夕陽の眺望、眼の及ぶ所ことごとく納涼なり。その気色甚大にして述べがたし。（東海呑吐『芭蕉句解』）

右等の説は、南から北まで凡て夕涼みをしているさまの描写と見るのであるが、単なる描写では力が弱く、挨拶にもならない。夕涼みが作者自身のことであってこそ、この句は生きるのである。

あふみや玉志亭にして納涼の佳興に瓜をもてなして發句をこふて曰、句なきものは喰事あたはじと戯ければ

510

初眞桑四にや斷ン輪に切ン　（真蹟懐紙）　　柴ふく風

初眞瓜(ママ)四ッにやわらん輪にやせむ　（浮世の北）　　宇陀法師・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

初眞桑たてにやわらん輪に切ん　（泊船集）

夏季（初真桑）。

語釈 **○あふやみ玉志亭**　「近江屋玉志亭」。曾良の『随行日記』六月二十三日の条に見える「近江ヤ三良兵へ」のこと。酒田の廻船問屋近江屋嘉右衛門の子息で、俳号を玉志といった人である。近江屋は酒田三十六人衆といわれた古くからの豪商で、嘉右衛門の屋敷は本町二丁目にあったから、玉志の家も同じ所か、その近辺であったろう。**○納涼の佳興に**　「納涼の佳興に」。暑気を凌ぐ面白い趣向として。「夏日の納涼は扇一本にして世上に交る」（『続猿蓑』下、支考発句「帷子の」前書）「明日其角・挑隣可参由、幸一坐可有佳興候へ共」（元禄六年三月許六宛芭蕉書簡）「Dôreô.」（『日葡辞書』）。**○瓜をもてなして**　「瓜」は、句中に見える真桑瓜。それを客へのもてなしとして出したのである。「瓜」は既出（Ⅱ*293*）。「物相一飯をもてなし、茶をたてゝ出し」（『醒睡笑』巻八）「**Motenaxi, -u, aita.**」（『日葡辞書』）。**○発句をこふて曰**　「発句を乞うて曰く」。発句を作るように願って主人の玉志がいうことには。「発句」は、俳諧の付合の最初の句のことであるが、ここは独立して作られるものをいう。「こふて」はウ音便の慣用表記。底本の真蹟では、「こふ句なきものは」と続けた右傍に「て曰」を補った形になっており、最初は「こふ」で一連の文章が終っていたのである。「ある人のもとにて発句せよと有ければ」（『あら野』巻一、鼠弾発句「ほとゝぎす」前書）「此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞」（「幻住庵記」）「老聃曰知足之足常足」（『はるの日』、越人発句「夕がほに」前書）「**Foccu. i, Iydasu fajimeno cu.**」「**Coi, ô, ôta.**」（『日葡辞書』）。**○句なきものは**　「句無き者は」。発句の出来なかった者は。「その句に魂の入ざれば、ゆめにゆめみるに似たるべし」（『猿蓑』其角序）「そゞろに酔てねぶるものあらば」（支考「今宵賦」―『続猿蓑』上）「**Cu.**」「**Mono.**」

(『日葡辞書』)。○**喰事あたはじ**　「喰ふ事能はじ」。瓜を食べることは出来ません。打消の推量の助動詞「じ」は、この場合、命令的な言い方になっている。「余は皆俤似かよひて、其糟粕を改る事あたはず」(『笈の小文』)。○**戯ければ**　「戯れければ」。冗談をいったので。芭蕉の場合、「たはぶれ」等の仮名書きの例が多い。「ぶ」と書いて「む」とよむという説もあるが、『日葡辞書』には「Tauabure, uru, eta.」「Tauamure, uru, eta.」の両項目がある。「我子あらば此名を得させんと、道づれなる人にたはぶれ侍しを思ひいでゝ」(芭蕉真蹟「賀重」)。○**初真桑**　「ハツマクハ」。真桑瓜(I 141)の初物。瓜は夏の季語である。「あるじのもてなしに長途の労を忘れて／あと先の命もうれし初真桑　里紅」(『藤首途』)。○**四にや断ン**　「四にや断たン」。四つに割ろうか。「断つ」はこの場合には聊かおかしいが、下に「切ン」があるので、斯う訓む外ない。楸邨氏の『芭蕉全句』と山本健吉氏の『全発句』は「断らん」と訓んでいるが無理であろう。「おもふ事よつにして、夢もまた四種」(『嵯峨日記』)「湯殿まいりのもめむたつ也　舟泉涼しやと莚もてくる川の端　野水」(『あら野』員外)「Yotçu.」「Tachi, tçu, atta. …… Qirumonouo tatçu.」(『日葡辞書』)。○**輪に切ン**　「輪に切らン」。輪切りにしようか。疑問の助詞はないが、上の「四にや断ン」と並べて、どちらにしようかという意味は明らかである。「Va.」(『日葡辞書』)。

大意　うまそうな真桑瓜の初物だ。さて、これを四つ割りにしようか、それとも輪切りにしようか。

考　本間美術館蔵の真蹟懐紙には、芭蕉の句の後に、

初瓜やかぶり廻しをおもひ出　ソ良
三人の中に翁や初真桑　不玉
興にめでゝこゝろもとなし瓜の味　玉志

という三句を並記し、「元禄二年晩夏末」の年記を添えている(化政期の『柴ふく風』(平角撰)にその写しを所収)。曾良の『日記』には、

廿三日　近江ヤ三良兵へ被招。夜ニ入、即興ノ発句有。

とあって、芭蕉・曾良・不玉の三人が招かれ、当座に認めたのがこの懐紙であった。「あふみや」については、西鶴

の『日本永代蔵』に出る鐙屋惣左衛門に擬されたこともあったが、曾良の記す「近江ヤ」を確かな根拠とすべく、酒田三十六人衆の中に近江屋があるのだから、この方を採るべきである。

句形について、『泊船集』には「此句は酒田にての吟なり。いづれの集にやら、四ツにやわらん輪にやせんと、あやまりしるしけり」と付記して、『浮世の北』（可吟撰、元禄九年刊）等の所伝を否定している。しかし、そういう『泊船集』自体の「たてにやわらん」の根拠も甚だ疑わしく、結局信頼し得るのは真蹟の句形だけということになる。『芭蕉句選』には「たてにやわらん輪にやせん」という形も見えるが、これらの異同は何れも必然性に乏しく、軽い気持で作った即興句を、芭蕉がかれこれいじったとは思われない。その座限りの言い捨てに過ぎないが、初物を喜んで子供のようにはしゃいでいるところが、如何にも無邪気である。

511 結ぶより早歯にひゞく泉かな （都曲）

夏季（泉）。

語釈 **○結ぶより** 「結ぶ」は、水を手ですくうこと。「結」は宛字である。既出（Ⅲ *473*）。「より」は、……すると直ぐに、……するや否やの意をあらわす。「笠の緒付かえて三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて」（『おくのほそ道』）。**○早歯にひゞく** 「早歯に響く」。早くも水の冷さが歯に感ぜられるのである。「棹の歌はやうら涼しめじか舟　湖春」（『炭俵』上）「川越くれば城下のみち　越人　疱瘡貝の透とをるほど歯のしろき　人」（『あら野』員外）「**Sudeni faya yoga aqegatani natta.**」「**Fauo camu.**」（『日葡辞書』）。**○泉** 「イヅミ」。地下から湧き出す清冽な水。「清水」等と同じく夏の季語である。「泉　夏也。水と付べからず。……黄なるいづみ、黄泉といひて土中の事也。水辺にあらず。夏にもならず。後生の事也」（『御傘』）「緑わく夏山陰の泉かな」（『蓼太句集』三編）「**Izzumi.**」（『日葡辞書』）。

大意 手ですくうと直ぐに、もうその冷さが歯にひびくような、清冽な泉よ。

考　元禄三年二月の跋がある言水の『都曲』初出なので、元禄二年夏までには成っていた句と推定される。この句を含む六月二十七日付の北枝宛芭蕉書簡は偽簡とおぼしく、同じくこの句の見える幕末期の『芭蕉桃青翁御正伝記』中の曾良日記と称するものも信じ難いもので、現存の『随行日記』等曾良の記録にもこの句は載っていない。初出本以外に年代の手がかりになるものは皆無である。確たる根拠はないが、細道旅中の作ではなさそうで、貞享期の作たる可能性が高いと思う。『一葉集』に下五を「しみづ哉」としているのは、その根拠を知らない。「結ぶより」を、飲むと直ぐにと解する説もあるが、「むすぶ」はやはり飲むこととは別とすべきであろう。飲まないうちからもう歯にひびくといって、水の冷さを強調した趣向なのである。涼を呼ぶ泉の感じは生かされているが、大して秀逸の作ではない。

512　風かほるこしの白根を國の花　（作原）

夏季（風かほる）。

語釈　**○風かほる**　「風薫る(かぜかをる)」。夏の南風の形容。緑陰を吹く風の快さを「薫る」といった。「風の香」（Ⅲ*497*）参照。「かほる」は「かをる」の仮名ちがいである。「風薫(カフル)　南薫(ナンクン)。六月にふく涼風也。薫風自南来と古文前集にいへり」（『増山井』）「摩耶が高根に雲のかゝれる　野水　ゆふめしにかますご喰へば風薫　凡兆」（『猿蓑』巻五）「**Noqi chicô fanatachibanano attaga, cajeua natçucaxù cauotta.**」（『日葡辞書』）。**○こしの白根**　「越(こし)の白根(しらね)」。加賀と飛騨の境（今の石川・岐阜両県境）に聳える白山(はくさん)。標高二千七百二メートル。古くからの信仰の山で、白山神社がある。「こし」は、北陸地方の古称。昔の「越(こし)の国」である。「やまのいたゞく雪はきえけり　大ひえはこしのしらねの名のみして」（『三島千句』第八）「吾妻路のかたに旅だちて、松嶋・象潟のながめにあき、越の白根のしらぬ行するも、心づくしのたびねをだに」（文考「陳情表」―『国の花』一）。**○国の花**　「国(くに)の花(はな)」。一国の精華という程の意。尊い御山を北陸地方を象徴するものとした。

大意 越の白根を国の精華として、緑の香を運ぶ風が如何にも快い。

考 金沢の蕉門句空の撰した『柞原集』（元禄五年八月成）の巻頭に「春なれやこしの白根を国の花」の句を掲げて、此句、芭蕉翁一とせの夏越路(コシヂ)行脚の時、五文字風かほると置て、ひそかに聞え侍るをおもひ出て、率爾に五もじをあらたむ。

と注している。これによると、細道の旅中に芭蕉が「風かほるこしの白根を国の花」という句をなし、これを句空に報じたことは確かであろう（『日本古典全書・芭蕉句集』頭注、山崎喜好氏説参照）。一句として掲げた書は、後年の『蕉句後拾遺』（康工編、安永三年刊）以外に見当らないが、ここでは『柞原集』の表記により、一句として標出した。なお、「春なれや」の句に作者名はないが、撰者句空の作と思われる。

元禄二年の立秋は六月二十一日、芭蕉が鼠が関を越えて越路に足を踏み入れたのは六月二十七日で、六月中には村上まで行っていた。この句の成立は六月末、越後の地に入ってからの作と見ておく。句は薫風渡る越路の平野の彼方に高峰白山を望む趣で、大国に相応しい句柄の大きさが感ぜられる。

初秋越後路にたび寝して

513 ふみ月や六日も常の夜には似ず（真蹟懐紙）

曾良書留・其袋・猿蓑・おくのほそ道・陸奥鵆・千句塚・粟津原・蕉門録・雪まるげ・奥細道拾遺・乞食嚢・奥細道付録

文月や六日も常の夜には似ぬ（柏原集）

文月の六日も常の夜には似ず（泊船集）

—きれぐ

秋季（ふみ月）。

語釈 ○**初秋**「ショシウ」。即ち句中の「ふみ月」である。「当夏暑気つよく、諸縁音信を断、初秋ゟ閉関」（霜月八日付曲翠宛芭蕉書

簡）「Xoxû. Aqino fajime.」（『日葡辞書』）。○**越後路にたび寝して**　「越後路に旅寝して」。「越後路」は、今の新潟県地方。この句は直江津での作である。［考］参照。○**ふみ月**　「文月」。陰暦七月。秋の季語である。「惣別文月といふ事、七夕に天下の文書をさらすゆへなれば、文学の文に同じ。然共、七月の異名になれば、ふ月といひても文月といひても文の心せられず」（『御傘』）「文月といひては。ぅは書。筆だてなどの詞をも結び。又踏といふにそへてもいへり」（『山之井』）「七夕に文をかしさらすゆへに、文ひろげ月とも文月ともいへり」（『増山井』）「文月や陰を感ずる蚊屋の内　其角」（『続の原』天）「Fumizzuqi, P.」（『日葡辞書』）。○**六日も常の夜には似ず**　「六日も常の夜には似ず」。明日が七夕であることを前提に、その前日も普段の夜とはちがって趣があるといった。「すゞしさを我やどにしてねまる也　芭蕉　つねのかやりに草の葉を焼　清風」（『繋橋』）「Tçunena. 1, tçuneno.」（『日葡辞書』）。

大意　七月に入って明日は七夕だ。そう思うと、六日の今宵も普段の夜とはちがって、空の気配に何処か艶な趣が感ぜられる。

考　「直江津にて」（『曾良書留』）「北国何トヤラいふ崎にとまりて、所の夷もおし入て句をのぞみけるに」（『其袋』）「直江の津にて」（『奥細道拾遺』）「たなばた近きゆふべ、越シの今町といふ処に草枕す。此ところの人〲尋とはれて、風雅の事共なんど語り慰みて」（『奥細道付録』）等の前書があり、『奥細道付録』は、この句を発句とした二十句の付合の行われた聴信寺所蔵の真蹟に拠ったものという。芭蕉と曾良が直江津（今町）に入ったのは七月六日であって、曾良の『随行日記』には左のように見えている。

○六日　雨晴。鉢崎ヲ昼時。黒井ヨリスグニ浜ヲ通テ今町ヘ渡ス。聴信寺ヘ弥三状届。忌中ノ由ニテ強而不止。出。石井善次良聞テ人ヲ走ス。不帰。及再三、折節雨降出ル故、幸ト帰ル。宿、古川市左衛門方ヲ云付ル。夜ニ至テ各来ル。発句有。

○七日　雨不止故見合中ニ聴信寺ヘ被招。再三辞ス。強招テ及暮。……

二人は象潟で逢った岐阜の宮部弥三郎低耳から聴信寺へ紹介状を貰っていたので泊めてもらおうとしたが、忌中を口

実に断られた。寺を出たところ、石井善次郎なる者が芭蕉を知っていたのか、人を走らせて引留めたので立帰り、古川市左衛門なる宿屋に泊ることになる。夜に入って地元の俳人達がやって来たが、『日記』に「発句有」とあるのが、六日という日付からしても「ふみ月や」の句を指すことは疑いを容れない。即ち発句は七月六日夜に成り、曾良の『書留』に見える脇以下の十九句は、翌七日聴信寺の会で出来たものである。『おくのほそ道』では象潟の記事の次に、

酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望。遥〻のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞。鼠の関をこゆれば越後の地に歩行を改て、越中の国一ぶりの関に到る。此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

として、この句と「荒海や佐渡によこたふ天河」の句を並べている。比較的に簡略な記述なのは、紀行の構成上記事にめりはりをつけることや、越後路に記すべきことが少かったのみならず、不愉快な出来事が折々あったこと等が、動機として挙げられている。

句形については、旅行当時金沢での染筆と思われる真蹟懐紙や『書留』を始め、『其袋』『猿蓑』『ほそ道』等信ずべき資料が一致する形に従うべく、他は凡て杜撰と見られ、『奥細道拾遺』に中七を「六日は常の」とするのも、問題にはなるまい。

七夕は、言うまでもなく牽牛・織女の二星が年に一度の逢瀬を楽しむ夜である。この天界のロマンを心に持って、この句の趣向は成り立っている。「ふみ月や」と先ず打ち出しているが、［語釈］に引いておいたように、この月の名自体、既に七夕の連想を色濃く持つもので、「六日も」は勿論「七日」の七夕当夜を前提にした表現であった。秋に入った月のはじめから待ちこがれていた七夕を明夜に控えて、六日の夜も空の気配はただならず、何処か艶な感じがするというのである。桃隣の『粟津原』（宝永七年刊）にこの句のことに触れて、

七夕の発句、古来より手向たるは、げに星の数も及ばず。しかれども、おほく七夕の夜の事のみさまぐ〱にいひ

かはりて侍る。其中に師が句、文月や六日も常の夜には似ず、此等も吾妻路はしらず、上がた筋にては、誉て請取たる句也。

とあるように、七夕当夜のことばかり扱った句の多い中で、前夜の趣をいうこの句には新味があった。この前年に成った不卜の『続の原』に、「六日の日鏡久しや女七夕」という不角の句が見え、これも前日に目を付けた趣向ではあるが、明夜の為におめかしをする女七夕のさまは、都会風の興はあっても、わざとらしくて品が落ちる。「六日も常の夜には似ず」は説明であり、従って観念的であっても、周知の古伝説の艶を背景に持って、おっとりとした品格を感じさせる。ただの説明的表現とは類を異にし、時に芭蕉はこのような表現を避けないのである。井本博士は、古来直江津では七夕前夜に祭があって、その賑わいが句の背景にあったと考えておられ（『古典文学全集・松尾芭蕉集1』）、発句の成った席では、「ことさら文筆に縁の深い七夕を明日に控えて、おりゆかしく、しみじみと席のしむここちがいたします」（尾形仂氏『松尾芭蕉』）といった挨拶の意も籠められていたと見てよい。それが『ほそ道』での扱いとなると、暑湿に悩む病軀の孤愁を述べた後に、「荒海や」の句と並べられており、二星の恋の気分とはまたちがった味わいを帯びて見えて来るのである。

細川春庵亭ニテ

514　薬欄にいづれの花をくさ枕　（曾良書留）

みとせ草・芭蕉文集・奥細道付録

越後の國高田醫師何し（ママ）を宿として

薬園にいづれの花を草枕　（泊船集）

西の詞・蕉翁句集・雪まるげ・奥の枝折

秋季（くさの花）。

語釈 ○細川春庵亭 「細川春庵(ほそかはしゆんあん)」は、越後高田(現新潟県上越市)の稲葉藩に仕えていた医者で、俳号を棟雪(とうせつ)といった。寄大工町(よりだいく)(現上越市仲町六丁目)に住んでいたといわれ、三千風の『日本行脚文集』にも名が見える。○薬欄「ヤクラン」。薬草を栽培する畠の囲いの意から、薬草園その物を指すようになった語。漢方医の家には薬草園があった。杜甫の詩句「不レ嫌二野外無一レ供給一、乗レ興還来看二薬欄一」(野外に供給無きことを嫌はずんば、興に乗じて還来りて薬欄を看よ。「賓至」)に拠る。「家父道を伝へて杏実を拾ひ、薬欄に培てすでに功国を医す」(『忘梅』序)。○いづれの花をくさ枕「何(いづ)れの花(はな)を草枕(くさまくら)」。どの花を草枕に結んで旅寝しようか、の意。「くさ枕」の「くさ」と結んで、この「花」は秋季の「草の花」(Ⅱ *420*)となる。「くさ枕」は既出(Ⅰ *216*)。

大意 お宅の薬草園に色々の草の花が美しく咲いている。今宵はどの花を草枕に結んで旅寝しようか。どの花でも旅の疲れを医(いや)してくれよう。

考 「医家入」(『みとせ草』)「みちのく・出羽の名処〲をみめぐりて、猶北海の荒儀を伝ひ、高すなごあゆみ苦しき越の長途に多病いとつかれて、たかだといふ処にいたる。此境に良医棟雪何某とかや、風雅のきこえ遠く伝たるをたづね入て」(風徳『芭蕉文集』)「同国高田の医師細川春庵亭にて」(『奥細道付録』)等の前書があり、『蕉翁句集』の前書は『泊船集』と同じである。曾良の『随行日記』によると、芭蕉は七月八日に今町(直江津)を立って、午後高田に入った。

○八日 雨止。……未ノ下尅至高田ニ。細川春庵ヨリ人遣シテ迎、連テ来ル。春庵へ不寄シテ、先池田六左衛門ヲ尋。客有。寺ヲかり休ム。又春庵ヨリ状来ル。頓而尋。発句有、俳初ル。宿六左衛門、子甚左衛門ヲ遣ス。謁ス。

○九日 折々小雨ス。俳、歌仙終。

『日記』には右のようにあり、八日に春庵亭を訪ねて「発句有」とあるのが「薬欄に」の句と思われる。翌九日の記事によれば歌仙一巻が成就した筈であるが、『書留』には発句以下、棟雪・更也(高田住の鈴木与兵衛)・曾良らの四

句しか録せられていない。しかし、『金蘭集』（甘井編、文化三年成）に高田での右雪の餞別句「星今宵師に駒牽て留たし」を発句とする第三までの後、「此間十句キレテシレズ」として二十三句を続けている部分は、棟雪・吏也が作者に加わっており、高田での歌仙の一部が誤って竄入した疑いが濃いのである。委しくは拙著『芭蕉連句抄』第七篇を参照されたい。兎に角、「薬欄に」の発句が七月八日に成ったことは確かである。

初五を「薬園に」とした異形が古くから現われているが、「薬欄」は杜甫を愛読した芭蕉らしい用語であって、これが余り聞き馴れないところから、「薬園」の形が出て来たのであろう。山崎喜好氏の紹介された風徳の『芭蕉文集』（安永二年成）所収の前書は芭蕉らしい文気が認められ、恐らくは真蹟に拠ったものと思われるが、それも「薬欄」とあるから、曾良の『書留』が信頼し得る句形である。

医家で俳諧を嗜む細川春庵の家に迎えられての句で、挨拶の意が籠る。これより先、天和三年の夏に三千風が高田に来たが、彼の『日本行脚文集』巻之一に、

細川氏は花逸人、余が為に床に立てしを、庭によせて即景を、

貫鳶（スキシャガ）尾の影も風流（イキ）たる泉かな

梅の搭枝（コキエ）はおための涼風　細川春庵棟雪

とあって、屋敷には泉水などもある、木草の花の美しい庭があったらしい。しかし、当面の句は言葉通り薬草園と見た方が、春庵への挨拶として相応しいであろう。草枕の旅寝にかけて、季語の「草の花」をあしらい、巧みに挨拶の意を述べている。『芭蕉文集』の前書にある「高すなごあゆみ苦しき越の長途に多病いとつかれて」という気分もあるとすれば、薬草を枕とすることで疲れをいやそうとする意も含めて解したいところである。幸田露伴は、

「花薬欄」といふ禅家の言葉もあります。詩にも薬欄はめづらしく無い語です。薬園では余り医師か本草家へべツタリです。薬欄で有つてほしい。斯う云ふことも芭蕉にはひよいひよい出て来る。所謂「語を下す必ず来歴あ

り」である。来歴を知らないものでも分かるやうに作るのが芭蕉であるが、来歴を知るものならばまた一層の味がある。（『続芭蕉俳句研究』）

といっている。

七　夕

515　あら海や佐渡に横ふ天河　（米沢氏蔵真蹟懐紙）

芭蕉全図譜所収真蹟懐紙・某氏蔵真蹟懐紙・某氏蔵真蹟懐紙・真蹟短冊・真蹟色紙・真蹟草稿・曾良書留・其袋・俳諧勧進牒・おくのほそ道・泊船集・俳諧問答・柴橋・入日記・本朝文選・類柑子・蕉翁文集・あまの川・雪まるげ

秋季（天河）。

語釈　○**七夕**　「タナバタ」。陰暦七月七日の夜をいう。既出（I *8*）。○**あら海**　「荒海（あらうみ）」。越後の浜辺から見渡す、波浪荒れた日本海をいう。「天もうつるや須磨の浦の荒海の波風灩〻たり」（謡曲「須磨源氏」）「Araumi.」（『日葡辞書』）。○**佐渡に横ふ**　「佐渡（さど）に横（よこ）たふ」。「佐渡」は、越後の北の海上にある佐渡が島。「横ふ」は、天の河が横たわることであるが、ここは下二段活用の他動詞になっており、他動詞を自動詞のように用いる同用の例である。当時こうした例は他にもあり、漢文訓読の影響も指摘されている。文法的には「天の河が自らを横たえる」と解される語法であるが、この句の場合、「佐渡に横たはる天の河」とは実際上言えないので、謂わば必然の表現であった。『日葡辞書』には「Yocotaye, uru, eta.」「Yocodaye, uru, eta.」の両語形を標出している。「阿蘭陀の文字が横たふ天津雁　宗因」（『時勢粧』）。○**天河**　「アマノガハ」。銀河を天上の河に見立てた語。七夕に関連して用いられることが多い。既出（I *98*）。

大意　波荒い夜の海。彼方に浮ぶ佐渡が島の空高く、天の河が冴え冴えと横たわっているよ。

考　「ゑちごの駅出雲崎といふ処より佐渡がしまは海上十八里とかや。谷みねの嶮難くまなく、東西三十余里によこをれふして、まだ初秋の薄霧の立もあへず、波の音さすがに高からざれば、たゞ手のとゞく計になむ見渡さる。げにや此嶋はこがねあまたわき出て、世にめでたきしまになむ侍るを、むかしいまに到りて大罪朝敵の人〻遠流の境に

して、物うきしまの名に立侍れば、いと冷じき心地せらるゝに、宵の月入かゝるころ、山のかたち雲透にみえて、海のおもてほのぐらく、なみの音いとゞ悲しく聞え侍るに」（芭蕉全図譜所収真蹟懐紙）「ゑちごの国出雲崎といふ処より佐渡がしまは海上十八里とかや。谷嶺の嶮岨くまなく、東西三十余里波上によこをれふせて、まだ初秋の薄霧立もあへず、さすがに波もたかゝらざれば、たゞ手のとゞく計になむ見わたさる。げにや此しまはこがねあまたわき出て、世にめで□□しまになむ侍るを、むかしいまに到りて大罪朝敵の人ゝ遠流の境にして、ものうき嶋の名に立侍れば、冷じき心地せらるゝに、宵の月入かゝる比、うみのおもていとほのぐらく、山のかたち雲透に見えて、なみの音いとゞかなしく聞え侍る」（某氏蔵真蹟懐紙）「北陸道に行脚して、いづも崎と云処にとまる。彼佐渡が島は海の面十八里滄波を隔てゝ、東西三十五里によこをりふしたり。嶺の嶮難谷のくま〴〵まで、さすがに手にとる計あざやかにみわたさる。むべこの嶋は金多く出て世の宝となれば、かぎりなくめでたきしまになむ侍るを、大罪怨敵の輩遠流のさかひにして、たゞおそろしき名のみ聞ふれて、かゝる風景のいみじき事をしらずなむ侍る、本意なくて、旅懐暫時の愁をなぐさむほど、日既海に沈て月かすかに、海の面ほの闇、銀河中天にかゝりて星きら〳〵とさえたる、波の音沖を動かせば、魂しほれ腸ちぎれてそゞろに悲しび来れるに、覚えず袂をぬらして、草の枕も定兼たり」（某氏蔵真蹟懐紙）「ゑちごの出雲崎といふ処にとまりて」（真蹟草稿）「その夜北の海原にむかひて」（『其袋』）「いづもざきにて」（『俳諧勧進牒』『泊船集』）「ゑちごのくに出雲崎といふところより沖の方十八里に佐渡が嶋見ゆ。東西三十里余りに横折ふしたり。むかしよりこのしまはこがね多く涌出て、世にめでたき嶋にて侍るを、重罪朝敵の人〳〵の遠流の地にて、いとおそろしき名に立り。折ふし初秋七日の夜、宵月入果て、波の音どう〳〵とものすごかりければ」（『柴橋』）「越後の国出雲崎といふ所より佐渡が島へ海上十八里となり。初秋の薄霧立もあへず、流石に波も高からざれば、たゞ手の上の如くに見渡さるゝ」（『雪まるげ』）等の前書があり、土芳の『蕉翁文集』所載の文は、『芭蕉全図譜』や某氏蔵（前者）の真蹟懐紙のそれと同系である。また、『入日記』（雲鈴撰、元禄十六年刊）『本朝文選』『あまの川』（楚由撰、享保十五年刊）等は「銀

河ノ序」と題した文を収めているが、それらは某氏蔵(後者)の系統の文を整備した形になっている。真蹟類では出雲崎での作とするものが多いけれども、曾良の『書留』は米沢氏蔵真蹟と同じく「七夕」と題して、高田の細川春庵亭での「薬欄に」の句を発句とする四句の付合の次に書いており、以下は加賀での句に続いているので、高田ではじめてこの句を披露したものと思われ、恐らくは七月八日から十日までの高田滞在中に句案がまとまったのであろう。その当座から七夕の句として披露され、その態度は加賀での染筆とおぼしい米沢氏蔵真蹟懐紙も同様で、『おくのほそ道』でも「ふみ月や」の句の次に並べられたところを見ると。やはり七夕の句としての扱いと見られる。一方、初出板本の『其袋』(嵐雪撰、元禄三年刊)では、直江津で文月の句を作った当夜「北の海原にむかひて」作ったとする前書があり、更には真蹟類の長文の前書や「銀河ノ序」では出雲崎での作としている。作者自身色々な扱い方をしたわけであるが、直江津での作とするのは『其袋』だけで(「北国何トヤラいふ崎」として成立の場所をおぼめかしている)、他は大体、七夕の句とするものと出雲崎で成ったとするものとの二種類に分れる。これは句の内容の理解に大切な要点であろう。曾良の『日記』によれば、出雲崎に泊ったのは七月四日であるが、『柴橋』(正興撰、元禄十五年刊)では、出雲崎泊りが「折ふし初秋七日の夜」のこととなっており、句文の世界には事実とちがった想化が見られるのである。

曾良の最初に記録した旅行当時の時点から、この句が「七夕」と題された理由は、句中に「天河」が詠み込まれているのを見れば納得が行く。この句の抱懐するイメージが七夕とは何の関係もないとするのは暴論であって、天の河は二星交会の七夕伝説と切っても切れない深い由縁を持つ言葉である。しかし、「荒海」や「佐渡」を背景として展開される七夕の世界は、ロマンチックな牽牛・織女の天界の恋の気分とは、一際異なる印象が強く、其処にこの句の独自性もあろう。荒々しい波濤のうねる暗鬱な大海の彼方に、「大罪朝敵の人々遠流の境」たる佐渡が島が見える。勿論夜の闇の海上遥かに、島の「谷みねの嶮難くまなく」眺められるわけはなく、これは日中の眺望の印象から想像されたものである。天の河にしても、「出雲崎に於て、初秋の頃月の落ちる時刻に天の川は佐渡の方へは横はらない」

（荻原井泉水氏『奥の細道評論』）といわれ、実景との関係がいろいろ論ぜられるが、これは島の上の空高くに天の河が横たわる景色と見れば足りるであろう。七夕の句とされた『ほそ道』では、「暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」という越後路の艱難の記述の後に、「文月や」の句と共にこの句が記されており、そのような旅愁を抱いて眺められた荒海と佐渡なのであった。長文の前書類では出雲崎での作とされているから、此処で北の海を眺めた印象が、句の発想の主たる契機となったのではあろうが、一気に此処でまとまったものとは思えない。海岸線を辿った越後路の長途の旅中、北の海の日々の印象が漸次醸成されてこの句になったとすれば、叙景句らしい表面の句姿に拘らず、本質的には心象風景を展開した句といってよかろう。『書留』から加賀での真蹟、更には『ほそ道』へと続く七夕の句としての扱いは、句中の「荒海」や「佐渡」の語によって、普通の七夕の趣とは異なる味わいを持たせようとしたものだったと思う。

更に、長文の前書類になると、産金の島としての佐渡の現実と、大罪朝敵の人々が遠流された悲しい歴史が対置され、特に後者が強調されて、作者の旅愁につながる所懐が述べられている。此処では七夕伝説の要素はかなり後退し、悲史への思いと旅愁が大きく前面に出て来る印象が強い。句の趣もかなりちがって見えるのであって、芭蕉は扱い方を変えることによって、別の効果を期待したようである。何れの場合も、句は海と島と天の河の三者で構成される大景に作者の思いを託して、雄渾壮大な世界を言いおおせた傑作であることに変りはない。

此句を取て一誦すれば波濤澎湃天水際涯なく唯一孤島の其間を点綴せる光景眼前に彷彿たるを見る。這般の大観銀河を以てこれに配するに非るよりは焉んぞ能く実際を写し得んや。天門中断楚江開の詩は此句の経にして飛流直下三千尺の詩は此句の緯なり。思ふてこゝに到れば誰れか芭蕉の大手腕に驚かざるものぞ。（「芭蕉雑談」）

この句の鑑賞は右の正岡子規の所説に尽きるであろう。また、山本健吉氏は次のように言う。

……この句にあっては、佐渡を媒介としての歴史への回想が、同時に鋭い現実への意識をも意味するわけで、さ

らにまた人間の恒久的な悲痛に対する意識でもあった。「佐渡」という土地の名の持つ含蓄を、歴史的意識の衰退したわれわれと芭蕉とでは、受け取り方が違うはずだ。高館も佐渡も、芭蕉が発見した歌枕なのである。それは堂上歌人たちには、かつて詠まれたことのない歌枕なのである。……

このように、表現としては単純極まる風景詩でありながら、詩的現実としては決して単純でない。ここには「佐渡は四十九里波の上」とうたった民謡と同じ庶民的な声さえ聴こえてくる。だがそれは同時にまた、高い詩人的使命を自覚したものの慟哭の詩でもあった。佐渡が島を媒体として、詩人の発想が幾重にも重層をなして、言葉を積上げ、結晶させるのである。単に風景に託して旅情を述べたモノローグの詩というのではない。同時にそこには、特定されない相手に何か激しく訴えようとする第二の声が響いてくる。一つの詩から一つの声しか聴き取らないというのでは、芭蕉のような聴覚的想像力にめぐまれた詩人の作品を享受する上において、大いに欠けるのである。この句のような詩の動機の大きさを、現代の詩は失ってしまったようだ。……この句の如きは、伝統あるいは歴史的形成作用に結びつくことによって、個性が無私の普遍的表現を獲得しているものである。

（『芭蕉その鑑賞と批評』）

516

小鯛指やな木涼しや海士が家　（真蹟懐紙）――雪まるげ

西濱

小鯛さす柳涼しや海士がつま　（曾良書留）――奥細道拾遺・奥細道付録

夏季（涼し）。

語釈 ○**小鯛指やな木**　「小鯛指す柳」。「小鯛」は、小形の鯛。鯛の鰓から口へ細い柳の枝を挿して携えているさまである。「指」

は宛字。「柳」は季語としては春であるが、ここでは「涼し」が季語として立つ。「此発句は、北国の海辺にて、いさりの魚を葉付の木の枝竹の枝などをもて腮よりさし入レ、口へ出して、其枝を持ありく事也」（『奥細道付録』）「肴かけには二番の鰤一本小鯛五枚鱈二本」（『世間胸算用』巻一ノ二）「Codai.」（『日葡辞書』）。○**海士が家**　「海士が家」。「海士」は、漁師。浜辺に家があるのである。

大意　海辺の漁師の家のあたりで、小鯛を柳の枝にさして携えている。柳の緑が見るからに涼しそうだ。

考　『奥細道付録』には「西浜にて」と前書があり、小春・雲江・北枝・牧童ら加賀蕉門の人々と一座した六句の付合を収めている。「西浜」については、金沢の海岸金石、越前、出羽象潟の海岸、酒田より南の羽前の海岸、直江津以西の越後の海岸等諸説があるが、曾良の『書留』では高田での付合の続き、「荒海」の句の次に記してあり、以下は加賀での句を録している。この部分は後に一括して書き留めたらしく思われる節もあるが、この記載順序からすれば、越後の海岸とするのが就中有力であろう。西頸城郡の海岸に「西浜七谷」といわれる一帯の地があることは『大日本地名辞書』にも見え、七月十二日頃その辺りを歩いていた間の属目を句にまとめたものではあるまいか。この辺では旧暦七月頃小鯛がよく取れるという。夏の季語になっている点を重視すれば、六月の末村上辺での吟とも見られるが、やはり無理であろう。表六句の付合は金沢でこの発句を立句としたもので、七月二十三日宮の腰（現金沢市金石本町）に遊んだ時の作と思われる。句形については、恐らく「つま」が初案で「家」が改案であろう。真蹟懐紙の筆蹟には細道の道中書きらしい特色が認められるので、金沢以後の旅中何処かで案じ替えたのである。蝶夢の『芭蕉翁発句集』が下五を「蜑が軒」と伝えているのは、その根拠を知らない。

「海士がつま」の形の方が人物ははっきりする。浜に水揚げされた小鯛の口に柳の枝を通して、漁師の妻が下げて行く。その柳の緑が如何にも涼しげだというのである。「海士が家」とした場合、柳はその家の軒端にあることになり、その木蔭で魚の口に細枝を通す作業をするわけである。後者にしても、その作業をするのは女性であろう。志田博士の『解釈と鑑賞』のように、とれた魚を始末する女性達の集団的活動と見るのも面白いが、柳蔭の家での作業な

らば、必ずしもそう見る要はあるまい。しかし、その場合でも、軒並の漁家で同じ作業をしているとすれば、集団的な趣は或る程度出ることになる。何れにせよ、芭蕉には珍しい写生的句柄の作である。

鳥の道・糸魚川・雪まるげ

517 一家に遊女もねたり萩と月　（おくのほそ道）

一家に遊女も寝たり萩と月　（泊船集）

秋季（萩・月）。

語釈 ○**一家に遊女もねたり**　「一家(ひとつや)に遊女(いうぢよ)も寝(ね)たり」。作者と同じ一つ屋根の下に、遊女も一夜の宿を共にしたことをいう。加藤楸邨氏は「一家」を「ヒトツイヘ」と訓み、それも何処か落着かないところがあるとして、次のように考えておられる。

ヒトツヤとも訓め、多くの説はそれにしたがっているがそれだと孤屋の意と紛らわしい。『白雄夜話』には孤屋の意と誤らぬため、ヒトツイエとよむべきだと説いてあるが、これもヒトツヤに落ちつけなかったのであろう。私の感じではヒトツヤと平坦に訓めばどうしても孤屋に紛らわしくなるが、ヒトツ・ヤと若干間に休止を置き、ヤにやや力を入れて訓めば、同じ家という語の感じになると思う。ヒトツヤと平坦に訓むのはどうも気になるが、ヒトツ・ヤとヤを重くして訓むなら、それも一つの訓み方といえよう。（『芭蕉全句』）

「一つ屋やいかいこと見るけふのつき」（『あら野』巻一）という亀洞の句もあり、「ヒトツヤ」が孤屋の意に用いられることの多いのは事実であるが、当面の句の場合、『おくのほそ道』の前の文章から続けて読めば、「同じ一つの家」の意であることは直ぐ分る。「ヒトツイヘ」という訓みは、荻原井泉水氏の『奥の細道評論』に既に主張されているが、これは形式上字余りという以外に、所謂「口にたまる」欠点を否み難く、芭蕉がそういう訓みを考えていたとは思えない。「遊女」は、客の相手をする遊び女(め)。『ほそ道』によれば、新潟の遊郭に居る女性である。「ねたり」は、下の「萩」と由縁のある語。「寝たる萩や」（I *12*）参照。「それ世は泪雨としぐれと　里東　雪舟に乗越の遊女の寒さうに　野径」（『ひさご』）「Yûgio. i, Qeixei.」（『日葡辞書』）。

大意 乞食巡礼の身の白分と同じ屋根の下に、今宵は艶な遊女も泊り合わせている。庭の萩に月が照る折柄の景色に、

何がなし似た気分だ。

考　『おくのほそ道』には、句の前に左のような文が見える。

今日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しなど云北国一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て面の方に、若き女の声二人斗ときこゆ、年老たるおのこの声も交て物語するをきけば、越後の国新潟と云所の遊女成し。伊勢参宮するとて、此関までおのこの送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言伝などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契日々の業因いかにつたなしと、物云をきく〳〵寐入て、あした旅立に我〳〵にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えかくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ玉へと泪を落す。不便の事には侍れども、我〳〵は所々にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず恙なかるべしと云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

『鳥の道』の前書は右と殆んど同じであり、「けふは親しらず・駒返しなど云北国一の難所を越てつかれ侍れば、枕ひきよせて寝たるに、一間隔て西の亭に若き女の声二人ばかりときこゆ」（『糸魚川』）「枕引寄て寐たるに、一間隔て若女の二人ばかりと聞ゆ。又とし老たる男の声も交りて物語するをきけば、越後の新潟といふ所の遊女成し。伊勢参宮するとて此関までおのこの送り来りて、翌は故郷へかへす文などしたためて、はかなき言伝などしやるなり」（『雪まるげ』）等の前書も、『ほそ道』の文を摘録したものである。文中の「此関」とは、その前の越後路の記事に「越後の地に歩行を改て、越中の国一ぶりの関に到る」を承けたもので、即ちこの一条は市振の宿（現新潟県西頸城郡青海町市振。ここはなお越後国であって、越中国（富山県）ではない）での出来事ということになる。此処に泊ったのは、曾良の『随行日記』によると七月十二日夜のことで、

○十二日……申ノ中尅市振ニ着、宿。

〇十三日　市振立。虹立。……

と見える。

『ほそ道』には句の後に「曾良にかたれば書とゞめ侍る」とあるけれども、曾良の『日記』にも『書留』にも句は書かれておらず、抑々遊女とのめぐりあいの事実そのものが『日記』には記されていない。尤も遊女が近くの部屋に泊っていても、朝の出掛けに同行を頼まれても、その事自体が『日記』に書くに値するかどうか人によって判断は異なるであろう。そうとすれば、『日記』に見えないのは曾良が書くまでもないと考えて書かなかっただけの話で、その事実がなかったことの証拠にはならない。しかし、この句に関する文献は凡て『ほそ道』が元になっていることが明らかであって、それ以前に溯る資料は見当らないとすれば、句は旅行当時の作ではなくて『ほそ道』執筆中の作たる可能性が高く、遊女との一件も事実かどうか疑わしいとすべきであろう。『ほそ道』の文に創作的な匂いが強い故か、「此条は此紀行に恋を出せる一巻の模様なるべし」（錦江『奥細道通解』）といった見方は古くからあった。『泊船集』の異形は、例の杜撰に過ぎず、『句選年考』に「一本に、萩に鹿ともあり」というのも、その根拠が明らかでない。

句は雲水抖擻の世捨人と遊女の出会いに興じた趣向である。この場面は、もとより『ほそ道』執筆中の創作である可能性が高いが、そういう場面を空想する動機は何だったのであろうか。この点については、左に引く尾形仂氏の説が周密である。即ち、

……港町には遊女も多く、ぬけ参りの風習の流行の中でも殊に遷宮の行われるこの年、芭蕉らが越路の旅を続けるうちに、どこかでこういう体験をしなかったとは限らない。それを、象潟の西施、越後路の七夕（たなばた）の恋の気分のうつりの中で、親知らず・子知らずの難所を越え旅のつらさ悲しさの高まった市振の関に配したところに、芭蕉の構成上の手ぎわがある。『源氏物語』や『和漢朗詠集』をふまえた美文調の行文が、薄倖（はっこう）の遊女との出会いに、物語的幻想のかげをそえているが、文中の文言や結びの形の類似から見て、芭蕉がこの物語的な一章を脚色する

のに、広本『撰集抄』五ノ十一「江口遊女の事」を下敷きにしたこともまた否定できない。芭蕉はいわば西行と江口の遊女との出会いのパロディの形で、紀行の運びに恋のいろどりをそえるとともに、どうすることもできない人生の寂しさ悲しさを伝えて、旅のあわれの一つとしたのである。（角川文庫『新訂おくのほそ道』）

というもので、この段を構想した芭蕉胸裡の消息は、右に述べられた通りであったと思われる。謡曲「山姥」の舞台が市振に近いところから、これを踏まえたと見る説もあるが、西行と江口の遊女の話の方が普遍性に於いて遥かにまさっており、『撰集抄』乃至は謡曲「江口」のパロディと見た方が良い。つまり西行と遊女の話では、遊女が一夜の宿をことわるのだが、『ほそ道』では芭蕉の方が遊女との同行をことわるところに、パロディの興が求められているのである。更には「一家」に「孤屋」のイメージも重なって一句に「寂び」を添える。「ヒトツイヘ」では、この効果は期待出来ないのだ。

遊女とたまたま一夜同宿したことを述べた後、句は下五に「萩と月」と置いている。この点景は、萩と遊女、月と芭蕉という照応を成立させているが、単純な譬喩と見たのでは底が浅く、句の仕上りもそのような見方を許さない。夙く太田水穂氏が、

芭蕉が遊女と泊り合してゐる感じが「萩と月」の感じになるので、その感じが互ひに通ふのです。芭蕉の云ふ「にほひ」といふことの例によい句だと思ひます。「一つ家に遊女も寝たり」の感じ（にほひ）が「萩と月」の表はす感じ（にほひ）になるのです。（『続芭蕉俳句研究』）

と指摘された通りで、この景色は所謂「気分象徴」の典型的なものといってよい。庭前の即景かも知れないが、必ずしも「実」でなくともよく、「虚」であっても一向差支えない。寂たる世捨人と艶にあわれな遊女との出会いを象徴する自然の姿なのである。

もう一つ、この句の表現と小歌との関係も考えておかねばなるまい。折口信夫博士は、

芭蕉が此句を作った文因ともいふべきものは、月は尾花とねたと言ふ、尾花は月と寝ぬといふ、小唄の古い型が、頭に働きかけてゐるので、萩と月の光りとを交錯させる表現に、遊女の情趣を含めたものが示されてゐるのだ。だからきつと、此句を作る過程には、一つ家に遊女とねたり、といふ形もとつてゐたらう。たゞさうすると、同じ一つ家に遊女と自分が、別々に宿つた一夜、といふ風には受け取らぬ人も出て来るので、此形に直したのだと取つてもいゝ。さういふところまで、芭蕉は事実を文学のために犠牲にしてゐる。だから、其処に到達するまでの道筋として、会はなかつた旅の女を出しさうな点も、不思議ではない。これで芭蕉の偶像を破壊してしまふ人もあるだらうが、そんな人は、気の毒な鑑賞者と言はねばならぬ。（「文学に於ける虚構」『短歌研究』昭和二十三年四月号、『全集』第廿七巻所収）

と説いておられる。「遊女とねたり」という句形に文献の裏付けはないけれども、「ねたり」と「萩」との陰微な縁の背景には、月と尾花の小歌の「匂ひ」が確かに感じ取れるように思う。こういう仕掛もこの句の俳諧の一面にあることを、念頭にとめておきたい。

礒づたひあゆみくるしき高砂子、やう〳〵侘て加州に入

518 わせのかやわけ入右はありそ海 （米沢氏蔵真蹟懐紙）

増井氏蔵真蹟懐紙・今治市河野美術館蔵真蹟懐紙・石川県山中町蔵真蹟懐紙・曾良書留・いつを昔・卯辰集・おくのほそ道・有磯海・陸奥衛・泊船集・続別座敷・三冊子

猶越中をへてかゞに入

稲の香や分入右は有曾海 （真蹟草稿）

早稲の香や分入道はありそ海 （類柑子）

秋季（わせ）。

語釈　**○礒づたひあゆみくるしき高砂子**　「礒伝ひ歩み苦しき高砂子」。「高砂子」は、砂が高く盛り上った地形、即ち海岸の砂丘をいう。「礒」は岩を指すのが原義であるが、我が国では「磯」に通用する字。越後・越中あたりの海岸伝いに、歩むのに難儀な砂丘をたどって来たことをいう。元禄三年の「幻住庵記」に「高すなごあゆみくるしき北海の荒礒にきびすを破りて」という類似の文があり、「あか〳〵と」(Ⅲ520)の句の前書には「北海の磯づたひ、まさごはこがれて火のごとく、水は涌て湯よりもあつし」(伝真蹟懐紙)という一節も見える。「Isozzutai.」「Ayumi, l, ayomiuo facobu.」「Curuxij.」「Sunago.」(『日葡辞書』)。**○やう〳〵侘て加州に入**　「漸侘びて加州に入る」。ようやく困窮した見すぼらしい状態で加賀の国(現石川県南部)に入った、の意。「侘ぶ」は、「狂句こがらしの」(Ⅰ215)の句参照。「回国の心ざしも漸〳〵伊勢のくにゝいたりて」(『続猿蓑』下、呂丸発句「文台の」前書)「此半蔵は生国加州の人なりしが」(『武道伝来記』巻三ノ四)「Yôyô.」(『日葡辞書』)。**○わせのか**　「早稲の香」。「わせ」は、早く稔る種類の水稲。北国では秋冷の訪れる前に収穫する為にこの種の稲を植える。稔った早稲の匂いがあたりに漂うさまである。「わさ田　はやわせ共に秋也。うへもの也。植とあらば夏也」(『御傘』)「今按に、わせ・わさ田などいへる、初秋也」(『滑稽雑談』)「何事もなくてめでたき駒迎　沾圃　風にたすかる早稲の穂の月　里圃」(『続猿蓑』上)「Vaxe. Fayai ine.」(『日葡辞書』)。**○わけ入右はありそ海**　「分け入る右は有磯海」。「ありそ海」は、今の富山県高岡市伏木から氷見市にかけての海岸をいう。「ありそ」は、荒磯の義で、磯に岩礁の多い地形から出たもの。歌枕である。稲田の間を分けるように進んで行く右側には有磯海が眺められる、という意。「わけ入」は既出(Ⅰ199前書)「伏木の浦は奈吾の入江につゞきて、北の方は有磯の浜にちかし。此処よりすべてありその海といふなるべし」(『浪化上人発句集』)「左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄」(『おくのほそ道』)「有そうみのはまのまさごとたのめしはわするゝ事のかずにぞ有ける」(『古今集』巻十五、よみ人しらず)「Migui.」(『日葡辞書』)。

大意　道の両側の田圃から、稔った早稲の香が漂う。その中を分けるように進むと、右手には、はるかに有磯海が見渡されることだ。

考　「加ゝに入とて」(増井氏蔵真蹟懐紙)「加州に入」(今治市河野美術館蔵真蹟懐紙・石川県山中町蔵真蹟懐紙)「かゞ入」(『曾良書留』)「加劦にて」(『いつを昔』)「越中に入て」(『卯辰集』)等の前書がある。真蹟類や曾良の『書留』に加賀国に入った時の吟としているのは、成立時期について最も信ずべき資料であって、唯一つ『卯辰集』(北枝撰、元禄四年刊)だけが越

中国に入った時としているが、これは有磯海が越中の歌枕たるところから誤ったものと見られよう。『有磯海』（浪化撰、元禄八年刊）に「此句は元禄二年奥羽の行脚に春夏を送り、炑風たつ比三越ぢにかゝり、処〱の風吟有けるなかに、当所のほ句と申つたへける」とある注記も、撰者の住む越中での作と誤っている点は同断である。この歌枕を右に見て行く句の内容からして、志田義秀博士は『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』で、海に面した伏木辺から高岡の方へ、左折するあたりで作った句としておられる。芭蕉は七月十四日に高岡（現富山県高岡市）で一泊し、翌十五日に加賀に入ったので、伏木辺の景とすれば、それをもとに、十五日の加賀入りに際して句を成したと見ればよかろう。また、堀信夫氏は、句を七月十五日の作とし、

……高岡から道は海とは反対に西南に向かい、倶利加羅峠の麓（ふもと）までの間は、平野地で田が続く。この地方は古くから早稲（わせ）を栽培していたので、旧暦七月十五日（太陽暦八月二十九日）には稲穂が垂れていたことであろう。早稲田が実っている間を分け入るように、だんだん山間部に歩を進め（この間海の見えるような場所はなく、海を背にして歩く）、やがて倶利加羅峠にかかり一、二時間も登ると、馬の背のような、眺望の開けた頂上に着く。そこからは右手にあたって有磯海が白く望見されるのであって、それこそが「右は有磯海」である。そうして、そこはまた越中から加賀国へはいる国境でもある。この句について真蹟をはじめ、諸本いずれも、加賀国に入らんとしての句であることを、前書として付しているが、それはこの句が倶利加羅峠上の国境あたりで詠（よ）まれたことを意味する。（『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』）

と精細に考えておられ、詠作の場所について大変有力な説といってよいと思う。曾良の『随行日記』には、

○十四日　快晴。暑甚シ。富山カ、ラズシテ三リ東石瀬野（渡シ有。大川。）四リ半ハウ生子（渡有。甚大川也。半里計）滑川一リ程来、渡テトヤマヘ別。氷見ヘ欲レ行不往。高岡ヘ出ル。二リ也。ナゴ・二上山・イハせノ等ヲ見ル。高岡ニ申ノ上刻着テ宿。翁気色不勝。暑極テ甚。少□同然。

一　十五日　快晴。高岡ヲ立。埴生八幡ヲ拝ス。源氏山、卯ノ花山也。クリカラヲ見テ、未ノ中刻金沢ニ着。
とあり、『おくのほそ道』には市振の条の次に、
くろべ四十八が瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。担籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふ
べきものをと、人に尋れば、是より五里いそ伝ひして、むかふの山陰にいり、蜑の苫ぶきかすかなれば、蘆の一
夜の宿かすものあるまじといひをどされて、かゞの国に入。
として「わせの香や」の句を出している。
初五を「稲の香や」とする柿衛文庫蔵の真蹟草稿は、紙背に加賀小松の多田八幡参詣の文が書かれ、句の方は越後
路での「荒海や」の句と並べて書いてある。これについては、岡田利兵衛氏の『芭蕉の筆蹟』に見える左の所説が精
しい。
……全くの実用文字で……紙背の文字が逆になっているから、上で綴じた帖であったかもしれない。道中の書き
込みにこうした覚書帖を携行したと推定されて興味が深い。……諸本も筆蹟ものもことごとく「早稲」であり、
金沢に存する道中書きと思われる懐紙も「早稲」だという。冒頭の「早」を切断したとしては配置が間尺に合わ
ぬので、そうとは思えない。……私は初案は「稲の香」だったと思う。この断簡は全くの下書であるから、発想
の瞬間は「稲の香」で、それを早速にメモしたが、浄書に際してはもう「早稲の香」と改めていたと思うのであ
る。
「早稲」とあった「早」を切断したと見るのは、前にある「荒海」の句の頭との関係からしても否定されよう。極く
初期の段階の案として「稲の香や」という案があったことは疑いを容れぬと思う。『類柑子』の「分入道」は杜撰で
あろう。米沢氏蔵真蹟懐紙は金沢での揮毫と推定されており、「小松懐紙」と呼ばれる増井氏蔵の真蹟については、
七月二十五日小松の藤村伊豆宅での染筆と見る岡田氏の説がある。何れも細道の道中書きである。

土芳は『三冊子』でこの句を引いて、

此句、師のいはく、若大国に入て句をいふ時は、その心得有。みやこがた名有もの、かゞの国に行て、くんぜ川とかいふ川にて、ごり踏といふ句有。たとへ佳句とても、その位をしらざれば也。

という芭蕉の語を伝え、「ありそも其心遣ひをみるべし」と説いている。加賀のような大国に入って句を作る時には、大国の位に相応しい句を心掛けねばならない。著名でもない川で他国の人の知らない「ごり踏」こと等を詠むのは位を知らないものだというので、当面の芭蕉の句は、その点に十分配慮して作られたという。「わせのかや」の句で先ず気づくことは、大景を叙していることと、稲田の稔りが富国の印象を強めること、古い歌枕の名を挙げるのが大国への挨拶として恰好であること、声調が暢びやかで句柄を大きくしていること等であろう。稲の稔りも有磯海も加賀国内のことではないが、加越能三国は前田家百万石の版図の内だから問題にはならない。大国富国の印象を強調するのに豊穣の趣に如くものはなく、道の両側の稲穂の香を分け入るという表現にも豊かさが感得される。

尤も香には形ちなし、然るをわけ入るとは不穏当の如きも、其実は早稲の香がする其早稲田の中をわけて行くといふのを言葉にあやを持たせて斯様に言ひなし却つて一種の余韻を含ませたのである。且稲田をわけ行くよりは香をわけ行くと言へば寧ろ其の境地の広きを現し得て、蒼茫たる海に連なる大景がよく現されるのである。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

右の所説も鑑賞に留意すべき点といえよう。古注には、右が有磯海で左が稲田というような見方があるが、有磯海は遠望されるのであって、近景は両側の稲田なのである。満目の稲田の稔りと遠く眺められる荒磯の大景によって、富強の大国の趣は遺憾なくあらわし得ている。

『ほそ道』や『随行日記』に書かれているように、芭蕉は「担籠の藤浪」の名所のある氷見の方へは行っておらず、従って有磯海の趣も親しくその地で見ることはなかった。行こうとしながら行けなかった思いを、「わけ入右はあり

そ海」の表現に読み取ることも可能であって、一抹の旅愁と共に、それらは凡て句の味わいを豊かにするのに資する所が大きい。

加賀の國を過とて

519　熊坂がゆかりやいつの玉まつり　（笈日記）　泊船集・蕉翁句集

盆　同所

熊坂が其名やいつの玉祭　（曾良書留）　卯辰集

加賀の國にて

熊坂をとふ人もなし玉祭り　（翁草）

秋季（玉まつり）。

語釈　**○加賀の国を過とて**　「加賀(かが)の国(くに)を過(す)ぐるとて」。「加賀の国」は、今の石川県南部の旧国名。「加州」（Ⅲ *518* 前書）に同じ。「過ぐる」は、旅する意。「元禄二年翁に供せられて、みちのくより三越路にかゝり行脚しけるに、かゞの国にていたはり侍りて、いせまで先達けるとて」（『猿蓑』巻三、曾良発句「いづくにか」前書）「信濃路を過るに」（『猿蓑』巻一、芭蕉発句「雪ちるや」前書）。**○熊坂がゆかりや**　「熊坂(くまさか)」は、義経伝説に出て来る盗賊の頭目熊坂長範のこと。謡曲「熊坂」では加賀の国の出身となっており、金売吉次に伴なわれて奥州に下る義経一行を美濃の赤坂の宿（現大垣市内）で襲い、逆に討ち取られた。舞曲「烏帽子折」では「越後(えちご)と信濃のさかひなる熊坂(くまさか)のちやうはん」とする。「ゆかり」は、その血筋を引く後裔・縁者。「や」は疑問で、ここで切れるのではない。「けふの生贄にあたりつる人のゆかりを、れうじわづらはすべからず」（『宇治拾遺物語』巻十ノ六）「Yucari, cacarini musuboruru.」（『日葡辞書』）。**○いつの玉まつり**　「何時(いつ)の魂祭(たままつり)」。「玉まつり」は、盂蘭盆に先祖の霊を供養する祭。「玉」は宛字である。既出（Ⅱ *414*）。

大意 あの大盗熊坂長範のゆかりの者は、世を忍んで何時先祖を供養する魂祭をすることだろうか。

考 「くま坂ざかと云所にて」（『卯辰集』）「かゞの国を過るとて」（『泊船集』）「加州を過ルとて」（『蕉翁句集』）等の前書がある。「くま坂ざか」は今の加賀市のうち、旧三木村にあるといわれるが、芭蕉がその辺を通ったのは八月八日頃で、盆の時節を遥かに過ぎていた。旅行当時の記録として、曾良の『書留』の「盆　同所」という前書は尊重しなければならず、其処では加賀入りの「早稲の香や」の句と、後掲の一笑追善句「塚もうごけ」の句の間に記されている。加賀の地元の集だけに『卯辰集』の前書は注意を要するけれども、如上の理由から到底信じ難い。「熊坂が其名や」という初案は、金沢に着いた七月十五日か翌十六日に成ったのであろう。『笈日記』の句形は「ゆかり」の語を加えて潤いがあり、後の改案と思われる。『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）の句形は根拠が明らかでなく、後代の『奥細道付録』に「熊坂のゆかりやいつの玉まつり」とあるのは杜撰に過ぎない。

加賀に入って、その地の出身といわれる伝説的大盗に思いを馳せた逸興の句であるが、折柄の「玉まつり」と結んだ為に、一抹のあわれが漂っている。九郎冠者に討たれた熊坂が、

次第次第に重手は負ひぬ。猛き心、力も弱り、弱り行きて、此松が根の苔の露霜と消えし昔の物語、末の世助けたび給へ……（「熊坂」）

と供養を願う謡曲の末節の影響があろう。「いつの」という語にも、世をしのぶ縁者のさまが思われる。熊坂の魂祭は行われないだろうとか、年中六度の魂祭が行われるからとか、理詰めになってはいけない。

520　旅愁なぐさめ兼て、ものうき秋もやゝいたりぬれば、さすがにめにみえぬ風の音づれも、いとゞかなしげなるに、残暑猶やまざりければ

あかくと日はつれなくも秋の風

（芭蕉翁伊賀遺芳所収真蹟懐紙）

真蹟懐紙写・四季千句・いつを昔・卯辰集・葛の松原・おくのほそ道・天理図書館蔵真蹟自画賛・安藤氏旧蔵真蹟自画賛・松山市立子規記念博物館蔵真蹟自画賛・金刀比羅宮博物館蔵真蹟短冊・菊本氏旧蔵真蹟画賛・陸奥鵆・泊船集・風光集・藁人形・国の華・蕉翁文集・雪まるげ・百合野集・としのうち・橇扇録・真澄の鏡

秋季（秋の風）。

語釈　**○旅愁なぐさめ兼て**　「旅愁慰め兼ねて」。「旅愁」は、旅での侘しい思い。『おくのほそ道』末尾の段に見える「旅の物うさといふのに近い。その侘しさをいやそうとしても出来かねるのである。「なぐさめ兼て」は既出（Ⅱ433後書）。「窓押開きて。暫時の旅愁をいたはらむとするほど」（「銀河ノ序」『本朝文選』）。**○ものうき秋もやゝいたりぬれば**　「物憂き秋も漸到りぬれば」。つらく悲しい秋もやっとやって来たので、の意。「このまよりもりくる月のかげみれば心づくしの秋はきにけり」（『古今集』巻四、よみ人しらず）「月見ればちゞにものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」（同上、大江千里）等と歌に詠まれるところから、秋は物憂いものなのである。「大罪朝敵の人〻遠流の境にして、物うきしまの名に立侍れば」（芭蕉真蹟発句「あら海や」前書）「かつみ刈比もやゝ近うなれば」（『おくのほそ道』）「Monovi.」「Yaya.」「Toqi itaru.」（『日葡辞書』）。**○さすがに**　秋だけあって。下の「いとゞかなしげなるに」にかかる。**○めにみえぬ風の音づれも**　「目に見えぬ風の訪れも」。「あきゝぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（『古今集』巻四、藤原敏行）の歌を踏まえた表現である。「ゆふさればかどたのいな葉おとづれてあしのまろ屋に秋風ぞふく」（『金葉集』巻三、経信）「秋きぬと目にはさやかにみえね共、かぜのをとづれいづち共しらぬ迷ひのはかなさを」（謡曲「景清」）「Votozzure.」（『日葡辞書』）。**○いとゞかなしげなるに**　大変悲しそうな様子なのに、の意。ここの「いとゞ」は、「一層」よりも「非常に」の意であろう。「さつまの守の六弥太と勝負し玉ふ旧跡かなしげに過」（卯月廿五日付物七宛万菊・桃青連名書簡）「Canaxigueni.」（『日葡辞書』）。**○残暑猶やまざりければ**　「残暑猶止まざりければ」。秋に入ってもまだ夏から持ち越しの暑さが止まなかったので、の意。「初秋……残暑」（『毛吹草』巻二）「望月の残興なをやまず」（芭蕉「堅田十六夜之弁」『芭蕉庵小文庫』）「Zanxo, Nocoru atçusa.」（『日葡辞書』）。**○あかくと日はつれなくも**　烈日の趣をいう。「あかくと」は「明か明かと」

で、日中の日ざしの盛んなさま。「あかく〳〵」は用例に徴して「明明」の意とすべく、「赤赤」ではない。芭蕉自画に太陽を赤く描いてあっても、それは慣習的画法を踏襲したまでで、夕日の趣と断定する根拠にはならぬ。前田金五郎氏「俳諧用語考」（『俳句』昭和四十四年三月号）参照。「つれなく」は、情容赦なくきびしいさま。『おくのほそ道』素龍清書本では「日は難面も」と表記している。「も」は逆接。「あかく〳〵と日のさし入りてあかきに」（『讃岐典侍日記』）「居士を色々になぶつて恥を与へうと候な。余りにそれはつれなう候」（謡曲「自然居士」）「にがく〳〵しくもおかしかりけり　我おやの死ぬる時にもへをこきて」（『新撰犬筑波集』）「Tçurenai. Vomote cataxi. ……Fitoni tçurenô ataru.」（『日葡辞書』）。

大意　日射しはかっと明るく情容赦もなく照りつけていても、さすがに風には秋の気配が感ぜられる。

考　「めにはさやかにといひけむ秋立けしき、薄かるかやの葉末にうごきて、聊昨日に替る空のながめ哀なりければ」（真蹟懐紙写し）「旅行」（『いつを昔』）「途中唫」（『おくのほそ道』）「北国行脚の時いづれの野にや侍りけむ、あつさぞまさるとよみ侍りしなでしこの花さへ盛過行比、萩薄に風のわたりしを力に、旅愁をなぐさめ侍るとて」（菊本氏旧蔵真蹟画賛）「旅愁なぐさめかねて、ものうき秋もやゝいたりぬれば、流石目に見えぬ風の音づれもいとゞしくなるに、残暑猶やまざりければ」（『雪まるげ』）「立意庵において秋の納涼」（『穐扇録』）等の前書がある。

句は残暑の中の秋の気配を詠んでおり、「秋立けしき、……聊昨日に替る空のながめ」（真蹟懐紙写し）の文を参照すれば、元禄二年の立秋の日（六月二十一日）か、七月一日の作とも考えられる。曾良の『書留』はこの句を記さず、『ほそ道』には金沢での「秋涼し」の句と小松での「しほらしき」の句の間に「途中唫」として掲げてあって、宛かも金沢から小松へ赴く途中で成ったような扱い方である。然るに成美門豊島由誓の自筆稿本『俳諧穐扇録』には、「立意庵において秋の納涼」と題して「赤く〳〵と日はつれなくも秋の風」を始め、小春・此道・雲口・一水・北枝らの句を録し、「巳文月十七日」の年記の後に「人々の涼にのこるあつさかな」という曾良の句が記されている。七月十七日の『随行日記』には、

一　十七日　快晴。翁源意庵へ遊。予病気故不随。……

とあり、曾良の句の「涼にのこる」という表現と符合する。会した人々も、伝写の間の誤りはあるものの、金沢の俳人と認められ、この資料は必ずや拠る所あるものであろう。「立意庵」「源意庵」については不明ながら、もと「玄意庵」とあったものを「立」に誤ったかとする推測があり（阿部喜三男氏『詳考奥の細道』）、これはかなり可能性の高い見方と思われる。こう見れば、曾良の「源意庵」は宛字ということになろう。荻野清氏は立意庵を北枝の庵と見ておられ、それはなお確定的でないにせよ、「立意庵」が即ち「源意庵」であることは認めてよい。発想が金沢より前の何処であったかは知らず、句は七月十七日に披露されているのである。なお、北枝との関わりについては、『許野せうそこ』（嘯山編、天明五年刊）所収の野坡宛許六書簡に「加賀に北枝ありと翁の誉め給ひしも、あかくの句を聞たる故ながら」、同じく野坡の返書に「あかくと日はつれなくもの作も、日と秋の風をかけ合せて翁の案じ申されしにや」等とあり、北枝のこの句に対する見方を芭蕉が賞したことがあったらしい。建部涼岱の『芭蕉翁頭陀物語』（宝暦元年成）に、金沢で芭蕉が北枝の家に泊った時、この句の下五を「秋の山」として示したところ、北枝が「山といふ字すはり過て気色の広からねば」と難じ、芭蕉が実は「秋の風」と案じたのだと明かして北枝の眼識を褒めたという有名な話が見える。創作性の強いこの話をそのまま信ずることは出来ないが、北枝のこの句に対する理解の深さを芭蕉が賞した事実はあったのであろう。そう見れば、これまたこの句が金沢で披露されたことの傍証になるのである。

この句の言わんとするところは、「あきゝぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（『古今集』巻四、敏行）の歌に夙くあらわれた初秋の趣であろう。その伝統的な詩情を踏まえつつ、「めにはさやかに見えねども」を視覚化して、「あかくと日はつれなくも」と残暑のさまを具象化したのが俳諧の新味である。この句を晩秋の趣と見たり、「日はつれなくも入り果てて」という風に、行き暮れた旅人の情とするのは誤解といわざるを得ず、秋風の無情を云々する説も論外である。また、画賛などに赤い太陽が描かれているところから、夕日の趣として、「あか

〵」を「赤々」の意に取ろうとする考え方も精しくない。前述の如く、「あか〳〵」は語義としては「明々」の意とすべく、必ずしも夕日の趣と限ることは出来ないのである。「あか〳〵と日はつれなくも」の描こうとするものは、要するに残暑に疲れた行人の旅愁であり、それをわずかに慰めるものとして「秋の風」が吹くと見るべきであろう。古注に引かれた尊氏の詠「須磨は暮れ明石の方はあか〳〵と日はつれなくも秋風ぞ吹く」は出典不明で信じ難く、むしろ芭蕉の句から逆に捏造された歌かも知れない。

残暑に疲れながら、ほのかな秋の気配に慰められるこの句の趣は評判が良かったらしく、需めに応じた真蹟類が多く残っている。句の出来としては絶唱秀吟とまでは行かず、佳作の部類であろう。『おくのほそ道』で小松での吟の前に置かれたのは、「しほらしき名や小松吹萩すゝき」と、この句の「秋の風」との相乗効果をねらったものかとも思われる。

ある草庵にいざなはれて

521 秋涼し手毎にむけや瓜茄子 （おくのほそ道）　――鳥の道・雪まるげ

松玄庵参會即興

残暑しばし手毎にれうれ瓜茄子 （西の雲）　――花の故事・奥の枝折

訪艸庵

秋さびし手毎にむけや瓜茄子 （韻塞）　――泊船集

秋季（秋涼し）。

語釈 ○**ある草庵** 金沢の俳人斎藤一泉の草庵松玄庵を指す。［考］参照。○**いざなはれて** 「誘（いざな）はれて」。人に誘われてその草庵に

赴いたこと。「ある人の別墅にいざなはれ、尽日打和て物がたりし其夕つかた」（『炭俵』上、野坡発句「行雲を」前書）「Izanai, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○秋涼し　「涼し」は夏の季語であるが、「秋」がつくと秋季になる。暑気が去って新涼を待ち得た初秋の趣である。「すゞしき　連哥には色〻むつかしく侍れ共、誹諧には夏に壱、秋に一」（『御傘』）「今按に、古俳書にも初涼とは侍れど新涼と記せず。近世是を諷ず。秋涼の一つ也」（『滑稽雑談』）「文台の扇ひらけば秋涼し亡人呂丸」（『続猿蓑』下）。○手毎にむけや瓜茄子　「手毎に剝けや瓜茄子」。もてなしに出された瓜や茄子を、客がそれぞれ手んでに皮を剝いて、頂戴しよう、と呼びかけた。「や」は、呼びかけの終助詞。「見てのみや人にかたらむさくら花てごとにをりていへづとにせん」（『古今集』巻一、素性）「熨斗むくや儀菜すゞしき島がまへ　正秀」（『炭俵』上）「なけやなけたか田の山の郭公このさみだれにこゑなをしみそ」（『拾遺集』巻二、よみ人しらず）「Tegotoni.」「Conomino cauauo muqu.」（『日葡辞書』）。

大意　秋を迎えて快い涼しさだ。さあ、おもてなしの瓜や茄子を、それぞれ手んでに皮を剝いて、頂戴しようではないか。

考　「少幼菴（ママ）にいざなはれて」（『雪まるげ』）「少幻菴にて」（『花の故事』）「元禄二の秋　一泉亭にて」（『奥の枝折』）等の前書があり、『鳥の道』『泊船集』の前書は『おくのほそ道』と同じである。『花の故事』（闌更編、宝暦十三年刊）に「残暑しばし」の芭蕉の句を発句とした半歌仙を収めて、「右歌仙一折、翁の真筆にて、小春が末葉淇水所持す」という付記が見える。この付合では一泉なる人が脇を付けており、曾良の『随行日記』七月二十日の条に、

快晴。庵ニテ一泉饗。俳一折有テ、夕方野畑ニ遊。帰テ夜食出テ散ズ。子ノ刻ニ成。

と記された「俳一折」がこれに当ると推定される。一泉の草庵は犀川のほとりにあったといわれ、地元の集『西の雲』（ノ松撰、元禄四年刊）に「松玄庵」とあるのが正しい庵号であろう。

『ほそ道』に先立つ『西の雲』に見える「残暑しばし手毎にれうれ」が旅行当時の初案である。「残る暑さも暫しのこと」と時候の背景を先ず述べて、もてなしに出された瓜茄子を、それぞれ頂戴しようと興じている。それを『ほそ道』で改めたのは、「ザンショ」の語の響きが際立ち過ぎるのと、暑さを言い立てるより新涼の趣を述べた方が句柄

が良くなって挨拶の意にも適うし、また、「れうれ」（「料理」）の語から出た動詞「料る」の命令形）という余りに砕けた俗語を、普通の言葉に訂したものと思われる。「秋さびし」の異形は根拠が明らかでなく、恐らくは誤伝であろう。

一泉亭に招かれて、もてなしに出た瓜や茄子を材にした即興の挨拶句で、簡素な野趣が好もしい。「れうれ」とか「むけや」とはいっても、それは単なる命令ではなく、穎原博士のいわれたように、自ら「剝かむ」と興じた気分を他に及ぼしたので、其処に主客の諧和したこの席の気分が味わわれる。また、ざるか何かに今瓜茄子をとって来たところだ。その涼しさうな水水しい色は手に取りたい様な感じがする。そこを興じて「手ごとにむけや」と云ったので、実地に皮をむくのでは無い。手ごとにもてやではいけ無いから「むけや」と云ったまでである。瓜茄子の賞美の感である。（『芭蕉俳句研究』）という露伴の見方も確かなところであって、実地に剝くのでなくても、こう表現することによって、興じた気分が出るのである。

522 つかもうごけ我泣聲は秋の風　（真蹟句切）

曾良書留・西の雲・雑談集・おくのほそ道・鳥の道・陸奥衡・泊船集

とし比我を待ける人のみまかりけるつかにまうで〻

秋季（秋の風）。

語釈　**○とし比我を待ける人のみまかりける**　「年比我を待ちける人のみまかりける」。長年私を待っていて、会えずになくなった人、の意。『枕草子』初段の「むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」と同じ語法である。「みまかる」は既出（Ⅱ*310*前書）。「としごろよくくらべつるひとぐ〻なむ、わかれがたくおもひて」（『土佐日記』）「Toxigoro fete.」（『日葡辞書』）。**○つかにまうで〻**

「塚に詣でゝ」。「つか」は、墓に同じ。遺骨を葬って土を高く盛り上げてある所。そこに参詣したのである。「つか」は上の「としし比……みまかりける」全体を承けて「その人の塚」という意で、「みまかりけるつか」と続くのではない。「こひ死ば我塚でなけほとゝぎす遊女奥刕」（『猿蓑』巻二）「日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に」（「幻住庵記」）「Tçuca.」（『日葡辞書』）。○**つかもうごけ**　「塚も動け」。「我が声に感じて動けよ」と塚に呼び掛けた。「も」は、「石で出来た塚さえも」と感情を添えた表現である。○**我泣声**　「我が泣く声」。

大意　亡き人の塚も感じて動けよ。貴方の死を悼んで私の泣く声は、折柄の秋風の音と化してあたりを吹きめぐるのだ。

考　「一笑追善」（『曾良書留』）「一笑といふもの、此道に好る名のほのぐと聞えて、世に知人も侍りしに、去年の冬早世したりと、その兄追善を催すに」（『鳥の道』）「加州一笑墓に詣」（『陸奥鵆』）等の前書があり、このうち『鳥の道』のものは、『おくのほそ道』の文と殆んど同じである。

金沢の俳人一笑は小杉氏、名は味頼、通称茶屋新七。葉茶商を営んでいたという。俳諧を嗜んで、寛文延宝期の『時勢粧』（維舟撰）『続連珠』（季吟撰）等に句が入集し、蕉門系の俳書では、貞享四年の『孤松』（尚白撰）や元禄二年の『あら野』に句が見える。細道の旅より前に芭蕉とも交流があったものと見られ、一笑自身も芭蕉と会うことを期待していたが、その金沢来遊を待たずに、元禄元年十二月六日三十六歳で病歿した。曾良の『随行日記』七月十五日の条に金沢到着を記した後、

京や吉兵衛ニ宿かり、竹雀・一笑へ通ズ。艮刻竹雀・牧童同道ニテ来テ談。一笑去十二月六日死去ノ由。

とあって、芭蕉が金沢で真先に連絡した先が一笑だったのは、それに先立つ両者の交流を思わせるものであろう。芭蕉が竹雀・牧童ら地元の俳人の話ではじめて一笑の死去を知ったことが、右の『日記』の記述によって分る。

さて、芭蕉の来遊を機に一笑追善の法会が催されたのは七月二十二日であった。曾良の『日記』には、

一　廿二日　快晴。高徹見廻。亦薬請。各朝飯後ヨリ集。予病気故未ノ刻ヨリ行、
　暮過各ニ先達而帰。亭主ノ松。

とあり、朝から夜までの会だったことが知られる。曾良は寺の名を空白にしているが、今の金沢市野町三丁目の小杉家菩提寺願念寺と思われ、主催したノ松（べっしょう）は一笑の兄である。この追善の席の模様は、一笑追善集『西の雲』（ノ松撰、元禄四年刊）の水傍蓮子なる人の序に委しい。

明ヶの秋風羅の翁行脚の次手に訪ひ来ます。ぬしは去にし冬世をはやうすと語る。あはれ年月我を待しとなん。生て世にいまさば、越の月をも共に見ばやとは何おもひけんと、なく〳〵墓にまふで、追善の句をなし、廻向の袖しぼり給へり。遠近の人つどひ来り、席をならし、各追悼廿余句終りぬ。……

一笑の才を高く買っていた芭蕉は、金沢で彼に会うのを楽しみにしていたであろうし、その訃を聞いた衝撃の大きさは、右に見える述懐にも看取されよう。

未見ながら深く相許す気持を抱いていた人が、その住む地に来て見れば、はや世に亡い人であった。この句はその死を悼む痛切な情を生かして、発句という形式には稀な勁烈な調べを成している。わざとらしい厭味はなく、魂の奥底から湧き出る慟哭の声が「秋の風」に的確に象徴されているところを味わうべきであろう。正に「誠」から生まれた句といってよい。山本健吉氏の分析に従えば、

折から吹いて来た秋風の颯々の響に、故人を哀悼する自分の心の姿を見た。それは沈痛・寂寥の声であるが、いささかも王朝文学風の湿潤性を含まず、カラリと乾燥した声である。極度の悲痛さが、声を涸らしてしまった状態が、万象を枯らす秋風の季感に滲透するのである。ここでは「わが泣く声は秋の風」と、単刀直入に二物照応を言っていて、他の瑣事に心を労さない。言語に絶する感情の表現であり、絶叫とも言うべきものだ。その単純で強い表現が、「塚も動け」という字余りの、地下の故人を喚び覚ますような強い命令的呼びかけに応ずる

のである。強いa音を主とし、o音がこれに次ぎ、それに破裂音のk音が目立ち、内に籠るものが外へ向って発散しようとするリズムがある。それがこの句を流涕の感傷性から救い、張り切った高い調子を持続させている。
心の色として、蕭条たる秋風を見出だしたことが、この句の眼目である。中句まで主観的・直叙的につらねられた語句が、坐五「秋の風」に至って急転し、客体である「もの」を捉えることによって、俳句的抒情を完成する。「わが泣く声は秋の風」というだけでは、それは単純な叙述に過ぎないが、「塚も動け」から続いて来ると、「秋の風」に中断と屈折とが生じて、俳句的イメージが結晶されてくる。……「秋の風」が芭蕉のこのときの感情のすべてを吸収して、即物的表現を達成しているのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）
ということになる。また、「我泣声は秋の風」は、単純な叙述にはちがいないが、「秋の風の如し」といっているのではなく、直截に「秋の風だ」といっているのである。この強い把握が表現の即物性を支持しているという見方も出来る。

523

こまつといふ處

しほらしき名や小松吹萩薄　（増井氏蔵真蹟懐紙）

今治市河野美術館蔵真蹟懐紙・おくのほそ道・雪まるげ・草のあるじ

小杢山王會

しほらしき名や小杢吹荻薄　（曾良書留）

泊船集・旅袋

秋季（萩・薄）。

語釈　○こまつ　「小松（こまつ）」。金沢の西南七里余、現在の石川県小松市を指す。○しほらしき名や　小松という地名を可憐な名といって褒めた。「や」は、詠嘆の切字。「しほらしき」は「しをらしき」の仮名ちがいである。「さらばくの小手まねき、しほらしか

りしおひさき也」（『出世景清』第二）「Xiuoraxij.」（『日葡辞書』）。〇**小松吹萩薄**　「小松吹く萩薄」。地名「小松」に小さな松の意を掛け、その小松に渡る秋風が萩や薄をも吹きなびかせる野辺の景色を描いたのである。「舟〳〵の小松に雪の残けり　旦藁」（『はるの日』）。

大意　小松とはまことに可憐な名であることよ。此処ではそれに相応しく、野辺の小松に渡る秋風が、あたりの萩や薄をも吹きなびかせている。

考　「おなじ処小松にて」（今治市河野美術館蔵真蹟懐紙）「小松と云所にて」（『おくのほそ道』）「かゞ小松にて」（『泊船集』）「加賀の国小松といふ処にて」（『旅袋』）「北国行脚の時、いづれの野にや侍りけん、あつさぞまさるとよみ侍りしなでしこの花さへ盛過行頃、萩薄に風のわたりしを力に、旅愁をなぐさめ侍りて」（『雪まるげ』）等の前書がある。曾良の『随行日記』によると、芭蕉が金沢を立って小松に着いたのは七月二十四日であるが、「しほらしき」の句の『書留』の前書には「七月廿五日」と注してあり、即ち『日記』に、

一　廿五日　快晴。欲ㇾ小枩立。所衆聞而以北枝留。立枩寺へ移ル。多田八幡へ詣テ、真盛（ママ）が甲冑・木曾願書ヲ拝。終テ山王神主藤井伊豆宅へ行、有会。終而此ニ宿。申ノ刻ヨリ雨降リ、夕方止。夜中折〻降ル。

とある日に当る。当地山王日吉神社の神主藤村伊豆章重（俳号鼓蟾。『日記』の「藤井」は誤り）の家での俳席で挨拶の句として詠まれたもので、これを発句に連衆十人の世吉一巻が成った。『書留』の「荻薄」は曾良の誤筆とおぼしく、信頼すべき真蹟二点や『おくのほそ道』に「萩」とあるのに従うべきである。

真蹟二点のうち、本位句の底本とした懐紙は、河野美術館所蔵のものと共に、旅中小松での揮毫と推定される。「わせのかや」「しほらしき」の二句が共通し、前者では末に実盛の冑の句、後者では同じく最後に次に扱う「ぬれて行や」の句を書いている。岡田利兵衛氏の『芭蕉の筆蹟』では前者を七月二十五日筆、後者を翌二十六日筆と推定されているが、聊か問題があってそのままには従えない。斎藤別当実盛の冑を蔵する多田八幡に参詣したのは確かに二

十五日であるが、曾良の『日記』では一日おいた二十七日の条に、地元の俳人達が引留めるのを振り切って立ったことを述べた後、

……伊豆尽甚持賞ス。八幡ヘノ奉納ノ句有。真盛(ママ)が句也。……

とあり、改めて斯う書いていることは、実盛の句の成ったのはこの日だったことを示していると思う。従って前者が二十五日に書かれることはあり得ない。藤村伊豆が大変もてなしたことを言った続きに句の事があるところから見て、二十七日に八幡奉納の句としてこれを作り、伊豆にこの懐紙を書いて与えたものと推定される。関防印落款印も具わり、極めて謹直な筆蹟である。後者の揮毫については、次の「ぬれて行や」の句の条を参照されたい。

「しほらしき名や」と先ず打ち出したのだから、この句は「小松」という地名に興を催したのが発想の契機となったことは確かであろう。「しほらしき名や小松」というところまでは土地の名を可憐と感じているのだが、「小松吹萩薄」と連なる後半は、野辺に秋風の吹く実景である。つまり「小松」が地名としての働きと植物の名としての働きを兼ねて掛詞になっているわけだ。そして、「小松吹く萩薄」とはどういう情景かというに、小松が萩や薄を吹くということはあり得ないし、風になびく萩や薄が小松を吹くという景は一応イメージとして浮ぶにしても、この「吹く」はやはり上下にかけて、「小松」にも「萩薄」にも秋風が吹き渡ると解するのが最もよい。地名をほめた部分と、あたりの野辺の実景を叙した部分とが、「小松」を地名と植物名と両方に働かせることによって結合されている句である。一見句意を把握するのに戸惑うようなところがあり、暢びやかな前半の調べに対して後半のぎごちない調べの不調和を難ずる向きもある。しかし「小松」を中心に地名をほめることと秋らしい叙景を結合する趣向は、鼓蟾ら初対面の人に対する挨拶として即興に案ぜられたもので、調べについても、「しほらしき名や小松」「小松吹く萩薄」をそれぞれに誦しても、特に後半部が劣るとは思えない。第一、そのようにバラバラなリズム感のものだったら、芭蕉が『おくのほそ道』に入れる筈がないのである。この句の持つリズムに芭蕉はかなり自信を持っていたのであろう。

「風」を表面に出さずに「吹く」によってそれを思わせるような技巧は、取立てて異とするに当らない。前にも触れたように、『ほそ道』ではこの句の前に「あか〳〵と日は難面もあきの風」の句があって、「しほらしき」の句と照応するように構成されている。小松の人々に対して土地の名を賞め、恐らくは属目だった野辺の景色を、その地の秋に相応しいものとして叙して一句としたのは、飛び抜けた秀作ではなくとも、一応の水準に達した作として、評価し得ると思う。同席した鼓蟾・歓生らは連歌に所縁の深い人であったから、題材を選ぶにもそれなりの配慮があったかも知れない。

歡生亭にて

524 ぬれて行や人もおかしきあめの萩（真蹟懐紙）

——曾良書留・しるしの竿・雪まるげ・奥の枝折

かゞ小松にて

ぬれて行人もおかしや雨の萩（泊船集）——蕉翁句集

同國小松觀水亭雨中の會

ぬれて行人もやさしや雨の萩（奥細道付録）

秋季（萩）。

語釈 ○**歓生亭** 「クワンセイテイ」。「歓生」は堤氏、小松泥町（現小松市大川町）で越前屋宗右衛門と称した人かという。『日本歴史地名大系・石川県の地名』所引の『小松旧記』に、元禄二年当時この町内に郡奉行支配下の家四軒があり、「泥町之内田地之上ニ有之、百姓但遊民」とあるのと関係があるかも知れない。曾良はこの人の号を「歓水」（『書留』）とも書いているが、『日記』には「歓生」とあるから「水」は誤りであろう。能順門の連歌師として北陸地方ではかなり著名な存在だったという。俳号は亭子。

田中常矩門で、俳歴もかなり古い人である。○**ぬれて行や**　「濡れて行くや」。雨に濡れて行く人のさまをいう。○**人もおかしき**　「おかし」は「をかし」の仮名ちがい。趣のある意である。「石臼の破ておかしやつはの花　胡及」（『あら野』巻五）。

大意　雨中の萩は風情がある。その花のあたりを雨に濡れて行く人までも趣深いことだ。

考　「同歓水亭会。雨中也」（『曾良書留』）「小松にて」（『蕉翁句集』）「歓水亭雨中会」（『雪まるげ』）等の前書がある。『書留』には前の「しほらしき」の句の次に「廿六日」と注して出しており、即ち『随行日記』七月二十六日の条に、

一　廿六日　朝止テ巳ノ刻ヨリ風雨甚シ。今日ハ歓生（ママ）亭へ被招。申ノ刻ヨリ晴。夜ニ入テ俳五十句終而帰ル。

庚申也。

とある日であって、「ぬれて行や」の句を発句とする五十韻は、二十二句までが『しるしの竿』（湫喧撰、宝永二年刊）に紹介され、後年の『金蘭集』ではじめて五十韻全部が世に知られた。『奥細道付録』は最初の十一句のみ、『奥の枝折』も二十二句までである。真蹟懐紙は、「しほらしき」の句の条でも触れた河野美術館所蔵のもので、三句目に「歓生亭にて」としてこの句を書いているところから、当日歓生に与えたものと見られる。『泊船集』や『奥細道付録』の異形は、恐らく誤伝であろう。『芭蕉翁俳諧集』等に「ぬれて行く人もをかしき」とあるのも信じ難い。

萩を植えた歓生亭の庭を賞した挨拶の句である。主客は激しい風雨の中を庭に下りて萩の花を観賞したのであろう。雨に濡れながら庭を逍遥する自分達の姿を客観視して「人もおかしき」といったところが珍しく、俳諧でもある。最初に「ぬれて行や」と字余りにして置いたのも、そういう物好きな姿を強調したかったからと思われる。「ぬれて行人もおかしや」（『泊船集』）とすれば形は整うが、却って平凡である。「馬をさへながむる雪の朝かな」（Ⅰ*212*）「紙ぎぬのぬるともをらん雨の花」（Ⅱ*351*）等と似た発想であるが、「おかしき」と露わにいったところが、表現としては浅い感じがする。なお、古注に引く「萩が花ちるらむをのゝつゆしもにぬれてをゆかんさよはふくとも」（『古今集』巻四、よみ人しらず）の歌の余響が何がしかあるようだ。

加賀の小枩と云處、多田の神社の寳物として、實盛が菊から草のかぶと、同じく錦のきれ有。遠き事ながら、まのあたり憐におぼえて

おくのほそ道・陸奥衛・泊船集・宇陀法師・粟津原

525

むざんやな甲の下のきりぐす　（猿蓑）

おなじところ、たゞの神社にさねもりのかぶと有けるを

あなむざんやかぶとの下のきりぐす　（真蹟懐紙）　――卯辰集

あなむざんやな甲の下のきりぐす　（去来抄）

秋季（きりぐす）。

語釈　**○加賀の小枩と云処**　「加賀の小枩と云ふ処」。「加賀」（Ⅲ519）「小枩」（Ⅲ523）何れも既出。「枩」は「松」の異体字である。**○多田の神社の宝物**　「多田の神社」は小松市上本折町にある多太神社を指す。『延喜式』神名帳に見える古い神社で、祭神は仁徳天皇・応神天皇・神功皇后等。『おくのほそ道』には「太田の神社」と書かれている。「宝物」は、古くから伝蔵される貴重品をいう。次に出る社蔵の兜・袖・臑当は、現在国指定の重要文化財である。「延喜式神名帳に記す神社を式内の神と云、神名帳に記さざる神社を式外の神と云」（『神道名目類聚抄』巻四）「同じく御宝物どもわたし奉らんとて、内侍所の御唐櫃も大床迄出したりけるを」（『平治物語』上）「Iinja. Camino yaxiro.」「Fômot.」（『日葡辞書』）。**○実盛が菊から草のかぶと**　「実盛が菊唐草の兜」。「実盛」は、源平時代の武将斎藤別当実盛。はじめ源義朝に従っていたが、平治の乱で義朝が滅びて後は平家に属し、木曾義仲が挙兵するや、寿永二（一一八三）年五月加賀の篠原（現加賀市篠原町）でこれと戦って敗死した。七十余の老齢で、白髪を染めて出陣したという。「菊から草」は、菊の花に蔓草をあしらった文様で、『ほそ道』にはこの兜について「往昔源氏に属せし時、義朝公より玉はらせ給とかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹返しまで菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打たり」と、くわしく描写されており、同じ社蔵の義仲の願状副書や縁起などにも兜は義朝から与えられた旨が書かれているという。「抜き設けたる太刀なれば、兜の真向ちやうと打ち」（謡曲「通盛」）「Caracusa.」「Cabuto.」（『日葡辞書』）。**○錦のきれ有**　「錦の切れ有り」。「錦のき

れ」は、鎧の下に着る鎧直垂の断片で、金銀糸を織り交ぜて華麗に仕立てた絹織物。大将の着用するものである。梨一の『奥細道菅菰抄』に「宗盛ヨリ真盛(ママ)ヘ賜ル所ノ赤地錦ノ直衣ノ切レナリ。本トハ直衣ノマヽニテ、義仲ヨリ奉納有シヲ、イツトナク切リ取シ由。今ハ僅ニ縦二尺横一尺許ノコル。織文ハ、白萌黄ナドニ金ヲ雑テ、雲文鳥文アリ」と見え、今に伝わっている。「実盛が錦の直垂を着る事、私ならぬ望なり」(謡曲「実盛」)「もしたちのこしたるきれやあると御尋ねありて」(『中書王物語』)「Nixiqi.」「Qire.」(『日葡辞書』)。○**遠き事ながら**　遠く歳月を隔てた昔の事ではあるが、の意。「実にや尋ねても蓬が島の遠き世に、今のためしも生薬」(謡曲「養老」)。○**まのあたり憐におぼえて**　「目の辺り憐れに覚えて」。実盛の遺品を目の前にして、その運命が哀れに思われて、の意。「まことに一栄一落まのあたりなる浮世とて」(謡曲「二人静」)「Manoatari.」(『日葡辞書』)。○**むざんやな**　「無残やな」。「むざん」は、酷くいたましい状態をいう。「やな」は詠嘆。謡曲「実盛」の詞章「あな無残やな、斎藤別当にて候ひけるぞや」による表現である。「Muzan.」「Vrexiyana.」(『日葡辞書』)。○**甲の下**　「甲の下」。「甲」は「よろい」が本義であるが、「甲冑」などと連用されて「かぶと」の意に誤用されるに至った。ここも誤用の例で、「かぶと」をいう。○**きりぎ〳〵す**　こおろぎのこと。直翅目コオロギ科の昆虫。体長は一・五センチほど。全身黒褐色で触角が体より長く、二対の翅と一対の尾毛を持つ。後脚が長くてよく跳ねる。「蛬　秋也。……筆つ虫・させてふ虫など、きりぎ〳〵すの異名等も三の内也」(『御傘』)「壁のくづれをつゞりさせとなく。蟋蟀の音にわび」(『山之井』)「蟋蟀　爾雅曰、蟋蟀ハ蛬也。……藻塩草云、世俗に、きりぎ〳〵すはつゞりさせからはひろはんと鳴といへり。……大和本草云、促織、……一名蟋蟀、又蛬と云。立秋の後則夜鳴。いなごに似て黒し。翅あり角あり。頭は切たる如く尖なり。……古歌にきりぎ〳〵すとよめるは是なり。秋の末まで鳴也」(『滑稽雑談』)「桶の輪やきれて鳴やむきりぎ〳〵す　昌房」(『猿蓑』巻六、几右日記)「Qiriguirisu.」「Xisot. i, Qiriguirisu.」(『日葡辞書』)。

大意　酷くもいたましいことだなあ。討死した実盛のかぶとの下で、こおろぎが鳴いている。

考　「多田の神社にまふでゝ、木曾義仲の願書并実盛がよろひかぶとを拝ス」(『卯辰集』)「太田神社宝物実盛鎧」(『陸奥鵆』)「北国行脚の頃、越前太田の神社に詣す。実盛が鎧甲、什物に有ける。此宝物を見て」(『粟津原』)等の前書があり、『ほそ道』にも参詣の時のことがかなり委しく書かれている。また、細道旅中の筆と思われる「荒海や」「稲の香や」の句を記した紙背に、「かゞの国こまつといふところ□たゞの神社に詣、宝物□実盛がきくからくさ□甲、おなじく

にしきのき□あり。樋の次良が使せしことゞも、まのあたりあ□□おぼえ侍りて」と、当面の句の前書とおぼしい文を書いた草稿も伝わっている。前述の如く、多太神社に詣でたのは七月二十五日であったが、句の成ったのは翌々二十七日と推定される（一九七頁参照）。

「わせのかや」「しほらしき」の句と共にこの句を書いた真蹟懐紙は、さきにも言ったようにこの二十七日に染筆されたものと思われ、旅行当時の初案が「あなむざんや」だったことは確実である。『去来抄』修行の章には、標掲のような形でこの句を引き、「後に、あなの二字を捨らる」というけれども、これは旅行当時の真蹟の句形と合致せず、不確かな所伝と考えざるを得ない。また『一葉集』に小松の連衆と巻いた歌仙一巻が収められており、これは山中入湯後に小松を再訪した時の作と思われるが、その発句は「あなむざんやな冑の下のきりぐ〳〵す」とあって、『去来抄』と同じである。しかし『一葉集』も時代の降る幕末の刊本で、これまた信じ難い。従ってこの句は九月二十七日に「あなむざんや」の形の初案が成り、元禄四年の『猿蓑』に収める際に「むざんやな」と改案されたと見られる。

「あなむざんや」も「むざんやな」も、謡曲の詞が口を衝いて出たのである。前者は「あなむざん」でもよかったろうが、何か拍子がつくので「や」を添えたのであろう。「あなむざんや」は、謡曲よりも『平家物語』巻七や『源平盛衰記』巻三十と表現が一致するけれども、句作に際して芭蕉の頭に先ず浮んだのは謡曲「実盛」の詞章だったと思われる。改作に当って上の「あな」を削り、「むざんやな」としたのは専ら調べを整える為で、芭蕉にとっては、実盛の無残な最期を想起させるものとして、ここに謡曲の詞を取り込むことが必要だったのである。

一見、「むざんやな」の詠嘆は「きりぐ〳〵す」に対するもののように見えるが、実は実盛の最期をあわれむ意味であって、きりぎりすの鳴く音によって触発された詠嘆なのだ。秋季の物として配合されたこの虫は、実際に居ても居なくてもよいが、同時にこの時の「芭蕉の感傷の象徴」（頴原博士「奥の細道俳句研究」）として必須の物でもある。兜の下に抑えられたきりぎりすは、手塚の太郎と組んで首を掻かれた実盛を髣髴させるではないか。実盛への鎮魂の手向と

して、謡曲の詞も「きりぐ〳〵す」も必要不可欠のものといってよい。山本健吉氏が、この句に於いて謡曲の詞は単に知識的に古典を連想させようとしただけのものでないことを説き、
……芭蕉の句に幾重もの声がきこえてくるのは、それが芭蕉自身の個人的な詩の動機を持つとともに、もっと広く共同社会の内部における動機をも持っており、それが同時に詩の伝統、言いかえれば生きた歴史的形成作用に結びついたところに成立したものだからである。……
(「むざんやな」は)古典の文句取りなどと言ふ(ママ)ものではない。実盛の伝説を伝承し、その供養を年々繰りかえす民衆と、同じ場に立って発想したものに過ぎない。実盛の伝説は、亡霊譚としての伝承のうちに、庶民的な生活と感覚とに深く滲透した。諸国の農村の虫送りは、実盛祭とか実盛供養とか実盛追い・実盛送りなどと言って、旧暦七月に、あるいは地方によっては一定しない期日に、行われている。……実盛は、死んで後怨霊神として怖れられたのであって、それは農村でどうしても慰霊しなければならぬ神として感じられていた。芭蕉がそこまで意識してこの句を作ったという心算はないが、実盛への供養の句を作るということは、発想の根において、そのような民衆の生活感情につながり、その純化という形を取るのだ。……「甲の下のきりぐ〳〵す」は美しい詩語だが、これで悲傷の気持は十分であって、「むざんやな」は重複でくどいという結論は、出て来ないのだ。「むざんやな」があって、始めてこの句の立体的な存在性が浮び上るのである。俳句の即物性だけを強調する考え方に取っては、このような句の魅力は解しがたいであろう。(『芭蕉その鑑賞と批評』)
と述べられたのを玩味すべきであろう。
この感動を一口でいえば、「いたましい」との嘆きだが、芭蕉の内心ではかなり複雑に働いており、実盛個人追悼に加えて彼の最後の地加賀への手向けでもあり、実盛のはかなさを今の我々も生きるという歴史的同時性の認識である。とすれば、「甲の下のきりぎりす」は、従来の解では都合よく「甲の下」に実在したかの如くであっ

たが、季語としての配合意識に添えて「甲」に象徴される悲劇的英雄実盛に対し不可抗力の運命に非力で嘆くしか術知らぬ詩人芭蕉の存在を、控え目に点じたものとも見られよう。そういう読み方も、歴史参与の姿勢の強かった芭蕉の作ならあり得る事と思われる。(『猿蓑発句鑑賞』)という森田蘭氏の所説も、傾聴すべきものを持っている。

526

山中や菊はたおらぬ湯の匂　(おくのほそ道)

韻塞・泊船集

北海の磯づたひして、加州やまなかの涌湯に浴ス。里人の曰、このところは扶桑三の名湯の其一なりと。まことに浴する事しばくなれば、皮肉うるほひ、筋骨に通りて、心神ゆるく、偏に顔色をとゞむるこゝちす。彼桃原(ママ)も舟をうしなひ、慈童が菊の枝折もしらず

やまなかや菊はたおらじゆのにほひ　(石川県立美術館蔵真蹟懐紙)

石川県山中町蔵真蹟懐紙・曾良書留・山中集・先手後手・奥細道付録

秋季(菊)。

語釈　○**山中**　「ヤマナカ」。加賀の山中温泉(現石川県江沼郡山中町)を指す。摂津(兵庫県)の有馬、伊予(愛媛県)の道後と共に、日本三名湯の一である。ここは周の慈童の菊水の故事を踏まえているので、普通名詞としての「山の中」の意を掛けているであろう。○**菊はたおらぬ湯の匂**　「菊は手折らぬ湯の匂ひ」。「湯」は、温泉。「菊はたおらぬ」とは、長寿を保つという菊水の源となった菊を手折るまでもない、あらたかな効験を持つ温泉といって、その湯の香を賛えたのである。「匂」には「菊」の縁もある。「たおらぬ」は「たをらぬ」と書くのが正しい。「麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　重五　桃花をたをる貞徳の富　正平」(『冬の日』)「Fanauo tauoru.」(『日葡辞書』)。

大意　山中の湯は文字通り山深くにある効験あらたかな温泉だ。この香り高い湯では、長寿を保つという菊を手折るまでもない。

考　「山中温泉」（石川県山中町蔵真蹟懐紙）「山中ノ湯」（『曾良書留』）「加州山中の重陽」（『韻塞』）「加州山中重陽」（『泊船集』）「温泉　言葉書あり。略之」（『山中集』）等の前書がある。曾良の『随行日記』九月二十七日の条には、八幡宮奉納の句を遺して小松を立ったことを述べた後、

一　同晩山中ニ申ノ下尅着。泉屋久米之助方ニ宿ス。……

とあって、八月五日昼に此処を立つまで滞在している。長文の前書のある真蹟懐紙には「元禄二仲秋日」と年記があり、八月に入って五日までの間に成ったものと推定される。山中町蔵の真蹟も滞在中の染筆であろう。『先手後手』（風陽・兎仕撰、明和四年刊）には長文の前書の写しを載せて「温泉頌」と題している。「重陽」とする前書があるのは、句中に「菊」がある為の誤解で、九月に山中温泉に滞在したことはない。

旅中の真蹟や『曾良書留』等がすべて「たおらじ」なので、これが初案であるが、「じ」と言い切っては三段切れになる。「湯」にかけて「たおらぬ」とすればこの難点は避けられるわけで、句意はやや晦渋になるが、短詩形では許される表現である。「ぞ……ぬ」の係結が略されたものと見る説は採らない。『おくのほそ道』執筆の際の改案であろう。

山中での宿和泉屋久米之助への挨拶吟として、温泉をたたえている。旅中の真蹟前書に「慈童が菊の枝折もしらず」とあるのは、謡曲「菊慈童」で有名な故事で、周の穆王の寵童慈童は酈県山（れきけん）の菊水を汲んで七百年の齢を保ち、なお元気であったという。曲中には「岩根の菊を手折り伏せ手折り伏せ」ともあり、句を作る際にこの謡曲が念頭にあったことは疑いない。この句は慈童の伝説を背景にして仕立てられており、こういう趣向は現代にはそぐわないけれども、さすがに品格は高く仕上っているといえよう。

加賀山中桃妖に名をつけ給ひて

527 桃の木の其葉ちらすな秋の風（泊船集）

秋季（秋の風）。

語釈 **○加賀山中桃妖** 「桃妖（たうえう）」は、芭蕉の山中入湯の時滞在した宿屋和泉屋の主人で、『おくのほそ道』に「あるじとする物は久米之助とて、いまだ小童也」とあるように、当時まだ十四歳であった。長じて又兵衛と称し、後甚左衛門と改めた。宝暦元（一七五一）年十二月二十九日歿、享年七十六。彼の俳号は「桃夭」「桃葉」「桃蛘」等さまざまに書かれるが、この号は後述の如く『詩経』国風の「桃夭」の詩に基づくものと思われ、「桃夭」が本来であろう。「夭」は若々しい意で、十代の少年に相応しい。芭蕉の記憶ちがいで「妖」を用いたのかも知れない。**○名をつけ給ひて** 芭蕉が久米之助に俳号を与えたことをいう。「ことぶきの名をつけて見む宿の梅　昌碧」（『あら野』巻二）「**Nauo tçuquru.**」（『日葡辞書』）。**○桃の木の其葉ちらすな** 「桃（もも）の木（き）の其（そ）の葉（は）散らすな」。『詩経』国風、周南の条、「桃夭」の詩に「桃之夭夭、其葉蓁蓁」（桃の夭夭たる、其の葉蓁蓁たり）とあり、「蓁蓁」は葉の茂っているさまである。古注以来指摘されているように、ここの表現は右の古詩に基づくものと思われる。

大意 秋の風が吹こうとも、桃の木はその葉を散らすなよ。

考 『奥細道付録』には、前の「やまなかや」の句に続けて「おなじ時、桃妖に名をあたへて」と前書して収めてある。山中滞在中の作であることは疑いない。

一見「秋の風」への呼び掛けのようであるが、秋の風はここでは背景として秋季の条件を満たすまでのもので、「桃の木の」が中七の主語として立つ句作りである。「桃の木の其葉」というくどい表現の由来もその辺にあるが、同時に古詩の「其葉蓁蓁」を思わせるものともなっている。桃妖の句は『卯辰集』『北の山』『柞原』等、芭蕉在世時の

北越の集に「山中少人」として見え、少年ながら俳諧の才を認められていた。芭蕉もその才能の恙ない成長を願って「其葉ちらすな」と前途を祝したのである。当座の即吟で、価値を云々するような句ではない。

528　いさり火にかじかや浪の下むせび　（卯辰集）

芭蕉翁真蹟拾遺

山中十景　高瀬漁火

かゞり火にかじかや浪の下むせび　（東西夜話）

秋季（かじか）。

語釈　○**山中十景**「ヤマナカジツケイ」。山中温泉一帯の地の佳景十を選んで名づけたもの。中国の西湖十景にならった呼称で、山中八景・山中十二景等もある。どういう呼名があったかは未詳。○**高瀬漁火**「タカセノギヨクワ」。山中十景の一。「高瀬」は、川の浅瀬。山中温泉は吉崎のあたりで海に注ぐ大聖寺川の上流にある。「漁火」は漁夫が魚を引き寄せる為に舟の上で焚く火。「うかひ舟たかせさしこすほどなれやむすぼゝれゆくかゞりびのかげ」（『新古今集』巻三、寂蓮）「月落ち烏鳴いて霜天に満ちてすさまじく、江村の漁火もほのかに、半夜の鐘の響は客の船にや通ふらん」（謡曲「三井寺」）「Guioqua, Sunadorinofi.」（『日葡辞書』）。○**いさり火**「漁り火」。「漁火」に同じ。「住吉・難波ノ里ニ焼篝ハ、漁舟ニ燃ス居去火ノ、波ヲ焼カト怪シマル」（『太平記』巻六）「Isaribi.」（『日葡辞書』）。○**かじか**「鰍」。淡水魚で体長は十センチ程、灰褐色に黒い縞がある。声を出して鳴くようにいわれるのは蛙のかじかと混同したもので、魚は鳴かない。『毛吹草』『増山井』等に八月の季題としている。「按に、篤信が説の如く、石斑魚に似て黒く、白斑点あり。高やかに声して夕ぐれなどに鳴者也。有馬鼓滝の末、湯山川などに多し。都にては八瀬の川隈にあり」（『滑稽雑談』）「あやまりてぎゞうおさゆる鰍哉　嵐蘭」（『猿蓑』巻三）。○**浪の下むせび**「浪の下咽び」。「むせび」は、声をつまらせて泣くこと。「下むせび」は、人知れず咽び泣くことをいう。「浪の下」と言い掛けた修辞である。「行きなやむ谷のこほりの下むせびすゑにみなぎる水ぞすくなき」（『風雅集』巻八、後西園寺前太政大臣）「Muxebi, u.」（『日葡辞書』）。

大意　かじかの棲む渓流の水の音。あれは、かじかが舟の上で焚く火を見て、浪の下で人知れず咽び泣いているのだ

ろうか。

考　『芭蕉翁真蹟拾遺』には「この処十景有て、高瀬の漁火と云、其ひとつなれば」と前書があり、支考の『東西夜話』（元禄十五年刊）には「此地に十景あり。先師むかし高瀬の漁火といふ題をとりて」として句を出している。山中滞在中の作であろう。「かゞり火に」の句形は根拠が明らかでなく、支考の杜撰とも考えられる。「いさり火」の方が「漁火」とも密接に照応するから、『卯辰集』の句形が信頼し得ると思う。

『芭蕉新巻』（蚕臥著、寛政五年刊）に、

予一とせ彼地にいたり、まのあたり見しに、澗水に小草花篝にかゞやく。そが中を漁るさま幽麗にして秋情あはれ、胸いたくて、祖翁の高吟を感ず。

とある。この句は題詠的で、必ずしも実況を見たとしなくともよいという説もあるが、実際を見て詠んだ感じもあるのではないか。かじかは水底の石の下によく隠れているという。舟の上の漁り火の影が水に映るさまから、あの水底でかじかが煙に咽び泣いているのではないかと、鳴くといわれることも掛けて思い遣ったのである。実際に聞えるのは川瀬の音で、それを魚の咽び泣きに聞きなしたところに俳諧の興があろう。捕られる魚に対する哀憐の情も感ぜられる。

529　**湯の名残今宵は肌の寒からむ**　（作原）

　　山中湯上りにて桃妖に別るゝ時

湯の名残今宵は肌の寒からぬ　（都の花めぐり）

秋季（肌寒）。

語釈 ○湯の名残　「湯の名残(ゆのなごり)」。この「名残」は、最終・最後の意。温泉に浴するのもこれが最後だというので、名残を惜しむ気持も含む。「四季折〳〵の名残ところ〴〵にわたりて、いま湖水のほとりに至る」（芭蕉発句「行春や」真蹟懐紙前書）。○肌の寒からむ　湯上りの肌が寒く感ずることだろう。「肌寒(はださむ)」は、秋になって一入冷気を身に感ずることをいう季語。「風の身に入(し)む」（Ⅰ*183*）と重なるところがある。「欧陽永叔秋声賦曰、其気慄冽(トシテ)砭(ガ)ニ人肌骨(ヲ)。註、以(テ)レ石刺(ス)レ瘤曰(フ)レ砭」。△これらや肌寒の類ひならし」（『滑稽雑談』）「肌さむし竹切山のうす紅葉　凡兆」（『猿蓑』巻三）「Fada.」（『日葡辞書』）。

大意 この温泉につかるのもこれが最後。此処を離れて他処に泊る今宵は、さぞ肌寒く感ずることだろう。

考 『柞原(ははそはら)』（句空撰、元禄五年刊）に「此句は、ばせを翁山中上湯の時、やどのあるじ桃妖に書てたぶ。まへがきありしかどわすれ侍り」と付記があり、『奥細道付録』には「山中の里出る名残」と前書して「真蹟、山中祖明といふ誹士所持す」と付記している。山中を去った八月五日の吟であろう。異形を収める『都の花めぐり』（岸芷撰、文化五年刊）は時代の降る書であり、「肌の寒からぬ」と否定になるのは、句意の面からもこの場合に相応しくあるまい。誤伝と見てよいものと思う。

この句の「今宵」は、山中になお滞在している時ではない。山中に居て肌寒さを感ずるのでは、挨拶の意に欠けるところがあるから、これは他処に泊る時を思い遣ったものでなければならぬ。山中の宿のあたたかいもてなしを謝する一方、秋冷の気と孤独感が微妙にまじり合って、この「肌の寒からむ」は、すぐれた表現効果を発揮している。真情の流露した句として、山中滞在中の作では佳句と評してよかろう。

530

今日よりや書付消さん笠の露

（おくのほそ道）

鳥の道・泊船集・宇陀法師

同行なりける曾良みちより心地煩しなりて、我より先にいせのくにへ行とて、跡あらむたふれ臥とも花野原といふ事を書置侍るをみて、いと心ぼそかりければ

さびしげに書付消さんかさの露 (芭蕉翁略伝)

秋季(露)。

語釈 **○今日よりや書付消さん** 「今日よりや書付消さん」。「書付」は、巡礼の習わしとして旅笠の裏に書き付けた「乾坤無住 同行二人」の言葉を指す。(Ⅱ360前書)参照。「や」は、疑問に詠嘆を含む係助詞。「ん」は、意志という程強くはない未来の助動詞。「消すことになるのかなあ」というのである。「笹の葉に小路埋ておもしろき 沾圃 あたまうつなと門の書つけ 芭蕉」(『続猿蓑』上)「妻の名のあらばけし給へ神送り 越人」(『あら野』巻七)「Caqitçuqe.」「Iiuo qesu.」(『日葡辞書』)。

大意 一人旅になる今日からは、「同行二人」の書付も消すことになるのかなあ。笠に置く露も寂しさをそそることだ。

考 「同行にわかれいづるとて/行〳〵てたふれ臥ともはぎのはら 曾良/といひ置たり。行ものゝ悲しみ残るものゝうらみ、双鳧のわかれて雲にまがふがごとし。予も又」(『鳥の道』)「同行曾良に別れたまふとて」(『泊船集』)等の前書があり、前者の「行〳〵て」の句以下の部分は、『おくのほそ道』の文と略々同じである。曾良は北陸路に入ってから体調を崩し、『随行日記』によれば、金沢では高徹という医者にかかって薬を貰い、往診を乞うたりしている。山中での入湯の後芭蕉と別れたことは、『日記』の八月五日の条に、

昼時ゟ翁・北枝那谷へ趣。明日於小松ニ生駒万子為出会也。……則請シテ帰テ艮刻立。大正侍(ママ)ニ趣。全昌寺へ申刻着、宿。夜中雨降ル。

とあるのによって明らかである。この日芭蕉は金沢から従って来た北枝と共に山中温泉を去って那谷へ赴いたが、これは小松で俳人生駒万子(金沢藩士)と会う為であった。曾良はこれを見送ってから大聖寺(現加賀市)へ向ったの

である。この間の事情については、『ほそ道』に、

曾良は腹を病て、伊勢の国長嶋と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行〳〵てたふれ伏とも萩の原　曾良

と書置たり。行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ、隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし。

云々とあって、長嶋大智院の住職が曾良の叔父に当っていたので、それを頼って先行することになったと見られる。この句は曾良との別れに際して、その衷情を述べたものなのであった。

標掲したように、湖中の『芭蕉翁略伝』（弘化二年刊）には太田西巷所持の真蹟を摸刻して「さびしげに」という異形とその前書を紹介している。これを疑問とする説もあるが、尾形仂氏は角川文庫『新訂おくのほそ道』でこのような真蹟が存在したものと見て、前書中の曾良の句「跡あらむ」を、この時の留別句の最初の案としておられる。留別句は『書留』に「いづくにかたふれ伏共萩の原」の形で見え、『猿蓑』巻三所収の句形と同じである。『書留』のこの部分は『猿蓑』に採録された曾良の句を列記してあり、元禄四年夏『猿蓑』刊行以後の筆録と見られるから、『猿蓑』と句形が一致するのは当然であろう。『書留』に「いづくにか」とあるが故に「跡あらむ」の句形の存在を否定することが出来ないとすれば、『略伝』所収の前書の信憑性は高まって来る。文章全体に紛れもない芭蕉の文気が感ぜられるところからも、このような真蹟が存在した可能性は大きい。曾良の句の「跡あらむ」と共に、「さびしげに」の句形は、別離の際の最初の案であったろう。曾良の留別句より成立は幾らか後れるかも知れないが、この初案は旅中に成ったものと思われる。「さびしげに」は聊か他人事のようなので、『ほそ道』執筆に当って「今日よりや」と改案したのであろう。華雀の『芭蕉句選』に「けふよりは」と伝えるのは、根拠が明らかでなく、信じ難い。

前の「落くるや」（Ⅲ 472）の句の前書でも明らかなように、芭蕉と曾良はこの度の奥羽北越の旅を廻国巡礼の僧徒の行脚に擬していた。実際に旅の笠に「同行二人」と書いてあったわけではなく、「同行二人」の言葉自体も仏と二人

連れということで、人数とは関係がないけれども、それを二人連れの旅と見做すのも俳諧である。江戸から加賀の山中まで行を共にして来た曾良と止むを得ぬ仕儀で別れねばならなくなった。旅の途中で倒れることを予期したような留別句を見て、芭蕉の悲しみは深まったに違いない。笠の書付の「同行二人」も今日からは実体を失うから、消すことになるのかというので、「……や……消さん」という表現に別れともない気持が託され、踏ん切りのつかないためらいの感じが出ている。これは初案「さびしげに」には稀薄で、「今日よりや」の案に到って強く現われたものといえよう。

多くの説は「笠の露」でもって書付を消すと解しているが、果してそうであろうか。加藤楸邨氏の指摘されるように、この下五は曾良の留別句が踏まえた西行歌「いづくにかねぶりくてたふれ伏さんとおもふかなしきみちしばのつゆ」(『山家集』中)から出ているらしく、はかなさや涙の連想を伴なう。笠に置く露のイメージは、長途の雨露を凌いで来た旅の思いにも通うし、ここではそれだけで十分であろう。露で書付を消すというのは、細工が過ぎると思う。秋季のあしらいとしての「露」であることは言うまでもない。また、暫しの別れにこのような遣り取りをするのを大袈裟と感ずるのは現代の感覚であって、特に芭蕉の場合、無常観はこの人の常に懐抱していたものであった。「無常の観、猶亡師のこゝろ也」(『三冊子』わすれみづ)という土芳の語を想起したい。

那谷の観音に詣

531 石山のいしより白しあきの風 (真蹟懐紙)

石山の石より白し秋の霜 (やまなかしう)

秋季(あきの風)。

語釈 **○那谷の観音に詣**「那谷の観音に詣づ」。「那谷の観音」は、今の石川県小松市那谷町にある高野山真言宗別格本山自生山那谷寺を指す。本尊は十一面千手観音。『おくのほそ道』に「花山の法皇三十三所の順礼とげさせ玉ひて後、大慈大悲の像を安置し玉ひて、那谷と名付玉ふとや。那智・谷組（ママ）の二字をわかち侍しとぞ」とあるように、花山法皇が寛和年中（九八五―九八七）西国三十三所の観音霊場第一番紀伊の那智山と第三十三番美濃の谷汲山の各一字をとって寺号とされたと伝えられる。芭蕉が北枝を伴なって此処に参詣したのは八月五日のことであった（二一〇頁参照）。「此観音の仏前に参り、祈念を致し立願せしに」（謡曲「田村」）。**○石山のいしより白し**「白し」の主体を那谷の石山とするか、「あきの風」とするか、諸説あるが、私は主体を那谷の石山とし、句中の「石山」は近江の石山（滋賀県大津市石山。観音の霊場石山寺がある）と見る。［考］参照。

大意 この那谷寺の立つ石山は、近江の石山の石より白いといわれるが、まことにその通りだ。蕭殺とした秋の風が今あたりを吹き渡っている。

考 「山中の温泉にゆく程、しら根が嶽あとに見なしてあゆむ。左の山際に観音堂あり。花山法皇卅三所順礼とげさせ給て後、大慈大悲の像を安置したまひて、那谷山と付給とかや。那智・谷汲の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまぐ〳〵に古松うへならべて、萱ぶきの小堂岩の上に作りかけて、勝所の地也」（『鳥の道』）「那谷の観音にて」（『泊船集』）等の前書があり、『鳥の道』のは『ほそ道』の文と略々同じである。即ち『ほそ道』では、小松から山中へ赴く途中那谷へ参詣したように書かれているが、実際は入湯後再び小松へ行く際に立寄ったのであって、山中への途中とすれば「左の山際」はその通りであるが、「白根が嶽跡にみなして」というのは、入湯後に小松へ向った時の状況が混淆しているのであろう。真蹟懐紙は細道の道中書きで、当時小松の酒造業関戸家の主人が芭蕉を那谷寺に案内し、その礼に書き与えられたものという。現在は所在不明であるが、関戸家に伝来したものなので、もとより信憑性が高い。これに対して下五を「秋の霜」とした形は、『やまなかしう』（可大撰、天保十年刊）の涼菟の句の前書中に見え、明らかな誤伝である。

『ほそ道』にも描写されているように、那谷寺は灰白色に曝れた奇岩が多く、岩窟に観音を祀った御堂がある。由

緒ある観音の霊場として、以前から近江の石山寺と比較されていたらしく、『射水川』（十丈撰、元禄十四年刊）所収十丈の句の前書に「此那谷の石のたゝずまゐ都の石よりもまされりといひ伝へしが、古翁一とせ此山に詣で玉ひしに、石山の石より白し秋の風といふ句を今猶おもひ出でられて」とあり、『東六鳳』（宇中撰、宝永五年刊）に見える「自生山花見記」に「此山のけしきは石山の石よりしろき石にして、牛に似、仏にも似て、岩窟又あまた所あり」という記事も併せて、この山の石が近江の石山の石より白いといわれていたことが証拠立てられる。こうなると芭蕉の句の「石山」を近江の石山とする見方を否定することは著しく無理と考えざるを得ない。那谷の石山を詠んだことは、前書等によって分るのだから、何が白いのかは表面に出さなくとも咎め立てすべきことではなかろう。他と比較した発想も、既に『句選年考』の指摘する如く、越前種の浜での句「寂しさや須广にかちたる浜の秋」（Ⅲ548）の例もあり、異とするに足らない。

更に、句全体の内容の問題として、「あきの風」の位置をどのように解するかは一層大切である。秋の風をこの句の主題と見、それを「白し」と把握したところに価値を見出そうとする説は、今に至るまで多いけれども、そうした解釈をすれば、「那谷の石山は近江の石山の石よりも白く、其処に吹く秋風はその石よりも更に白い」という三段にわたる比較になる。色を四季に配して秋を白とするところから、秋風を「白し」と把握することは、写実を超えた表現として許されようが、石が他処よりも白く、秋風が更にそれより白いというような比較は、詩としては全く無意味に思えてならない。この句に於ける「あきの風」は、那谷の石山に対する配合であり、句の世界の背景をなすものであって、読者は身にしみる秋風の本情を想起し、これを石山に配してその気分を味わえばよいのである。従って全体の解釈は、［大意］にまとめたようなところに落着くと思う。

――古来秋風の色を白に配するが、この那谷寺の建っている石の山に吹きつける秋の風は、石の肌よりも、もっと白く冷徹な感じがする。境内には、おぼえずえりを正すような森厳の気がたちこめている。――……秋風がテ

ーマとなっている。秋風を「白し」ととらえたのは、中国の「素秋・白帝」の語や歌語の「色なき風」の先蹤を受けたものだが、「石より白し」と言い切ったところに、芭蕉の感覚の冴えと時所に応じた俳諧がある。（尾形仂氏、角川文庫『新訂おくのほそ道』）
という見方も一解ではあろうが、私は採らない。

532

庭掃て出ばや寺に散柳　（おくのほそ道）

鳥の道・東西夜話・宇陀法師

庭はいて出ばや寺にちる柳　（泊船集）

秋季（散柳）。

語釈 **○庭掃て出ばや**　「庭掃きて出でばや」。庭に散った木の葉を掃き清めて辞去したい、の意。「ばや」は、自己の願望をあらわす。「病僧の庭はく梅のさかり哉　曾良」（『続猿蓑』下）「**Faqi, qu, aita.**」（『日葡辞書』）。**○散柳**　「散る柳」。秋になって柳の葉が黄ばみ、風の吹くままに散るさまをいう。枝がなよやかに靡き、葉も吹き乱れて一斉に散る。「柳ちるは初秋なり。惣ー別名木のちるは炑也」（『御傘』）「雨やみて雲のちぎるゝ面白や　落梧　柳ちるかと例の莚道　野水」（『あら野』員外）。

大意 一宿の御恩報じに、庭を掃き清めて辞去したいものだ。折しも寺の境内には柳の葉が散り敷いている。

考 「大聖寺の城外金昌（ママ）寺といふ所にとゞまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺にとまりて／終宵秋風きくやうらのやま／と残る（ママ）。一夜の隔千里に同じ。我も秋風を聞て衆寮に臥ば、あけぼのゝ空ちかふ読経の声澄まゝに、鐘板なつて食堂に入。けふは越前の国へと心ざし、少卆（ママ）にて堂下にくだるを、若僧共紙硯をかゝへ、階のもとまで追来る。おりふし柳ちれば」（『鳥の道』）「なにがし全昌寺といふ寺は、先師一夜の秋をわびて」（『東西夜話』）等の前書があり、前者は『おくのほそ道』の文章と略々同じである。芭蕉は北枝と共に那谷寺に詣でた後小松に至り、それから大聖寺

（現加賀市）に赴いた。その泊った全昌寺は、今の加賀市大聖寺神明町にある曹洞宗の寺院で、山中の和泉屋の菩提寺であり、五世住職月印は和泉屋から出た人であったという。そうした縁故からこの寺に泊ることになったのであろう。八月五日以降曾良とは別行動になったので、芭蕉の動静に関しては『随行日記』の裏付けがなくなるのであるが、大聖寺城外の全昌寺に宿ったことについて、『ほそ道』に「曾良も前の夜此寺に泊て」「一夜の隔千里に同じ」とあって、これを文字通りに受取れば、曾良がこの寺に泊った翌晩に一泊したと見られる。曾良の『日記』には五日の条に「大正侍（ママ）ニ趣。全昌寺へ申刻着、宿。夜中雨降ル」とあり、六日の晩もなお滞在して、翌七日の「辰ノ中刻全昌寺ヲ立」っている。『ほそ道』の記述をそのままに、七日夜芭蕉がこの寺に泊り、八日朝に「庭掃て」の句が成ったと見られなくはないが、それを基準に以後の旅程を考えると、福井と敦賀の間に凡そ四日を費したことになり、この間は二日乃至三日の行程が普通と思われるのに著しく不自然の感を免れない。恐らく芭蕉の二度目の小松滞在は一、二泊といった短いものではなかったのであろう。『ほそ道』にいう「一夜の隔」を文字通りにとるのは、日程上矛盾を生ずるので妥当とは思えず、従って当面の句が成った時も精確には分らない。九日以降一、二日の間に成ったとだけ推定しておく。但し、それは『ほそ道』の記述を事実とする前提に立ってのことであって、

『おくのほそ道』本文によれば芭蕉が僧に書き与えた真蹟があるはずだが、全く伝聞がなく、その他の真蹟類も絶無である。芭蕉の生前この句について門人たちの論及もなく、殊にこの時芭蕉に随伴していた北枝が編んだ『卯辰集』（元禄四年刊）に逸していることは、この句が旅行中の制作ではなく、『おくのほそ道』の執筆時の作であることを思わせる。（井本農一博士『芭蕉の文学の研究』）

という別の見方が成り立つ余地も勿論ある。

『ほそ道』の「掃て」という表現は「はきて」「はいて」両様に訓め、『鳥の道』には「はきて」、『泊船集』には「はいて」と仮名書きしている。『鳥の道』の原拠は『ほそ道』素龍清書本と推定されるから、撰者の判断で「掃て」

を「はきて」と訓んだわけであろう。『泊船集』は格別の根拠があったとも思われないので、その全般的杜撰さからして「はいて」の訓みを採るのは妥当であるまい。この部分の訓み方としては、『鳥の道』に従うのがよいと思う。『宇陀法師』に「庭払て」とあるのは、「掃」の代りに「払」の字を用いたまでである。また、井筒屋の元禄板本『ほそ道』には「庭掃て出るや」という異形が見えるが、素龍清書本をもとに板行された板本であるから、「出る」は明らかに誤りと認められる。

全昌寺を辞去するに際して僧達に句をせがまれ、即興に作った挨拶句である。『ほそ道』にあるように、丁度その折境内の柳の葉が散ったので、それを題材にしたまでであろう。寺に泊った行脚僧は一宿一飯の恩を謝して、臥処や庭を掃除して辞去するのが礼である。それを踏まえて、自分も庭に散り敷いた柳の葉を掃いて失礼しましょうと興じたのであって、実際に庭掃除をしたわけではない。「ばや」にあらわれた興を玩味すべく、軽い味の挨拶句として成功している。古注に引く漢籍や仏書に見える故事は、句の解釈には直接の関わりの乏しい贅説に過ぎない。

鳥の道・俳諧古今抄

533

物書て扇引さく餘波哉　（おくのほそ道）

松岡にて翁に別侍し時、あふぎに書て給る

もの書て扇子へぎ分る別哉　（卯辰集）

加州北枝に別れたまふとて

もの書て扇子引さく名残哉　（泊船集）

北枝にわかるゝとて

物書て扇へぎ分る名残哉　（奥細道付録）

秋季（扇捨つ）。

語釈 **○物書て扇引さく**　「物書きて扇引き裂く」。記念に一筆したため、貼り合わせた扇の地紙を二つに裂いて一方を記念に贈る意。『卯辰集』の「へぎ分る」という表現は、「引さく」ことを具体的に理解する上で参考になる。ここは、扇の合せ目をはがすことに、秋になって不要になった扇を捨てる「捨て扇」（扇置く）の意を掛けて季語とした。「扇を置は妖也。但句躰と新式にあれ共、句躰を聞わくる宗匠末代に是なき故、諍論出来はあしき間、置と云字さへ句中にあれば、皆妖にするがよきなり。……団も……置とすれば妖也」（『御傘』）「筆をとれば物かゝれ、楽器をとれば音をたてんとおもふ」（『徒然草』百五十七段）「つく〴〵と絵を見る秋の扇哉　加賀小春」（『あら野』巻四）「過なきあせにしづむ武士　怒風　いとおしき人の文さへ引さきて　不知」（『桃の白実』）「Monocaqi.」「Vôgui.」「Fiqisaqi, u, aita.」（『日葡辞書』）。**○余波**　「ナゴリ」。「波残り」の語源に忠実な用字法。ここは「名残を惜しむ」意で「別れ」に同じ。既出（Ⅰ *243*）。「みじか夜を吉次が冠者に名残哉　其角」（『猿蓑』巻二）。

大意　別れに当って記念に一筆したため、その貼り合わせた扇を二つに裂いて贈り、名残を惜しむことだ。

考　『鳥の道』には「金沢北枝といふもの、かりそめに見送りて此所までしたひ来れる。此風景すごさずおもひつけて、折ふし哀なる作意など聞ゆ。今すでに別にのぞみて」と前書があり、聊か舌足らずながら、『おくのほそ道』の文章と略々同じである。『ほそ道』によれば、芭蕉と北枝は全昌寺を辞してから越前に入り、吉崎の入江（今の福井県の最北端、北潟湖の北部。坂井郡芦原町浜坂）を舟で渡って名所の汐越の松を訪ね、その日は「丸岡天龍寺の長老古き因あれば尋」ねて一泊した。この「丸岡」は「松岡」（現福井県吉田郡松岡町）の誤りで、曹洞宗の清涼山天龍寺は同町春日に現存する。芭蕉は北に接する坂井郡丸岡町と混同したのであろう。金沢から随従して来た北枝と別れたのはその翌朝のことで、『卯辰集』には前掲の句文の後に、「笑ふて霧にきほひ出ばや北枝／と、なく〳〵中侍る」と脇も書き添えられている。恐らく「扇子へぎ分る別」が初案であって、「へぎ分る」は、扇の貼り合わされた地紙を剝がすことを日常的用語で具体的に述べたものだった。しかしこれでは捨扇の趣意が必ずしも徹底しないし、詩語として「なつかしく言ひ取る」配慮から、『ほそ道』執筆に際して「扇引さく余波」と改めたものと思われる。

『泊船集』の「扇子引さく」は、『卯辰集』と『ほそ道』の句形を混同したらしく、『奥細道付録』には「此真蹟扇面、今大坂一鼠所持す」と注記があるが、時代の降るものだけに、信憑性に問題があろう。『一葉集』に「物書て扇ひきさくわかれかな」とあるのも信じ難い。

「扇子へぎ分る」「扇引さく」というのが実際の事であったかどうか。貼り合わせた地紙を体裁よくへぎ分けることは、そう容易なことではあるまいし、「あふぎに書て給る」（『卯辰集』）と前書にある通り、実際には唯扇に書いて与えただけなのであろう。ただこれらの語に別れ難い気持を籠め、且つは秋季の「捨扇」の働きを持たせたまでなのである。全体の解としては、

夏の間使いなれた扇も、もう秋になり、捨てる時なので、紙面に無駄書きをしたあと、さて引き裂いて捨てようとすると、さすがに名残が惜しまれて、たやすくは引き裂けないことである。ちょうどそのように、北枝との別れも、もう別れるべき時だと思い、別れの句も書いたのであるが、どこやら名残が惜しまれて、容易に別れがたいことである。（『古典文学全集・松尾芭蕉集』井本農一博士）

という風に取ると、捨扇の趣に惜別の意を寓したことになる。私も嘗てはそのような解を採っていたが、改めて考えて見るに、譬喩と解するよりは、句の表現のままに、扇を引き裂いて（へぎ分けて）それぞれに記念とすると見た方が良いと思うようになった。前述したように、それが必ずしも実際の事でなくてもよいので、「句が表現した詩の世界に於いては、芭蕉は実際扇をひき裂い」（『続芭蕉俳句研究』阿部次郎氏）ているのである。気軽な句という受取り方もあるが、「へぎ分る」或いは「引さく」にあらわれた惜別の情はかなり痛切なものに感ぜられる。『ほそ道』の前の文章からの続き方を見ても、北枝と別れ難い気持が強く出ているとすべきであろう。

福井洞哉子をさそふ

534 名月の見所問ん旅寐せむ (荊口句帳)

越前福井等載に対して

名月の名どころ問ん月見せん (奥細道付録)

秋季(名月)。

語釈 ○**福井洞哉子** 「フクキトウサイシ」。「洞栽」は越前福井(現福井市)の俳人。『おくのほそ道』によれば、十余年前江戸に芭蕉を訪ねたことのある旧知である。『ほそ道』では「等栽」と書かれているが、自筆には「洞哉」、『猿蓑』の「几右日記」には「等哉」とあって、「洞哉」が正しいか。福井住の貞門俳人神戸可卿と同一人とされるが、斎藤耕子氏は誤りと見ておられる(『若越俳史研究』33号)。生歿年は未詳であるが、元禄十三年に雲鈴が北陸行脚した頃は既に故人であった。「子」は軽い敬称。○**さそふ** 「誘ふ」。同行を勧誘したのである。「爰にいつも同道仕るおかたが御ざるほどに、さそふて参らふ」(狂言「連歌毘沙門」)「Fitouo sasô.」(『日葡辞書』)。○**名月の見所問ん** 「名月の見所問はん」。八月十五夜の中秋の名月の見所である歌枕を訪ねよう、の意。「問」は訪問の意であろう。名月のどういう所が良いかを人に訊ねよう、或いは「名月で世に知られた名所を教えて貰いたいものだ」(加藤楸邨氏『芭蕉全句』)というのではない。『ほそ道』福井の条には「名月はつるがのみなとにとたび立」とあり、「名月の見所」とは敦賀(現福井県敦賀市)の地を指すのである。「はかられし雪の見所有り所　野水」(『あら野』巻一)「顔にこぼるゝ玉笹の露　里圃　此盆は実の母のあと問て　馬莧」(『続猿蓑』上)。○**旅寐** 「タビネ」。旅に日を重ねること。既出(I *251*)。

大意 さあ、二人で中秋の名月を見るのに恰好の歌枕を訪ねましょう。旅寝をしようじゃありませんか。

考 『ほそ道』には、北枝と別れて後、曹洞宗の総本山永平寺に参詣したことを述べた次に、福井に赴いて等栽を訪う有名な一段がある。

福井は三里計なれば夕飯したゝめて出るに、たそかれの路たど〳〵し。爰に等栽と云古き隠士有。いづれの年にか江戸に来りて予を尋。遥十とせ余り也。いかに老さらぼひて有にや、将死けるにやと、人に尋侍れば、いまだ存命してそこ〳〵と教ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕皃へちまのはえかゝりて、鶏頭はゝ木ゝに戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと門を扣ば、侘し気なる女の出て、いづくよりわたり玉ふ道心の御坊にや。あるじは此あたり何がしと云ものゝ方に行ぬ。もし用あらば尋玉へといふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、やがて尋あひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立。等栽も共に送らんと、裾おかしうからげて、路の枝折とうかれ立。

右の記述と当面の句の前書を参照すれば、芭蕉が同行を誘って等栽が案内役になったと見られる。敦賀着は八月十四日夕であり、等栽方に二泊したとすれば、この句は凡そ八月十日前後の作ということになる。但し、出典たる大垣市立図書館蔵の『荊口句帳』は、大垣の蕉門宮崎荊口より出た伝写本であって、当面の句はその冒頭の路通の序を付した「芭蕉翁月一夜十五句」（一句欠）に見える。路通序には、

……漸中秋十五夜には敦賀の湊までたどり着給ひけり。此辺には名有所数〳〵なれども、雨うち降、月も一きは寂しげにて、むかしいまの事などおぼし出しつゝ物し給ふ十五の月をならべて旅泊の興とす。

云々とあり、実際の成立は敦賀滞在中とすべきであろう。これらの句の中には種の浜での句も含まれているから、「中秋十五夜」一晩の作ではなかったようである。

『ほそ道』の文で見ると、等栽は気軽で飄逸な人柄だったらしい。芭蕉も敦賀での月見にあこがれて気持が浮き立っている。そんな心のはずみが、句の「見所問ん旅寐せむ」という調子づいた表現に反映しているが、句は唯即興として体を成しているというに過ぎない。『奥細道付録』の「名どころ問ん月見せん」は、「名」や「月」を繰返して無駄が多く、恐らくは誤伝であろう。

玉　江

535　**月見せよ玉江の芦をからぬ先**（荊口句帳）

昼寝の種・泊船集・蕉翁句集・奥細道付録

秋季（月見）。

語釈　○**玉江**　「タマエ」。福井の郊外花堂（はなんどう）（現福井市内）南部にある歌枕で、月と芦で名高い。あたりの虚空蔵（こくぞう）川にかかる橋を玉江橋と呼ぶ。「福井と麻生津との間に有。福井の町を上の方へ出はなれ、二町ばかり行ヶば、赤坂といふ所あり。是を過て往還に石橋三つあり。其中の橋の高欄の付たるを、玉江の橋の蹟として、此川を右の玉江なりと云」（梨一『奥細道菅菰抄』）。○**芦をからぬ先**　「芦（あし）を刈（か）らぬ先（さき）」。芦は水辺に生えるイネ科の多年草で、晩秋になって枯れたのを刈り取る。それをする前に、の意。「芦刈」を秋季とするのは近代になってからである。「玉江こぐあしかりを舟さしわけて誰をたれとか我は定めん」（『後撰集』巻十八、よみ人しらず）「嬉しさや寐入らぬ先のほとゝぎす岐阜杏雨」（『あら野』巻一）「Saqi.」（『日葡辞書』）。

大意　玉江の地に名高い芦も穂に出て見頃。この芦を刈り取る前に月見をしなさい。

考　「玉江にて」（『泊船集』『蕉翁句集』）「おなじく玉江にて」（『奥細道付録』）等の前書がある。前記「芭蕉翁月一夜十五句」の一で、『荊口句帳』には次の阿曾武津の橋の句の後に記されており、『おくのほそ道』でも「あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり」とあるが、玉江の位置はその橋より福井寄りである。『蕉翁句集』は中七を「玉江水芦を」と誤り、華雀の『芭蕉句選』も下五を「刈ぬべき」としているが、何れも問題にならない。

福井を出て敦賀までの旅は、『ほそ道』の道行文もはずんだ調子であるが、この句も興に乗っている。実際の旅の気分の反映であろう。名所の芦の風情を添えて月見をせよと、人々に呼び掛ける体に趣向したのである。

浅水のはしを渡る。時俗あさうづといふ。清少納言の橋はと有一條、あさむつのとかける所也

536
あさむつや月見の旅の明ばな(ママ)れ　（其袋）

昼寝の種・泊船集・金毘羅会・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・奥細道付録

阿曾武津の橋
あさむつを月見の旅の明離　（荊口句帳）

秋季（月見）。

語釈　**○浅水のはしを渡る**　「浅水(あさむつ)の橋(はし)を渡(わた)る」。「浅水のはし」は、福井の南郊、今の福井市浅水(あそうず)町の浅水川に架かる橋。北陸街道の古い歌枕である。「あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり」（『おくのほそ道』）「Faxiuo vataru.」（『日葡辞書』）。**○時俗あさうづといふ**　「時俗(しぞく)」は、その時代の一般の人々。また、その習わし。昔「あさむつ」と呼ばれていたものが、芭蕉の時代には音韻転化で「あさうづ」（発音は「アソウズ」であろう）と呼ばれている、というのである。「時俗」の発音は、中世には「シゾク」だったと思われるが、元禄期にどうであったかはよく分らない。「瑜伽(ユガ)三蜜の法雨は、時俗を尭年の昔にかへさん」（『平家物語』巻七）。**○清少納言の橋はと有一条**　「清少納言(せいせうなごん)の橋はと有(あ)る一条(いちでう)」。「清少納言」は、平安中期一条天皇の中宮定子に仕えた女房。ここではその著『枕草子』を指す。その六十四段に橋の名を列挙した冒頭に「はしは、あさむつのはし」と見える。「みな月のしほ鯨といふものは、清少納言もゑしらざりけむ」（『葛の松原』）「前代の御時、辛卯の八月十七日進講訖りし後、疑(ギ)獄(ゴク)一条をしるし出されたりけり」（『折たく柴の記』下）「Ichigiô, nigiô, iccagiô, nicagiô」（『日葡辞書』）。**○あさむつのとかける所也**　「あさむつのと書(か)ける所也(ところなり)」。この橋は清少納言が「あさむつの」と書いた、その橋である、の意。**○あさむつや**　橋の名の「あさむつ」に時刻の「朝六(あさむ)つ」（明け六つ）を言い掛けた。今の午前六時に当る。午前・午後の零時をそれぞれ「九つ」とし、一刻二時間として八つ七つと数を減らして数えて行く。午後六時は「暮(くれ)六つ」である。『蕉翁句集』は初五を「朝六ッや」と表記している。「朝六や誰も通らず秋の風」（『白雄句集』巻三）「Mutçu.」（『日葡辞書』）。**○月見の旅**　敦賀での月見を目的にした二人連れの旅を指す。

○**明ばなれ** 「明け離れ」。日が出て夜がすっかり明けきること。「明けはなれ」であれば、動詞の中止法と取る余地もあるが、『其袋』のように濁ってよむ場合には、明らかに名詞である。

大意 月見の旅に出て丁度その朝の明け離れる朝六つの時分、所も「あさむつ」の橋を渡ることだ。

考 「芭蕉翁月一夜十五句」の一。荷兮の『昼寝の種』（元禄七年刊）にも「一年芭蕉越路にいたり、古き名所を尋て月の十句を或人かたりけれど、過行年月の程経て覚束なし。耳の底纔にのこるを三四句しるしとゞめぬ」として、この句には「浅水橋」と題している。『泊船集』『金毘羅会』の前書は『其袋』と略々同じく、『奥細道付録』には「同じく浅むつの橋にて」と前書がある。「あさむつを」はやや不安定な措辞で、「あさむつや」が後案であろう。「あさむつの橋」は「浅水」「麻生津」等いろいろに書かれ、「朝六」という書き方もあったようである。句は同音の縁で「朝六つ」に掛けて興じたまでであるが、気持のはずみはよく出ている。「終夜月を眺め明したる趣を、此明はなれと云詞に顕はす」（信天翁『笈の底』）といった解は、敦賀の月見を期した細道の旅の場合に相応しくない。

ひなが嶽

537 あすの月雨占なはんひなが嶽 （荊口句帳）

秋季（月）。

語釈 ○**ひなが嶽** 「日永嶽」。「比那が嶽」「雛ヶ岳」等とも書き、今の武生市東南部に聳える日野山を指す。標高七百九十四・八メートル、越前富士と呼ばれ、山頂に日野三所権現が祀られている。「漸白根が嶽かくれて比那が嵩あらはる」（『おくのほそ道』）。○**あすの月** 「明日の月」。八月十五夜中秋の名月を、前日の十四日から見ていう。○**雨占なはん** 「雨占なはん」。雨が降るかどうか、天候の成行を前以て占なって見よう、という意。「よひ事かあしひ事か、うらなふてみてもらはふと存る」（狂言「くさびら」）「Vranai, ŏ, ŏta.」（『日葡辞書』）。○**ひなが嶽** 「ひ」に「日」を利かせて、上の「雨」に対した。

大意 明日の中秋の名月は雨かどうか、あの日永嶽の様子で占なって見よう。

考 「芭蕉翁月一夜十五句」の一。『ほそ道』によれば、芭蕉は十四日夜敦賀に着いた時も、殊に月が好いので「あすの夜もかくあるべきにや」と宿の亭主に尋ねている。月見を楽しみにしている雅客にとって、名月の夜の陰晴は心尽しの種であった。そういう風狂の情を、「雨占なはん」と興じた調子に託したのである。日永嶽に祀られた日野三所権現は即ち飯綱（いづな）権現で、飯綱の法は一種の魔法だから、天候を自在に支配する通力の連想が、或いはあるかも知れない。『句解参考』に下五を「比那が嶋」としたのは、『ほそ道』素龍清書本に「比那が嵩」とある「嵩」の字の崩し方が「嶌」（嶋）に紛れ易いところから、それに類した経路による誤伝であろう。

湯　尾

538　月に名を包みかねてやいもの神　（昼寝の種）

荊口句帳・泊船集・蕉翁句集・奥細道付録

秋季（月）。

語釈 ○**湯尾**　「ユノヲ」。今の福井県南条郡今庄町湯尾。ここから今庄（今庄町今庄）へ通ずる山越えの鞍部に湯尾峠があり、峠の茶屋で疱瘡除けのお守りに孫杓子と称する杓子を売っていた。そこで句の中に「いもの神」が出るのである。「湯尾峠はわづかなる山にて、巓に茶店三四軒あり。何れも孫嫡子御茶屋と暖簾にしるして疱瘡の守りを出す。いにしへ此茶店のあるじ疱瘡神と約して、其子孫なるものは、もがさのうれへなしと云伝ふ。孫嫡子とは、其子孫の嫡家と云事なるべし」（梨一『奥細道菅菰抄』）。○**名を包みかねてや**　「包（つつ）む」は秘し隠すこと。隠しきれないで、このように名を現わしているのだろうかなあ。「や」は「五月雨の降のこしてや」（Ⅲ*489*）と同じく疑問に詠嘆を含み、下に「斯くある」といった言葉が略されている。「まつすぐに御名のり候へ。何をか包み申すべき」（謡曲「藤栄」）「**Tçutçumazu monouo yŭ.**」（『日葡辞書』）。○**いもの神**　「疱瘡の神（いものかみ）」。疱瘡（天然痘）を司どる神。この病にかからぬよう、また軽く済むように、人々が祈願をこめる。中秋十五夜には里芋を煮て食う習わしがあるので「芋

名月」の称があり、ここも「芋」を掛けているであろう。「二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑り子を、寝耳に水のおし来るごときあらくしき疸の神に見込れつゝ」(一茶『おらが春』)「Imo.」(『日葡辞書』)。

大意　普段は名を隠している疱瘡の神も、いもに縁あるさやかな月の光には隠しかねたか、このように名を現わしていることよ。

考　「木の目峠、いもの神やど札有」(『荊口句帳』)「おなじく湯尾峠にて」(『奥細道付録』)等の前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』の前書は『昼寝の種』と同じである。『荊口句帳』の「芭蕉翁月一夜十五句」の前書は古い資料ではあるが、「木の目峠」(今の南条郡今庄町二ツ屋から敦賀市の新保(しんぼ)へ越える峠)は疱瘡のお守りとは関係がなく、これはそれより福井寄りの湯尾峠の誤りと考えざるを得ない。『おくのほそ道』には「玉江の蘆」云々の次に「鶯の関を過て湯尾峠を越れば」と書かれている。

「月」と「芋」の縁に興じた趣向で、「名」を言い立ててはいるが、実は月光に照らされて「いもの神」が正体を現わすおかしみであろう。疱瘡の神様だから疱瘡顔だろうという笑いがあり、その点、金峯山に橋を架ける作業の時、醜貌を恥じて夜だけ出て働いたという葛城の一言主神と同様の趣がある。「猶みたし花に明行神の顔」(Ⅱ *379*)を思わせるけれども、当面の句はそれよりも砕けた軽いおかしみが主となり、また、「月の光の明るさを直接描いていないにもかかわらず、奇妙なまでに明るい月光が感ぜられ、不思議なくらい親しさのあふれた発想」(加藤楸邨氏『芭蕉全句』)によって成功している。芭蕉独得の「てや」の、軽い中に粘りのある表現の働きも見逃し難い。

539　　燧が城

義仲の寐覺の山か月かなし　(荊口句帳)

昼寝の種・泊船集・蕉翁句集・奥細道付録

秋季（月）。

語釈　○**燧が城**　「燧が城（ひうちがじやう）」。今の福井県南条郡今庄町今庄の南方、藤倉山が東へ延びる支脈の東端、海抜二百六十八メートルの山頂にある城跡。寿永二（一一八三）年四月、木曾義仲がここに立て籠って平家軍を迎え撃ったが、裏切りによって攻略された古戦場で、『平家物語』『源平盛衰記』にその記事が見える。曾良の『日記』八月九日の条（二二八頁）参照。「Fiuchi.」「Iō. Xiro.」（『日葡辞書』）。○**義仲の寐覚の山か**　「義仲（よしなか）の寐覚（ねざめ）の山（やま）か」。「義仲」は源平時代の武将。頼朝や義経の従兄弟に当る。北陸で挙兵して都から平家を追い落したが、その軍兵が京で暴虐を極め、頼朝から派遣された範頼・義経の軍と戦って、寿永三年正月近江の粟津で敗死した。「寐覚」は、眠りから覚める意で、その折に月を眺めるわけであるが、それと共に、寝たり覚めたり、ここで月日を送った意を含む。「か」は、疑問に詠嘆を兼ねた助詞。○**月かなし**　「月悲（つきかな）し」。義仲の運命を思うと、月のたたずまいも悲傷の情を誘うのである。

大意　ここが義仲の立て籠って、寝覚めに月を見た山なのかなあ。それを思うと、山にかかる月も悲しく眺められる。

考　「燧山」（『昼寝の種』『泊船集』『蕉翁句集』）「同じく燧が城」（『奥細道付録』）等の前書がある。「芭蕉翁月一夜十五句」の一。『おくのほそ道』の文には「鶯の関を過て湯尾峠を越れば燧が城」と見える。芭蕉は湯尾峠の向側に燧が城の址を眺めたのであろう。

このあたりが義仲の成長した地方で、朝夕城址のある山を眺めたのだという解は誤りで、義仲の育ったのは木曾、燧が城は旗上げ後の古戦場である。ここに立て籠って寝覚めに月を眺めたのでなければならない。芭蕉は日中に城址の山を見たのであろうから、月の夜景乃至明け方の景色は、作者の想像に属する。

芭蕉は義仲をはじめ義朝・義経など非運の武将が好きだったらしく、彼等の運命に同情し、万斛の涙をそそいでいる。後に義仲を葬った粟津の義仲寺境内に草庵を営み、墓所もここに指定した程で、浅からぬ縁があった。この句にも非運の英雄を偲ぶ懐古の情が溢れており、「寐覚の山か」について、「懐古の情でありながら、現実感を持たせる語で、こゝに芭蕉の力がうかがへると思ふ」（『芭蕉講座』発句篇）といわれた加藤楸邨氏の鑑賞も良い。趣向・表現とも

「月白き師走は子路が寝覚哉」(Ⅱ265)と類似するけれども、遥か古代の異国の人子路よりも、義仲は作者にとって格段に親近性が強く、それだけ感情の燃焼度の高いものになっている。

越の中山

540 中山や越路も月はまた命　（荊口句帳）

秋季（月）。

語釈 ○**越の中山**　「越の中山」。歌枕。『和漢三才図会』に「過二木目峠一出二於府中一之処也。東行則至二帰山一」とあり、「木目峠」（木ノ芽峠）は北陸街道の二ツ屋（福井県南条郡今庄町二ツ屋）より新保（敦賀市内）へ越える鞍部にある。其処を過ぎて府中（武生市）へ出るといっても、離れ過ぎていて不精確であるが、曾良の『日記』元禄二年八月九日の条にも、「今庄ノ宿ハヅレ、板橋ノツメヨリ右ヘ切テ、木ノメ峠ニ趣、谷間ニ入也。右ハ火うチガ城、十丁程行テ左リ、カヘル山有。下ノ村、カヘルト云」とあり、今の今庄町南今庄に嘗ては帰村があって、その南の山が歌枕の「帰山」に比定されている。従って帰山の西方がそれとすれば、凡そは今の木ノ芽峠のあたりが越の中山と考えられよう。越後の妙高山をいうとする説もあるが、これはこの時福井から敦賀まで芭蕉の通った道筋とは全くちがっている。「かりがねはかへるみちにやまよふらんこしのなかやま霞へだてて」（『山家集』上）。○**中山**　右の「越の中山」のこと。○**越路**　「コシヂ」。「越」は北陸地方の古称。その方へ行く道の意から、北陸地方を指すこともある。ここは後者。「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」（『おくのほそ道』）「Coxigiye vomomuqu.」（『日葡辞書』）。

大意 佐夜の中山ならぬ越路の中山でもまた、私は命あって月を眺めることだ。

考 「芭蕉翁月一夜十五句」の一。有名な西行歌「年たけて又こゆべしと思ひきやいのちなりけりさ夜の中山」を背景にして、同じ「中山」という名に興じた趣向である。西行は「いのちなりけり」と歌ったが、自分も命あって、この中山で越路の月を眺めるといったのであって、今栄蔵氏の指摘される如く、野ざらしの旅の時、佐夜の中山で

「馬に寐て残夢月遠し茶のけぶり」（Ⅰ189）と詠んだことも、想起されているであろう。芭蕉も処こそ違え、中山を二度越えて月の句を詠んでいるわけである。西行の歌に寄りかかり過ぎて、句の出来は余り香しくない。『句解参考』に初五を「中山の」と伝える句形も問題にならぬ。

氣比の海

541　國〳〵の八景更に氣比の月（荊口句帳）

秋季（月）。

語釈　○気比の海　「気比の海」。今の敦賀市のうち、昭和初期に河道を移す前の旧笙ノ川（庄ノ川）以東、気比神宮周辺地域は、古代の気比の庄の地といわれ、河口には気比の松原もある。「気比の海」は現在の敦賀湾と考えてよい。○国〳〵の八景　「国〳〵の八景」。中国に景勝の地として名高い瀟湘八景があり、我が国でもそれにならって近江八景をはじめ諸国で名勝八景が選定されている。そのことを指した表現。「その上梅の名所〻〻、国〻処は多けれども」（謡曲「難波」）「日もはやにしにいりあいの、ごくらくくじのばんしやうと、ききしにまさる八けいや」（『松の葉』第二巻、「鎌倉八景」）「Cuniguni.」「Facqei. Yatçuno qei.」（『日葡辞書』）。

大意　国々の八景を見た上に、今この海上に見事な気比の月を眺めることよ。

考　「芭蕉翁月一夜十五句」の一。ここからは八月十四日に敦賀に着いてからの、その地の印象が中心となる。「近江八景などのように国々に勝れた景は多いが、更にそれに加えてこの気比の海の月は落すことのできぬ景というべきだ」（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）とも解し得るが、「八景」で切れて「更に」と続くあたりには、芭蕉の旅での行動を思わせるところがあるので、［大意］に記したように取るのが良いと思う。「景」「気比」の同音を繰返し、全体にはずむよ

うな調子はあるものの、余り上出来の句ではない。『句解参考』に初五が「国〳〵や」とあるのは誤伝であろう。

元禄二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣、遊行上人の古例をきく　――荆口句帳・おくのほそ道・泊船集・四幅対

542　月清し遊行のもてる砂の上　（猿蓑）

氣比のみや

なみだしくや遊行のもてる砂の露　（真蹟短冊）

月きよし遊行のもてる砂の露　（真蹟短冊）　――其袋

秋季（月）。

語釈　**○つるがの湊**　「敦賀の湊」。今の福井県敦賀市の港。敦賀湾を控え、日本海に面した良港で、古くから京の北の玄関口として発展し、官物が此処に集中した。近世に入ると、寛永から寛文期にかけて瀬戸内を経て大坂へ直行する西廻り航路が定着し、敦賀は漸次沈滞の時代を迎えるが、元禄頃はなお殷賑を極め、「北国の都」「北国の長崎」などと呼ばれていた。「名月はつるがのみなとにとたび立」（『おくのほそ道』）「**Funeuo minatoni iruru.**」（『日葡辞書』）。**○気比の明神に詣**　「気比の明神に詣で」。「気比の明神」は、今の敦賀市曙町にある古社。日本武尊・仲哀天皇・神功皇后・応神天皇・武内宿禰等を祀る。越前国の一ノ宮、北陸道総鎮守たる格の高い神社である。「早朝塩がまの明神に詣」（『おくのほそ道』）「**Meôjin. Aqiracana Cami.**」（『日葡辞書』）。**○遊行上人の古例をきく**　「遊行上人の古例を聞く」。「遊行上人」は、時宗の開祖一遍の弟子他阿を指す。彼が気比神宮と西方寺（現敦賀市神楽町一丁目。但し寺は昭和二十八年松島二丁目の来迎寺境内に移転された）の間が泥沼になっていて参詣に不便なのを歎き、海辺から砂を運んで自ら参道を造営した。後に三丁縄手と呼ばれるところである。この他阿の例にならって、代々の遊行上人（時宗の管長）が廻国の際には、此処で「お砂持」の行事が行われる。「遊行上人の御供の人に申すべき事の候」（謡曲「遊行柳」）「古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ玉ふ」（『おくのほそ道』）「**Yuguiô.**」「**Xônin.**」（『日葡辞書』）。**○遊行のもてる砂**　「もてる」は、「持てる」。前記「お砂持」の行事をいう。「はき庭の砂あつからぬ曇哉　荷兮」（『あら野』巻三）「**Suna.**」（『日葡辞書』）。

大意　昔遊行上人が自ら持ち運んだという白砂の上に、清らかな月の光が照らしている。まことに有難く神々しいさまだ。

考　「気比の宮へは遊行上人の白砂を敷ける古例ありて、この比もさる事有しといへば」（『其袋』）「同明神」（『荊口句帳』）「八月十四日、敦賀の津に宿をもとめて気比の宮に夜参す。むかし二世の遊行上人この道の泥土をきよめんとて、みづから砂をはこび給ふより、砂持の神事とて今の代にもつたへ侍るとかや。社頭神さびたるありさま、松の木の間に月の影もりて、信心やゝ骨に入べし」（『四幅対』）等の前書がある。『猿蓑』の前書と殆んど同じ前書を持つ、同句形を書いた革水文庫蔵の小懐紙も紹介されているが、これは筆蹟にやや疑問があるようである。『四幅対』（享保七年刊）に紹介された撰者東恕所蔵の句文は、『おくのほそ道』の初稿の一部とも思われるもので、それに「八月十四日」とあり、『ほそ道』の定稿にも、

……十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜月殊晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔遊行二世の上人大願発起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ、泥渟をかはかせて、参詣往来の煩なし。古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ玉ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主のかたりける。

として「月清し」の句を掲げていて、句が八月十四日夜に成ったことは疑いない。但し、『ほそ道』の句形は定案であって、それに先立つ初案があったのである。

「なみだしくや遊行のもてる砂の露」とした細道の道中書きと思われる短冊の句形が最もの初案で、「涙敷く」といったのは、他阿上人の慈悲の涙や、その徳行に感じた作者の涙を意味し、下の季語「露」とも関わりを持って、「月」はまだ現われていない。次の案が「月きよし……砂の露」の句形と思われ、これは『其袋』の撰者嵐雪に、敦賀あた

りから報じたのでもあろう。下五を「砂の上」とした定案形は、『荊口句帳』の「芭蕉翁月一夜十五句」に見えているから、これを路通が八月下旬に大垣で記録するまでには、もう定案に到達していたものと見られる。
この句が「遊行の持ちし」ではなくて「もてる」となっている為に、『続芭蕉俳句研究』ではテンスについて諸家の論があり、また『其袋』の前書に「この比もさる事有しといへば」とあるように、芭蕉来遊のこの年には、遊行第四十三世尊信が廻国の途次、砂持の行事が催されたという。しかし、芭蕉は広前の白砂に感を発して、遥かにこの行事の発端となった他阿の徳行に思いを馳せたのであって、

……砂運びの古例が代々の遊行上人によつて繰返されてゐたにしても、この場合彼の頭にあつたものは勿論最初に利他の為に砂を運んだ上人でなければならぬ。芭蕉はこの砂の難有さ尊さを身にしみて感じてゐるのである。眼前の砂が誰によつて敷かれたかといふことなどは丸で問題にせずに、最初の上人の衆生愛をこめたものとして見てゐるのである。(『続芭蕉俳句研究』)

という阿部次郎氏の説は、まことに肯綮に中っている。初案では「なみだしくや」のような他阿賛仰の表現が句面に出ていたが、推敲されて総ては月の清光に包摂されることになった。だからこの月は実景であると共に、此処に祀られた神々や他阿の高徳の象徴でもある。初五に「月清し」と言い切った句の姿はすっきりと立って、神々しい境内の雰囲気をもよく表わし得ている。

543 名月や北國日和さだめなき (其袋)

名月は敦賀に有て

秋季(名月)。

荊口句帳・おくのほそ道・陸奥衛・泊船集・四幅対

語釈　**○名月は敦賀に有て**　八月十五夜中秋の名月は敦賀で見た、の意。「有て」は「有りて」で、本来は「在」を用いるべき場合である。**○北国日和さだめなき**　「北国日和定め無き」。北国の天候が変りやすく、不安定であること。「北国」は、ここでは北陸地方を指す。「むかし都の町に北国の買問屋して、六角通に手前よろしき有」（『本朝桜陰比事』巻三ノ二）「内はどさつく晩のふるまひ　里圃　きのふから日和かたまる月の色　沾圃」（『続猿蓑』上）「比は三冬たつはじめのさだめなき空なれば、ふりみふらずみ時雨もたえず」（『十六夜日記』）「Foccocu. Qitano cuni.」「Fiyori. i, Tenqi. …… Fiyorigayoi. l, varui.」「Sadame nai.」（『日葡辞書』）。

大意　今宵は名月なのに、北国の天気は変りやすくて、雨とは全く残念だ。

考　「うみ」（『荊口句帳』）「敦賀にて」（『陸奥鵆』『泊船集』）「十五日雨ふりければ」（『四幅対』）等の前書がある。「芭蕉翁月一夜十五句」の一。『おくのほそ道』には、

……十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜月殊晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。……

十五日亭主の詞にたがはず雨降。

としてこの句を掲げてあり、『四幅対』の前書とも一致するので、雨月となった八月十五夜の作であることは疑いない。

この句意を、「けふよし日和よくとも、良夜いかならんと、月を案ずる心」（東海呑吐『芭蕉句解』）と、十四日の作として未来に取ったり、「日中の雨に失望した中にも、主人の云つた変化多き北国の天候といふ言葉に一縷の期待をつないで、我と我身を慰めてゐる」（服部畊石氏『芭蕉句集新講』）というような見方は誤解である。「名月や」と尋常に打出しておいて、「北国日和さだめなき」と無月に終った落胆を述べたところが俳諧で、おのずからユーモアが漂うのだ。『ほそ道』では、前夜の亭主の詞「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と、句の方の「北国日和さだめなき」

とが照応する形になっているが、前者は宋の孫明復の八月十四夜の詩に「清樽素瑟宜二先賞一、明夜陰晴未レ可レ知」（清樽素瑟宜しく先づ賞すべし。明夜の陰晴未だ知るべからず。『錦繍段』所収）とあるのに拠り、十五日の月夜をいう「明夜」を「明日の夜」の意に取倣したものだから、その夜の問答の詞そのままではあるまい。寧ろ句中の「北国日和さだめなき」の方こそ、亭主の詞を裁ち入れたような、日常的な気分の濃い表現であると思う。そういう即興的な機智に富んだ表現がこの句の生命であるが、要するにそれだけのことで、佳句という程ではない。なお、山本健吉氏が『荊口句帳』の「うみ」という前書から、「北国日和さだめなき」といった言葉の裏に、「芭蕉の、北国の海（すなわち日本海）に対する印象が籠っているらしい」（『芭蕉全発句』）と指摘されたのは、留意すべき点であろう。

544　　はま

月のみか雨に相撲もなかりけり　（荊口句帳）

昼寝の種・泊船集・蕉翁句集・奥細道付録

秋季（月・相撲）。

語釈 ○**はま**　「浜」。敦賀湾の浜辺を指す。○**月のみか**　「月無きのみか」の意。○**雨に**　雨によって、雨の為に。「に」は、口語の「で」に通ずる用法である。「莚二枚もひろき我菴　越人　朝毎の露あはれさに麦作ル　旦藁」（『はるの日』）。○**相撲**　「スマフ」。ここは名月の夜に浜辺で催される素人相撲である。相撲は我が国の格闘技として古くから行われたが、宮中の相撲の節会が七月末に催される例だったところから秋のものという観念が生じ、民間でも氏神の秋祭に行われる例が多かった。「相撲　秋也。……内裏にて七月の下旬に有事也」（『御傘』）「相撲……是は諸国の供御の人をめしあつめて、七月に相撲の節といひて、天子の御覧ずる事也。万葉に相撲使と書て、ことりつかひとよむ。是は諸国のすまひをめす使ひの事にこそ。年中行事歌合。寛平七年に童相撲を御覧ず。公事。季吟案るに、相撲の秋になる事は、七月のおほやけ事也ければなるべし。今の世にはいつもすまひは侍れど、うちまかせては辻すまひといひても、すべて秋に用る也」（『増山井』）「花野みだるゝ山の曲め　曾良　月よしと相撲に袴踏ぬぎて　翁」

（『卯辰集』）「Sumô.」（『日葡辞書』）。

大意　月が見られないばかりか、雨で相撲の催しもないとは、何ともつまらない。

考　『昼寝の種』『泊船集』『蕉翁句集』にも「浜」と前書があり、相撲が敦賀港の浜辺で行われる筈だったことを示している。『奥細道付録』には「近江の国長浜にて此時勧進相撲有けるよし」とあるが、この根拠は明かでない。「芭蕉翁月一夜十五句」の中に、「金が崎雨」「はま」「みなと」「うみ」と題した句が並んでおり、内容からしても、八月十五夜敦賀での作と見るべきである。句はただ即興の言い捨てに過ぎない。

545

おなじ夜あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて侍るを、國守（ノカミ）の海士を入てたづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て、引あぐべき便もなしと聞て

月いづく鐘はしづめる海の底　（四幅対）　　——真蹟短冊・荊口句帳

中秋の夜は敦賀にとまりぬ。雨降ければ

月いづこ鐘はしづみて海の底　（草庵集）　　——放鳥集

敦賀鐘が崎にて、初秋望の夜つるがにとまる

月いづこ鐘は沈める海の面　（奥細道付録）

秋季（月）。

語釈　○**おなじ夜**　「同（おな）じ夜（よ）」。『四幅対』に紹介された芭蕉真蹟には、八月十四日の作として「月清し」（542）の句、十五日の作として「名月や」（543）の句を挙げた後に「おなじ夜」とあるので、八月十五日の夜の意であることは明らかである。○**あるじの物語**　「主（あるじ）の物語（ものがたり）」。「あるじ」は、敦賀で芭蕉の泊った宿の亭主で、『おくのほそ道』にも「あるじ」「亭主」などとある人を指す。山

中温泉で芭蕉と別れた後の曾良の『日記』八月九日の条に、「未ノ刻ツルガニ着。先気比へ参詣シテ宿カル。唐人が橋大和や久兵へ」とあり、彼はそれから船で色の浜へ赴いて翌日敦賀に戻るのであるが、その十日の条には、「夜前出船前、出雲や弥市良へ尋。隣也。金子壱両、翁へ可渡之旨申頼、預置也」とあって、一両を芭蕉へ渡すよう、大和屋の隣の出雲屋という宿に預けている。『書留』末尾の処々の所書を録した中にも「つるがとうじが橋／出雲や弥市良」とあり、芭蕉の敦賀での宿は出雲屋と予定されていたらしく、手筈通り此処に泊ったものと思われる。即ち「あるじ」は出雲屋弥市郎という宿屋の主人を指すのである。「唐人が橋」は今の敦賀市相生町に当る旅籠屋町で、出雲屋は天明期に火難に遭い、以後没落したという。「かの老女の物語をも承らばやと存じ候」(「関寺小町」)「Monogatariuo suru.」(『日葡辞書』)。○**此海**　「此の海」。敦賀湾の海中をいう。○**釣鐘のしづみて侍るを**　「釣鐘の沈みて侍るを」。沈んでいる釣鐘を、の意。「釣鐘」は、釣るして撞木で打ち鳴らす大鐘である。(Ⅱ *409*)参照。「釣がねの下降のこすしぐれかな　炊玉」(『あら野』巻五)「呂水に沈みし身にしあれば」(謡曲「天鼓」)「Tçurigane.」「Xizzumi, mu.」(『日葡辞書』)。○**国-守**　「国-守」。国司や守護を指す。字間左側の線は訓読のしるし。「くにのかみ、いつきの宮のかみかけたる、かりのつかひありときゝて」(『伊勢物語』六十九段)「Cami.」(『日葡辞書』)。○**海士を入てたづねさせ給へど**　「海士を入れて尋ねさせ給へど」。漁夫を海に入れて探させなさったが、の意。「海士」は既出(Ⅰ *154*等)。「させ」は、使役、「給へ」は、「国-守」に対する尊敬語である。○**龍頭のさかさまに落入て**　「龍頭の逆様に落ち入りて」。「龍頭」は、釣鐘を鐘楼の梁に掛けて釣るす釣手。龍の頭の形をしているのでいう。上にある龍頭が下になって、さかさまに海に入ってしまっているのである。「さかさま」は既出(Ⅰ *15*)。「思へば此鐘恨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし」(謡曲「道成寺」)「衣川は和泉が城をめぐりて、高舘の下にて大河に落入」(『おくのほそ道』)「Riũzzu.」「Vmini vochi iru.」(『日葡辞書』)。○**引あぐべき便もなしと聞て**　「引き揚ぐべき便りも無しと聞きて」。「便」は、手段、方法の意。(Ⅱ *434*)参照。鐘を引き揚げることの出来そうな方法も無いと話に聞いて、の意。「約束の縄をうごかせば、人ゝよろこび引きあげたりけり」(謡曲「海士」)「女ごゝろの墓なやあふべきたよりもなければ」(『好色五人女』巻四ノ四)「Fiqiague, uru, eta.」(『日葡辞書』)。○**いづく**　「何処」。○**海の底**　「海の底」。「難波の海の底ひなく、深きおもひを人や知る」(謡曲「弱法師」)「Soco.」(『日葡辞書』)。

大意　月は何処へ行ってしまったのだろう。聞けば、此処の海底には釣鐘が沈んだままだというが。

考　「仲秋の夜は敦賀に泊て、雨降ければ」(真蹟短冊)「金が崎雨」(『荊口句帳』)「中秋の日敦賀に止宿す。雨ふりけれ

ば」（『放鳥集』）等の前書があり、『草庵集』（句空撰、元禄十三年刊）には「敦賀の駅の屛風に侍り。北国行脚の時の吟なるべし」と注記している。これはその前書から見て、細道の旅の道中書きと思われる常宮神社蔵の真蹟短冊に拠ったらしいが、句形は誤りである。『奥細道付録』前書の「初秋望の夜」、下五の「海の面」、共に信じ難い。「芭蕉翁月一夜十五句」の一で、中秋無月をかこった当夜の作。真蹟に拠った『四幅対』の前書が事情を最も委しく伝えているので、これを底本とした。これと真蹟短冊や『荊口句帳』の一致する句形が信頼し得る唯一のものである。

句で「鐘は」と取立てていったのは、「鐘は海底に沈んでいるというが、それなら月は何処なのか」と、無月を憾む興としたものであろう。蚕臥の『芭蕉新巻』が「北国日和」（543）の句と併せて「二句一連にして、ともに雨の義外にきかしむ」と見ているのは良い。沈鐘伝説を契機にした軽い興と思われるが、雨雲に隠れた月と、海底に沈んだままの鐘とは、幽暗な気分において通ずるものがあり、神秘性を高く買う鑑賞の多く出る所以となっている。安東次男氏は「しづめる」と「しづみて」の両形を比較して後者を採り、

俳人ならこの二つの句案は誰でも思いつくものだ。沈々とした雰囲気を出すつもりなら、「しづめる」では軽騒にすぎる。もっとも、句の性質にもよることで、この夜の芭蕉はいくぶんはしゃいでいた、と考えれば話は別になる。（『芭蕉発句新注』）

と見ておられるが、「しづめる」が軽騒とは限らず、「しづみて」の方がはしゃいでいるとも言えるのではあるまいか。

546　ふるき名の角鹿（みなと）や戀し秋の月　（荊口句帳）

秋季（秋の月）。

語釈 ○**みなと** 「港」。敦賀港を指す。○**ふるき名の角鹿や恋し** 「古き名の角鹿や恋し」。敦賀は垂仁紀に加羅の国の王子都怒我阿羅斯等が崇神天皇の時代に来泊したことに由来するとあり、古く「都奴賀」(仲哀記)と呼ばれたが、『万葉』の頃には「角鹿」といわれたらしく、和銅年間に「敦賀」と字が改められ、平安期の『和名抄』では「都留我」と呼ばれている。ここでは「角鹿」を姑く「ツヌガ」と訓んでおく。その古い地名が慕わしいというのである。「や」は詠嘆の間投助詞。「恋し」で切れる。「古き名は新敷名のとしおとこ　曾良」(芭蕉真蹟懐紙)。○**秋の月** 「月」といえば秋季とされるが、このように「秋」を冠することもある。「瓦ふく家も面白や秋の月　野水」(『はるの日』)。

大意 秋の月に照らされる港の景色を見るにつけ、古代の角鹿という地名が、ふと恋しくなることだ。

考 「芭蕉翁月一夜十五句」の一。八月十四、五日頃の作であろう。古い地名に寄せる思いは一種の古代憧憬であって、曾良も『名勝備忘録』に「角鹿浜」の名を録している。加藤楸邨氏は、鹿に縁のある呼び名が、古雅でなつかしく感ぜられる意とされた(『芭蕉全句』)。芭蕉の脳裏には、「この蟹や　何処の蟹　百伝ふ　角鹿の蟹」という応神記の歌謡が浮んだかどうか。

547

小萩ちれますほの小貝小盃 (洞哉筆懐紙)

薦獅子・泊船集・蕉翁句集草稿・四幅対・奥細道付録

秋季(小萩)。

語釈 ○**小萩ちれ** 「小萩散れ」。「小萩」は、小さい萩。「萩」は既出(Ⅰ*12*)。「小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと」(『野ざらし紀行』)。○**ますほの小貝** 「ますほ」は「まそほ」(真赭)の転で、「ま」は接頭語、赤い色をいう。元来は古代に顔料に用いた赤土のことである。「小貝」は、「しほそむるますをのこがひひろふとていろのはまとはいふにやあるらん」(『山家集』下)の西行歌によって、色の浜(現敦賀市色ケ浜)の名物になっている米粒乃至小豆ほどの薄紅い二枚貝。「チドリマスホ」というそうである。○**小盃** 「コサカヅキ」。小型の盃。「もろ〱の小盃をふり捨て、阿波の大鳴門小鳴門と名付て、渦まく酒を

よろこぶ」（『西鶴諸国ばなし』巻三ノ三）。

大意 歌に詠まれた「ますほの小貝」を小盃に拾い集める。浜辺の小萩よ、小貝の上に散りかかれ。

考 「いろの浜に誘引れて」（『鳶獅子』）「色浜泛ノ舟」（『四幅対』）「同じくいろの浜にて」（『奥細道付録』）等の前書がある。

『おくのほそ道』には中秋十五夜の記事の次に、

十六日空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の浜に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹着ぬ。浜はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

…………

其日のあらまし、等栽に筆をとらせて寺に残す。

と色の浜（種の浜）行のことが記されており、右に洞哉（等栽）に認めさせたとある文にこの句が見えるので、八月十六日の作であることは疑いない。今当地の本隆寺に伝蔵される洞哉筆懐紙の文を、左に引用しておこう。

気比の海のけしきにめで、いろの浜の色に移りて、ますほの小貝とよみ侍しは、西上人の形見成けらし。されば所の小はら（ママ）はまで、その名を伝えて汐のまをあさり、風雅の人の心をなぐさむ。下官年比思ひ渡りしに、此たび武江芭蕉桃青巡国の序、このはまにまうで侍る。同じ舟にさそはれて、小貝を拾ひ袂につゝみ、盃にうち入なんどして、彼上人のむかしをもてはやす事になむ。

越前ふくゐ洞哉書

小萩ちれますほの小貝小盃　桃青

元禄二仲秋

なお、芭蕉を色の浜に案内した「天屋何某」は、天屋五郎右衛門といった人で、地元の商賈だったらしい。本姓は室

氏、俳諧を嗜んで、号を玄流と称したという。
　土芳は『蕉翁句集草稿』にこの句を引いて、「此句白船集(ママ)に有。細道に、浪の間や小貝に交る萩の塵と云句有。此直しの前の時の句かと、引句とす」と述べている。『ほそ道』の「浪の間や」の句との間には、確かに素材・表現とも関連が認められ、旅行当時の「小萩ちれ」を基に、別の句に仕立てたものと推定してよかろう。ここでは姑く二句をそれぞれ独立した句として扱う。『奥細道付録』に中七を「ますうの小貝」としているのは小異に過ぎず、問題にする程のものではない。
「小貝小盃」と重ねた意味を、「赤き小貝は小盃にも似たり」（東海呑吐『芭蕉句解』）、或いは「ますほの貝を盃として打興ぜん」（『芭蕉句集講義』角田竹冷説）という風に取りたくなるが、「ますほの小貝」は盃に見立てるにしては小さ過ぎる。これは洞哉の文の末の方に「小貝を拾ひ袂につゝみ、盃にうち入なんどして」とあるのを参照すべく、小貝を盃中に拾い集めることと見るのが良い。萩もこの辺りに多いので、其処に散りかかれと興じたのである。萩の花の色と薄紅い小貝の色が似ているところに目をつけているのだ。勿論即興までの句であるが、「コハギチレ……コガヒコサカヅキ」と、「コ」の頭韻とイ段の脚韻が交響して快いリズムを形造っており、この時の芭蕉の心のはずみを、さながらに反映した感が深い。山本健吉氏は、「小貝は浜、小萩は庭、小盃は床の上ながら、離れ離れの三つの景物が作者の脳裏で一つになり、種の浜の秋景色を描き出すのである」（『芭蕉全発句』）と見ておられる。

548
　その浦の寺にあそびて
淋しさや須磨にかちたる濱の秋　（四幅対）

越前いろの濱にて
おくのほそ道

さびしさや須磨にかちたるうらの穐（初蟬）　――泊船集

秋季。

語釈　**○その浦の寺**　『四幅対』所収の芭蕉の句文には、この前に色の浜での「小萩ちれ」（*547*）の句を書き、それを承けているので、「その浦」は色の浜一帯の海岸を指すことは明らかである。其処の「寺」は、前（二三九頁）にも触れた本隆寺で、色の浜集落の略々中央、山に沿うた地にあり、法華宗本門流、京都本能寺の末寺である。**○淋しさ**　「淋しさ」、『おくのほそ道』素龍清書本では「寂しさ」と表記している。**○須磨にかちたる浜の秋**　「須磨に勝ちたる浜の秋」。秋の趣を賞される須磨よりも、色の浜の趣が勝る、という意。両者を比較して判定するような気持で「かちたる」といった。「雪の鮠」（Ⅰ*158*）の句参照。「須磨」は既出（Ⅰ*107*、Ⅱ*381*等）。「秋の夜は月と草葉の白露と光くらべにいづれかたまし」（『御室撰歌合』三十六番、顕昭）「Cachi, tçu, atta.」（『日葡辞書』）。

大意　何とさびしいことだろう。色の浜の秋の趣は、あの須磨よりも勝っている。

考　『おくのほそ道』には、さき（二三九頁）に引いた色の浜行の文の中に、「夕ぐれのさびしさ感に堪たり」を承けてこの句が記されている。『四幅対』所収の句文の成立は、『ほそ道』に先立つと認められるので、これを本位句の底本とした。色の浜に遊んだ当日の作かどうか確かには分らぬが、遅くとも大垣に落着いた頃には出来ていたのであろう。『初蟬』等の句形は杜撰に過ぎまい。

『源氏物語』に、

すまには、いとゞ心づくしの秋風に、うみはすこしとほけれど、ゆきひらの中納言の、せきふきこゆるといひけむうらなみ、よる〳〵はげにいとちかうきこえて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。（須磨）

とあり、芭蕉も前年夏に此処を訪ねて、

かゝる所の穐なりけりとかや。此浦の実は秋をむねとするなるべし。かなしささびしさいはむかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをもいひ出べき物をと思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり。（『笈の小文』）

という感懐を持った。色の浜の景色は、そういう須磨に通ずるところもあって、この句で両者を比較する動機となったのであろう。ただ、句の表現では景色そのものより「淋しさ」が中心となっており、尾形仂氏は、西行のイメージが導いた『新古今集』の三夕の歌、就中定家の「み渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」を念頭に置いたものと見ておられる（角川文庫『新訂おくのほそ道』）。そうした古典との交響と共に、態と歌合などに擬して「須磨にかちたる」と理窟めいた表現にしたところが俳諧で、ここに興じた気持を読み取りたい。『ほそ道』の記述を見ても、芭蕉は大勢のもてなしを受けて、鄙の歌枕の旅を楽しんでおり、山本健吉氏は「おそらく本隆寺の住持の接待に対する挨拶であろう」（『芭蕉全発句』）と見ておられる程である。安東次男氏が『源氏』を受けた趣向の工夫と見ながらも、

……片や眼前、片や想像上の風景だというところが、みそである。須磨曳杖（えいじょう）が仮にもし秋のことだったら、こんな句を芭蕉は詠まなかったはずだと考えればこの句の俳はわかる。……

今の俳人はむろん、昔でも並の俳諧師なら、二つの景を実際に見たうえでなければ比べたりしない。そこが違うのだ。（『芭蕉発句新注』）

と述べておられるのも面白い。

種の濱

549 衣着て小貝拾はんいろの月　（荊口句帳）

秋季（月）。

語釈 ○**種の浜**　「種（いろ）の浜（はま）」。敦賀港の北方、東は敦賀湾に臨み、西に西方ヶ岳を仰ぐ海岸の地。今の敦賀市色ヶ浜で、港からは四

里程あり、中世以来の歌枕である。「色の浜」とも書く。〇**衣着て**　「衣」は、僧の墨染の衣。西行を考えている。「衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ玉へ」（『おくのほそ道』）「Coromo.」（『日葡辞書』）。〇**小貝拾はん**　「小貝拾はん」。「小貝」は「ますほの小貝」（547）である。「砂の小麦の痩てはらく　里東　西風にますほの小貝拾はせて　泥土」（『ひさご』）「Conomiuo firô.」（『日葡辞書』）。〇**いろの月**　「色の浜の月」の意。楸邨氏によると、土地の人は「色の浜」を略して「色」とも呼んでいるようであるという（『芭蕉全句』）。「色ある月」、即ち艶なる美しい月の意を掛けているであろう。

大意　西行のように墨染の衣を着て、小貝を拾いたいものだ。色の浜の美しい月のもとで。

考　「芭蕉翁月一夜十五句」の一。八月十六日、色の浜での吟。本隆寺で一泊して、名所の十六夜の月を賞したのであろう。曾良もこれよりさき九日にこの地を訪い、寺に一泊している。「小萩ちれ」の句の条に引いた「しほそむるますをのこがひひろふとて」の歌から、西行への思慕の情を「衣着て」で表わしたのである。「潮がその色を染めたと思われるますほの小貝を詠んだ西行法師にならって、自分も今潮ならぬ墨染の衣を着て、拾おうと思う」（加藤楸邨氏『全句』）と解するのは、技巧的に過ぎて、句を誦した印象にそぐわない。

550　浪の間や小貝にまじる萩の塵　（おくのほそ道）

類柑子

秋季（萩）。

語釈　〇**浪の間**　「浪の間」。浪の引いた合間の意。〇**小貝にまじる萩の塵**　「小貝に交る萩の塵」。「小貝」は、色の浜に産する「ますほの小貝」（547）をいう。「萩の塵」は、萩の花屑。波打際に小貝にまじってそれが散らばっているのである。「塵」は、本来「かわらよもぎ」を指すが、ここでは「塵」に同じ。「此川も桜川の名も懐しき花の塵を、あだにもせじと思ふなり」（謡曲「桜川」）「Chiri.」（『日葡辞書』）。

大意　浪の引いた合間に、波打際には真赭の小貝にまじって、萩の花屑が散り敷いているよ。

考　『類柑子』には「ますほの小貝ひろはむと、種の嶋(ママ)に舟のり出たり。法花寺にあがりて酒のむ」と前書がある。『おくのほそ道』には、色の浜での吟として前の「寂しさや」の句と並べて出してあるが、『ほそ道』より年代的に先行した資料はなく、『類柑子』も『ほそ道』に拠って掲出したものと推定される。この句は前掲の「小萩ちれ」(547)の句と素材・表現に共通したところがあり、恐らくは旅行当時のこの句をもとにして、『ほそ道』執筆の際に別の句に仕立て変えたものであろう。『芭蕉句選』は初五を「波の間に」としているが、これでは句の姿に締りがなく、杜撰な誤りと思われる。

「波の音と萩の声と、たがひに聞ゆる風情ならん。淋しさいふべからず。小貝うつくしき汀をわたる風なれば、交るとは作れり」(杜哉『蒙引』)などという解は良くない。「浪の間」の語をよく理解せず、「荻の声」を「萩」と取り違えているのではあるまいか。浪の引いた間の汀に小貝にまじって萩の花屑がちらばっているさまを描いたと見るべきである。小貝のほの紅い色と萩の花の色がまじって美しいところを見つけているのだ。後年の作としても、こういう点は旅での体験が生かされていると見られよう。また、「まことに散つてゐる趣ならば一きは風情があるが、小貝の小片を萩の塵に見立てたのであらう」(樋口功氏『奥の細道評釈』)という見方も問題で、

　もし下五がたゞ「萩の花」ならば、この解もまた確かに成立する。しかしこれは、「萩の塵」である。波に濡れてつやめいた貝の色に対して、塵の語を下すとはあるまじき事であらう。浪間に光る小貝にまじつて、散りしをれた花があつたからこそ、塵の感を催したのである。勿論この場合、小貝と萩の花との類似に、かなり深い興味を覚えたにはちがひない。しかもその艶やかさと佗しさとの対照に、一層芭蕉の詩興は高められたのである。畢竟塵の一語を下し得た所に句の妙味は存する。(『奥の細道俳句研究』)

という潁原博士の説を確論とすべきである。前の「小萩ちれ」の句が主情的な興を中心としていたのに対して、これは浜辺の実際を客観的にとらえており、句案が後年にそうした方向に展開したことが知られる。『ほそ道』では「寂

しさや」の句の方に前述したような興を託し、「浪の間や」の句では写生的即景を扱ったのであろう。これとは別に、萩の花はおそらく休憩した法華寺の庭に咲きこぼれていたのであろう。だから浜に散らばる小貝と、寺の庭に散らばる萩の塵とまぎれるわけもないが、両者を重ね合せてまぎれるかのように仕立てたのは、詩的フィクションなのである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

という見方もある。山本氏は「小萩ちれ」の句についても、構成的趣向とする立場であった。

551

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉　（己が光）

後の旅・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

秋季。

語釈　○**胡蝶にもならで**　「胡蝶にも成らで」。「胡蝶」は、「蝶」に同じ。既出（Ⅰ *180*）。○**秋ふる菜虫**　「秋経る菜虫」。「菜虫」は、紋白蝶の幼虫、青虫。大根・蕪などの菜を食べる。現代では秋の季語とされるが、古くは無季である。「秋ふる」は、秋の日を送る意。「秋ふるや楠八畳の金閣寺　竹渓」（『新花摘』）「雀ヤ其外小鳥ハ蜘蛛ヤ菜虫ナドヲ喰フ」（石田梅岩『都鄙問答』巻二）。

大意　この菜虫は美しい蝶にもならないで、秋の日を送っていることよ。

考　大垣の近藤如行の芭蕉追善集『後の旅』に、

又の旅は元禄二年のはじめの夏、深川のいほりも人にやりて、なすび野ゝ原に郭公をまち、蓬葎の敷寐の下にきりぎりすを聞て、千百余里の嶮難、終にかうべをしろふして、みのゝ国我さとにうつり給。句どもあまた有。此事はおくのしほりにのこし給へば、大形はもらしつ。

胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉

たねは淋しき茄子一もと

かくからびたる吟声ありて、我下の句を次。

と見える。作者名はないが、最後の注記によって、発句が芭蕉、脇が如行作と認められよう。底本とした『己が光』（車庸撰、元禄五年刊）は芭蕉生前の初出板本であり、それにも「翁」とあるから、作者について問題はない。

芭蕉が敦賀で日を過した後大垣に入ったことは、『おくのほそ道』にも色の浜遊覧の記事の次に、

露通（ママ）も此みなとまで出むかひて、みのゝ国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子・荊口父子、其外したしき人ゝ日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び且いたはる。

とあるのによっても明らかであるが、『荊口句帳』所収「芭蕉翁月一夜十五句」の路通序の末に、

元禄己巳中秋廿一日以来
大垣庄株（杭）瀬川辺
路通敬序

とあり、芭蕉の大垣着は八月二十一日と認められる。恐らく十八日頃路通と共に敦賀を立ったのであろう。「胡蝶にも」の句は大垣の如行亭に入って間もなくの吟と思われる。

秋まで青虫のままでいるささやかな物に寄せる思いをのべた句であるが、この「菜虫」には芭蕉自身の境涯が色濃く投影されている。世間に無用の俳諧を生きるよすがとして、奥羽北陸の長途の旅を経、「終にかうべをしろふして」大垣まで辿り着いたが、依然として変り栄えしない碌々たる自分だという呟きのような趣があるのだ。荘周夢蝶の寓言を云々する説もあり、それも全く否定は出来ぬけれども、この「胡蝶」は寧ろ「菜虫」との関わりで案ぜられたものであろうから、余り『荘子』には重点を置きたくない。ここでは、ふと見出した菜虫に自己の境涯を観じているところが面白いので、右にも言った呟きのような調子が、「侘び」「枯らび」の趣を強く感じさせる。静かな観照と深い

自省に基づくところ、「あられきくやこの身はもとのふる柏」（Ⅰ174）を思わせる佳句である。

赤坂の虚空蔵にて
八月廿八日　奥の院

552　鳩の聲身に入わたる岩戸哉　（漆島）

秋季（身に入む）。

語釈　**○赤坂の虚空蔵**　「赤坂の虚空蔵」。今の岐阜県大垣市赤坂町の金生山山上にある明星輪寺宝光院を指す。虚空蔵菩薩を本尊とするので、今も「虚空蔵さん」と呼ばれる寺である。**○奥の院**　「奥の院」。岩窟の奥に本尊が祀られている所。此処は内陣に洞のある巨岩を取込んで造られてあり、本尊は秘仏で見ることは出来ないが、岩窟の前に鎌倉時代作の虚空蔵菩薩像が見られるという。高野山でも初瀬寺でも、山中の寺院に奥の院がある例は多い。「高野にて／散花にたぶさ恥けり奥の院　杜国」（『あら野』巻七）「In. …… Tera, ou niosteiro.」（『日葡辞書』）。**○鳩の声**　「鳩の声」。山鳩の鳴き声。秋の季語の「鳩吹く」或いは「鳩吹く風」には諸説があるが、俳諧では「はげ山や吹き力なき鳩の声」（才麿『椎の葉』）「哀さは鳴あひて吹鳩の声」（浪化『甲戌集』）等、「鳩吹く」といって鳩が鳴く意味に用いた例がある。当面の句では特に「吹く」とはいっていないので、季語とは見ないでおく。「Fato.」（『日葡辞書』）。**○身に入わたる**　「身に入みわたる」。秋風の冷気が身にしむ感じをいう季語。既出（Ⅰ183）。ここの場合のように、秋風となくて単に身にしみてあわれが感ぜられるだけでも、季語として扱われる。「折にふれて感動身にしみわたり、涙もおとすばかりなれば」（『猿蓑』巻四、嵐蘭発句「夢さつて」前書）。**○岩戸**　「イハト」。前記の本尊虚空蔵菩薩の像を祀った岩窟の入口をいう。Ⅰ190前書参照。

大意　神秘な岩窟の前に立つと、折柄聞える山鳩の声がしみじみと寂しく、秋のあわれが身にしみわたることだ。

考　『漆島』（白川撰、宝永三年八月自序）にこの句を掲げ、「此句、肥陽左分利何某のもとに書捨あり」と付記があるの

で、真蹟に拠ったものと認められる。八月二十八日に大垣辺に居たのは元禄二年だけで、この年に成ったことは確かである。句は唯体をなしているに過ぎないが、山本健吉氏は「身に沁む鶉の声は、俊成の名歌で一般化した。芭蕉がここで鶉を鳩に変えたところが新しみといえば新しみであろう」（『芭蕉全発句』）と見ておられる。

戸を開けば西に山あり、伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只これ孤山の徳あり

553 そのまゝよ月もたのまじ伊吹やま（後の旅）――真蹟懐紙写

斜嶺亭

戸をひらけばにしに山あり、伊吹といふ。花にもよらず雪にもよらず、只これ孤山の徳あり

其まゝに月もたのまじいぶき山（笈日記）――泊船集・蕉翁句集・恕水日記

斜嶺亭

戸をひらけばにしに山有、伊吹といふ。花にもよらず雪にもよらず、只これ孤山の徳あり

其儘に月はたのまじいぶき山（蕉翁句集草稿）

秋季（月）。

語釈 ○**伊吹** 「イブキ」。今の岐阜県南西部、伊吹山地の南端にある主峰伊吹山のこと。標高千三百七十七メートル、山頂部は岐阜県揖斐郡春日村と滋賀県坂田郡伊吹町にわたる。古来山岳信仰の対象とされ、歌枕でもある。○**花にもよらず雪にもよらず** 山

の趣が風雅の代表的景物たる花や雪に依存しないことをいう。「生きとし生けるもの毎に敷島の陰によるとかや」（謡曲「高砂」）。**○只これ孤山の徳あり**　「孤山の徳」は、独立孤高の山容を、俗世に超出した徳に譬えた。宋の高士林和靖が隠栖した西湖のほとりの孤山をかすめているかも知れない。「只これ」は、強め。既出（I196前書）。「江尻ノ海汀ヲ過レバ、江ノ中ニ一峰ノ孤山アリ」（『海道記』）。**○そのまゝよ**　今あるそのままの姿で十分だ、の意。「幾春も竹其儘に見ゆる哉　重五」（『あら野』巻八）「Sonomamadeua narumai.」（『日葡辞書』）。**○月もたのまじ**　「憑まじ」の「たのむ」は、前書の「よらず」の「よる」と同じく依存する意。前書の「花」「雪」を承けて「月」を出し、秋の月の趣に依存する必要もあるまい、といったのである。「かたはらの松かげをたのみて」（『炭俵』上、芭蕉発句「四つごきの」前書）「Tanomi, u, ôda. …… Toxino vacaiuo tanomuna.」（『日葡辞書』）。

大意　伊吹山は、目の前に聳えるそのままの姿で十分だよ。月の趣を頼りにする必要もあるまい。

考　『後の旅』には、芭蕉が奥羽北陸の旅を終えて大垣に来た時の作としてこの句を掲げ、その後に「斜嶺硯をとりむかへば、此句をとゞめらる」と付記が見えるので、大垣の蕉門高岡斜嶺の家で成った句と思われる。後にも触れるこの地の戸田恕水の日記、元禄二年九月四日の条に、「頃日伊吹眺望といふ題にて」として、この芭蕉の句と路通の「おふやうに伊吹颪の秋のはへ」の句を録してあり、句の成ったのは三日以前数日のうちであったろう。『笈日記』は前書から見て、『後の旅』と同じく当地に遺された真蹟に拠ったものとおぼしく、現在その写しと思われる懐紙も伝わっていて、その句形は『後の旅』と一致するから、『笈日記』の「其まゝに」は誤伝と考えざるを得ない。『泊船集』以下はその誤りを承けたものである。また、土芳の『蕉翁句集草稿』は、句の後に「是笈日記に有。古翁前書と覚ゆ」と付記してあり、『笈日記』に基づいたこと明らかなので、中七の「月はたのまじ」も誤筆ということになる。『後の旅』が信じ得る唯一の句形なのである。

　句は斜嶺亭から眺めた伊吹の山容をほめて、亭主への挨拶としたもので、「孤山の徳」は山のみに限らず、そうした挨拶の気持を読み取るべきであろう。前書の「花」「雪」を承けて句中に「月」を出したのは巧みな趣向であるが、全体に理の勝った表現を詩として批判する見方もある。しかし、芭蕉には「やがてしぬけしきは見えずせみのこゑ」

（Ⅲ*608*）の如き句があり、付句に於いても「浮世の果は皆小町なり」（『猿蓑』巻五、市中の巻）のように、一見観念の露出した表現をすることがあって、これらは詩的に未熟といっただけで片付かないものを持っている。安東次男氏は、最初芭蕉が中秋の名月を大垣で見る心づもりがあったのを、実現しなかった言いわけとして「月もたのまじ」といったと見ておられ、私はその説に賛同し兼ねるが、氏が「雪月花を取合せて一首に詠込んだ和歌はいくらもあるが、要らぬと言放った歌など前代未聞」（『芭蕉発句新注』）といわれたのはその通りで、其処がこの句の力であり面白さなのだと思う。それに「孤山」といって林和靖を思わせているとすれば、芭蕉の斜嶺に寄せた所懐も、何となく分るような気がする。俳諧の興には、こうした方向もあるのであった。

恕水子別墅にて即興

554 こもり居て木の實艸のみひろはゞや　（後の旅）

恕水日記・泊船集・宇陀法師・蕉翁句集

秋季（木の実・艸のみ）。

語釈 ○**恕水子別墅**　「ジョスキシベッショ」。「恕水」は戸田氏、通称権太夫。知行千三百石の大垣藩詰頭で、家老待遇の名門であった。『後の旅』所収の最後の句の前書によれば、病養の為に京に上り、その地で歿したという。「如水」と書かれることもあるが、『後の旅』に「恕水」とあるのが正しいのであろう。「子」は敬称。「別墅」は恕水の下屋敷で、その『日記』に「室下屋」とあり、大垣城北西の侍屋敷地域の室町に下屋敷を持っていたことが知られる。「住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」（『おくのほそ道』）「Bexxo.」（『日葡辞書』）。○**即興**　「ソクキョウ」。その場の座興として作った句。「神無月廿日ふか川にて即興」（『炭俵』下、芭蕉発句「振売の」前書）。○**こもり居て**　「籠り居て」。世間との交渉を絶って隠棲すること。「さしこもる」（Ⅱ*444*）参照。「よろづなつかしさに、あれたるやどにこもりゐ給ふ」（『小伏見物語』中）。○**木の実**　「木の実」。果樹を除き、秋に成熟する喬木の実の汎称。「凡果蓏の類多し。余時にも生ず。然ども……只木の実と名をさゝずしていへば秋也。草の実同レ之。作者心得べし」（『滑稽雑

談』)「鶴一つ痩て秋待木の実かな　支考」(『浜荻』)「Conomiuo firô.」(『日葡辞書』)。○艸のみ　「艸の実(くさのみ)」。前と同じく秋の季語。「艸」は「草」に通用する字である。「総て諸草の類、春夏に花を開く有といへども、其草花秋に多きゆへに、無名の草花を秋に許用せり。草の実又春夏結者(ブ)もあれども、おほくは秋に至て結び熟する故、秋といふ也」(『滑稽雑談』)「新米もまだ艸の実の匂ひ哉」(蕪村『落日菴句集』)。○ひろはゞや　「拾(ひろ)はゞや」。「ばや」は自己の願望。「……したい」という願望を述べたのである。

大意　このような御屋敷に隠棲して、木の実や草の実を拾って食べ、日を送りたいものです。

考　「美濃如水別墅」(『泊船集』)「みのゝ如水別墅」(『蕉翁句集』)等の前書がある。大垣市立図書館に蔵せられる如水の『日記』抄録(写本)元禄二年九月四日の条に、

一、桃青事(門弟等ハ芭蕉ト呼)如行方に泊リ、所労昨日ゟ本腹(ママ)之旨承に付、種ゝ申、他所者故、室下屋に而自分病中トいへども忍に而初而招之対顔。其歳四拾六、生国は伊賀之由。路通与申法師能登之方に而行連、同道に付、是にも初而対面。……両人咄シ種ゝ承之。多は風雅之儀ト云云。如行誘引仕り色ゝ申と云へども、家中士衆に先約有之故、暮時分帰リ申候。然共両人共に発句書残。自筆故下屋之壁に張之。謂所、

として「こもり居て」の句以下の表六句と、路通の発句「それ〴〵にわけつくされし庭の秋」以下の三物を記してあり、「こもり居て」の句が九月四日に如水の下屋敷で成ったことは明らかである。如行が案内して路通と共に如水に対面したことが知られ、

……今日芭蕉躰は布裏之木綿小袖(帷子ヲ綿入トス。墨染。)細帯に布之編服、路通は白キ木綿之小袖、数珠を手に掛ル。心底難斗けれども、浮世を安クみなし、不諂不奢有様也。

ともあって、この時の芭蕉の服装や、人柄についての如水の印象が記されているのも面白い。『泊船集』には下五を「ひらはゞや」と伝えるが小異に過ぎず、初出の『後の旅』の句形に拠るべきである。

長途の旅疲れをいやすべく暫く休息したいという意に解する従来の諸注の説は物足りない。家老格の大身戸田如水

の下屋敷は庭も広く、木の実のなる樹々も多かったのであろう。句はそれを材に山中の生活を思って隠逸志向を述べ、且つ主人の風格を賞める挨拶としたのであって、「やまふかみいはにしだるゝ水ためんかつぐ〱おつるとちひろふほど」(『山家集』下)という西行歌も思い寄せられていると思われる。別に殊更な趣向を構えるでもなく、呟きのような即興句であるが、素直な芭蕉らしい佳句といえよう。「コモリキテコノミクサノミヒロハバヤ」と、カ行音マ行音の反復にオ段イ段ア段の母音が錯綜する響きが如何にも快い。

555 はやくさけ九日もちかしきくのはな　（真蹟集覧）　蕉翁句集

はや〱さけ九日もちかし菊の花　（笈日記）　泊船集・宇陀法師

はやう咲九日も近し宿の菊　（桃の白実）

左柳亭

秋季（きくのはな）。

語釈 **○はやくさけ**　「早く咲け」。**○九日もちかし**　「九日も近し」。「九日」は、九月九日重陽の節供の日をいう。「紺菊も色に呼出す九日かな　桃隣」（『炭俵』下）。**○きくのはな**　「菊の花」。いうまでもなく重陽の佳節にゆかり深い花である。「九月九日……けふは節日なれば。おほうちには菊花の宴をこなはれて。みこたち上達部ふみつくり詩歌をつらね玉ひ。又南殿の御帳の左右に。茱萸袋をかけ。菊瓶ををかるゝ儀式など侍るとなん。町方の人まねにも。其方ばかりなぞらへて。すゞとくりの口などに。菊をつけて用ひ侍る。菊にめでたき功能あるは。慈童が山路の菊の露に齢をのべしふる事。費長房が教よりおこるとなればながいきにのむ菊の酒。下口もちとせよなどいはふ心をいひ侍る」（『山之井』）「世諺問答曰、重陽に又菊を用る事は、魏ノ文帝生れ給ふ時、紫雲殿上に懸りて例にも似ず。はたして七歳にして位につき給ふてけり。其時天下の者寿命十五に過ず。殊に帝十五やうやくちかづく時、歎きをふくみてあゆましめ給はず。其時彭祖と云仙人、わがきくゐんの菊の花を折て、九月九日持来りて奉りたれば、帝是

を服し給ひて延レ寿、七十歳をたもちたまふ由のせられたり。又世風記に、漢武帝と中帝の、菊酒をのみて長寿を得給ひし事侍り」（『滑稽雑談』）。

大意　庭前の菊の花よ、早く咲け。めでたい九日の節供も近いのだ。

考　『蕉翁句集』には「有人の方にて」と前書がある。『桃の白実』（車蓋編、天明八年刊）には、この句を発句とした左柳・路通・文鳥・越人・如行・荊口・此筋・木因・残香・曾良・斜嶺ら多数の連衆による歌仙一巻が収められているが、左柳が「心うきたつ宵月の露」という脇を賦していて亭主役と認められるので、『笈日記』の「左柳亭」という前書と符合することになる。曾良の『日記』元禄二年九月四日の条に「源兵へ会ニ而行」とある「源兵へ」は、大垣藩士浅井源兵衛即ち左柳であるから、右の歌仙の成ったのはこの日の事と認められよう。さきに引いた恕水の『日記』同日の条に「家中士衆に先約有之故、暮時分帰リ申候」とあるのは、この左柳亭の俳席の予定をいったもので、三日に大垣にやって来た越人や曾良も加わって、夜に大勢の会が催されたものと思われ、井本農一博士は「大垣出発を控えた芭蕉送別の句会でもあったであろう」（『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』）と見ておられる。

下五を「宿の菊」とした句形は、『桃の白実』を始め『幽蘭集』『金蘭集』『一葉集』等歌仙を収める書が凡て一致するので、当座の初案は「宿の菊」だったとおぼしく、それを「きくのはな」に改めたものであろう。独立句として見た場合、「宿の菊」は限定し過ぎる嫌いがある。問題は初五の「はやく」と「はやく〵」の異同で、「はやく〵」と強くせき立てる感じも捨て難いけれども、『真蹟集覧』の摸刻はやはり最も信頼すべきものと目すべく、『笈日記』は仮名を踊り字に誤ったものと見られる。なお、『桃の白実』の初五「はやう咲」は孤立した所伝で、他の歌仙資料も凡て「はやく」であるから問題にはならない。

付合の席での発句らしく、即興的な軽い趣の句で、「きくのはな」とはいっても、「菊の莟」に早く咲けと呼び掛けているのである。重陽の佳節への思いが動機になっているが、「わが此亭を立去るも近きにあれば咲て見せよ」（杜哉

『蒙引』）とまで言うのは、芭蕉が左柳亭に逗留していたわけではないから、所詮考え過ぎであろう。「九日も」の「も」は極く軽いのである。

木因亭

556 かくれ家や月と菊とに田三反（笈日記）

泊船集・蕉翁句集・真蹟集覧

木因何某隠居をとふ

隠家や菊と月とに田三反（真蹟懐紙）

秋季（月・菊）。

語釈 ○**木因亭**「ボクインテイ」。木因は谷氏、通称九太夫。大垣の船町で代々船問屋（運送業）を営んでいた。俳諧を嗜んで北村季吟の門人となり、同門の芭蕉とは天和期から江戸で交渉があった。貞享元年九月、芭蕉は大垣に木因を訪うてその家に滞在し、「しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮」（Ⅰ205）の吟があり、十月から十一月にかけて、名古屋に入るまで、芭蕉の旅に同行した（Ⅰ三三一頁以下参照）。貞享三年末家督を養子平太夫に譲って隠居し、翌四年春には剃髪。谷家は船町に藩主から一町四方の屋敷を賜わっており、その屋敷の一角の「隠居」を白桜下・観水軒と称した。享保十（一七二五）年九月三十日歿、享年八十。○**かくれ家**「隠れ家（かくれが）」。俗世間から隠れて住む家、隠居所。既出（Ⅱ324）。○**田三反**「タサンダン」。「反」は田の面積の単位で、江戸時代では六尺（一・八メートル）四方を一歩、三百歩を一反とした。木因は隠居料として三反の田を持っていたのであろう。勿論農地としては小規模のものである。「県ふるはな見次郎と仰がれて　重五　五形菫（ゲンゲ）の畠六反　とこく」（『冬の日』）。

大意 まことによい隠居所ですな。月の眺めもよく、庭には菊が植えられた上に、田も三反あって食べる物にも事欠かない。羨しいことです。

考 『笈日記』大垣部にはこの句の次に、「おなじ比舟にて送るとて」として、

秋の暮行先〳〵の苫屋かな　木因

荻にねようか萩に寝うか　翁

の付合を載せている。これは元禄二年九月六日、大垣から伊勢へ向う際の送別の付合であるから、「かくれ家や」の句もそれに先立つ大垣滞在中の作と推定される。

中七を「菊と月とに」とした真蹟懐紙を紹介された森川昭氏は、この懐紙を支考が大垣で実見し、『笈日記』に採録する際に句形を「月と菊とに」と誤ったものと見ておられる（「芭蕉翁真跡田三反懐紙ほか」『俳文藝』二十九号）。『笈日記』は支考が先師ゆかりの各地を巡歴し、真蹟資料等を実地に見て編輯したものであり、採録の際の不注意な杜撰がかなり多いことも、既に今栄蔵氏の巨細にわたる考察があるので、森川氏の見方は首肯し得るし、『泊船集』や『蕉翁句集』が支考の所伝を承けたものらしいことも推測に難くない。ただ、『真蹟集覧』に「月と菊とに」の形で短冊の摸刻が収められているのは、この句形の信憑性を保証するものではあるまいか。つまり、支考の見たものとは別に、芭蕉は「月と菊とに」と書いたものも残していたわけである。「菊と月とに」とした懐紙は、細道旅行当時の筆蹟の特色を有するからこれが初案で、後に「月と菊とに」と改められたものと認められよう。同じことでも、「月と菊とに」の方が調べにゆとりが感ぜられる。

木因の隠居所を訪ねて、そのたたずまいを賞めた挨拶の句である。「月」は秋の代表的景物、「菊」もその時季のもので、何れも風雅な素材であるのに対して、「田三反」は生活の必需品で、この対照が句の興の中心になっている。一休の詠歌と伝えられる「山居せば上田三反味噌八斗小者ひとりに水のよき所」が古注以来引かれるが、確かにこの歌などが芭蕉の頭にあったのであろう。富裕というのとは違い、生きて行くのに事欠かないだけの物を持っているというので、花の隠逸なるものとされる「菊」とも響き合うものを持つ。上乗の挨拶句といえよう。句意については、「月を賞する為めにも、また菊を賞する為めにも、恰好な田が三反あつて」（服部畊石氏『芭蕉句集新講』）という風に、月

と菊を田に直結すべきではない。「とにゝ」は添加の意であって、「その上に」と取る方が、風雅と実生活との対照も鮮やかになるのである。

關の住素牛何がし、大垣の旅店を訪はれ侍りしに、彼ふぢしろみさかといひけん花は、宗祇のむかしに匂ひて

557 藤の實は俳諧にせん花の跡　（藤の実）

泊船集・蕉翁句集

秋季（藤の実）。

語釈 **○関の住素牛何がし** 「関の住素牛何某」。関（今の岐阜県関市）の住人である素牛何某という人。素牛は惟然の初号。広瀬氏。夙く隠遁して俳諧を嗜み、貞享五年六月岐阜に来遊した芭蕉に入門した。以後師翁に随従する機会が多く、最後の旅にも伊賀から大坂へ行を共にして、その臨終にも立会っている。芭蕉の跡を慕って風狂の行脚を続け、口語調の作句を以て知られた。正徳元（一七一一）年二月九日歿、年六十余。「素牛何がし」は、「曾良何某」（Ⅱ*267*前書）と同じく、わざとおぼめかした表現である。「願主蛭が小島の住、源の頼朝と書記」（『平家女護島』第三）「Giŭ. …… Giŭsuru. i, Sumu.」（『日葡辞書』）。**○大垣の旅店** 「須か川の旅店」（元禄二年四月何云宛芭蕉書簡）のように、芭蕉には「旅店」の語を普通の家（この場合は等躬亭）を指して用いた例もあるが、当面の文は文字通り旅籠屋の意としてよかろう。大垣城下竹島町（現岐阜県大垣市内）にあった旅宿六郎兵衛方を指すと見られる。［考］参照。「南都旅店」（『猿蓑』巻二、千那発句「誰のぞく」前書）。**○訪はれ侍りしに** 「訪はれ」の「れ」は軽い尊敬。**○彼ふぢしろみさかといひけん花** 「彼の藤代御坂と言ひけん花」。「ふぢしろみさか」は、熊野街道の藤代（現和歌山県海南市藤白）から峠を越えて橘本（現和歌山県海草郡下津町）に出る難所で、『万葉』以来の歌枕。『あら野』巻七に「関こえて爰も藤しろみさか哉」という宗祇の句を収め、「美濃国関といふ所の山寺に藤の咲たるを見て吟じ給ふとや」と注している。宗祇が関の山寺に藤の花の咲いているのを見て、此処も関を越えて藤の花を見るところは、紀の関を越えた彼方の歌枕藤代御坂と同じだと興じて、故郷紀州への思いを託したのである。よく知られた句なので「彼の」といった。「いふ」は、句を詠むこと。「けん」は、「……したという」

と伝聞による想像をあらわす用法。「花」は、いうまでもなく藤の花である。〇**宗祇のむかしに匂ひて**　「宗祇の昔に匂ひて」。宗祇の昔通りに美しい花を咲かせて、の意。この「匂ふ」は視覚上の美しさをいう。「宗祇」は既出（I *147*）。「水干を秀句の聖わかやかに　野水　山茶花匂ふ笠のこがらし　うりつ」（『冬の日』）。〇**藤の実**　「藤の実」。晩秋のもの。十センチ余の莢果で、緑色の果皮が堅く、全面に細毛が密生し、中に碁石のような扁平な種が数箇入っている。当時の歳時記類には見当らないが、この句ではこの語によって明らかに秋季の扱いになっている。［考］参照。「秋蟬の虚に声きくしづかさは　野水　藤の実つたふ雫ぽつちり　重五」（『冬の日』）。〇**俳諧にせん**　俳諧の題材にしよう、の意。「俳諧」は既出（I *181*）。〇**花の跡**　「跡」は「後」の宛字。花の後に実を結ぶのでいう。「花の跡けさはよほどの茂りかな　子珊」（『炭俵』上）「**Vôcajeno fuita atono yôna.**」（『日葡辞書』）。

大意　美しい藤の花は、その昔宗祇が句に詠んだが、花の後に結ぶ藤の実の方は、私が俳諧にしよう。

考　素牛の撰した『藤の実』（元禄七年刊）は最初に秋の部が置かれ、この発句と前書が巻頭を飾っており、集の題号は、いうまでもなくこの句に因むのである。古くから夏の句とする説があるが、初出本のそうした取扱いから見て採るべきではない。秋の頃芭蕉が大垣に居たのは、貞享元年九月と元禄二年八、九月であるが、前者は素牛との縁がまだ定かでなく、貞享五年六月岐阜で両者がはじめて俳席を共にした後の元禄二年の方が相応しい。恰かも戸田恕水の『日記』同年九月五日の条に、

芭蕉・路通明日伊勢之地江越ル由申に付、風防之ため南蛮酒一樽・紙子二表、両人之頭巾等之用意に仕候様に旅宿之亭主竹嶋六郎兵衛所迠申遣畢。

とあり、前書に「大垣の旅店」とあるのと符合する。恐らくこの前後に素牛が芭蕉を訪ねて来た時の吟であったろう。

素牛の郷里関から、この地での宗祇の吟を思い、藤の花から実へと想を展開した句である。恐らく関の藤の花の話題が出た折の即興であろう。だから「藤の実」は眼前に見ているものではなく、そこにこの句の観念性が胚胎している。しかし、藤の実のたたずまいは、如何にも鄙びた侘しいもので、その気分が俳諧に相応しい。その点を見つけたのがこの句の手柄である。

……藤の花は詩歌連俳ともにもてはやし、めでたきためしなるを、其実はをかしくさびて見捨られたる其姿こそ、よき俳諧の賜なれ。詩歌によまれし花のあとの実なれば、いかでかは捨べきや。俳諧の種にせんずるものをと解すべし。（素丸『説叢大全』）

此句は前文の趣、亦宗祇の吟に鑑し味べき也。其意は先宗祇法師は連歌に藤花を吟ず。我は亦其実を以て俳諧にせんと也。誠に花の優きは連歌也。実の異風なるは俳諧成べし。今案、此花の跡と云詞、宗祇を差て称美の語也。則宗祇の跡を慕の意にして花の跡と云、実を俳諧と云。是心の俳諧にして滑稽と云べし。（信天翁『笈の底』）

等、古注にしては珍しく要を得た解といえよう。右にもいう通り、「花の跡」には宗祇の句を花として称美する意があり、それに対して実なる俳諧の新境地を強く意識している。素牛に対して俳道を説こうとする意図が露わであるが、ここにあらわれた考えは、

春雨の柳は全躰連歌也。田にし取烏は全く俳諧也。……

詩歌連俳はともに風雅也。上三のものには余す所も、その余す処迄俳はいたらずと云所なし。（『三冊子』白雙紙）

と述べられたのと揆を一にするものであった。

みのゝくに朝長の墓にて

558 苔埋む蔦のうつゝの念佛哉　（花の市）

秋季（蔦）。

語釈　○**みのゝくに**　「美濃国（みのゝくに）」。岐阜県南部の旧国名。既出（Ⅱ*403*前書）。○**朝長の墓**　「朝長の墓（ともながのはか）」。「朝長」は、源義朝の次男で、頼朝の兄に当る人。平治の乱に平清盛に敗れた義朝と共に東国に落ちる途中、深傷の為に青墓宿（現大垣市青墓町）で父の手にか

かって果てた。その墓が青墓にあったのである。「沢菴の墓をわかれの秋の暮　文鱗」（『あら野』巻七）「Faca.」（『日葡辞書』）。○**苔埋む蔦の**　「苔埋む蔦の」。一面に苔むして蔦が這いからまる墓のさま。「埋む」は四段活用の他動詞で、ここでは形式上「蔦」にかかっている。この時代には同じ「埋む」で下二段の他動詞も生じているが、古い四段動詞として解し得るので、前者と見るべきであろう。「蔦」は秋の季語。既出（Ⅰ *193*）。「の」は、切字とはちがうが、ここで休止し、文脈が屈折する。「さし木つきたる月の朧夜　凡兆　苔ながら花に並ぶる手水鉢　芭蕉」（『猿蓑』巻五）「まことに山ふかく、白雲峯に重り、烟雨谷を埋ンで」（『野ざらし紀行』）「**Noqiniua coqe fucaqu muxite tçuqisaye vtocu narini qeri.**」「**Dǒni foneuo vzzumedomo, nauoba vzzumanu.**」（『日葡辞書』）。○**うつゝの念仏**　「現つの念仏」。「うつゝ」は、夢か現実かはっきりしない状態。「夢うつゝ」と同じで、朝長の念仏の声が聞えて来るように感ぜられるのである。「念仏」は音数の関係で「ネブツ」と短くよむ。「蚊屋臭き寐覚うつゝや時鳥　一髪」（『あら野』巻二）「烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜国　声よき念仏藪をへだつる　荷兮」（『冬の日』）「**Nenbut. Fotoqeuo nenzuru.**」（『日葡辞書』）。

大意　一面に苔むして蔦の這いからんだこの墓は、中から朝長の念仏の声が夢うつつに聞えて来るようだ。

考　初出の『花の市』（寸木撰）が芭蕉歿後の正徳二（一七一二）年の刊行なので、年代推定の手掛りは別に求めなければならない。朝長の墓のある青墓あたりを芭蕉が秋の頃通ったのは、貞享元年九月と元禄二年八、九月であった。野ざらしの旅の途次、「義朝の心に似たり秋の風」（Ⅰ *203*）の句を詠んだ頃とすれば句の内容には相応しいけれども、それも確証のないことである。元禄二年九月初めまでには成っていたものと見て、姑く此処に配しておく。

朝長は父の命によって青墓から信州へ赴こうとしたが、深傷の為に動けなくなったので、自ら申し出て義朝の手にかかった。『平治物語』の中でも酸鼻を極めた一条であって、最期に当って念仏を唱えたことが、軍記にも謡曲「朝長」にも見える（謡曲では自害したことになっている）。この句の「うつゝの念仏」については、作者自身の現実に唱える念仏と取る説もあるが、やはり伝えられるような朝長の最期に唱えた念仏の声を、夢うつつの間に聞く思いがすると解すべきであろう。語が重なり絡んで一見その意を得難い表現であるが、［語釈］で述べたように、「蔦の」の

ところで屈折する文脈と見れば、それ程難解の句ではないと思う。また、表現の背景として、『伊勢物語』九段に、
ゆきゆきてするがのくににいたりぬ。うつの山にいたりて、わがいらむとするみちは、いとくらうほそきに、つたかへではしげり、物心ぼそく、……
云々として見える「するがなるうつの山べのうつつにもゆめにも人にあはぬなりけり」の歌を考えるべきことは、諸注に指摘する通りである。但しそれは飽くまで言葉の上の縁であって、
「宇津の山」で「蔦」を連想し、同音から「うつつ」を導き出すのは、詩歌藝文の常套であった。朝長と業平、青墓と宇津の山では、直接のつながりはないが、墓石に這う紅葉に、朝長の哀れが身にしみ、その念仏の声が心耳に聴えて来たことが、「蔦のうつつ」という表現となったのである。本歌取りの作品だから、当然本歌の「うつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」の感慨を裏に含み、昔の人に逢うことが出来ないという詠歎が流れているのである。……旧蹟を過ぎるとき、芭蕉が鎮魂の一句を手向けないではいられない心の動きをうかがうに足る。
(『芭蕉全発句』)
という山本健吉氏の説が的確であろう。

い勢にまかりけるを、ひとの送りければ

559 蛤のふたみに別行秋ぞ (某氏蔵真蹟懐紙)

蛤のふたみへ別行秋ぞ (九月廿二日付杉風宛書簡)

大阪美術倶楽部入札目録所載真蹟懐紙・おくのほそ道・陸奥鵆・道のかげ

其袋・後の旅・泊船集・蕉翁句集草稿・類柑子

秋季(行秋)。

語釈 **○い勢にまかりけるを** 「伊勢(いせ)に罷(まか)りけるを」。「い勢」は、今の三重県の海に面した地方の旧国名。元禄二年九月初め、細道

の旅を終えて伊勢神宮参拝に向うことをいう。**○ひとの送りければ**　大垣の門人知友達が芭蕉を見送ったことを指す。**○蛤のふたみに**　「蛤の二見に」。「ふたみ」は、神宮に近い伊勢の海岸の地。既出（Ⅲ451前書）。ここでは貝の「蓋・身」に言い掛けて、「蛤が蓋と身に分れるように」という意を利かせた。「みに」には「見に」も掛けてあるであろう。「蛤」はマルスダレガイ科の二枚貝。殻は長さ八センチ位で略々三角形、肉は美味である。「海上に遊ぶ日は、手づから蛤をひろふてしら魚をすくふ」（木因「句商人」『桜下文集』）「Famaguri.」（『日葡辞書』）。**○別行秋ぞ**　「別れ行く秋ぞ」。「蛤が蓋と身に分れる」「人々に別れ行く」から「行く秋」と続けた。「行く秋」は、秋の末をいう季語で、秋を惜しむ気持がある。「ひみといふ山にて卯七に別て」（『猿蓑』巻三、去来発句「君がても」前書）「行秋の四五日弱るすゝき哉　丈艸」（『猿蓑』巻三）「Vacare, ruru, eta.」（『日葡辞書』）。

大意　行く秋の今、蛤のとれる二見を見に、貝が蓋と身に分れるような別れ難い思いを残して、私は人々に別れて旅立つのだ。

考　「元禄二とせの秋、みのゝ国大がきよりいせのせんぐうにまうで侍しふねのうちにて、おくりける人々に申たる句」（大阪美術倶楽部入札目録所載真蹟懐紙）「おなじくいせの国出るとて」（『其袋』）「翁此所より伊勢へうつり給ふ時、我舟にて送り侍るに」（『後の旅』）「遷宮なりとて」（『陸奥鵆』）「元禄二とせの秋、みのゝ国大垣よりいせのせんぐうにまうで侍りしふねの中にて、おくりける人に申たる句」（『泊船集』『蕉翁句集草稿』）「遷宮おがまんとてみのゝ国立出るに、船にのる所まで送ける人に」（『類柑子』）「虫の声もかれ〴〵に、松吹かぜの何んとやらむ」（『道のかげ』所収自画賛）等の前書があり、『おくのほそ道』には、大垣に入って門人達に長途の疲れをいたわられた記事の後に、

　旅の物うさもいまだやまざるに長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと又舟にのりて

とし、この句を掲げて大尾としている。なお、土芳の『句集草稿』は、句を書いた後に「此句前書白船（ママ）の趣也。細道の文の別也。かやうにも書て人に送られ侍るか」という注が見える。曾良の『日記』元禄二年九月六日の条には、

　辰尅出船。木因馳走。越人船場迄送ル。如行・今一人、三リ送ル。餞別有。

とあり、送行の状を知ることが出来る。前記『後の旅』の前書では如行の船のような書き方をしているが、九月廿二

日付杉風（推定）宛芭蕉書簡には、

木因船に而送り、如行其外連衆舟に乗りて三里ばかりしたひ候。

秋の暮行先〻は苫屋哉　木因

萩にねようか荻にねようか　ばせを

霧晴ぬ暫ゝ岸に立玉へ　如行

蛤のふたみへ別行秋ぞ　愚句

とあり、芭蕉の乗船は木因の持船だったのであって、如行は別に船を仕立てて見送ったのである。この時の木因の文には、「ばせを、いせの国におもむきけるを舟にて送り、長嶋といふ江によせて立わかれし時」として「荻ふして見送り遠き別哉」という自作を録しており、長嶋までは木因も同行したものと見られる。「霧晴ぬ」は如行の餞別句であった。伊勢へは曾良の外に路通も同行したと思われる。

当時の書簡や板本初出の『其袋』、それに大垣の資料に基づいたとおぼしい『後の旅』等が「ふたみへ」であるから、初案が「へ」であったことは確かである。この形だと二見の地へ赴くことは強くあらわれるけれども、蛤が蓋と身に分たれることに託された惜別の情の印象が弱い。「ふたみに」とすると、「蛤の」と「別行」のつながりが円滑になり、それぞれの語が生々躍動して来る。一字のちがいでも、後案の方が佳とされる所以であろう。本位句の底本とした真蹟懐紙は、旅の後間もない時期の染筆と見られ、改案は夙くに行われたわけである。

「蛤の蓋身」↓「二見」↓「分れ行く」↓「別れ行く」↓「行く秋」と、徹頭徹尾言葉の文(あや)による興で仕立てられており、「いまぞしるふた見の浦のはまぐりをかひあはせとておほふなりけり」（『山家集』下）の西行歌も思い合わされているとすれば、技巧は更に複雑になる。しかし貞門以来の縁語仕立てで育った芭蕉にとって、これ位のことは朝飯前で、取立てて難しいことではなく、極く軽い気持で作ったのではあるまいか。長途の旅を終えて大垣に入ってから

約半月、又も旅心が動いて遷宮奉拝へと向う心のはずみが、おのずからこの句の軽い縁語仕立てに反映しているとも言えよう。「蛤の」を枕詞の俳諧化とする見方もあるが、二見のみならず下の「別行」にもかかって行くので、枕詞よりは働きの多い表現である。

そういう軽い調子に乗せて、この句には川岸の芦荻に鳴る秋風の索々たる響きを聴くような気分が感ぜられる。丁度前掲の「秋の暮」「萩にねようか」という木因との付合と同じ季節感を覚えるのは、私だけの思いなしであろうか。旅人の漂泊の思いに限りはなく、『ほそ道』という作品の中でいえば、それは冒頭の「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」という旅の哲学や、「草の戸も住替る代ぞひなの家」の無常観、「行春や鳥啼魚の目は泪」の別離の悲哀と照応するものになっている。蛤の句でも「行秋ぞ」という重々しい助詞が用いられ、『おくのほそ道』は嫋嫋たる余韻をのこして終るのである。

560　うき我をさびしがらせよかんこ鳥　（猿蓑）

嵯峨日記・泊船集・俳諧問答・篇突・草庵集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・かんこどり塚

伊勢の國長嶋大智院に信宿ス

うきわれをさびしがらせよ秋の寺　（真蹟色紙）

夏季（かんこ鳥）。

語釈　○**うき我**　「憂き我」。憂鬱な思いを懐く自分。「うき」は、人生に対して抱く漠然とした憂愁である。「とへかしななさけは人の身のためをうき我とても心やはなき」（『山家集』下）「**V-i.**」（『日葡辞書』）。○**さびしがらせよ**　「寂しがらせよ」。閑寂の境地を自ら求める心境の表現である。○**かんこ鳥**　「閑古鳥」。ほととぎすの一種郭公の古称。体色はほととぎすと殆んど同じく、カッカッコウとせわしく鳴く。夏の季語。「鳲鳩……和俗是をかんこ鳥と称す。或は又かつぽ鳥などいへる、皆其声の撥穀又は割麦によ

れり。又郭公の訛語なるべし。此鳥啼て麦を刈の時とす」（『滑稽雑談』）「佗しらに貝ふく僧よかんこ鳥　其角」（『続虚栗』）

「Cancodori. I, Campodori.」（『日葡辞書』）。

大意　鳴く閑古鳥よ、物憂い思いを懐く私を更にさびしがらせてほしい。閑寂の境地にひたすら浸りたいのだ。

考　『草庵集』（句空撰、元禄十三年刊）に「此句あまたの集に見へ侍れど、自筆にてかく前書侍しなり」として「西行のよめる、／山ざとにこは又たれをよぶこ鳥ひとりすまんと思ひしものを」という前書を紹介しており、『石見かんこどり塚』（百草園撰、安永元年刊）にも、「やまざとにこはまたゝれをよぶこどりひとりすまんとおもひしものを　とよみ侍しは、いづれのやまのおくにやあらむ。予も一とせ、かりに山居のまなびせしころ」という前書が見える。元禄四年の『嵯峨日記』四月二十二日の条、芭蕉自身のむだ書きの中に、右の西行歌や木下長嘯子の文を引いた後、

……予も又、

うき我をさびしがらせよ閑んこどり

とは、ある寺に独居て云し句なり。

と述べてあり、これは土芳の『蕉翁句集草稿』に、

此句自筆物に、或寺に独居而云し句也と有。

とあるのとも関連が考えられるものである（現に同草稿断片に、『嵯峨日記』の文を引用したものが存する）。これらによって、閑古鳥の句は元禄四年以前に或る寺に於いて成ったものと見られるが、これを裏書きするのが長嶋の大智院に伝蔵される発句色紙である。曾良の『日記』によると、元禄二年秋、神宮の遷宮拝観の為に大垣から伊勢山田に向う途中、芭蕉は曾良の伯父精秀の住持する大智院に九月六、七、八日の三晩逗留した。前書に見える「信宿」は二晩泊りのことであるが、『日記』八日の条には「雨降ル故、発足延引」とあるから、芭蕉は恐らく八日に立つ積りで、七日の晩か翌朝にこれを認めたものと思われる。この時の初案は時節通り「秋の寺」だったのを、後に「かんこ鳥」

として夏の句としたのであった。ところで、「元禄三初秋日」に書かれた芭蕉真蹟「幻住庵記」棚橋本に、「木つゝきのつゝく共いでじ。かつこ鳥我をさびしがらせよなど、そゞろに興じて」という一節があり（これに先立つ米沢本には「木つゝきのつゝくともいでじ。かつこどり我をさびしがらせよなど、独よろこび」）、これによれば「かんこ鳥」と改案された時期は『嵯峨日記』の折よりも早く、元禄三年七月以前であり、四月初めからの幻住庵滞在中に得た案と思われる。初案とは季節が変り、最初はなかった「かんこ鳥」が入ったわけであるが、『笈の小文』の旅で、「郭公宿かる比やふぢの花」という夏季の初案を、「草臥て宿かる比や藤の花」（Ⅱ378）と春の句に案じ替えたのと似た場合と考えれば、敢えて異とするには当らぬであろう。

最初の案は大智院での吟であるだけに、寺への挨拶が主となって、その閑寂なたたずまいを賞める気持が明らかに出ている。「秋の寺」は如何にも取って付けたようで拙いけれども、「うき我」という把握は、俗世になじまない自らの境涯を確かに言い取っており、その憂愁を更に徹底させようとする欲求が「さびしがらせよ」という呼び掛けになるのである（嘗て志田義秀博士は、『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』で「秋の寺」を「秋の鳥」かと疑われたが、この色紙の字体は明らかに「寺」とよむべく、筆蹟にも疑いはない）。その呼び掛けの対象として「かんこ鳥」を案ずるに至ったのは、幻住庵に居て「山ざとにたれを又こはよぶこ鳥ひとりのみこそすまんとおもふに」（『山家集』上）という西行歌を思ったからであろう。呼子鳥は閑古鳥（郭公）のこととも時鳥のこととも いわれる鳥であり、石山の奥なる幻住庵は山里というに相応しい（「山ざとに」の歌は前引『嵯峨日記』の条にも引く）。或いは「夏山に鳴く郭公心あらば物思ふ我にこゑなきかせそ」（『古今集』巻三、よみ人しらず）の古歌の連想も加わって、我には啼声をきかせよと一転した作意かも知れぬ。西行歌にしても、独栖を願う心に呼子鳥の声を憂しとする意であり、それに対して我は閑古鳥の声を聴こうとするのは、俳諧でもあり、一段と深まった心境ともいえよう。同じ西行歌でも、「とふ人もおもひたえたる山ざとのさびしさなくばすみうからまし」（『山家集』）には、「かんこ鳥」の句に通ずるものを持っている。安東次

男氏は『芭蕉』に於いて、『嵯峨日記』や長嘯子の文に重点を置いて説いておられるが、何れにせよ、そのような「閑」への志向は、一年前の幻住庵の時代にも同様に窺えることなのである。「かんこ鳥」の句は『猿蓑』に収められたもので、嵯峨の落柿舎に居た四月二十二日に成案を得たのでは、刊行までに時間的余裕が無さ過ぎると思う。『猿蓑』の丈草跋は五月に成り、刊行は阿誰軒の目録に七月三日と見えるのだから。

この句は閑寂の究極を求める心境句として古来評価が高い。近代の説も、

句の表面では、閑古鳥に呼びかけた形になつて居るが、これは寧ろ、自分の裏の未知なものに対して呟いたのだと見る方が妥当のやうである。このえたいの知れない物憂れはしい心持、その心持を更に突き詰めて、自分の寂しさの本体を明らめようとする願ひ、それが偶々、閑古鳥といふ一のミヂアムを通じて現はれて来たのである。……それだけに、句として意識的に主観を打ち出して来て居るので、渾然たる味ひに乏しい憾みがないでもない。しかし芭蕉の心境の発展の跡を考へて見るものにとつては、見落してならない句である。（半田良平氏『芭蕉俳句新釈』）

「一鳥啼かずして山寂々」よりは「鳥啼いて山さらに幽なり」の方が詩である。ここも閑古鳥が啼いて寂しさが出るのである。まだ世を離れてしまへないところの憂き吾れをさらに一進せしめよと閑古鳥によびかけるのである。道心的情操の現はれた句である。（『続芭蕉俳句研究』幸田露伴）

といった見方は確かなところで、評価も穏当であろう。ただ、この句は深沈とした気分を感受するだけで足るものではない。これを引いた「幻住庵記」の文に「独よろこび」（米沢本）「そゞろに興じて」（棚橋本）等とあるのに留意すべきで、『嵯峨日記』の無駄書きにしても閑適の逸興であった。呼び掛けの体をとったことや「かんこ鳥」の語の持つ明るく弾んだ響きが、作者の興じた心の動きを伝えている。はしゃぐわけではないが、ふと微笑を催すような気分を添えて鑑賞したい句なのである。

561
内宮はことおさまりて、下宮のせんぐうおがみ侍りて
たふとさにみなおしあひぬ御遷宮　（真蹟懐紙）

秋季（御遷宮）。

語釈　○内宮　「ナイクウ」。皇祖天照大神を祀る皇大神宮のこと。「みもすそ川のかげきよく、げくうは四十まつしや、ないくうが八十まつしや」（『松の葉』第三巻、祭文）。○ことおさまりて　「事収まりて」。行事が既に終って、の意。元禄二年の内宮の遷宮は九月十日であった。「お」は「を」の仮名ちがいである。「Vosamari, ru, atta.」（『日葡辞書』）。○下宮　「外宮」の誤り。穀物の神豊受大神を祀る豊受大神宮のこと。既出（Ⅱ348前書）。伊勢神宮は内宮と外宮、それに付属する末社で構成されている。○せんぐう「遷宮」。二十年に一度新しい神殿を造営して本殿を移す儀式。ここは伊勢神宮の場合であるが、他の神社でも行われる。「太神宮は諸国の役夫工米をもて廿一年にかならず遷宮造替の事あり」（『樵談治要』）。○おがみ侍りて　「拝み侍りて」。「お」は「を」の仮名ちがいである。既出（Ⅰ240、Ⅱ390）。○たふとさ　「尊さ」。伝統的な神事の荘厳さをいう。「あはれにかなしく、たうとさなど思ふに、なみだせきとゞむべきかたもなくて」（『古本説話集』）「Tôtosa.」（『日葡辞書』）。○みなおしあひぬ　「皆押し合ひぬ」。この「おしあふ」は、拝観の群衆が肩を接して、ぎっしりと堵列した有様をいったのであろう。「落ぬべきまで簾は り出て、おしあひつゝ、一事もみもらさじとまぼりて」（『徒然草』百三十七段）「Voxiai, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○御遷宮　「ゴセングウ」。「迁」は「遷」の俗字。伊勢神宮の御遷宮は持統天皇の御代に始まり、期日は時代によって区々であったが、大体陰暦の九月に行われる例だったので、秋季に配される。「御遷宮過て大工の夜は永し　菊阿」（『正風彦根躰』第七）。

大意　御遷宮式の尊さに、人々は皆互いに押し合うようにして拝観したことだ。

考　『泊船集』には真蹟懐紙と同じ前書があり、『蕉翁句集』も「内宮はことおさまり、外宮はせん宮おがみ奉りて」と前書する。『皮籠摺』（涼菟撰、元禄十二年刊）は序中に引用。真蹟は昭和五年六月の大阪美術倶楽部入札目録に写真版が載っているが、今所在は明らかでない。曾良の『日記』によると、芭蕉は長嶋の大智院を九月九日に立ち、桑

名・津・久居を経て十一日に山田に入ったが、十三日の『日記』には、

内宮参宮。未ノ尅帰テ、迁宮拝事ヲモヨヲス。小芝土やヲ尋テ、岡本岩出将太夫ヲ尋テ、両人同道ニテ暮前ゟ神前詰。子ノ尅前御舩渡ル。神宝ハ夕方ヨリ運ブ。月ノ気色カンニタリ。

とあり、この日外宮の遷宮を拝観したことが知られる。前述の如く、内宮のそれは既に十日に済んだのであった。『日記』にあるように、芭蕉はこの日御師二人の案内で夕方から外宮の神前に詰めていた。神霊の渡御のある真夜中まで、二十年に一度の大きな儀式を拝みに全国から集まった群衆の中に身を置いていたのである。加藤楸邨氏がいわれた通り、前の年の「何の木の花とはしらず匂ひ哉」(Ⅱ343)が神前に「ひとり虔しむ心」(『芭蕉全句』)なのに対して、この句は「多くの人々の中に身を置いて、それと一つになりながら味わっている」(同上)趣がある。基調は勿論虔ましさであるが、押し合うようにして拝観する原因が「たふとさ」であるかのような言い方をしたところが俳諧であろう。しかもこのユーモアは、何の厭味もなく句の中に融け込んで、「何の木の」の句とはちがった明るい浮き立つような気分をかもし出している。其角の『雑談集』(元禄五年刊)に、自作の「大工達の久しき顔や神の秋」と並べてこの句を挙げ、

誹諧に新古のさかい分がたし。いはゞ情のうすき句は、をのづから見あきもし、聞ふるさるゝにや。又、情の厚き句は、詞も心も古けれども、作者の誠より思ひ合ぬるゆへ、時に新しく不易の功あらはれ侍る。

と述べているのは、主として芭蕉の句に対する評言とおぼしく、この句を敬神の誠から発した情の厚きものとし、詞も心も殊更新しみはないが、しかもなお新味があり、「不易」のあらわれたものと見ている。芭蕉はここで「たふとさ」以外に神霊や儀式について何も言わず、ただ群衆のさまを通じて御遷宮の雰囲気を描いた。その辺がこの句の新しさであろう。後年の『炭俵』所収梅が香の歌仙に、

町衆のつらりと酔て花の陰　野坡

門で押るゝ壬生の念仏　　芭蕉

という一連があるが、芭蕉は京壬生寺の念仏会に集まった群衆の雑踏を「押るゝ」の一語で言い取っている。御遷宮の句と似た例であって、並々ならぬ芭蕉の描写力を窺うことが出来る。

二　見

562 硯かと拾ふやくぼき石の露　（九月廿二日付杉風宛書簡）

芭蕉句選・麦林集

秋季（露）。

語釈　○**二見**　「フタミ」。既出（Ⅲ559等）。○**硯かと拾ふや**　「硯かと拾ふや」。「硯」は、墨をする為の石製の筆記用具。「や」は詠嘆の切字。「鹿のふむ跡や硯の躬恒形　素龍」（『炭俵』下）「Suzuri.」（『日葡辞書』）。○**くぼき石**　「窪き石」。中が凹んでいる石。「くぼし」は、凹んだ状態をいう形容詞である。「田舎合子のきはめて大にくぼかりけるに、飯うづたかくよそゐ」（『平家物語』巻八）「Cuboi.」（『日葡辞書』）。

大意　二見の浜辺で、中のくぼみに秋の露のたまった石を見つけた。ふと西行の使った硯かと思って拾い上げて見たことだ。

考　この句を収めた芭蕉書簡に宛名はないが、細道の旅を終えて大垣から伊勢へ赴く時の木因との付合や「蛤のふたみへ」の句を報じているので元禄二年九月伊勢滞在中の執筆と推定される。また、二見の夫婦岩と蛤を描いた杉風の画と共に貼り込まれており、杉風が自分宛の書簡の末尾に自画を配して一軸に仕立てたものと見てよかろう。この時曾良が芭蕉と別れるまでの『日記』には、二見行の事が見えないから、その日以降二十二日までの間に作られた句ということになる。『麦林集』（寛保・延享頃刊）には、「桜貝けふや二見を帰花」の句の前書中に引かれている。

『西行上人談抄』の冒頭に、

西行上人二見浦に草庵結びて、はまおぎ折しきたるやうにてあはれなるすまひ、みるもこゝろすむさま、……硯は石の、わざとにはあらで、もとより水いるゝ所のくぼみて、すゞりのやうなるが、筆置所などもあるをゝかれたり。

とあるのを背景にした趣向であることは、古くからいわれている。「露」は季のあしらいとして置かれたまでで、西行を慕う気持から出た逸興である。

563

月さびよ明知が妻のはなしせむ　（真蹟懐紙）

又玄子妻にまいらす

將軍明知が貧のむかし、連哥の會いとなみかねて侘侍れば、其妻ひそかに髪をきりて、會の料にそなふ。明知いみじくあはれがりて、いざ君、五十日のうちに輿にものせんといひて、頓て云けむやうになりぬとぞ

―― 俳諧勧進牒・泊船集

伊勢國又玄が宅にとゞめられ侍るころ、其妻の男の心にひとしく、物ごとまめやかに見えければ、旅の心をやすくし侍りぬ。かの日向守が妻、髪を切て席をもうけられし心を、いまさら申出て

月さびて明智が妻の咄せむ　（芭蕉庵小文庫）

―― 蕉翁句集

秋季（月）。

語釈　**○将軍明知**　「シヤウグンアケチ」。織田信長配下の将明智光秀のこと。「知」は「智」の誤り。彼は征夷大将軍だったことは

ないが、信長を弑した本能寺の変後、秀吉と戦って敗死するまで十日程の間は天下人だったので、そういう意識から「将軍」と冠したのかも知れない。単に武将という意味で「将軍」ということは、中世から近世にかけて余り例がないと思う。「義兵をあげて朝敵をなびかすより、恩賞しきりにくはゝりて、将軍のめしをえたり」(『東関紀行』)「Xôgun. i, Cubôsama.」(『日葡辞書』)。**○貧のむかし**「貧の昔」。光秀が貧しかった頃をいう。以下の話は、彼が若い頃越前の朝倉義景に仕え、致仕した後の事と伝えられている。**○連哥の会いとなみかねて侘侍れば**「連歌の会営み兼ねて侘び侍れば」。この「連哥」は本式の連歌をいう。「哥」は「歌」の略体。金が無くて、連歌の会の亭主役を勤めることが出来ずに困っていると、の意。「**Vtano quai.**」(『日葡辞書』)。**○其妻**「其の妻」。光秀の妻は、妻木勘解由左衛門範熙の女と伝えられる。**○ひそかに髪をきりて**　夫に内緒で髪を切ったのである。女性が髪を切るのは、後家になって出家するような場合だから、安易に出来ることではなかった。「髪きりても捨られぬ世／後家なびける事」(『好色一代男』巻二目録)。**○会の料にそなふ**「会の料に備ふ」。「そなふ」は、用立てる意。連歌の会の費用に用立てた、というのである。「そのかみ南良の八重桜の料に附られけると云伝えはんべれば」(『猿蓑』巻四、芭蕉発句「一里は」前書)「両六波羅ト号シテ、西国ノ沙汰ヲトリ行セ、京都ノ警衛ニ備ラル」(『太平記』巻一)「**Reô.**」「**Sonaye, uru, eta.**」(『日葡辞書』)。**○いみじくあはれがりて**　大変不愍に思って。「いみじくつき〴〵しく輿ありて人ども思へりける」(『徒然草』二百三十一段)「かう〳〵なむ思ふといひければ、あはれがりて、きてねにけり」(『伊勢物語』六十三段)「**Imijij.**」(『日葡辞書』)。**○いで君**　さあ貴女。「いで」は、自ら思い立って行動しようとする気持をあらわす感動詞。「いでや」(Ⅱ*291*)参照。「いで人ゝに乱舞まうて見せんとて」(謡曲「柏崎」)「**Ide mono mixô.**」(『日葡辞書』)。**○五十日のうちに輿にものせん**「五十日の内に輿にも乗せん」。五十日以内に輿に乗るような身分にしてやろう、の意。「輿」は、人の乗る台の下に二本の轅をつけ、それを担いだり提げたりして運ぶ乗物。さまざまの形があり、身分のある人が乗用にした。「ものせん」を「物せん」とする説もある。動詞「ものす」が種々の動詞の代用となることは事実であるが、「乗る」ことを「物す」といった例があるかどうか。また、あったとしても、ここは「乗せん」として通ずるので、上の「も」は間投助詞と見ておく。「はやく〳〵輿にめさるべし」(謡曲「邯鄲」)「車をさしよせて、たゞのせにのせ給へば」(『和泉式部日記』)「**Coxini mesaruru.**」(『日葡辞書』)。**○頓て**「頓て」。ここは或る程度の時間が経過して、そのうちに、という場合である。「頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て馬を返しぬ」(『おくのほそ道』)「**Yacate.** ……**1, Yagate.**」(『日葡辞書』)。**○云けむやうになりぬとぞ**「云ひけむ様に成りぬとぞ」。言った通りになったということだ、の意。「云ひけるやうに」といっても同じで、

「けむ」と推量の助動詞を用いたのは、一種の婉曲法である。「かひける犬の、くらけれどぬしをしりて、飛付たりけるとぞ」(『徒然草』八十九段)。○**月さびよ**　「さびよ」は動詞「寂ぶ」の命令形。老熟した、或いは閑寂な趣あれかしと、月に呼び掛けたのである。この寂びた趣は、心敬の『さゝめごと』下に「歌をばいかやうによむべき物ぞと尋ね侍れば、枯野のすゝきあり明の月とこたへ侍り。これはいはぬ所に心をかけ、ひえさびたるかたをさとり知れとなり」とあるのに通ずるものであろう。「Sabi, uru, ita. ……Sabita tocoro.」(『日葡辞書』)。○**はなしせむ**　「話しせむ」。「借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄しをさせ」(『世間胸算用』巻二ノ三)「Fanaxi.」(『日葡辞書』)。○**又玄子妻**　「イウゲンシノツマ」。「又玄」は伊勢山田の平師職島崎味右衛門清集の俳号。「子」は軽い敬称である。貞享五年春山田での歌仙に芭蕉と一座して門人となった。寛保二(一七四二)年十二月七日歿、享年七十二。元禄二年には十九歳の若冠であり、その妻も若かったと思われる。又玄の家は当時御師仲間の苛烈な競争の中で苦境にあった。○**まいらす**　「参らす」。句文を書いて進上する、の意。「い」は「ゐ」を用いるのが正しい。「薬のつぼに御文そへ、まいらす」(『竹取物語』)「Mairaxe, suru, eta.」(『日葡辞書』)。

大意　月よ、寂しく照らして閑寂の趣を添えてくれ。その光のもとで、あの明智の妻の話をして上げよう。あなたのまめやかな心遣いには、きっと良い果報があろうよ。

考　『俳諧勧進牒』(路通撰、元禄四年刊)の前書は、『芭蕉庵小文庫』と小異があるに過ぎず、これらは「将軍明知」云云の真蹟懐紙とは別の真蹟に基づくものであろう。句の成った時の事情について委細を述べてあり、『勧進牒』に初出するところから、これはその撰者路通に与えたものと推定される。句の成立事情はこれによって知られるが、芭蕉が秋に伊勢山田辺に居たのは貞享元年と元禄二年であって、前者の場合は又玄との交渉に確証がなく、且つ又玄の年齢も若過ぎる嫌いがある。これに対して元禄二年は、曾良の『日記』元禄二年九月十二日の条に、

　辰ノ尅舘ノ長左ヘ尋テ、嶋崎味右衛門西河原ノ宿ヘ移ル。……

とあり、同十五日の条には「卯ノ刻味ヱ門宅ヲ立。翁・路通中ノ郷迄被送」とも見えて、又玄との交渉が明らかである。曾良は十五日に山田を去ったけれども、芭蕉はその後も滞在して二見などに赴き、九月二十二日に杉風宛の手紙

を書く頃までは山田に居たものと思われ、恐らくずっと又玄の家に逗留していたのであろう。その間の妻のまめまめしい勤めぶりを謝して贈ったのが「将軍明知」云々の句文であり、別に前後の事情を記した文も書いたのであった。安東次男氏は、この句の成ったのを外宮の遷座を拝んだ九月十三夜と見ておられるが、なお確説とはし難い（『芭蕉発句新注』参照）。

句形の異同については、「月さびて」では中七以下との関係で措辞不束かなことは一目瞭然である。同じ資料に基づいて『小文庫』よりは年代の早い『勧進牒』が真蹟懐紙と一致する「月さびよ」なのだから、『小文庫』の句形は杜撰と断じてよい。なお、真蹟懐紙は菊本直次郎氏の旧蔵で、『続蕉影余韻』に写真が収められたものであるが、今は所在不明という。

光秀の妻の話は余り古い物には見えない。大田南畝の『一話一言』巻十五に元禄頃の随筆からの抄録として「光秀の事」の一条があり、それによると、彼の朝倉家退去後のこととして、左の如き話が見える。

……其外古キ侍ノ末多キ故ニ、連歌ナドシテクラシケルガ、アル時手前ヘ人数呼集ルトテ、其モテナシヲ内儀ヘ申付ケレドモ、自分ノ食モキレケレバ、イカヾセント思ケレドモ、事急ニナリヌレバ、内方ノ髪ヲ切テ銀廿目ニウリ、其日ノ支度ヲ思ノマヽ、ニセラレタリト也。

光秀の妻が生活の為に髪を売った話は『太閤記』にも載せるが、連歌の会にまつわる話は右の『一話一言』に伝える話だけのようである。何処まで根拠のあることとか保証の限りではないが、芭蕉はこの話を知っていたのである。又玄は十一歳で父を失って以来、年端もゆかぬ身で傾く家運を支え、苦労を重ねていたという。芭蕉が細道の旅の後の参宮の際に、知人も多い山田で何故特に又玄の家に滞在したのか、こまかい事情は明らかでないが、芭蕉はその家の暮らしぶりから、光秀の貧乏時代の話を思い出したのであろう。斜陽の宿屋稼業に恐らくは使用人も少く、主人夫婦自ら芭蕉の接待に勤めたらしく、「男の心にひとしく」（『勧進牒』『小文庫』等前書）という一節がその事を示している。その

まめやかさに感じて、妻女に挨拶として贈った句に「明知が妻のはなし」を趣向としたのであった。夫を支えて努める貴女のような人が居れば、やがては家運も持ち直して明智の家のようになるだろうと、将来の果報を祝ったのである。「明知が妻のはなしせむ」という軽やかな興に、「月さびよ」と深沈とした趣の月光を配したところ、独得のすぐれた表現効果を生んでいる。又玄夫婦の現況と光秀の貧乏時代の昔譚との気分は「さびよ」によって生かされ、上乗の挨拶句となったのである。

板本去来抄

いせの國中村といふ所にて

564

烁の風伊勢の墓原猶すごし　（花摘）

秋も末伊勢の墓原尚淋し　（荒小田）

秋風や伊勢の墓原なをすごし　（荒小田）

伊勢之國中村といふ處にて

秋風の伊勢の墓原猶すごし　（蕉翁句集）

秋季（烁の風）。

語釈　**○いせの国中村**　「中村（なかむら）」は、今の伊勢市中村町。宇治六郷のうち下四郷の一で、伊勢神宮領。内宮の別宮月読宮、同摂社宇治山田（ようだ）神社があり、墓地にはもと菩提山神宮寺にあったという曼荼羅石が見られる。**○烁の風**　「烁」は「秋」の本字。**○墓原**　「ハカハラ」。墓地のこと。「ハカワラ」と発音する。「松のあひく〳〵皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も終はかくのごときと悲しさも増りて」（『おくのほそ道』）「**Facauara. i, Facadocoro.**」（『日葡辞書』）。**○猶すごし**　「猶凄（なほすご）し」。一層物すごい。「すごし」は物さびしくすさまじい感じをいう。既出（Ⅰ*141*、Ⅱ*445*）。

大意 秋の風が墓地に吹き渡る。この伊勢の墓原は、ただでさえ物寂しいのに、秋風の吹く中では一層すさまじい感じだ。

考 『荒小田』（舌羅撰、元禄十四年刊）には、「秋も末」の句を挙げた後に「これは翁の吟なりと路通がかたりたるよし、備後の国より聞ゆ。又伊勢なる人のつたへしは、枕かへしといふところにて、秋風や伊勢の墓原なをすごしとなん」と付記して、二つの句形を伝えている。初出の其角の『花摘』（元禄三年刊）には五月四日の条に見え、それ以前の秋に芭蕉が伊勢に居たのは貞享元年と元禄二年であったが、右の『荒小田』の記事中に、路通がこの句を備後方面に伝えたとあるのに注意すべきであろう。元禄二年九月芭蕉に随伴して伊勢にあった路通が、この句を知り得たのは極く自然であるから、句の成立は細道の旅の後の伊勢滞在中と断じてよい。

墓地の凄涼な雰囲気は何処も同じであろうが、秋風の吹き渡る中では、すさまじい気分が一入であるという意と思われる。「秋風は悲愁感をともなうものであるが、ここ荒涼たる伊勢の国の墓原に立って秋風をきくと、なおさら凄涼の感がする」（『日本古典文学大系・芭蕉句集』大谷篤蔵氏）「秋風はただでさえもの悲しいのに、荒涼とした伊勢の墓原を吹きわたると、もうもの悲しさを通り越して、すごみさえ感じられる」（今栄蔵氏『新潮日本古典集成・芭蕉句集』）等の解では、秋風が主題となるけれども、この句はやはり「伊勢の墓原」を主題としたものと見るべきであろう。特に「伊勢の」といったのを故有りとして、「神道には生を尊び死を忌の義あれば、猶の字むなしからじ」（杜哉『蒙引』）という見方がある。大谷氏が『句集』に引用された足代弘訓の『伊勢葬式の儀御尋御答』によれば、伊勢では死者の穢れを甚だしく忌む為に、病人の息が絶えないうちに墓地に運んでしまい、絶息して土中に埋葬して始めて死去の取扱いにする「早駈け」という作法があるそうである。この句の「伊勢の墓原猶すごし」にそのような背景があるとするのも一説ではあろうが、何やら理に落ちる嫌いもないではない。ただその場が大神宮に程近い中村の地であったからとしても、ここは通ずるのではあるまいか。「吹きわたす風にあはれをひとしめていづくもすごき秋の夕ぐれ」（『山家集』上）の西

行歌が「すごし」の背景にあることは確かだと思う。

墓原の趣が中心なのか、秋風の感じが中心なのか、説が分れるのも、「炢の風」のところで切れるかどうかが、この句作りでははっきりしないからである。「秋も末」「秋風や」等『荒小田』に伝える句形は、切れることがはっきりしているが、これらは伝聞という点が弱味になって、これを本位句とすることは躊躇される。ただ、このような句形は、初五で切れるとする見方の参考にはなるのであって、ここで切れることは墓原の趣を主とする解の重要な根拠になろう。其角の所伝に兎角杜撰な点があることを考慮すれば、『荒小田』の「秋風や」の方が信用出来る句形かも知れない。『芭蕉句選拾遺』も『蕉翁句集』と同じ前書で「秋風や」の句形を掲げ、頭注に「宇治の中村といふ所を過るに墓所のありければ」と前書した真蹟がある由が見えることも、「秋風や」の信憑性を増すように思える。本位句としては一応初出の『花摘』の句形を採るけれども、そのような問題点があることを指摘しておきたい。国会図書館本『去来抄』に初五を「初風や」とするのや、『蕉翁句集』の「秋風の」は誤伝である。

『去来抄』修行では、魯町の「不易の句の姿はいかに」という問に対して、去来が「不易の句は俳諧の躰にして、いまだ一の物数寄なき也。一時の物ずきなきゆへに古今に叶へり」と答え、例句として「月に柄をさしたらば能うちは哉」(宗鑑)「是はくとばかり花のよしの山」(貞室)等の句と共に、この「伊勢の墓原」の句を挙げている。「物数寄」がないのはその通りであるが、「すごし」に具体性がないのが、この句の難点であろう。「凄がって見せただけで、具体性を欠いているから、句としては落ちる」(山本健吉氏『芭蕉全発句』)という評は甘受しなければならない。

565 はつしぐれさるもこみのをほしげ也 (真蹟懐紙)

あつかりし夏も過、悲しかりし秋もくれて、山家に初冬をむかへて

真蹟色紙・正月十七日付万菊丸宛書簡・卯辰集・猿蓑・猿舞師・泊船集・今日の昔・蕉翁句集・真蹟集覧

冬季（はつしぐれ）。

語釈 **○あつかりし夏も過**　「暑かりし夏も過ぎ」。**○悲しかりし秋もくれて**　「悲しかりし秋も暮れて」。「月影のかべの破れより木の間がくれにさし入て、引板の音しかおふ声所〱にきこへける。まことにかなしき秋の心爰に尽せり」（『更科紀行』）。**○山家**　「ヤマガ」。『野ざらし紀行』の貞享元年歳暮の条に、「爰に草鞋をとき、かしこに杖を捨て、旅寝ながらに年の暮ければ、／年暮ぬ笠きて草鞋はきながら／といひ〱も、山家に年を越て」とあるように、芭蕉はこの語を以て郷里伊賀の上野を指すのが例である。『日葡辞書』では「Yamaga.」を卑語としているが、芭蕉は卑語という感覚で用いてはいないと思う。**○初冬をむかへて**　「初冬を迎へて」。「初冬」は陰暦十月である。「元禄辛酉之初冬九日素堂菊園之遊」（『続猿蓑』下、芭蕉発句「菊の香や」前書）「かなしき骨をつなぐ糸遊　曾良　山鳥の尾にをくとしやむかふらん　翁」（『曾良書留』）「Xotô.」「Mucaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○はつしぐれ**　「初時雨」。初冬の時折ばらつく雨の初めのもの。既出（Ⅱ *312*）。**○さるもこみのをほしげ也**　「猿も小蓑を欲し気也」。蓑は、茅・菅・藁などを編んで作り、肩から羽織る雨具で、「こみの」は、猿の体の小ささをあらわす。「「猿も」と言ったのは、一行が蓑を着ていたことを言外に含めている」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）「猿に対して小蓑の取合やさし」（東海呑吐『芭蕉句解』）「渡し守ばかり蓑着るしぐれ哉　傘下」（『あら野』巻五）「おほふばかりのそでは秋の空にしもこそほしげなりけれ」（『源氏物語』野分）「Minouo qiru.」「Foxij.」（『日葡辞書』）。

大意 蓑笠を着て初時雨の降る蕭条と寂しい山路を行く。猿も時雨に興じたか、小蓑が欲しそうだ。

考 「冬」（正月十七日付万菊丸宛書簡）「伊賀へ帰る山中にて」（『卯辰集』）等の前書があり、真蹟色紙の前書は、真蹟懐紙のそれと同じある。また土芳の『蕉翁全伝』には、「五百里ノ旅路ヲヘテ、アツカリシ夏モ過、カナシカリシ秋モクレテ、古里ニ冬ヲ迎へ、山家ノ時雨ニアヘバ」という前書も見える。万菊丸（杜国）宛書簡は元禄三年筆と推定され、それに旧冬の作として挙げられているので、この年九月下旬伊勢から伊賀上野に帰った際、所謂伊賀越の山中で成った句と推定される。元禄四年刊の『猿蓑』の序で其角が、

……我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひければ、たちまち断腸のおもひを叫びけむ、あたに懼るべき幻術なり。

と述べているのも右の推定を裏付けるもので、この句の初出板本たる『卯辰集』や『猿蓑』刊行以前に、時雨の頃伊賀へ帰ったのは、元禄二年のことであった。土芳の『全伝』によると、芭蕉は九月中に李下を伴なって上野に入ったらしく、厳密にいうと冬ではないけれども、初冬の「初時雨」を季語とする句を九月末に作っても不自然ではない。因みに、この年の立冬は九月二十四日で、芭蕉が伊勢山田から伊賀へ向った時期と丁度重なっていた。真蹟等の前書では上野に着いてから後の作と見る余地もあるが、嘗て志田義秀博士が『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』で述べられたように、伊賀越で成った句を上野で揮毫する時にこうした前書を付したと解釈出来、成立の時処に関しては、『卯辰集』の前書や『猿蓑』序の記述を信ずべきであろう。

冬の到来を感じさせる蕭条とした山中の時雨、その山路を蓑を着て辿って行く旅人の寒げな姿、樹上か巌頭かにすくんでいる孤猿。こうした道具立てで構成されたこの句の世界は、初冬の季節感を具象化した墨絵のような寂びた情景として、殊更な解を要しない平明さを持っている。ただ、そのような季節の寂寥感や小動物への哀憐の情を受取っただけでは十分とは言えない。大きな抱負を持って編まれた『猿蓑』の巻頭に据えられ、その題号の由来ともなった句とあれば、細道の旅以後の新風の典型として、芭蕉の自信作だった筈で、其角を始めとする門人達も刮目した新しさは、何処にあるのであろうか。

蕭条とした自然の寂寥感や猿への哀憐の情を内容としながら、この句には軽やかな調子があって、芭蕉の心のはずみを思わせる。西行歌「しのためてすゞめゆみはるをのわらはひたひえぼしのほしげなるかな」(『聞書集』)を踏まえるとする説があり、それはなお不確かであるとしても、この歌と相通ずる興が調子の上にあらわれていることは否定出来ない。この点からして、「初時雨」への興を中心にした見方は、この句の鑑賞として正しいであろう。加藤楸邨氏は言う。

この句の発想を支えているものはいわば初時雨に興ずるこころであって、そこに近代の写実風の詠み方とは異質

の発想法があったものなのである。「ほしげなり」という流れるように言い下された措辞も、初時雨に興じ弾むこころの表現として読むとき、もっとも生き生きと感じられて来よう。時雨に人生の定めなさを思い、猿声に愁情を聞きとるのは、日本・中国にあっては文学的伝統とも称すべきものであるが、芭蕉はこの句において、そうした伝統を踏まえつつ、さらに俳諧風狂の精神を通過させてそれらを新生せしめているともいえよう。（『芭蕉全句』）

次いで井本農一博士は、

「初しぐれ」は、日本の文学伝統の中で長い間かかって磨かれ洗練されてきた素材であり、「初しぐれ」の和歌・連歌は多い。芭蕉も、長い旅の終りに、故郷に入らんとして初しぐれに降られたことを、興あることと感じているのであって、生憎（あいにく）な雨が降ってきたと迷惑しているのではない。だが「初しぐれ」を古い日本文学の伝統のままに、伝統的にさびしい、わびしい雨として詠（よ）むのでは、俳諧としての新しさがない。猿までも人間と同じように時雨に興じ顔だとし、猿なりの小さい蓑を着て、時雨の中を歩いてみたそうな様子だと、あえて読者の意表をついたところに、この句が当時評判になった理由がある。俳諧としての「初しぐれ」の新しい詠み方をみせ、今後の俳諧のいき方を指示したところがある。伝統的なものを忠実に継承しながら、しかも俳諧らしい新しい詩境の展開をはかろうとしている。猿に蓑を着せる、しかもただの蓑でなく小蓑といったところに、俳諧の本質である飄逸滑稽（ひょういつこっけい）の要素がある。そのことによって、「初しぐれ」の文学伝統を守りながら、一方で伝統を脱け出ている。蕉門の諸家は、初しぐれの新しいつかみ方、俳諧らしい取り上げ方を、この句によって教えられ、驚いたのである。……当時としての新しい句であり、しかも俳諧性をさし示す句であって、そのころ芭蕉が考えていた不易流行の思想に基づく句である。（『日本古典文学全集・松尾芭蕉集』）

と述べられたが、猿を配合することによって、初時雨の季節感に俳諧らしい新境地を拓いたとするのは正しい見方で

あろう。この立場に立てば、猿も時雨に興じているので、「ほしげ也」は、欲しげだから着せてやろうとするわけである。其角が「猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひ」と言い、「あたに懼るべき幻術」と言った消息も、こう見ることによって分って来る。ここから「猿」が写生ではないとする考え方が導かれるのは当然で、

芭蕉にとってこの句が事実としてどこで詠まれたかは、さして重要なことではなく、また事実としてどんな体験によっているかも、大した重大事ではなかったのではあるまいか。……芭蕉が事実として雨に濡れ小蓑を欲しそうにしている猿を見たかどうかは疑問であり、そんな猿を眼前に見ないで句を作っても一向に差し支えないということである。一体猿は群れをなして生活するものであり、山中で人が近づけば警戒してただちに遠ざかる。人の往来する道路の脇に、しょんぼり雨に濡れて猿が人を見ているなどということはあるまい。まれに群れを離れた孤猿もないことはないが、それにしても道ばたで猿が芭蕉に見られて、「小蓑」でも欲しそうにじっとしていることなどは、事実としてありそうもない。芭蕉は実体験をそのままに詠んでいるのではなく、ただいかにも実体験であるかのように詠んでいるということであろう。(『鑑賞日本古典文学・芭蕉』井本博士)

という説も展開されている。これは奇嬌な見方ではなく、芭蕉の意図をよく見据えた極めて妥当な見解であろう。だから、この句は最初にもいったように、時雨と、その中を蓑を着て行く旅人と、猿とで構成された風狂の世界であって、「猿」は孤猿の趣に見るのが良いと思う。山本健吉氏が、加藤楸邨氏の「やはり「初時雨」の「初」の字を働かせて解してみると、「猿も小蓑をほしげなり」といふ興じ方がわかるやうな気がしてきた」「〔初時雨は〕普通の時雨のさびしく暗いのとはちがつて、どこか喜び弾む気持で迎へられるのが常である。芭蕉も勿論さういふ気持の弾みがある。その気持が猿の上にも発見されたわけで、「猿も小蓑をほしげなり」といふ興じ方は、とりもなほさず芭蕉自身の興じ方なのである」という言葉を引きつつ、

だが、芭蕉が風雅に興じているという見方が、すでに後代的であるかも知れないのである。われわれにそう見

えるものも、実は芭蕉にとっては、単にウィットの働きに過ぎないのであろう。表面的には、この句は軽快な戯れに終始している。「初時雨」「猿も」「小蓑を」「ほしげなり」のすべてにわたって、芭蕉の表現は軽い心の弾みを示している。「小蓑」とは、空想に描いた猿の蓑であって、現実にあるわけではない。だが、全体としての軽快なリズムが、必然的に「小蓑」という愛小辞を呼び出さないではおかない。だがその軽快さも、裏にはもっと根源的な、厳粛な観念が存在している。それがこの句を、単なる機智の戯れから区別するのであるが、それは芭蕉のウィットが、「人間的存在の直観から生れる一瞬の感動」（深瀬基寛）によって裏づけられているからである。

時雨に作者の人生観を寓することは、和歌・連歌以来の伝統である。ことに乱世時代の連歌師たちは、仏徒的な生活情調から、人の世の定めなさの感慨、人生を旅と見る無常迅速の感慨を、時雨に托して詠み出すことが多かった。だが、芭蕉のこの句は、そのような連歌師の固定した季節感情に縛られてはいない。概念化した時雨の意味をうち破りながら、より深く人間的存在の根底に参入する。初時雨に対する喜びとか、小猿への哀憐とか言った言葉では限定されない、一つの「思想の感覚的把握」（エリオット）がある。そしてそれは、この句の全体に行きわたっている、生き生きした作者のウィットの働きによるものなのだ。そのようなウィットの働きが、後の「軽み」に道を開くのであるが、芭蕉自身、そういう自分の詩心の動きを意識していたからこそ、『猿蓑』の巻頭に、あえてこの句を据えたのであろう。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

と述べられた所説は、以上見て来た所の結論として相応しい。『猿蓑』という集が蕉風円熟期の集成であると共に、これ以後「軽み」へと赴く志向を含むことは、右の山本氏の著書より後に強調されるようになったが、山本氏の所見は期せずしてそれと符節を合するものになっている。「はつしぐれ」の句は、細道の旅を終って芭蕉の目指した「軽み」を具現した最初の収穫だったといえよう。

その平明さや軽い調子の故か、この句については、

いゝ句ではあるが非凡な深味のある句とは思はない。少しくtameな感じがする。自分でかういふ句は作れなくとも、句にして見せて貰へば誰にもすぐに同感が出来る程度の境地である。この句のポピュラリテイは其処にあると思ふ。(『続芭蕉俳句研究』阿部次郎氏)

という評があり、井本博士も、この句の新しさと俳諧の進むべき方向を示した意義を認めながらも、「だからといって、この句が今日においても高い評価に値するかどうかは、おのずから別問題である」(『松尾芭蕉集』)といっておられる。しかし、「人間的存在の根底に参入」し、「思想の感覚的把握」を実現した句ならば、それは時代の流行の先端にあって、しかもなお不易の価値に輝くものでなければなるまい。「古池や蛙飛び込む水の音」(Ⅱ*257*)「夏草や兵共がゆめの跡」(Ⅲ*488*)等の句が、現代人の眼からは他奇なく見えるのと似ている。

566 蔦の葉は昔めきたる紅葉哉 (菎摺)

秋季(蔦紅葉)。

語釈 ○**蔦の葉** 「蔦の葉」。「蔦」は既出(Ⅰ*193*、Ⅱ*423*)。「蔦の葉や残らず動く秋の風 荷兮」(『続猿蓑』下)。○**昔めきたる** 「昔めく」は、古風に見える意。色の感じをいうのであろう。○**紅葉** 「モミヂ」。ここは「蔦紅葉」であること、いうまでもない。そもそも「蔦」が秋季とされるのは『御傘』に「つたは常に有物なれども炑になるは、紅葉の見事なる故也」とあるように、その紅葉を賞美してのことであった。(Ⅰ*193*)参照。「乗掛やうつの山行蔦紅葉」(『麦林集』)。

大意 蔦の葉の紅葉した色あいは、何処か古風に見えることよ。

考 この句を収めた等躬撰の『菎摺』(元禄二年刊)は、四季発句の部の後に「元禄元戊辰孟冬/東陸於東籬軒等躬撰之」とあり、当面の句は「雑炑」に部類されている。従って元禄元年秋までには成っていた筈であるが、この集には

末に細道旅中の作等も収めてあるので、姑く同二年秋以前として、此処に配しておく。なお『荵摺』は従来板本が世に知られず、乾坤二巻のうち坤巻の写本が伝わるだけで、この句が本書に収められていることは、勝峯晋風氏の『芭蕉俳句定本』に見えるのみで確認出来なかった。しかし、近時天理図書館に二冊揃いの板本が収蔵されるに至り、久富哲雄氏による翻刻も成って（『鶴見大学紀要』31号、平成六年三月）、この句の信憑性が確かめられたわけである。

紅葉した蔦の色を「昔めきたる」と形容した由来については、

> 同じに紅葉を染めなしたのでも、樹々の紅葉は派手で、草のは寂びて居る。就中蔦は左様に感じられる。それを俳句としたので、無雑作の句振なれど注意深い句である。（『芭蕉句集講義』角田竹冷氏）

> 蔦紅葉は、楓、ぬるで、柞などのやうに鮮かでなく、少し黝ずんだ感じがする。それで……古代色と見なして詠歎したのである。（服部畊石氏『芭蕉句集新講』）

等の見方が穏当であろう。それに駿河路には『伊勢物語』ゆかりの蔦の細道のある宇津谷峠もあり、そのような古い文学伝統に寄せる思いも託されているのである。句の表現を評価する説もあるが、「昔めきたる」はやはり観念的で、説明の域を出ていない。

567　**聲すみて北斗にひゞく砧哉**　（都曲）

秋季（砧）。

語釈　○**声すみて**　「声澄みて」。「声」は砧を打つ音をいい、「すみて」は、下へもはたらいて北斗星の光が澄む意を掛ける。○**北斗にひゞく**　「北斗に響く」。「北斗」は、北極星のこと。砧の音が天高くまで響くのである。「はつ霜に行や北斗の星の前　伊賀百歳」（『猿蓑』巻一）「Focuto. Qitano foxi.」（『日葡辞書』）。○**砧**　「キヌタ」。布を打ってやわらかくする道具。秋の季語である。既出

（Ⅰ200）。

大意 冴え冴えと空にかかる北斗星までも、砧を打つ音が澄んで響きわたることよ。

考 言水の『都曲』に見える。この書は元禄三年二月の刊行なので、所収の秋の句は同二年秋以前の作と見られる。作者名に「京芭蕉」とあるのが成立年次とも関連するとすれば、元禄二年冬以降の京湖南留錫期に近い二年秋の作となろう。

「長安一片月、万戸擣衣声」（李白「子夜呉歌」）以来の砧声の伝統的詩情を生かそうとしており、「北斗」との配合については、「北斗星前横二旅鴈一、南楼月下擣二寒衣一」（北斗の星の前に旅鴈を横たふ。南楼の月の下に寒衣を擣つ。『和漢朗詠集』上、劉元叔）の語句がよく引かれる。

芭蕉の砧の句中、人事にひつかけずに、ただ自然の光景だけで砧を詠歎したのは、此句一句です。……その点でこの句は独特だと思ひます。……僕には闇につつまれてゐる静かな農村や、黒く見える山の影や、野原や、川などが頭に浮びます。それが秋の澄み徹つた空気につつまれてゐるのです。（『続芭蕉俳句研究』）

という和辻哲郎博士の鑑賞は良い。調べも高く張った佳句であるが、「北斗」という道具立から、「秋夜の砧音につき一種の理想を叙べた」（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）傾きがあり、『続芭蕉俳句研究』の諸家の論のように、写生や独創を尊ぶ近代的立場に立って、こうした句を高く買わない見方も出ている。

568 枝ぶりの日ごとにかはる芙蓉かな （後れ馳）

画賛

枝ぶりの日に〳〵替る芙蓉かな （泊船集）

――蕉翁句集草稿・正風彦根躰

畫讃

枝ぶりの日〻に替る芙蓉かな　（蕉翁句集）

秋季（芙蓉）。

語釈 **○枝ぶりの日ごとにかはる芙蓉**　「枝振りの日毎に変る芙蓉」。「芙蓉」は葵科の落葉灌木で、漢名木芙蓉。観賞の為庭に栽培されることが多く、秋に淡紅色または白い五弁の大きな花を開くが、花は一日で萎み落ちて、翌日は別の枝に花をつける。それを興じて「枝ぶりの日ごとにかはる」といった。花の位置ではなく、重さに重点を置いた見方もある。［考］参照。「格物叢話曰、芙蓉之名二、出二於水一者、謂二之草芙蓉一、荷花是也。出二於陸一者、謂二之木芙蓉一、此花是也。八九月開、有二拒霜之名一。又名二木蓮一。○時珍本草云、此花艶如二荷花一。故有二芙蓉・木蓮之名一。……蘇頌図経有二地芙蓉一、即此物也。挿レ条即生、小木也。其幹叢生如レ荊。高者丈許、其葉大如レ桐、有二五尖及七尖者一。冬凋夏茂、秋半始著レ花。花類二牡丹・芍薬一、有二紅者・白者・黄者・千葉者一。……拾穂抄云、木芙蓉、色赤し。……朝に咲、夕に萎む。移ひやすき也」（『滑稽雑談』）「枝ぶりも主もつよかれ家桜　道二」（『毛吹草』巻五）「三年まで立て置く数の錦木を、日毎に立てゝ千束ともよみ」（謡曲「錦木」）「贈芭蕉庵／百合は過芙蓉を語る命かな　風麦」（『続猿蓑』下）「Figoto. l, figotoni.」「Fuyô.」（『日葡辞書』）。

大意　毎日別の枝に花をつけて、枝の様子が日毎に変って行く芙蓉は、面白い樹だなあ。

考　朱拙の撰した『後れ馳』（元禄十一年刊）に、「此句、自画の芙蓉の賛に見えたり。元禄のはじめの吟なるべし」と注して収めたのが最も早い。土芳の『蕉翁句集草稿』では、『泊船集』の中七「日に〳〵替る」の形を採りながらも、「後馳集に、自画芙蓉賛、元禄初の作と有。日毎に替ると有」と朱拙の集を参照しており、同じく『蕉翁句集』では元禄二年の部に収めている。「元禄のはじめ」とあれば二年あたりが下限であろう。画賛句は当季と限らない場合もあるが、ここでは一応二年秋以前と見て、ここに配しておく。『芭蕉翁発句集』や『一葉集』に「遊女画讃」と前書があるのは、何に拠ったものか明らかでなく、或いは「日ごとにかはる」という表現から、客を取る遊女の上を連想したかとも思われて、信じ難い。句形は、初出である上に画賛句たることを伝えた『後れ馳』を本位句とする。『蕉

翁句集』の「日ゝに」は、これで「日に日に」とよませるつもりなのであろう。

内藤鳴雪は、

芙蓉は花の大なる割合に枝が細くて、満開の時には花の重みの為め幹もたはゝに成りあちこちへ傾く事がある。或いは雨の日、露しげき日にも其の雨露の為めに傾く事がある。それを見て枝ぶりが日毎日毎かはる芙蓉であるかなと言つて芙蓉其物の性質をあらはしたのぢや。(『評釈』)

と、花の重さに重点を置いて解している。これに対して服部畊石氏は、

芙蓉の花は一日きりで凋んでしまふ、従つて其日〱に中心たる花のありどころもかはれば、枝ぶりもかはつて見える、それを詠歎したのである。(『句集新講』)

と、花の位置を主眼と見る。私は何れかといえば後者に傾くが、前者にしても日毎に花がちがえば重さも異なるから、「枝ぶり」もちがう筈で、要するに同じ事に帰すると思う。この樹の性質をよく見ているが、句作りがあり来りで感動に乏しい。画賛として極く安易に作られたものであろう。

元録(ママ)二年霜月朔日於良品亭
誹諧哥仙

569 いざ子ども走ありかむ玉霰　(智周発句集)

多胡碑集

冬季(玉霰)。

語釈 ○**霜月朔日**　「シモツキツイタチ」。陰暦の十一月一日。「朔」は、陰暦で月の第一日をいう。「霜月朔旦」(『猿蓑』巻一、良品発句「膳まはり」前書)「やはらかものを嫁の襟もと　孤屋　気にかゝる朔日しまの精進箸　野坡」(『炭俵』上)「Ximotçuqi.」「Tç-

uitachi.」(『日葡辞書』)。○**於良品亭**　「良品亭に於いて」。「良品」は友田氏、通称角左衛門。伊賀上野の人で、藤堂藩に仕えて三百五十石を食み、郡奉行・町奉行・普請奉行等の重職を歴任した。蕉門の女流俳人梢風の夫である。享保十五（一七三〇）年六月二十六日歿、享年六十五。○**誹諧哥仙**　「哥」は「歌」の略体。○**いざ子ども**　「さあ子供たちよ」と呼び掛けた趣向。歌仙に一座した人々に向って興じているのである。「ふつ〱なるをのぞく甘酒　馬莧　霜気たる蕪喰ふ子ども五六人　沾圃」(『続猿蓑』上)「Codomo.」(『日葡辞書』)。○**走ありかむ**　「走り歩かむ」。「ありく」は「あるく」と同じ。「霰に、はしるの語、にらみあり」(杜哉『蒙引』)「松どもともして、夜半すぐるまで人の門たゝき走りありきて」(『徒然草』十九段)「Faxiri, u, itta.」「Ariqi, u, ruita.」(『日葡辞書』)。○**玉霰**　「タマアラレ」。「玉」は美称。「霰」は既出（I *174* 等）。「小笹の上の玉霰、音もさだかにきこえず」(謡曲「昭君」)。

大意　玉のような霰が降って来た。さあ子供たちよ、そこらを走り廻ろう。

考　梢風の句集『智周発句集』(洞秋・未塵編、宝暦八年成。智周は梢風の剃髪後の号)に標記の前書で見え、以下良品・梢風・三園・土芳・半残ら伊賀の連衆と一座した歌仙が載る。その年記は必ず地元の資料に拠った筈であるから疑うべき点はなく、元禄二年冬の伊賀滞在中、十一月一日に良品の家で歌仙の発句として詠まれたものと見られる。『多胡碑集』(卜全・其蝶撰、安永三年刊)に、中七を「はしりあかさん」としているのは信じ難い。

俳席で歌仙を始めようとする折柄、霰が降って来たのであろう。庭にころがる霰の玉を見て、心のはずみをそのままに打ち出したような、興じた調子があらわれており、四十も半ばを越した芭蕉の童心が飾り気なく発露したところが好もしい。同時に、正客の発句として、この句には挨拶の心が籠められていなければならぬ。当時亭主良品が二十四歳、妻の梢風が二十歳、二人ぐらい幼児が居たとすれば、家内はかなり賑やかであったろう。「いざ子ども」と興じた呼び掛けの由来として、友田家の子供たちに呼び掛けて挨拶としたと見る加藤楸邨氏や山本健吉氏の見方が素直に感ぜられる。今栄蔵氏の『芭蕉句集』では、俳席に集まった大人達に「いざ子ども」と呼び掛けたのを「おかしみ」と見ており、これまた一説であろう。なお、「いざ子ども」という歌い出しは、「いざ子ども大和へ早く白菅の真

野の榛原手折りてゆかむ」（『万葉集』巻三、高市黒人）「いざ子ども香椎の潟に白たへの袖さへぬれて朝菜摘みてむ」（同上巻六、大伴旅人）等の万葉歌を思わせる。もとより古歌にあっては、「さあ人々よ」と呼び掛ける言葉で、児童に対してではないが、古歌を全く意識しなかったとも言い切れないのではあるまいか。

570

茸狩やあぶなきことにゆふしぐれ　（真蹟画賛）

茸がりやあぶない事に夕時雨　（蕉翁句集）

冬季（ゆふしぐれ）。

語釈 ○**茸狩**「タケガリ」。山野に出て茸を採る遊楽。秋の季語であるが、この句では「ゆふしぐれ」の方が季語として立つ。『日葡辞書』には「**Taqecari.**」「**Taqegari.**」の二語を併存している。「八雲御抄曰、たけがり・たつがり、是松茸などみる也。○藻塩草曰、たけがり、松茸を見る也」（『滑稽雑談』）「たけがりや見付ぬ先のおもしろさ　素堂」（『橘南』）。○**あぶなきことに**「危き事に」。直訳は「危い事として」。危くかんばしくない事態に遭遇するところだったというので、日常語的表現である。「夕すゞみあぶなき石にのぼりけり　野坡」（『炭俵』上）「**Abunai.**」（『日葡辞書』）。○**ゆふしぐれ**「夕時雨」。夕方ばらばらと降って来る時雨。「食堂に雀啼なり夕時雨　支考」（『続猿蓑』下）。

大意 夕方茸狩から戻ったら、すぐ時雨が降り出した。危くこの雨に濡れるところだったよ。

考 現存の真蹟画賛は、小枝に挿した松茸二本の画の上部に句を賛したもので、右下の「許六」の印の上に芭蕉自筆で「許六筆労をかる」と書かれている。右の注記のうち、「許六筆」の部分が許六の筆跡、以下が芭蕉筆という見方もあるが、やはり全体が一筆と見るべく、画が許六筆であることを芭蕉が注したものである。元禄五年八月九日の二人の初対面以降、翌年五月六日に許六が江戸を去るまでの両人の交遊の間に作られた書画の合作であろう。一方、

土芳の『蕉翁全伝』曰人写本元禄二年の条には、「画讃へ茸狩やあぶないない事に夕時雨」とあり、『蕉翁句集』元禄二年の部に収める句形と一致する。また、寛治の『芭蕉句選拾遺』に「画賛。元伊賀、今湖東辻村、僧冠上家珍」と注記して、中七を「あぶなきことに」とした句が収められており、「あぶなき」の句形に問題はあるが、これが土芳のいう「画讃」だったとも考えられよう。後代の写しとはいえ、土芳の所伝は中七を「あぶない事に」とする点で一致しており、これが元禄二年冬伊賀滞在中の初案たる可能性が大きいと思う。年次は『全伝』が元禄二年の条に記しているることを重視して、ここに配しておく。

この句、「しぐれを季の心とせざるなり」（麦水『貞享正風句解伝書』）等、「茸狩」で秋の句とする注釈書が多い。この年芭蕉の伊賀入りは九月下旬であって、九月中に「はつしぐれさるもこみのをほしげ也」（565）の句を詠んでいるのであるが、さればといって「茸狩」の句を九月中の作として秋季と見るのも、余りに窮屈である。「茸狩」は九月の季語であるけれども、ここでは「ゆふしぐれ」を季語として、十月に入ってからの作としたい。「あぶなきこと」と口語調にして、「丁どのほどにもどりしなど、口ぐにいふ風情」（杜哉『蒙引』）を生かしたところ、俳味十分の句である。必ずしも作者の体験とは限らず、画によって趣向を案じた句ではあるまいか。

山中の子供と遊ぶ

571　初雪に兎の皮の髭つくれ　（正月十七日付万菊丸宛書簡）　三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

雪の中に兎の皮の髭作れ　（いつを昔）　泊船集

雪の日に兎の皮の髭つくれ　（去来抄）

冬季（初雪）。

語釈 ○**山中の子供**　この「山中（やまなか）」は、句の成立時期からして、伊賀の上野を指すことが明らかである。前には甲州についてこの語を用いた例があった（Ⅰ*247*前書参照）。○**初雪**　既出（Ⅱ*262*等）。○**兎の皮の髭つくれ**　「兎（うさぎ）の皮（かは）の髭作（ひげつく）れ」。「兎」は、うさぎ。普通に使う「兎」は俗字である。「兎の皮の髭」とは何を意味するか、諸説あって難解であるが、兎の毛皮で作った付け髭と見れば、この場合よく通ずる。［考］参照。「年と日と賤のつま薪（マキ）よみ尽ス　千之　うさぎを荷ふ越の山業（ワザ）　其角」（『虚栗』上）「VSagui.」（『日葡辞書』）。

大意　子供たちよ、この初雪の積ったところで、兎の皮の付け髭でも作って遊ぼう。

考　『泊船集』には「山中に子共とあそびて」と前書があり、『いつを昔』（其角撰、元禄三年刊）にも「山中子供とあそびてと有」と注記が見える。元禄三年正月の万菊丸（杜国）宛書簡に、旧冬から新春にかけての作を報じた中にあるので、二年冬の伊賀滞在中の句と推定されよう。

普通には板本初出の『いつを昔』に載った「雪の中に」の句形が後案と考えられるが、この句に関しては、土芳の『蕉翁句集草稿』に「初雪に」の形で掲げ、

此句花摘（ママ）に、雪の中にと有。違也。

と断じている。「花摘」とあるのは、其角の同年の撰著なので誤ったのであろうが、兎角杜撰な其角の編輯態度を考え合わせると、「雪の中に」を誤りとした土芳の説は重視しなければならない。表現としても「初雪」の興とした方がずっと良いし、こうした即興句を案じ替えることは先ず考えられないから、「初雪に」を本位句とし、推敲はなかったものと考える。『去来抄』の句形は記憶ちがいであろう。

『去来抄』はこの句の見方について次のように説いている。

魯町曰、此句意いかゞ。去来曰、先、前書に子どもと游びてと有れば、子共のわざと思はるべし。強て理会すべからず。機関を踏破ラバしるべし。昔先師此句を語りたまふに、予甚感動す。先師曰、是を悦ばん者、汝と越人

のみと思ひしに、果てしかりとて、殊更の機嫌なりし。或曰、雪は越後兎の縁に出たり。来曰、此説の古キ事、神代巻に似たり。或曰、兎の皮の髭つくるは、雪中寒キゆへ也。来曰、如此に解せば、暑日に猿若髭をはづしをりの類なるべし。いとあさまし。（同門評）

この記事によって、去来在世当時、この句が既に難解だったことが分るが、去来によれば、これは「子共のわざ」であって、「越後兎」の縁で「雪」と「兎」が縁語になるとか、雪の中は寒いから兎の皮の髭を作るというような理解の仕方は問題にならず、「機関を踏破ラバ」真意が知られるという。「機関を踏み破る」とは、心中のもろもろの計らいや理窟を超越することであろう（「機関」は多く「カラクリ」と訓まれているが、ここは禅語めいた感じなので、「キクワン」と音読したい）。『三冊子』もこの句を掲げて、

……初雪の興也。ざれたる句は作者によるべし。先は実体也。猶有べし。（赤雙紙）

とあって「ざれたる句」とし、これは好んで作るべきものでなく、「実体」の句を心掛けるように勧めている。次に、古来の注から目ぼしいものを挙げて見よう。

兎の裘をいとなむべしとの心か。……又或人の曰、雪仏・雪達磨なんど作り出る席に、越後兎の白き髭つくれと、子共に下知したる句にや侍らんか。（正月堂『師走嚢』）

髭を作りたるにもあらず。寒き雪の日に童部の青涕垂らしたるを見て、さぞや寒からんに、兎の皮の髭にても作りかけよかしと興じたるのみ也。翁の風骨を味ふべし。（素丸『説叢大全』）

兎毛の変ずる比也。白髭をつけて遊ぶならん。……翁の無我底を貴むべし。（杜哉『蒙引』）

雪が降るよ、此日に兎の皮の髭を作るが好い、といふので、如何にもたわいのない言ひ草ぢやが、それが子供と遊ぶ心なのである。雪のフサ〳〵と降つて居るのは恰も白い兎の毛に似てゐる処からそれを兎の皮へ植ゑつけて一層美しい兎にして遣らうぢやないかといふ位の事ぢや。毛といはず髭といつたのは態と子供らしい言葉を用ひ

たのであらう。実際そこに兎を飼つてから此冗談も出たのであらう。（内藤鳴雪『評釈』）

かうした雪の降る日に、兎の皮でつけ髭をこしらへるがよい、といふので、兎の髭を口端にはりつけて、ピヨンピヨンと飛び跳ねたりする遊びが子供の間にあつたものではないかと思ふ。（荻原井泉水氏『芭蕉読本』）

或は、雪が盛んに降つてゐる山中に子供たちと遊んで、子供たちは頭から真白に雪を被つて跳ね回る、それで、白兎の皮で髭をつくれ、さうすれば顔まで真白くなつていよ〳〵ほん物の白兎である、とでも解すべきものか。

（服部畊石氏『新講』）

初雪に興じ、子供と共に遊んでの作と見れば、雪兎などを作つて戯れ、この兎は丸裸で寒さうだ、一つ毛皮でも作つて着せてやれと、下知した心と見て良いであらう。「皮の髭」とは、毛皮といふ語を殊更に、小供らしい片言を以てあらはし、戯の意をあらはしたものと見て良からう。（能勢朝次博士『三冊子評釈』）

雪兎など作って興じている子供らよ、その雪兎は、髭もなくてまことに物足りない。さあその兎をかたどった雪の中に、兎の毛皮で髭をつくり添えてごらん。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

土芳が「初雪の興也」と言ったのは、的確な評語である。このことを見据えたら、この句の解を誤ることはないはずだ。雪が降った時、それは子供にとって寒さよりもまず喜びであって、彼らは争って外に飛出すものだから、「雪の中に」という形が生きてくる。だが「初雪に」はいっそう興ずる心の弾みがある。初雪をよろこんで、雪の中を兎のように跳ね回っている子供たちに、兎の毛皮で髭でもつけたらどうだと戯れに呼びかけたのである。

（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

按うに、雪兎に髭をつけろという楸邨氏の解も面白いけれども、私は、雪の中を跳ねまわる子供たちに、兎の毛皮のつけ髭をしたらどうだと戯れたとする山本健吉氏の説に傾く。要するに、「いざ子ども走ありかむ玉霰」(569)と同じく、芭蕉の童心の発露を見るべき句なのである。

572

屛風には山を畫て冬籠（蕉翁句集草稿）

冬季（冬籠）。

語釈 **○屛風には山を画て**　「屛風には山を画いて」。「屛風」は、風を防ぐ為に室内に立て、間仕切りにもする障屛具。「屛」は「ふせぐ」意である。一隻だけの物のほか、二枚、四枚つなぎ等があり、装飾として金銀箔を貼り、唐絵・大和絵を画いたものもある。「画て」は「画きて」とよんでもよい。「新しき薄縁敷し奥の間に、やさしくも屛風引廻して有ける押絵を見れば」（『好色一代男』巻三）「Biōbu. Cajeuo fuxegu.」（『日葡辞書』）。**○冬籠**　「冬籠り」。冬の間屋内に籠居することをいう季語。既出（Ⅱ325等）。

大意 御主人は山を画いた屛風のある部屋で冬籠りしておられる。まことに結構なお住居だ。

考 土芳の『蕉翁句集草稿』に、

○金屛風の松のふるびや冬籠
金屛風に山を画て冬籠

是金屛の松は、炭表の句也。山を絵書は、いがの平仲が宅にての吟也。炭表は後の事なれば、画の句を直して松とは成るか。

と記してあり、二句目冒頭の「金」が見せ消ちに成っているのは、前の句の「金屛風」にひかれて「金」と書いたのを訂正削除した意味である。字間の傍書によって、この形で初五を「屛風には」としたものと判断されよう。土芳の『蕉翁全伝』元禄二年の条にも「屛風には山を絵書て冬籠」の句を掲げ、「此句ハ平沖宅ニテノ事也。其後、集ニ、金屛ニ松の古びやト有。直るか」と説いており、「平仲」は不明の人物ながら、同じ地元として土芳の所説には確かな根拠があったろうから、「屛風には」の句は元禄二年冬の上野滞在中に、平仲という者の宅で成ったものと推定され

る。寛治の『芭蕉句選拾遺』に「貞元、平仲宅にての事也」とある年代は、誤伝に過ぎない。「金屛風(ママ)の松のふるびや」の句は元禄六年十月の作であって、土芳のいう通り後年のものである。以前の伊賀での句をもとにした別案であるが、両案は動機を異にし、表現もかなり違っているので、それぞれ別の句として扱いたい。

「山を画て」は、山を描く行為をいうのではなく、屛風に描かれてある状態を表現したものである。その山も、唐風の水墨画と大和絵とでは感じが異なるが、何れの趣か、句の表現だけでは限定し難い。隠逸の人でも貧しくはなく、富裕な余情が感ぜられる。そういう境涯の人に対する挨拶句で、調べにもゆとりがある。

573

人〻を時雨よやどは寒とも

（蕉翁句集草稿）

蕉翁句集

冬季（時雨・寒）。

語釈 ○**人〻を時雨よ**　「人〻(ひとびと)を時雨(しぐ)れよ」。「人〻」は、俳席に集まった連衆を指す。「時雨よ」は、動詞「時雨(しぐ)る」の命令形。この動詞は普通「時雨が降る」或いは「時雨に濡れる」という自動詞であるが、ここでは「人〻を」を承けているから、「人々を時雨れさせよ」即ち「人々を時雨の風情に馴染ませせよ」といった意味の、特殊な用法と見られる。「時雨」に対する呼び掛けとしたのでは、「人〻を」どうせよというのか分らず、一貫した解釈が出来ない。「我をしぐるゝか」（Ｉ*214*）と同じ他動詞的用法であろう。○**やどは寒とも**　「宿(やど)は寒(さむ)くとも」。「やど」は宿屋ではなく、ひろく家居をいう。既出（Ｉ*103*等）。

大意　句座の催されるこの家がたとえ寒くとも、一時雨降って、人々を時雨の風情に馴染ませせよ。

考　『蕉翁句集草稿』にこの句を掲げて、「此句に配力亭に哥仙の半有。よろしからずとて、引さき捨よと也」とあり、同じ土芳の『蕉翁全伝』には元禄二年の条に、「此句ハ配力亭ニ遊バレシ夜也。はいかいアリ。六句ニテ捨ル。路通アリ」と見える。即ち二年冬の上野滞在中、杉野配力（藤堂藩作事目付役。蕉門）亭の俳席で発句として詠まれ

たのであった。『芭蕉句選拾遺』に下五を「寒けれども」と伝えるのは誤り。

俳席の侘びた気分を深めるものとして時雨を願う気持を発句としたのであって、「侘び」「寂び」の情趣をあらわす代表的な季物として、時雨に興じている。集まった連衆は皆、時雨の風情を解する人々で、亭主のもてなしも簡素なものだったのであろう。従って「やどは寒とも」は、亭主のもてなしの至らなさを咎めているのではないけれども、うっかり読むと、芭蕉の草庵で庵主の気持を述べたようにも取り兼ねない。『一葉集』の「草庵」という前書は、そんな見方から出たものかも知れず、それに従った為に、「折角人々が集まつたけれども、宿には何の設けもない、責めては時雨でも降て風流な景色の御馳走でもしたいといふ意もある」（内藤鳴雪『評釈』）といった誤解も生ずるに至った。なお、芭蕉がよろしからずとして裂き捨てよと指示した理由の一として、「やどは寒とも」の表現の不備を挙げる見方があるが、これは付合の出来を不満としたのであって、必ずしも発句の評価に関わることではないと思う。

574　冬庭や月もいとなる虫の吟　（蕉翁句集草稿）

有庵にて
冬庭や月にいとなる虫の吟　（蕉翁句集）

冬季（冬庭）。

語釈　○**冬庭**　「フユニハ」。草木の枯れた冬の庭の趣をいう。○**月もいとなる虫の吟**　「月も糸なる虫の吟」。「いとなる」は、糸のように細い意。「月」と「虫の吟」双方にかかる。「虫の吟」は、虫の鳴く音。「月」「虫」は秋季であるが、この句では「冬庭」が季語として立つ。「むめちるや糸の光の日の匂ひ伊賀土芳」（『炭俵』上）「花のうちの鶯また秋の蝉の吟の声、いづれか和歌の数ならぬ」（謡曲「蟻通」）「Ito.」（『日葡辞書』）。

大意 草木も枯れた冬の庭に、虫がか細い声で鳴き、空なる月も糸のように細い。まことに寂びた趣だ。

考 『蕉翁句集草稿』には、前の「人々を」の句の次にこの句を挙げて、「此句にて一入庵の哥仙有。路通同断」と見える。同じ土芳の『全伝』は元禄二年の条にこの句を掲げ、「此句ハ半残興［行］シテ、一入ト云道心ノ庵ニ遊バレシ日也。一折ニテ捨ル。路通在」と記してあり、二年冬の上野滞在中、山岸半残（藤堂藩士、蕉門）の主催で、一入という僧の庵で俳諧を成した時の発句と認められる。『蕉翁句集』の句形は誤伝であろう。

一入の庵の霜枯れた庭の趣を述べて、挨拶の意を寓した句であるが、地上の虫と天上の月とを耳と眼にとらえて、しんと静まった寂びの世界を現出している。「月もいとなる」といって「虫の吟」になだらかに連ねた技巧は精緻を極め、或いは蘇東坡の「赤壁賦」に「客有下吹二洞簫一者上。……余音嫋嫋(よいんでうでう)、不レ絶如レ縷」（客に洞簫(どうせう)を吹く者有り。……余音嫋嫋として、絶えざること縷の如し）とあるあたりを連想しているのではないかとも思われる。佳句であるが、巧みさが表に出ており、「寂びの世界を求めながら、まだ深まりきれないところがある」（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）という見方は適評であろう。

南都にまかりしに、大佛殿造栄のはるけき事をおもひて

575 初雪やいつ大佛の柱立　（真蹟懐紙）

笈日記・泊船集・俳諧問答・淡路島・宇陀法師・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

南　都

雪悲しいつ大佛の瓦ふき　（正月十七日付万菊丸宛書簡）

——花摘

冬季（初雪）。

語釈 **○南都にまかりしに**　「南都(なんと)に罷(まか)りしに」。「南都」は、奈良を指す。京の南にある旧都だからである。「まかる」は赴く意の

丁寧語。既出（Ⅰ111前書、Ⅱ329等）。「なんとうだいじ大ぶつさいこうの御ぐはんにて」（『出世景清』第一）「Nanto. Minamino Miyaco. ……i, Nara.」（『日葡辞書』）。○**大仏殿造栄**　「大仏殿」は、奈良東大寺の大仏殿をいう。「造栄」は「造営」の誤り。「忝くも此御寺は聖武皇帝の御建立、大仏殿にておはします」（謡曲「大仏供養」）「雲居寺造営の札召され候へ」（謡曲「自然居士」）「Daibut. Vôqina Fotoqe.」「Zôyei. Tçucuri itonamu.」（『日葡辞書』）。○**はるけき事をおもひて**　「遥けき事を思ひて」。完成が遥か将来の事であることを思って、の意。「人めゆゑのちにあふ日のはるけくはわがつらきにや思ひなされん」（『古今集』巻十）「Faruqesa. P.」（『日葡辞書』）。○**いつ**　「何時」。既出（Ⅰ123）。○**大仏**　東大寺の盧舎那仏の金銅像。座高五丈三尺六寸（十六メートル余）に及ぶ。○**柱立**　「柱立て」。建築工事で初めて柱を立てる時の祝いの儀式。世界最大の木造建築物たる東大寺大仏殿には極めて太い柱が用いられ、太いことの譬えにもなっている。「やまと大くにひだたくみ、そまいり木つくりことをはり、今日吉日のはしら立」（『出世景清』第一）「Faxiradate.」（『日葡辞書』）。

大意　初雪が露座の大仏に薄く積っている。大仏殿の柱立ては、一体何時のことなのだろう。

考　「ならにて」（『花摘』『蕉翁句集』）「中比元禄巳の冬、大仏栄興（ママ）をよろこびて」（『笈日記』）「大仏造栄（ママ）をよろこびたまひて」（『泊船集』）等の前書がある。最も時期の早い資料たる元禄三年正月の万菊丸（杜国）宛書簡に、「拙者も霜月末南都祭礼見物して、膳所へ出越年」とあり、伊賀の上野から奈良へ見物に来た十一月末頃の作と推定される。大仏殿は、源平時代に平重衡の手で焼かれた後、永禄十（一五六七）年にも兵火に罹って焼失し、大仏も焼け落ちた。僧公慶の勧進によって元禄元年に釿始めが行われたが、仏頭の鋳造の成ったのが同三年、柱立ては元禄十年で、現存の大仏殿が復興されたのは、ずっと後れて宝永五（一七〇八）年のことであったから、元禄二年冬には頭部を失った大仏が雨露に曝された状態であった。

句形について、上芳の『蕉翁句集草稿』では「初雪や」の形で出し、

是自筆也。花摘ニ、雪かなしいつ大仏の瓦葺と有。違也。

と述べているけれども、万菊丸宛書簡に「雪悲し……瓦ふき」の形が出ているから、『花摘』の句形は誤りではなく、

初案と見るべきである。表現の面からしても、「いつ大仏の柱立」と思い遣る中に「悲し」い感情は含まれるわけで、「悲し」と露わに言った初案の気持を内に籠めて、「初雪や」の形に治定したものと思われ、その逆は考えにくい。改案の時期は、『花摘』（元禄三年五月四日の条に掲出）以後であるべく、柿衛文庫蔵の真蹟懐紙は、元禄三年後半の染筆と見られている。

大仏殿再建の工事は始まったが、まだまだ前途は遼遠、柱立ても何時のことか分らない。「初雪」だから、うっすらと積った程度であろうが、頭部のない露座の大仏が雪を被った御姿は痛々しく、早く屋根がかかればという思いを述べたのが初案であった。しかし、「悲し」と感傷をそのままに出したところが浅く、「瓦ふき」については、加藤楸邨氏が、

……大仏殿完成を思い描いて自然なものとはいえようが、規模壮大さを感じさせる力は乏しい。それらの欠陥が意識されて、大幅な改案がなされたものであろう。「柱立」となると、巨大荘厳な大仏殿を思い描くにふさわしい表現である。（『芭蕉全句』）

と述べられた通りで、これまた後案の方がずっと好い。真蹟の前書と相俟って、損われた巨大な像であるだけに、荒涼とした雪景に寄せる芭蕉の思いがよく伝わって来る。喜びの情とする『笈日記』や『泊船集』の前書は芭蕉の文ではなく、句意を誤解したものであろう。

途中吟

576 山城へ井出の駕籠かるしぐれ哉　（焦尾琴）

焦翁句集

冬季（しぐれ）。

語釈 ○**途中吟**　「トチュウギン」。旅の途中で吟じた句の意。「途中唫」（『おくのほそ道』芭蕉発句「あかくと」前書）「Tochû. l, tochûni. Michino naca.」（『日葡辞書』）。○**山城**　「ヤマシロ」。現京都府の南部、京の地を含む旧国名。「やまとより山城を経て、近江路に入て美濃に至る」（『野ざらし紀行』）。○**井出の駕籠かる**　「井出の駕籠借る」。「井出」は、「井手」と書くのが正しい。京都府綴喜郡井手町大字井手のあたり、玉川下流の扇状地にある歌枕で、大和街道沿いに玉水の宿が置かれていた。ここでは「出で」を掛けてある。「駕籠」は、前後二人の人足が担いで人を乗せる乗物で、ここは街道筋で旅人を乗せる竹を組んだ粗製のもの。それに賃銭を出して乗るのが「かる」である。「蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通　駕籠のとをらぬ峠越たり　同」（『ひさご』）「馬かりて竹田の里や行しぐれ大津乙州」（『猿蓑』巻一）。

大意　俄かの時雨に、山城へ出ようと井手の里の駕籠に乗ったことだ。

考　元来山城の地である井手の里に関して「山城へ」というのは一見不審であるが、頴原博士が『芭蕉俳句新講』で述べられたように、奈良から京へ向う街道で井手の里への戻り駕籠を拾った場合と見れば問題は解決する。冬に奈良から山城方面へ向ったのは、貞享以降では元禄二年だけであって、十一月末の奈良の祭礼見物の後、近江の膳所へ向う途次の偶作と推定されよう。『蕉翁句集』が貞享四年の部に入れているのは誤りである。

俄かの時雨に逢って、やすい井手の里への戻り駕籠に乗った。山吹や蛙で名高い歌枕の地を目指して山城へと足を踏み入れる心のはずみが感ぜられる即興句である。加藤楸邨氏が謡曲口調を摸した発想と見て、謡曲「百万」に「あをによし奈良の都を立ち出でて、……山城に井手の里……」とあるのを引いておられるのは参考になる。古注には、

……馬は有れ共歩より行と云詞の意に寄て駕借とは云。誠に馬とは歌成べし。駕は誹諧也。（信天翁『笈の底』）

といった説が見え、「山科の木幡の山を馬はあれど歩ゆ吾が来し汝を思ひかねて」（『万葉集』巻十一。『拾遺集』巻十九にも異伝を所収）の古歌が背景にあるとするのであるが、地縁はもとよりあるにせよ、「山科の」では関係が薄く、ここでは無関係と見ておく。

577

長嘯のはかもめぐるか鉢たゝき（真蹟自画賛）

長嘯の塚もめぐるか鉢たゝき（泊船集）

長嘯が墓もめぐるか鉢たゝき（落柿舎日記）

正月十七日付万菊丸宛書簡・いつを昔・えの木・本朝文選・蕉翁句集

冬季（鉢たゝき）。

語釈 ○**長嘯のはか**「長嘯の墓」。「長嘯」は、戦国末期から江戸時代初期にかけての歌人。木下氏、名は勝俊。秀吉の室北政所の甥に当り、若狭小浜の城主であったが、関ヶ原の戦の後徳川氏に封地を奪われ、以後歿するまで京の近郊に隠棲して風流三昧の生活を送った。「長嘯」或いは「長嘯子」は、東山霊山に閑居剃髪してからの号である。和歌は二条派を宗とする細川幽斎に就いて学んだが、自身の傾向は寧ろ革新的で、当代の歌風に清新の気をもたらしている。その歌文集『挙白集』は芭蕉の愛読書の一であった。慶安二（一六四九）年六月十五日歿、享年八十一。墓は東山高台寺（現京都市東山区下河原町）にある。○**めぐるか**「巡るか」。「めぐる」は、巡拝する意。「忝くも御神鏡をいたゞき、国〻を巡り給ひしに」（謡曲「御裳濯」）。○**鉢たゝき**「鉢叩き」。陰暦十一月十三日の空也忌から四十八日の間、半僧半俗の時宗の僧が、毎夜洛中洛外の五三昧（京近辺の五つの火葬場）や七墓（七箇所の寺の墓地。大坂のものが有名であるが、京にもある）を巡り、鉦をたたきながら念仏と和讃を唱える寒行をいう。この行をする空也僧は、京中や近郊に鉢扣き町を形成して茶筅を作って暮しを立て、町を歩いて奉加銭等を受けると、携えた瓢箪から菓子の落雁を出して与えたという。念仏の声や鉦の音を風情とする冬の季語である。「凡斯徒謂鉢敲。言斯徒至冬則夜々巡市中又到洛外五三昧場……各鳴鉦誦念仏之号或以竹枝鳴所携之康瓢口唱無常之詞。若有信施之米銭則以瓢受之。是以瓢代鉄鉢。故称鉢敲」（『日次紀事』）「今四条坊門空也堂十八家鉢たゝき、毎年十一月十三日本堂に集て、四十八夜の行入とて踊念仏を修し、今日より十二月晦日迄四十八夜、洛中洛外山野寒林をめぐりて、無常の和讃并高声念仏を唱ふ。是を暁の鉢敲と謂へり。誠に殊勝の法則也。此徒平生不著笠、或は笠に不附緒といへり。△又十八家の者常に茶筅を制して産業とす。いかなるゆへなるか可考」（『滑稽雑談』）「鉢たゝき憐は顔に似ぬものか　乙劢」（『猿蓑』巻一）「Fachitataqi.」（『日葡辞書』）。

大意　鉢叩きの声をやっと聞くことが出来た。あの鉢叩きは遠く長嘯の墓までも巡っていたのかな。

考　板本初出の『いつを昔』（其角撰、元禄三年刊）には、「鉢たゝき聞にとて翁のやどり申されしに、はちたゝきまいらざりければ／箒こせまねてもみせん鉢叩　去来」という句文の後に「明けてまいりたれば」と前書してこの句を収め、元禄三年正月の万菊丸（杜国）宛書簡にも「京にて鉢たゝき聞て」という前書が見える。また『えの木』（一甫撰、元禄十二、三年頃刊）には、「干鮭も空也の痩も年ごろに梵音声（シャウ）のいたはしさ。嵐山に入る月も心なくぞ見へ侍る。一とせ芭蕉の翁寒夜の都を見まほしく、鉢扣キと行連レて、三条のひんがし洛の外に至りぬ。いほあるじと尼清元あやしみて申ければ、翁のいはく」としてこの句を出し、この後にもなお文を続けている。この句が元禄二年冬の作たることは、翌年初頭の書簡に見えることによって明らかであるが、句の成立事情を精しく伝えている去来の「鉢扣ノ辞」（『本朝文選』所収）の文は左の如くである。

○師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞むと、例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく、雨そぼふりて、とみにも来らねば、いかに待侘び給ひなむといぶかりおもひて、

〽箒こせ真似ても見せむ鉢扣と、灰ｰ吹の竹うちならしける。其声妙（タヘ）ｰ也。火ｰ宅を出よとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぐ〳〵の、似るべくもあらず。

かれが修行は、瓢ｰ簞（マヽ）をならし、鉦（カネ）打たゝき、二（フタリ）ｰ人三（ミタリ）ｰ人つれてもうたひ、かけ合ても諷ふ。其唱ｰ哥は、空也の作也。かくて寒の中と、春ｰ炑の彼岸は、昼ｰ夜をわかず、都の外、七ｰ所の三ｰ昧をめぐりぬ。無縁の手向のたふとければ、かの湖春も、わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶ｰ筌をさし、大路小路に出て、商ふ業かはりぬれど、さま同じければ、たゝかぬ時も鉢扣とぞ、曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引かけたれど、それも墨染にはあらず。おほくは萠（モヘ）ｰ黄（ギ）に鷹の羽、打ちがへたる紋をつけて着たれば、月雪に名は甚之亟と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、ことご

とくね覚はやらじと吟じけるも、ひとり聞にやたへざりけむ。

打とけて寝たらむは、かへり聞むも口おしかるべし。明して社との給ひける。横雲の影より、からびたる声して出来れり。げに老ぼれ足よはきものは、友どちにもあゆみおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の、

へ長嘯の墓もめぐるか鉢たゝきと、聞え給ひけるは、此あかつきの事にてぞ侍りける。

右の文は前掲の『いつを昔』の句文と表裏をなしており、この吟のあったのは十二月二十五日の明け方のこととなろう。当時去来の本宅は、『京羽二重』によれば中長者町堀川東へ入にあったが、芭蕉の訪れたのが嵯峨の落柿舎と何れであったかは、右の文にも明記がない。これについて頴原博士は『芭蕉俳句新講』に於いて、鉢叩きが明けてから来たことや、元禄八年十一月十三日の夜、落柿舎で其角・嵐雪・桃隣・去来の四人が師翁在世の昔を偲んで鉢叩きを聞いたこと等から、嵯峨でのことと推定しておられる。これに対して最近山本唯一博士は、中長者町の去来宅や落柿舎では鉢叩きの歩くコースから外れているとして、そのコースを委しく考証された。それによると、四条坊門堀川東にある空也堂に住む鉢叩きは、三条へ出て粟田口東南の阿弥陀が峰の火葬場に向い、そこから引返して黒谷道を経て新黒谷の墓所へ行く。更に神楽坂通りを西へ聖護院村の辺から加茂河原に出て川端を北上し、今出川通りで川を渡って西へ舟岡山西南の墓地を訪ね、千本通りを南下して西院に行く。それから九条の狐塚、七条東洞院の金光寺、加茂川を東へ渡って鳥部野、又川を西へ渡り、市中を通って空也堂へ帰るのだそうである。この途上の聖護院村（現京都市左京区聖護院）には、去来の内縁の妻可南の住む家があり、元禄三年六月卅日付曲水宛芭蕉書簡に「在庵も名残をしながら七月内と存候。又重而は去来が含聖護院村のはずに御座候」（「在庵」は石山の幻住庵滞在のことを指す）とあって、芭蕉も訪れたと推測される所であった。去来はこの家の所在を「岡崎」とも書いていて、東に接する岡崎村（現左京区岡崎）との境の辺にあったらしい。山本博士は「村の北部で神楽坂通りに面した地点であったと考えねばならない」としておられる。兎もあれ、中長者町や嵯峨の落柿舎が鉢叩きの辿る道として相応しくない以上、可南女

の家が極めて有力になるわけであって、「鉢扣ノ辞」にあるように暁にその声をきいたとすれば、前記のコースとは逆廻りの場合であろうという。私も右の新説に従いたく、委しくは山本博士の「芭蕉二題」（『文藝論叢』第43号）を参照されたい。なお去来と可南女との縁は元禄三年前後からと考えられており（尾形仂氏『去来先生全集』評伝篇）、元禄二年歳末の芭蕉の訪問は、去来の可南女との関係を明示する最も早い資料ともなろう。元禄八年十一月其角らが鉢叩きをきいた「落柿舎」（〔刀奈美山引〕）は、「落柿」（去来）の家の意と考えられる。これよりさき、芭蕉は奈良から井手・京を経て膳所に至り、此処の草庵を本拠として京や大津に往来していたものと思われる。『えの木』の前書にあるような事がたとえあったとしても、後に同じ句を示したと考えれば、最初の成立に関することと見る必要はない。真蹟自画賛は天理図書館所蔵の鯉屋伝来品で、衣を着た俗体の鉢叩きが、笠を背に下弦の月を仰ぎつゝ瓢を鳴らす図に句を賛したもの。元禄三年筆と推定されている。『泊船集』や『落柿舎日記』（重厚撰、安永三年刊）の句形は小異に過ぎず、恐らく誤伝であろう。

霜夜の闇に響く鉢叩きの高声の念仏や和讃を唱える侘びた趣は、和歌や連歌には採り上げられず、専ら俳諧のもので、蕉門の徒には特に愛されたようである。これを聴く為に、わざわざ京へやって来た芭蕉の執心の程も思われるが、お目当ての鉢叩きはなかなか来ない。待ち明かして漸く明け方に来た声を聴いて、待ち遠しかった思いを託した句であった。長嘯を引合に出したのは、この人に「はちたゝきあかつきがたの一こゑは冬の夜さへもなくほとゝぎす」の歌があるからで、時鳥の一声に擬したところが面白い。長嘯の墓は西山勝持寺の隣にもあるというが、芭蕉の考えているのは東山高台寺の方であろう。東山の方まで廻っていて、こんなに遅くなったのかと、七墓廻りを踏まえて、鉢叩きに問い掛ける体にして興じた句で、「箒こせ」の句など詠んで気を揉んでいた去来に対する心遣いも見える。

ぜゝ(ママ)草菴を人〳〵とひけるに

578

あられせば(ママ)網代の氷魚を煮て出さん　（花摘）

みぞれせば網代の氷魚を煮て出さむ　（忘梅）

丸雪せよ網代の氷魚煮て出さん　（蕉翁句集）

冬季（あられ・網代の氷魚）。

語釈　**○ぜゝ草菴**　「ぜゝ」は、近江国滋賀郡、琵琶湖の南端、瀬田川の湖に注ぐ西岸にある城下町膳所で、今の大津市本丸町・丸の内町あたりをいう。但し、ここにいう「草菴」は、粟津の義仲寺（現大津市馬場一丁目）境内の無名庵を指し、これ以後湖南に於ける芭蕉の足だまりになる所で、「粟津草庵」（元禄四年正月十九日付正秀宛芭蕉書簡）とも呼ばれた。膳所と粟津は相接している地なので、芭蕉の意識では一つの物だったのである。「菴」は「庵」に同じ。**○人〳〵とひけるに**　「人〳〵訪ひけるに」。門人達が訪ねて来た折に。**○あられせば**　「霰せば」。若し霰が降って来たら。今栄蔵氏の『芭蕉句集』に、「せば」は「せばよからん」の心とあるのは、初五で切れると見ているらしい。しかし『おくのほそ道』に見える仏頂の道歌「竪横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば」等の場合とちがって、ここに省略を考えるのは不自然であろう。この句は「煮て出さん」で立派に切れており、「あられせば……煮て出さん」と一続きに解して何等不都合は認められない。**○網代の氷魚**　「網代の氷魚」。「網代」は、魚を捕る仕掛で、川瀬に数百の杭を網を引く形に打ち並べ、経緯を入れて、その端に筌などを付けてある。「氷魚」は鮎の稚魚で、体に色素細胞がまだ殆んど表われていないもの。秋から冬にかけて琵琶湖でとれるものが有名だった。氷魚が何を指すかについては異説もある。「網代　冬也、水辺也。……網代うつは、あじろ木を拵る事也。冬氷魚を取べき用意也。」「氷魚　冬なり。あじろにてとる魚也」（『御傘』）「大和本草云、膾残魚、俗にきすこと訓ず。甚誤り。……白魚なる事明白也。無レ鱗、但目有二黒点一のみ。其外の説も皆白魚也。江州田上・堅田などに冬月捕レ之。氷魚と云。又鯀魚の苗、冬春在レ海者、亦可レ謂二氷魚一。△或云、氷魚は昔より近江田上にてとる。田上の網代に漏たる氷魚を、山城宇治にて取といへり。此者白魚又は鯀魚の苗にあらず。別に冬生ずる白

小魚侍るとなん。○丈石補……氷魚は塩海には不レ生。只近江の湖にのみ有也。長三寸許、色あゆのごとく、口もと少鮎より尖れり。其光銀色有て鮎より猶美し。各別の物也。尤和品なるべし。味小鮎より淡薄にして、尤可レ賞。……○本朝食鑑曰、氷魚状細小、不レ過二一寸一。頭尾倶白、如二氷筋一。目黒如二墨之点一紙。煑レ之如二銀線一。自二秋末一至二冬初一、氷魚聚二于魚梁魚簄間一。……罶簄者古之網代也。……古者宇治・田上川網代采レ之。近世与レ川通之江海采レ之」（『滑稽雑談』）「あじろのひをも心よせたてまつりて、いろ〳〵の木葉にかきまぜ、もてあそぶを」（『源氏物語』総角）「Ajiro.」「Fiuo.」（『日葡辞書』）。○**煮て出さん**　「煮て出さん」。前掲『本朝食鑑』の記事に見えるように、氷魚は煮て食べるものであった。「出す」は、食膳に供する意で、日常語。「秋湖かすかに琴かへす者　野水　烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜国」（『冬の日』）「かゝさずに中の巳の日をまつる也　利牛　入来る人に味噌豆を出す　孤屋」（『炭俵』上）「Ni, iru, ita.」「Daxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。

大意　よくお出でなさった。大変寒いが、若し霰でも降って来たら、名物の「網代の氷魚」を煮て振舞うとしましょう。

考　『花摘』の刊行された元禄三年以前に、冬膳所辺に居たことの確認出来るのは元禄二年十二月だけで、同三年正月十七日付の万菊丸宛書簡に「拙者も霜月末南都祭礼見物して、膳所へ出越年」とある頃の作と推定される。『忘梅』は大津の尚白が元禄四、五年頃編纂した書であるが、撰者の生前には刊行されず、安永六（一七七七）年に至って漸く公刊の運びになったもので、「みぞれせば」という句形には今一つ信を措き難い。『蕉翁句集』の「丸雪(あられ)せよ」は、推敲後の形の可能性もないではないが、信憑性にやはり問題があろう。「氷魚(ひを)」という語もあるが、ここは助詞の「を」があった方が落着くようである。異形は何れも問題があって、初出の『花摘』に代り得るものとは思えない。

膳所・大津辺の新しい門人達を迎えた挨拶の句で、興じたところに喜びの情が窺える。細道の旅の後の新風を開拓するに当って、この地の人々が重要な役割を担ったことは、『ひさご』『猿蓑』の二集を繙けば明らかであろう。寒い冬の日の興として、「あられ」も「氷魚」も眼前の物でなくても可い。ただ、氷魚との照応関係としては、湿った感じの「みぞれ」では駄目で、白く光るささやかな魚と乾いた「あられ」の配合は絶妙である。それがこの時の心のは

ずみを生かすものでもあって、恰好の即興句といえよう。

つくしのかたにまかりし比、頭陀に入し五器一具、難波津の旅亭に捨しを破らず、七とせの後、湖上の粟津迄送りければ、是をさへ過しかたをおもひ出して哀なりしまゝに、翁へ此事物語し侍りければ

579 これや世の煤にそまらぬ古合子　（俳諧勧進牒）　芭蕉庵小文庫・蕉翁句集

對門人の僧

是や世の煤にそまらぬ古格子　（泊船集）　宇陀法師

冬季（煤仏ひ）。

語釈 **○つくしのかたにまかりし比**　「筑紫（つくし）の方（かた）に罷（まか）りし比（ころ）」。「つくし」は、筑前・筑後両国（現福岡県）の古称。肥の国・豊の国（現佐賀・長崎・熊本・大分各県）を含む北九州、また九州全体をこの名で呼ぶこともある。以下の前書は『俳諧勧進牒』の撰者路通の文で、彼が嘗て筑紫の方に赴いた当時、の意である。「筑紫高良山の僧正は加茂の甲斐何がしが厳子にて」（「幻住庵記」）「T-çucuxi. i, Saicocu.」（『日葡辞書』）。**○頭陀に入し**　「頭陀（づだ）に入（い）れし」。「頭陀」は「頭陀袋（ぶくろ）」の略。僧が経巻・法具・布施物等を入れて首に懸ける袋をいう。仏道修行者が守るべき生活規律が十二頭陀行で、乞食して歩く時にもこの袋を携帯する。「ぜひなく木かげにづだをおろし、そでをかたしきまどろみけるに」（恋川春町『高漫斎行脚日記』上）。**○五器一具**　「ゴキイチグ」。「五器」は、修行僧が携える蓋付きの椀。もらった食物を入れるのである。「合器（ごうき）」の転といわれ、「御器」とも書く。「一具」は、一揃い、一式。「此こゝろ推せよ花に五器一具　芭蕉」（『葛の松原』）「Goqi.」「Ichigu.」（『日葡辞書』）。**○難波津の旅亭**　「難波津（なにはつ）の旅亭（りょてい）」。大坂の宿屋。「難波津」（I 192前書）「旅亭」（I 211前書）何れも既出。**○捨しを破らず**　「捨（す）てしを破（やぶ）らず」。路通が捨てた五器を、宿屋が壊しもしないで、の意。実際は路通が忘れたのであろう。**○七とせの後**　「七年（なゝとせ）の後（のち）」。「終に五とせの春秋を過して、ふたゝび

芭蕉になみだをそゝぐ」（「芭蕉を移詞」）。**○湖上の粟津迄**　「湖上の粟津迄」。「湖上」は、湖の上の意。「上」は清音。「粟津」は、琵琶湖の最南端、瀬田川河口部西岸の広域地名で、近世期には粟津七村として膳所・西ノ庄・中ノ庄・木ノ下・別保・鳥居川に馬場または松本を含めて呼ばれていたという。句の成立時期からして、ここの「粟津」は即ち前の句の前書の「ぜゝ草庵」とおぼしく、路通は芭蕉と共に此処に居たのである。「湖上に生れて東野に終りをとる」（芭蕉「東順伝」―『句兄弟』）「Coxǒ. Mizzuvmino vye.」（『日葡辞書』）。**○送りければ**　「難波津の旅亭」が路通の許へ五器を送って来たというのであろう。どうして路通の消息を知ったのかは明らかでない。**○是をさへ**　「是」は、五器を指す。「さへ」は強め。**○過しかたをおもひ出して**　「過ぎし方を思ひ出だして」。「過しかた」は、七年前「難波津の旅亭」に路通が居た頃のことをいう。「過し比」（Ⅰ *192* 前書）及び（Ⅰ *3*、*244*）参照。「しづかに思へば、よろづに過にしかたの恋しさのみぞせんかたなき」（『徒然草』二十九段）「此にも内々所望すると聞し物をと、きッとおもひいだして」（『平家物語』巻九）「Vomoiidaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。**○哀なりしまゝに**　「哀れなりしまゝに」。「哀」は、感慨を催す意。「まゝに」は、理由をあらわす語法。感慨を催したので、というのである。「いとねたきまゝに思ひたばかる」（『落窪物語』巻二）「Mamani.」（『日葡辞書』）。**○翁**　「オキナ」。芭蕉のこと。門人の間で敬愛して呼んだ。「翁ちかく旅行思ひ立給へば」（子珊『別座鋪』序）。**○此事**　「此の事」。昔捨てた五器が手許に戻って来たこと。**○物語し侍りければ**　「物語し侍りければ」。（五器が戻って来たいきさつを）物語しましたところ（次の句を詠まれた）、というのである。「むかしあまた有ける人の中に虎の物語せしに」（『あら野』員外、素堂発句「麦をわすれ」前書）「Monogatariuo suru.」（『日葡辞書』）。**○これや**　「これ」は、五器即ち下の「古合子」を指す。「や」は詠嘆。これがその古い五器なのだなあ。「月華の是やまことのあるじ達」（Ⅱ *416*）と同じ表現である。**○世の煤にそまらぬ古合子**　「世の煤に染まらぬ古合子」。「合子」は蓋付容器の総称で、ここでは前書の「五器」をいう。それが俗世の汚れに染まらない物と賛めたのである。「煤」は当季の「煤払ひ」（Ⅱ *335*）を裏に秘めた修辞。「煤さがる日盛あつし台所　怒風」（『続猿蓑』下）「埃ニソマルベキ道理ナシ」（『四河入海』巻五ノ一）「田舎合子のきはめて大にくぼかりけるに、飯うづたかくよそゐ」（『平家物語』巻八）「Susuo faqu.」「Xoacuni somaru.」「Gôxi. …… ou goquis.」（『日葡辞書』）。

大意　これこそは俗世の汚れに染まらない古五器なのだなあ。

考　『芭蕉庵小文庫』と『蕉翁句集』には『泊船集』と同じ前書がある。この句は元禄四年春に成った『俳諧勧進牒』初出なので、元禄三年冬以前の成立であることはいうまでもなく、路通の前書に「翁へ此事物語し侍りければ」

とあるのによって、芭蕉と路通が面晤し得た時でなければならない。路通は元禄三年正月三日に芭蕉と湖南で別れて江戸へ下り、次いで奥羽を巡歴して江戸に戻った。十一月に俳諧勧進を発起して以来もずっと江戸に居て、翌年正月には膳所藩邸の菅沼曲水を訪ねたりしている。『俳諧勧進牒』は翌年春に同地で撰が成っており、三年冬に芭蕉と会う機会はなかった。それ以前、芭蕉と路通が冬同じ所に居たのは元禄元年と二年であるが、元年には江戸の深川で近隣に住み、二年には伊賀から膳所までずっと同行したものと見られる。句の前書に「湖上の粟津迄送りければ」とあるから江戸ではなく、湖南に居た時であろう。この前書からして、路通は所謂「ぜゝ草菴」(578前書)、義仲寺境内の無名庵に芭蕉と同居していたと見られ、その間の作と推定される。『芭蕉句集講義』で牧野望東氏が、「芭蕉が行脚中に用ゐた五器一具を難波の旅亭に遺して置いたのを、七年過ぎて路通より粟津なる芭蕉の許に送って来た、其時に詠んだ句」としておられるのは誤解である。『泊船集』等の「古格子」は、同音から生じた杜撰な誤りに過ぎない。

何の変哲もない古五器ながら、七年を経てもとのままに持主に送り返されて来たとは珍しい。其処に旅亭の亭主の誠意のあらわれを見て、感じているのである。生き馬の目を抜く世間には稀なこととして、「世の煤にそまらぬ」といい、当季の媒払いを匂わせたあたり、手馴れた巧みさを見せている。

580 少将のあまの咄や志賀の雪　(智月筆懐紙)

大津にて智月といふ老尼のすみかを尋て、をのが音の少将とかや、老の後此あたりちかくかくれ侍しといふを

奉納集・岩壺集・蕉翁句集草稿・菊の塵・蕉翁句集・巾秘抄・類題名家発句集

冬季(雪)。

語釈 ○**大津**「オホツ」。今の滋賀県大津市。既出(Ⅱ396前書)。○**智月といふ老尼**「智月(ちげつ)」は、大津の荷問屋河合(川合とも)佐

右衛門の妻。弟の乙州を養って嗣子とした。若い頃宮仕えの経験があったという。俳諧は初め尚白門。当面の句の時芭蕉にはじめて会い、以後上方にある芭蕉の身の廻りの世話をこまやかに勤めた。芭蕉よりも十歳ぐらい年長かと思われ、貞享三年に夫に死別して尼になった。「老尼」とある所以である。享保三（一七一八）年歿。「あれは何ものぞと御尋あれば、老尼涙をおさへて申けるは」（『平家物語』灌頂巻）「Rôni. Voitaru ama.」（『日葡辞書』）。○**すみかを尋て**「棲処を尋ねて」。住んでいる家を訪問して。『蕉翁句集』の前書には「大津松本あたり、智月といふ老尼のもとに尋て」とある。松本は今の大津市内、湖畔の諸港から来る荷船の着岸する港があり、荷問屋の河合家も、その辺にあったのであろう。「三上山は士峰の俤にかよひて、武蔵野ゝ古き栖もおもひいでられ」（「幻住庵記」）「Sumica.」（『日葡辞書』）。○**をのが音の少将とかや**「少将」は、鎌倉中期の女流歌人藻璧門院少将を指す。藤原信実の女で後堀河天皇の中宮藻璧門院に仕えた。生歿年未詳。「おのがねにつらきわかれはありとだに思ひもしらでとりやなくらむ」（『新勅撰集』巻十三）の歌がもてはやされて「おのが音の少将」と呼ばれた。「をのが音」は鶏自身の声の意だから、「をの」は「おの」（己）と書くのが正しい。「とかや」の下に「いふ人」という言葉が略されている。○**老の後**「老いの後」。年とってから。（Ⅰ*3*）参照。○**此あたりちかくかくれ侍し**「此の辺り近く隠れ侍りし」。この辺り近く（大津付近に）隠棲した、の意。頓阿の『井蛙抄』には、少将の妹弁内侍が志賀の仰木の里（比叡山麓坂本の北）に隠棲したといい、少将の方は京の法性寺旧跡に住んだ由を伝える。少将が志賀に住んだという根拠は明らかでなく、弁内侍と混同したのかも知れない。「かくる」は、隠れ住む意である。既出（Ⅱ*325*前書）。なお、「君火をたけ」の句の前書（Ⅱ*267*）参照。○**少将のあまの咄**「少将の尼の咄」。藻璧門院少将が老後尼になったものとして、それを話題にすることをいう。「となりさかしき町に下り居る　重五　二の尼に近衛の花のさかりきく　野水」（『冬の日』）「Ama.」（『日葡辞書』）。○**志賀**「シガ」。今の滋賀郡は湖南から湖西にかけてひろがるが、天智天皇の時代大津の宮のあった今の大津市の湖岸が昔の志賀の津、志賀の浦であり、京から大津へ越える山路を「志賀の山越え」ともいい、大津市内には「滋賀里」の地名も残っている。古来の歌枕である。「麦うつや内外もなき志賀のさと　重五」（『あら野』巻七）。

大意　名所の志賀の里の雪の中、風雅を嗜む老尼と、昔此処に隠れ住んだという少将の尼の話をするとは、面白いことですな。

考　「知月（ママ）といふ老尼のすみかを尋て」（『奉納集』）「智月老尼の栖を尋て」（『岩壺集』）「をのが音につらき別のありとだにしらでやひとり鳥の鳴らんと詠しは、少将の尼のむかしとかや。おのが音の唯人（ママ）となむ世にさたせられて、老の後

志賀の里にかくれ侍りしとなり。いま大津松本あたり智月といふ老尼のもとに尋て、かゝる事などかたりけるついでおもしろさに」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『蕉翁句集草稿』に「是詞書有。智月方にての句也。智月脇、あなたはまさご爰は木がらし」と見える「詞書」は、『蕉翁句集』所収の文を指すのであろう。村田虎次郎氏蔵の智月筆詠草には「あなたは真砂」の智月脇と、「草箒かばかり老の家の雪」という智月発句と「火桶をつゝむ墨染のきぬ」という芭蕉脇を録し、「元禄二年冬」と年記がある。これによって、同年十二月に膳所に来て義仲寺の草庵に居た頃、近くに住む智月を訪問した時の吟と推定されるのである。彼女の養嗣子乙州とは、細道の旅の途次金沢で俳席を共にしていたが、その養母にして姉なる智月とは、この発句を詠んだ時が初対面であったろう。『蕉翁句集』が元禄三年の部に収めるのは誤り。

智月は近江蕉門の女流として聞えた存在であり、芭蕉の身の廻りにもこまやかな心遣いを見せる優しい人であった。若い頃御所に上っていたといえば、優雅な品もあったであろう。志賀の里に来て「己が音の少将」を連想するにはそれだけの由来があったわけで、それがおのずから智月への挨拶になっている。また、「雪」は同じ時の智月の発句に徴しても実況だったことが分るが、「雪ならば幾たび袖を払はまし花のふゞきの志賀の山越え」（謡曲「志賀」）の歌があるように、歌枕の志賀は花の名所であって、それを「雪」に翻したところに俳諧があり、「花の雪」も連想される面白い修辞になっている（『続芭蕉俳句研究』露伴説参照）。場所といい人といい、昔の風雅を偲ぶに恰好の挨拶句で、伊勢の句「月さびよ明知が妻のはなしせむ」（Ⅲ563）と表現が似ている点にも留意したい。

歳暮

581　何に此師走の市にゆく鴉　（正月十七日付万菊丸宛書簡）

花摘・三冊子・蕉翁句集

何に此師走の市へ行烏（生駒堂）
何をこの師走の市を行からす（泊船集）
何に此師走の市を行烏（蕉翁句集草稿）

冬季（師走）。

語釈 ○歳暮　既出（I 68、151前書）。○何に此　「何に」は、どんな目的で、何の為に、の意。「なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむはなをそでにふれけん」（『源氏物語』末摘花）の歌を意識した表現と思われる。「此の」は一見直ぐ下の「師走の市」にかかる如くであるが、『三冊子』によれば、芭蕉はこの句について「五文字のいき込に有」（赤雙紙）と言ったといわれ、意気込んで問い詰めるような調子がこの句の眼目なのである。「何に」とだけで「此の師走の市」と続くのでは強い調子が生きない。破格ながら「此」は語を隔てて「鴉」にかかると見るべきであろう。○師走の市　「師走の市」。年末に開かれる商品売買の市場。雑踏の余情がある。「師走」は既出（I 217）。「からながら師走の市にうるさゞい（越人）」（『あら野』巻六）「Ichiga tatçu.」（『日葡辞書』）。○ゆく鴉　「行く鴉」。「ゆく」は、飛び行く意。「鴉」は既出（I 122）。

大意 何の為にこの鴉は、人のごった返す師走の市などに飛んで行くのか。私も何か気ぜわしく市へ出掛けて行くのだが。

考 元禄三年正月二日付の荷兮宛、同正月十七日付の万菊丸（杜国）宛書簡に歳暮の句として見え、句形は同じである。二通とも原簡は失われたが、ここでは比較的に書写の信頼出来る万菊丸宛を本位句の底本とした。元禄二年の歳暮に湖南か京都辺で成ったことは明らかである。
「市へ行烏」という異形を伝える『生駒堂』は、『花摘』と同じ元禄三年の刊行ながら、大坂談林系の撰集なので、其角の撰著より信頼性は劣る。『泊船集』の初五「何をこの」については、土芳の『蕉翁句集草稿』に「此句、白船（ママ）に、何を此と有。違也」とある通り誤りであろう。『草稿』が「花つみの句也」と書き添えながら、下を「市を行烏」と誤ったのは、『泊船集』の影響を受けたのである。華雀の『芭蕉句選』には「何をこの師走の市に行からす」とい

る。

ら異形も伝えられるが、芭蕉の書簡と『花摘』の一致する句形に拠るべきことは論がなく、他は凡て誤伝と考えられ

「五文字のいき込に有」（赤雙紙）と芭蕉がいったように、鴉に向って詰問するような強い調子が、この句の表現の焦点なのであるが、清閑にある自らを高く標置して、馬鹿な鴉だと言っているのではない。その間の消息については、諸家の説に悉されているので、左に列記する。

市に烏、自然を出す。実は市人と群行たまふみづからを比し申されけん。己が事を何にといへる隠者のをかしみ、いふも更也。（杜哉『蒙引』）

……この芭蕉の語を心に置いてみると、「何にこの」は非常に重いものが寄せられていることになってくる。この五文字で何を言おうとしたものであろうか。師走という世俗の市を厭う気持というのが定説のようであるが、師走の市に飛ぶ烏を厭うというよりは、その烏によって、いつしか師走の市に惹かれている自分の心に気づき、それを自ら咎める口吻のように感じられる。「此の」は「師走の市」にかかるのではなく、「行く烏」にかかるものと思われ、「此の……烏」にはそこに自己自身の姿を見いだしている響きがあるのである。とりあげられたものがどこか垢ぬけしない烏であることによって、この句には微妙な味が出てくるようである。……「師走の市」は……種々のものがあわただしい中に売られているわけで、何とはなしに人を惹きつけるところが巧みにとらえられて、新鮮である。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

冒頭、主題の中心に切りこんだ勢いの烈しさがある。表現の一本に通った勢いが、結局「烏」まで持続している。芭蕉は元来、賑やかな場所が嫌いではない。この句も、初めて年を越す膳所の町の雑踏の方へ、心は引き寄せられている。「何にこの」と、烏を咎めるような口吻で、実は顧みて自分のことを言っているのだ。何の反省もなく、一直線に年の市をさして飛んで行く烏への、羨望さえ感じられる。あの貪欲な烏と同じように、飛んで行き

たくて浮れている自分の気持を、「何故？」「何を好んで？」と、自分でいぶかり、自分に問いかけているのである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

歳末になると、俗世間の人々は生活の営みに追われ、忙しく働いている。ふだん、俳諧や風雅にたしなみのある人でもそうである。俗世間の忙しい折には、関係のない自分などはじっと片隅にいればよいのに、自分なりの用事もあって、忙しそうな人々の中へのこのこ出かけてゆくこともある。そんな自分を省みる気持をこめている。（井本農一博士『古典文学全集・松尾芭蕉集』）

この句の文脈を分りやすくすれば、「何に師走の市にゆく此の鴉ぞ」と、鴉に向って詰ったわけである。その裏面には、「師走の市」の雑踏に心惹かれる芭蕉の気持がある。談林の時代、現世の享楽を謳歌した芭蕉を考えれば、その辺の心境は知るべきであろう。苦笑したいような気持を内に籠めて、鴉をなじる体に言い倣したところが、この句の俳諧なのである。芭蕉は所詮詩の人で、悟達の道人ではなかった。

元禄三年

元祿三元旦
みやこちかきあたりにとしをむかへて

582　こもをきてたれ人ゐます花のはる　（真蹟草稿）

正月十七日付万菊丸宛書簡・其袋・花摘・卯辰集・泊船集・かくれ里・蕉翁句集・目団扇

菰をきて何國に御座花の陰　（皺筥物語）

春季（花のはる）。

語釈　○**元旦**　「グワンタン」。正月一日の朝の意から、「元日」（Ⅰ*175*）そのものをもいう。○**みやこちかきあたり**　「都近き辺り」。ここは近江の膳所・粟津辺を指す。この年正月十七日付の万菊丸（杜国）宛書簡に、前年暮のことに触れて「霜月末南都祭礼見物して膳所に出、越年」とあり、「あられせば」（Ⅲ*578*）の句の『花摘』前書にある「ぜゝ草菴」が粟津義仲寺境内の無名庵を指すと思われることは前述した。○**としをむかへて**　「年を迎へて」。新しい年を迎えたことをいう。「年を迎へて色をなす綾の錦の唐衣」（謡曲「呉服」）。○**こもをきて**　「菰を着て」。「こも」は、真菰を粗く織って作るむしろで、それを着るのは乞食の風体である。「菰を被る」ともいう。「冬の日や菰着て在す影法師　蕪村」（『発句万題集』）「Como.」（『日葡辞書』）。○**たれ人ゐます**　「誰人坐す」。どんな方がいらっしゃることか。「います」は、「あり」「をり」の尊敬語で、「い」は接頭語である。「居る」と混同して「ゐ」の仮名を用いるのは誤り。ここで切れる。「たれ人の手がらもからじ花の春　釈古梵」（『あら野』巻二）「Imaxe, imasu, imaxi.」（『日葡辞

書』)。○花のはる　「花の春」。春に咲く花をほめて初春の季語としたもの。既出(Ⅱ 338)。

大意　この目出たい花の春に、菰を着た乞食の姿で、どんな尊い聖がいらっしゃることか。

考　「都ちかき所にとしをとりて」(『其袋』『蕉翁句集』)「湖水のほとりに春を迎へて」(『卯辰集』)「京ちかき所に年をとりて」(『泊船集』)等の前書があり、元禄三年と推定される正月二日付荷兮宛、正月十七日付万菊丸宛の両書簡に見える。其角の『花摘』元禄三年六月十日の条にも「翁当歳旦に」として収められているから、元禄三年の歳旦吟たることは確実である。この年正月五日付、伊賀上野の式之・槐市両名に宛てた書簡に、

　愚句之事、随分当年は晴がましく、京・大津のもの共耳をそろへ目をそば立申候。わらはぬ程の事申候。

とあるのは、当面の「こもをきて」の句のことと思われ、また同年卯月十日付、大垣の此筋・千川に宛てた書簡に、

　愚句御覧被成候よし、させる事も無御坐候へ共、出申候は、遠境書状の通ししれ兼候故、無事と有所ヲしらせん為に板木に顕し、又一つは京の門人去来など云ものにそゝのかされて申出候。

とあるのによれば、去来の歳旦帳の引付などに載った句と思われる。真蹟草稿は筆馴らしに書きすさんだものらしく、表記を変えて二句並記され、裏面にはこの年春に成った「洒落堂記」の草稿の一部が書かれている。

『皺筥物語』の句形は誤伝であろう。この外、華雀の『芭蕉句選』には「たれ人かこも着ています花の春」という形も伝えられ、『芭蕉翁消息集』所収の北枝宛書簡にも同じ句形を出して、「何人か」とも案じたなどと記しているが、この書簡は真簡とは認められず、『句選』の所伝も信憑性に問題がある。真蹟や同年の板本の句形のみが信頼し得るものである。

　この句の作意については、右にも引いた此筋・千川宛の書簡に、芭蕉自身のくわしい説明がある。即ち、

　五百年来昔、西行の撰集抄に多クの乞食をあげられ候。愚眼故、能人(よき)見付ざる悲しさに、二たび西上人をおもひかへしたる迄に御坐候。京の者共は、こもかぶりを引付の巻頭に何事にやと申候由、あさましく候。

とあり、その外、正月二日付の荷兮宛に「都の方をながめて」と前書して「撰集抄の昔をおもひ出候まゝ如此申候」とあるのや、万菊丸宛のこの句の前に「歳旦、京ちかき心」とあるのも参考になろう。『撰集抄』は芭蕉の愛読書であったが、其処に描かれた多くの乞食達、仏道の為に身を乞食の境涯にまで落すことを厭わなかった数多の高僧を思い、自分を始めとする俗衆は「愚眼」ゆえに乞食姿の高僧が居ても見つけられない悲しさに、このような「乞食」を描いた西行を回想して、慕わしい気持を寓したのだというのである。『撰集抄』には、菰や藁を身にまといながら唯識の理を悟っていたという僧や、山階寺の貫主として三千の禅徒に仕えられていながら、その地位を捨てて辺鄙の塵に交り、その徳を隠した真範僧正の話などがあり、芭蕉の念頭にはそれらの「乞食」達があったことになる。花の春にそむいて見すぼらしい菰をまとった乞食の中にも、どんな尊い聖がおられるか分らないというのである。そして、芭蕉自身の解説を見る限り、これは乞食を路傍に実際に見ての作ではなく、飽く迄内面的想化によった句であろう。幸田露伴は『芭蕉俳句研究』で、乞食を実見しての作と見ているが、この書は『句選』の「たれ人かこも着ています」の形に拠っている。この形だと、菰を着た乞食姿の人が眼前の物の如くであって、そのような人が居るかも知れないという想化の感じが弱くならざるを得ない。しかし、「たれ人か」の形が信じ難いことは前述の通りで、この句に於いて信じ得る句形は「こもをきて」を初五に置くものだけなのである。やはりこの句は、芭蕉自身の解説に沿って考えて行かなければなるまい。

「京ちかき心」とは何であろう。尾形仂氏は、天和の悲愴調、貞享の風狂調に続いて、この元禄初頭の頃が叙景中心の「景気」調に変る転換の時期であり、その中心が京の俳壇だったことを指摘され、「単に繁華の巷というだけでなく、実は、はなやかな俳壇復興の中心地京都、俳諧師の市ともいうべき京都の俳人社会」(『松尾芭蕉』)を強く意識した故と見ておられる。「花のはる」とは対照的な菰を着た道者を中心としたこの句の世界を、そうした一般の俳壇に対立する「大きな逆説的宣言」(同上)とするのは面白い説であるが、「京ちかき」といった場合の「京」は何よりも、

昔から華やかな宮廷生活や、それを捨てて出家した人達の物語に富む場所として言われているのではなかろうか。それが「こもをきてたれ人ゐます」の背景としての役割を果しているのだと思う。

この句には俗世の名利を放下した求道者の姿が理想として描かれている。細道の旅に出る前、「一鉢境界、乞食の身こそたうとけれと、うたひに侘し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびは、やつしくてこもかぶるべき心がけにて御坐候」（猿雖宛書簡）と書き、「なほ放下して栖を去、腰にたゞ百銭をたくはへて、柱杖（ママ）一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは」（『栖去之弁』）と書いた芭蕉を思うべきである。前引式之・槐市宛の書簡によれば、奥羽旅行を終えて上方に滞在していた芭蕉は、京・湖南の俳人達の注目の的だったらしい。俗俳と対峙するこの句の道念的世界について、芭蕉は「わらはぬ程の事申候」（式之・槐市宛）と述べて自信を持っていたが、京の俳人達は頓と無理解で、「こもかぶりを引付の巻頭に何事にや」（此筋・千川宛）などと見当ちがいの批判をするばかりであった。芭蕉からすれば、「あさましく候」（同上）と一蹴するより外なかったであろう。

膳所へゆく人に

583　獺（カハウソ）の祭見て來よ瀬田のおく（花摘）

菊の道・蕉翁句集

春季（獺の祭）。

語釈　○膳所へゆく人　「膳所（ぜぜ）へ行（ゆ）く人（ひと）」。「膳所」は既出（Ⅲ578前書）。そこへ赴く人とは、蕉門の俳人浜田珍碩（後の洒堂）を指すと思われる。［考］参照。○獺（カハウソ）の祭　「獺（カハウソ）の祭（まつり）」。七十二候の一。立春の次の雨水の気の第一候に当り、陰暦正月十六日から二十日までの五日間をいう。「獺」はイタチ科の哺乳類で、体長六十～八十センチ、平たく長い尾を持ち、指に水かきがあって、よく水に潜る。河岸海岸等の穴に棲み、夜に魚・貝・水鳥を捕食する。とった魚を岸に運んで並べ、なかなか食わない習性があり、こ

れを先祖を祭る行為と見なして「獺、魚を祭る」というのである。「礼記月令曰、孟春之月、獺祭レ魚。……今按に、水獺は俗に云河うそ也。……此もの祭レ魚の心あるは、初春の季也。獺と計は雑也」（『滑稽雑談』）「獺の祭に恥ぢよ魚の店　蝶夢」（『俳諧古選』）「Caua uso.」「Matçuri.」（『日葡辞書』）。○**見て来よ**　「見て来よ」。○**瀬田のおく**　「瀬田の奥」。瀬田川は琵琶湖から流出する唯一の川で、近江の滋賀郡と栗太郡の境をなし、南西に流れて宇治川となる。信楽川を併せるあたりは甲賀郡の山中で、この辺を「瀬田のおく」といったのであろう。「めに残る」（Ⅱ*395*）「此ほたる」（Ⅱ*396*）の句の条参照。

大意　折柄丁度獺祭の候。これから瀬田川の上流を通ったら、獺の祭の様子を見て来なさい。

考　『菊の道』（紫白女撰、元禄十三年刊）には「膳所へ行人の許にて」と前書がある。其角の『花摘』初出の句なので、元禄三年春までに成っていたことは確かであるが、『泊船集』の許六書入れに「洒堂餞別」と前書してあるのが注意を惹く。洒堂は『ひさご』（元禄三年刊）の撰者浜田珍碩の後年の号であって、元禄二年以前には芭蕉との交渉を示す資料がなく、三年春に芭蕉が膳所の珍碩亭を訪ねて「洒落堂記」を書いた頃の入門と思われる。「獺の祭」の句の『花摘』の前書に「膳所へゆく人に」とあることとの関連でいえば、珍碩が膳所の人であるだけに矛盾があるように思われて、右の「洒堂餞別」という許六の所伝は問題にされないけれども、元禄三年の正月は、芭蕉が三日に膳所を去り、翌日には伊賀の上野に入っていることを思い合わせる必要があろう。つまり「獺の祭」の頃に芭蕉は伊賀に居たのであって、其処へ珍碩が訪ねて来たのではあるまいか。恐らくこれが二人の初対面で、珍碩が膳所へ帰るに当ってこの句が詠まれたものと思われる。そう考えれば、『花摘』にある「膳所へゆく人」とは外ならぬ珍碩のことであって、許六の伝える「洒堂餞別」と矛盾はなく、同じ事実を指したことになろう。今栄蔵氏の『芭蕉句集』に指摘された如く、伊賀から近江境の御斎峠を越える近道をとれば、甲賀山地から「瀬田のおく」へ出るので、珍碩がその道をとることを頭に置いた餞別句なのである。『菊の道』の前書は、事情をよく知らぬ者が付したのであろう。

軽い即興句で、「獺の祭」という季語を用いているのが珍しい。安東次男氏は『芭蕉発句新注』で、この語が詩文

を作る時机辺に夥しい書籍を並べる意にも用いるところから、珍碩の携った『ひさご』撰集の進行情況に関連させる見方をしておられるが、そこまでは聊か想像が過ぎるように思う。ただ同氏も指摘されたように、路通撰の『俳諧勧進牒』（元禄四年刊）に、「獺をたしかに見たり冬ごもり」という句が見える。この句は芭蕉の「獺の祭」の句に答えた趣があり、元禄三年冬の作とすれば、同年中秋に成った自撰の『ひさご』に対する満足感の表現とする安東氏の見方は頷けるところがある。その見地からすれば、或いは「獺の祭」の句の時に、珍碩の手による『ひさご』編纂の話がはじめて出たということも考えられよう。

584　うぐひすの笠おとしたる椿哉（猿蓑）

三月十日付杉風宛書簡・真蹟小色紙・泊船集・俳諧問答・今日の昔・蕉翁句集・笠の影・蕉翁全伝附録・なにぶくろ

春季（うぐひす・椿）。

語釈　〇**うぐひすの笠おとしたる**　「鶯の笠落したる」。『古今集』の歌を踏まえた、落ちた椿の花の形容である。［考］参照。「うぐひす」は、ここでは副次的季語である。〇**椿**　「ツバキ」。既出（Ⅱ319）。散り椿は陰暦二、三月頃の季題とされる。「椿　雑也。花を結ては春也。たとひ花の字なくとも、花の心ある句躰ならば春に成べし」（『御傘』）「つばきは。やちよもかはらぬ色をめで。玉椿といふを。玉によせて。琥珀珊瑚にもいひなす。……椿の花は其しなぐかぞへがたく。奇佐不思儀の名共此比聞え侍」（『山之井』）「深冬に開く物又多し。春に至て咲けるを正とす。早咲椿はすべて冬季也」（『滑稽雑談』）。

大意　鶯の鳴きしきる中、椿の花がぽとりと散り落ちた。まるで鶯が花笠を落したようだなあ。

考　『なにぶくろ』（一峨撰、文化九年刊）に「元禄三年二月六日／誹諧之連歌」と前書して、この発句以下、乍木・百歳・村鼓・式之・梅額・一桐・槐市・呉雪ら伊賀連衆一座の歌仙が収められている。これは伊賀に伝存した懐紙を摸刻したものなので、後年の板行ながら、前書の年記は信頼し得るものである。なお、土芳の『全伝』元禄三年の条に

もこの発句を挙げて、「此句、西島氏百歳子ノモトニテノ事也。二月六日歌仙一巻有」とあり、百歳亭で俳席が催されたと思われる。亭主役の百歳はどういうわけか第三に廻り、乍木が「古井の蛙草に入声」という脇を賦した。近時出現した元禄三年と推定される三月十日付杉風宛書簡に見えることも、成立年次の裏付けとなろう。現存の角川氏蔵真蹟小色紙も、元禄三年の染筆と見られており、『蕉翁全伝附録』には、これとは別点ながら趣の似る真蹟小色紙を収めている。

「あをやぎをかたいとによりてうぐひすのぬふてふかさはむめのはながさ」（『古今集』巻二十、神遊びの歌）「鶯の笠にぬふてふ梅の花折てかざゝむ老いかくるやと」（同上巻一、東三条左大臣）等を始め、鶯が梅の花笠を縫うという見立は、代代の和歌に数多い。この句はそれを一転して椿の花笠とし、椿の花の形や、ぽとりと花全体が落ちる趣を巧みに表現した。庭前の即景を材として、俳諧らしい興を盛った挨拶句で、おだやかな春の日の気分が思われる佳作である。鶯が縫う梅の花笠は和歌、鶯が椿の花笠を落すのは、正に俳諧の世界であろう。鶯が椿の枝に来て、枝移りして鳴くうちに椿の花が落ちたという解もあるが、そこまでは言わずもがなで、景としては、鶯の鳴きしきる中で椿の花がぽとりと落ちる趣と見れば足りると思う。

585 物好（ズキ）や匂はぬ草にとまる蝶　（都曲）

京羽二重

春季（蝶）。

語釈 ○**物好**（ズキ）　風変りな好み。振仮名の濁点は底本のまま。「Monozuqi.」（『日葡辞書』）。○**匂はぬ草**　よい香りを持たない雑草。

大意 物好きなことだ。外によい草木もあろうに、蝶が香りのない雑草にとまっている。

考 元禄三年二月に成った言水の『都曲』に載る。『句解参考』に「好〳〵や名もなき草にとまる蝶」という句形

が伝えられるが、その根拠は確かでない。
俳諧などにうつつを抜かして、くすんだ句を詠んでいる自分を譬えたという解が多い。譬喩としないでも分る句であるが、「物好や」と露わに言い、「匂はぬ草」と続けたあたり、月並の俗調を思わせる為に、どうしてもそのような解釈に傾くのは止むを得ない。悪句と評すべきものであろう。

586　鐘消て花の香は撞夕哉　（都曲）

春季（花）。

語釈　○**鐘消て**　「鐘消えて」。鐘の音は消えて、○**花の香**　「香」は、よい匂い。「何の木の」（Ⅱ343）の句参照。「花の香や嵯峨のともしび消る時　蕪村」（『花七日』）。○**撞**　撞木で鐘をつくこと。既出（Ⅲ460）。「撞鐘」（Ⅱ409）参照。○**夕**　「ユフベ」。

大意　入相の鐘の響きは消えて行きながら、なおその余韻と共に花の香があたりに漂う。あたかも花の香が鐘を撞いているような夕べであることよ。

考　『都曲』の成立年次から見て元禄三年二月以前の作であるが、句の春闌けた趣からすれば、一年はさかのぼる筈である。裏付けには乏しいが、『都曲』所収の句は凡そ貞享期の作と見られよう。
句は、花の香の漂う中に入相の鐘の音が嫋々たる余韻を響かせつつ消えて行く春闌わの趣を言い留めようとしたものと受取れる。表現については、亦夢の『俳諧一串抄』に、「これ鐘は撞べきもの、香ははかなく消るに名あるを、相反したる体裁なり」と見ているのがよかろう。鐘と花の香にそれぞれ付くべき語を、顚倒錯綜させて、その間に春の情趣をあらわそうとしたので、その点天和期の「髭風ヲ吹て」（Ⅰ163）と似た手法である。能因の名歌「やまざとの春のゆふぐれきてみればいりあひのかねに花ぞちりける」（『新古今集』巻二）が背景にあることは言うまでもない。ただ、

句では「花の香」の印象が強く、桜の趣とは見ない方がよいと思う。また、今栄蔵氏は「花の香は撞（ツク）」について、「花の香を」の強調表現とし、「あの鐘に撞き出されたかのように」と訳しておられる（『古典集成・芭蕉句集』）。「花の香をば撞く」として通じないではないが、聊か無理であろう。もともと言葉を錯綜させた為に、理詰めにすると兎角不自然になる嫌いがある。こういう句は情景の大要を把握するのが先決で、それさえ分れば、語法は凡その理解でよいのではあるまいか。［大意］では、「花の香」を「撞く」の目的語とは見なかった。春も闌けた夕暮の趣はよく出ている句である。

元禄三年三月二日
誹諧之連歌

587 木の本に汁も膾も櫻哉　（風麦芭蕉両筆懐紙）

三月十日付杉風宛書簡・池嶋家蔵真蹟懐紙・山寺芭蕉記念館蔵真蹟懐紙・真蹟短冊・真蹟扇面・ひさご・花摘・泊船集・蕉翁句集草稿・木の下・花はさくら・蓑虫庵小集・古今短冊集・真蹟集覧

花見

木のもとは汁も膾も櫻かな　（渡し船）

浪花置火燵・陸奥衛・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・十丈園筆記

春季（桜）。

語釈 ○**誹諧**　「誹」は「詼」の誤字。「詼諧（くわいかい）」は、おどけ・道化を意味する語であるが、ここは「俳諧（はいかい）」に通用した例である。○**木の本**　「木（こ）の本（もと）」。「本」は「下（もと）」の意の宛字。この語は「コノモト」「キノモト」の二様の訓みがあるが、この句の踏まえた西行歌（［考］参照）等が「このもと」と仮名書きしており、『日葡辞書』にも「Conomoto.」の語はあるが、「Qinomoto.」はない。○**汁**　「シル」。味噌汁も清まし汁も含めた総称であろう。「三崎敦賀の荷のかさむ也　馬莧　汁の実にこまる茄子の出盛て　沾圃」（『続猿蓑』上）「Xiru.」（『日葡辞書』）。○**膾**　「ナマス」。「鱠」と同じ。魚介類や野菜を刻んで酢などで調味した料理をいう。「鮎

鱠」（Ⅱ403）参照。「はゝつねに江のみづをのみたくおもひ、また、なまいをの鱠をほしくおもへり」（『二十四孝』）「Namasu.」（『日葡辞書』）。

大意　満開の桜の下で宴を開いて歓を尽す。花びらが紛々と散りかかって、並べた汁も鱠も桜だらけであることよ。おもてなし誠に忝けない。

考　「先初花をいそぐなる近衛殿の糸桜　見渡せば柳桜をこきまぜて都は春の錦粲爛たり」（池嶋家蔵真蹟懐紙）「花見」（山寺芭蕉記念館蔵真蹟懐紙・『ひさご』）等の前書があり、「先初花を」云々の前書は謡曲「西行桜」の一節を取ったもので、謡本のように譜点を加えている。貞享四年の「花のくも」（Ⅱ273）の句にも同様の文を前書にした例があった。

風麦芭蕉両筆懐紙は伝来も確かなので、前書の日付も信じ得るものである。この日伊賀の上野で風麦・良品・土芳・雷洞・半残・三園・木白らの人々と会して巻いた四十句の発句であった（『花はさくら』（秋屋撰、寛政十三年刊）所収）。これと前半を同じくしながら、二の表以降全く別の句になっている歌仙（右の四十句の連衆のうち木白を除く）が『蓑虫庵小集』（猪来撰、文政七年刊）に収められており、三月二日の四十句と何れが先か確証はないけれども、先ずは四十句が最初だったのであろう。土芳の『全伝』元禄三年春の伊賀滞在の条にもこの発句を挙げて、「此句風麦子ニテはいかい有リ」と見える。これら伊賀での二巻の後、三月末に湖南に出てから、膳所の門人珍碩・曲水の二人と巻いた歌仙の発句にもこれが立句とされており、『ひさご』（珍碩撰、元禄三年六月成）の巻頭に収められた有名な歌仙がこれであった。

初五を「木のもとは」とする異形は、『渡し船』（順水撰、元禄四年刊）『浪花置火燵』（休計撰、元禄六年刊）等、上方の他門の集に初出するもので、その限りに於いては信憑性に乏しい。しかし、『陸奥鵆』や、『三冊子』以下土芳関係の資料にもこの形で見えるのは注意を要する。『蕉翁句集草稿』には「木の本は」の形を掲げ、「此句、花摘に、木の本に汁もと有。違也」と断言しており、『三冊子』の諸伝本が一致して「は」の形であるのも、この土芳の考えの反映と

見られる。彼は伊賀での二巻の連衆であったから、或いは「木のもとは」が初案だった可能性もあろう。しかし、直後に執筆した三月十日付杉風宛書簡に「木のもとに」の形で披露され、他の真蹟類も全く異同はないから、「木のもとに」が信頼し得る唯一の句形であることは動かない。そもそも「木のもとは」と落花の場所を限定するような言い方は、感心出来ない表現である。

上野の風麦亭で藤堂藩士達の集うた花見の宴での句なので、勿論亭主に対する挨拶の意が籠っている。落花紛々たる風情は、花下の遊楽も闌わなさまを思わせ、十分歓を尽して、おもてなし忝けないといったところであろう。「木のもとに」は伝統的な雅語であって、「このもとにたびねをすればよしの山はなのふすまをきするはるかぜ」(『山家集』上)「このもとの花にこよひはうづもれてあかぬこずゑをおもひあかさん」(同上)等の西行歌が背景にある。この時西行への思いが芭蕉にあったことは、謡曲「西行桜」の一節をとって前書とした逸興によっても察せられよう。ところで『三冊子』にはこの句について、

此句の時、師のいはく、花見の句のかゝりを少し心得て、軽みをしたりと也。

と、この時の芭蕉の言葉が伝えられている。「かゝり」とは中世の連歌論や能楽論によく用いられる語で、「趣」「風情」といった意。恐らくこれは、伝統的な花見の雅情の表現を聊か自得するところがあり、その上に俳諧らしい「軽み」を展開したものだ、という趣旨であろう。「木のもとに」と優雅に始めながら、次の「汁も膾も」は、和歌・連歌には全く用いられない俗語であった。頴原博士は『新講』に於いて当時の用例を挙げ、これが「酢にも味噌にも」「酢につけ粉につけ」等と同様に慣用された成句だったことを指摘しておられる。そういう俗語的表現で拍子に乗せて、最後は「桜哉」ときっぱり言い切った。これは情景としては、宴席の色々の料理の上に桜の花びらが散りかかるさまであるが、それを、汁も鱠もその外の凡ても皆桜になった、と端的に叙して興じたのである。此処に伝統的な雅趣と新しい俳諧の興が両つながら生かされた新境地が出現したのであって、芭蕉もこれを会心の作として、控え目な

表現ながら土芳に意中を漏らしたのであろう。「軽み」は芭蕉が最晩年に至って、俳諧の目指すべき境地として唱道した理念であるが、「木のもとに」の句に関するこの芭蕉の言葉は、「軽み」に対する最も早い時期の言及として注目される。これについての能勢朝次博士の所説を引用しておこう。

軽味は頴原兄の考察に従ふと、俳諧の通俗性や卑近性といふ特色に根ざしたものであり、軽快・瀟洒・直截平淡などといはれるものに近きものである。所謂「高く心を悟りて、俗に帰り」たる所から生れるものであり、さらさらとして粘らず甘からぬ味はひであるといふ。此の句に於て見れば、花見を句にする際に、花の美しさとか、見る人の艶麗な衣裳とか、さんざめく酒宴の興とか、千鳥足の危き足許などには目をつけないで、――さうした境地はもはや古きものである故に――極く卑近なむしろ俗とさへ思はれるやうな、食膳上の食物といふものの上に焦点を定めて、その上に落花の花びらをあしらつた処に、俗なるものをして美ならしめる働きを示し得てゐるのである。汁も膾も花だらけになつてゐるといふ中に、花見の姿は実に鮮明に出てゐるのである。（『三冊子評釈』）

まことに精到な考察であって、「木のもとに」と優雅に始められたこの句の新味は、右にいうような中七以下の新しい着眼によって、「軽み」と呼ばれるに相応しいものになったのだと思う。そしてそれが花見の本意本情を生かすことにもつながっているのである。駘蕩たる春色を描いた句として、膳所の俳席でもこれを立句とし、謡曲の一節を譜点まで加えて前書とした芭蕉の気持も分るような気がする。

588　畑打音やあらしのさくら麻（花摘）

　　　　　蕉翁句集

畠打あらしの音や櫻麻（三月十日付杉風宛書簡）

春季（畑打）。

語釈 ○**畑打音や** 「畑打つ音や」。春の彼岸頃から各種作物の種蒔きの時節になるが、その準備として畑の土を掘り返し耕す作業を「畑打」「畑打つ」といって、春の季語になる。「や」は切字。「はた打　春也。」（『御傘』）「川島もはたけうつなり淀かつら　大江丸」（『俳懺悔』）。○**あらし** 「嵐」。畑を掘り返す鍬の音の激しさを譬えた。○**さくら麻** 「桜麻」。麻の雄株。麻は雌雄異株の植物で、雄株は桜の花のような五弁の小花をつけ、色も桜色なので、この呼び名がある。播種は春で、夏から秋にかけて収穫する。季語としては夏であるが、この句では「畑打」の方が季語として立つ。ここは「あらし」の縁語として「桜」を掛けている。「桜麻　夏也。をとつゞけたるは植物にあらず、雑なり」（『御傘』）「……清輔奥儀抄云、桜麻とは、桜の色したる麻のある也。○袖中抄云、麻の花は、白き中にすこしうすはう色ある麻のある也。それを桜麻とは云也。○藻塩草云、さくら麻、あさの名なり。又云、あさをの中に桜色したるあさを云。又云、くらあさなり。それに、さ文字をそへたる也。くらあさとは、くらゝの根也。是も布に織ば麻といへり。△或説云、麻の花は夏咲ものなれば、袖中抄の説いかゞあるべきや。只奥儀抄の説も、葉とはいはねども、此種二月に蒔く、三月に生出る。嫩葉の桜色したるを云ならし。苦参の説信ずべからず」（『滑稽雑談』）「春耕／妙福のこゝろあて有さくら麻　木節」（『続猿蓑』下）。

太意 桜麻の種を蒔く支度に、畑を打ち返す音が盛んに聞える。まるで桜の花を散らす嵐のようだ。

考 土芳の『全伝』元禄三年の条に「畑打音やあらしのさくら麻」の形で出し、「此句、木白興行ニ一折有。三月十一日荒木白髪ニテノ事也」と見える。これは元禄三年の『花摘』に初出することと矛盾がなく、恐らく事実であったろう。「白髪」は「白髭」の誤写で、伊賀阿山郡中瀬村大字荒木（現上野市内）にあった白髭神社を指す。この日木白（岡本苔蘇）の主催で俳席が開かれ、この句を発句に半歌仙が成ったのである。一日前の杉風宛書簡に「畠打あらしの音や」の句形が披露されているところを見ると、十日より前にこの初案が成り、それを十一日の会に改案して発句としたものと思われる。意味は初案の方が分りやすいが、語順を変えて「あらし」と「さくら」の縁語仕立てを際立たせたのであろう。

今栄蔵氏の『芭蕉句集』に、貝原益軒の『農業全書』によって、麻は種をおろす前に畑土を出来る限り深く耕し、

細かく砕くのが栽培のコツと説いている。そうとすれば、麻が芽を出して嵐になびいているといった写生風の解釈は採れない。やはり「嵐」と「桜」の言葉の縁に興じただけの句と見られる。

午ノ年伊賀の山中

春　興

589　種芋や花のさかりに賣ありく　（をのが光）

真蹟草稿・真蹟懐紙・三月十日付杉風宛書簡

舊里このかみが園中に種つものをふせて

いもだねや花のさかりに賣ありく　（真蹟草稿裏）　――岨の古畑・根無草

種芋や花のさかりを賣ありく　（泊船集）　――蕉翁句集草稿・蕉翁句集

芋種や花の盛を賣ありく　（今日の昔）

芋種を花の盛をうりあるく　（土芳蕉翁全伝）

春季（種芋・花のさかり）。

語釈　○**午ノ年**　「午ノ年」。元禄三年庚午の年をいう。「庚午の歳家を焼て」（『猿蓑』巻四、北枝発句「焼にけり」前書）「Vma.」（『日葡辞書』）。○**伊賀の山中**　「伊賀の山中」。伊賀の上野を指す。（Ⅲ*571*前書）参照。○**春興**　「シュンキョウ」。春の面白み、春の興趣の意。俳諧で新年の会での作を刷物にして「春興帖」というが、ここはそれではない。（Ⅰ*116*）参照。○**種芋**　「タネイモ」。春植える為に溝などに埋めて冬越しさせた里芋。暮春に掘り上げて子芋を切り取り、数日日に晒してから植える。斎藤徳元の『俳諧初学抄』に「いも種うふる」を末春の季語としている。「たねいもは掘出しものとおもひしに土にうづむと今日こそはしれ」（『狂歌かゞみやま』下）○**花のさかり**　「花の盛り」。（Ⅰ*36*、*136*）参照。「鳫ゆくかたや白子若松　翁　千部読花の盛の一身田　珍碩」（『ひさご』）。○**売ありく**　「売り歩く」。「ありく」は「あるく」と同じ。既出（Ⅲ*569*）。「喰ものや門売ありく冬の月　里圃」（『続猿蓑』下）。

大意 華やかな桜の花盛りに、種芋を売り歩くとは。何とも面白い。

考 山寺芭蕉記念館蔵の真蹟懐紙に「雑春」と前書する外、柿衛文庫蔵の真蹟草稿裏には「旧里このかみが園中にもの〳〵□(種)ふせて」とも書かれており、これは標掲した「いもだねや」の前書の別案である。成立年次は『をのが光』(車庸撰、元禄五年刊)の前書によって明らかで、元禄三年春伊賀の上野で成り、これを発句として、半残・土芳・良品らとの歌仙が巻かれた。この歌仙は後代の『誹諧哥仙七部拾遺』(車蓋編、天明七年刊)『俳諧七部拾遺』(菊舎編、享和三年刊)にも収められている。

板本初出の『をのが光』と真蹟類が一致する「種芋や」の形が定案であろう。その句形を書いた草稿の裏に「いもだねや」の形が書かれており、裏の句形から表の句形へ推敲されたものと思われる(草稿裏の句の「売あり□(く)」と前書別案の「もの〳〵□(種)ふせて」の欠字部分は、紙面の下部が切られた為失われている)。土芳の『蕉翁句集草稿』には『泊船集』と同じ形で出して、

此句に伊賀連中四吟哥仙あり。已光に出る。花のさかりにと有。違也。

と述べ、「さかりを」が正しいとする。前の「木のもとに」(Ⅲ587)を「木のもとは」と伝えるのと同様であるが、真蹟類にはっきり「に」とあるので、右の記述は問題にならない。三月十日付の書簡に「種芋(タネ)や」と見えるから、「いもだねや」の句案はこの日までに推敲されたことになろう。但し、歌仙を巻いた時期は十日以後の可能性もないではない。華雀の『芭蕉句選』には「種芋や花のさかりを売行て」という異形も伝えられるが、真蹟の裏付けのある二形以外は凡て誤伝である。

賑やかに人も華やぐ花盛りに、泥だらけの種芋を売り歩く。その対照だけでも面白いが、里芋はまた芋名月(中秋の名月)に供えるものでもあって、その種を花の盛りに売るとあれば、花月に縁ある興も動くのである。ただそれを、

丁度花の盛りに売り歩いた種芋が、今度は仲秋月見の頃には芋となつて又売り歩かれる事だらうとの意。(頴原博

士『新講』）

と、秋のことまで含めて解するのは問題であろう。右の解は杜哉の『蒙引』に、

花の盛にたねをうり、芋のさかりに月を見る。質物ながら月花に縁あるものぞとの感なり。言外の懸合、雅俗の働き称すべし。

とあるのに基づいたものであるが、花月の縁は飽くまで「言外」のことと見るべきで、句はただ花見頃の属目の興なのである。人も浮き立つ花の頃、のんびり泥だらけの芋を売り歩く姿には、飄逸な俳諧味が漂っており、この無造作な発句には、「軽み」の工夫があったのかも知れない。阿部次郎氏は、

僕は……この句が大変好きである。花と芋種とのとぼけた対照も、春から夏へかけての自然の推移も、なつかしく思ひやられる。特にこれをこんなに自然に何気なく云ひ放つてゐるところに芭蕉の句境の及び難いことを感ずる。（『芭蕉俳句研究』）

と言っておられる。

柴胡といふ草を

590　かげろふや柴胡の糸のうすぐもり　（真蹟懐紙）

三月十日付杉風宛書簡・猿蓑・泊船集・蕉翁句集・蕉翁全伝附録

春季（かげろふ・柴胡）。

語釈　○**柴胡といふ草を**　「柴胡（さいこ）」は従来、根を乾燥させて漢方の解熱剤とするセリ科の多年草とする説が支配的であったが、今栄蔵氏の紹介された『蕉翁全伝附録』所収の自画賛の摸写によって、キンポウゲ科の赤熊（しやぐま）柴胡、和名翁草と呼ばれる草を指すと見られるに至った。この画に描かれた草は明らかに翁草で、この草は花の後、雌蕊が尾のように長く伸び、密生する細毛と共に、宛か

も老翁の白髪頭のように見えるさまが、画によくあらわれている（今氏著『芭蕉伝記の諸問題』所収『全伝附録』複製参照）。翁草は春の季語。「……といふ草を」の下に「詠める句」といった言葉を補って解すべきである。「Saico.」（『日葡辞書』）。○**かげろふ**「陽炎（かげろふ）」。○**柴胡の糸のうすぐもり**「柴胡の糸（いと）」は、柴胡が薬草と考えられていた時は、その細い芽生えを指すと見られたが、翁草のこととなると、前述した花の後の雌蕊の伸びた状態をいうとしなければならない。「うすぐもり」は、その白髪頭のような草が、陽炎の立つ中でやや翳りを帯びた感じの形容であろう。薄曇の天気ならば、陽炎は立たないと思われる。「薄曇りけだかくはなの林かな　信徳」（『あら野』巻一）「Vsugumori.」（『日葡辞書』）。

大意 ちらちらと陽炎が立って、翁草の白い糸のような毛が、やや翳りを帯びて見えることだ。

考 土芳の『全伝』元禄三年の条に見え、同年と推定される三月十日付杉風宛書簡に書かれていることが、その裏付けとなる。『全伝』『句選』を始め、後世のものに「糸」を「原」と伝えるものがあるが、「糸」の意が聊か分りにくい為と、「原」の字の草体と紛らわしいことから、異文を生じたのであろう。元禄三年春当時の染筆と思われる真蹟懐紙と書簡、それに『全伝附録』の摸写が凡て「糸」であり、初出板本の『猿蓑』も同じであるから、「糸」が唯一の信ずべき句形である。

古注以来「柴胡」を薬草と見た解釈が通説であった。

此句柴胡（サイコ）も糸に薄煙るといふ手爾葉にして、陽炎もゆる広野に柴胡の萌出（モヘ）る、細〳〵と糸の如くに芽出せる時候の懸合せ、形容景色そなはれり。柴胡は……初春芽を出す時は、芝（シバ）と同じく細く糸のやうに萌出て、あるかなきかにみゆるに懸合せての作にして、薄曇といへる所、魂の場也。薄曇にてものゝさだかに見へわかぬさまを形容したる手づまにして、糸と云は見立たる言葉也。薄煙りとせば断り（コトハ）過べし。霞光曙後殷レ於レ火、草色晴来嫩似レ烟といへる白居易が早春の詩句も思ひ合せらる。（空然『猿みのさがし』）

とある解は、薬草としての解ながら表現の機微をよく見ており、露伴の『評釈猿蓑』もこれを支持している。指す物

は異なっても、「うすぐもり」が「魂の場」であることは動かず、陽炎の立つ中で「ものゝさだかに見へわかぬさま」の形容として、作者の苦心の存するところであった。加藤楸邨氏が「「陽炎」の現実体験に触れないと詠みとれないと思われるようなするどい掴み方である」（『芭蕉全句』）といわれた通りで、山本健吉氏はこの句に「ほそみ」を見ておられる（『全発句』）。翁草という対象に向って滲透して行く詩人の眼が感ぜられ、「物に入てその微の顕れて情感るや句と成る所」（『三冊子』赤雙紙）という言葉の実践といった趣があるのだ。余り著名な句ではないが、この時期の注目すべき佳作であろう。『笈の小文』の「枯芝やゝかげろふの一二寸」（Ⅱ*341*）と趣が似ているが、当面の句の方が一段と繊細である。なお、信ずべき自画賛の摸写が知られた以上、「柴胡」が翁草を指すことは動かないと思うが、何故「柴胡といふ草を」というような紛らわしい前書を付したのか、その点一抹の不審が残る。句中の「柴胡」は兎に角、前書としては「翁草」とあった方が数等分りやすい。

591　春雨や二葉にもゆる茄種　（真蹟草稿）　――　岨の古畑

こまかなる雨や二葉の茄子種　（蕉翁句集草稿）　――　蕉翁句集

春季（春雨・二葉・茄子種）。

語釈　○**春雨**　既出（Ⅱ*370*）。○**二葉にもゆる茄種**　「二葉に萌ゆる茄種」。なすびの種が芽を出して二葉を伸ばし始めたさまをいう。なすびの種は丸く偏平で黄色く、陰暦三月頃温床（茄子床）に蒔く。「二葉」は既出（Ⅰ*134*）。なすびは普通「茄子」と書くが、「茄」一字でも「なすび」を指すことに変りはない。「石ばしる垂水の上のさわらびのもえ出づる春に成りにけるかも」（『万葉集』巻八、志貴皇子）「伯父〳〵といはれて一期茄子種」（『長ふくべ』）「Moye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。

大意　煙るような春雨が降って、茄子床に蒔いた種も二葉を伸ばし始めたことよ。

考

『岨の古畑』（梅員撰、元禄十六年刊）には「ふる里このかみが園中に三草の種をとりて」と前書があり、次の「此たねと」の句、「いもだねや」（Ⅲ589）の句と共に掲げている。この前書は柿衛文庫蔵の真蹟草稿裏に類似の文が見えるが、伝存の物とは別に三句をまとめた真蹟があって、それに拠ったものであろう。「いもだね」の句は、前述の如く『をのが光』に「午ノ年」（元禄三年）伊賀での春興として収める「種芋」の句の初案である。ところが、当面の句についての「こまかなる雨や」の形を伝える土芳の『蕉翁句集草稿』は、「此句にて西嶋氏にて巻有」とあり、同じ人の『全伝』には、元禄四年の条に「此句百歳子ニかせん催サレシ時ノ句也。巻、五句ニテ終ル」と見える。土芳は元禄四年春西島百歳亭での吟とするのであって、『蕉翁句集』の元禄四年の部に収めるのも、同じ見方に基づくことは明らかである。これに就いては、「春雨や」の句が三年に成り、翌年「こまかなる」の発句で付合があったと見るか、三年の「種芋や」の句と併せて四年に三句まとめて揮毫されたと考えることも出来るが、『をのが光』の「午ノ年」という所伝は、成立時に最も近い所伝として尊重すべきであるし、三句まとめて書かれたのも三年とする方が自然であろう。土芳には年代に関して何か錯覚があったものと思われる。「こまかなる雨や」の形も、春雨の降り方の形容として捨て難いが、真蹟草稿に三句並べて書かれた句形が定案と見られ、『岨の古畑』の拠った別の真蹟もその形とすれば、やはり「春雨や」に治定したものと考えざるを得ない。なお、『千句塚』（除風撰、宝永元年序）所収の高吉の句の前書に「旧里の園の中に三草の種をとるといふ芭蕉翁の自筆の三章、高世が所持せるを」云々と見える真蹟は、即ち『岨の古畑』の依拠したものであったろう。

前書によれば、故郷の兄半左衛門（このかみ）の家の菜園に三種の草の種を蒔いた折の句であった。「三草」とは茄子・唐辛子・芋の三種で、恐らく芭蕉手ずから種蒔きをしたものと思われる。烟るようなこまかい春雨は、芽立ちを育てるのに恰好で、雨中の茄子の二葉を見て、その成長を楽しむような、くつろいだ気分が見える。句趣は「後園の春色眼下にあり。二葉に小雨の取合みつべし」（杜哉『蒙引』）という鑑賞に尽きるであろう。「こまかなる雨や」は春

雨の方に重点が置かれ、「二葉にもゆる」は茄子の成長を思う慈眼が感ぜられる。穏やかな心境を託した好箇の写生句である。

592

此種とおもひこなさじ唐辛子　（真蹟草稿）

岨の古畑・かくれ里

唐辛子おもひこなさじもの丶た[ね]　（真蹟草稿裏）

春季（種）。

語釈　○**此種**　「此の種」。植物の種は春の季語になる。（I *145*）参照。「麻の種毎年踏る桃の華　利牛」（『炭俵』上）。○**おもひこなさじ**　「思ひこなす」は、馬鹿にする、軽視する意。「しりぬれども、なに事かあらんとおもひこなしていふやらん」（『曽我物語』巻四）「**Vomoiconaxi, su, aita.**」（『日葡辞書』）。○**唐辛子**　「タウガラシ」。ナス科の一年草。花が終ると青い実がなり、秋になって熟して赤く色づくので、秋の季語とするが、ここはその時季ではないから、「種」の方で春季になる。実の中の種に辛みがあり、乾かして香辛料とする。「時珍食物本草云、番椒、人植二盆中一以為二玩好一、結レ実如レ鈴、研テ入二食品一、極辛辣辛温、無レ毒。……大和本草云、其子有二大小長短尖円之数種一、……種二人家庭際一、食レ之堪レ寒、鄙人最嗜食。自二蕃国一移二種於中華、日本昔無此種。慶長年中秀吉公伐二朝鮮一時、種を採来、故俗云二高麗胡椒一。△これらの説のごとく当世人家植て賞す。種類又一にあらず。……青の字入ては夏也」（『滑稽雑談』）「とうがらしの名を南蛮がらしといへるは、かれが治世南ばんにてひさしかりしゆへにや、未詳。ほうづき、天のぞき、そら見、八つなりなどいへるは、をのがかたちをこのめる人〻の、もてあそびて付たる成べし。みなやさしからぬ名目は、汝がむまれ付のふつ丶かなれば、天資自然の理、さら〳〵恨むべからず」（『炭俵』下、野坡発句「石台を」前書）。

大意　こんなちっぽけな種と馬鹿にしまいぞ。やがては実を結んで、ピリリと辛い唐辛子になるのだ。

考　柿衛文庫蔵の真蹟草稿の表には「種芋や」（III *589*）「春雨や」（III *591*）「此種と」の順に書かれ、裏には「いもだねや」と「唐辛子」の句案が記されている。裏の句形から表の句形へ推敲されたと見てよかろう。初案の最後の「ね」

の字は、紙の下部が切られた為、実際にはない。元禄三年春の伊賀滞在中、他の二句と共に作られたもので、初案は「唐辛子」と「ものゝたね」が重複した感じで働かない。「此種とおもひこなさじ」の方が数等引緊っている。

家兄の菜園に自ら種を蒔こうとして、その小さな唐辛子の種にふと興を惹かれた。こんなささやかな種も、やがて成長して秋になれば、ピリリと辛い調味料になる。表面は飽くまで興じているのだが、底には自然の営みの微妙さに寄せる思いがあろう。しかしそれは、教訓的な寓意や俳諧の存在意義といった事とは別の物である。

593 ひばりなく中の拍子や雉子の聲 （猿蓑）

陸奥鵆・泊船集・三冊子・蕉翁句集

春季（ひばり・雉子）。

語釈 ○**ひばりなく** 「雲雀鳴く」。「ひばり」は春季。既出（Ⅱ *278*）。○**中の拍子** 「中の拍子」。「拍子」は、謡曲を謡う間へ時々鼓の音などを入れて拍子をとること。間に交る拍子を「中の」といった。ここでは「雉子の声」の形容である。「むつかしき拍子も見えず里神楽　曾良」（『猿蓑』巻三）「**Feôxi. l, fiôxi. ……Feôxiga sorô, l, vô.**」（『日葡辞書』）。○**雉子** 春季。既出（Ⅱ *372*）。

大意 一日中鳴き続ける雲雀の声の合間に、時折鋭い雉子の声が交る。まるで能の拍子のようだ。

考 土芳の『蕉翁句集』と『全伝』は共に元禄三年の作とし、『三冊子』には、

此句、ひばりの鳴つゞけたる中に、きじ折〳〵鳴入る気しきをいひて、長閑なる味を取らんと、色〳〵して是に究る。（赤雙紙）

と句作の消息を伝えている。『蕉翁句集』の年次別は、伊賀での作に関しては信頼が置けるし、『三冊子』の記事も芭蕉と土芳が同座した折の事であったろうから、元禄三年春の伊賀滞在中の作と見てよい。然るに、杉浦正一郎博士が『雲母』昭和三十一年十一月号に紹介された素堂真蹟懐紙には、

春風に見失ふ迄は雲雀哉
　ばせを老人此句をよろこびて
雲雀なく中の拍子や雉の声　蕉翁
　愚また此句の拍子をよろこびて
谷川に翡翠と落る椿かな
　はじめ五文字魚うきてと申侍りしを

とあるという。この書きぶりでは江戸での作のように思われ、『雪まるげ』には奥羽行脚出立の前に右の素堂の句が記されていることから、元禄二年春の作と推定する説もある。しかし、私はやはり土芳の所伝を重視したい。素堂の「春風に」の句は二年春に成ったかも知れないが、芭蕉との往来は時を隔てて文通などによったとも考えられ、素堂筆懐紙を以て元禄二年作の明証とするのは早計ではあるまいか。

句の内容は、「ひばりの鳴つゞけたる中に、きじ折〳〵鳴入る気しきをいひて、長閑なる味を取らんと」工夫したという『三冊子』の記事で悉されている。

雲雀と雉子と二つが鳴く声を配合したので、雲雀は絶えず鳴いてゐる、其間に時々雉子の高い調子の鳴声がする、それが丁度雲雀の鳴くのに対して拍子を取つてゐるやうぢや、といつたのである。拍子やとは突然たる言葉で多少俗意もあつて或いは月並のそしりを免れないなど思ふ人もあらうが斯様な場合に思ひ切つて言ふ所は中々俗人に出来ない事で、何処迄も芭蕉翁の胆略が見えて厭味を免れている。（『評釈』）

という内藤鳴雪の説は、解も評も的確というべきであろう。「俗意」「月並」といった見方は、「中の拍子」を単なる見立とするところから出る。しかしこれは飽くまで春闌わの季節感を生かして「長閑なる味を取らんと」する工夫であって、雲雀と雉子の鳴く実境の裏付けがあることは言うまでもない。だからこそ、

やよひ過の春郊の風景、山野の青み渡りたるさま、すみれ・たんぽゝの花盛、麦田の模様迄、暖和の景色見るが如きの句也。一句のうへは、只雲雀の揚る声落る声長閑に聞ゆる中に、はげしき雉子の声ほろゝ打音の聞へたるは、その雲雀のこまやかなる中の拍子取なるべしと春野の眼前にして、言外の味探るべし。句中淡くして余情十分たるは、名人の手づまにして向上の所たり。（空然『猿みのさがし』）

という古注の鑑賞が、現代の我々にも首肯されるのである。近時の説では、左の安東次男氏の見方も面白い。

「ひばりなく、中の拍子や雉子の声」と「ひばりなく中の拍子や、雉子の声」とでは微妙に違う。後の方は、ヒバリのとらえどころのない声を聞きながら、拍子の一つも欲しい、と思う心が「雉子の声」を発見させたのである。もしくは、キジの声の面白さを改て認識させたというべきか。もうひとつ別に云えば、「ひばりなく中の拍子や」を謎掛と読ませる面白さで、「や」という切字（間投助詞）は読者への問掛の意味も持つ。はじめ取合せによって「中の拍子」が生れたとしても、このことは句の出来た後で作者も必ず気づくはずのことである。

「やまどりを中の拍子や夕ひばり」「やまどりの入るゝ拍子や朝ひばり」、とでもかりに句を作り直せば、こちらの方の「拍子」は明らかに取合せの工夫と読めるだろう。違は俳句にとってやや大切なことだが、見とがめて臨んだ解釈は見当らぬようだ。切字のはたらきなど気にも留めず、「中の拍子」は技巧過剰だと大方が受取っている。そうではあるまい。（『芭蕉発句新釈』）

始終鳴いているのは雲雀の方だから、「ひばりなく」で切るのは拙く、どうしても中七の終りまでは一息に行かなければならない。下五に「雉子の声」と据える効果は、その見地からすれば謂わば謎解きの興であろう。しかし、それは出来上った上のことで、其処に至る過程では、先ず雲雀と雉子の声があり、それを生かす表現を求めて「中の拍子や」を得たのである。

594

土手の松花やこぶかき殿作り

（蕉翁句集草稿）

蕉翁句集

春季（花）。

語釈　**○土手の松**　「土手」は、土を高く盛って築いた堤。堀に臨んだ土手などを考えるべきであろう。其処に松が植えられているのである。ここで句切れ。「何の気もつかぬに土手の菫哉　忠知」（『あら野』巻二）「Doteuo tçuqu.」（『日葡辞書』）。**○花やこぶかき殿作り**　「花や木深き殿作り」。こんもりと樹の繁った庭に桜花の見える景色を、立派なお屋敷作りと褒めたのである。「殿作り」は、御殿のように立派な家屋の構えをいう。「や」は詠嘆の間投助詞であるが、ここでは切れない。「とのゝうち、いとかすかなり。月おぼろにさしいでゝ、池ひろく山こぶかきわたり心ぼそげにみゆるにも」（『源氏物語』須磨）「一かまへの森のうちに、きれいなる殿作りありて」（『好色五人女』巻五ノ二）「Cobucai tocoro.」「Tonozzucuri.」（『日葡辞書』）。

大意　近くの土手には松があり、こんもりとしたお庭には桜の花が見えて、立派な構えのお屋敷ですなあ。

考　『蕉翁句集』には「橋木子にて」と前書があり、『蕉翁句集草稿』にも「此句に、橋木子にて哥仙有」と述べ、土芳の『全伝』元禄三年の条にもこの句を挙げて「此句ニテ橋木子ニテはいかい有」と見える。『蕉翁句集』も元禄三年の部に収めてあり、これらの土芳の所伝は同時代の地元のものとして信ずべきであって、元禄三年春伊賀の上野の橋木の家で成った句と考えてよい。橋木は藩主藤堂家の一族藤堂修理長定の俳号で、伊賀付として千五百石を喰み、老職・加判奉行等を務めた。宝永四（一七〇七）年に三十七歳で歿しているから、この当時はまだ二十歳の若冠であった。なお、この時の歌仙は、今伝わらない。

橋木の邸は上野城内二の丸にあったという。藩の重職の家に招かれて、聊かかしこまった感じの句であるが、調べに渋滞したところはない。家褒め、屋敷褒めの形の挨拶句で、芭蕉の頭には、『古今集』仮名序に引かれた祝い歌

「このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり」があったであろう。この句の景色は、松は屋敷の入り口からの景色とすれば外景として……竪に土手の上に植ゑてあるので、其奥に桜の梢に隠見する殿作りが見えるのである。……土手の松の次に来るポーズが松と桜との位置に或距離を感じさせる。（『続々芭蕉俳句研究』阿部次郎氏）

土手の松と云へば、お濠の土手の松のやうな、幹の太い、枝ぶりのいゝ、一本立で形のととのった松が心に浮んでくる。「木深い」といふ感じはこの種の松と縁が遠いと思ふ。木深いのは他の樹木の植込みでなければならない。……花も木深いところにあり、殿作りも木深いのである。（同右、和辻哲郎博士）

という風に見たい。「花」を松の花としたり、「や」を疑問と取る説は論外である。

595 似合しや豆粉めしに櫻がり（蕉翁句集）

春季（桜がり）。

語釈 ○**似合しや**　「似合はしや」。「桜がり」をする人々の境涯にふさわしい、というのである。（Ⅰ*131*）参照。「似はしや白髪にかづく麻木売　亀洞」（『あら野』巻七）。○**豆粉めしに桜がり**　「豆粉飯に桜狩り」。「豆粉めし」は、黄粉をまぶした飯をいう。「桜がり」は、山野に桜を尋ねて花見をすること。既出（Ⅰ*244*、Ⅱ*367*）。「に」は、口語の「……で」に当る用法で、「……によって」の意。「豆粉飯で（豆粉飯を食べながら）花見をする」のである。「Mamenoco.」（『日葡辞書』）。

大意 黄粉をまぶした飯を弁当にして花見とは、如何にも山里に似つかわしいことだ。

考 土芳の『全伝』元禄三年の条に見え、『蕉翁句集』も同年の部に収めてある。この年春の伊賀滞在中の吟であろう。

「豆粉めし」は、黄粉をまぶした握り飯か。花見ならば、もう少し気の利いた御馳走を携えて行くべきところを、そんな鄙びた質朴なもので間に合わせる。其処に却って風趣を感じて「似合しや」といっているのである。尤も、「花見」が非活動的なものなのに対して、「桜狩り」は山野を歩きまわるのだから、それには豪勢な花見弁当より「豆粉めし」の方が似合うという取り方も出来る。何れにせよ、わざとらしい擬態ではなく、極く素直に表現されているところが佳い。ひとりの花見ではなく、何人か誘い合わせて出掛けたものらしく、「ふる里に心をやすんじ給ふ趣」（杜哉『蒙引』）が見える。

この國花垣の庄は、そのかみならの八重櫻の料に備へられ侍りけるとかや、ものにも書つたへられ侍れば

596　一里は皆花守の子孫かや　（真蹟懐紙）

猿蓑・弓・泊船集・宇陀法師・蕉翁句集・蕉翁全伝附録・真蹟集覧

春季（花守）。

語釈　**○この国花垣の庄**　「此の国花垣の庄」。現三重県上野市予野の地。昔時の伊賀郡猪田郷に属し、予野の庄ともいった。「この国」は伊賀の国を指す。「庄」は奈良・平安時代にかけて公家・寺社の私有の地域の称。荘園の制の廃止後も、その呼び名を受け継いでいる地をもいう。芭蕉の時代には、漠然と古風な呼び方として用いているようであるが、後述するこの地の沿革からすれば、前者の場合と考えてよい。「駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より来り合」（『おくのほそ道』）「Xô.」（『日葡辞書』）。**○そのかみ**　その昔、の意。「そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし」（『幻住庵記』）「Sonocami.」（『日葡辞書』）。**○ならの八重桜の料に備へられ**　「奈良の八重桜の料に備へられ」。「ならの八重桜」は、伊勢大輔の歌「いにしへのならのみやこのやへざくらけふこゝのへににほひぬるかな」（『詞花集』巻一）等で有名な桜。桜の園芸品種の一で、花は、八重咲き。蕾は濃紅色、花は淡紅という。『沙石集』巻九、芳心アル人ノ事の条に、

奈良ノ都ノ八重ノ桜ト聞ユル、当時モ東円堂ノ前ニアリ。当初［時］・ノ后上東門院、興福寺ノ別当ニ仰テ、彼桜ヲメサレケレバ、堀(ママ)テ車ニ入テマイラセケルヲ、大衆ノ中ニ見アヒテ、事ノ子細ヲ問ヘバ、シカ〴〵ト答ヘケルヲ、名ヲ上タル桜ヲ無二左右ニマイラセラル、別当、返〻不当ナリ、僻事ナリ。且ハ色モナシ。后仰ナレバトテ、是程ノ名木ヲ争カ可レ進。トヾメヨトテ、ヤガテ貝フキ、大衆催シテ押トメ、別当ヲモ払ベシナンドマデノ、シリテ、此事ニヨリテ、イカナル重科ニモヲコナワレバ、我身張本ニ出ヅベシトゾ云ケル。此事女院聞セ給テ、奈良法師ハ心ナキモノト思タレバ、ワリナキ大衆ナリ。実ニ色フカシトテ、サラバ我桜ト名ヅケントテ、伊賀国余野ト云庄ヲヨセテ、花ガキノ庄ト名ヅケテ、カキヲセサセラレ、花ノサカリ七日宿直ヲ置テ、是ヲ守ラセラル。今ニ彼庄寺領タリ。昔モ斯ルヤサシキ事ハアリケルニコソ。

という話が伝えられているが、上東門院がこの庄を八重桜の保護料として寄進されたのは天仁元（一一〇八）年のことといわれ（但し年代としては合わない）、ずっと降って嘉吉元（一四四一）年の「興福寺官務牒疏」近江国神崎郡楞厳寺の条に「此地者為八重桜料、自上東門院被寄附処也。当処、伊賀花垣二箇所也」という記事も見えるそうである。『沙石集』に「当時モ東円堂ノ前ニアリ」とある「東円堂」は、源平時代平重衡の南都焼討で焼失した興福寺の建物の一として『玉葉』にも見えており、中世には復興してその辺りに八重桜の木があったのであろう。「料に備へられ」は、木を保護する料に宛てる領地として寄進された、の意。「いまひと所のれうを、これよりたてまつらばや」（『源氏物語』乙女）「黍もてはやすいにしへの酒　野水　朝ごとの干魚備るみづ垣に　落梧」（『あら野』員外）「Reô.」「Sonaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**ものにも書つたへられ**　「物(もの)にも書(か)き伝(つた)へられ」。「もの」は、文献・書冊の類を漠然と指す。「物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし」（『笈の小文』）「いにしへのながれの末のたえぬかなかきつたへたる水ぐきの跡」（『続拾遺集』巻十六、家隆）。○**一里**　「ヒトサト」。花垣の庄の村里全体をいう。「一里の炭売はいつ冬籠り　一井」（『あら野』員外）。○**花守の子孫かや**　「花守(はなもり)の子孫(しそん)かや」。花の番人の子孫だろうか。「花守」は春の季語。「これはこの地主権現に仕へ申す者なり。いつも花の頃は木蔭を清め候ほどに、花守とや申さん、又宮つことや申すべき」（謡曲「田村」）「われらも其海士の子孫と答へ申さんは」（謡曲「海士」）「Fanamori.」「Xison. Co, mago.」（『日葡辞書』）。

大意　この花垣の庄一村の住人は、皆奈良の八重桜の花守の子孫なのであろうか。

考　『猿蓑』には「いがの国花垣の庄は、そのかみ南良の八重桜の料に附られけると云伝えはんべれば」と前書があり、『弓』（壺中撰、元禄六年刊）『泊船集』『蕉翁句集』も同じ。土芳の『全伝』元禄三年の条に、次の「蚰くふと」の

句と共に掲げて、「此二句ハ膳所ニ行トテ出ラレシ道ヨリ、モノニ書付テ半残方迄見セラレシナリ」とあり、竹人の伝にも同趣の事が見える。上野市予野の花守氏蔵という真蹟懐紙には「元禄三」と年記があるから、土芳の所伝は信じてよかろう。芭蕉は恐らく三月半過ぎに伊賀の上野を立ち、近江の膳所へ向ったと思われるが、その途次上野近郊の予野に立寄ってこの句を得、上野の門人山岸半残に報じたのである。予野の氏神春日神社（現花垣神社）には、奈良から移植したという八重桜が今も残っており、昔を偲ぶよすがとなっている。但し、予野が名張への途中に当り、膳所への道からは外れるところから、まだ上野滞在中に此処に遊んだと見る向きもあり、その辺の事情はなお明らかでない。

句の表は何事もない唯の呟きのようであるが、このような形で古えの風雅を偲び、花垣の庄への挨拶としたのである。あたりの村里は折しも花盛りで、奈良の八重桜を思うのに恰好の時節だったのであろう。この句の表現からは、ゆかりの桜の花盛りと、その木蔭を清める花守の幻が浮んで来る。華やかな浪漫的イメージに富む懐しい句柄である。

597　うつくしきかほかく雉のけ爪かなと申たれば

蛇くふときけばおそろし雉の聲　（花摘）

俳諧勧進牒・芭蕉庵小文庫・陸奥衢・泊船集・三冊子・蕉翁句集

春季（雉）。

語釈　**○うつくしきかほかく雉のけ爪かな**　「美しき顔掻く雉の蹴爪かな」。其角の発句。美しく彩られた雉子の顔と、それを掻く鋭い脚の蹴爪との対照に興じた句である。「け爪」は、キジ科の鳥の雄の脚にある後向きの鋭い突起をいう。「両ノ足ニ長距有テ、利如レ剱」（『太平記』巻十二）「Qezzume.」（『日葡辞書』）。**○申たれば**　「申したれば」。江戸の其角が上方に居る芭蕉の許に手紙などでこの句を報じたことをいうのであろう。底本の『花摘』は其角の亡母追善の句日記で、この前書は其角の付したもの。同書五月

朔日の条に見える。○**虵くふと**「虵食ふと」。「虵」は「蛇」の俗字。夏の季語とされるのは、ずっと後世のことで、元禄期には「穴を出づる」が春、「衣をぬぐ」が夏、「穴へ入る」が秋とされている。ただの「蛇」は雑の扱いであろう。「水口にへびや見ゆらん鳴蛙　光重」（『毛吹草』巻五）「Febi.」（『日葡辞書』）。○**きけばおそろし**「聞けば恐ろし」。「おそろしやきぬ〲の比鉢鼓き　昌碧」（『あら野』巻七）「Vosoroxij.」（『日葡辞書』）。○**雉の声**「雉」は「雉子」と書くのが正しいが、略して上一字だけ書かれることが多い。

大意 ほろろと鳴くと形容される優しい雉子の声も、蛇を食う鳥ときくと、恐ろしい感じがする。

考 『俳諧勧進牒』には「山居」と題がある。土芳の『全伝』には、前述の如く「一里は」の句と共に膳所へ向う途中から上野の半残の許に報じた句と伝えており、元禄三年春の作と見てよい。『花摘』に初めて見えることも、これを裏付けている。其角の許には手紙などの序に書き送ったのであろう。『勧進牒』に「山居」とあるのは、石山の幻住庵隠棲を思わせるが、春のうちにはまだ其処に赴いていないので、聊か不審である。按うに、正月初め以来芭蕉と別れていた撰者路通は、句の成立のくわしい事情を知らず、後にこの句を聞いて幻住庵閑居中の句と思ったのではあるまいか。

『花摘』の前書によって明らかなように、この句は其角の「うつくしき」の句に触発されて成ったもので、『三冊子』には、

うつくしき皃かく雉子の蹴爪かなといふは其角が句也。蛇くふといふは老吟也と也。（赤雙紙）

という芭蕉自身の言葉が見える。芭蕉の句は、

妻こふといへばしほらしく、焼野のきゞすとよめばあはれふかしとの言外のかけ合あり。猶人情にひゞきて余意浅からず。（杜哉『蒙引』）

というように、和歌や連歌で優雅なものとして詠まれる雉子の、生き物としての別の面を強調して俳諧の新意を出し

たのである。右の「人情」云々については、外面如菩薩内心如夜叉の女性への戒めといったような解が古注以来あるけれども、これに余り傾くと文学以外に逸出して、作者の意図からは遠いものになろう。其角の句との比較や、この句自体の特色を、尾形仂氏は左のように精しく説いておられる。

「美しき顔」とは、……雉子をもって「かほ鳥」もしくは「かほよ鳥」とする和歌の古説のあるのを利かせつつ、雉子の雄の美しい羽色をいったもの。……雉子が美麗な顔のあたりを掻いているその蹴爪の、思いのほかに長く鋭いさまをとらえ、その意想外な対照を通して、あたかもあでやかな美女に扮した俳優が、紅い袖口から顔に似げないむくつけき腕をのぞかせて化粧を直している、……姿態にも似た、凄艶の情趣を描いたのである。その警抜な着想と線の太い大胆な官能的描写は、蕩児として知られ伊達風流をうたわれた其角の面目を、遺憾なく発揮したものといっていい。「其角が句なり」という芭蕉の評言もまた、その点をさしている。

一方、芭蕉の「蛇食ふと聞けば」というのは其角のとりあげた「蹴爪」に対し、たとえば『本朝食鑑』にも、「雉、三、四月ニ至リテ蛇ヲ食フ。（中略）雉、蛇頭ヲ啄メバ、蛇、雉ノ頸ヲ捲クコト数回、雉急ニ翥ツテ鷕ウットキハ、則チ蛇身自ラ断落シテ、後ニ悉クコレヲ食フ。ソノ勢、カクノゴトシ」としるされているその捷勁の性をさしたもの。……一句は、そうした俗説をふまえて、雉子の声の伝統的詩情を翻したのである。

……和歌・連歌以来の伝統的本意を意識した上で、その「雉子の声」を「恐ろし」と言い返したところに、〝俳諧〟のおかしみがある。その新しい詩情の発見が、其角の「美しき顔かく雉子の蹴爪かな」の逆説的把握に対する酬和の心からもたらされたものである点からいえば、一句は、古歌の詩情のパロディと、其角の句との交響という、二重の俳諧性の上に成り立っていることになる。

同じく伝統的詩情を裏返すことによって新しい詩情を発見した両句を比べた場合、「其角の作には、芭蕉の作に見るような凄い切れ味が欠けている」といった評も下されているが、「凄い切れ味」という点からいえば、む

しろ逆だろう。其角の句は、雉子の凄艶の姿態を視覚的にズカリととらえたもので、「美しき顔」と「蹴爪」とを鋭角的に対比させ、読者に与えるショックを計算に入れたその手口には、ズーム・アップとカット・バックとをふんだんに駆使してみせる今のテレビのやりかたと似たところがある。それに対して、「恐ろし」という新しい詩情を聴覚的にとらえた芭蕉の句は、ラジオ的といっていえなくはない。……

……ラジオ的もどかしさを伴った芭蕉の句は、そのもどかしさを充足させるために、読者に反復玩味することを強い、想像力の参加を求めている。「聞けば」という一見冗漫な措辞を伴うことによって、「恐ろし」という切れ字「し」を含んだ断定的表現は、実はその背後から、妻呼ぶと聞けばなつかしく、子を思うと聞けばしおらしく、鷹におびえると聞けばあわれにかなしくといった、さまざまな鳴く音のあわれをひびかせているのだ。そこからは、ひとり、雉子の鳴く音にじっと耳を傾け、さまざまにそのあわれをまさぐりつつ、また蛇を食うと聞けば恐ろしくも聞こえるなあと興じている、芭蕉の閑居の姿も浮かんでくる。……そうした閑居澄心の姿勢の中で、現実の雉子の声と詩伝統の中のそれ、あるいは〃おかし〃と〃あわれ〃との間を漂遊する楽しみをまさぐっている作者の心を、ラジオ的な平淡な表現によって深い余韻とともに伝えているところに、其角の句のもたない、芭蕉独自の俳境があったといっていい。

「〃蛇食ふ〃といふは、老吟なり」とは、つまり、そのことをいったものだろう。……芭蕉の俳諧の世界は、一面から見れば、常に其角との交響の中で、其角的なるものと対比しながら自己の行きかたを確かめることによって拓かれていった、というふうに見ることもできるだろう。……(『松尾芭蕉』)

当面の句は華やかな其角の句に比べて、一見しただけではその佳さが分らないような地味な句柄であるが、雉子の伝統的本情とは別に、俳諧の新境地を探ったものであることは、右の説で明らかになったと思う。其角との句風の対照も際立っており、「老吟」と称する以上、芭蕉は自らの俳境に自信を持っていたのである。但し、其角の句との関係

は、たとえば嘗ての「あさがほに我は食くふおとこ哉」（Ⅰ*161*）の句が、其角の「草の戸に我は蓼くふほたる哉」（『虚栗』）の句の逆に出たような反撥関係ではない。其角の句に対して、「ウム面白い。そういえば斯ういうところもあるよ」と同調諧和しているのであって、その辺にこの句の穏やかなユーモアが看取されるのである。

598　四方より花吹入てにほの波（真蹟短冊）　　白馬

四方より花吹入て鳰の海（卯辰集）　　泊船集

四方より花吹入て湖の波（流川集）　　今日の昔・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

春季（花）。

語釈　**○四方より花吹入て**　「四方より花吹き入れて」。「吹入て」を「吹き入りて」とよめば、「花」が主体の表現となる。色々な見方が可能であるが、句面には現われない「風」を主体として、「風が花を湖面に吹き入れて」と解するのが最も穏当に思われる。「四方」は、凡ゆる方角の意。「四方ハ高キ山ニテ、一河谷ニ流、嵐落テ枕ヲ叩ク」（『海道記』）「泉の大将貞国、小蔵山の嵐に烏帽子を河へ吹入られ」（『平家物語』巻六）「Xifô. Yotçuno cata.」「Fuqi ire, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○にほ**　「鳰」。「鳰のうき巣」（Ⅱ*289*）などといわれるように、「にほ」は水鳥のかいつぶりのことであるが、これに因んで琵琶湖の雅称を「にほの湖」といい、略して「にほ」ともいった。ここも琵琶湖の略称で、「匂ふ」を言い掛けている。「膳所曲水之楼にて／蛍火や吹とばされて鳰のやみ　去来」（『猿蓑』巻二）。

大意　風が四方から花を湖面に吹き入れて琵琶湖の波が立ち騒ぎ、如何にも華やかな春景色であることよ。

考　「洒落堂の記略之」（『泊船集』）「珍夕が洒堂」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『蕉翁句集草稿』には「此句自筆物に、珍夕が洒堂の記にと前書有」とも記す。「洒落堂記」は洒堂（珍碩）・正秀共撰の『白馬』（元禄十五年刊）に見えるが、この文の草稿断簡の裏に元禄三年の歳旦吟「こもをきて」（Ⅲ*582*）の句を書いた真蹟が伝存するから、この句文は元禄

三年春の成立と考えられよう。「獺(カハウソ)の祭」(Ⅲ583)の句の条で述べたように、珍碩はこれよりさき正月に伊賀に居た芭蕉を訪問したと思われるが、三月には芭蕉が膳所に出て来て、珍碩亭(洒落堂)を訪ねたのであった。

下五を「鳰の𣴎」(「𣴎」は「海」の異体字)とする『卯辰集』の句形は、初出板本であるだけに注意しなければならない。頴原博士の『新講』のように、これを後案の治定形と見る説も拠る所無しとしないが、真蹟短冊と「洒落堂記」の所伝が一致して「にほの波」であり、「湖の波」(『流川集』『蕉翁句集草稿』等)と表記するものも、「湖」は「にほ」の宛字と考えられるので、「にほの波」と「湖の波」は結局表記の異同に過ぎない。『蕉翁句集』『泊船集』に「潮の波」とあるのも、「潮」は「湖」の誤写と認められ、これらは一類の所伝である。すると、『卯辰集』の句形だけが孤立することになって、果して芭蕉がこういう案を考えたかどうか、すこぶる疑問であろう。「波」としては句柄がこまかくなるという見方もあるが、「𣴎」という句形の信憑性に問題がある以上、こうした鑑賞は考え直さなければなるまい。さわ立つ「波」の印象が鮮やかな方が詩的表現としては優っている。この句では「にほの波」の句形が、信頼し得る唯一のものなのである。

「洒落堂記」には、膳所からの湖畔の眺望を大観して、

抑おもの〻浦は勢多・唐崎を左右の袖のごとくし、海を抱て三上山に向ふ。海は琵琶のかたちに似たれば、松のひゞき波をしらぶ。日えの山・比良の高根をなゝめに見て、音羽・石山を肩のあたりになむ置り。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃抹の日〻にかはれるがごとし。

と叙し、洒落堂のたたずまいについては、

山は静にして性をやしなひ、水はうごひて(ママ)情を慰す。静動二の間にして、すみかを得る者有。浜田氏珍夕といへり。……門に戒幡を掛て、分別の門内に入事をゆるさずと書り。……且それ箇にして方丈なるもの二間、休紹二子の侘を次て、しかも其のりを見ず。木を植、石をならべて、かりのたはぶれとなす。

と記している。もとより初めての訪問であったろうから、句には珍碩に対する挨拶の意が籠められていることは言うまでもない。珍碩亭からの大観を思い切った表現で描き切ったところがこの句の特色であって、「さくらさくひらの山風ふくまゝにはなになりゆくしがのうら浪」（『千載集』巻二、良経）の名歌が、作者の脳裏には当然浮んでいたであろう。大景を把握した手腕については、古来絶賛の辞が列ねられている。

湖の眺望眼前の風景今見るがごとし。……今案に、四方よりと云詞、きはまりもなく広大にして、先志賀の花園其名高く、日枝・比良の峰〻の桜、東西南北の花満〻たる山〻浦〻思ひ合すべし。亦此吟、花吹入て薫ふと云懸たる詞、名誉と云べし。誠に花の小浪（サヽナミ）打寄る水面の薫風、其景色優美にして、絶妙の吟と云べし。（信天翁『笈の底』）

……広い湖水の周囲から落花の風が吹いて湖上一面が花だらけに成ったといふのを、四方から花を吹入れてゐる此鳰の海、と詠じたのである。実に広大に雄壮に且美麗な景色で、芭蕉翁の詩胆の大なる事も見える。唯だ実地の写景にのみ孜々として居ては出来ぬ句で、実景以上に詩想を馳せて主客の両観を打破して一丸となし而して一種特別な客観を現じて始て個様な句が出来るのである。（内藤鳴雪『評釈』）

「四方より」が名手だと思ふ。「畠から」「麓から」などと云ふべき所を四方からと云ったのがいいと思ひます。分析的でなく、綜合的の感じで、それが鳰の湖で集中されて揺ぎの無い歌ひ振は芭蕉の特色で、天明以後は徒に排列に流れて了ひました。「花吹き入れて」も冴えて居ます。花の散り込む抔と云へばだいなしです。終りの「鳰の湖」のにほの柔か味も重大です。そのため一つの撓りが出て居ます。（『芭蕉俳句研究』太田水穂氏）

以上、何れも「鳰の海」の形での鑑賞であるが、言わんとする所は要点をはずしていない。湖をめぐる山々から吹き入れる花びらが波に散り浮く景色は、写生を超えた幻想的華やかさともいえよう。

路通がみちのくにおもむくに

599　くさまくらまことの華見しても來よ　（茶の草子）

春季（華見）。

語釈　○**路通**　「ロツウ」。蕉門の俳人。斎部(いむべ)氏、また八十村(やそむら)氏。貞享二年春近江で芭蕉に入門。元禄元年秋以来深川で芭蕉と親しい交流があり、細道の旅に随行する予定であったが実現しなかった。元禄二年八月敦賀に芭蕉を迎え、三年正月初めまで随侍。以後芭蕉の歿するまで愛憎さまざまの経緯があることは、これ以後も触れる機会があるであろう。終生漂泊の境涯を過し、元文三（一七三八）年七月十四日大坂で歿した。享年九十。（Ⅰ*239*、*240*、Ⅱ*438*、*443*）参照。○**みちのくにおもむくに**　「陸奥(みちのく)に赴(おもむ)くに」。路通が奥羽に旅立つに当って、の意。「みちのく」は既出（Ⅲ*472*前書）。「出羽の国におもむく時、みちのくのさかひを過て」（『続猿蓑』下、公羽発句「そのかみは」前書）「Vomomuqi, u, ijta.」（『日葡辞書』）。○**くさまくら**　「草枕(くさまくら)」。旅寝。既出（Ⅰ*216*）。○**まことの華見**　「実(まこと)の華見(はなみ)」。「華見」は「花見」に同じ。本当の意味の花見をいう。「まこと」は既出（Ⅱ*416*）。○**しても来よ**　「為(し)ても来(こ)よ」。「も」は間投助詞。「きてもみよ」（Ⅰ*39*）と同じ語法である。

大意　みちのくに旅寝を重ねて、風雅に徹した本当の花見をして来なさいよ。

考　路通の奥羽行脚は元禄三年四月から八月にかけてであって、九月初めには江戸に帰着している。これよりさき義仲寺の草庵で芭蕉と共に新年を迎えた路通は、正月三日に伊賀へ帰る師と別れて以来、顔を合わせていない。それぱかりか、この間に彼は誰かの珍蔵する茶入を紛失した事件に巻き込まれて江戸へ逐電した。四月初めには再び西上したが、三河でこの一件に関する芭蕉の怒りを聞いてそのまま方向を転じて奥州に向ったという（九月廿五日付芭蕉宛杉風書簡）。こうした経過を見ると、路通の奥州行は出来心のようであり、芭蕉が別れてから後に路通に餞別句を言い遣るような穏やかな心境にあったかどうかも疑わしい。或いは路通には夙くから奥州へ旅する心づもりがあって、その

意向を正月三箇日のうちに漏らしたので、芭蕉がその折餞別句を贈ったのかも知れない。出典の『茶の草子』（雪丸・桃先撰、元禄十二年刊）は路通の後見した撰集と思われるので、芭蕉から餞別句を贈られたこと自体は信じてよいであろうが、その成立時期については右のように様々な問題があって、年頭に成ったのか、春闌けた頃の作なのかは、今の処確定し難いのである。

路通は俳諧の才はあった人で、芭蕉も「俳作妙を得たり」（元禄元年極月五日付尚白宛書簡）と賞した程であったが、性格が放恣で人の不信を買うことが多く、これ以後出入禁止になる始末だった。正月初めまではそれ程の事もなかったけれども、茶入事件が起きてからは芭蕉も屢々不信の念を漏らし、その行状を痛烈に皮肉った書簡も残っている。そうした事情を背景にして、この句の中にも路通に対する辛辣な感情を読み取ろうとする見方もあるが、表現からは然程きつい気分は受取れないように思う。路通とつきあいを重ねるうちに、風雅の誠を求めてやまぬ真摯さには遠い人物であることが、芭蕉にも段々分って来たのであろう。茶入事件露顕より前に成ったとしても、そのような低い路通の人格に対して、風雅の真精神に目ざめよと呼び掛けたい気持を託したのがこの句なのである。自らの体験をも踏まえ、辺土の行脚に日を重ねて、風雅に徹した「まことの華見」をして来なさい、と勧めたのであった。そういう教訓が露わに出た表現なので、詩として評価し得る作ではないが、芭蕉の思想を考える上では、「月華の是やまことのあるじ達」（Ⅱ *416*）等と共に注意すべき句であろう。

600　行春を近江の人とおしみける　（猿蓑）

望湖水惜春

志賀辛崎に舟をうかべて、ひとぐ〳〵はるをおしみけるに

陸奥衛・篇突・泊船集・梟日記・月団扇

行春やあふみの人とおしみける（服部氏旧蔵真蹟懐紙）——村田氏旧蔵真蹟懐紙・辻本氏旧蔵真蹟懐紙・芭蕉翁記念館蔵真蹟懐紙・堅田集・蕉翁全伝附録

行春を近江の人とおしみけり（旅寝論）——蝶姿・去来抄・蕉翁句集

春季（行春をおしむ）。

語釈 **○望湖水惜春**「湖水を望みて春を惜しむ」。「望」は「眺望」と同じく、ひろく眺めやる意。「湖水」は琵琶湖を指す。既出（Ⅱ *397*）。「惜春」は、春の末の情をいう。「右ハ幽ナル波ノ上、望メバ眼ウゲヌベシ」（『海道記』）「はるををしむ心を夏の知るばかりあすも匂へと春に契らん」（広本『拾玉集』巻四）「Voximi, u, ôda. ……Nagoriuo voximu.」（『日葡辞書』）。**○行春を**「行く春」は既出（Ⅱ *373*、Ⅲ *457*）。「を」に切字のような働きがあると見る説は採らない。**○近江の人**「近江の人」。「近江」は、今の滋賀県の旧国名。即ち「淡海」（琵琶湖）を擁する湖国である。**○おしみける**「惜しみける」。「お」は「を」の仮名ちがい。「春を惜しむ」は、陰暦三月の季語である。

大意 古人と同様に湖上うち霞む景を愛でつつ、ゆかしい近江の人々と共に、暮れ行く春を心ゆくまで惜しんだことだ。

考 「四季折〱の名残ところ〴〵にわたりて、いま湖水のほとりに到る」（村田氏旧蔵真蹟懐紙。今は所在不明という）「志賀辛崎に舟をうかべて、人〻春の名残をいひけるに」（辻本氏旧蔵真蹟懐紙（現所在不明）・『堅田集』）「四季折〱の名残処〻にいたる」（芭蕉翁記念館蔵真蹟懐紙）「やよひの末つかた湖水に舟をうかべて」（『蕉翁全伝附録』）等の前書がある。服部氏旧蔵（現所在不明）の真蹟懐紙には「元禄三」と年記があり、村田氏旧蔵や芭蕉翁記念館蔵の真蹟には次に幻住庵入庵の際の「先たのむ」（Ⅲ *603*）の句が書かれているから、元禄三年三月末に「行春や」と初五に切字を置いた初案が成り、それを『猿蓑』に入れる際に「行春を」と推敲したものと思われる。「行はるや」の形の辻本氏旧蔵真蹟には「元禄辛未」（四年）と年記があり、推敲の時期は『猿蓑』の撰成った元禄四年五月頃にかなり近かったのであろう。初五に切字が入るよりも、「行春を」の方が所謂「黄金を打ち延べた」ようで、調べが佳い。下五を「おしみけり」とし

た『旅寝論』以下の形は、杜撰な誤伝である。「ける」という詠嘆の余韻を引く表現は、初案の段階から変っていない。上五が「行春を」となっても、「ける」でもって立派に切れているのである。

この句は『猿蓑』発句の部の巻軸に位置し、遥かに集の名の由来となった冒頭の「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」と相対している。自信作だったことは、こういう情況からも窺えよう。この句の内容や鑑賞の勘所は、有名な『去来抄』の記事に悉されているから、先ず引用する。

先師曰、尚白が難に、近江は丹波にも、行春は行歳にも、ふるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去来曰、尚白が難あたらず。湖水朦朧として、春をおしむに便有べし。殊に今日の上に侍ると申。先師曰、しかり。古人も此国に春を愛する事おさ〳〵都におとらざる物を。去来曰、此一言心に徹す。行歳近江にゐ給はゞ、いかでか此感ましまさん。行春丹波にゐまさば、本より此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事、真成哉ト申。先師曰、去来、汝は共に風雅をかたるべきもの也と、殊更に悦給ひけり。（先師評）

大津の古参蕉門尚白がこの句の表現を難じて、「近江」は「丹波」に、「行く春」は「行く歳」に置き替えることが出来るではないかといった。それは表現に必然性のないことで、それを同門間では「振る」「振らぬ」といって色々の句について論ぜられたことである。尚白の説を聞いた芭蕉が『猿蓑』の撰者去来に意見を徴した処、去来は一言の下にそれを斥け、「湖水朦朧として、春をおしむに便有べし」という。行く春の頃は四方を霞が籠めて朦朧とした景色になるが、「近江」という言葉から連想される大湖の水面の霞む景色は、他の場所に同じ趣を求めることは出来ない。「行く春」も「近江」も、他の言葉には置き替え難いものだという論である。「殊に今日の上に侍る」とは、現在目前の実況だというので、そういう作者の実感が基本としてあるからには、句中の語は動かし得ないという意であろう。去来の論は誰が見ても正当と認める説といえる。

「近江の人」について山本健吉氏が、

この句にはやはり、大国に入っての挨拶の心構えを外していないと思われ、同座する近江の人たちへ語りかけるような気味合いがある。「近江の人」とは、三人称であるとともに、二人称でもあるような語感がある。「貴方たち近江の人」である。「惜しみけり」と客観的に言い放した表現でなく、「惜しみける」と語尾が屈折することで、丸みと暖みとを添えていることにも、この句は対詠的な発想の根跡(ママ)を残している。湖水の春を惜しむことが、近江の人たちとの暖い連帯感情の表現でもあり得たのだ。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

と指摘された点も重要である。最初に句の成った場の湖上の舟遊びに参加したのは、時期からして珍碩・曲水・正秀・乙州といった『ひさご』の連衆であろう。これら湖南の新人が、尚白・千那らの古参と対立して、やがて分裂に至ることは、荻野清氏の有名な論文に考察された通りで、「行く春」の句に対する尚白の非難も、そのような背景があって出て来たものなのである。

さて、芭蕉は去来の論に付加して「古人も此国に春を愛する事おさ〳〵都におとらざる物を」といった。芭蕉の用いる詩語には、常にこのような伝統の積み重ねがあり、単なる実地実境の一回きりの表現に終ることがない。尾形仂氏の『松尾芭蕉』には、近江の名所に春光を詠じた古歌として、「梓弓春の山辺を越え来れば道もさりあへず花ぞ散りける」(『古今集』春、貫之)「さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」(『千載集』春、よみ人しらず)「さゞ波や志賀の花園見るたびに昔の人の心をぞ知る」(同上、祝部成仲)「あすよりは志賀の花園稀にだにたれかは訪はん春の古里」(『新古今集』春、良経)を挙げておられるが、芭蕉はこれらの古歌と重ね合わせることによって、行く春を惜しむ句の情緒に厚味を持たせているのである。尾形氏がいわれるように、「近江の人」の中にこれらの古人も含まれるとすれば、其処にこの句の俳諧の特質もあることになる。

……芭蕉の詩嚢のなかには、琵琶湖の春を詠んだ多くの古歌が、……いつの場合でも存在し、それらとのあいだに詩的交通の道が開かれていたのだと、考えることができる。連衆とのあいだに、空間的な協同体が存在し、昔

の詩人たちとのあいだに、時間的な協同体が存在する。そのような場所に立って、芭蕉の詩は発想されているから、それはつねに、芭蕉の個性を超えて、より大きな、深いものに結びつくのだ。単なる風景嘆賞の句と思われるものでも、芭蕉の心の奥には、自分よりも大きな価値の伝承の場での創造行為ということが考えられていた。詩を創り出すということが、同時にこれまでに積み重ねられた作品の秩序に、一つの新しいものを加えるという行為であり、従ってそれは秩序自体を動かすという結果を生むのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

という山本氏の言を改めて噛みしめたい。表現の細部では、「行く」との縁で「近江」に「逢ふ身」を掛けたと見る説が古くからあり、尾形氏も同説であるが、私はなお確信が持てない。

湖上渺茫春将に尽きんとするを、水雲の郷の景色の転変に同じ国の人と惜みあへるなり。……闇に今年の春も今日等を限りと湖光雲色に対して感愴せる意を含めたり。……此句、句中に何となく景気の浮ぶあるをもて宜しきなり、景気の浮べるあるところよりおのづと惜春の情にうつるが宜しきなり。（『評釈猿蓑』）

という露伴説を以て鑑賞のとじめとする。

601　艸の葉を落るより飛螢哉　（いつを昔）

泊船集・西の詞・蕉翁句集

夏季（蛍）。

語釈　○**艸の葉**　「艸の葉」。「艸」は、草の総称で、「草」に通用する字。「草の葉や足のおれたるきりぐす（荷兮）」（『あら野』巻六）。○**落るより飛蛍**　「落つるより飛ぶ蛍」。落ちるが早いか飛ぶ蛍。「……するが早いか」「……するや否や」の意をあらわす「より」は、「結ぶより早歯にひゞく泉かな」（Ⅲ511）の例があった。「蛍」は既出（Ⅰ140等）。

大意　草の葉をすべって落ちたかと思うと、蛍はそのまま飛んで行くよ。

考 元禄三年四月十五日に刊行された其角の『いつを昔』初出の句で、『蕉翁句集』は元禄三年の部に出している。但し、初出板本が四月半ばの刊行とあって、夏の句がその年に成った可能性は乏しく、笈の小文や細道の旅中でもないとすれば、貞享四年以前まで溯る作とも考えられる。本書では姑く元禄三年以前として、ここに配しておく。

小さな虫の瞬間の動きをとらえた写生句で、「涼しといはずして万斛の涼意を含んでゐる」（小林一郎氏『芭蕉翁句集評釈』）という鑑賞は良い。古注には、諸芸の心得ある者への挨拶とか、蛍を露に見立てたとかいう解が見えるが、何れも見当ちがいである。内藤鳴雪は、中七の鋭い描写力について、

……細かい処を面白く現はし殊に落つるより飛ぶといふ言葉は天明としか思れぬ。蕪村顔色なしぢや。（『芭蕉俳句評釈』）

と評している。

---

602 鰹賣いかなる人を酔すらん　（いつを昔）

泊船集・類柑子・蕉翁句集

夏季（鰹）。

語釈 ○**鰹売**・「鰹売り」。初鰹を売り歩く魚屋。初夏の風物詩である。鰹は冬は南海に居り、春から初夏にかけて日本近海に来て、秋には再び南下するという。時代は降るが、『守貞漫稿』に初鰹売りについて「江戸ノ魚売ハ四月初松魚売ヲ盛也トス。二三十年前ハ初テ来ル松魚一尾価金二三両ニ至ル。小民モ争テ食レ之。近年如レ此昌ル事更ニ無之。価一分二朱或ハ二分バカリ也。故ニ魚売モ其勢太ダ衰ヘテ見ユ」（巻六）とあるのは参考になる。（I *172*）参照。○**いかなる人を酔すらん**　「如何なる人を酔はすらん」。鮮度の落ちた魚に中って気分が悪くなることがある。それを「酔ふ」というので、『毛吹草』巻三、付合の条に、「酔」と「鯖喰人　同鰹」とあるのによっても、よくあることだったことが知られよう。「いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに」（『おくのほそ道』）「Iuoni yô.」（『日葡辞書』）。

大意 鰹売りが威勢のよい売り声を揚げている。あの鰹でどんな人を酔わすことだろうか。

考 鰹売りは、夏のはじめ、向う鉢巻に腹掛けといったいでたちで、盤台に入れた鰹を天秤棒で担いで、鮮度が落ちないうちにと急いで売り回る。こうした風俗は江戸らしい感じの強いものであるが、この句は前の句と同様に元禄三年四月刊の『いつを昔』初出で、江戸での作とすれば制作年次は貞享四年以前まで溯らなければならない。ただ、旅中にあっても都会地ならば鰹売りは見られるであろうから、ここでは姑く元禄三年以前とするにとどめておく。

生きの良い鰹の連想からか、鰹を肴に酒を呑んで、どんな人を快く酔わせることとか、といった解釈が明治以後は多くなっているが、そういう解は誤りといってよかろう。前記の如く『毛吹草』に「酔」と鯖や鰹を食うことが付合になっていることを思うべきで、『日葡辞書』の「魚に酔ふ」の語釈も中毒状態と解している。従って、今栄蔵氏の『芭蕉句集』に、

江戸市民は初鰹を初夏一番の美味として競って買う風があり、値も高い。そんな初鰹を貧しい自分らには縁のないものとして、半ば羨望(せんぼう)の心で眺めつつ、鰹の毒に当る……意の「酔う」と、美味に「酔う」との両意をきかせたユーモアある作。

と取るのが穏当と思う。但し、羨望の気持は余り強調したくない。「いかなる人を」というあたりに、自分とは関わりの薄い人々という感じがほの見える程度である。『徒然草』百十九段、「鎌倉の海にかつをと云魚は」云々の一条はよく知られているが、これを背景にしたと見る説は採らぬ。「世人皆酔我独醒」という屈原の「漁父」の一節を引く古注の説は、見当ちがいと言わざるを得ない。

俳人の書画美術所収真蹟懐紙・真蹟短冊・芭蕉全図譜所収幻住庵記真蹟巻子・村田氏蔵幻住庵記真蹟巻子・元禄百人一句・卯辰集・猿蓑・陸奥鵆・泊船集・本朝文選・蕉翁文集・蕉翁全伝附録・鳥の宿

いしやまのおくに、かりにすみかをもとめて

603 先たのむ椎の木も有夏こ立　（芭蕉翁記念館蔵真蹟懐紙）

夏季（夏こ立）。

語釈 **○いしやまのおく**　「石山の奥」。「いしやま」は、観音の霊場として名高い石山寺のある瀬田川西岸の地（今の滋賀県大津市石山寺）。その北にあたる国分山（今の大津市国分）の近津尾神社境内に、芭蕉の住んだ幻住庵があった。『猿蓑』所収の「幻住庵記」には「石山の奥、岩間のうしろに山有。国分山と云。そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし」とあり、元禄三年卯月十日付如行宛芭蕉書簡にも、「此度住る処は石山の後、長良山之前、国分山と言処、幼(ママ)住庵と申破茅、あまり静に、風景面白候故、是にだまされ卯月初入庵、暫残生を養候」と見える。**○かりにすみかをもとめて**　「仮に棲処を求めて」。この「すみか」が即ち幻住庵である。芭蕉が住むに至った経緯については、「幻住庵記」の初稿と見られる真蹟断簡に、

爰元住あらしたる草の戸あり。名を幻住庵といふ。是はぜゝの勇士菅沼外記何がし曲水といふ人の伯父なりける僧の、よをいとひてむすび捨たるあとなるけらし(ママ)。さりし冬の末曲水のがり行侍しに、わが為にしふく加へられ、草の屋ねふきあらため、かきねゆひそへなんどして、四国におもむかんとするを引とめらる。

とあるのによって知られよう。曲水は細道の旅の後に芭蕉に入門した膳所藩士で、伯父修理定知の隠栖がその死後荒れていたのを修覆して芭蕉に提供したのである。「隠士にかりなる室をもうけて」（『はるの日』、荷兮発句「あたらしき」前書）「三上山は士峰の俤にかよひて武蔵野ゝ古き栖もおもひいでられ」（「幻住庵記」）「いせの方に住どころ求て」（支考「今宵賦」、『続猿蓑』上）「**Carini.**」「**Sumica.**」「**Motome, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。**○先たのむ椎の木も有**　「先づ頼む椎の木も有り」。「椎の木」は、ブナ科の常緑喬木。一先ずは頼りとするに足る椎の木もある、の意で、この「たのむ」は、木蔭に庵などを結んで住むことをいう。（Ⅱ*325*）参照。「此宿の傍に大きなる栗の木陰をたのみて世をいとふ僧有」（『おくのほそ道』）「椎の木をだかへて啼や蟬の声　膳所 朴水」（『猿蓑』巻六、几右日記）「**Xijno qi.**」（『日葡辞書』）。**○夏こ立**　「夏木立」。既出（Ⅰ*44*、Ⅲ*466*）。

大意　庵の傍の夏木立の中に、頼りとするに足る大きな椎の木もある。一先ずここに憩うとしよう。

考　「卯月初入庵」（俳人の書画美術所収真蹟懐紙）「石山之奥幻住庵ニ入テ」（真蹟短冊）「石山のほとりにかりなる庵をしつらひて」（『卯辰集』）「石山に籠るとて」（『陸奥鵆』）「いしやまのおく国分山と云処に人の結捨たる庵有。幻住庵といふ。清陰翠微の佳境、いとめでたき眺望になむ侍れば、元禄三卯月の初、暫尋入て」（『蕉翁全伝附録』）「湖水のほとりにたゞよふにほのうき巣のながれとゞまるよすがが、芦の一はの情捨がたき事侍るまゝ、しばらく杖をすて草鞋をときて」（『鳥の宿』）等の前書があり、『全伝附録』に臨摸された真蹟は、『蕉翁文集』の原拠としたものと思われる。「幻住庵記」の真蹟や、この文を収めた『猿蓑』『本朝文選』が文末にこの句を載せていることは、よく知られている。
　芭蕉が幻住庵に入ったのは、元禄三年四月と推定される八日付高橋喜兵衛（怒誰）宛書簡に、「一昨是へ罷越候而」とあるのによって四月六日と推定される。三月末の「行く春や」の句と並記した真蹟懐紙が二点伝わっており、入庵早々に成った句であろう。諸種の前書の書き方も、この推定を裏付けていると思う。但し、「幻住庵記」では、定稿以前の文案に句は書かれていない。
　さて、「幻住庵記」には、ここに至るまでの自身の旅の境涯を叙して次のようにいう。
　予又市中をさる事十年計にして、五十年やゝちかき身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂。鳰の浮巣の流とゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ。
　この句の鑑賞に当って、「庵記」の末節「かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず」から「賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ」を引く向きが多く、特に「幻の栖」を強調するけれども、漂泊の旅路の後わずかに得た「蘆の一本の陰たのもしく」というあたりの方が、句

中の「先たのむ椎の木」の表現にぴったり照応している。苦労の多かった旅の後、暫しの安らぎを求めてこの木蔭にたどりつき、ほっと息を入れている芭蕉の気持が、この句には色濃く反映しているのである。もとより無常観は芭蕉にあって基本的なもので、米沢家本「庵記」の文末には「また是幻の栖なるべしと、頓て立出てさりぬ」とある程であるが、暫しの憩いの場として庵とその周囲を眺めるくつろいだ眼ざしが、この句の気分の基調でなければなるまい。そして、頼む蔭の象徴たる椎の木を、夏の炎熱や雨露を防ぐたよりと解しては、余り浅きに過ぎる。山本健吉氏のいわれる通り、それは「幻の栖において身の拠り所とすべき具体物である。流転する現象のなかに、暫く頼むに足るべき揺ぎない不動の物が、「椎の木」に具象されている」(『芭蕉その鑑賞と批評』)のであった。「この椎の巨木も、この場合相対的に大きいのでなく、絶対的に大きいのであり、無限大に大きく感受せしめるところが、この句の立派さである。そして句の裏には、「命なり」という詠歎が、主調低音として響いて来る」(同上)という見方も良い。

「椎の木」と「夏こ立」との関係は、椎の木即ち夏木立では後者に余りに働きがなく、繰返しに過ぎなくなる。やはり色々の木のある夏木立の中に、一際目立つ椎の木があると見たい。椎の木というものの趣について、半田良平氏が、

……この椎の木は、幻住庵を囲む夏木立の中心をなして居たので、『椎の木もあり』といふやうな発想法を取つたのであらうが、一体、椎の木そのものは、どこか手固い趣をもつて居ながら、一面ひそやかな寂しい樹木であるといふことである。そこに芭蕉は、自分の落ちついた、それで居て何かなし寂しい心持を寄せかけたのである。芭蕉の心持と椎の木とが、渾然として一体に融け入つた趣とでもいふべきところである。(『芭蕉俳句新釈』)

と述べられたのは、優れた鑑賞というべきであろう。境涯の句として、しみじみとした感味を持った句である。なお、古注以来、この句に縁ある歌として、「たちよらむかげとたのみししひがもとむなしきとこになりにけるかな」(『源氏物語』椎本)「ならびゐてともをはなれぬこがらめのねぐらに憑むしひの下えだ」(『山家集』下)等が挙げられている。こ

れらを踏まえたというわけではないが、芭蕉の発想の基底にあったものとして、こうした古歌の影響を考えるのは、無意義なことではない。

604　夏艸に富貴を餝れ蛇の衣　（巾秘抄）

夏季（夏艸・蛇の衣）。

語釈　**○夏艸**　「ナツグサ」。既出（Ⅲ*474*、*488*）。**○富貴を餝れ**　「富貴を餝れ」。「富貴」は、ここでは贅沢という程の意。贅沢な飾りとせよ、というのである。「餝」は「飾」に同じ。「富貴なる酒屋にあそびて」（『続猿蓑』下、惟然発句「酒部屋に」前書）「Fŭqi.」（『日葡辞書』）。**○蛇の衣**　「蛇の衣」。蛇は満腹しては断食し、次いで脱皮して大きくなって行く。食物さえ豊富ならば、温暖な時季に五、六回はこういう脱皮を繰返すという。皮の下に新しい表皮が出来ると、古い表皮は浮き上って来るので、顎の先を木の枝などにこすって古い表皮を引掛け、前進して皮を裏返しにする形で脱いで行くのである。脱いだ皮は黄色半透明で光沢があり、夏に限ったことではないが、温暖な時季に多く行われるので夏とされる。「蛇衣を脱……蘇頌が説には時なしといへり。然ども和におゐて夏月の外蛇衣をみる事稀也。俳諧には尤夏なるべし」（『滑稽雑談』）「宮人や蛇の衣にも廻り道」（一茶『文政句帖』五年）。

大意　一面に夏草の茂った中に、蛇の衣が見える。ほかに何の風情もない中では、せめてこれを贅沢な飾りとするがよい。

考　大礒義雄氏の所蔵される稿本『巾秘抄』（文化十三年、好問堂編）に見える卯月十六日付洒堂宛芭蕉書簡に所収の句である。中に「国分山の山守と成かゝり候へば、市中の御案内なつかしく候」という文言があり、四月六日に幻住庵に入って間もなくの頃の句と推定される。この外には板本等に見えない。

庵に近い乱離たる夏草の原に蛇の衣を見つけたことが句案の動機になったのであろう。今栄蔵氏は「取るに足らぬ蛇の抜殻も、存外豪華な飾りに見えるかも知れぬ。蛇よ、殻を脱ぎ捨てよ」（『芭蕉句集』）と訳しておられるが、私は蛇

に対する呼び掛けとまでは見ずに、［大意］のように解した。次の句と共に蛇の多かった幻住庵近くの環境を思わせる作であるが、洒堂宛書簡には、

二句の境、愚意落不中儘、外へ御語御無用に候。御登山之砌、極可申候。

と不満の意を漏らしており、結局捨てられて、撰集類に載らなかったのである。

605 夏艸や我先達て蛇からむ （巾秘抄）

夏季（夏艸）。

語釈 **○我先達て蛇からむ** 「我先達て蛇狩らむ」。私が先頭に立って蛇を狩り出して捕えよう、の意。「達」は「先達」の語を意識した宛字である。「かゞの国にていたはり侍りて、いせまで先達けるとて」（『猿蓑』巻三、曾良発句「いづくにか」前書）「茸狩ん似雲が鍋の煮るうち」（『蕪村自筆句帳』）「**Saqidachi, tçu, atta.**」「**Cari, u, atta.**」（『日葡辞書』）。

大意 夏草の茂る庵のあたりは、どうも蛇が多い。訪ねて来る人の為にも、私が先頭に立って蛇を狩り出して捕えよう。

考 前の句と同じく『巾秘抄』に伝える洒堂宛書簡に見える。何れも幻住庵近辺に出没する蛇を発想の契機にしているが、趣向表現が今一つ熟さず、捨てられたのであった。

606 我に似るなふたつにわれし眞桑瓜 （真蹟懐紙）

難波あたりより隠士東湖といふ人、不肖の我をしたひとはれし時

初蟬・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（真桑瓜）。

語釈　○**難波あたり**　「難波」は、今の大阪を指す。既出（Ⅰ*75*）。「あたり」は、態とおぼめかした表現である。○**隠士東湖といふ人**　「隠士」は、俗世を離れて隠遁している人。既出（Ⅰ*196*前書）。「東湖」は大坂の俳人之道の別号。槐本氏、後に諷竹と改号した。道修町の商家で、伏見屋久右衛門と称したというから、必ずしも「隠士」というのは相応しくないが、俳諧を嗜むところから、市隠の格でこういったのであろう。芭蕉が最後の旅で発病したのは、この人の家に滞在していた時であった。宝永五（一七〇八）年正月歿、享年五十。○**不肖の我**　「不肖」は、親或いは天に肖ない愚かな者という意の謙称。愚かで才能のない自分。「身不肖に候へども、形のごとく系図なきにしも候はず」（『保元物語』上）「**Fuxôno mi naredomo.**」（『日葡辞書』）。○**したひとはれし時**　「慕ひ訪はれし時」。自分を慕って訪ねて来られた時に作った句、の意。「我をしとふ者にうちくれぬ」（芭蕉「紙衾ノ記」―『和漢文操』）「**Xitai, ô, ôta.**」（『日葡辞書』）。○**我に似るな**　「我に似るな」。字余りの初五である。『初蟬』以下の書は凡て「似な」と表記されているが、真蹟の送り仮名によって、それらも「似るな」とよむべきであろう。○**ふたつにわれし真桑瓜**　「二つに割れし真桑瓜」。「真桑瓜」は、岐阜県真桑村から上質の物を産したところから名に冠せられた瓜の一種で、夏の季語である。「玉真桑」（Ⅰ*141*）「初真桑」（Ⅲ*510*）参照。「白くてもしろき味なし真桑瓜　鬼貫」（『高砂子』）「**Macuavri.**」（『日葡辞書』）。

大意　二つに割れたこの真桑瓜は、瓜二つの言葉通りよく似ているが、貴方は俳諧を志すにしても、私のような役立たずになってはいけませんよ。

考　真蹟懐紙は、大礒義雄氏が昭和九年十一月の名古屋美術倶楽部売立目録の写真を紹介されたもので、原物は知られていない（『連歌俳諧研究』四十九号）。『初蟬』は「此句は門人槐之道につかはされし也」と付記し、『泊船集』にも略々同様の付記がある。『蕉翁句集』は元禄七年の部に収めるが、土芳の『蕉翁句集草稿』には「此句はいが逗留之内、門人槐之道訪ひけるに遣れし句也」、『全伝』元禄七年の条には「此句ハ此里逼留（ママ）ノ内、難波の之道ノ訪ひシ時言出ラレシト云ヘリ。イヅレノ年の夏ニヤ覚束なし。先此所ニ書付侍ル也」と述べていて、之道に与えたことは兎も角、年代については確信を持っていなかったようである。伊賀での事ならば、土芳が知らなかったというのもおかしい。

一方、之道の入門に関して許六の『歴代滑稽伝』は「大坂之道後号諷竹洛にて見ゆ」とあって、京での初見と伝えている。元禄三年六月卅日付曲水宛芭蕉書簡には、

……甚暑京へおもひかけず奉存候処に、去来・加生数ゝ状さし越候故、六月初メ出京、三五日と存候処におもひの外長滞留、十八日迄罷過申候。美濃より如行と申者尋登り、大坂よりもいまだしらざる者尋問候而、是等にさへられ、五七日も外に滞留仕、山の清涼よそになし候事、無念に被存候。

とあり、ここに見える大坂から尋ねて来た「いまだしらざる者」を之道に擬する大儀氏の説は恐らく正しいであろう。この時芭蕉は京の小川椹木町上ルにあった加生（凡兆）宅に滞在していたと推定されるが、六月初めから十八日まで加生宅に居た間に之道の訪問を受け、挨拶としてこの句が詠まれたのである。

匆卒に読むと真桑瓜に呼び掛けたように見えるが、実は之道に呼び掛けたもので、真桑瓜は眼前の物を採り上げたまでであろう。恐らくもてなしに真桑瓜が出ていて、それを「瓜二つ」に利かせて逆に「似るな」を引き出したのである。見当ちがいの解が多い古注の中で、

瓜をふたつに割たるとは、真の似たるものゝ譬草也。ぬしと我と灑落を好む。性質は相似たれど、ぬしは世を経る人なれば、我真似すべからずとの諷喩ならん。似たるものを似なといへる虚実を味ふべし。（杜哉『蒙引』）

という解は優れている。自分を慕って俳諧の師としようとする之道に対して、普通なら「我に似よ」というべきところを、逆に「似るな」といったところが面白い。之道は貧しい商賈だったという。芭蕉は無能無才にして唯俳諧一筋に繋がったという自覚を持っていたけれども、凡ての人がそうあるべしと思っていたわけではなく、世道を立てながら俳諧に遊ぶ生き方も認めていた。だからこそ俗世間に生きる之道のような人に対しては、「我に似るな」と呼び掛けるのであって、其処には「自己自身に対するある述懐」（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）が含まれていると見られる。即興の挨拶句ながら、芭蕉という人の物の見方を考える上では示唆に富む句といえよう。山本健吉氏の『全発句』では、元

禄七年の大坂に於ける洒堂（珍碩）と之道との対立を背景に、別の解釈が提示されているが、さきに述べたように七年説には格別の根拠はなく、成立年次としては三年が確実視されるので、山本氏のような見方を採ることは出来ない。

607 京にても京なつかしやほとゝぎす　（季夏廿日付小春宛書簡）

己が光・陸奥鵆・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

旅寓

京に居て京なつかしや時鳥　（誹林一字幽蘭集）

花圃・曠野後集・反古集・泊船集・東海道

夏季（ほとゝぎす）。

大意　現に京に居ても、ほととぎすの声を聞くと、京がなつかしくなることだ。遠い昔が偲ばれる。

考　元禄三年と推定される金沢の小春宛の書簡に見えるので、同年六月二十日以前の成立、恐らくは幻住庵から出京して来て凡兆亭に滞在していた六月初めから十八日までの間の作であろう。「京に居て」という異形は、初出が他派の集であり、土芳も『蕉翁句集草稿』で『曠野後集』と『泊船集』の句形を「違也」としている。真蹟書簡と『己が光』の形を信ずべきことは言うまでもない。

山に入れば兎も角、京の市中で時鳥の音を聞くことは稀であった。だからこそ「時鳥はかしましき程鳴き候へども、希（マレ）にきゝ、珍しく鳴、待かぬるやうに詠みならはし候」（紹巴『連歌至宝抄』）といわれるのである。この句も市中で聞く時鳥の声の珍しさが発想の契機となったのであろう。しかし、

洛中にてはことに郭公聞人稀也。岩倉の辺にて聞つるなど兼好も書り。みやこも山深き所に住む人は、今や郭公の初音も聞つらんと、おもひやるさま也。（東海呑吐『芭蕉句解』）

と解するのは誤りと思われる。この句で「京」を繰返したのは、同じ語ながら内容が異なるのであって、上の「京」

は芭蕉の滞在している現在の京、下の「京」は時鳥の声によって喚起された古歌や物語の中の京である。京の持つ二つのイメージを同じ語を繰返してだぶらせたところにこの句の俳諧があり、そうした形で古都の情緒を作者自身嚙みしめているのだ。所はちがうが、「いそのかみふるき宮この郭公こゑばかりこそ昔なりけれ」(『古今集』巻三、素性)の古歌が遥かに響いていると見てよい。安東次男氏は通説と異なり、「京都はやはりいいなあという懐しさのそっちょくな表現」(『芭蕉発句新注』)としておられるが、ここでは採らない。

無常迅速

608 やがてしぬけしきは見えずせみのこゑ　(真蹟句切)

猿蓑・古蔵集・陸奥衛・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

無常迅束(ママ)

頓て死ぬけしきもみえず蟬のこゑ　(真蹟懐紙)

卯辰集・桃の実・泊船集・車路・青莚・芭蕉文考

夏季(せみ)。

語釈 ○**無常迅速**「ムジヤウジンソク」。世界の万物の生滅転変の速やかなこと、人の世の移り変りの極めて速いことをいう仏語。「仏の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られて」(『更科紀行』)「Mujǒ. i, tçune naxi.」「Iinsocu. i, Fanafada fayaxi.」(『日葡辞書』)。○**やがてしぬけしき**「頓(やが)て死(し)ぬ気色(けしき)」。間もなく死んでしまうような様子。「今は世をたのむけしきや冬の蜂　尾張旦藁」(『猿蓑』巻一)「Qexiqi.」(『日葡辞書』)。

大意 鳴きしきる蟬の声をきいていると、間もなく死んでしまうような様子は見えない。

考 支考の『東西夜話』(元禄十五年刊)所収の「示秋之坊」の文中に、「むかし湖南の幻住庵に一夜の夢をむすびしが、その夜もしらずよみしやすらん、にくみしやすらん、無常迅速の一句をあたへて、先師も麓までおくりは申されし

か」という一節があるが、「無常迅速の一句」とは当面の「やがてしぬ」の句を指すのであろう。金沢の俳人秋之坊の幻住庵訪問は、元禄三年七月十七日付牧童宛書簡に、「隠士秋之坊閑居御吊、珍敷得芳意大慶仕候」のあるのによって証せられ、恐らく夏中の作を七月に入ってから訪れたこの人に書き与えたものと思われる。三年夏の作とすれば、同年七月下旬に書かれた『芭蕉文考』所収の「幻住庵記」初稿の末尾にこの句があることや、元禄四年に出た板本『卯辰集』『猿蓑』に初見することとも矛盾しない。これに対して、『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）所収の乙州の句「動き出る日もゆるさじや蟬の声」の前書に「筥根山を越る比、頓而死ぬ気色は見えずと無常迅速をのべ玉ひしを思ひ合て」とあるのは、「やがてしぬ」の句を箱根での吟としている如くであるが、これは「動き出る」の句の成った処を指していると見られ、芭蕉が箱根山で作ったとすれば延宝四年まで溯ることになるから、全く論外になる。元禄三年夏の句であることは動かし難いといわなければなるまい。

中七の初めを「けしきは」とするもの、「けしきも」とするもの、何れも真蹟の裏付けがあるが、『猿蓑』と一致する「けしきは」の方が後案と見られ、「けしきも」はそれに先立つ案であろう。句切は木節・嘯山旧蔵の品、懐紙の方は、『芭蕉全図譜』の解説に、秋之坊に与えられ『卯辰集』の原拠になった可能性も考えられている。土芳の『蓑虫庵集』宝永六年の条には、「西蓮寺に詣て、翁の蟬の句に無常迅速と題の有かけ物をみる」とあり、これは『蕉翁句集草稿』に「自筆の物に無常迅速と□（前）書有。けしきはとあり」とあるのと同じ物と推定されるので、伝存のものとは別点の、伊賀に伝わった真蹟もあったわけである。

耳を聾するばかり鳴き立てる蟬の声を聞いていると、これが間もなく死ぬはかない存在とはとても思えない。そこから人の命の明日を待たない無常へと思いが及んで行く観相風の句である。しかし、加藤楸邨氏の指摘されるように、この句は最初から「無常迅速」という観念を詠もうとしたものではなく、成った後にこの観念と結びついたのであろう（『芭蕉全句』）。蟬の声には確かにそういう感じがあり、出来て見ればこれ位ぴったりこの観念に副うものも他には

ないのである。「けしきも」では、なお弱い詠嘆に過ぎないが、「けしきは」となると、鳴き立てる力強い声の印象が強調されるから、やはりこの方に治定した理由も分るのである。『猿蓑』に前書が何もないところから、「は」は現実の蟬の声を強調したのだという見方もあるが、「は」の句形に於いても「無常迅速」の前書を付した真蹟があるので、この観念との結び付きは、やはり否定し難いと思う。観相の句としてその文学性に限界はあるにしても、蟬の声の力強さが生かされているところが、この句の取柄であろう。命のはかなさも真実なら、その命ある間に力の限り鳴くのも真実なのである。『古蔵集』（元禄九年刊）には、この句を引いて「常住ならぬ身を蟬声に知れる人なり」と評している。

609　ゆふべにも朝にもつかず瓜の花（真蹟自画賛）

佐郎山・藤の実・陸奥鵆・泊船集・類柑子・蕉翁句集・西国曲

夏季（瓜の花）。

語釈　○**ゆふべにも朝にもつかず**　「夕べにも朝にも付かず」。夕方とも朝ともつかず、日中に咲く花の趣を表現したもの。「つく」は、拠る、基づく等と同じ意。（Ⅱ*278*）参照。「つかず」で切れる。○**瓜の花**　「瓜」は夏の季語。既出（Ⅱ*296*）。「ひめ瓜」（Ⅰ*45*）参照。

大意　瓜の花は、夕顔や朝顔のように夕方とも朝ともつかず、夏の日盛りに涼しげに咲いている。

考　板本としては元禄五年十月の序のある紅雪の『佐郎山』初出であるが、『類柑子』に「幻住庵にこもれるころ」と前書があり、これと矛盾する資料はないので、元禄三年夏の句と認めてよい。伝存する真蹟自画賛に付属する露川の文には、

正徳丙申とし、みまさかや推柳子の亭に遊びて、蕉翁の手跡を見る。夕にも朝にもつかず瓜の花とや。げにあさ

がほの哀、夕皃のまづしきにもよらず、歓然として此華の本情を尽す事、凡口に及まじや。廿余年の後自画を感じて、ふたゝび泪を蠟紙のうへにおとし侍る。

名にしあふたねうしなふな瓜の花　　月空露川居士

三月

とあり、略々このままの形で彼の西国行脚記念集『西国曲』（享保二年刊）に収められた。

「ゆふべにも朝にもつかず」といって夕顔や朝顔の花をほのめかし、それらの採り上げられることの多い花に対して、「瓜の花」（恐らくは黄色い真桑瓜の花）の風情に心を留めて出来た句であろう。「こういう句は、「夕」とか「朝」とかの名で悦ばれる花を予め知っていて、そのうえ或日或時、瓜の花にとくべつの好意を持った事情でもなければ詠まない」（安東次男氏『新注』）のは確かであるから、瓜の花の風情なさをいったわけではなく、露川の文にもある如く「歓然として此華の本情を尽す」さまが中心の筈である。伝存の自画もそのような趣を描いているようで、要するに朝顔・夕顔とは別趣の、夏の日盛りに咲く瓜の花の露けく涼しげな趣をいったものと見たい。「幻住庵にこもれるころ」という前書から、風流に徹底しない心境への反省を籠めたというような解は見当ちがいとおぼしく、句の中心は瓜の花の趣でなければならない。ただ、表現に西行歌「ひばりたつあらのにおふるひめゆりのなににつくともなき心哉」（『山家集』中）の影響が見えることは否定し難く、その詞書の「心性さだまらずと云事を題にて」を何処まで重視するか、句の内容の見方の分れるところであろう。

610　ねぶの木の葉ごしもいとへ星の影（真蹟懐紙）

　　　たなばたに

猿蓑・泊船集・蕉翁句集

秋季（星）。

語釈 ○**たなばた** 「七夕（たなばた）」。牽牛・織女の二星を祀る七月七日の星祭を指す。既出（I 8）。○**ねぶの木** 「合歓の木（ねぶのき）」。「ねぶ」は既出（Ⅲ 506）。○**葉ごしもいとへ** 「葉越（はご）しも厭（いと）へ」。ねぶの葉越しの人の目をも避けるようにせよ、の意。上に「こそ」が省かれたと見る露伴説（『芭蕉俳句研究』）は採らない。ねぶの葉は夜になるとぴたりと合わさって、疎らに透間を作る。その透間からの人目をも厭えと、星に呼び掛けたのである。「障子ごし月のなびかす柳かな　素龍」（『炭俵』上）「文書ほどの力さへなき　珍碩　羅に日をいとはるゝ御かたち　曲水」（『ひさご』）「Itoi, ô, ôta. …Cajeuo itô.」（『日葡辞書』）。○**星の影** 「星の影（ほしのかげ）」。「星」は、牽牛・織女の二星を指す。七夕を指す季語として「星今宵」「星合」等があり、ここの「星」はそれらに準じた季語としての用法と見られる。既出（I 118）。「妻こふ星」（I 96）参照。「影」は、星そのものの形とも考えられるが、やはり光と見た方がよいであろう。

大意 牽牛・織女の二星が空にまたたいている。年に一度相逢う今宵は、「合歓」の名のあるねむの木の葉越しの人目も避けるようにして、お互い歓を尽すがよい。

考 『泊船集』に「七夕」と前書がある。板本としては元禄四年夏に成った『猿蓑』初出なので、同三年以前の作となり、細道の旅中までは溯らないとすれば、三年の七夕の夜の作と考えてよい。

古注以来の解釈を見ると、

七夕の夜なれば合歓の木の葉越もいとふべしと也。眠らずとも明すべしを合歓の木によせたり。（正月堂『師走嚢』）

というのは、「いとへ」を星への呼び掛けと見たもので、「ねぶ」に眠りを掛けたとしている。これに対して、

葉は至て細やかに茂り重りて、すッのまもなく翠簾を八重にもかけたるごときその葉ごしをも猶いとひてまいらせよ、一とせに一度の契りなる程にと、此方より遠慮して思ひを述たる句也。（素丸『説叢大全』）

というのは星祭をする人々への呼び掛けとしたのであり、同じく人への呼び掛けとしながら、「他の木は勿論のこと、夜葉を合す此木の葉をも厭へ、合歓はあひよろこぶの木と書き侍れば、今宵に似合しき名なれども」（積翠『句選年考』）と解する説もある。一般に古注では「いとへ」をどう解しているのか、不得要領のものが多い。

抑々この句で「ねぶの木」を持ち出したのは何故かというに、星祭に短冊等を下げる竹の代りに合歓の木を用いることがあり、所謂「眠り流し」の祓には、この木の小枝を使うという。この句の成った時は恰度その木が用いられていたのであろう。そこで、句の内容については、

合歓木の葉は他の樹葉とはちがひて、夜になると相合して葉が疎らに透間をつくる。そこを思つてほしい。事物の実相を観てゐる芭蕉である。その透けてゐる葉の葉越しさへ厭へと云ふので、二星の逢ふ瀬をいとほしむ心から、今宵の空の晴れを願ふこころで興じて云つた句である。(『芭蕉俳句研究』)

という露伴説が注目される。「晴れを願ふ」ことは既に「星の影」とあるのだから論外としても、「二星の逢ふ瀬をいとほしむ心」というのは確かな見方であって、これを外してはこの句の真趣を把握し難いと思う。そのような眼でこの句を見た場合、星祭の人々に葉越しに覗くなという意味で「いとへ」というのは、この語のどういう用法にも当嵌らない。従って、これは星への呼び掛けと解すべきで、「ねぶの葉越しの人目を厭い避けよ」の意と見られよう。「いとふ」に避ける意の用法があることは、[語釈]の用例に挙げた『ひさご』の付句の例で明らかである。そのような呼び掛けによって、二星だけの楽しみの場を空想し、古伝説の世界をいとおしむ情を盛ったのである。

「ねぶ」の漢語たる「合歓」は、男女の交合を意味する。二星の一年一度の契りをいう伝説を材にしている以上、この句に合歓の連想があることは否定し難い。そういう名を持つねぶの「葉越し」の人目を案じたところがこの句の興で、艶情をほのめかしながらも、「葉ごしもいとへ」という中七には、名状し難い柔媚な優しさが感ぜられる。天上の星月夜と地上の合歓の木の情景をとらえて空想を展開した、浪漫的詩情に富む傑作である。

笈日記・喪の名残・泊船集・西の詞・蕉翁句集

611 木曾塚の草庵、墓所ちかき心

玉祭りけふも焼場のけぶり哉　（蕉翁句集草稿）

玉祭けふも焼場の夕けむり　（正月廿九日付許六宛去来書簡）

秋季（玉祭り）。

語釈　○**木曾塚の草庵**　「木曾塚」は、大津の義仲寺（現滋賀県大津市馬場一丁目）のこと。粟津で敗死した木曾義仲の塚があるところから出た異称である。境内の「草庵」は、無名庵を指す。「ぜゝ草菴」（Ⅲ*578*前書）と同じと思われることは前述した。「木曾塚にてふせりながら人〻に対面いたし候」（十八日付加生宛芭蕉書簡）。○**墓所ちかき心**　「墓所近き心」。人を葬った墓地が草庵に近いという意味だ、と句の内容を前書で解説したのである。義仲寺の近くには龍ケ岡の墓地がある。「心」は、句意、句の内容の義。「墓所」は「ボショ」ともよめるが、『日葡辞書』には「Muxo.」のみあって「Boxo.」の語はなく、『平家物語』東大国語研究室本に「一天ノ君崩御なて後、御墓所へわたし奉る時の作法は」（巻一、額打論）といった振仮名の例もあるところから、ここでも「ムショ」とよんでおく。「はじめの句の趣向にまさされる事十倍せり。誠に作者そのこゝろをしらざりけり」（『去来抄』先師評）。○**玉祭り**　「玉祭り」。七月中旬の盂蘭盆に先祖の霊を供養する祭。「玉」は「魂」の宛字。既出（Ⅱ*414*、Ⅲ*519*）。○**けふ**　「今日」。○**焼場のけぶり**　「焼場の煙」。「焼場」は、人の遺体を焼く火葬場。遺体を茶毘に付する煙があがるのである。「火屋のうちはさら也、外の焼場も大分の死人にてところせきを、漸〻かたはらにて茶毘しつゝ」（『好色万金丹』巻二ノ三）。

大意　先祖を祭る魂祭の今日も、火葬場には煙があがっていることよ。

考　『笈日記』には「鳥部山」と前書があるが、『蕉翁句集草稿』には前掲の前書を付して「此、自筆物之句・前書也。笈日記には鳥部山と題あり」と述べており、『蕉翁句集』も同じ前書である。京都東郊の火葬場とする『笈日記』の所伝は、恐らく誤りであろう。芭蕉の歿年元禄七年の盆会は伊賀の郷里で修されたので、木曾塚での句は元禄四年

以前でなければならないが、元禄八年正月廿九日付の許六宛去来書簡には、

又猿みの撰之刻、古翁の御句に、

玉祭けふも焼場の夕けむり

と被成候句にて、伊丹の者の句に、

春雨にけふも焼場のもゆる也

……右之句吟味に付、さるみの入集の句ことぐ〵く除申候。

とあり、『猿蓑』編輯の際に既に成っていたとすれば、元禄四年七月ではあり得ない。一方、同二年以前では木曾塚の草庵との縁が確認出来ず、結局三年七月の魂祭の頃の句と推定される。この頃はまだ幻住庵滞在中で、七月二十三日に出庵、大津に移っているが、幻住庵ではかなり自由に諸方に出掛けているから、このような句があっても不思議はない。去来の書簡は最も年代の古い資料ではあるが、真蹟に基づく土芳の所伝に他の資料は凡て一致しており、下五を「夕けむり」とする異形は、去来によくあるうろ覚えの誤りと認められる。

支考が『笈日記』に収めたこの句の後に、

是もいづれの秋にか侍らん。人間たゞ一日、朝暮鐘声をへだつといへる世の観相なるべし。

と付記している通り、句の表に哀れとも悲しとも言ってはいないが、無常の人の世を観じた句という印象が強い。この句を誦すれば、『徒然草』の、

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟立さらでのみ住はつるならひならば、いかにもののあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。（七段）

という一節は直ちに連想されるもので、『笈日記』の前書は、そんなところから出ているのかも知れない。「玉祭りけふも焼場の」というあたりは、

ア、祭られてゐる者もあるに又た新たに祭られる可く現在焼かれて居る者もあるわい、（内藤鳴雪『評釈』）という気持と見るべく、「哀愁を以て無常を感じている」（『芭蕉俳句研究』阿部次郎氏）のである。「けふも」は、同じく阿部説にいうように「今日ですら」の意であろう。『猿蓑』に入れようとした程だから自信作とは思われるが、無常流転のおもいには痛切なものがあったのではあろうが、句としては、それが観念としてあらわに出てしまって、それ以上内面化されたものとして迫ってくる力には乏しい。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

という見方が適評である。

洛の桑門雲竹、自の像にやあらむ、あなたの方に顔ふりむけたる法師を畫て、
これに賛せよと申されければ
君は六十年あまり、予は既五十年にちかし。ともに夢中にして、夢の形をあらはす。これにくはふるにまた寐言を以てす

612 こちらむけわれもさびしき秋の暮（蕉翁句集草稿）

笈日記・泊船集・をだまき綱目・続別座敷・蕉翁句集

秋季（秋の暮）。

語釈 **○洛の桑門雲竹** 「雲竹」は、北向氏、名は正実、通称八郎右衛門。京都の東寺観智院の僧となり、書を高野山西方院の僧道朝に学んで大師流の道統を受け、書家として立って雲竹と号した。芭蕉も貞享後期から彼の書風の影響を受けた形跡が著しい。この前書と句は二人の交渉を証する数少い資料の一であるが、翌年に出た『猿蓑』其角序の板下を雲竹が書いており、この前後に親密さを増した模様が窺われる。元禄十六年歿。「洛」は、京のこと。「桑門」は、僧侶をいう。既出（Ⅲ*472*前書）。「ところ〴〵見めぐりて洛に暫く旅ねせしほど」（『笈日記』所収己百・芭蕉付合前書）。**○自の像にやあらむ** 「自らの像にやあらむ」。雲竹自らの姿で

あろうか。この一節は挿入句。「雲かゝばしき南京の地 羽笠 いがきして誰ともしらぬ人の像 荷兮」（『冬の日』）「Zǒ.」（『日葡辞書』）。**○あなたの方に顔ふりむけたる法師を画て** 「彼方の方に顔振り向けたる法師を画きて」。あちらの方、即ち正面を向かずに、顔をそっぽに向けている坊さんを絵にかいた、というのである。「山ざきのあなたに、みなせといふ所に宮ありけり」（『伊勢物語』八十二段）「Anata.」（『日葡辞書』）。**○これに賛せよと申されければ** 雲竹が右の画に賛の句を書いてくれと仰有ったので、の意。「賛」は、画などに添えてそれを褒める意味の詩文の類をいう。既出（Ⅲ *454* 前書）。**○君は六十年あまり** 「君は六十年余り」。雲竹は寛永九（一六三二）年生まれで、元禄三年には数えの五十九歳であった。芭蕉は雲竹の正確な年齢を知らず、大よそのところを言ったのであろう。「君」は二人称。既出（Ⅱ *267*）。「コヽニ、六ソヂノ露キエガタニヲヨビテ、更スエバノヤドリヲムスベル事アリ」「予モノヽ心ヲシレリシヨリ、ヨソヂアマリノ春秋ヲ、クレルアヒダニ」（『方丈記』）「Musogi. P.」「Sannen amari.」（『日葡辞書』）。**○予は既五十年にちかし** 「予は既に五十年に近し」。元禄三年当時、芭蕉は数えの四十七歳である。「既頽廃空虚の叢と成べきを」（『おくのほそ道』）「予又市中をさる事十年計にして、五十年やゝちかき身は」（「幻住庵記」）「Sudeni.」「Isogi.」（『日葡辞書』）。**○ともに夢中にして** 「共に夢中にして」。雲竹も芭蕉も、同じ夢のようなこの世に生きているという考えから「夢中」といった。『荘子』斉物論篇に「丘也与レ女皆夢也。予謂二女夢一亦夢也」とあるのが影響しているかも知れないが、それを俟たずとも「夢の世」ということは昔からの観念である。「妙なる一乗妙典の功力を得んと懺悔の姿、夢中になほも現すなり」（謡曲「錦木」）「Muchū. Yumeno vchi.」（『日葡辞書』）。**○夢の形をあらはす** 「夢の形を現はす」。夢の世に生きる者のはかない形を画像としてあらわしてある、という意。**○これにくはふるに** 「之に加ふるに」。「くはふる」は、付加する意。「Cuuaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。**○寐言を以てす** 「寐言を以てす」。「寐言」は、「こちらむけ」の賛句を謙退し、「夢中」の縁で見立てたもの。「以てす」は上の「くはふるに」を承け、その目的語「寐言」に添えた語で、漢文訓読から出た言い方である。「もて」（Ⅰ *241*）参照。「御簾の香に吹そこなひし笛の役 探志 寐ごとに起て聞ば鳥啼 昌房」（『ひさご』）「その書其手跡を以て直に板行をなす物也」（『続猿蓑』井筒屋奥書）「Negoto.」「Iesusno minauo motte.」（『日葡辞書』）。**○こちらむけ** 「此方向け」。自分の方を向いてくれ、という呼び掛け。「をのれこちらむくな。こちらむいたらとつてかむぞ」（狂言記「伯母が酒」）。

大意 そっぽを向いて冷くしないで、こっちを向いてくれ。あなたも寂しかろうが、私も秋の夕暮は寂しいのだから。

考 「賛 雲竹自画像」（『笈日記』）「あちら向たる絵讃」（『続別座敷』）等の前書があり、『蕉翁句集』にも『句集草稿』

と同じ前書が見える。『句集草稿』には第八葉と第十四葉の二箇所に載せ、前者には「雲竹自画像」と前書して「此句自筆の物に前書添て有」と述べ、後者に標掲の前書を付して「此句前書、自筆之趣也」としている。この前書の原物は伝わらないが、土芳の鑑識を信じてよいであろう。『笈日記』には、

是は湖南の幻住庵におはす時の作也。君は六十我は五十といへる老星一聚の前書侍りけるが、あやまりておぼえ侍らず。

と付記があり、『泊船集』にも「此句は雲竹がうしろむきの像に賛のぞみけるに、書て遣はされし」と記してある。支考のいう「前書」は、「君は六十我は五十」というところからして土芳の伝えたのと同じ物であることは論がなく、幻住庵滞在中の作というのも、この句の年代に関する唯一の所伝なので尊重すべきである。これに矛盾する資料がない以上、元禄三年七月の作、幻住庵を去った二十三日までには成っていたと見てよい。

「あなたの方に顔ふりむけたる」画像に対して「こちらむけ」と呼び掛けたところが一句の興で、嘗て盤斎の後向きの像に「団扇もてあふがん」（Ⅰ241）と賛したのとは別様の趣向を案じたのである。句の「秋の暮」は秋の夕暮の意。その寂しさは、「さびしさにやどをたちいでゝながむればいづくもおなじあきのゆふぐれ」（『後拾遺集』巻四、良暹法師）等古くから歌に詠まれており、そういう伝統的詩情はこの句にも生かされている。一体幻住庵滞在は世間から隔絶して孤独に徹しようとしたわけではなく、『猿蓑』の「几右日記」に明らかなように、多くの門人知友の来訪があったのだし、芭蕉も屢々庵を出て京や湖南の門人の家に滞在した。その心境は「幻住庵記」に、

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。

とある通りであったろう。秋の夕べの寂しさに浸っては、人なつかしさの情が動くのは自然で、この句にも人恋しさの気持が見える。「こちらむけ」が単なる戯れ言に終っていないのは、「さびしき秋の暮」の景色や、それを寂しがる

作者の気持が浸透しているからである。好箇の画賛句として記憶に留められるべき作といえる。

613　猪もともに吹るゝ野分かな　（江鮭子）

卯辰集・ひこばゑ・芳里俳・篇突・泊船集・千句塚・蕉翁句集

猪のしゝのともに吹るゝ野分哉　（九月六日付曲水宛書簡）

秋季（野分）。

語釈　○猪もともに吹るゝ　「猪も共に吹かるゝ」。「猪」は、畠を荒す夜行性の野獣。「伏猪の床」はこの時代から秋季とされていたが、「猪」だけでは秋にはならぬであろう。周囲の草木と共に、猪が野分の風に吹かれるというのである。「猪に吹かへさるゝともしかな　正秀」（『猿蓑』巻二）「Inoxixi.」（『日葡辞書』）。○野分　秋に吹く暴風。既出（Ⅰ*144*、Ⅱ*431*）。華雀の『芭蕉句選』等、「野わけ」としたものがあるが、古い語形は「ノワキ」であり、「野分」と表記したものを「ノワケ」と訓む根拠は、古板本に見出し難い。

大意　周囲の草木と共に、荒々しい猪までも吹き立てられる野分のすさまじさよ。

考　元禄三年と推定される八月四日付千那宛書簡に「猪もともに吹るゝ野分かな」の形で見えるのが時期としては最も早い。その後、同年九月六日付の曲水宛書簡には、「猪のしゝのともに吹るゝ野分哉」とあり、一見「猪も」から「の」へ推敲されたようである。しかし、初出の『江鮭子』（之道撰、元禄三年成）以下、古板本類は凡て「も」であって、この句の場合「の」から「も」へ推敲することはあり得ても、その逆は考えられぬように思われる。千那宛の書簡は原簡が伝わらず、『有の儘』『落葉考』『蕉翁消息集』等、中興期の関吏の編著に収められて世に知られているもので、その句形の確実性は保証の限りではない。これに対して曲水宛の方は現所在は不明ながら写真が伝わっており、原拠ははっきりしている。加藤楸邨氏が『全句』で指摘されたように、「猪のしゝの」は初案というより推敲過

程での一案と見るべきものかも知れないが、九月六日の時点で「の」と案じたことは事実であった。それを『江鮭子』に収めるに当って最終的に「も」に治定したのであろう。同書には元禄三年九月上旬の之道自序があるから、「も」に決定したのは六日以後間もなくだった筈である。『誹林一字幽蘭集』（沾徳撰、元禄五年刊）に「猪の吹かへさるゝ野分かな」という正秀の句が見えるが、これは［語釈］に引いた『猿蓑』所収の正秀の句の誤伝に相違ない。『ひこばゑ』（和及撰、元禄四年刊）には、「作者きかず」として収められている。

李由・許六共撰の『篇突』（元禄十一年刊）には、この句を解して、

猪の野分のすさまじさ、臥猪の床は宵の程に吹まくられ、松も檜もくつがへりたる風情言外にあり。俊成卿、野分の題に草木の上をむすぶを本意とはいへり。

と述べてあり、「草木と共に猪も」と取るべきで、作者も共に野分の中に身を置いているとはいえ、『師走嚢』のように「作者乃至人と共に猪も」と取っては良くないと思う。嘗てはこれを幻住庵滞在中の吟とし、「幻住庵記」に、あるは宮守の翁、里のおのこ共入来りて、いのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、……

とある一節が思い合わされていたけれども、幻住庵を去ったのが七月二十三日と判明した現在では、必ずしも在庵中の吟と限定することは出来ず、それ以後八月四日までの出庵後の期間も考えに入れなければなるまい。兎に角猪は夜行性のものでもあり、芭蕉自身眼にしたわけではなく、それを取り入れることによって野分のすさまじさを印象づけようとしたものと思われる。

芭蕉が猪を見たわけではない。颱風にさらされた山中の草庵の心細さから、農談にきいた猪の上を思いやったまでである。……許六の言うように、吹きなびく野山の草木の中に、芭蕉は「臥猪の床」つまり猟師の言う寝坪を想像し、そこに心細くうずくまる猪の姿を描き出す。「共に吹かるる」とは、草木をはじめ、地上のものなべて

が吹きまくられる中に、猪の姿だけをとくに拡大的に描き出すことによって、野分のすさまじさを強調したのである。……草庵からの自然の連想として、臥猪の床を描き出さないでは、生きて来ない。

……こういう句からすらも、芭蕉の想像力のある厚みは、受け取ることが出来るのである。野分に当って、話にきいただけの猪を思いやることは、猪への愛情であり、それは当然吹きまくられる「臥猪の床」という具体的なイメージとして、描き出されたことを思わせるのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

という山本健吉氏の鑑賞は良い。ただ私は、臥猪の床の俳諧化として右の説を凡て認めた上で、なおこの句を佳句とも秀逸とも思うことが出来ない。

この句は、有名になり過ぎてゐる割合に、私にはどうも面白く思はれない。今その所以を考へて見て、どこか空想で作つた痕があることに想到した。成程、『ともに吹かるゝ』は巧みな句である。猪が野分に吹きまくられてゐるといふ特殊的事象を捉へて、その裏に、その猪が居る野原の草木が盛んに吹き靡いて居る蕭条たる光景を暗指せんとしたのは、巧みといへば巧みであるが、この句では、その猪だけが特に浮き立つてしまつて、その背景となる野原が、ひどく影を潜めて居る。これは主として、『ともに』といふ現はし方が、あまり奇巧を弄し過ぎた為めではないかと思ふ。それがまた一面に空想で作つたと思はせる弱点にもなつて居るやうである。（半田良平氏『新釈』）

という見方に同感するからである。空想が悪いとは思わないが、「ともに吹るゝ」という表現法を取った為に、背景の野原乃至草木の印象が薄弱になっていることは否めない。こうした表現を改めない限り、この句の価値には限界があろう。芭蕉がこの句を書いた千那宛書簡で「いかゞ候半や。能（よき）と申にては無御座候。先懸御目候」と言っているのも、その辺に不満があったからではあるまいか。

翁義仲寺にいませし時に

614 名月や児たち並ぶ堂の椽（初蝉）

名月や兒達並ぶ寺の椽（百歌仙）

三冊子

秋季（名月）。

語釈 ○**翁** 「オキナ」。芭蕉を指す。○**義仲寺** 「ギチユウジ」。その境内にあった草庵を指す。（Ⅲ*611*前書）参照。○**いませし時** 「あり」「をり」の尊敬語「います」は四段活用だから、本来なら「いまし」とあるべきところであるが、中古以降下二段に活用する「います」が発生し、ここはその場合と見られる。『日葡辞書』は「**Imaxe, imasu, imaxi.**」として、「**Gozaru**」「**Vouaxi-masu**」と同一視しており、四段活用と混合した中世末期から近世初頭にかけての状態が窺われる（『日葡』の「**Imaxe**」は、この辞書の動詞掲出の体例からして連用形と見られ、サ変動詞と見ることは出来ない）。下二段の「います」には、「あらしむ」の意の他動詞もあるが、ここは「芭蕉がいらっしゃった」というのだから、他動詞ではない。（Ⅲ*582*）参照。○**児たち並ぶ** 「児」は、寺院や公家・武家に召使われる少年。男色の対象になることが多かった。「たち並ぶ」を「立ち並ぶ」の意と取る説があるが、「堂の椽」に「立つ」必然性は認められず、なお考うべきではあるまいか。『三冊子』の代表的諸本のうちでも、「児達双ぶ」（石馬本）「児達ならぶ」（梅主本）「児達双ぶ」（安永板本）という表記が多く、「児立ならぶ」とするのは芭蕉翁記念館本だけである。宝暦・明和期の旨原の『百歌仙』も「児達並ぶ」であり、私は「児達」という意に取る方が妥当に思われる。「月鉾や児の額の薄粧　曾良」（『猿蓑』巻二）「**Chigo.**」（『日葡辞書』）。○**堂の椽** 「堂」は、神仏を祀る堂舎。既出（Ⅱ*361*）。「椽」は、「縁側」の略で、「縁」と書くのが正しいが、近世には「椽」を用いる慣用があった。「椽」の字音は「テン」、本来は屋根のたるきのことである。「名月や椽取まはす黍の虚　去来」（『炭俵』下）「**Yen,** …… **Firoyen.**」（『日葡辞書』）。

大意 中秋の名月が見事だ。堂の縁側には美しい稚児が並んで坐っている。

考 以下「月見する」の句までの三句は、元禄三年の八月十五夜に、粟津義仲寺の草庵で成った。一連の推敲過程

に於ける異形とすべきものであるが、それぞれ内容が趣を異にするので、ここでは別の句として扱いたい。

種々の句案については『初蟬』（風国撰、元禄九年刊）が最も委しいが、後述するように、「月見する」の句が元禄三年八月筆と推定される加生（凡兆）宛書簡に書かれていることから、同年名月の夜の作であることが確実視される。その書簡によると、芭蕉の健康状態は芳しくなく、

名月散〻草臥、発句もしかぐ〱案じ不申候。湖へもえ出不申候。木曾塚にてふせりながら人〻に対面いたし候。

という情況であった。臥せっていたのは、痔の状態が良くなかったのであろう。『百歌仙』の伝える下五の異形「寺の椽」は信じ難い。

名月の皎々たる光のもと、大寺の堂の縁に稚児達が並んで清光を賞している。稚児達は化粧などしているであろうし、華やかで艶な名月の夜のさまが目に浮ぶが、次の「七小町」の句案に照らしても、これは実景ではなく、想化に成る幻想的光景であろう。背景として石山寺や三井寺が従来考えられており、特に謡曲「三井寺」で園城寺の住僧が稚児と観月する場面、

……今夜は八月十五夜名月にて候程に、幼き人を伴ひ申し、皆〻講堂の庭に出でて、月を眺めばやと存じ候。類なき名を望月の今宵とて、夕べをいそぐ人心、知るも知らぬも諸共に、雲を厭ふやかねてより、月の名頼む日影かな。

とあるあたりが、作者の脳裏にあったことは、十分可能性がある。ただ、このような華麗な趣は、既にこの時期の芭蕉の庶幾する境地ではなく、結局捨てられるに到った。

615

とありけれど、此句意にみたずとて

名月や海にむかへば七小町 （初蟬）

名月や湖水に浮ぶ七小町 （和漢文操）

今日の昔・三冊子

秋季（名月）。

語釈 ○とありけれど 『初蟬』では前の「見たち並ぶ」の句を承けて、この句の前書に続けている。○此句意にみたず 「此の句、意に満たず」。「見たち並ぶ」の句の出来について、芭蕉が満足し難い、気持に不満がある、の意。「I.」「Michi, tçuru, ita.」（『日葡辞書』）。○海にむかへば 「海に向へば」。この「海」は琵琶湖を指す。既出（Ⅱ392）。湖水に対すると、の意。○七小町 「ナ、コマチ」。「小町」は平安朝初期の歌人。美人の代表的存在であるが、その小町を材とした謡曲「草子洗小町」「通小町」「卒都婆小町」「関寺小町」「鸚鵡小町」「山本小町」（雨乞小町とも）「清水小町」の七つ（後二者は現在廃曲）を「七小町」と称し、歌舞伎にも七小町の所作事がある。小町の数奇な運命の連想が伴なう語である。「さまぐ〵に・浮身の果は七小町」（『鳥おどし』）。

大意 中秋の名月が見事だ。美しい湖上の月の景色に対すると、その変幻する有様は、七小町の姿のようにそれぞれ趣がある。

考 前の句から続く名月の夜の第二の句案である。『和漢文操』（享保十二年刊）所収の句形は、「月見ノ賦」の中に見えるものであるが、これは文全体が支考の偽作と推定され、信用し難い。

朱拙の『今日の昔』（元禄十二年刊）には、

ある人、集をするとて余に句を乞へる折から、芭蕉老人の義仲寺にいましし時

明月や海にむかへば七小町とし玉ふを、いかにきゝ給へるやと問ひしに、小町は湖辺のたゞちにして、別に意義

なしと答へられき。此句は欲把西湖比西子淡粧濃抹也相宜といへる東坡が作例によられたるべきを、草〳〵に看過さむは本意なし。

という記事が見える。湖上の美景を美女にたとえるという点で蘇詩と句には共通点があり、東坡の詩は細道旅中の象潟の句とも密接に関係するものではあるが、「西施」の名を出した象潟の句に比して、「七小町」の句の場合、密接な親縁性は考え難いと思う。野ざらしの旅での辛崎の松の句（Ⅰ232）の初案でも、芭蕉は小町の幻想を描いていた。

前の句案が静的な把握だったのに対して、これは動的に湖上の名月の時と共に変化する趣をとらえようとした。それを表現するのに「七小町」を持って来たわけである。その小町の趣は、「美女であろうが老女であろうが幽霊であろうが、すべて幽玄の「花」を持っているということである。従ってそれは、単純に美女の趣と言うことはできないし、むしろさまざまの姿で幽玄美を示している小町なのである」（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）という見方がすぐれており、要するに宮仕えして浮名をうたわれた華やかな時代から、落魄の晩年に至る小町の生涯を連想させつつ、色色に変化する月夜の湖上の景色を描こうとしたもので、幻想美を中核とすることは「児たち並ぶ」の句と変らない。ところが、華麗さ哀切さ等さまざまの趣を持つ「七小町」ながら、句中でのこの語は象徴的な高さには遠く、譬喩としても徹底しない憾みがある。抑々このような幻想美は細道の旅以後の芭蕉の目指す所ではなかったから、次の第三案へと移行することになった。

616　月見する座にうつくしき白もなし（卯辰集）

夕がほの歌

と吟じて、是も尚あらためんとて

明月や座にうつくしき白もなし（初蟬）

泊船集・三冊子・蕉翁句集・鏽鏡

月をみる座にうつくしき貞もなし（泊船集書入）

秋季（月見）。

語釈 **○月見する座** 「月見する座」。名月を賞する為に人々が集うた席。ここは粟津義仲寺の草庵をいう。「まことや此第三を十余句ほどせられて後、座がしめりたりとて、此句に決せられたり」（『今日の昔』）「Zani tçuranaru.」（『日葡辞書』）。**○うつくしき貞もなし** 「美しき貞も無し」。

大意 さやかな名月を賞するこの座の人々には、美しい顔など一つもない。

考 『夕がほの歌』（辛陀・円入撰、享保七年刊）には「古寺翫月」と前書があり、これを発句とした尚白との両吟歌仙が収められている。『初蝉』の「と吟じて」云々の前書は、前の「七小町」の句を承けるもので、嘗てはこの一連の記述に基づいて「明月や」の句形を定案とするのが大方の定説であった。『初蝉』では、前の二つの句案に「名月」と書きながら、この句は「明月」と表記しているけれども、この異同は用字の違いだけで、何れも「名月」を意味するものと考えてよい。『三冊子』にこれらの句案について述べ、「座にうつくしきといふに定ると也」とあるのも、『初蝉』に拠った記事であろう。「明月や」を定案とすれば、「月見する」という『卯辰集』等の句形は初案ということになるが、この点はそう単純ではない。『初蝉』の記事は元禄三年中秋の名月当夜のことであって、前の二つの句案を別にすれば、時間的には「明月や」が最も早い句案の筈である。それから三日後の加生宛書簡に「月見する坐に美しき顔もなし」の句形が現われ、『夕がほの歌』の歌仙発句や翌四年の『卯辰集』に同じ形が見える。尤も加生宛書簡の原簡は伝わらず、『夕がほの歌』の歌仙も原拠の懐紙は伝わらないが、板本初出の『卯辰集』の句形と一致することは、「月見する」の句形の信憑性を十分保証するであろう。このような諸資料の情況に照らせば、十五日から十八日までの間に初五が「月見する」と改められ、十八日前後に行われた尚白との両吟の発句ともなったと見るのが最も自然である。若し『初蝉』の「明月や」が前の二案の初五に惹かれた誤りならば、定案は最初から「月見する」であ

った可能性さえ考えられなくはない。兎に角、当夜の情況を委しく伝えた『初蟬』の影響は大きく、『泊船集』『三冊子』『蕉翁句集』等は皆それに拠ったものと認められる。これが近代の研究にまで尾を引いて、『卯辰集』の句形が軽視される結果になったのである。「月見する」の句形を最終案と見る富山奏博士の「芭蕉の元禄三年義仲寺月見の句の定稿」（『高野山大学・国語国文』第三号）の説は至当であり、今栄蔵氏の『芭蕉句集』も「月見する」を治定形としている。「名月や」には型に嵌ったあり来りの感が強く、下で「うつくしき貞もなし」と強く言い切っているのに、上五に殊更「や」の切字を置く必要はないのである。『泊船集書入』の「月をみる」は、「月見する」の誤伝と思われる。

句は「月のみ嬋娟たる老輩の会ならん」（杜哉『豪引』）といふのは確かなところで、委しくいへば、

今此古寺に月見をしてゐる一座の中には美しい顔もなく何れを見ても山家そだち、否むつかしげな顔の親仁ばかりぢやと興じたので、佗び人連の座であり殊に古寺であるから、華やかな艶な処は少しもなく枯れ切つて居る様を斯様に滑稽的に叙したのぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

月の美しさを云つたのだ。月の光りで世界は美化せられてゐるが、座にゐる人には美しい顔が無いのだ。月の美を言はずして月の美になつてゐる。反射描法である。（『芭蕉俳句研究』幸田露伴）

と見られる。ただ、「うつくしき貞もなし」は単に醜貌をいったのとは異なり、「醜い現実の人々の顔を描いて、月の美を想はせたと解する説はゆき過ぎで、さうではなく身辺をふりかへつてみると、一座に美しい顔もなかつたといふその場の自然な感じであると思ふ」（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇）という見方が穏当であろう。前の二案の幻想美に不満だった芭蕉は、空想を排して眼前現実の場に材を求め、やや諧謔的にぶっきら棒な表現に仕立てたのである。

これとは別の見方として、前の二案の謡曲趣味の延長線上にこの句を置いて、

彼は大胆に、美女の能面を引きはずす。シテの世界を棄てて、ワキの直面（ひためん）の世界に移る。それが「座に美しき貞もなし」であり、ワキは素面のまま脇座に控えることによって、シテである月光の美しさの引立役になる。……

素面であり、ありのままの顔なのであって、とくに「現実の醜さ」ではない。……稚児や美女のような扮装者でなく、ただ素面のままであることが、月光の美を引き立てるのである。最初から能がかりの発想であったこの句は、最後に幻想世界を脱しても、能がかりであることを脱したわけではない。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

という山本健吉氏の説もあり、同氏は「この句の推敲過程のうちに、句の甘みやねばりを去って軽みを得ようとする、後の芭蕉の主張の萌芽を見出だしうるように思う」（同上）ともいっておられる。

数次にわたる改案の過程で芭蕉が一貫して追求したものについては、尾形仂氏の説に聞こう。

それは、名月の艶の中にただようさび、あるいは内に艶を含んださびの色の、過不足なき形象化とでもいったらよかろうか。「児たち並ぶ」の初案は、それを、縁に立ち並んだ児たちの華麗な姿と、「堂の縁」が暗示する古びた大寺の森厳静謐の気との対置によって表現しようとしたものにほかならない。そして「七小町」の幻想は、古寺と稚児との静的な対照を通してとらえようとしたさびと艶との照合を、小町という一人の女性の恋の艶姿から衰老の姿態に至る変化の中に流動的にとらえ直そうとしたものにほかならなかった。定稿はそれを、心の艶を内に秘めた老いの姿によって、みごとに形象化している。初案では対置、再案では転換という形で、別々に分離していた艶とさびは、ここに至って初めて一体のものとなる。名月の幻想を追いあぐねて、フッと現実の一座を見まわした無意識の瞬間の中から、いわば〝かるみ〟の形でこの達成をもたらしたものは、その健康の不調にもかかわらぬ、〝ものの見えたる光〟への追求のねばり強さであろう。（『松尾芭蕉』）

「うつくしき貞もなし」が幻想美を脱却した果てにたどりついた一工夫であり、それが晩年の軽みへの志向を示すものであることは疑いあるまい。ただ私は、この表現に詩的な豊かさを余り感ずることが出来ず、従って「佳句と思うし、彼の名月の句では第一等の作と思える」（山本氏『芭蕉』）といった高い評価には首をかしげざるを得ないのである。

芭蕉自身、加生宛の書簡で「なき同前の仕合にて候」といっている。句が無かったも同然の始末だというのは「俳諧

的謙辞」（尾形氏）の面も幾分かはあろうが、それだけではなく、句作の時の身体的条件の悪さから、思うような表現に到達出来なかったことを自ら認めた正直なところではなかったかと思う。尚白との両吟を名月当夜の作と見る向きもあるが、前掲の加生宛の文言に見えるように、この日は付合など出来る健康状態ではなかった。余り隔らない時ではあったろうが、両吟は後日の作であろう。

四條の川原すゞみとて、夕月夜のころより有明過る比まで、川中に床をならべて、夜すがらさけのみ、ものくひあそぶ。をんなは帯のむすびめいかめしく、おとこは羽織ながう着なして、法師老人ともに交、桶やかぢや（ママ）のでしごまで、いとまえがほにうたひのゝしる。さすがに都のけしきなるべし

617　川かぜや薄がききたる夕すゞみ　（己が光）

九月六日付曲水宛書簡・卯辰集・泊船集・三冊子・蕉翁句集

夏季（夕すゞみ）。

語釈　**○四条の川原すゞみ**　「四条の川原涼み」。四条河原は、鴨川と京の四条通が交わるあたりの総称であるが、夏の風物詩として著名な四条河原の納涼は、祇園会の神輿が四条寺町の御旅所に移っている六月七日から十八日にかけて、三条以南松原以北の河原で催された。『日次紀事』六月七日の祇園会の条に、

凡自今夜至十八日夜四条河原水陸不漏寸地並床設席。而良賤般楽。東西茶店張挑燈設行燈。恰如白昼。是謂涼。其中至十三日夜殊甚。是因夜宮也。

とあり、河原の随処に水茶屋の涼み床が設けられ、見世物・演芸・競戯の小屋が軒を連ねて賑わった。これらの催しには祇園新地や四条河原芝居町の茶屋や興行主が関与していた。「夏しりがほにゆるり国民　正朝　かけ作り河原おもてに見渡して　宗房」（『一葉集』）「Cauara.」（『日葡辞書』）。**○夕月夜のころより有明過る比まで**　「夕月夜の頃より有明過ぐる比まで」。夕月の頃から夜

が明け離れる頃まで一晩中。夕月のかかる月の初旬から、有明月の頃即ち月の下旬までと解する説もあるが、句を隔てて「夜すがら」へ続く文脈から見ておかしく、六月十八日までという事実にも即していない。「夕月夜」は「夕月」に同じ。既出（Ⅱ*332*）。この「有明」は夜の明けかける時をいう。それが過ぎる頃だから、夜が明け離れる頃と見てよい。「ありあけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」（『古今集』巻十三、壬生忠岑）。**○川中に床をならべて**　「川中に床を並べて」。「床」は、河原に張り出した板張りの涼み台。川の中にあるわけではないが、水に臨んでいるので「川中」といった。「川中の根木によころぶすゞみ哉　芭蕉」（『炭俵』上）「タマシキノミヤコノウチニ棟ヲナラベ、イラカヲアラソヘル、タカキイヤシキ人ノスマヒハ」（『方丈記』）「**Cauanaca.**」「**Yucauo caqu.**」「**Iracauo naraburu.**」（『日葡辞書』）。**○夜すがらさけのみ**　「夜すがら酒呑み」。「夜すがら」は、一晩中。「夜すがらかたり参らせんと、庵にいざなひ入にける」（『嫗山姥』第四）「**Yosugara.**」（『日葡辞書』）。**○ものくひあそぶ**　「物食ひ遊ぶ」。「紫蘇の実をかますに入るゝ夕ま暮　珍碩　親子ならびて月に物くふ　同」（『ひさご』）。**○をんなは帯のむすびめいかめしく**　「女は帯の結び目厳しく」。河原で遊ぶ女たちは帯の結び目をきちんとして。この帯の結び方は、必ずしも所謂「お太鼓」とは限らないであろう。因みに、堅気の女性は帯を後で結び、玄人は前で結ぶ。「やよ見たか祇園あたりのはるの空　少才　うしろ帯して塗笠編笠　似春」（『談林俳諧』）「かたやこしにはしきし・たんざくやうのつぎを、たふしたをびをむすびめだかにしなし」（『田夫物語』）「**Vobi.**」「**Musubime.**」（『日葡辞書』）。**○おとこは羽織ながう着なして**　「男は羽織長う着なして」。男たちは裾の長い羽織を着こなして。「羽織」は既出（Ⅰ*116*）。当時羽織は専ら男の着るものであった。人目を意識した伊達な風俗である。「おとこ」は「をとこ」の仮名ちがい。「東岸西岸の柳の髪は長く乱るゝとも」（謡曲「東岸居士」）「なほしばかりをしどけなくきなし給て」（『源氏物語』帚木）「**Nagô.**」「**Qinaxi, su, aita.**」（『日葡辞書』）。**○法師老人ともに交**　「法師老人共に交はり」。坊さんや年寄りが一緒にまじり合い。若い華やかな男女のほかに、法師・老人といった地味な人々も居るのである。「交」は「交り」とも訓める。「里人を相待つところに、老人夫婦きたれり」（謡曲「高砂」）「夏日の納涼は扇一本にして世上に交る」（『続猿蓑』下、支考発句「帷子の」前書）「**Rôjin. Voita fito.**」「**Tanin ni majiuaru.**」（『日葡辞書』）。**○桶やかぢやのでしご**　「桶屋鍛冶屋の弟子子」。「桶や」は、桶造りを生業とする家。「かぢや」は、金属特に鉄などを打ちきたえて、刃物や鋤鍬を造ることを業とする家。それらの家で下働きをする小僧・徒弟が「でしご」である。「車やはいつか桶やに成替り　海老をばうらで鮓や売らん　重利」（『鷹筑波』第五）「立寄ればむつとかぢやの暑かな　沾圃」（『続猿蓑』下）「弟子子といへば我子も同然。けふに限て寺入したは、あの子が業か母御

の因果か」(『菅原伝授手習鑑』第四)「Voqeuo yŭ.」「Cagiya.」「Dexi.」(『日葡辞書』)。○**いとまえがほにうたひのゝしる**　「暇得顔に歌ひ罵る」。さも暇のありそうなのんびりした様子で歌い騒いでいる。「業をばなさで暇ありげに夜ゝ来るは不審なり」(謡曲「鵺」)「配所にて干魚の加減覚えつゝ　釣雪　哥うたふたる声のほそ〴〵　舟泉」(『あら野』員外)「ものくひ、さけのみ、のゝしりあへるに」(『枕草子』二十五段)「Itomauo cô, l, môsu.」「Vtai, ô, ôta.」「Nonoxiri, u, itta.」(『日葡辞書』)。○**さすがに都のけしきなるべし**　何といっても都だけのことはある賑やかな情景だ。「べし」は、芭蕉が時に用いる「けらし」と同様に、語調をやわらげる為の表現で、実質は「けしきなり」の意味である。○**川かぜ**　「川風」。鴨川の水面を吹き渡る涼風。「植竹に河風さむし道の端　土芳」(『続猿蓑』下)「Cauacaje.」(『日葡辞書』)。○**薄がききたる**　「薄柿着たる」。「薄がき」は、薄柿色の着物。ここは帷子であろう。江州高宮産の生平に、よくこの染色が用いられたという。「此世の縁は薄柿の帷子たかくねぢからげ」(『鑓の権三重帷子』下)「Vsugaqi.」(『日葡辞書』)。○**夕すゞみ**　「夕涼み」。

大意　川風がいかにも快い。薄柿色の帷子を着て夕涼みする人の姿が涼しげに見える。

考　「川原涼み」(九月六日付曲水宛書簡)「四条河原涼」(『卯辰集』)等の前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』にも『己が光』と同文の前書を付している。曲水宛書簡は元禄三年筆と推定されるもので、それに先立つ元禄三年八月筆の十八日付加生(凡兆)宛書簡(『一葉集』所収。原簡は伝わらない)には、

当河原涼の句、其元にて出かゝり候を、終に物にならず打捨候を、又取出し候。御覧可被成候。

と述べてこの句を示している。これによると、六月に凡兆亭に滞在していた間に句案が浮んだがまとまらずに捨てて置いたものを、八月半ばになって又取出して完成させたのであった。凡兆亭滞在は丁度四条河原の涼みの時期に当っており、芭蕉もその賑わいを見に行って想を得たのであろう。涼みの句である以上、想を得た時期からしても夏季の句なのは当然であるが、ここでは完成した時を規準にして八月半ばの此処に配した。なお、元禄五年九月五日付膳所の昌房宛去来書簡(『俳諧穐扇録』所収)によると、去来が『己が光』の長い前書を昌房作と誤解し、「をんなは帯のむすびめいかめしく、おとこは羽織ながら着なして」のところを、「女は帯手ぬぐひいかめしく、男は羽折をかしうきな

して」と変えようとし、後で芭蕉の前書と知って慌てて板元の井筒屋に変更しないように言い遣わしたことが見える。『己が光』の撰者は大坂の車庸であるが、膳所の珍碩が後援して去来の監修を仰いだらしく、その間にこのような誤解が生じたようである。件の前書の原物は芭蕉の真蹟を昌房が掛物に仕立てて所蔵していたものという。許六の『泊船集書入』に初五を「川風に」としているのは拠る所を知らない。

『三冊子』には、「すゞみのいひやう少し心得て仕たり」という芭蕉の語を伝えており、「薄がき」の帷子の涼味が夕涼みの感じをよくあらわしていることに、作者は自信を持っていたようである。「薄がきたる」が自分の姿か他人の姿か、人によって見方が分れ、味わいもちがって来る。河原涼みの賑やかさを描いた前書からの続き具合を重視すれば、雑踏する人々の中の薄柿を着た人に特に目を留めたものと見られよう。句は前書の延長である要はなく、むしろ対照的に句を際立たせる方が良いという考え方も一理あるけれども、この句の「薄がきたる」という表現は、自身の事をいったにしては客観性が強過ぎるように思う。やはり他人の姿として、その涼味をこの場に相応しいと眺めているものと見たい。元禄八年正月廿九日付許六宛去来書簡によれば、この「川かぜや」の句は、既に尚白の句に「帷子は浅黄きて行清水哉」（『あら野』『其袋』等所収）というのがあった為に、芭蕉の判断によって『猿蓑』から除かれたという。

618 白髪ぬく枕の下やきりぐす（泊船集）

江鮭子・蕉翁句集・奥の枝折

秋季（きりぐす）。

語釈 **○白髪ぬく枕の下や** 「白髪抜く枕の下や」。寝床で枕に頭をもたせ、持った鏡に顔を映して白髪を抜いているさま。その枕の下の方から、こおろぎの音が響いて来るのである。「や」は、詠嘆の切字。「老をまたずして鬢先におとろふ／行年や親にしらが

をかくしけり　越人」（『あら野』巻七）「Xiraga.」（『日葡辞書』）。

【大意】寝床で白髪を抜いている、その枕の下で、こおろぎが寂しげに鳴いていることよ。

【考】元禄三年九月上旬の自序がある之道の撰著『江鮭子』に収められた芭蕉・之道・珍碩の連衆による半歌仙の発句として見えるのが初出である。その自序によれば、之道はこの年の中秋に大坂から湖南の地に出て来たのであって、同年九月六日付曲水宛芭蕉書簡に、

　珍夕ひさご此かた上達、比えの山にぼくりはかせ候。御油断被成まじく候。

　甘塩の鰯かぞふる秋のきてと中第三致て、我を驚しをり候。

とある「甘塩の」の付句は、右の半歌仙の第三である。従って九月六日までに成ったことは確かで、「入日をすぐに西窓の月」という之道の脇の趣からすれば、九月に入ってから義仲寺の草庵での作と考えてよかろう。『江鮭子』は初出本ながら、発句の初五を「白髭ぬく」と誤っているので、『泊船集』を底本とした。『芭蕉句選』に「白髪ぬく机の下や」とするのも、その拠る所を知らない。

　寝つかれぬままに、夜床の枕に白髪を抜いている老情を材にしている。「きり〴〵す」は表現通り「枕の下」でなくとも、床下や部屋の隅で鳴いているものが枕の下に居るように聞えるとしてよいが、その鳴く音が秋の深まりを思わせ、老いの寂寥に響いて行く感じは、正に寂びの世界というべきであろう。典拠として「きり〴〵す夜さむになるをつげがほにまくらのもとにきつゝなく也」（『山家集』上）「今日斗ノ命、枕ノ下ノ蛩ト共ニ哭明シテ」（『海道記』木瀬川の条）等が古くから引かれるが、特にこれらを意識したかどうかは兎も角、中七下五の伝統的詩情に対して、上五の「白髪ぬく」で俳諧になっていることは確かである。芭蕉自身の或る日或る時の姿と見るべく、それが「きり〴〵す」の持つ寂しい季感と滲透して、好箇の境涯の句となった。夜床で白髪を抜く不自然さを考える向きもあるが、寝つけない所在なさに燈をかき立てて手鏡などに映して白髪を抜くことは、普通にあり得ることではあるまいか。

619 **稲妻にさとらぬ人のたつとさよ**　（九月六日付曲水宛書簡）——己が光・泊船集・蕉翁句集

稲妻にさとらぬ人のたふとさよ　（浮世の北）——やどりの松

秋季（稲妻）。

語釈 **○ある智識のゝ玉ふ**　「或る智識の告玉ふ」。「智識」は、高徳の僧を指す仏語。「善智識」ともいう。誰のことかは不明。「の玉ふ」は、「いふ」の敬語で、「告り給ふ」の約音である。「玉」は宛字。昔は異なる語の間でも、この場合のように上の「の」を承けて「ゝ」で間に合わせる書き方が多かった。「ある僧の嫌ひし花の都かな　凡兆」（『猿蓑』巻四）「楚国の羊飛山に貴き知識のまします由」（謡曲「邯鄲」）「此柳みせばやなと折〳〵にの玉ひ聞え玉ふを」（『おくのほそ道』）「Arufito.」「Chixiqi.」「Notamai, ô, notamaixi.」（『日葡辞書』）。**○なま禅なま仏是魔界**　「生禅生仏是魔界」。生半可な禅の修行、生半可な仏への信仰は、悟りの正道ではなく、とりも直さず「魔界」即ち外道の境涯である、の意。「是」は漢文で物事を説明する時、「……だ」「……である」の意をあらわす字で、これを「コレ」と訓読する。「ゴスの茶碗を売に出さるゝ　翁　なま禅の二階を居間にとぢこもり　沾圃」（『続深川』）「君かくまで魔界の悪業につながれて、仏土に億万里を隔給へば」（『雨月物語』白峯）「Nama.」「But.」「Macai.　……Bup.」（『日葡辞書』）。**○稲妻にさとらぬ人**　「稲妻に悟らぬ人」。転瞬の間に光って消える稲妻によって無常を悟るような浅い境地に居ない人、の意。生悟りでない無心の人をいう。「稲妻」は秋の季語。既出（Ⅱ*306*、*434*）。「過去未来の因果をさとらせ給ひなば、つや〳〵御嘆あるべからず」（『平家物語』灌頂巻）「Satori, ru, otta.」（『日葡辞書』）。**○たつとさよ**　「尊さよ」。「木のなきも　貴山や雪仏　光有」（『毛吹草』巻六）「Tattosa.」（『日葡辞書』）。

大意　稲妻の瞬時の光に無常を悟るような生悟りではなく、無心で居る人の尊いことよ。

考　『己が光』には「ある智識ののたまはく、なま禅大疵のもとひとかや。いとありがたく覚て」と前書がある。曲水宛書簡は元禄三年と推定されるもので、その年秋の作である。『浮世の北』（可吟撰、元禄九年刊）の「たふとさよ」

は語形のちがいだけで内容に変りはなく、推敲関係等考える必要はあるまい。真蹟書簡の仮名書きが最も信頼し得る拠り所となることは自明である。

句と前書だけでは、「如露亦如電」などと稲妻を見ては悟り顔をする野狐禅の徒を諷して、無常の理などには関心もなく、ただ稲妻は稲妻として見ている無心の境地を良しとした道念の表現のように見える。しかし曲水宛書簡のこの句の前には、

此辺やぶれかゝり候へ共一筋の道に出る事かたく、古キ句に言葉のみあれて、酒くらひ逗腐（ママ）くらひなどゝのゝしる輩のみに候。

という文言があり、句の後には「隠・通が守袋に入てとらせ度候」と続けている。つまり珍碩・曲水ら『ひさご』に結集した新人は別として、湖南蕉門の連衆の多くが守旧的な傾向が強く不徹底で、ただ惰性的に俳席を重ねているだけなのを難ずる底意があったのであろう。「隠・通」云々は、隠桂・路通の両人に関することで、芭蕉と路通の疎隔の原因になった茶入紛失事件に関わった二人について、芭蕉の憤りが深かったことを窺わせる。この句を与えて守袋に入れてやりたいというのは、主に路通に対しての言葉らしく、俳風に新しい進展がないばかりか、不徳義な事まで仕出来して逐電した彼に、初心の尊さを教えようとしたのである。稲妻に悟らぬ無心さが、俳諧の初心に通ずるものとしてあらわされているのだ。詩としての価値を云々するような性質のものではなく、こうして見ると、作者の激した感情がもろに出ているように感ぜられる。但し、撰集の中に置かれた場合には、生悟りを弾呵した道念句という面が表に出て来るわけで、そういう鑑賞も可能な仕立て方なのである。

正秀亭初會興行の時

620　月しろや膝に手を置宵の宿（笈日記）

　　月代や膝に手を置宵の程（蕉翁句集草稿）

喪の名残・泊船集
蕉翁句集

秋季（月しろ）。

語釈　○**正秀亭初会興行**　「マサヒデテイショクワイコウギヤウ」。「正秀」は水田氏、通称孫右衛門。膳所の商賈で、伊勢屋町の年寄を勤めたという。俳諧ははじめ尚白に就き、細道旅後の芭蕉に親近して『ひさご』の連衆に名を連ねた。元禄四年には義仲寺無名庵改築の世話などしている。享保八（一七二三）年八月三日歿、享年六十七。「初会」は、その家での初めての俳席をいう。「興行」は、俳諧の付合をすること。「今夕桃隣初会に候間」（無日付許六宛芭蕉書簡）。○**月しろ**　「月代」。月が出ようとする頃、東の空が白みわたること。月の出を待つ心で用いられる。「月しろやむかしに近き須磨の浦　鬼貫」（『花見車』）「Tçuqixiroga miyeta.」（『日葡辞書』）。○**膝に手を置**　「膝に手を置く」。正座してかしこまったさま。下の「宿」にかかる。「月影や拍手もるゝ膝の上　史邦」（『猿蓑』巻三）「大としや手のをかれたる人ごゝろ　羽紅」（『猿蓑』巻一）「Fizauo tatçuru.」「Tada teuo vocanu fito.」（『日葡辞書』）。○**宵の宿**　「宵」は「宵」の異体字。「宵」に同じ。「宿」は、正秀亭を指す。

大意　月が出ようとして東の空が薄明るくなって来た。今宵この家に集うた人々は、皆きちんと膝に手を置き、かしこまって月の出を待っている。

考　「正秀亭興行」（『喪の名残』）「正秀亭初会興行」（『泊船集』『蕉翁句集』）等の前書がある。芭蕉が秋に湖南地方に居たのは元禄三、四年であったが、三年九月廿八日付正秀宛の書簡では、伊賀に赴くに際して滞在中の世話を謝し、「御袋様御懇意忝」などともあって、正秀との交際が既にかなり親密な様子が窺える。これに先立つ七月十日付の同人宛書簡の文面も同様なので、この句の成立が三年秋であることは動かない。最も晩く見るにしても、九月十三夜頃から

二十四日まで湖西の堅田に赴く前に「正秀亭初会」が催されたものと見られよう。この時の俳諧は、『笈日記』に「萩しらけたるひじり行燈」という正秀の脇を録しているだけで、他は伝わらない。

これに関連して、『去来抄』に見える正秀亭での話が注意を惹く。

前二ッにわれし雲の秌風　トやらんなり　正秀

中れんじ中切あくる月かげに　去来

正秀亭の第三也。初は、竹格子陰も　月澄てト付けるを、かく先師の斧正し給へる也。其夜共に曲翠亭に宿す。先師曰、今夜初正秀亭に会す。珍客なれば、ほ句は我なるべしと兼而覚悟すべき事也。其上、ほ句と乞はゞ、秀拙を撰ばず早ク出すべき事也。一夜のほど幾ばくかある。汝がほ句に時をうつさば、今宵の会むなしからん。無風雅の至也。余り無興（キャウ）に侍る故、我ほ句をいたせり。正秀忽ワキヲ賦ス。二ッにわるゝと、はげしき空の気色成を、かくのびやか成第三付ル事、前句の　をしらず、未練の事なりと、夜すがらいどみたまひける。去来曰、其時、月影に手のひら立る山見えてト申一句侍りけるを、たゞ月の殊更にさやけき処をいはんとのみなづみて、位をわすれ侍ると申。先師曰、其句ヲ出さば、いくばくのましならん。此度の膳所のはぢ、一度すゝがん事をおもふべしと也。（先師評）

とある一節であるが、「今夜初正秀亭に会す」とありながら、正秀の脇は『笈日記』に伝える「萩しらけたる」の句とちがっている点に、不審を感ずる向きもあるかも知れない。しかし、これは去来にとっての「正秀亭初会」で、芭蕉とは別と考えれば、問題は氷解する。去来が正秀亭を初めて訪ねたのも元禄三年秋のことではあったろうが、芭蕉の初会はこの一件より前のことと考えてよい。

下五を「宵の程」とした『蕉翁句集草稿』には、「此句白船（ママ）に、宵の宿と有」と注記がある。「宵の宿」という句形を知りながら、敢えて「程」としたについては、真蹟などの裏付けがあったかとも思われるが、真蹟のことには触れ

ていないので、この点は確言し難い。作者の自筆の裏付けがない限り、『笈日記』の句形を信ずる外ないであろう。『芭蕉句選』に下五を「雲の宿」、蝶夢の『芭蕉翁発句集』に「宵の内」とあるのは問題にならない。

月の出を待つ一座の様子を描いて、挨拶の意を寓した句である。「膝に手を置」にその場の雰囲気がよく出ている。芭蕉をはじめて迎えた亭主の改まった気分も反映しているであろう。古注の鑑賞に、

今案に、月白や膝に手を置と云詞玄妙也。今や〳〵と待得たる月影に、皆〻心を一にして静り宛膝を糺して向ひたる風情、今見るが如し。呉〻も膝に手を置と云に、其月代の昇る余光に感情限りなく、こぞつて慎み眺むる姿を顕す。誠に名誉の詞と云べき也。……句意、月を待の趣甚深し。……（信天翁『笈の底』）

とあるのは良い。目立った言葉もなく地味であるが、表現に過不足のない佳句である。

堅田にやみ伏て

621　病雁の夜寒に落て旅寝哉　（真蹟懐紙）

病ム鴈のかた田におりて旅ね哉　（枯尾花）

九月廿六日付茶屋与次兵衛宛書簡・猿蓑・泊船集・去来抄・蕉翁句集・横平楽・堅田集

秋季（雁・夜寒）。

語釈　○**堅田**　「カタダ」。今の大津市本堅田。琵琶湖南部最狭部の西岸に位置し、中世近世を通じて漁業や湖上交通の要衝として栄えた。浄土真宗本願寺派の本福寺があり、住職千那は蕉門有数の俳人であった。○**やみ伏て**　「病み伏して」。後述するように、芭蕉は堅田で風邪を引き、病臥していた。「よしあるいはのかたそばに、こしもつきそこなひて、やみふしたる程になん」（『源氏物語』明石）「**Yami, u, ŏda.**」（『日葡辞書』）。○**病雁**　「ビヤウガン」。病んだ雁。雁は秋に北から我が国に渡来し、春にまた北へ帰って行く。「雁」だけでは秋の季語で、「雁の別れ」（Ⅰ*43*）「帰る雁」は春季。俳諧では「雁」「雁」何れも用いられる。「病雁」のよ

み方については、音読説と「病む雁（やむかり）」と訓読する説が並び行われているが、「病ム」と明らかな送り仮名のあるのは『枯尾花』だけで、しかもこれは中七を誤った形であり、他の古い資料は凡て「病雁」「病鴈」と書かれている。当時動詞の終止形連体形は送り仮名を省略する例が多かったけれども、「病む」とよませるつもりならば、もう少し「む」の送り仮名を付した例があるべきであろう。こう考えると、嘗て荻野清氏が『芭蕉講座・書簡篇』で、この句の冷え冷えとした感触に相応しいものとして音読説を提唱されたのに従うのが穏当と思われる。音読説は、荻野氏に先立つ『芭蕉俳句研究』の阿部次郎氏、樋口功氏の『選評芭蕉句集』等にもあった。「むかし堅田の。秋の夜寒に落ては。病‐鴈の旅ねに」（『本朝文選』支考「招魂賦」）「わが里。堅‐田の病‐鴈の夜‐寒をはじめ」（同上、千那「近江八景序」）等の例も、門下の間でのよみ方として参考になる。また、この時代如何に「ガン」が普通語であったにしても、「病む雁（やむがん）」とよむのは最も拙く、「病む」とした場合は「雁（かり）」でなければならない。「鴈……残鴈とは、秋越路に残てわたらぬをも、春かへり残るをも云也。哥の題には残花を夏に出せども、連誹には春に成也。残がんも渡りのこるかりも秋になり、かへりのこる鴈も春に成也。哥には冬わたる鴈も有と申侍り。……鴈字・鴈書皆秋也。鴈塔秋にならず、尺教也。生類にもならず。……鴈陣秋也、生類也。絵に書たる鴈は生類にあらず。句躰によりて春秋の季をばもつなり。腹まだら・ひしくひ・くゞい・大かりがね、みな一類……」（『御傘』）「雲の衣につらなるを。つけ帯（おび）と見なし。月影にひかりわたるを。はくの帯といひ。海辺にゆくを。みなれ竿（ざお）といひたて声をほに上る（あぐ）を。舟ざほなどいひなす。かの蘇武（そぶ）がことつてより。鴈はたまづさをむすびてよみ侍れば。文月の空にとびかけるとも。うちぐもりにちらしかくともいひ。又まゆみのをかとぶを矢文にやとうたがひ。すゞりの海わたるをたが手づさびぞとあやしむやうの心ばへ。かりがねのつらなれるを。書たる文字にも見なしければ。梵字（ぼんじ）はふ字などもいひなし。天門にかけし額（がく）かと見たて。平沙（へいさ）のらくがきにやともいひつゞけ侍る」（『山之井』）「大和本草曰、雁は北土にて子を産む……白鴈、常の雁より小也。北土及武蔵・相模・坂東に多し。……異域にも北土有。鴈の来去、白鴈早く来る。次に鴈金（雁金は鴈より小也。鴈の如くはらまだら也。目ぶち黄也。其外同ㇾ雁。）後に真鴈来る。帰る事は真鴈早し。白鴈遅く帰る。△今按に、鴈と押出して云ば秋也。初鴈・渡る雁勿論、残鴈は黄秋の鴈也。石川丈山が詩に、帰鴈高飛来鴈低といへり。詩人の心を附る所さも有べし」（『滑稽雑談』）「鈴縄に鯉のさはればひゞく也　孤屋｜鴈の下たる筏ながるゝ　其角」（『炭俵』下）「Biŏ.」「Gan. Cari.」（『日葡辞書』）。○**夜寒に落て**「夜寒（よさむ）に落ち（お）て」。「夜寒」は秋が深まって夜の寒さが身にしみる感じをいう季語。「落て」は飛んでいた雁が地上に下りることであるが、病態の表現としての配慮と、近江八景の一「堅田落雁」の連想を誘う意味があろう。「夜さむ　秋也。夜さむき、寒き夜、よを寒み、夜のさ

むき、皆冬也」（『御傘』）「按に、此外に、朝寒、漸寒、うそ寒、則寒、露寒など皆秋也。これらも作意工夫あつて、冬に混ずべからず」（『滑稽雑談』）「きりぐ〜す夜寒に秋のなるまゝによわるか声のとほざかり行」（『新古今集』巻五、西行）「Yosamu. i, Yoruno samusa.」（『日葡辞書』）。○**旅寝哉**　この「哉（かな）」について、今栄蔵氏の『芭蕉句集』では軽い疑問の意を含む用法と見ている。「旅寝をするのかな」と解し得ないことはないが、必然の解ではなく、「旅寝をすることよ」としてよいと思う。

大意　夜空の雁の列から一羽、病気の雁が秋深い夜寒の地上に下りて、思わぬ所で旅寝をするわびしさ。私もそれと同じ境遇だ。

考　「堅田にて」（『猿蓑』『泊船集』）「かたゞにふしなやみて」（『横平楽』）「かたゞにふしやみて」（『堅田集』）等の前書がある。九月廿六日付茶屋与次兵衛（昌房）宛書簡は元禄三年と推定されるもので、文面に、

　昨夜堅田より致帰帆候。……拙者散〻風引候而、蜑のとま屋に旅寝を侘て、風流さまぐ〜の事共に御坐候。

とあって、滞在中の作としてこの句を挙げている。前述したように、芭蕉はこの年九月十三夜頃から堅田に赴き、二十五日夜義仲寺の草庵に舟で帰って来たのであった。

　本位句の底本とした真蹟懐紙は『芭蕉全図譜』に紹介されたもので、料紙の体裁などから書簡の断簡と推定されるという。初めに「落る」と書いた「る」を見せ消ちにして「て」と訂してあるが、これは恐らく推敲といった性質のものではなく、誤筆を正したまでであろう。所載の芭蕉の句三句は何れも『猿蓑』所収、他に去来・加生・正秀・珍夕の句が並んでおり、元禄三年の執筆と思われる。『横平楽』（治天撰、享保二年刊）所収のものは、撰者所蔵の真蹟に拠ったというから、現存懐紙と似た前書を持つ別点もあったわけである。其角の『枯尾花』に見える異形は、前述の如く杜撰な誤りとおぼしく、信用し難い。堅田での作という先入主から、このような異形を生じたのであろう。

　芭蕉は堅田では千那の住持する本福寺に滞在したであろうから、「蜑のとま屋に旅寝を侘て」（書簡）とあるのは、漁港堅田を背景にした風雅の見立に過ぎない。其処で風邪を引いて寝込んだ自らを「風流さまぐ〜の事共」といった

のも、態々後の月を物好きに眺めに来て病臥する始末になった成行を、自嘲気味に述べているのである。その挙句に詠んだこの句では、凡て「病雁」の身の上の事になっていて、句の表面に作者は姿を現わさないが、それだけに句中の「病雁」は芭蕉と一体になり、病雁が芭蕉か、芭蕉が病雁か、分ち難い緊密さを以て、すぐれた境涯句としての象徴性を獲得しているといえよう。こういう句では、芭蕉が実際に列を離れて地上に下りる孤雁の影を見たかどうかは問題にならない。ただこの際の作者の心象風景を象徴するものとして、「病雁」のイメージが念頭に上ったと見れば足りるのである。「孤雁不二飲啄一、飛鳴声念群、誰憐一片影、相二失万重雲一」（杜甫「孤雁」）の影響を云々する説もあるが、確言はむずかしいであろう。「孤雁」は屢々用いられる語であるが、「病雁」は恐らく芭蕉独創の語であり想であるといってよいと思う。渡り鳥たる雁は、蘇武の故事等も手伝って「旅」との連想が密接なもので、「旅雁」「賓雁」の語もあり、下の「旅寝」と響き合う味も見逃せない。

　そういう鑑賞からすると、「夜寒に落て」を境にして主語が転換し、上の主語は「病雁」、下の「旅寝」の主語は作者たる「我」だという解釈は受入れがたいことになる。このような見方は、「病気をした雁が夜寒の時分に空より鳴き乍ら落ちて来た、其声を聞き乍ら自分は侘しき旅寝をしてゐる」（内藤鳴雪『評釈』）という解など、夙くからあったのであるが、宮本三郎氏の「芭蕉の助詞「て」の用法」（『蕉風俳諧論考』）では、『おくのほそ道』の「田一枚植て立去る柳かな」と当面の句の「落て」を同一視して文法説を展開しており、それを支持する向きもある。しかし、「田一枚」の句の「て」の用法と、この句の「落て」とは同じではない。「病雁」の句に於いて、「病雁が夜寒に落ち、我は旅寝す」と解しては、前述した病雁と芭蕉と一体化した渾然たる味わいが生まれて来ないのである。雁と旅の親近性からしても、「旅寝」は雁のことでなければならず、句は地上に下りた病雁の旅寝の体として、全体が堅田で病臥した芭蕉の境涯の象徴と化する。そのように見てはじめて、この句の「格高く趣かすか」（『去来抄』）な味が生きて来るのである。

……自分を雁に喩へ、又雁を自分に喩へたのではない。芭蕉と雁とはすでに一体となつて居る。旅寝の枕に雁の声を聞いた時、芭蕉のわびしい心はそのまま雁の心に通じて行つたのだ。その細みとしをりとを味はふべき句である。知性的な比喩などと同一視してはならない。（『新講』）

という潁原博士の指摘は、確論というべきであろう。『去来抄』に見える次の句との比較論は次条で扱いたい。

かたゞの浦に草枕して

622 海士の屋は小ゑびにまじるいとゞかな（真蹟小色紙）

海士の屋の小海老に交る竈馬（イトヾ）哉（帆懸舟）

海士の屋は小海老もまじるいとゞ哉（軒伝ひ）

真蹟懐紙・猿蓑・泊船集・去来抄

秋季（いとゞ）。

語釈 **○かたゞの浦** 「堅田（かたゞ）の浦（うら）」。前述の如く、堅田は琵琶湖西岸の漁港である。**○草枕して** 「草枕」は「旅」の枕詞であるが、やがて「旅」や「旅寝」の意に用いられるようになった。既出（Ⅰ216等）。ここはサ変動詞化したもので、「旅寝して」と同じ。「道とほく日数すくなければ、夜に出て暮に草枕す」（「更科姨捨月之弁」―『芭蕉庵小文庫』）。**○海士の屋** 「海士の屋（あまのや）」。漁夫の家。「海士」は既出（Ⅰ154）。「難波人葦火たく屋のすしてあれど己が妻こそ常めづらしき」（『万葉集』巻十一）「YA. i, Iye. …… Yauo tatçuru.」（『日葡辞書』）。**○小ゑび** 「小海老（こえび）」。小さい海老。「ゑ」は「え」を用いるのが正しい。「五六十海老つゐやして鯊（ハゼ）一ッ之道」（『続猿蓑』下）「Yebi.」（『日葡辞書』）。**○まじる** 「混る（まじる）」。既出（Ⅰ16）。**○いとゞ** 「おかまこおろぎ」というキリギリス科の虫。翅がなく、皮膚は固くて光沢がある。触角が長く、後脚でよくはね、夜台所などに出て来て食べ残しをあさる。こおろぎといっても発音器官がないので鳴くことはない。昔はこおろぎと混同されて、一物二名とした書もある。「古師説に竈馬をいとゞと云よし也。又管巻と云虫ともいへり。……又蟋蟀の事共云。是秋の虫声のいとゞ淋しきと云心より竈馬・蟋蟀の類ひを言といへり」

（『滑稽雑談』）「啼やいとゞ塩にほこりのたまる迄　越人」（『猿蓑』巻六、几右日記）。

大意　堅田の漁夫の家では、獲り立ての小海老にまじって、いとどが跳びはねていることよ。

考　『泊船集』に「堅田にて」と前書がある。『猿蓑』では「病鴈」の句の次に並べられ、「病鴈」の句の前に「堅田にて」とあって、その前書は「海士の屋」の句にもかかると解し得る体裁になっているが、前の句と同じ時堅田での作であることは、当面の句の真蹟小色紙の前書によって確実視される。『帆懸舟』（松笛撰、元禄四年刊）『軒伝ひ』（露川撰、宝永四年刊）等の句形は誤伝であろう。

堅田の浜の漁家での属目と思われる。とって来た小海老が大笊の中か莚の上にあるのへ、いとどが飛び込んではね廻っているところを描いたので、『笈の底』の指摘するように、いとどという虫の形状が小海老に似ているところから、動かぬ配合となっていると見てよい。そう考えれば、「いとゞ」を鳴くこおろぎとする解釈は採れぬことになる。ともあれ、「従来の和歌・連歌的世界ではもちろん、俳諧でもなかなかつかみ得なかった、新しい情景が把握されている」（『古典文学全集・松尾芭蕉集』井本博士）ところがこの句の価値であろう。庶民の生活詩的な味わいは、蕉風の新しい方向を示唆するものでもあった。

堅田での二句に関する『猿蓑』編輯時の話柄は、『去来抄』に伝えられ、句の内容を理解する上でも重要である。

病鴈のよさむに落て旅ね哉　ばせを
あまのやは小海老にまじるいとゞ哉　同

さるみの撰の時、此内一句入集すべしと也。凡兆は、病鴈はさる事なれど、小海老に雑るいとゞは、句のかけり、事あたらしさ、誠に秀逸句也と乞。去来は、小海老の句は珍しといへど、其物を案じたる時は予が口にもいでん。病鴈は格高く趣かすかにして、いかでか爰を案じつけんと論じ、終に両句ともに乞て入集す。其後先師曰、病鴈を小海老などゝ同じごとく論じけりと、笑ひ給ひけり。（先師評）

『猿蓑』に於いて新鮮な写実感覚を買われて一躍頭角をあらわした凡兆は、小海老の句の表現の働き（かけり）と題材の珍しさに着目して、これを入集しようとし、重厚な句風の去来は、「格高く趣かすか」な病雁の句を、芭蕉以外の者の企て及ばぬ所として、これを入集しようとした。二人の選択はそれぞれの資質に基づき、二句の傾向の差を示していて面白いが、芭蕉は自句についてどんな考えを持っていたのであろうか。芭蕉が二句の選択に迷い、特に最初のうち病雁の句に自信が持てなかったので、撰者達に任せたという見方もあるが、病雁の句のような高次の絶作に、作者が自信を持てない筈はなく、その点は後で「病鴈を小海老など〻同じごとく論じけり」といった芭蕉の言葉でも明らかであろう。芭蕉に迷いがあったとすれば、小海老の句の新しさが『猿蓑』に於いて宣揚しようとした「軽み」への志向に叶うものである一方、幽寂重厚な病雁の句も捨て兼ねた点ではなかったか。一門の統領として、病雁の句は敢えて『猿蓑』に入れなくても、芭蕉の声価に増減はないが、蕉門の規模を示す意気込みで出そうとしている撰集だけに、入れたくもある。そこで選択を去来・凡兆に任せることにしたのではないかと思う。そう考えれば、病雁の句を小海老とは段ちがいとする後での言葉とも辻褄が合うのである。この『去来抄』の記事は、病雁の句を高しとする去来の立場からの曲筆があるような考え方もあるが、後の芭蕉の言葉があったからといって、去来は別に自分が勝ったと言っているわけではあるまい。撰者達の議論では、まるで二句が等価値の作のようなのを、芭蕉は可笑しく思っただけのことであろう。実際のところ、小海老の句は元禄三、四年というこの時期に於いてその新鮮味が買われただけで、病雁の句と並べた場合の格のちがいは論ずるまでもない。なお二句を一組のものと見る山本健吉氏の説も面白いので左に引用しておく。

　これは堅田の漁家での属目である。漁家での作らしく構えた「病雁」に対して、これは実際に漁家での作である。この二句を一丸としたところに、芭蕉が想い描いた行平卿の風流があったと言ってよい。だがこの句は、海士の家の佗しさを抜いた、客観句である。芭蕉は「病雁」をすぐれているとしながら、なおかつ、「海士の家」

がそれとは傾向的に拮抗しうる句と考え、……「病雁」に欠けた一面を、「海士の家」が表現しえているのを感じた。

……芭蕉が「海士の家」と言ったとき、それは純客観風景の上に、古典的発想がかぶさって来ていることは注意すべきで、それは「須磨の蜑(あま)の矢先に鳴くか郭公」の場合と同様である。象潟で「蜑の苫屋に膝をいれて」と文に書いたのも、同じ気持が働いている。すなわち「もしほたれつつ侘ぶと答へよ」（在原行平）と言った、流離の感慨である。ただし、行平卿的な「侘び」は、この句には盛られないで、「病雁」の方で生かされた。その意味で、この二句は一つの詩の動機が二分して現されたものと解してよい。そのことが、最初芭蕉をして、一句は入集を遠慮しなければならぬと考えさせたのであろう。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

半田良平氏がこの句の微細な観察を賞しつつ、「海士の屋は」の初五について、次のように説かれたのも肝要な点と思われる。

……この句は、『蜑の屋は』〔と〕大きく打ち出して来て居る為め、これを読む者の想像は、単に笊の中の小海老や蚌に局限されずに、その蜑の家の侘しい有様から、庭につゞいて展(ひら)けてゐる湖水にまで及んで行つて、おのづから広々した情景が暗指させられる。

この初五の説明的とも見られる概念句と、中七座五の描写で行つて居る客観句とが、『は』一字によつて渾然と融合して居る点は、この句の生命である。（『芭蕉俳句新釈』）

この「は」は、散文的には「に」であるところに用いて、詠嘆的な感情を添えているものだと思うが、これによって句の場をひろげる働きをしているのは、半田氏の指摘の通りである。

623

鳫聞に京の秋におもむかむ

（季秋末付怒誰宛書簡）

秋季（鳫・秋）。

語釈 ○**鳫聞に**　「鳫聞(かりき)きに」。「鳫」は「雁」に同じ。「雁の声を聞く為に」の意。「帰る」という言葉が添わなければ、雁は秋季になる。「病雁」（Ⅲ *621*）参照。ここは「ガン」ではなく「カリ」と訓むのが良い。「雁きゝてまた一寐入する夜かな　雨桐」（『はるの日』）。○**京**　「ミヤコ」。○**おもむかむ**　「赴(おもむ)かむ」。都の方へ向って行こうとする意志を示す。「武江におもむく旅亭の残夢」（『猿蓑』巻四、乙劦発句「寝ぐるしき」前書）。

大意　雁の声を聞きに、秋の京まで行って来るとしましょう。

考　怒誰宛書簡には「拙者堅田より一昨日帰帆仕候」とあり、「病雁」の句の条で触れた茶屋与次兵衛宛書簡と揆を一にしているので、元禄三年九月筆であることは疑いを容れない。堅田から義仲寺の草庵に帰った二十五日の翌々日二十七日に書かれたものである。「少用の事御座候而上京仕候間、近日罷出候而得貴意候」ともあり、芭蕉はこの日所用で上京する予定だったので、膳所の怒誰にはそのうちお目にかかりたいと言っている。上京の件がこの句の内容と関連することは言うまでもない。この書簡は勝峯晋風編『芭蕉書翰集』（岩波文庫）に西村燕々氏所報として初めて紹介されたもので、原簡は伝わらない。句は当時の撰集類に見えないが、書簡の内容からして、信憑性には問題のないものである。本書では、書簡は原簡の伝わるものに限って出典として採録する方針をとったが、怒誰宛の場合は近代の出版物に紹介されたものが唯一の出典なので、原簡の伝わらないことを茲にことわっておきたい。

句中の「雁の声」と「京の秋」の背景には、和歌の伝統的情趣がひろがっている。『俳句に見る芭蕉の藝境』で富山奏博士は、「うきことを思つらねてかりがねのなきこそわたれ秋のよな〳〵」（『古今集』巻四、躬恒）「雁なきてふく風

さむみから衣君まちがてにうたぬよぞなき」（『新古今集』巻五、貫之）「よこ雲の風にわかるゝしのゝめに山とびこゆるはつかりの声」（同上、巻五、西行）等の歌を挙げて、「京の秋」に「鳫聞に」赴くとは「そうした京の和歌的伝統の風雅の空気に浸りに行くことであった」といっておられる。この二つの言葉には、和歌的伝統の情趣が纏りついていて、読む者の懐古趣味を誘うのである。芭蕉の出京はどうやら俗用であったらしいが、それを宛かも風雅の目的であるかのように言い做したところが、この句の俳諧であろう。発想が単純で、即興以上に出たものでない為に、どの集にも入れられなかったのであろうが、余情掬すべきものを持っている。

624　桐の木に鶉啼なる塀の内　（真蹟懐紙）

猿蓑・泊船集・三冊子・蕉翁句集・俳諧古今抄

秋季（鶉）。

語釈　**○桐の木に**　「桐の木」は、ゴマノハグサ科の落葉喬木。高さ十メートル、周囲一メートル以上になり、箪笥・長持等の用材として珍重される。葉は掌状で大きく、「桐一葉」「一葉散る」は秋の季語であるが、「桐」だけでは季を持たない。「一葉」（Ⅰ123）参照。「に」の所に小休止がある。「方〱に十夜の内のかねの音　芭蕉　桐の木高く月さゆる也　野坡」（『炭俵』上）「Qirino qi.」（『日葡辞書』）。**○鶉啼なる**　「鶉啼くなる」。「鶉」はキジ科の鳥。ずんぐりした体形で、山野の草の間に棲む。ここの鶉は桐の木にとまっているわけではない。秋の季語。「なる」は「終止形プラス伝聞推定の「なり」をもって聞コエルという聴覚を表わす擬古的表現」（尾形仂氏『松尾芭蕉』）である。「鶉の床　夜分にあらず。新式を見るに、夜分にあらざる物の所に、うづらの床とばかり出せり。此道理を了簡するに、余の鳥とかはりて、さらに空をとびかけらず。ひるも草の中にのみあるにより、此とりばかりを床としても夜分にあらずとさだめたると見えたり。しかれば諸鳥の床はみな夜分とするべし。また無言抄をみれば、うづらのこ夜分にあらずといふ下に、けだ物の床同前と侍り。是は新式にみへぬさし合なれば、皆夜分と定度侍る」（『御傘』）「うづらは尾のこみじかき鳥なれば。一声はあまりおもなしとも。おはなくてしりごゐながしともいひ。ちゝくわいとなく声を。父にも乳にも

そへ。又よくにふける。夜もふけるなどもいひかけ。うづらぐさといひては。鷹人のふみたつる心ばへをいひ。うづらまきとしては。せこのたちつけなどによす」(『山之井』)「八雲御抄云、鶉、秋物也。実行歌合に、夏は不鳴とて難ず。可為秋物也。……国[俗]鷹狩には多狩之也。……今按るに、和俗の鶉の子或は鶉を捕へて鶉籠に養て、初秋の頃ほひより其鳴声の好悪を選て愛す。是等の人相集て、七八月の間闘鶉[と]云を催し、其好声の者は金銀幾多に是を売買せり。又其餐とする時は風味美にして、貴戚猶是を賞す」(『滑稽雑談』)「鳴声のつくろひもなきうづら哉　鼠弾」(『あら野』巻六)「**Vzzura.**」(『日葡辞書』)。〇**塀の内**「塀の内」。この「塀」は土塀か板塀か、何れにせよ大屋敷の体である。「入月に夜はほんのりと打明て　利牛　塀の外まで桐のひろがる　桃隣」(『炭俵』下)「法度場の垣より内はすみれ哉　野坡」(『炭俵』上)「**Feiuo tçucuru, I, suru.**」(『日葡辞書』)。

大意 大屋敷の塀の中には、高い桐の木がそびえ、鶉の鳴き声が聞えて来ることよ。

考 『猿蓑』初出であるから、句の成立は元禄三年秋を降らない。元禄三年筆と推定される九月六日付曲水宛書簡に、

うづら鳴なる坪の内と云五文字、木ざはしやと可有を、珍夕にとられ候。

と見えるのによって、同年秋の作と確定する。「木ざはし」は、木についたまま熟した甘柿のことであるが、「木ざはしやうづら鳴なる坪の内」(「坪」は中庭の意)という形を案じていたところ、之道撰の『江鮭子』に収められた珍碩・之道・芭蕉の三物に、「稗柿や鞠のかゝりの見ゆる家」という珍碩の発句が出てしまった為、同じ表現が使えなくなって案じ替えた事情が明らかである。

桐の木がそびえ、飼鶉の声が聞えるような家は、何れ大きな屋敷であろう。[語釈]に引いた『滑稽雑談』の記事に見えるように、この時代鶉の鳴く音を競って、富者の間にこの鳥が高額で売買されたのであった。解釈については、先ず支考の『俳諧古今抄』の精しい説を見よう。

されば鶉の一章は田荘の酒家といふ題ありて、こなたより其家の富貴を思ひやりたる様なりとぞ。しからば五もじに句を切りて、桐の木やといふべけれど、さいふは桐の木の発句ならん。是は桐にも鶉にもあらず、田家を称

する発句なれば、鵜鳴くなりと句を切りて、塀の内を隔つべきにもあらず。況や鵜鳴くなるとは、句法に古歌の裁入なるをや。今やにの字の働きを評せば、遠く田荘のしら壁を見やりて、其桐の木に富貴を思へばと、爰に心をめぐらすべき也。……是を鵜を体にして、桐は句作の用といはむ。……桐は田家の富貴なる物なり。ましてや其日其家に、此桐は時宜の即興としるべし。（巻之上）

芭蕉から直接聞いたことかどうかは分らぬが、支考によればこの句には「田荘の酒家」という題があったという。つまり田舎の造り酒屋などの豪家のさまを外から思い遣ったのだというのである。この句には切字らしいものがないが、若し「桐の木や」と初五に切字を置けば、桐の木が中心にすわって桐の木の発句になってしまう。この句の中心は桐の木でも鵜でもなく、全体として田舎のそのような豪家を賛めた句だから、中七で「鵜鳴くなり」と切って、下五の「塀の内」との間を隔ててしまうのも不適切である。それらの切字に代る意味で「桐の木に」と置いているのだというわけだ。中七は「野とならばうづらとなりてなきをらんかりにだにやは君はこざらむ」（『伊勢物語』百二十三段）「ゆふされば野辺の秋風身にしみてうづらなくなりふか草のさと」（『千載集』巻四、俊成）等、古歌の裁ち入れと見ており、この句にとって「鵜」は体、「桐」は用で、富貴をあらわす桐を出すことによって、その家に対して挨拶の意を寓しているとも説くのである。切字については、『芭蕉句集講義』の角田竹冷説に、「桐の木やといふと桐ばかりが主となるのでにと為し、啼くなりとすると詰まって来るのでるとして余地を存せしめた」という具体的な指摘もあり、初五の終りに屈折があることは事実であるが、必ずしも「に」を以て切字の代用としたわけではなく、「塀の内」と確かに字を据えて、ここで切れると見るのが最も良いと私は思う。

「鵜啼なる」が古歌の裁ち入れであることは論が無い。俊成の歌は殊にも有名で、鵜が秋の季語とされるに至ったのには、この歌の影響が大きいのである。ただ、背景としての古歌は兎も角、句中の大屋敷の中で鳴いている鵜は、現実の存在としては飼われているものと思われる。また、『三冊子』にはこの句について、

この句いかゞ聞侍るやとたづねられしに、何とやら一様有事におもふよし答へ侍れば、いさゝか思ふ所ありて歩みはじめたると也。（赤雙紙）

という芭蕉と土芳の問答が書き留められている。「何とやら一様有事（ひとさまある）」にしても、「いさゝか思ふ所ありて」にしても、漠然として禅問答めいており、色々の見方がある。『三冊子評釈』に於いて能勢朝次博士は、これを軽みへの志向と見ておられ、山本健吉氏は、それとは逆の「風景に託した抒情詩の世界」（『芭蕉その鑑賞と批評』）であるという。尾形仂氏は、この句の世界について左のように説かれた。

芭蕉が『伊勢物語』や俊成の歌を想起することなしに「鶉鳴くなる」の措辞を用いたと考えることは、きわめてむつかしい。芭蕉が、珍碩の句によって「木ざはしや」の初五を断念したとき、かれの詩想が、眼前の「田荘の酒家」の写実を離れ、かれが現実の中からなかば古歌の世界のものとして聴きとった鶉の声を中心に、その背後にひろがる物語的世界の幻想を追って動いていったのは、けだし当然のなりゆきだったというべきだろう。「桐の木」は、そうした王朝物語の幻想を追った詩心の動きが探り当てたもので、「田荘の酒家」の写実への推敲がもたらしたものではない。

柿が田家のものであり、旧家の富と栄えを象徴するものであるとするならば、桐は逆に、高貴の匂いと凋落（ちょうらく）のあわれを添えるものということができる。……鶉の鳴き声に取り合わされた桐の木からは、葉の落ちつくした凋落の俤（おもかげ）が眼に浮かぶ。『連珠合璧集』『類船集』には、「桐」の引歌として、ともに『新古今集』所収の式子内親王作「桐の葉も踏み分けがたくなりにけりかならず人を待つとなけれど」……の歌をあげているが、そこには、秋風の中で来ぬ人を待ちつつ鶉となって鳴いている女の嘆きと重なり合うものがある。芭蕉が衆人既知の「深草」を出さず、「桐の木」の中にそうした悲愁落魄（らくはく）の匂いと位とをかぎとって「鶉」との照応を完成させたところに、俊成の本歌をいちだんとすりあげた〝俳諧〟の確かさがあった。

初案の「坪の内」を「塀の内」と改めたその「塀」は、現実の世界と幻想の世界との境界をなすものである。上五・中七の落魄の感じからいえば、それは所々崩れかけた築地塀と見るのがふさわしい。一句は、見越しに葉の落ちつくした桐の木を仰ぐ荒廃した築地の中から鶉の声が聞こえてくるといった古典的な景を描いて、その崩れかけた塀の向こう側に、王朝物語に登場してくるような古雅な女性が、世に捨てられた落魄の境遇を泣いているといった幻想の世界をしのばせている。……

土芳が、この改案の句形に対して「何とやら一様あることに思ふ」よしを答えたのも、そうした情景の背後に古典的幻想のひろがりを感じさせるふしのある点をいったものであるべく、この前後、『猿蓑』所収句に「病雁の夜寒に落ちて旅寝かな」「干鮭も空也の痩せも寒の内」「こがらしや頬腫痛む人の顔」など、写実を越えた情調象徴的な句が散見されるのも、この句について「いささか思ふところありて歩みはじめたる」と漏らした芭蕉の志向と無関係ではなかったろう。（『松尾芭蕉』）

右の説は写実味よりも古歌を背景にした幻想性を重視しており、土芳との問答も、情調象徴的な志向を示唆したものと見ている。十分傾聴に値する見方ではあるが、私はこの句の表現の持つ一種の「乾いた味」に強い印象を持つ。これを山本健吉氏は「そっけなさ」と表現し、それに基づいて「俊成の和歌的情趣を踏まえながら、同時にそれを否定することによって表現を獲得した一つの客観的世界である」とされた。そして、

しかもここに提出されたものは、「たゞ是桐の木あり、塀の内奥ゆかしきあり、鶉鳴けるあるなり」（露伴）とでも言うより外ない、一つの自己充足的な世界である。結果としては、楸邨の言うように、凡兆の客観的傾向を示している。だが凡兆の純粋な客観句と違って、句の裏には、否定的ながら一定の関係のうちにある古歌の世界が存在する。無心のうちに成立する有心の世界――つまり風景に託した抒情詩の世界である。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

と述べておられる。私もこの説に同感するのであって、この句の持つ独得の乾いた味は、こう見ることによってはじ

めて納得が行くと思う。山本氏は、それが「いさゝか思ふ所ありて歩みはじめたる」という芭蕉の言とどう結びつくのか分らないと言われたけれども、私はやはり「軽み」への志向をあらわしたものと考えたい。「歩みはじめたる」という以上は、『猿蓑』前後のことだけに限る筈はなく、それ以後にもひろがる展望を思わせていると見られるからである。「木の本に汁も膾も桜哉」「ひばりなく中の拍子や雉子の声」「月見する座にうつくしき貞もなし」「川かぜや薄柿着たる夕涼」等、この年に成った句には、共通する「乾いた味」があり、そこにあらわれた客観的世界は、やがて「軽み」へと赴く志向を孕んでいるように思われる。

元禄三年の秋ならん、木曾塚の舊草にありて敲戸の人〱に対す

625 草の戸をしれや穂蓼に唐がらし （笈日記）

泊船集・蕉翁句集

秋季（穂蓼・唐がらし）。

語釈 **○木曾塚の旧草** 「木曾塚の旧草」。義仲寺境内にあった旧の草庵。元禄四年と推定される正月十九日付正秀宛書簡に、

一、粟津草庵之事、先は御深切之至、忝存候。兎角拙者浮雲無住の境界大望故、如此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候様に御取持奉頼候。必とこれにつながれ、心をうつし過ざるやうの事ならば、いかやう共御指図可忝候。……さすがの御人に申もくどく候へば打まかせ候。

という一条が見え、この頃膳所の正秀の世話で「粟津草庵」即ち義仲寺境内の無名庵新築の計画が進んでいたことが分る。細道の旅が終ってから芭蕉は粟津に屢々滞在したことは、これまで見て来た通りで、『笈日記』にいう「旧草」は建て替え前の草庵を指したものと思われる。元禄三年九月末に伊賀へ赴くまで芭蕉は「旧草」に居た筈であって、これは当面の句の成立時期の下限を示すものでもあった。「木曾塚」は既出（Ⅲ*611*前書）。「木曾塚の旧草にまいりける時、前の田づらに鷺のむれ下りけるを」（『初蟬』所収風国発句「白鷺の」前書）。**○敲戸の人〱に対す** 「敲戸の人〱に対す」。戸を敲いて訪問して来る門人達に向って作った句、の

意。「田家の人に対して」（『続猿蓑』下、洒堂発句「山吹も」前書）「Fitoni taixite mōsu.」（『日葡辞書』）。○**草の戸**　ここでは草庵のたたずまいや、其処での生活全体を含む。○**しれや**　「知れや」。訪問者に対する呼び掛け。同じ表現は前（Ⅰ251）にもあった。○**穂蓼**　「ホタデ」。蓼の赤い穂。頂に白い花をつける。秋の山野に自生するタデ属の草は種類が多いが、濃淡とりどりの赤い穂で野を飾り、可憐な風情を持つ。「穂蓼……按に、先に穂を出して後に花となる也。本草に穂の説なし。花は最秋也」（『滑稽雑談』）「念仏さぶげに秋あはれ也　李風　穂蓼生ふ蔵を住ゐに侘なして　重五」（『はるの日』）「Fotade.」（『日葡辞書』）。○**唐がらし**　「唐辛子」。既出（Ⅲ592）。

大意　庵のあたりには穂蓼と唐辛子が侘びた風情を添えている。それらによって我が俳諧にも通ずる此処の草庵生活の趣を知ってほしい。

考　『泊船集』には「無名菴」と前書がある。年代に関する『笈日記』の支考の前書は、他の資料と抵触する所がなく、信ずべきであろう。

穂蓼と唐辛子というものを以て草庵の風情をあらわし、延いては草庵生活や自己の俳諧を象徴しようとしている。二つとも俳諧的素材といってよく、侘びた気分を持っているが、「蓼・蕃椒と辛キ品を二ツ挙て云出たる、妙術と云べし。辛は辛労辛苦等の辛にて感難（ママ）の意也。是則薪水の労をも云べし」（信天翁『笈の底』）などと解してはよろしくない。唯属目の物であって、その野趣が俳諧には恰好であり、芭蕉の目指す所にも適うのである。夙く、

句表の風姿はいふも更に、寂しみにをかしみのわが俳諧を会すべしとならん。（杜哉『蒙引』）

という説があり、

訪れて来る門弟たちに現在の自分の俳境、すなわち人生の心構えを示したのである。侘しいこの草庵のさまをよく知ってくれ、穂蓼に唐がらしが私の心の象徴だ、こんな乏しい侘しさの中で私は生活しているのだよ——というだけでは、余りに平板である。取り立てて、穂蓼と唐がらしとを言ったその選択に、芭蕉の心が示されている。

二つとも生活に有用というほどのものではないが、ちまちまとしたものながら、物の味を際立たせる薬味であり、それは彼の俳諧の味わいに似通ってもいるのである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

という説はよく行き届いている。呼び掛けの形をとったところからも、「我が俳諧を知れよ」の寓意があることは疑いない。ただ、こういう形をとると、侘びを殊更衒ったような感じが露わになるのが欠点であろう。これとは別に、小い草庵の庭も固より広くはないが、蓼の穂の黄なのと、唐がらしの実の赤々と色附いたのが秋の色を見せてゐる。それを目じるしとして此処を吾が庵と知れよといふのである。（小林一郎氏『芭蕉翁句集評釈』）

という見方があり、今氏の『句集』も同説であるが、穂蓼と唐辛子を目じるしにして庵の在処を知れというのは、限定し過ぎて賛成出来ない。この「しれや」は、もっと広い意味に取ってこそ生きて来るのではあるまいか。

626 蜻蜓やとりつきかねし草の上 （笈日記）

泊船集・蕉翁句集

秋季（蜻蜓）。

語釈 ○**蜻蜓** 「トンバウ」。トンボ目に属する昆虫の総称で、種類は非常に多い。晩春から秋の末まで見られるが、俳諧の季題としては秋に扱われる。語源は未詳ながら、古く「とうばう」といわれ、室町時代までは「とんばう」の例も含めて「ばう」と表記されていたというから、歴史的仮名遣は「トンバウ」と見ておく。その約音が「トンボ」である。ここは音数の上から「バウ」と長く訓まなければならない。「今按に、秋津虫の名尤旧し。かげろふとは、此虫の羽かるく、有かと思へば飛去て、人目にもちら〳〵と陽炎の如し。故に名とす。ゐんばとは東国の詞也。とんぼうとは、桑華紀年に紀するごとく、我国の地形、東国は南北へひろくして、西国は南北せばし。此虫の頭を艮へ向ひ、尾を伸べなしたるに似たれば、秋津島と名附らる。其東へ向ひたるに依て、又此虫に東方の名有。是を訛てとんぼうといへり。吉野に侍るかげろふの小野を秋津野と云、又吾妻野といふも、気趣同じ」（『滑稽雑談』）「蜻蛉の来ては蠅とる笠の中」（『丈艸句集』）「Tonbô.」（『日葡辞書』）。○**とりつきかねし草の上** 「取り付き兼ねし草の上」。

草の葉末にとまり損ねたさまをいう。「陽炎や取つきかぬる雪の上　荷兮」（『猿蓑』巻四）「Fitono teni toriţuqu.」（『日葡辞書』）。

大意　とんぼが草の葉末にとまろうとして、なかなか取りつき兼ねているよ。

考　『笈日記』岐阜部に一部が紹介された当地の落梧の未完の撰集『瓜畠集』秋の部に見える。成立年次は不明ながら、落梧は元禄四年に歿しているから、秋の句は元禄三年までには成っていたと思われる。『蕉翁句集』は元禄二年の部に収めるが、ここでは姑く三年秋以前と見るにとどめたい。

とんぼが「飛廻ては立帰り、立揚ては飛戻る風情を、取付兼しとは云出たる」（信天翁『笈の底』）句で、草の葉にとまろうとして、何度も同じ試みを繰返す虫の動きに目を留めている。「艸の葉を落るより飛蛍哉」（Ⅲ601）等と同様に、写生的な味わいの句といってよい。「とりつきかねし」という表現に擬人的な気味合を感ずる故か、古注には行脚中に宿を求め兼ねた体とか、蝶は草の上にとまれても、とんぼはとまれない諷諫の意とか、あらぬ方向の解があるが、何れも見当ちがいである。

蜻蛉というものの動きを柔軟にとらえた作。眼前の景を素直に把握した句で、自然を見る眼が、実に素直に出ている。蜻蛉自身の重みでか、あるいは風によってか、とにかく草の葉先が定まらないので、しきりにとまろうとしてなおとまりえない光景であるが、「とりつきかねし」という措辞もこの場合なかなか味のあるつかみ方になっている。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

という見方が十全であろう。

627　　旧里の道すがら

しぐるゝや田のあらかぶの黒む程（泊船集）

記念題・蕉翁句集

冬季（しぐるゝ）。

語釈 ○**旧里の道すがら**　「旧里(きうり)」は、芭蕉の故郷伊賀の上野を指す。「旧里への道すがら」の意で、句の内容が故郷へ帰る途上の所見であることをいった。「我に志深く、伊陽旧里迄したひ来りて」（『嵯峨日記』）「三線からん不破のせき人　重五　道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉」（『冬の日』）「Qiûri. i, Furusato. …… Qiûrini cayeru.」「Michisugara.」（『日葡辞書』）。○**しぐるゝ**　「時雨(しぐれ)」を活用させた語。既出（I *216*）。ここは自動詞である。○**田のあらかぶの黒む程**　「田(た)の新株(あらかぶ)の黒(くろ)む程(ほど)」。「田のあらかぶ」は、稲刈りをした後に残る、まだ新しい刈り株。それが時雨に濡れて黒ずむのを「黒む」といった。「あらかぶ」は「荒株」の意ではあるまい。「黒みけり沖の時雨の行ところ　丈艸」（『炭俵』下）「Cabu.」「Curomi, u, ôda.」（『日葡辞書』）。

大意　刈って間もない田の刈り株が黒ずむ程に、しぐれて来たことよ。

考　時雨の降る初冬の頃芭蕉が伊賀に帰った年としては、元禄二、三の両年が考えられる。何れも九月末頃伊賀に入っており、句の成立に関してそれ以上くわしい事情は明らかでない。『蕉翁句集』は元禄三年の部に出しているが、ここでは確定を差控え、三年九月末以前とするにとどめる。

二年ならば伊勢から伊賀越えの道をとり、三年ならば膳所から甲賀の山間を抜ける御斎(おとき)越えの道をとったであろう。山間にひろがる田は既に稲刈りを終えて、刈り株が並ぶばかり。そこへ侘しい時雨がそそぐ景で、「青きものみな枯尽して、刈田ひたと時雨るゝ風情、初冬の寂寞いふべからず」（杜哉『蒙引』）とある通りだ。ただ一回の時雨に新株が黒むのではなく、度々の時雨を思わせる「程」という表現が巧みである。

この句で特に感じ入ることは、稲株といふやうな小さなところに眼をつけながら、全体の印象が、いかにも広い空間を暗指して居ることである。その田がどこ迄も続いてゐるやうな気持のせられることである。この句には摑むべきところは十分摑んだといふやうな、素朴と単純さとがある。そして人の胸にしみ入るしみぐ\した情感が溢れて居る。（『新釈』）

という半田良平氏の鑑賞も良い。満目蕭条とした時雨の天地は、唯是寂びの世界である。

628　きり〴〵すわすれ音に鳴火燵哉　（蕉翁句集草稿）

蕉翁句集

冬季（火燵）。

語釈　**○きり〴〵す**　秋の季語であるが、ここは秋季の句にはならない。**○わすれ音に鳴**　「忘(わす)れ音(ね)に鳴(な)く」。「わすれ音」は、虫などの時節を過ぎてからの鳴き声をいう。**○火燵**　「コタツ」。冬の寒い間身をあたためる用具。部屋に炉を切って火をいけ、上に格子に組んだ櫓と蒲団を掛けて足を踏み込む切り火燵と、櫓の中に火を置いて蒲団を掛ける置き火燵がある。冬の季語。「火燵切亥日……或伝云、和俗の炉を開き火燵を切るに亥日を用る事、これ火災を除るの謂也。亥は極陰の者也、方也。又此日亥猪を賀し、愛宕を以て祭るなども、彼神は陰神にて、亥の方（昔は洛西北の鷹ケ峯に座す）に鎮座す。猪を以て使者とするも此意なるべし。故に亥の日に火燵をひらく也。……炉と火燵との差別わきまふべし。……按に、炉は居所也。火燵は居所にあらず」（『滑稽雑談』）「縫ものをたゝみてあたる火燵哉　落梧」（『あら野』巻五）「Cotatçu.」（『日葡辞書』）。

大意　火燵にあたっていると、時節を過ぎたこおろぎの声が、ほそぼそと聞えて来ることよ。

考　土芳の『蕉翁全伝』元禄三年の条にこの句を挙げて、「此句ハ初冬氷固宅ニテ□在□」とあり、『蕉翁句集草稿』にも「此句にて氷固宅哥仙有」と見える。元禄三年十月、伊賀上野の氷固宅で、歌仙の発句として詠まれたものであろう。竹人の『全伝』には「此句にて一折あり」とあるが、原巻が伝わらないので、歌仙か一折か確かには分らない。氷固は松本氏、通称長右衛門。上野の商賈という。後、非群と号した。享保十九（一七三四）年十二月十一日歿、享年七十四。

冬に入って、もう句座には火燵が切られており、しんと静まった中に、こおろぎの侘しい音が聞えて来る。ああ、秋も過ぎて、こおろぎも細々と「わすれ音に」鳴いていますね、とその場の情景のままを述べて挨拶とした句である。

「ぬくもりに冬をわすれてなく也。猶言外に老衰の身の睨ありて、感慨浅からず」（杜哉『蒙引』）という鑑賞は的確で、典型的な「寂び」の句といえよう。日中という見方もあるが、夜更けの趣と見た方が良い。井本博士は「この句は、「わすれ音」という新語の創出を手柄としている句であろう」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）と見ておられる。

629　果の朔日の朝から

節季候の來れば風雅も師走哉（俳諧勧進牒）

弓・泊船集・後れ馳・三冊子

果の朔日の朝から

節季候の暮は風雅も師走哉（蕉翁句集）

冬季（節季候・師走）。

語釈　**○果の朔日の朝から**　「果ての朔日の朝から」。「果の朔日」は、十二月一日のこと。「果の月の朔日」の略である。「朔日」は既出（Ⅲ*569*前書）。「はての月の十六日ばかりなり」（『蜻蛉日記』中）「Fate.」（『日葡辞書』）。**○節季候**　「セキゾロ」。年の暮に「せきぞろ、さむろうさむろう」といって胸を手でたたきながら遣って来て米銭を貰って行く乞食。「胸たゝき」ともいわれ、近世初期には京では暮の二十二日から、笠の上に羊歯の葉を挿し、赤布で顔を覆って目だけ出した打扮で、二人或いは四人など連れ立って町を廻った。女性の年末の乞食は姥等という。新年を予祝する「ほかい人」の零落した形であろう。十二月一日から早々と出て来るのは珍しいので右の前書があるわけだ。「節季候　自今日乞人笠上挿貫首葉以赤布巾覆面纔出両眼二人或四人相共入人家庭上催躍乞米銭。是謂節季候。則告節季歳暮之詞也。倭俗候字代也字而用之。至二十七八日而止」（『日次紀事』十二月廿二日条）「節季候　都鄙にあり。都には十二月廿日より出る。節季にて候へば、くるとしの福と又年の終まで何事なくをくりかさねしをいはふ心なるべし」（『人倫訓蒙図彙』）「節季候　姥等　梨窓隠筆云、十二月風俗ニ鄙人節季候ト云形ヲ作ル。其法、赤色ノ覆面ヲカブリ、歯朶ヲ戴キテ家々ノ内ニ入、馳走動転スル物アリ。是又悪鬼ヲ駆出ス事ヲ行フ形ナル

べシ。人其故ヲ悟ラズ、只十二月ニハ諸人ノ家ニ来ル風俗ト計覚エタリ。或草子ニ折鬼像ト書リ。此字ノ時ハ鬼ヲ折伏スル像ト云意也。然ルヲ節季ノ字ニ作ル事ハ、時節ニフレルナルベシト。サレドモ慥ナル説ヲシラズ。○日本歳時記に云、国俗此月中旬より後、乞人共絳絹にて面を覆ひ、又絳絹にて膝を蔽ひ烏帽を著て、せぎぞろと云ていろ〳〵の祝詞をうたひ舞ありく事有。せぎぞろとは節季候と云意なるべし。都鄙共にする事也。△愚按云、恵空の説する所その意を得たり。是追儺の侲子を学ならし。……又節季候の絳絹を面に覆、頭に戴く事、略相似たれども、是民間家々の鬼を追ふ遺意なるべし。又乞人の妻女赤き皷鞜を掛て、頭には手巾を戴き、手に笊籬を携へて、姥等と称して家々の門に立て米銭を乞。是も按に拠あるか。……男女ともに儺心持なるべし。今乞人のなす業なれば、偏に米銭を請る事を専とす。家々の人も又乞食と心得たり」（『滑稽雑談』）「節季候や弱りて帰る藪の中　尚白」（『続猿蓑』下）。○**風雅も**　「風雅」は、一般的な風流の意ではなく、ここでは俳諧を指す。芭蕉の特殊な用語法で、「風雅もよしや是までにして口をとぢむとすれば」（「栖去之弁」―『芭蕉庵小文庫』）「風雅此比盛に思召候よし、尤さこそと被存候」（正月十九日付正秀宛書簡）「風雅之道筋、大かた世上三等に相見え候」（二月十八日付曲水宛書簡）等、屢々用いている。「も」には、「世間は勿論」という含みがある。（Ⅱ *416* 前書）参照。○**師走**　陰暦十二月。既出（Ⅰ *217*、Ⅱ *265*）。「師走の名を仕舞の仕に懸たり」（『俳諧一串抄』）という説があるが、そこまではどうか。年末のあわただしさをいったと見れば足りよう。

大意　こんなに早く節季候が来るとは。これが来ると世間離れした俳諧風雅の世界も、師走のあわただしい気分になることだ。

考　元禄四年春の跋がある『俳諧勧進牒』初出の句なので、同三年冬までには成っていたものと推定される。『蕉翁句集』は元禄三年の部に収めるが、この年とすれば十二月初めには芭蕉は伊賀に居た筈で、上野で早過ぎる節季候に逢ったことになる。この句の「節季候」を京のそれとする見方もあるが、無理であろう。尤も三年には九月末に郷里に帰ってから何時まで滞在していたか、確たる資料がない。ただ、前記のように京の節季候が出るのは下旬に入ってからで、『日次紀事』に日にちがはっきり出されている。都だけに、度外れに早いことは先ずなかったのではなかろうか。なお『句集』の「暮は」は、「来れば」を「くれは」と表記してあったのを、「師走」の連想で誤ったものとおぼしく、信じ難い。華雀の『句選』に「来ては」とあるのも杜撰である。

節季候にせきたてられるように、煤払いだ、それ餅つきだと、あわただしいのが世間一般の師走である。それとは関わりのないような俳諧の世界までも、節季候の声を聞くとあわただしい師走の感じになる、といったので、節季候という俗なものを採り上げて軽く興じた句と見られよう。早過ぎる節季候には、おかしみと共に「あはれ」を催しているような感じもある。俳諧の世界といえども、年末になれば、歳旦吟だ、引付だと、世間的なつきあいにかまけることが多い。この句について『三冊子』には、

この句、風雅も師走哉と、俗とひとつに云侍る。是先師の心也。人の句に、蔵焼けてと云句在。飛蝶の羽音やかましと云句有り。高くいひて、甚心俗也。味べし。（赤雙紙）

という土芳の説が見える。この句では、「世間は勿論、俳諧も師走だ」と、世間離れした風雅を目指す筈の俳諧を世間と一緒にしている。それでいて作者の気持が俗かというと、そうではなく、そうした世道俳道のさまざまを、距離を置いて眺めて面白がっているようなところがある。これが「先師の心」だというのである。要するに「高く心を悟りて俗に帰」った心境の発露だというのであろう。「蔵焼けて障るものなき月見哉」（『水の友』）「飛蝶の羽音やかましき住居かな」（『蕉門俳諧語録』）といった句では、月見の風流や閑静を求める気持を強調してはいるが、衒いが鼻について「甚心俗也」なのであった。

630　　旅　行

煤掃は杉の木の間の嵐哉　（己が光）

泊船集・蕉翁句集

冬季（煤掃）。

語釈　○**旅行**　「リョカウ」。「或年の旅行、道の記すこし書るよし物がたり有」（『三冊子』わすれみづ）「Riocô. Tabini yuqu.」

「Reocŏ.」(『日葡辞書』)。○煤掃　「煤掃き」。年末の大掃除。十二月十三日がその日と定められ、一般にはその日以後の適当な日に行われる。「すゝ払」(Ⅱ335)に同じ。「煤掃やあたまにかぶるみなと紙　黄逸」(『続猿蓑』下)「Susufaqi.」(『日葡辞書』)。○杉の木の間　「杉の木の間」。山路の旅などの背景としての自然である。「蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦」(『猿蓑』巻二)「Conoma.」(『日葡辞書』)。

大意　杉の木の間を嵐が吹き抜けて落葉や塵を吹き掃う。旅にあって煤掃きに関わりのない自分にとっては、それが煤掃きといったところだ。

考　元禄五年の『己が光』初出の句である。『蕉翁句集』は元禄四年の部に入れているが、その年の煤掃きの頃は江戸に帰った後だから、「旅行」という前書と矛盾する。従って元禄三年以前の作として、同二、三年の歳末が初出の年代から見て最も可能性が高く、それ以上に委しい事情は明らかでない。『芭蕉句選』に中七を「杉の一木の」と伝える根拠は不明である。

一見その意を得難い為か、解釈に諸説があり、中では、漂泊の旅の身にとって「我が煤掃きは杉の木の間の嵐かな」と見るのが、前書にも叶って良いと思う。所詮は表現不足の難を免れない句である。

いねくと人にいはれても、猶喰あらす旅のやどり、どこやら寒き居心を侘て

631
住つかぬ旅のこゝろや置火燵　(俳諧勧進牒)

元禄四年三物尽・猿蓑・瓜作・枯尾花・陸奥衛・泊船集・蕉翁句集・糸切歯

落つかぬ旅の心や置火燵　(粟津原)

冬季(置火燵)。

語釈　○いねくと人にいはれても　「去ね去ねと人に云はれても」。旅人が宿主から、立ち去れ立ち去れといわれても、の意。「い

ね」は、動詞「去ぬ」の命令形である。路通の発句「いねくと人にいばれつ年の暮」（『猿蓑』巻一）を踏まえる。「Ini, uru, inda.」（『日葡辞書』）。○**猶喰あらす旅のやどり**　「猶喰ひ荒す旅の宿り」。それでもなお、滞在先の食糧を勝手に食べ散らす、の意。「いのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど」（「幻住庵記」）「Araxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。○**どこやら寒き居心を侘て**　「何処やら寒き居心を侘びて」。何処か寒々とした居心地を侘しく思って、の意。勝手なことをしていても居心地は悪く、侘しいのである。「侘ぶ」は既出（Ⅰ146等）。「挑燈のどこやらゆかし涼み舟　卜枝」（『あら野』巻三）「一つ家の居心とはん花野原　天露」（『俳諧新選』巻三）「Doco.」「Yara.」（『日葡辞書』）。○**住つかぬ旅のこゝろや**　「住み着かぬ旅の心や」。その土地に定住しているのではない漂泊の落着かない気分。「住つかぬ」を「こゝろ」にかかると見る説もあるが、「旅」の本質をあらわす語として「旅」にかかるとした方がよいであろう。「や」は詠嘆の切字。「世の外は住つきぬべき方もなし　命まつまぞとにかくにうき」（『美濃千句』第二）。○**置火燵**　「オキゴタツ」。底板のある櫓の中に炉を入れた、持ち運び出来る火燵。（Ⅲ628）参照。冬の季語である。「自由さや月を追行置火燵　洞木」（『続猿蓑』下）。

大意　定住することのない漂泊の旅の気分は侘しいものだな。たとえていえば、この置火燵のようだ。

考　『元禄四年三物尽』には「題しらず」と前書がある。路通の『俳諧勧進牒』春の部に、「一日曲水を訪ひ、やくにたゝぬ事共云あがりて心細く成行しに、膳所の文とてもてきたれり。とりぐ開き見るに」として紹介された正月五日（元禄四年）付曲水宛芭蕉書簡に、標掲の前書を付して見え、『元禄四年三物尽』に載せていることと相俟って、元禄三年冬の作と推定される。膳所藩の曲水は当時江戸在府中で、その許に膳所の芭蕉から便りがあったので、路通はたまたまその席に居合わせたのであった。金沢の丿松の撰した『西の雲』（元禄四年刊）に、

旅のこゝろよ置火燵とは乙州がためにのべ聞へ給ひけん

卯の花に火燵置らん雪の暮　嵐雪

とある句文では、大津の乙州亭での吟のような書き方であるのに対して、宝暦十二年の『糸切歯』（石橋隣春耕著）には、

苧環供養に曰、いにしへ芭蕉翁都の旅寐に竹亭を伴ひて

住つかぬ旅の心や置ごたつ

と唱せられ、その夕べ亀林尋ねま見ゆ。さて其夜は翁・竹亭・予しみぐ〳〵と誹話深更に及ぶ。……

とあって、京での事となっている。竹亭らは芭蕉と同時代の人というから一概には無視出来ないが、『芋環供養』という書も伝わらず、時代の降る記事だけに、実否の程は何ともいえない。また乙州亭での吟のような伝えがあるのは、『勧進牒』所載の書簡で、この句文の次に乙州宅での年忘れの吟があるところから出たのかも知れず、これまた不確かである。年末近くに伊賀から再び京・湖南のあたりに出て来た頃の作と見る外はない。桃隣の『粟津原』（宝永七年刊）所載の異形は、誤伝と考えられるが、旅中の芭蕉から其角の許へ来た手紙の中の句として出している事情を重視すれば、或いは初案だったのかも知れない。

前書の冒頭「いねく〳〵と人にいはれても」は、明らかに路通の発句「いねく〳〵と人にいはれつ年の暮」を踏まえている。芭蕉は門人の家を渡り歩いていても、歓迎されこそすれ、「いねく〳〵と」箒を立てられるようなことはなかった筈である。だからこれは、志田義秀博士が『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』でいわれたように、路通を諷諭する意味があったのであろう。この頃路通は前述の不義理から芭蕉との間が気まずくなり、足が遠のいていた。ところが不実軽薄といわれる路通が、古武士然とした曲水とは不思議に馬が合って、同門間で爪弾きされていた最中でも、『勧進牒』にある如く曲水の許を訪れて愚痴をこぼすような仲であった。そういう間柄にあった曲水に宛てた書簡中の前書であって見れば、「芭蕉は曲水宛に出せば路通にも伝わると、半ば予測していたのでなかろうか」（『猿蓑発句鑑賞』）という森田蘭氏の推測は恐らく的を射ていると思う。

路通のことはさておき、漂泊の身である点では芭蕉も同様である。心服する門人の厚遇を受けていても、家族とはちがう客の身は、何処かに亭主に甘え切れない隔たりを感ずるのは当然であろう。「兎角拙者浮雲無住の境界大望」（正月十九日付正秀宛）とはいっても、定住の基盤を持たぬ我が身の上を侘しく思うこともあった。その気持が打ち出さ

れたのが「住つかぬ旅のこゝろや」という詠嘆である。それに配合された「置火燵」は、切火燵とちがって持ち運び自由、何処へでも動かすことが出来る。住みつく家のない境涯をいうのには恰好の素材であろう。頭だけでひねり出したものではなく、その場にあったものを取込んだとおぼしいが、客間に一人ぽつねんとして置火燵にあたっている背中がうそ寒い芭蕉の姿が髣髴と浮んで来る。ただこの句の場合、この「置火燵」が巧み過ぎる為か、「尻すはらぬ旅寝の身こそは置ごたつのさまにあれと、一所不住の観相の句……又、置ごたつは爰かしこへうつしやすければ、旅の尻落つかぬに似たりとも聞ゆ」（素丸『説叢大全』）という解が丁度当て嵌るような譬喩の段階にとどまっていて、置火燵が芭蕉の境涯と一つになる渾然とした味わいは未だしといった感じを否み難い。中七までと下五とが、連句の響き・匂いの如き微妙な感合によって結びついているという評はよく聞くけれども、私にはそのような高次の表現に達しているとは思えないのである。なお、其角の「芭蕉翁終焉記」（『枯尾花』所収）にこの句を引いて、「是は慈鎮和尚の、たびの世にまた旅寝してくさ枕ゆめの中にもゆめをみる哉とよませ給ひしに思ひ合せて侍る也」とあるのも、鑑賞の参考になる。直接本歌といった関係ではないが、『おくのほそ道』の冒頭にも明らかなように、無常の観相と旅の境涯とが常に一つのものとして観ぜられていた芭蕉にとって、右の慈鎮の歌は念頭を去らぬものだった筈であるし、当面の句の背景としても十分考慮に値するものであると思う。

都に旅寝して、鉢扣のあはれなるつとめを夜ごとに聞侍て

632 乾鮭も空也のやせも寒の中　（真蹟懐紙）

元禄四年三物尽・猿蓑・木枯・俳諧問答・陸奥鵆・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

語釈 冬季（乾鮭・空也・寒の中）。

○鉢扣のあはれなるつとめ　「鉢扣（はちたゝ）きのあはれなる勤（つと）め」。鉢たゝき（半僧半俗の時宗の行者）が十一月十三日の空也忌から

四十八夜にわたって、洛中洛外の墓地などを巡る勤行を指す。「あはれなる」には、寒い時季のきびしい行に対する同情と共に、これが冬の風物詩でもあるところから、「趣深い」意も含まれるであろう。「鉢扣」は既出（Ⅲ *577*）。「纔ニ籠僧三四人ノ勤メニテ、御中陰ノ菩提ニゾ資ケ奉リケル」（『太平記』巻三十九）「**Tçutomeuo nasu.**」（『日葡辞書』）。○**夜ごとに聞侍て**　「夜毎に聞き侍りて」。鉢たたきの鉦を鳴らしながら和讃や念仏を唱える声を、毎晩聞いたというのである。「火桶炭団を喰ふ事夜ごと〳〵にひとつづゝ」（蕪村遺草）「**Yogotoni.**」（『日葡辞書』）。○**乾鮭**　「カラザケ」。鮭の腸を抜いて塩引きせずに干したもの。寒中の薬喰いにする。既出（Ⅰ *129*）。○**空也のやせ**　「空也の痩せ」。「空也」は「空也僧」の略。空也念仏を唱えて歩く行者で、「鉢扣」に同じ。その痩せからびた姿をいう。（Ⅱ *433*）参照。「十徳頭巾に身をやつせば、人も空也の茶筌売」（『関八州繋馬』第一）。○**寒の中**　「寒の中」。「寒」は、二十四節気のうちの小寒（陽暦一月五、六日頃から十五日間）・大寒（同一月二十日頃から節分まで）の約一箇月間をいう。その期間中が「中」で『猿蓑』では「寒の内」と表記している。「のら猫の声もつきなや寒のうち　浪化」（『有磯海』）「**Can. Samuxi.**」（『日葡辞書』）。

大意　乾鮭の干からびた形も、空也僧の痩せた姿も、寒中の冷え寂びた気分によく叶う。

考　『猿蓑』冬の部にあり、『元禄四年三物尽』に収められているので、元禄三年冬の作たることは確かである。「鉢たゝきのうた」と題した歌謡の後にこの句を書いたものはよく知られているが、芭蕉の筆蹟とは認められず、歌謡の詞章も芭蕉の作かどうか疑わしい。

『三冊子』にはこの句を引いて、

此句、師のいはく、心の味をいひとらんと数日腸をしぼると也。ほね折たる句とみへ侍る也。（赤雙紙）

とあり、同じ土芳の『蕉翁句集草稿』にも、「直に云、是等の句、腸をしぼると也」と伝える。ここにいう「心の味」についての諸説を先ず挙げて見よう。

心の味を言ひとるとは、事物の姿を通して、その中に潜む本質的なにほひ、象徴味を捉へる事である。それは鋭い直観と、深い主観と、さうして長い間の芸術的修練とのみが捉へ得る境地である。（潁原博士『芭蕉』）

「心の味」は、芭蕉の詩心を揺り動かした芸術的な興奮をさすものであるが、それは又同時に、事物の姿の中に潜んでゐる所の本質的なもののにほひでもある。鋭い直観と深い詩心と、更に長い間の芸術的な修練の結果とが、対象に向つて澄み入つてゆく時に、そこにはじめて感得せられる所のものである。その無形態な磅礴とした感動のゆらぎを、句の形に結晶させるはたらきが、「心の味を言ひとる」ことである……この心の味は、枯淡味・冷え・さびといつた味はひであつて、中世芸術に於て開かれた最も深奥な芸術美に属する。……芭蕉の此の作は……彼が過去に詩的直観で把握して居たものを、それぞれに配合して、丁度連句の構成に似た構成法で以て、この一句を構成したものであらうと思ふ。その構成に際しての動力は、これ等の諸要素が何れもそれぞれに含んでゐる所の、冷えさびた心の味はひであり、その味はひの糸によつて、これ等が結合せられたものと思はれる。

（能勢朝次博士『三冊子評釈』）

『三冊子』における「心」の語の使いざまに徴すれば、「心の味」とは、先注に諸家のいう、対象の姿の中にひそむ本質的な匂いとか、もしくは対象によって触発された芸術的感動といったものではなく、「思ふ心の色」とか「わが心の匂ひ」といっているのと同じような、作者自身の心の味わいをいったものであるらしい。……かれは世外の無用者として、師走の京とは無縁の存在だった。あたかも「おくのほそ道」の大行脚を前年に終えて、とみに肉体の衰えをおぼえるとともに、しきりに「残生」を口にしはじめつつあったころである。……そんな中で、なおかつ、かれは……漂泊の願いを捨てきれない。落ちつかぬ師走の旅寓に、肉体の衰老をかこちつつ、なお漂泊の宿業に責めさいなまれる自己を顧みたときの、慄然と凍りつくような思い、――そうしたものがつまりここでいう「心の味」だろう。

……芭蕉は、右に忖度（そんたく）したような、かれ自身のナマの心象風景をば、かの心敬の説いた〃からび〃〃やせ〃〃ひえ〃といった中世詩歌の伝統理念につながる美の世界の味わいとして反芻しているわけだ。（尾形仂氏『松尾芭蕉』）

「心の味」というのは、「干鮭」とか「空也の痩せ」とかいうものそのもの、それぞれに特有な、ものをものとして生かしている本来の在り方にふれて一種の芸術的直観を生みだす——「生きている時間」ともいうべきものをさすのであろう。「心の味をいひとる」とは、事象の内にひそむ本質的な匂いを把握することであるといってもよい。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

右のうち、潁原・能勢・加藤諸氏の考え方は同じ系統であって、「乾鮭」とか「空也」とか「寒の中」とか、句中に取込まれた物その物の本質的な「匂ひ」を「心の味」と考え、尾形氏はそれらとはちがって芭蕉自身の元禄三年冬京都に於ける「心の味」と見ておられる。真蹟懐紙の前書によれば、彼は京で「鉢扣のあはれなるつとめを夜ごとに聞」いて感を発したのだから、「あはれなる」と感じた芭蕉の主観がこの句の発想に重要な役割を果していることは否定し難い。しかもこの句の場合、「長嘯のはかもめぐるか」（Ⅲ577）の句のように情緒的に鉢たたきを描こうとするよりは、「寒の中」の乾いたきびしい空気の中に、その痩せた姿を置いて、いわば即物的に表現しようとしている。「乾鮭」が持ち込まれた由来も、その辺に機微があったと思う。この時の芭蕉の「心の味」は、そのような表現を要求するものだったので、それはまた句中の「乾鮭」「空也」「寒」の三者の本質的な「匂ひ」を生かすものであった。

こうしてこの句は象徴句としての高次な水準を獲得したのである。尾形氏が一年前の「長嘯の墓」の句を引きつつ、「空也の痩せ」とは、そうした聴覚の対象として聴きしめられてきた鉢たたきの哀切感を、視覚的イメージに置き代えたもので、それは「長嘯の墓もめぐるか」の句で思いやった「老いぼれ足弱き者」のイメージを顕在化したものであるとともに、また、当時の人々が「皮肉痩せ枯れて、木に刻める空也に似たり」（天和三『新御伽婢子』）と語り伝えた始祖空也上人の木像のイメージともつながっている。……「痩せ」とは、まさに鉢たたきの最も鉢たたきらしいありかた、いわばその本意を抽出しイメージ化したものにほかならぬといっていい。

「乾鮭」は、……その店ざらしにされたミイラのような乾し枯れた姿態の中には、どこかで「空也の痩せ」の

感覚と通うものがある。……

一句は、切れ字に該当するテニハを用いず、……「乾鮭」「鉢たたき」のとりどりのイメージの対立交響を、「寒の内」という厳冬の季節感の中へ包摂し、それぞれの乾し枯れ痩せ切った感を極寒の極限としてとらえたのである。（『松尾芭蕉』）

と分析しておられるのも良い。山本健吉氏は、この句に最高の評価を与えて、次のように述べておられる。

和辻哲郎は、この三つの要素の結合を、「肉の滅却」のうちに見ている。乾鮭は「肉の滅却を実に visual に現はしてゐる」ものであり、他の二者も、「感覚的・肉体的な方面を押しのける」要素を持っていると言う。ただし和辻は、「空也の痩」に、「空也の宗教的生活」から来る「精神的の味」を見ているが、これは小宮豊隆のように、「もっと直接に鉢叩の実生活に飛び込んでゐる切迫した心持」を考えるべきだろう。……鉢叩の存在全体が、乾鮭の存在自体、「寒」という現象自体と、根源的に響き合うのである。「乾鮭」は「からび」、「空也の痩」は「やせ」、「寒の内」は「冷え」という中世的芸術理念を、その言葉のうちに含めているが、その各々はまた同時に他の要素でもあり、……支考は「枯木寒巌の観想」と言っており、その意味では「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」のいっそう深化した瞑想詩であると言えるだろう。

……任意の無関係な三つの「もの」を並べて、しかも統一のある一幅の画面を構成してゐる（ママ）静物画の如きものである。現実にはありえない景であり、心裡にのみ実現できる景である。……こういう句は、もう配合の句などと言うことはできない。黄金をのべたような句である。そしてこの三つの名詞が、すべて乾いた破裂音の k 音の頭韻で並びながら、三つの物の「微（び）」に一種凜烈の気が沁みとおっている。そのためにおそらく、「も」「の」「も」「の」という四つのテニヲハの働きに、芭蕉は腸をしぼったはずである。「心の味」を詩の上で実現せしめたのは、この四つのテニヲハの働きだと言ってもいい。そして、三つの素材のうち、乾鮭といい鉢叩と言い、近

世的な、庶民生活の上のものであり、それが「寒」という自然現象の中に摂取される。そこに、中世的文学理念の、俳諧的な実現があった。これは、芭蕉の生涯の傑作の一つである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

633

大津にてとしの暮けるに、人の新宅にやどりて、春を待はべるとて

人に家をかはせて我はとしわすれ　（真蹟懐紙）

真蹟短冊・俳諧勧進牒・猿蓑・泊船集・四山集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・俳諧古今抄

冬季（としわすれ）。

語釈　○**大津**　今の滋賀県大津市。○**としの暮けるに**　「年の暮れけるに」。○**人の新宅にやどりて**　「人の新宅に宿りて」。他人の新しく買った家に滞在して、の意。この「新宅」は、後掲の芭蕉書簡の前書（『俳諧勧進牒』所収）によれば、大津の門人川合乙州の家と知られる。「新宅」は既出（Ⅱ*411*前書）。○**春を待はべるとて**　「春を待ち侍るとて」。「春を待つ」は、ここでは新年を待つこと。「灯の花に春まつ庵かな」（『鬼貫句選』）。○**人に家をかはせて**　「人に家を買はせて」。乙州が家を買ったのを、芭蕉が買わせたようにいった諧謔的表現である。○**としわすれ**　「年忘れ」。年末に親しい人々が相会して一年中の苦労を忘れ、息災を祝う宴会。世界各地にひろく行われる習俗である。「日本歳時記云、十二月下旬の内、年忘とて父母兄弟親戚を饗する事あり。是一年の間事なく過にし事を祝ふ意なるべし。蘇子瞻が別歳詩の小序に、蜀俗歳晩、酒食相邀、呼為二別歳一。又瑯琊代酔編にいはく、淮人歳暮、家人宴集、曰二潑散一。此等の説ひとしき事の侍るなり」（『滑稽雑談』）「余所に寐てどんすの夜着のとし忘　支考」（『続猿蓑』下）。

大意　人に家を買わせて、自分は其処でのうのうと年忘れをするとは、気楽なものよ。

考　「まだ埋火の消やらず、臘月末京都を退出、乙州が新宅に春を待て」（『俳諧勧進牒』）「乙刕が新宅にて」（『猿蓑』）等の前書があり、前者は正月五日付曲水宛芭蕉書簡中のものである。岡田利兵衛氏の『図説芭蕉』所収の真蹟懐紙には「元禄三冬末」と年記があり、これは夙く土芳が、

元禄三年冬は大津にとしくれて、乙州が新宅に、人に家をかはせて我はとし忘れと云句をして、奥に元禄三冬末

り。（『蕉翁句集』）

又、大津にてとしの暮けるに、人の新宅にやどりて春をまち侍るとても自筆の前書有り。奥に元禄三冬末ト有

と自筆に書て、卓袋に給ふを所持す。（『蕉翁句集草稿』）

などと記している真蹟と同じものに違いない。この句が元禄三年十二月末京都から大津に移り、その地の伝馬役で荷問屋だった乙州の新宅で成ったことは明らかで、恐らく翌春伊賀へ帰った時に、上野の貝増卓袋に書き与えたのであろう。『二十五箇条』に「我は家を人に買せて年忘れ」という異形が伝えられているが、偽書の疑いの濃いものだけに、問題にはならない。

「人に家をかはせて」という諧謔が、この句の趣向の中心であろう。乙州は自分の都合で新宅を買ったので、別に芭蕉が買わせたわけではないが、買った早々に自分が客になってもてなしを受けているところは、どうやら買わせたような形だと興じて、乙州への挨拶にしているのである。乙州は養母の智月と共に、上方滞在中の芭蕉の身のまわりの世話をまめに勤めていたが、こうした興じ方の中に乙州への親しみが溢れ、身を任せきった安らぎが見える。それを、

人は世のならはしにつれて家など買ひとゝのへて心に苦しむ事もあるに、我はそれ等の事何とも思はず、其家にて年を忘るゝとなり。是も浮世に一塵もとゞめぬとの句なり。（正月堂『師走嚢』）

などと解しては、超俗の衒いが鼻についていけない。また、山本健吉氏は、

「住つかぬ旅の心や」の句が思い合せられるが、あれは独吟句であり、これは挨拶の心を忘れていない。（『芭蕉全発句』）

と指摘しておられる。古注に、伊勢の御が家を売った話を引合に出しているのは、関わりの薄い詮索である。

あなたふとく〳〵、笠もたふとし蓑もたふとし。いかなる人か語傳え、いづれの人かうつしとゞめて、千歳のまぼろし今爰に現ず。其かたちある時は、たましゐ又爰にあらむ。みのも貴しかさもたふとし

634　たふとさや雪ふらぬ日も蓑とかさ　（真蹟懐紙）

真蹟草稿・己が光・泊船集・奉納集・蕉翁句集・本朝文鑑

冬季（雪）。

語釈　○**あなたふとく〳〵**　「あな貴、あな貴」。「あな」は「あら」「あゝ」等と同じ感動詞。「あらたふと」（Ⅲ*462*）参照。「あな哀れ。わかき御許のかく気疎きあら野にさまよひ給ふよ」（『雨月物語』吉備津の釜）「Ana. l, ara.」（『日葡辞書』）。○**笠もたふとし蓑もたふとし**　「笠も貴し蓑も貴し」。笠と蓑は、この句文の対象となった小野小町の画像の着用しているものである。○**いかなる人か語伝え**　「如何なる人か語り伝へ」。どんな人かが小町のことを語り伝え、の意。「か」は、「いかなる」と相俟って不定の意をあらわす。「伝え」は「へ」を用いるのが正しい。「しのび給ひけるかくろへごとをさへ、かたりつたへけん人の物いひさがなさよ」（『源氏物語』帚木）「Catariçutaye, uru, eta.」（『日葡辞書』）。○**いづれの人かうつしとゞめて**　「何れの人か写し留めて」。誰かが絵として写し小町の俤を留めて、の意。「御本尊トヲンカタチヲ、ウツシトドメマイラセントマウス」（『善光寺如来本懐』上）「Fitono catachiuo vtçusu.」（『日葡辞書』）。○**千歳のまぼろし**　「千歳の幻」。千年も前の小町の幻影。小町の画像を「まぼろし」といった。「千歳」は既出（Ⅰ*190*）。「朝長の影の如くに見え給ふは、若しく〳〵夢か幻か」（謡曲「朝長」）「Maboroxi.」（『日葡辞書』）。○**今爰に現ず**　「今爰に現ず」。今此処眼の前に現われている、の意。「爰」は、「ここにおいて」の意に用いる字である。「尊容やがて神力を現じて、天竺震旦我が朝三国に渡り、有難くも此寺に現じ給へり」（謡曲「百万」）「Qidocuuo guenzuru.」（『日葡辞書』）。○**其かたちある時は**　「其の形在る時は」。その形が存在するならば。「かたち」は、小町の画像を指す。「……の時は」は、仮定の語法。「人恆の産なきときは、恆の心なし」（『徒然草』百四十二段）。○**たましゐ又爰にあらむ**　「魂又爰に在らむ」。小町の魂も同様に存

在するであろう。「たましゐ」は「ひ」の仮名ちがいであるが、こういう表記は近世に於いて殆んど慣用になっていた。「又」は並列列挙の場合には「亦」を用いるべきであるが、通用したもの。「たましゐの入たらばアイウヱヲよくひゞきて、いかならん吟声も出ぬべし」(『猿蓑』其角序)「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」(『おくのほそ道』)「Tamaxij mini souazu.」(『日葡辞書』)。○**みのも貴し**「蓑も貴し」。○**かさもたふとし**「笠も貴し」。○**たふとさや**「貴さや」。

大意 とうといことよ。画の中の小町は、雪の降らぬ日も蓑と笠を着ておわす。

考 「応定光阿闍梨之覓／あなたふとく、蓑もたふとし笠もたふとし。いづれの人の語りつたへ、いかなる人かうつしとゞめて、千歳のまぼろしいまこゝに現ず。其かたちある時は、たましゐまた爰にあらむ。みのもたふとし、かさもたふとし」(真蹟草稿)「小町画讃」(『己が光』『泊船集』『蕉翁句集』)等の前書がある。真蹟懐紙は左から右へ七行にわたって前書を記す珍しい体裁をとり、顔を画面の左に向けた人物像に対する賛なのであろうという。右隅にこれにも「応定光阿闍梨之覔芭蕉桃青」と記してあるが、「定光阿闍梨」は三井寺の僧実永を指し、元禄七年には路通の勘当を許す仲介などもした人である。この人の依頼によって小野小町の画像に賛したのがこの句であって、宝永元年の『奉納集』(陸芝・貞普撰)には「此讃三井の寺院ニアリ」として真蹟懐紙を原拠としたらしい文を紹介し、信之筆の老いた小町の絵が併せ掲げられている。板本の初出が元禄五年の『己が光』で、上方での作とすれば、元禄二、三年の冬の作と推定されよう。尤も画賛の場合、必ずしも当季には限らないけれども、この句が冬以外の季節に作られた証もないのである。支考の『本朝文鑑』には「卒兜婆小町ノ賛」と題し、「此賛ハ湖南ノ才陀亭ニ在リテ、其絵ハ三井ノ定光坊ニ在リトゾ」と付記している。真蹟草稿には宰陀旧蔵の旨を書いた元文五年の添書があるというから、『文鑑』はこれに拠ったのであろう。

謡曲「卒都婆小町」には、

破れ蓑破れ笠、面ばかりは隠さねば、まして霜雪雨露、涙をだにも抑ふべき袂も袖もあらばこそ。今は路頭にさ

そらひ、往来の人に物を乞ふ。

と老いた小町の姿が描かれており、信之の絵もそのような小町を描いていた。謡曲では、小町が卒都婆に腰掛けているのを見たワキ僧が、これを教化しようとして逆にやり込められ、「誠に悟れる非人なりとて」小町を礼拝する。やがて狂乱心になった小町は、深草の少将の百夜通いのさまを演じ、

　これにつけても後の世を願ふぞ誠なりける。いさごを塔と重ねて黄金の膚こまやかに、花を仏に手向けつゝ、悟りの道に入らうよ。

といって曲を終るのである。当面の句の「たふとさや」について山本唯一博士の『芭蕉俳句ノート』では、小町の悟った境涯を芭蕉は尊く思ったのだと説かれており、私もこれが正しい見方と思う。定光坊という僧侶に依頼されてのことでもあり、唯風流人乃至は恋の人としての小町を賛したものとは思えないからである。若き日の華やかさに比べて零落した晩年の無常も含めて、老いた小町の悟境を「たふとさや」と詠嘆したのであろう。この点は夙く杜哉の『蒙引』も、「たふとさやとは、卒都婆小町の仏果に終れるを讃するの語也」と指摘している。「雪ふらぬ日も」といったのは、絵であることを利かした興で、これで俳諧になっているのである。句として然程深いものではないが、小町を材にして「たふと」「たふとし」を繰返したところに、芭蕉の人間観悟道観がにじみ出ているようだ。

635　ひごろにくき烏も雪の朝哉　（薦獅子）　泊船集

今朝東雲の比、きそ寺のかねの音枕にひゞき、起いでゝみれば、白たへのはなの樹にさ[き]て、おもしろく

つねにくきからすも雪のあした哉　（真蹟自画賛）

常にくむ烏も雪の旦かな（蕉翁句集）

冬季（雪）。

語釈 ○**ひごろにくき烏**　「日頃憎き烏」。ふだんは憎らしい感じの烏。烏は真黒で形が悪い上に、鳴き声がやかましく、またかなり智恵があって人を馬鹿にしたようなところがある。「にくき」は、それらを引っくるめた感じをいうのであろう。「日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に」（『幻住庵記』）「蠟燭のひかりにくしやほとゝぎす　越人」（『あら野』巻二）「Figoro.」「Nicui.」（『日葡辞書』）。○**雪の朝**　「雪の朝」。既出（I *212*）。

大意 ふだんは憎らしい感じの烏も、雪の降った翌朝に樹などにとまっているところは、なかなか風情があることだ。

考 初出板本の『蕉獅子』（巴水撰）は元禄六年に成った書である。真蹟自画賛の前書に「きそ寺のかねの音枕にひゞき」とあるところから、元禄二、三年の冬に義仲寺の草庵で「つねにくき」の句形が出来たことは確かであろう。これが恐らく初案であって、その後「ひごろにくき」と推敲されて『蕉獅子』に収められたものと思われる。『蕉翁句集』の形は誤伝か。

句解は、「雪の白く降わたりたる中に、黒き烏の交りたる体、殊に興ありて、日比憎きと思ひしも忘れて面白きと也」（正月堂『師走嚢』）というに尽きる。要するに雪の趣を強調したので、「馬をさへながむる雪の朝哉」（I *212*）が連想されるが、それが表現として新しい趣向を見せていたのに対して、当面の句は素直ではあるにしても、当り前のことを当り前に言っただけに終っている。

旅行

636　はつ雪や聖小僧の笈の色（俳諧勧進牒）

冬季（はつ雪）。

語釈　○**旅行**　既出（Ⅲ630）。○**はつ雪**　「初雪」。既出（Ⅱ262等）。○**聖小僧**　「ヒジリコゾウ」。「聖坊主」ともいう。高野聖のこと。高野山から出て諸国を勧進して歩く僧をいった。近世期になると、乞食僧や衣類・数珠などを押売りする売僧も含めて、この名を以て呼んだ。ここは本物の行脚僧であろう。『あら野』巻八に収める千閣の句「海士の家聖よびこむやよひ哉」の「聖」も同じ。「Côyafijiri.」「Cozô.」（『日葡辞書』）。○**笈の色**　「笈の色」。「笈」は、行脚僧が背負う用具入れの箱。黒く漆を塗ってある。既出（Ⅲ483）。長旅の間風雨にさらされた笈の有様を「色」の語であらわした。

大意　初雪が降り出した。その中を行く高野聖の背負った笈の、風雨にさらされて色あせていること。

考　『俳諧勧進牒』初出の句で、元禄三年冬までには成っていたと思われる。

「旅行」とあるのは、高野聖が旅をしていることというより、作者旅中の所見という意味であろう。初雪の降る中の点景として「聖小僧」が描かれた趣があるが、「笈の色」と殊更形容を加えずに提示したところは、俳諧独得の表現法であった。長旅を経て色あせたさまがおのずから浮び、それを背負う人の疲れた姿も思われる。旅のあわれが、それと言わずして感ぜられるのである。

637　霜の後撫子さける火桶哉　（俳諧勧進牒）

ふるき世をしのびて

芭蕉庵小文庫・泊船集・蕉翁句集

冬季（霜・火桶）。

語釈　○**ふるき世をしのびて**　「古き世を偲びて」。昔の風雅をしのぶ意である。「しのぶ」は既出（Ⅰ202）。「げに古き世の物語、聞けば涙もこもり江にこもれる水のあはれかな」（謡曲「玉葛」）。○**霜の後**　「霜の後」。霜の置く冬に入ってから後、の意。既出（Ⅱ264前書）。○**撫子さける**　「撫子咲ける」。既出（Ⅱ292）。ここは火鉢に描かれた撫子の花である。○**火桶**　「ヒヲケ」。木製の丸火鉢。

桐の木の幹をくり抜いて内側を金物で張り、彩色などを施してある。「埋火……孫もたぬ姥御前は。火桶を伽にだいていね。老の友なきおほぢごは。ぜうになりたるすみがしらをも憐む心などすべし」（『山之井』）「火桶　火鉢　清少納言枕草紙に云、人の家につきぐ〳〵しき物、ちくわうゑがきたる火桶〇春曙抄云、ちくわうとは竹鶯画也。桐火桶などに、竹に鶯など絵にかきし也。〇心敬僧都さゝめ言に云、俊成卿のよみ給ひしこそ誠に秀逸も出来ぬべけれ。深更にとの油ほそく、有かなきかのに向ひ、直衣のすゝけたる打かけ、古き烏帽子耳迄引入給ひ、脇息より、桐火桶をいだき、詠吟の声忍びやかにして、夜闌人静りぬるにつけて打傾き、夜ごとなき給へるとなん云々〇古師云、古我邦に桐火桶と云侍る。今も其製有。真鍮にて丸く小炉を造り、其外に桐の木をくりたるを家とす。其蓋にも桐を用ひ、穴を開き、蓋裏をも真鍮にてはる也。……△按に、火桶の製久し。旧名は火置也。置と桶と和訓近きゆへに火桶と云。其後火鉢の名出たり。製も又略也。今世に及んで二物ともに金銀銅鉄瓦石の類は不足謂、漆器金具の結構不可称計」（『滑稽雑談』）「霜凍り冬どのゝあれませる夜、この二三子庵に侍て、火桶にけし炭をおこす」（『炭俵』素龍序）「Fivoqe.」（『日葡辞書』）。

大意　霜の置く冬に入ってから後も撫子が咲いているとは。まことにゆかしい火桶であることよ。

考　『俳諧勧進牒』初出で、元禄三年冬以前の句である。

この句は古くから解釈に二説あり、一つは火桶（冬）の句として、火桶に撫子の絵が描かれているさまと見、今一つは「撫子」（夏乃至秋）の句として、火桶に撫子が植えてあるさまと見ている。先ず古注の目ぼしいものを挙げよう。

此句は、蒔絵なども兀げかゝりたる火桶に撫子植たる蓬生のさまとも見ゆれど、冬の句と見るべし。古歌に、霜さゆるあしたの原の冬枯にひとはなさけるかはらなでしこ　又火桶に画事は、源氏香の図に寄ると、譬ば梅がえの香の図有時は梅に鶯、又紅葉の賀の図あるは紅葉に伶人など書て、故実なりとぞ。猶火桶に撫子のかけ合、うごくべからず。（蓼太『芭蕉句解』）

古き代を忍びてと有。むかし世の乱れたる時、功有て用ひられし人も捨てられしを、霜の時用ありし火桶も、あ

たゝかに成ては、撫子を植られて其花が咲しよと也。是撫子を今時めく人にたとへて、昔を忍ぶの句作也。（正月堂『師走嚢』）

古き蒔絵に撫子の画を求めて、火をさしそへ老を助る便りとするとて此吟有にや。古き世を忍ぶといふ前書は、むかし此火桶を誰手にやふれけるぞと、おもひ出たるさまなるべし。歌に冬がれに撫子咲るとあれば、此吟も必冬の句なるべし。……植たると見るは撫子咲ると有故也。撫子書るとあらば、夏とは沙汰有まじ。書るとはいやし。咲ると作るべき句なれば、蒔絵と見る方ならん。（東海呑吐『芭蕉句解』）

句解当れり。引歌よりどころあるか。……再考するに、此器桐火桶とも思はれず。全く世に云深草の陶器にして大なるもの、俗に手あぶりと云物ならんかし。……桐火桶に瞿麦の花を画く事は、中古よりの事にや。後水尾院の御制とも、又東福門院の御好ともいひて、桐火桶に箔蒔て瞿麦をゑがきし物有。……いかにもそれは、霜さゆるの歌によれるにや。……霜の後の五文字は、去し冬の事を思ひ出したる詞かとも思はるゝ也。霜のふりし旦は、此火桶も愛されしが、今はむかしに人の捨たる器となりて、此夏はなでしこの草さへうゑてありけるよと観じたる也。……澹斎此句の評に、是は冬の季にや入べからん。上に霜の後といひ、下に火桶と二ッ冬季を体にとりていひなせしからは、撫子はよせ物にてあるべし。……此句も、冬になり霜の降りたる後は、千種の花もなき比しも、火桶の火のはなやかにおこりたるを花と見なして、なでしこの咲たるごとくといふにや。撫子の花はことに赤きものなるうへに、又火桶には中古より撫子を画けるなれば、そのよせ有事にて、二つ相かねてかくは句作りありし成べしといへり。此説もまた捨難し。いかさまにも撫子は取合せ物と見え、一体は火桶の句なれば也。又火桶に画し瞿麦を、咲けるともいひしにや。然らば冬の句とも思はれ侍りぬ。（素丸『説叢大全』）

吾山曰、句解に霜さゆるの歌を引きしは当りし事也。然れども火桶に撫子植ゑたるなどとは、迂遠にして僻ごと成べし。俊成卿は寒夜の冴えはてたるに、白き浄衣のすゝけたるをきて桐火桶をいだき、閑疎としてよみ給ふと

也。定家の卿は父卿の申しおかれし事を書留め、標題を桐火桶と名づけ給ふ。かゝる故事のなつかしくてや、古き世をしのびてと詞書して、黄門卿の歌の心を思ひよせての句なるべしや。かく解し得て恐らくは的中なるべし。……予もむかし、火桶に撫子絵書けるを咲くと仕給ひしか、又は桶の火の華やかなるを咲けるごとくに見做しての吟にやと思ひしが、さては翁の風骨にあらず。又桶にかの花を画ける事の侍るは、撫づるといふ詞の縁によりての物数寄の故なりとかや。是も歌によりての儀なるべし。もとより撫子は冬枯にも咲く花也。必ず疑を貽すべからず。県人はことぐ〳〵く知れり。予ある時野路を過ぎがてに、霜枯にひと花咲けるを打詠め侍りて、まことにやごとなき御身にて、かゝる事をばいかで知らせ給ひて、霜さゆるあしたの原と詠じ給ふやと、一たびはかの卿を感じ奉り、芭蕉もよく弁へられて此吟ありと、ふたゝび感慨し侍りける。（吾山『朱紫』）

『勧進牒』をはじめとして『小文庫』『泊船集』など凡て冬の部に収めているから、この句は「火桶」の句であって「撫子」の句でないことは明らかである。その点、「霜の後」や「火桶」を本筋として「撫子」は寄せ物（配合）と見る『説叢大全』所掲の澹斎説は正しい。「火桶」といえば、俊成が歌を案ずる時手許に抱いていたという桐火桶が直ちに連想されることは、『滑稽雑談』が態々心敬の『さゝめごと』の記述を引いているのでも明らかであろう。また其処にこそ「ふるき世をしのびて」という前書の由来もあったと思う。前書と句の内容との関わりを最も正確に解しているのは『朱紫』であるが、後の方で冬枯に咲いた撫子のことにしてしまったのは惜しい。結局この句は火桶に描かれた撫子の花を、冬枯の時節に実際に咲いた花のように見立てて興じ、定家の「霜さゆる」の歌（『拾遺愚草』上所収。末句「やまとなでしこ」）や、和歌を案ずる俊成の姿を思わせて「ふるき世をしのぶ」よすがとしたものと思われる。それなりの雅韻はあるものの、表現が分りにくく、「翁の風骨にあらず」（『朱紫』）という感じは免れない。なお、青流の『住吉物語』に、

翁の句のはしをおもひとりて

なでしこの花もやつるゝ火桶哉　同（注、青流）

とある芭蕉追悼句は、この句に因んだ作である。

638　こがらしや頬腫痛む人の顔　（猿蓑）

泊船集・蕉翁句集

冬季（こがらし）。

語釈　**○こがらし**　冬の寒風。既出（I *138*、*215*）。**○頬腫痛む**　「頬腫痛む（ほゝはれいたむ）」。「頬腫」は流行性耳下腺炎（お多福風邪）のこと。耳から頬にかけての下部が腫れて来るのでいう。「痛む」は下の「顔」にかかる。「頬、腫れ痛む」ではない。発音は『日葡辞書』の「**Fôbare.**」の項に、上では「**Fôfare.**」というとあるのに従っておく。「東垣が蘭室秘蔵に蝦蟇瘟の病名始て見えたり。夫より医学正伝にも出づ。近年の俗、江戸挟箱といへる病なり。左右の頬はれいたむ。片頬腫るゝもあり」（積翠『芭蕉句選年考』）「羅綾の袂しぼり給ひぬ　正秀　歯を痛人の姿を絵に書て　珍碩」（『ひさご』）「**Fôbareuo yamu.**」「**Itami, u, ôda.**」（『日葡辞書』）。

大意　こがらしの吹きすさぶ中、お多福風邪の腫れが痛む人の顔は、痛々しくもまたおかしい。

考　『猿蓑』初出。元禄二、三年の冬の作であろう。

お多福風邪にかかった人が木枯しの中を行く実景が動機になっていると見るのが普通の鑑賞で、しかも、「木枯と頬腫の顔とが、何かしらかさくとした冬ざれの感じに於いて、微妙なにほひの繫がりを持つて居る。その味はひが一句の中心」（潁原博士『新講』）となる。加藤楸邨氏が、

今でもよく見られる街頭風景で、「木枯らし」が強く利いている句だ。「木枯らし」と「頬腫」との取り合わせは読む者に痛さを感ぜしめる味わいを出しえており、「人の顔」と投げ出したところには写実的な重さがある。まじめな詠みぶりの中にほのかな俳諧の笑いがある。……「木枯らし」が本質的に生かされた結果、場面は乾燥

してかさかさになった感じが摑まれている。(『芭蕉全句』)

と述べられたのは、穏当な見方であろう。この句に於ける「ほのかな俳諧の笑い」を精しくいえば、「座五名詞止めでクローズアップした「人の顔」が滑稽感を誘う」(今氏『芭蕉句集』)のである。

これらとはちがって尾形仂氏は、

奇抜な着想の句である。路上の瞩目吟と解する向きが多いが、おそらくは席上探題の句であろう。あるいは、『猿蓑』に「木枯」の吟がこれ一句である点から臆測すれば、門人の寄せた「木枯」の句に当時の芭蕉の撰句眼から見て意にかなうものがなく、かの『去来抄』などにいう、物語の体の句が少ないからといって作句撰入した「粽結ふ片手にはさむ額髪」の句の場合と同じように、撰集の模様を整える上からみずから句案に及んだといった経緯も想像されなくはない。そんな臆測もさしはさまれるほど、構成的な句である。(『松尾芭蕉』)

という前提のもとに、次のように説いておられる。

……木枯が吹き出すと、四囲の風物はにわかに荒れさびた「冬ざれ」の様相を呈しはじめる。

一句は、その木枯の季感を、「頰腫痛む人の顔」の上に具象的にとらえようとしたのである。……お多福風邪に悩んでいる顔には、気の毒な中にも、一種ユーモラスなところがある。「人の顔」と投げ出した非情な言いたが、そうした〝笑えぬ笑い〟の顔を的確に描き出している。

「木枯」にその「頰腫痛む人の顔」を配するとき、そこからは、滑稽に引き歪められた大写しの顔の、腫れてほてった両頰の感覚を通して、かさかさに乾いた、身内につきささるような、烈しくとがった木枯の寒さの実感が、なまなましく伝わってくる。木枯が一吹き吹きすさぶごとに、〝笑えぬ笑い〟の顔は悲痛に引きつり、木枯の実感をデフォルメして具象化する。いわばこれは、病的にデフォルメされた感覚による、「木枯」の季感の肉体化にほかならぬといってもいい。芭蕉には〝かるみ〟を高唱した最晩年に、病的にとぎすまされた神経を通し

て、柳のしだれの微妙なしなやかさをとらえた「腫物に柳のさはるしなへかな」の句があるが、これはその前の一つの実験と見なすこともできるだろう。だが、「木枯」の実体をこれほど大胆で飛躍的な配合をもってとらえた作を、私は三橋鷹女の「十方にこがらし女身錐揉に」（『羊歯地獄』）以外に知らない。（『松尾芭蕉』）

私はやはり実景から発想した句と見てよいと思うが、構成的な句としても、要は「こがらし」の季感を生かすことが中心であり、乾き荒んだ空気の「にほひ」が感じ取れるところが、この句の命であろう。その点、「乾鮭も空也のやせも寒の中」（Ⅲ632）の象徴味と趣は異なりながら、通ずる所のある句柄である。季節感の生かし方を、さまざまの方法で試みていたこの時期の芭蕉の傾向の一面が、この句からも窺えよう。

639　かくれけり師走の海のかいつぶり　（色杉原）

新花鳥・己が光・泊船集・蕉翁句集

草津にて
のがれけり師走の海の鵜（蓮の実）

冬季（師走）。

語釈　○かくれけり　「隠れけり」。○師走の海　「師走の海」。この「海」は琵琶湖を指す。既出（Ⅱ392、Ⅲ615）。○鵜　水鳥。鳰に同じ。「鳰のうき巣」（Ⅱ289）は夏季とされるが、水鳥は季語としては一般的に冬であり、ここは「師走」ともあるから季節に疑いはない。この鳥については、支考の『俳諧古今抄』に「巣を結ばずば雑ともいふべけれど、鳰は鳴声も寒気にて、俗語に掻井ともいふなれば、俳諧には名目の自在を称して、冬に用あらば冬に用ふべきや」とあるけれども、『御傘』は「鳰　雑也。浮巣も雑也」とし、『毛吹草』も「鵜」を非季詞の中に入れている。この時代にはまだ季語としては扱われていなかったのであろう。「かいつぶりふすや氷のはり枕　定時」（『鷹筑波』巻一）「Caitçuburi.」（『日葡辞書』）。

大意 師走の湖上に浮んでいたかいつぶりが、突然水中にもぐって姿を消してしまったよ。

考 『色杉原』（友琴撰、元禄四年七月成）初出の句で、琵琶湖を望んでの作とすれば、芭蕉が冬湖南地方を渡り歩いていた元禄二、三年しか適合する時期は考えられない。この両年の何れとも決定出来る確証がないので、姑く元禄三年冬以前と見るにとどめる。元禄四年の『蓮の実』に収める句形は、撰者の賀子が他門の人であり、その前書と共に疑わしいものである。

古注には、句中に「師走」とあるところから、年末の世間の忙しさや、それに関わりの薄い隠者としての芭蕉の立場を考慮に入れた説が多く、そうした考えは近代以降にまで及んでいる。

此句かいつぶりの句と見えて、底意は世の中の節季の句也。師走といふ文字の入たるにて考ふべし。世の人の懸乞などにせがまれてや、かいつぶりの如くぬけ隠るゝとの作意也。師走、字眼也。（正月堂『師走嚢』）

師走の騒しきにはかまはず、かくれひそむとなり。くれのいそがしき時は、邪魔に成人多し。かいつぶりのかくれたるは尤と也。（東海呑吐『芭蕉句解』）

此吟は年の名残を至て悲みたる観想の所より、鳰に喩て云出たる句意也。然ば、かひつぶりさへも師走を憂しと思へばこそ、水中に隠ると云趣也。今案、隠れけりと義定したる詞に、師走の世渡の何か騒ヽ敷有さまを強く愁める余情現れたり。（信天翁『笈の底』）

市中に年の忽劇を避給ふ洒落の境界を比興せられし也。隠けりの自讃、はいかいといふべし。（杜哉『蒙引』）

夫かいつぶりは、性水をくゞるを不断にして、浮遊ぶこと少し。師走とは、此月年の終りなれば、師に走り殊にいそがはしければとの名也。其走り廻る人の多きにおそれて、水中にのみかくれがちなりとの義なり。（何丸『句解大成』）

人間の忙しい師走であるから、湖上の鳰もブラ〳〵遊んで居ないで何処へか姿を隠して居るよといふたのである。

（『芭蕉句集講義』森無黄説）

こうした中では、かいつぶりの生態に着目した『大成』の説などは採り所がある。

究陰の風色寥々として風波あらきありさま、小鳥の没して行衛見えざるにや。幽玄妙手段、余情尽すべからず。

（蚕臥『芭蕉新巻』）

というように、純粋に景の句と解したものは珍しい。しかし、最初に「かくれけり」と、この水鳥の突忽とした動きを描いているところを見ても、この句は師走の湖面を背景として、かいつぶりの姿や動きを描くのが中心でなければならぬと思う。そのような観点からすれば、

「かいつぶり」の生態を知らない人にはわかりにくいかもしれないが、かいつぶりは鴨（かも）より小さい鳥で、群をなさず、長く水中にもぐって、思いがけない場所に浮かぶ。急に水上から見えなくなるので、見ているものには「おや」という意外感が伴うのが常である。その意外感を師走の海に結びつけた句。（『古典文学全集・松尾芭蕉集』井本農一博士）

かいつぶり……は水中の獲物を捕食する時、一瞬すばやく水に潜って姿を消すのが習性。その特有の動作が、上五にいきなり「かくれけり」と置いた表現で生き生きと捉えられた。隠れ方の俊敏さに、師走の繁忙から隠れるのかと、ふと興ずる心が動く。（『古典集成・芭蕉句集』今栄蔵氏）

といった解が首肯されるであろう。「師走」は、何よりも厳冬の季節をあらわす為に置かれた語と見るべく、背景たる寒々とした湖面のさまが、これによって髣髴されるわけである。世間の忙しさとの関係を採り入れるとすれば、今氏の解の末尾にある程度に見ておきたい。

割合単純な情景であるから、たゞ意味だけを現はす分には、さまでむづかしくはなからうが、これを句として生かして来るには、単純なだけ却つて困難だと思ふ。初五を突如として動詞の終止完了形でおさめたところなどは、

よほど胆が据はつて居ぬと出来兼ねるものである。俳句としても珍らしい形といはねばならぬ。(『芭蕉俳句新釈』)

という半田良平氏の説は、さすがに実作者の言であった。

大津にて

640 三尺の山も嵐の木の葉哉 (己が光)

忘梅・泊船集・蕉翁句集

冬季(木の葉)。

語釈 ○**三尺の山** 「三尺の山」。小高い岡の強調表現。曲尺の一尺は約三十センチである。「庭の築山」(呑吐『句解』)とも取れる。最近富山奏博士は、墓を意味する「三尺の土」なる語を指摘され、「三尺の山」と同義と見て、これを義仲寺境内の義仲の墓に擬しておられる(『俳諧木の葉の秋』付記)。興味深い新説である。「三尺の鯉はぬる見ゆ春の池　仙化」(『続猿蓑』下)「Sanjacu naua.」(『日葡辞書』)。○**木の葉** 「木の葉」。木の葉が散る意で冬の季語。既出(I *126*)。(I *199*)。

大意 三尺ほどの小高い山も、激しい風に包まれて、木の葉が散り舞っていることよ。

考 元禄五年の『己が光』初出の句で、それ以前に芭蕉が冬大津に居たのは元禄二、三年である。三年冬までには成っていたと見てよい。

ちょっとした山でも木の葉が嵐に散り舞うといって、大きな山の景色を利かせている。大津あたりの実景であろうか。「吹寄せて山をなせるをいへり。起〳〵に驚き見給ふ風情にもあらん」(杜哉『蒙引』)という説は合理的ではあるが、感興に乏しい。古注には、

世を捨し身にも、少しは心にかゝる事のなきにしもあらぬを、三尺の山にも嵐吹ば木の葉の落るよとの作也。(正月堂『師走嚢』)

是亦観念の吟也。三尺の山と云共、憂にはもれざる也。今案、其名高き吉野・龍田の花紅葉の嵐に逢は、毎人に愛せられて、一度は盛りに、時至れば散る、是世の盛衰也。名もなき深山の花もみぢは、有り共知る人もなし。然共夜の嵐は共に遁る事なし。是生涯を埋れたる佗人と云べし。（信天翁『笈の底』）
などと、人の世の憂さや、栄枯の観相に結びつけた解があるが、余計な詮索である。

641

比良みかみ雪指シわたせ鷺の橋　（翁草）

をだまき綱目・蕉翁句集

日枝三上雪懸わたせ鷺の橋　（雪月花）

湖水之眺望

比良三上雪かけわたせ鷺の橋　（蕉翁句集草稿）

冬季（雪）。

語釈　○**比良**　「ヒラ」。琵琶湖の西岸中央部から北部にかけて約三十キロにわたって南北に連なる比良山地をいう。主峰は湖西中部の武奈ヶ岳（千二百十四メートル）で、その外、南から霊仙山・権現山・蓬萊山・打見山・比良岳・烏谷山・堂満岳・釈迦岳・釣瓶岳などの高峰が連なっている。「比良の暮雪」は近江八景の一。「日枝の山・比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城有、橋有、釣たるゝ舟有」（「幻住庵記」）。○**みかみ**　「三上」。今の滋賀県野洲郡野洲町の野洲川東岸にある三上山。標高四百三十二メートル、秀麗な山容から近江富士と呼ばれる。雄山と雌山に分れた頂上には巨大な磐座があり、山全体が古くから三上神社の御神体であった。「中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武蔵野ゝ古き栖もおもひいでられ」（「幻住庵記」）。○**雪指シわたせ**　「雪指シ渡せ」。連なって飛ぶ白鷺を雪に見立てて、雪をさし渡せと興じたのである。「指シ」は接頭語。「べんけい駒をかけよせ、くまでをさしわたし、かぶとのてへんにひつかけ」（舞曲「高館」）「Saxivataxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。○**鷺の橋**　「鷺の橋」。山の間を群れ飛ぶ鷺を橋に見立てた。七夕の夜、かささぎが翼を並べて天の河に橋をかけ、牽牛織女の二星の中をとりもつという「かささぎ

の橋」の俳諧化である。鷺は頸・脚が長く、繁殖期には頭上の羽毛が後へ長く延びて羽冠を形成する。群棲して樹上に巣を作り、水辺で魚や虫を捕食する。ここは勿論白鷺。「江の舟や曲突にとまる雪の鷺　素龍」（『炭俵』下）「Sagui.」（『日葡辞書』）。

大意　西の比良も東の三上山も、湖畔は今一面の雪だ。群れ飛ぶ白鷺よ、山の間に橋を掛けて、雪をさし渡した趣にせよ。

考　『蕉翁句集』には「湖水の眺望」と前書がある。芭蕉歿後の集『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）初出の句であるが、生前冬に琵琶湖のほとりに居たのは元禄二、三年であり、この両年のうちの作と思われる。土芳の『蕉翁句集草稿』の句形は、何か拠る所があったのであろうが、同じ編者の『蕉翁句集』では『翁草』と同じ句形になっているので、全面的には信じ難い。『雪月花』（角呂撰、元禄十三年刊）も根拠が明らかではなく、結局初出の句形に拠らざるを得ないのである。

湖畔の雪景色を「比良みかみ」と東西にわたって大観し、湖面に群飛する鷺に向って、鷺の橋を渡せと興じた。七夕の「かささぎの橋」も連想され、巧緻な蒔絵を見るような華やかな趣がある。

642　納豆きる音しばしまて鉢叩　（韻塞）

泊船集・蕉翁句集

冬季（鉢叩）。

語釈　○**納豆きる音**　「納豆切る音」。納豆汁（納豆を入れた味噌汁）を作る為に、納豆を俎板にのせて庖丁でたたき、細かにするさま。「納豆たたく」「打つ」ともいう。「納豆」は「ナットウ」とよんでもよい。「四ッの時冬はあられのさら〳〵と　文鱗　水仙ひらけ納豆きる音　翁」（『幽蘭集』）「**Nattô.**」（『日葡辞書』）。○**しばしまて**　「暫し待て」。切るのを止めて、しばらく音をさせるな、の意。○**鉢叩**　「鉢叩き」。時宗の行者が真冬に洛中洛外の墓所などをたずねて弔う寒行。既出（Ⅲ *577*）。「空也」（Ⅲ *632*）参照。

大意　納豆を切る音を暫らく止めて静かにせよ。鉢叩きの音が聞えて来たから。

考　鉢叩きを聞いての作とすれば、芭蕉が滞京していた時でなければならぬ。冬に京に居たのは元禄二年か三年であって、それ以上成立について委しいことは分らない。

朝か夕方か夜中か、見方は色々あるが、「納豆汁、多は朝饍の物也」（信天翁『笈の底』）とすれば、朝餉の仕度であろう。「納豆きる音」は別に風情のあるものでもないが、泊っている門人の家の台所から、とんとんとその音が響いて来るので、其処に極く普通の生活感が表現されている。それを背景にして鉢叩きの音を浮び上らせており、「しばしまて」は、鉢叩きに興ずる風狂の心である。

643　石山の石にたばしるあられ哉　（麻生）

冬季（あられ）。

語釈　○**石山の石**　近江石山の石。既出（Ⅲ*531*）。○**たばしるあられ**　「た走る霰」。石の上に飛散する霰。「たばしる」の「た」は、「たそやとばしるかさの山茶花」（『冬の日』狂句こがらしの巻、野水脇句）の「とばしる」と同じ接頭語。ここは実朝の歌「もののふのやなみつくろふこての上に霰たばしるなすのしの原」（『金槐集』上）を踏まえた。「しら浪とつれてたばしる霰哉津島重治」（『あら野』巻五）。

大意　玉なす霰が石山の白く堅い岩肌に烈しく当って飛び散っていることよ。

考　『麻生』（范孚撰、宝永元年刊）にはこの句の前に、

かれはあはれに、これはおかしとあらそひあへるが、阿叟いし山の口号を得たりける。これは何がし岩本坊といへる許に残し置給ひける短冊の句なり。げにかゝる風流のいまだ見へ侍らざりければ、泊瀬の秋をならべて、又

一ふしのあわれとぞなしける。

と注記がある。「岩本坊」は石山寺八院九坊の一だそうで、「いし山の口号」ともあるから、石山での吟を岩本坊の住僧の許に短冊に書いて残したのであろう。芭蕉が冬に湖南の石山の地を訪れたのは、元禄二、三年の何れかと思われる。「石山のいしより白し」の句もあるように、近江の石山寺は硅灰石の岩山にあって、その白く曝れた石の上にバラバラと霰の降る壮観を描いている。実朝の歌の「籠手の上」ではなくて「石にたばしる」というところが俳諧なのであろうが、一通りの景の描写に終って感興には乏しい。

644 千鳥立更行初夜の日枝おろし　（伊賀産湯）

冬季（千鳥）。

語釈 ○**千鳥立**　「千鳥立つ」。千鳥の飛び立つさまを描いた。ここで切れる。従来「千鳥立ち」と中止法によまれているが、それでは切れる所がなく、付句の姿ではあっても発句の姿ではない。下五の「日枝おろし」は、上に切れる所がない場合、切字に代るような重量感に乏しいと思う。この句形自体、正確な所伝かどうかに問題があるが、これを信ずるとすれば、初五の終りで切るのが、右にいった難点を救う唯一の見方ではあるまいか。「千鳥」は既出（Ⅰ*208*、Ⅱ*315*）。「のとの海をみて／塵浜にたゝぬ日もなし浦鵆　句空」（『続猿蓑』下）「Tachi, tçu, atta.」（『日葡辞書』）。○**更行初夜**　「更け行く初夜」。「初夜」は、夜を初・中・後に三分した最初の時間帯で、戌の刻即ち今の午後八、九時頃をいう。夕方から夜半までをいうこともあるが、ここは前者と見ておく。初夜の時間が中夜に向って段々更けて行くのである。「更行や水田の上のあまの河　惟然」（『続猿蓑』下）「凩の今吹やみて初夜の鐘　嵐山　羽黒の鷹の儀へ落来る　樗良」（『此ほとり』一夜四哥仙）「Sayo fuqeyuqeba.」「Xoya. Yoruno fajime.」（『日葡辞書』）。○**日枝おろし**　「日枝颪」。比叡山から吹きおろして来る風。「向ふ風の比叡おろしで艪づか持つ手も切る様に」（『近江源氏先陣館』第九）「Yamavoroxino caje.」（『日葡辞書』）。

大意 初夜が段々更けて行く川辺には比叡おろしが吹きすさび、千鳥が群れて飛び立つ。

考 『伊賀産湯』は、猩々が享保十一（一七二六）年に伊賀の上野で芭蕉の三十三回忌を営んだ時の記念集であるが、
それに所収の信安の句「其銜笠に更行むかし人」の前書に、

故翁鴨川の辺に寓居ありて、乙州・木節など興を催せし比、予も折〳〵の誹訓を蒙りしもむかし〳〵。或日ひえに川千鳥を画て、千鳥立更行初夜の日枝おろしと自賛して給りぬ。誠にその景情見るやうに一座感動せり。……

と引用されている。当季の自画賛とすれば、芭蕉が冬に京の鴨川のほとりに居て、乙州・木節ら大津の俳人と交渉のあった時としては、元禄二、三年以外に考えられず、この両年の何れかに成った句と推定されよう。信安は植村氏、江州水口の人で、後京に住んだ信徳門の俳人と伝えられる。

鴨川の千鳥は歌にも詠まれて著名な景物であり、「思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり」（『拾遺集』巻四、貫之）の趣も思われて、寒寥の気身にしむばかりのものがある。画賛句としては成功した部類であろう。［語釈］で指摘したように、「千鳥立ち」とよんでは、句作りに締りがなくなる。「千鳥立つ」と切れば、眼目の千鳥が冒頭に先ず提示され、次にその背景として夜の比叡おろしが展開されることになって、表現に力が加わると思う。

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・物の親

645　半日は神を友にや年忘レ　（八重桜集）

年忘　歌仙

冬季（年忘レ）。

語釈 **○年忘レ**　「年忘レ（としわすれ）」。既出（Ⅲ*633*）。**○歌仙**　「カセン」。三十六句の俳諧をいう。「懐紙の事は百韻本式也。五十韻・歌仙みな略の物也」（『三冊子』白雙紙）。**○半日**　「ハンジツ」。一日の半分。「ハンニチ」は新しく生じた語で、古くは「ハンジツ」だったと

思われる。「花のもとのはんじつの、月のまへのとも」（『根の介』下）「Fanjit.」（『日葡辞書』）。○神を友にや　神社で催された俳席なので「神を友に」と興じた。「や」は「五月雨の降のこしてや」（Ⅲ489）と同じく疑問に詠嘆を含む切字。

大意　たまたま閑を得たこの半日の間は、神を友として年忘れの会をするのかなあ。有難いことだ。

考　「洛御灵法印興行」（『蕉翁句集草稿』『蕉翁句集』）「上御霊にて」（『物の親』）等の前書があり、『句集草稿』には「是自筆の句・前書也」と注している。元禄五年刊の『八重桜集』（示右撰）には、これを発句として示右・凡兆・去来・景桃丸・乙州・史邦・玄哉・好春らの連衆による歌仙が収められている（中興期の『物の親』（葛人撰、天明三年刊）にも所収）が、脇を賦した示右は、京の上御霊神社（現上京区上御霊前通烏丸東入上御霊竪町）の二十八代別当法印小栗栖祐玄、景桃丸はその子元規である。大津の乙州を除き、玄哉・好春ら他門も含めて、連衆は京住の人で、元禄二、三年の歳末に京の上御霊神社で催された歌仙興行の発句であった。

「半日」は「閑を得る」ことと強く結びついた語である。『三体詩』所収の詩の一節に「又得浮生半日閑」（又浮生半日の閑を得たり。李渉「題鶴林寺」）とあり、木下長嘯子の『挙白集』に見える「山家記」には、

やがて爰を半日とす。客はそのしづかなることを得れば、我はそのしづかなるを失ふに似たれど、おもふどちのかたらひは、いかでむなしからん。

という文がある。芭蕉が元禄四年夏の『嵯峨日記』に、

長嘯隠士の曰、客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふと。素堂此言葉を常にあはれぶ。

とあるのも、右の「山家記」を頭に置いているので、この前後の芭蕉の念頭に常にあった閑居への願望を窺うことが出来よう。加藤楸邨氏は、

……ここのあるじの心こもったもてなしによって、われわれ来客は半日の閑を得させてもらったが、……あとの半日を主は、その神々を友として心静かな年忘れをされたことであろう……（『芭蕉全句』）

と解しておられる。これは以前の『芭蕉講座』発句篇以来変らない見方で、それ以前にも同様の解はあったけれども、これらは「半日は」の含意を誤解したものと言わざるを得ない。この「半日」は外ならぬこの俳席で過す時間を指すのであって、そうでなければ挨拶としての要を外したことになろう。それを「この半日は」といって強調したのが、「は」の働きなのである。由緒ある神社で俳席を催す喜びを「神を友にや」とほのかに興じながら慶ましくあらわし、亭主への挨拶をしたと見られる。

信濃路を過るに

646　雪ちるや穂屋の薄の刈残し　（猿蓑）

泊船集・俳諧問答・宇陀法師・蕉翁句集・東海道・水鷹刈

冬季（雪）。

語釈　**○信濃路を過るに**　「信濃路を過ぐるに」。「信濃」は今の長野県の旧国名。其処を通る街道、或いは其処へ向う道が「信濃路」であるが、転義としてその地方を指すことがあり、ここは後者の場合である。信濃地方を通った時に、の意。「只奇麗さに口すゝぐ水　利牛　近江路のうらの詞を聞初て　野坡」（『炭俵』上）「出羽の国におもむく時、みちのくのさかひを過て」（『続猿蓑』下、公羽発句「そのかみは」前書）「Gi. i, Dô, michi.」（『日葡辞書』）。**○雪ちるや**　「雪散るや」。「ちる」は、白い物がちらつく程度の降り方をあらわす。「や」は詠嘆の切字。「散るや霰のたま〱も心の乱れ知るならば」（謡曲「木賊」）。**○穂屋の薄の刈残し**　「穂屋の薄の刈り残し」。「穂屋」は、長野県の諏訪神社の秋の神事御射山祭に営まれる小屋。この神事は陰暦七月二十六日から三十日にかけて行われるが、古くは八ヶ岳西麓の上諏訪社の神野に、青萱や薄で葺いた小屋をしつらえ、諏訪明神の大神主たる諏訪氏の一族らが籠って祭に奉仕した。山の幣帛と称して薄の穂が神前に供えられる。今は往時のおもかげはないが、昔は諏訪信仰の中で重要な位置を占める祭であった。季語としては秋であるが、この句では「雪」の方が季語として立つ。「刈残し」としたところに「雪」との関わりが分る仕立てになっているのである。「薄」も秋季。既出（Ⅱ *310*、Ⅲ *523*）。「ほやつくる　秋也。信濃のみさ山まつ

り七月廿日、薄にて作るかり屋の事也。居所也、神事也。いくつも作也。植物也」（『御傘』）「御射山祭并穂屋作廿七日 神社啓蒙云、南方刀美神社諏訪社是也在二信濃国諏訪郡一。……藻塩草云、穂屋のすゝきとは、穂屋といふところ信乃にあり。その所にある薄と云ゝ。又ある物には、御射山の祭には、薄にて神殿を作る。其外、人の家も祭の程は皆薄の穂にて造る也。……是は天照太神を、天の岩戸こもり給ひし時おこづり出し奉らんとせしわざ也。依レ之信濃国すはみさやまの祭には、薄をとりて御幣とする也。仍てみくさ刈信濃と云也。○新式秘抄云、穂屋作るとは、すはの祭の事也。諏訪祭は年中七十二度有也。その一つ也。みさ山は山城の笠取の近所也。穂屋作る、居所にあらず。……愚按に、人家にも廿日より廿七日迄、薄をふく由なれば、居所の説さも有べし。又御射山を山城の説、只同名あるにや。諏訪のみさ山とは信濃成べし。七月の神事に廿日より廿七日迄仮宮を構ふる所なるべし。此かり宮を薄にて作るを、穂や造ると申せば、居所に非ずの説又捨べからず。只すは祭といはゞ雑也。年中七十五度侍る故也。……信濃はみさ山祭り・穂屋作るなど、秋に治定也。此神のみさ山に遷座あれば、其あたりに穂屋作りて居籠る由也」（『滑稽雑談』）「みさ山やほ屋もてなして女郎花」（一茶『八番日記』）。「かりのこす水のまこもにかくろへてかげもちがほになくかはづ哉」（『山家集』中）「Carinocoxi, osu, oita.」（『日葡辞書』）。

大意 秋の御射山祭にしつらえられる穂屋に葺くすすき。その刈り残された枯れすすきに、雪がちらちら降りかかることよ。

考 この句、「雪」でもって冬季であることは動かず、前書を事実通りとすれば、成立時期が何時であったか、芭蕉の生涯に於いて適当な時期を見出し得ない。夙く土芳の『蕉翁句集』が貞享五年の部に収めながらも「此句、信濃の冬の旅みへず。若此冬か、又は題の句か、覚束なし」と疑っている。『新修芭蕉伝記考説』作品篇で私は、「穂屋の薄の刈残し」を貞享五年八月の『更科紀行』の途次での所見とし、その際の秋季の句の初案を推敲する間に「雪ちるや」の初五を得て、冬の句として治定したものと考えた。「信濃路を過るに」という前書を事実と見る限りは、こう考えるより外なかったが、初案たる秋の句というものも伝わらず、その点が弱みになっていた。これと似た立場ながら、嘗て山本健吉氏は、次のような見方をしておられた。

芭蕉は『更科紀行』のおり、御射山祭のすんだ翌月に、諏訪を通った。そのとき仮屋のあとを見たか、見なくても想像で「穂屋の薄の刈残し」という句の断片が、頭に浮んだと思われる。少少廻り道してでも、歌枕は訪ねようという気持の動く人だから、やはり穂屋野を訪ねたとして置いてもいいだろう。ただしこの句は、長い間芭蕉の頭の中に存在するだけで、一句としてまとまることがなかった。『奥の細道』の旅が終って、京津の間を往来していたころ、「雪ちるや」の初五を得て、去来・凡兆に与えたのだと思われる。このような珍しい地方行事の句が、集の中にいくつか存在することは、集に変化を与える上から、好ましいことだからである。この初五を得たについては、志田説に言うように、『撰集抄』巻七の「敵有男山伏ノ笈ノ中入助事」のくだりに、「信濃野ノホヤノ薄ニ雪チリテ、下葉ハ色ノ野辺ノオモ」とある文章が、きっかけになっているのかも知れない。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

右のうち、『撰集抄』の一節との関係は、やはり重視すべきであろう。そうなれば、更科の旅での所見が契機としてあったにせよ、この句の内容には想化に成る部分が多きを占めることは疑いない。『猿蓑』編輯の際に、集の模様としてこのような句を案じ、信濃路での作であるような前書を付したのであろう。句案の時期は、『猿蓑』成稿の元禄四年五月頃を下限とする見方も出来るけれども、冬季の句として一応三年末の位置に置くことにしたい。

「雪ちるや」を実景と見ずに、「尾花の白く散るは雪に似たりとなり」（東海呑吐『句解』）「誠に霜降る比の枯芒の穂並白々と風に散る景色は雪の如し」（信天翁『笈の底』）のように譬喩と取る説の外、「此雪の吹ちるは、穂屋作る時刈残したる芒の穂にやあるらむ」（空然『猿みのさがし』）と、雪を契機とした幻想的風景と見る説も古注にはある。

……秋信濃路を過ぎた時の『更科紀行』の旅の経験が心にあたためられ、それが契機となって、刈残された薄がほうほうと山国の風に吹きみだれているところを想い描いたのではなかろうか。これは想像というよりも、刈残しの薄を想い描いている中に、雪が心裡に散りはじめたものであると思う。現代の写実風の詠み方からいうと、

刈り残しの穂屋の薄の上に現実に雪が散りかかる景ととりたくなるが、芭蕉の滲透型の発想を考えて、私はこう解しておく。(『芭蕉全句』)

として、「諏訪の御射山（みさやま）祭の後とて、穂屋をつくる薄の刈残しがほうほうと乱れなびいている。そしてそのあたりに山国のこととてまるで雪がちらついているように感ぜられる」と解する加藤楸邨氏の説も、雪を現実の物としない点で同じ部類に入れてよかろう。このように見ると、どうしても句の中心は「穂屋の薄」になって、『猿蓑』で冬の部に入っていることと矛盾することになる。作者の経験であったか否かとは別に、句中では雪はやはり現実に降っていなければならない。それが「薄の刈残し」と相俟って、荒涼とした辺土の冬の寂びた世界を完成させるのである。体験を超越した想化による秀吟として、『猿蓑』に光を添える作といえよう。幸田露伴と山本健吉氏の鑑賞を左に録しておく。

詞書ある句はよく其詞書の示すところを味はひて解すべし。此句信濃の国の山乱れ野寒くして荒涼たる境に雪の紛〻として物悲しく降るを詠ぜるなり。……神事は秋なるを、こゝには刈残しと云ひて、冬の雪に用ゐ、能く故事を用ゐて故事に使はれず、たしかに其国其境のすさまじき雪景色をあらはしたる、いかにも似合はしく僻地古語実際作意取合せの妙をきはめて、何知らぬ人にも目に観るが如き感を起さしめたり。蕉門一派、佳什逸篇を得たる人も多かれど、是の如き句はさすがに芭蕉ならでは得作らず、妙といふべし。(『評釈猿蓑』)

これは、古文章の裁入であるが、この句の価値に関係する問題ではない。「雪ちるや」と「穂屋の薄の刈残し」との間の、微妙な照応を、あるときふと感じ取ったのである。……実際には降っていないものを降らせてしまった例としては、「五月雨のふり残してや光堂」がある。「穂屋の薄の刈残し」を見て、雪を降らせてしまうのは、詩人の特権である。それが嘘となるか、詩的真実となるかは、詩人の想像力の問題である。写生俳句は、このような詩人の特権を返上してしまうことで、事実と詩的真実とを取り違えたのである。

「雪ちるや」という語が、この場合まことにぴったりしている。初冬の、まだちらちらとちらつく状態で、地面にはだらになって、「薄の刈残し」を見せているのである。「雪ちるや」も「刈残し」も、ともに少量を現す。……雪と薄と二つながら、そのささやかさにおいて捕えられながら、薄は秋の厳粛な祝祭の終末を示し、雪は冬という厳しい季節の到来を示している。つまり、ささやかなものが、一方は過去を、一方は未来を示しながら、この叙景句に時間的拡がりを与えている。信濃の山国における、人々の生活と自然とが、たがいに交渉を持ちながら繰りかえされる状態を、描きえている。ささやかなものによって表現された、人間生活の変らない境位がここにある。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

索引

凡例

一　語句索引には本位句として注釈を加えた発句と前書の中の語句のみを標出した。
一　活用語は原則として終止形で標出し、排列は発音に準じて、仮名遣にはこだわらない。

初句索引

あ行

か行

さ行

わ　行

語句索引

あ行

か　行

さ　行

た行

な　行

は　行

ま　行

や行

ら　行

わ　行

阿部正美（あべまさみ）
昭和7年　東京生。
現在　専修大学教授。
著書『芭蕉連句抄』（1～12）
『芭蕉伝記考説』（行実篇・
作品篇）等。

芭蕉発句全講Ⅲ　定価二〇、六〇〇円
（二〇、〇〇〇円）

平成八年九月二十日発行

著者　阿部正美

発行者　明治書院　三樹　讓

印刷者　大日本法令印刷　田中　忠

発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町一-一六
振替口座　〇〇一三〇-七-四九九一
電話（〇三）三二九二-三七四一（代）

　ISBN 4-625-51066-X　　製本星共社